中興俳話文集

装幀　津田青楓

装幀　津田青楓

横井也有像賛（内藤東甫筆）

（鈴木雅平氏蔵）

かゝづゝや我さへ笑ふかげぼうし　也有

# 解　題

## 雜話抄　寶暦四年板　中本一冊

不角の化鳥風を若年の手ほどきに、白峰の門に嵐雪の遺教を聞き、祇空の法師風に感化された紀逸が、職業的に俳諧を事としたのは

からたちのみかたに厚き垣根哉　湖十

と湖十の其角座側に迎へられ、萬句興行の上四時庵の机を立てゝからである。その事は『武玉川』の九篇序に略叙してあるが、紀逸を有名にしたのはその『武玉川』で寛延三年に「日々愚判の卷々秀逸とする句々」を採つて初編を出板して、年々一二冊づゝ好評をつゞけ、『雜話抄』はその七編を出して人氣の頂點にあつた寶暦四年の隨筆である。『武玉川』を一世川柳の『柳樽』と同じように見ると、紀逸は前句附の如く穿ちを覗ひ、落ちを取る事に關心したかのように思はれるが、『武玉川』の五編に正風・談林・美濃風より五色墨に一變して當時壯風に至る八躰百韻獨吟を試みて、俳諧の流行變化を充分知悉して居り、且つまた『武玉川』の句々も連句の約束を守つた卷中の秀逸を發表したので、決して雜俳に墮落したものではない。『雜話抄』は紀逸が多くは無學であつたらう江戸座の點者中の物識りとして、その考證めかぬ雜話躰に故事を註し、古人の逸話を掲げ、季題を解說し、物識りに得てあり勝なる厭味に落ちずして、俳諧の材料化さうとしたので頗る平明に書かれて居る。支考の獅子門から主唱された和詩——假名の脚韻を踏んでる

る四行詩を試作し、風俗文選のそれに擬した放鳥辭のような俳文を錄し、さすがに『武玉川』で人氣に投じた才人紀逸の多能さをあらはしてゐるが、獨吟歌仙の輕い平話躰を見ては、江戸座を奇矯なものとばかり信ずる人には甚だあつ氣なく感じられよう。併し又その歌仙の一句〱を吟味すると、『武玉川』の撰が偶然の結果でない獨立した一句としての妙味が、その附合より引離して的確に感じられるであらう。

## 靱隨筆　寶暦九年板　中本三冊

もの識りと見られよう、思はせようとするから何を書いても、たかぶり慢じていりほがとなり、もの識りらしさを衒つて、それが隨筆文學の通弊となるのであるが、さすが江戸座の洒脱をこゝろとして、もの識りのよくない癖を見透いた米仲の書振りにはその雜がない。いくらか考證的のことも、さして煩はしくなく『靱隨筆』の確かさを思はせる特色ともなつて居る。俳諧は沾徳座の一人で、その想も用語も江戸談林張りであるが、學問はしつかりした力があつて、國書にもあかるいし漢籍も知つてゐるし、その上佛典にかなり深く通じたらしく、その論を權威附けてたゞの俳諧師の言とは思へない。米仲は江戸座の『かゞみぐさ』に芝新堀松平いがの守様御やしきうちとあるが、これには燕子庵となつて居る。岡田氏、八樂庵が通號で、權道といふのもその姓ではなくて號である。その師春來は俳諧と蕎麥は箱根からこつちのものとして、『東風流』に江戸前の氣焔をあげてゐるが、『靱隨筆』で見ると、生前死んだつもりで戒名を受け「活ながら死人に花のふる日哉」とよんだ奇人である。年表類にその受戒の時を春來の歿年としてあるのは迂濶で話にならない。米仲は師の春來に心服して、至るところ逸話や作品を紹介してゐるが、そこにも彼の情誼があふれてゐる。『靱隨筆』三卷は、もの識りをほこりとしない米仲の見識を示したので、一文あれば必らず批評があり、

そのつぎに江戸座の人々の發句をかゝげ、太祇の作を二三採つてゐる如き、江戸板の俳書に彼を發見するなつかしみを覺えさせる。板下は全部米仲が書いたので、文章には警句もなければ洒落を飛ばすでもない平板のなかに、恰も蕎麥をすゝるようなする〳〵とした流暢味のあるのは、その師春來に評させたら、そこが江戸前の筆致であると言つて喜ぶであらう。

## 南北新話　　延享五年板　　大本二冊

芭蕉を評してその隱遁の後人を毒せるを難じた涼袋は、俳諧の反逆兒となつて發句を五七七調の片歌に變じようとしたが、その前半期は野坡に蕉門の輕みを受け、乙由の伊勢風に接して彼に心醉した麥林一門の支持者であつたのである。『南北新話』は加賀の希因の句評と、伊勢の梅路の附合を參酌して著述したので、涼袋の一家言ながら、座談的に傳授された麥林一門の思想と作法とを記述した伊勢風の代表的俳論と見て差閊ない。百川の序によると涼袋を伊勢風に誘致したのも、この書の出板をすゝめたのも、蕪村の舊知己である畵人百川で、文中「南北の日記を懷にす」とあるから、諸家の說を手抄して置いてそれに項目を附けたものに過ぎないが、しかし俳論の多くはかうした程度の組織で、涼袋なればこそ雜駁ながら伊勢風のどんなものかゞ知らるゝ內容に纏め得たのである。伊勢風は美濃派に對峙して中興前期の勢力をなしたが、支考の說から分岐したので兩者の相違を的確に定めるには困難である。『南北新話』で見ても附合の說き方が酷似して區別し難いが、戀の論に於て「蕉門には戀の詞をもて戀とせず」といふ或る法師すなはち支考の「たとへ娘と出るとも、こゝろの戀なきは」たゞの娘であつて、戀には扱はない說を駁し、娘といへば戀の言葉で、これを戀と捌いてよいとするのが、伊勢風の立場をあきらかにした點で、「昆蒻がふるへば指も切りさう

な」を繼の詞を借りて、轉じたる附句の例にあげてゐる。凉岱が梅路の附合に感嘆して人事の趣向に低俗を厭はないのは、紀逸の「武玉川」に近いが兩者は何等の交渉を有するものでもない。凉岱は建部氏、吸露庵と號し、江戶雷門前に寓して凉岱と稱した事は百川の序に見えるが、その前は都因の號で數書を著はし、後には綾足と稱したのである。

## 紀行 俳仙窟　寶曆七年板　中本一冊

一杖一笠の旅はその人の境涯らしく、大坂を船出して十里ばかりの湊に船がゝりして、ところの知人に消息するあたりから紀行の文らしい。渺茫たる西海をたゞよひ、小舟に釣たるゝところから、事實がやゝ怪しくなつて來る。そこ〳〵に桃の咲く徑をさまよつて、ふと片折戶の外にたゝずみ、案內を乞へば「爰は俳仙の窟なり」と答へる段は純然たる小說の構圖で、そこへ出る人物の希因・梅路であるのは、凉岱の脚色の正直さを見せてゐる。芭蕉が「一幅半の裾を排ひ」挨拶の一言あつて、其角をよび支考を招いて引きあはせ、俳諧の大道を口授して「一ト間をひらけば俳祖盤溪禪師」が、貞德より鬼貫に至る輩と「只善ィ哉や」と應ずるその盤溪を俳祖としたのは、凉岱一個の見解であつて、本文に註解を添へてあるが、『片歌二夜問答』に再びその事を辯解してゐるので、凉岱の本心の那邊にあるかゞ覗はれる。要するに盤溪を俳祖として芭蕉の位置を引下げ、その片歌を主張しようとする下心を『俳仙窟』のころから抱いて居たのである。だが『俳仙窟』はそれが目的でない事は勿論で、俳諧古人の風丰を小說的に描寫して、梅路の論に花を持たせる爲であつたので、『南仙錄』を附錄した事がその語るに落ちてゐる。凉岱は梅路を以て「南方の仙」と信じて傾倒したのはふしぎな程であつて、『南北新話』にもそれが覗はれる、『南仙錄』は梅路の手稿の如く署名さへあるけれど、凉岱が代稿したのではないかと疑はれもするが、附合の例にあげたのは梅路の作に相違ないらしく圈點

を施して、その扱ひの巧みさを表示してゐる。凉袋の敬事した椎賢は職業的に卑しまれた一介の魚賣りで、乙由に俳諧をまなび伊勢音頭の作者として知られる以外、俳諧史に記錄さるゝ特別の人物と思へないが、凉袋の心服した事は想像も及ばない程である。

## 蕉門一夜口授

安永三年板　　中本一冊

貞享の『虛栗』を心讀して芭蕉の魂を發見した麥水は、あの時代として新傾向の格調を主唱したが、さらに蕉門とは何ぞやの根本問題を論じ、彼の確信を貫くため「蕉門一夜口授」を執筆したのである。麥水は當時蕉門の徒の二勢力を支考の美濃派と、大坂で流行した淡々の半時庵派と見て、支考は「道を俚俗に引下して」大衆を蕉門に導き入れる功勞はあつたが、俗談に墮し、卑理に屈し過ぎた結果「損德の衢に落つ」として、その向上の精神なきを責め、淡々は一面「其角が風韵は備れども」その附句の猥雜、父子同席して見るべからざるを卑んで、孰れも芭蕉の「俗談を正すの字を忘れたる」の弊であると斷じてゐる。彼の信ずる蕉門は『虛栗』の外にないが、白雄が『かざりなし』の著に彼を貞享蕉門と譏つたのは、寧ろその宿望に叶つた言葉であると甘受し、又、「翁に貞享・元祿とて二人の芭蕉あらんや」といふ白雄の難問に對して、芭蕉一代の俳風に貞享以前・貞享・元祿の三變あるを年譜を示して說き、「貞享元年の頃は、翁、貞德の風を離れ、此蕉風の一門を起す始也」と釋明してゐる。進んで蕉門の七部集に就き、その稱呼の「翁の意に叶はじ」と七部の名には無關心の如く見せて、しかも『虛栗』をそれに加へ、『續猿蓑』を除く七部の書名を列記してゐるのは、彼の『虛栗』中心主義を徹底させる爲めに外ならなかつたのである。「蕉門一夜口授」は麥水が加賀より大坂に出でゝ客寓中、舊知の彼を擁して質疑せるに答へた對話であるが、記述に都合のよき問答躰を取つた

ので、その本意は跋文に「蕉風正俗談、古池音の二珠を投ず」とある二條の解釋と、『虚栗』を提唱するのが目的であつて、彼の理想とする『虚栗』の句境は氣凱・高致の二者で、これを『新虚栗』の諸作に對照すれば、或は偏固に過ぎはしないかと思はるゝところに、麥水の個性が認めらるゝのである。

## 俳懺悔　寛政二年板　中本二冊

俳諧をやるが俳諧師ではない。俳諧を生活の方便とせずとも、別に一定の職業を持つてゐる。慰安的に俳諧に携はるかうした人々は遊俳と呼ばれて、いつの時代にも此の道の保護者となつてゐる。蕪村當時に遊俳で一家をなしたのは大坂の大江丸である。飛脚問屋の嶋屋の主人で、東海道を往還して江戸の風俗人情に通じ、性格に句風に江戸前の洒脱味があつて、上方風の粘り強さもあるので、獨自の長所を備へてゐる。『俳諧天狗話』の本人で講談風の材料に富む江戸の活々坊を入門の師に、大坂の淡々は俳諧に没交渉な少年の頃から顏を知つて居り、片歌の涼袋の許にも行き、あらゆる流派の俳諧師と交際したので、その直話に俳席の見聞に感銘した事どもが尠少でない。それを挿話的に記して自作の發句を配置したのが『俳懺悔』の特色である。序文の蓀齋天府は上總大多喜の藩主で、安永二年大江丸の懇望によつて書き與へたので、それと俳諧懺悔文の末に明和七年とあるのを照し合せると、本文は出板の十數年前に稿を脱したものである。『俳懺悔』とは大江丸が松嶋見物の時、徹宵月光に映ずるその風光に面壁して一句も得ず、曉天の眺望に接して蓼太の「朝霧やあとより戀の千松嶋」の舊作を口吟し、「我も浪花に一人の作者也」と自負した過去を懺悔して蓼太の門人となつた事を題名に托したのである。この事は大江丸の率直と感激性とを語るもので、一ト度心服した蓼太を絶對に信じ、本文にも老師と敬稱して屢々その説を引用してゐる。板下は大江丸の自筆で、蕉門の

金羅に似て、頗る紆餘した書體なので讀みづらいが、川西和露氏の藏本を借覧し、余の所持するものと對照しつゝ、原文通り活字に移植したのである。奥附に「大江隣藏板」とあるので、大江丸の自費出版である事が知れるが流布本は割合にすくない。

## はいかい袋

享和元年板　　　中本二冊

俳話として『俳懺悔』よりは趣味的で古人の傳記などもあるし、何帖として大江丸の感動し又は信じた人の俳諧をまじへて居るので、此の『はいかい袋』の方がその心境と生活とを親しみを以て眺められる。大江丸自身も「この四季二帖のもの、すみつき九十五枚ながら、みづからかき終りて」と編輯に刻苦したことを述べて、

ふた親にみせたしことし八十二

と、この年になつて僅かに「ふた親に」頑丈さ、達者さを見せたかつたらしいが、それだけに亦糸みゝずのような板下のかすれた文字に惱まされて、再三再四判讀に苦しんで、なほ疑ひを決しかねた個所がある。本文は先づ芭蕉の嚴格で情味があつて、現前に教誡さるゝような「行脚の掟」の全文を掲げてあるが、東海道を七十回から往復した大江丸として、常々この掟に服して忘るゝ事なからんとしたからであらう。歳旦三ツ物は天府子の外に豐後の城主大給不騫子、宮廷俳人として知らるゝ富小路如泥卿が見え、大江丸にそれらの人との交際を光榮としてゐたらしい。蓼太の「さみだれやある夜ひそかに松の月」を感嘆した淸人程劍南の漢譯もあれば、蓼太と蕪村との兩吟歌仙があり、野坡一門の『やどり塚』にある花屋裏の芭蕉終焉地の再保存記事など、俳諧史の資料になるものも散見する。大江丸といへば聯想される俳諧寺一茶の訣別吟として名高い

雁はまだ落ついてゐるに御かへりか

の吟も本集に出てゐる。岡野知十氏も疑問とした如く成美の「俳諧小言」の抄錄は、落丁と思へばさうらしくもあるが、川西和露氏から借覽した本も亦、尻きりとんぼになつてゐるので、隨齋で打ちきつて、それ以下は追記と見做して置いたが　その隨齋の文字が「隨面」とも讀めるので、或は文章は接續するのかも知れない。今後の研究にまち度いと思ふ。

## 俳諧落葉考

明和八年板　中本二册

二條家の允許で正式に花の本となつた闌更は、京都に芭蕉堂を築いて世間的に聲名を高くする仕事をしたが、これと思はるゝ代表的の著書はない。中年落馬して關節を痛めた爲め、短冊を見ても妙にぶる〳〵震へて書いてゐるように、文筆に携はる困難があつたからであらう。『落葉考』は彼の好著の一つで、『つゞきの原』の句合はめづらしい飜刻でないが、『初懷紙』の評註は一度『花の故事』に出したものゝ訂誤で、もし闌更が發表しなかつたなら或は散佚したかも知れない事を考へれば、芭蕉の評註を今日に傳へた事それが彼の功勞であると稱してよい。支考の歌仙註解もこの書に保存されてゐる。闌更は加賀の人で高桑氏、希因に就いて二夜庵と號したが、中興諸家の運動に刺戟されて、伊勢風を裏切り、時勢に迎へられた成功者で、麥水の熱はないが處世には巧みで、京都の俳壇は後永く彼の掌中に握られたのである。闌更が伊勢風に迷つてゐた頃は、一句の技巧のみにあせり、「岩ほに石をたゝみ上て、終に行路難の嶮岨に深入し」て行詰つたが、「あるときふと心づきて」一變したので、麥水の「新虛栗」には快からず、「祖翁に延寶・天和の作あるを我翁の魂とあやまり」その結果は「あるひは漢語を用ひ……あるひは無益の長句み作りて」これ

を以て「亂翁の洒落と思ひ」似て非なる蕉門復活者であるとして、婉曲に『落葉考』の中に反對說を述べてゐる。附錄に闌更一派の發句を收めてあるが、表現に無理がなくて流暢であるだけの事で、構想に淸新味が乏しく、彼の門人梅室・蒼虬の出でゝ全國的に月並化した責任の一半は、闌更にあると評しても酷なりとは云へないであらう。闌更の未亡人得終尼は蒼虬等と意見合はず、南無庵の號を擁して亡夫の俳壇的位置を保たうとしたが、それは徒勞に了つたらしい。

## 稿本 俳諧寂栞

寫本　一冊

蕉門の寂栞を俳諧の大道として論評したのでない。又、寂とは何、栞とは何の根本問題を取扱つたのでないが、春秋庵の一派を江戶に起した白雄が、俳諧の要旨を平明に說いたので、白雄の體得したと信じてゐる寂栞を以て一貫した論であると見れば、『寂栞』と題した本意にそむかない。全編を三卷として卷の上は正風の大意より風姿風情を主體としての發句の論で、卷の中は連句の脇及び第三、月花の座、戀及び旅の體など附け方本位の說で、卷の下は發句・連句を通じての技巧に關する記述で、別に俳諧のてにをは即ち修辭と語法とをかねた論を員外に添へてある。芭蕉の遺語、去來抄、白雄の師鳥醉の夜話を綜合したので、用例は芭蕉并に蕉門の諸集にあるものを擧げ、俳諧の作法書として穩健平易である爲め、中興以後の俳人に愛讀されたが、それは拙堂の增補したものである。拙堂の增補した「寂栞」は文化九年に板行した三冊本で、如泥卿の序文中に「かれが家わざはくすしなれど」と土卯のつぶやいたので見ると、拙堂は醫師でその傍俳諧に志した者であるから、原著者白雄の意を承けて增補をはかつたのでない。その凡例に「此書安永選本、寬政選本二品あり」と記し、もつぱら「寬政本によりて參考して」それになきは「安永本にある文

を增補せしものも」あるといつてゐる。安永・寛政の兩本とも寫本の奥書をさしていふので、兩書の板本があつた譯ではない。白雄の門人如毛であつたかゞ筆寫して置いた安永の奥書本及び寛政の寫本をかつて一覽したが、拙堂の增補本とは本文の異同甚だしかつた事を記憶してゐる。こゝに覆刻したものはその後余の書架に歸した別本であるが、拙堂のほしいまゝに刪除した個所をそのまゝ殘置し、本文も增補本とは出入があるが、異同を註記せず、すべて稿本通りにして置いたのである。

## 也哉鈔　安永三年板　中本一冊

俳諧の「てにをは」論は發句の切字が中心の問題となつてゐる。その切るゝ切れぬの論も特に切字と稱する假名を對象として、文法的修辭的に說いたもので、今日の文法の終止言が必ずしも切字に扱はれて居ない。たとへば「春もやゝけしきとゝのふ月と梅」のごときは、明瞭に「とゝのふ」で終了して居りながら「ふ」の假名を切字とは決定し難いので、これを玄妙の切といつて、一句の格律としては切るゝように說明を糊塗してゐる。『也哉鈔』はそれらの附會說を一蹴して、「や」と「哉」とを以て俳諧に慣用さるゝ特殊な切字と見て、いはゆる俳諧の「てにをは」の問題を要約して「や哉」の解說にふくめて說いたのである。著者の無腸は上田秋成である。秋成は俳諧を蕪村の同門几圭に學んで、その性行の蟹の横行するが如きをみづから嘲つて、

月に遊ぶおのが世はありみなし蟹

と吟じて、蟹の一名の無腸を號としたのである。門人竹母の序によると『也哉鈔』は秋成の切字に就いての說を筆記して蕪村にはかり、蕪村より「是渾沌の竅、木にゑらせてむなしからぬ物にせよ」と勸告されて板に起したが、秋成

の叱りを受け、板木のまゝ十餘年を過して、漸く天明七年その許諾を得て發行したのであるといふ。統論に俳諧の「てにをは」は鷺水の『新式』竹亭の『をだ卷』方山の『曉山集』に詳説されてゐるが、連歌の説に囚はれたものであると評し、「てにをは」のをこと点より出たる歴史を説いて本文に「や」は咏歎、願ふ、疑ひの外に「物を指し」又は「物をかぞふ」辭であるとして、用例を發句に求めて解釋し、「かな」幷に「か」は疑怪、咏歎、願ひの三者として、これも發句を例解として分類説明してゐる。今日の發達した文法から論ずれば妥當ならざる説もあるが、俳諧の「てにをは」――それに基いた切字論としては學問的に最もすぐれた內容を持つてゐる。

## 新雜談集　　天明五年板　　中本二冊

蕪村の周圍の人物は物臭さであつたか、文筆の才を持たなかつたか、著述といふ事にはあまり手をつけてゐない。几董はそれを一人で引受けて、句集に、紀行に、作法に、日記に、それから年々の歳旦帖に、今日覆刻にあたひするような著作を殘してゐる。『新雜談集』もその一つで俳話・隨筆の孰れと見てもよい內容である。其角の『雜談集』に外題を寄せて、その體裁も似せては居るが、兩者の性格のちがひは揭焉に兩書それ〴〵の特色となつてゐる。其角は疎豪、何事も意に介さないようで、個人的の批評も隨分辛辣で、『雜談集』にも春澄を「俳諧の罪人これらなるべし」とまで酷評してゐる。几董は常に才氣を制して居た謙讓家で、誰それと名をさゝいで難じた個所はあるが、たとへ敵視する者をもあからさまに其の人をあげて譏るような事はしない。美濃派の偏狹を問題としても支考は蕉門に功ある人、「かゝる頑愚の教を遺せしや」といふかゝる程度に過ぎない。其角の性格は『雜談集』を通じて知らるゝが、几董はその發句を誰がどう評したか位のもので、『新雜談集』に彼自身の性格を語る文章はない。其角は古俳人の逸話をつと

めて紹介したが、几董は古人より寧ろ近人、直接知つてゐる人の往事を懷舊し、その逸事を書けば必らずその遺吟を添へてある。『新雜談集』の卷首は俳話・隨筆本位に編輯し、卷尾は蕪村及び一門の歌仙・發句を收めてある。發端に亡父の師巴人の回顧的記事があり、最後に杜口の「几圭老人懷舊之辭」及び追福の俳諧を載せてあるのも、几董の孝心のあふれと見る可きであらう。本文は潁原氏の校訂本による筈でその快諾を得たが、水落京二氏が家藏の原本を貸與されたので、濁點を施し句讀を打つて、本集覆刻の慣例に從ふ事としたのである。蝶夢自筆の跋を除いて原文は几董の板下で濁點・句讀はない。

## 附合てびき蔓

天明六年板　　小本一冊

發句がある。その發句を承けて脇句を添へれば連歌の形になるが、俳諧の連句は第三をもう一句附けなければ、その形式を備へたものとはいへない。連句の變化といふのも此の第三をその一句前の脇句を隔てゝ、發句とは全く別なものに轉ずるからで、連歌にその制約はない。俳諧特殊の不文律的約束である。しかし脇句は連句の出發點であるから、韻字止の外發句の承け方にいろ〳〵の名目があつて、几董は五脇として相對、比、對、打添、打着の名目を存してゐる。その中の打添・相對・打着の三者を「發句にワキ附る事」に於て、芭蕉及び蕪村の例句に就き懇に詳しく説明してゐる。第三は轉の場である。變化の第一歩である。に、て、らん、の如き後句の接續を期待する座五の結びが大切で、その案じ方に、有心、向附、起情、會釋、逃句、拍子、色立の七名ある事を「發句脇に第三附る事」に、同じく例句を擧げて一句づゝ解釋の筆を進めてゐる。几董はこの案じ方の有心を脇句にも註してゐるが、それよりも共通的なのは附け方であつて、其人、其場、其時、天相、觀相、時分、時節、面影の八躰の名目を傳へてゐるが、案じ方、附け方

ともに第三以下の場合にも適用されるのである。「卷中連綿の事」の說明に必らずそれを註記してゐる。その例解した連句は蕪村・几董兩吟の『桃李』の二歌仙を說明の必要なきところ〳〵を省略して、三句のわたりを中心に、折毎の見渡しを考へた說で、几董の筆力を傾注して解釋に努めたものである。「附合てびき蔓」の附合の文字は、やゝもすると二句相對して連句となるが如く誤解さるゝが、連句を連歌と同一のもの、又は前句附同然に扱はない限り、さうした誤解に落ちたくないものである。板元の汲古堂は、几董の門人田中佳棠である事もついでに記して置きたい。

## 芭蕉其角嵐雪 點印論　　天明六年板　　中本一冊

今日でも舊派の俳人は「まき」といつて、菊判を横綴にして厚い表紙を附けた選句帖に、平抜五點から感吟二十點の程度で、昔講の關防式にその點相當の點印を句の肩に捺し、中抜以上は中央のよきところに、別に意匠のある賞美の點印を捺して、それを點式と稱してゐる。今日は發句の「まき」に多く用ひるが、その起源は几董の說によると貞室がはじまりで、芭蕉・其角・嵐雪ともに連句の批點に用ひたのである。淡々より「點數何百何千など倍して」その高點印を競ふ事となつて、點印を用ひるのは「實にいやしむべき戯と」なつたが、几董時代には「十印二十印を限とせるを當流とす」といふ事に定まつたのである。芭蕉が點印を論じた「應變論」は几董の疑ふように、桃青の名に附會した僞作であらうが、藤堂探丸家に傳來する俳諧の卷の引墨は、蝶夢の『芭蕉門故人眞蹟』にその全部の模刻されてゐるものゝ韻字であるが、點印は使用して居ない。其角の「歌仙了解辨」と題する點印の說は『末若葉』にあるので。かの半面美人の印は殊に祕藏の點印で、冠里公の卷に捺したものが現存する。嵐雪の點印は周竹に授與したもので、其太が『遲八刻』に周竹の讓り狀を寫して、雁宕に辯明した問題の點印である。几董の點印は知れないが、蕪村

の點印は「路傍榑」及び「春雲鳥啼」の芭蕉の句意を寓したもので、加賀豐三郎氏その二三氏の藏する蕪村の卷に押捺されてゐる。『點印論』に附載した蕪村の「取句法」は豪邁の文章で、點式を論じたものでないが、それと關聯する選句に就いての見解で、「古夜半亭の壁書なるを」跋の代りに附錄したのである。沾涼の『綾錦』丈石の『俳諧家譜』の類には諸宗匠の點印を模寫し、又は點譜を附冊としてあるので、點印なる者の古人に重視された事は、われ〳〵想像の及ばない程であつたらしい。

## 俳諧雪おろし　寶曆元年稿　寫本一冊

江戸座を敵視して憎まれもし、たゝかれもしたが、反動的に雪門の勢力を大きくしたのは此の『雪おろし』の論爭である。蓼太の序には、上總の吐月亭に逗留中、或る者が一冊子を携へて來て、彼の手ほどきの附合に違ふといつて、不審紙を張つて開かれたので、披いて見ると「江戸二十歌仙」と題した獨吟揃ひである。作者には舊知の宗匠もあるが、師說に反對なところを辯解するつもりで話したのを、吐月が筆記して一冊となつたといふのである。本文の批評はさうした一夕話とは思へない深刻味があるので、あらかじめ期する處があつて書いたものであらう。序文の「延寶二十歌仙は芭蕉翁の花なり」といふのを咎めて、『延寶二十歌仙』は談林風最中の撰である。それを「芭蕉翁の花なり」と信ずるならば、「すみやかに談林風をするが能也」と嘲つてゐる。又、存義・秋風の附句と同調の

百千鳥稻負鳥呼子鳥　　渭北

は不吟味な拍子付として難じてゐる。これは『延享二十歌仙』にも確かにあるが、淡々の發句として知らるゝものなので、渭北は剽竊者となるが蓼太は何とも云つてないから氣附かなかつたのであらうと、かつて碧梧桐氏が語つたが

面白い發見である。湖十の獨吟の第三を評して、第三には「杉形、太山など云ふ事あり口傳」とわざ〳〵口傳の文字を註したのは、湖十を愚弄した話である。

あつまかた在番城の夜半の秋　湖十

を卷中第一の禁句として「いかに誹諧の談笑なれば迚、斯く猥なる句をなすや」と難じたのは後にも問題になつてゐる。二十歌仙の作者の二三を除いて『雪おろし』の難間に逢はない者はないが、原句を附直して蓼太自身の技倆を見せようとした處が再三あつて、それらの無遠慮な所爲が、江戸座の人々を憤怒させたのであらう。

## 蓼すり古義　明和八年板　中本一冊

蓼太の難問を江戸座の人々の、默つて看過してゐる筈がないが、雁宕の『蓼すり古義』は『雪おろし』の廿一年後、突然板行されたので、その間の事情を推測するに苦しむ。『蓼すり古義』の序者に寶暦のはじめ、雁宕が内命を受けて執筆したものが、また〳〵寫本にて行はれ、然も本文に脫落があるので板行した事が書いてある。或は『雪おろし』と同じく寫本で諸方へ配本したものが、猶その他にあつたではないかと思はれる。『蓼すり古義』の反駁は「延寶二十歌仙は芭蕉翁の花なり」は其角の『若葉合』にある山夕の跋を取つたので不都合はない。延寶は其角・嵐雪の桃青門人となつた時代で、これを花とせずして「何れの時を花と指すべき」とあるが、公平に見て雁宕の負惜みに近い。渭北等の拍子附に、芭蕉に「寒菊の後は水仙梅つばき」の先例があるが、「翁と雖再び爲は不佳」といつて蓼太の説を肯定してゐる。雁宕はこゝで問題を一轉して蓼太の雪中庵は虚號であるとて、彼の師吏登は周竹より嵐雪の俳書を相續したといふが、「周竹、雪中の號を不レ繼、嵐雪一世の號いみ」と指摘し、更に「吏登號を私す、蓼太、繼で私す」とその內情を

あばき、傳書によつて「俳諧道立チたりと自ら許す者は俗士也」と痛罵してゐる。湖十の「吾妻かた在番衆の夜半の秋」に就いては頗る苦しい辯明で、蓼太の連句に「旅のつまみ喰」とあるのを逆襲してゐるが、これは水掛論に過ぎない。『雪おろし』に紀逸の「風ひかぬ人の口頭やあじろ守」の鉢たゝき、夜興引に題の動くべきを難じて、その題の動かない證句として「彌兵衛とは知れど哀や寒念佛」その他を擧げたのに、「彌兵衛とはの句は鉢たゝき也、寒念佛としてもふれぬや」とあるが、伊丹の蟻道の句で「鉢たゝき」といふ追善集さへあるのだから、蓼太の失敗で見事雁宕に揚足を取られてゐる。

## 遲八刻　　明和八年板　　中本一冊

『蓼すり古義』が板になつた其の年の九月、蓼太側から『遲八刻』といふ題で、その返答を板に起したのであるが、老獪な蓼太は門人魚汶に代辯させてゐる。『蓼摺古義』の實曆初年の執筆といふのを「是が立派な御嘘の始なり」と嘲弄して明和二年蓼太の松嶋行脚の折、雁宕も仙臺に逗留してゐて、蓼太の旅宿へ「折々の御出、さだめて御忘は有まい」と念を押して、對面の時「麻のごとくみだれたるに、直きをみちびき給ふ雪中主人へ申侍る」といふ前書附で、

野分にも聞はまがへず荻の聲　　雁宕

の發句、蓼太の挨拶の句を出してゐるが、これが事實なら雁宕の執筆した實曆のはじめといふのは「御嘘の始なり」であるに違ひない。蓼太の雪中庵を虚號とする說には詳しい辯解がある可きである。果して周竹よりの讓り狀をその筆蹟通り摸刻し、甲一號證としてゐるが、その文は「亡師雪中庵、此石印・押物たまはりしより二十四年、其門にならひたる舊友皆古人となり、其中に獨りながらへたれども、老さらほいてやくたいなし。然ども師恩忘れがたく亡師の

名の殘らん事をおもひ、彼石印・押物、李洞に讓るとて　寸松齋周竹在印」といふので
の發句を書いてある。石印は雪中庵、押ものは點印で、几董の『點印論』にあるものである。李洞は周竹の前號であ

　　風に殘る只ッた一葉や花催ひ

る。「吾妻かた」の論が又持ち出されて、『蓼すり古義』に「此句を在番衆と書かすめたり、在番城といふ句なり」とあ
るのは鋭い一言であらねばならぬ。原本は川西和露氏の所藏を借覽し、その虫喰ひは幸ひ落丁本が手許にあつたので
判然したが、周竹の讓り狀は原本にあるものを縮寫したのである。

## 俳諧一字般若　　明和九年板　　中本一冊

雁宕の「遲八刻」に對する返答である。ながくしい申し譯をしてゐるが、蓼太側から「立派な御嘘」として翻弄
された『蓼すり古義』の執筆に就いて、雁宕の辯明は甚だ曖昧である。蓼太と仙臺で面談した事も否定して居ない。
板本ならざる『雪おろし』の東奧至らぬ所なきに驚き、「江戸宗匠は何もしらぬ俳諧大下手なり」といふ國々の嘲弄を
聞いて、蓼太を「古今此道の仇なり」とし、『蓼すり古義』の板行が時過ぎたといつても敢て「遲きとかあらん」と苦
しい答辯をしてゐる。「吾妻かた」の衆と城とは「此方のおぼへ違ひ也」とあつさり受け流して、蓼太の「移香も夢か
と旅のつまみ喰」に對して、たしかに尻尾を摑まへたとばかり、「移香などゝあれば假の契りちよこくつまみ喰、憾
に致されたり」と大に揶揄してゐる。雁宕の難問で頷かるゝのは、蓼太が支考の七名八躰說を用ひてゐるのを詰つた
一條である。柏舟の後序に、蓼太が其角・嵐雪の道に遠ざかり、支考の論に惑はされたは、五色墨の一派が「美濃廬
元に始て小石川片桐氏の別莊にて、四道七躰等を習えたるに起る」といふのが事實らしく思はれる。蓼太の周竹の讓

り狀を出しての辯明に、「周竹讓狀にも雪中庵と名乘れとはなし」は確にさうであつて、吏登を雪中庵の二世とし、みづから三世を僭號した蓼太の世人を僞瞞した態度は、どこまで責めて行つてもよい譯である。雁宕は又、蓼返答する不レ能事、鬪論して再び云べからざる至理、論募りて無レ益事の三段十三ケ條を以て、蓼太を屈服せしめた如く稱するが、雁宕の說にも甚だしい誤謬があるので、蓼太の方が論爭に破れたものとは云ひ難い。本書も川西和露氏の藏本によつたので、奧附の『俳諧第一義抄』は『雪おろし』の論爭に關係ある書であるか否か、原本を見ないので知れない。

## 誹讔三十棒　明和八年板　中本一冊

芝居の狂言評判記に似せて『雪おろし』の論爭を茶化したのであるが、芝居の庵看板風のみだしの割書に「鄙の風流、都の頑夫」とある鄙は雁宕、都は蓼太をさしたので見ても、江戸座側に好意を持つ者が蓼太の雪門をこき下ろさうとした戲作であると頷かせる。作者の止笑は洒落れで笑止の二字を倒置したのである。板元の渡裏德兵衛も「さるわたり」の古い洒落れである。頭取が役者の藝を評するやうに、『遲八刻』『蓼摺古義』の內容をかいつまんで、可笑味たつぷりに述べ立てると、役者の贔屓々々に擬して雁宕側から、蓼太側からの云ひ分を語らせる趣向である。頭取は依估贔屓なく公平に評判すると見せて、雁宕の肩を持つてゐる事は上上吉とか上上とかの評點の上に現はれてゐる。手拭組の躍起になつて急き込むのが唯一の蓼太贔屓で、利屈組も、わる口組も、田舍組もみんな雁宕の贔負である。頭取の總評に「蓼摺どのゝ方……誠に風流俳かい本ともいふべく、毀批の文意さへなければ机文台にものせて見らるゝ本なり」とあるは過褒であらう。一方「遲八どのゝ方、まづ最初雪おろしといふ書ぶりが拙と申評判……いかにも腐文、俗中の俗とて机のほとりに置べきにあらず」はあまりといへば見え透いた漫罵であらう。さいごに頭取が「扨みな〳〵

樣御所望によつて據なく、此狂言の評判をいたしましたが、依怙贔負なし」と口を拭つて、「こんどの評判記で、大笑に笑て御しまひ、互に和睦なされ。」と仲裁してゐるが、蓼太の方は決して此の仲裁では納まるまい。奥附の『高曼天狗俳諧』はどんな評判振りであるか、豫告だけで出板になつた事を聞かない。『三十棒』の評判が論爭に沒交渉の作者の手で、公平に兩者の內情をさらけ出したならば、俳壇の裏面史としての價値をより多く有したであらうと思はれる。

## うづら衣　　中本十二冊

俳諧はあたまから滑稽なものとして、無理にも擽ぐつて可笑しがらせようとした貞門に、滑稽的な俳文のうまれなかつたのは不思議である。重頼の「懐子」の序は、古今集の序に擬したので奇警な文章であるが可笑味はない。元隣の『寶藏』は俳諧師の文集の嚆矢であるが、頗る几帳面なもので居る。蕉門の許六に至つてやゝ自然の可笑味を備へて、『風俗文選』に俳文の上乘なるものがある。也有の『鶉衣』は蜀山人がその可笑味の世界を發見して、遺稿を出板するまで俳諧國に知られなかつた獨自のものである。也有は附合の變化からあのユーモアの着眼點を得たので、身邊の雜事に材料を求めたのも、俗談平話といふ美濃派の信條を躰驗してゐたからであらう。『鶉衣』は蜀山人の懇望で名古屋の紀六林から全本を送つて來たものを、蔦屋重三郎等に出板させたのが其の正編三冊である。六林の跋に天明五年とあるのを開板の年と見てよからう。後篇三冊は六林の校訂で同じく蔦屋板である。續篇三冊は垂穗の序で見ると、也有の文を愛してつね〴〵手寫して置いたものをみづから編輯したので、奥附はないが垂穗の序の文政六年の出板であらう。拾遺三冊は同じく垂穗の編輯で六樹園の序があるが、これにも奥附はない。拾遺の下卷にある五月雨の一歌仙は流布本には故意に刪除して載つて居ない。本集に凸版で原本のまゝあらはしたのが、その刪除された全部である。『鶉

衣』は斯く三冊づゝ出板になつたが、後、大坂の書肆塩屋忠兵衛が全篇四冊として天保十二年再刷し、この再刷本が一般に普及してゐる。也有は横井氏、名古屋藩士で俳諧は祖父野双の系統を引き、美濃派を喜び、半掃庵又は暮水と號してゐたのである。（勝峰晋風）

# 日本俳書大系 第十巻 中興俳話文集 目次

筆蹟

也有――像賛

# 雑(さつ)話(わ)抄(せう)

紀逸

# 雑話抄前編　百五ヶ條

四時庵慶紀逸著

一誹諧さし合の事をあめる書あり。長頭丸貞徳の述作也。此書を御傘と題號する心は、天子の御かさは誰あつて相傘する者なし。しからば此書を持ば、必句毎にさし合なしとの心にて名付られしとかや。

一長頭丸は老後に付れし名也。句をいふ口はさがりて、句を聞耳は上りしとて斯付れしとかや。

一下かもは鴨也。上かもは加茂也。下上といへり。諏訪をば上下といふ。

一あらし山の花は、鳥羽院のころ植られたるよし。

一兼好自讃の二首。

　空にたつ名のみ殘してうき雲の跡なき物は契成けり

　いかにしてなぐさむぞとも世の中をいとはで過す人に問ばや

一楠正行討死の時、先皇の御廟へ詣、如意輪堂の壁板に、

　かへらじと兼て思へば梓弓なき數に入る名をぞとゞめる

一眞田父子引わかれて籠城の時、彈正、

　梓弓曳わかれゆく親と子の見し佛をかたみとぞしる

一龐居士云、死は難ゝ。靈照女云、死は易ゝ。

一毎年正月四日、北野松梅院におゐて裏白の連歌あり。凡連哥の懷紙四枚也。中古執筆の人誤りて片面を除きて書記さず。是より流例となり、片ゝ白紙を置、又外に紙一枚をそへて五枚とす。よつてうら白の連哥といふとかや。

一林道春若きころより三重韵を懷中にはなし給ふ事なかりしと、出會せし人語られし。尊き事也。

一鉄炮は大永六年井上新左衛門と云西國浪人、初て甲州信虎へまいらせしとかや。

一四姫の事、春は佐保姫、夏は遠山姫、秋は立田姫、冬は山姫。

一無常・哀傷の哥をば、さのみ哀がらせて讀ぬと也。心はをのづから哀なる事あれば、おもしろくよむうたに可

然哀はこもる也。

一古代のくだ物は、はすのみ　かうじ　たちばな。
餅菓子は　まがり　つばいもち　かくなわ
さいまんぢう　十文字まんぢう

一古代は砂糖といふ物なし。あまづらといふ物をさとうのかはりに遣ふ。あまづら、伊豆國にあり。その木をきりて、しぼりて取し也。今は木をだに見知れる人稀也。

一器用を地盤として、數寄を第一とすべし。諸稽古准之。
器用さと稽古と數寄と三ツのうち數寄こそ物の上手なりけり

一板倉周防守殿、貞德を初て召ける時、くりと、なしとを下されければ、
くりかへしかたじけなしの木のみ哉いかさまよりのなじみとおもへば

一涅槃經曰、万物閑而人自閙。

一いづれの年にや、先師祇空、鳥居・別所の兩子にいざなはれて、信濃の國麻績といふ所に旅寐せられしに、さつきの雨曉にいたりて盆をくつがへすがごとく、行先に鳥井峠をまうけて、此道ことにくるしきなど人ゝ物しければ、その國一宮に祈申されて、
明らけく淸き心の空になを雲吹はらせ諏訪の神風
その囘燈の半にいたり、雨は林頭に吹はらし、山上に上れば、朝日いよやかに淸朗たりとかや。かの雲吹晴てひかりありはせ、と西上人の高吟、いづの千わけの天感等き風雅の冥加、天地自然の聲、をそれみ仰べしや。

一能登國鴉嶋何某が家は、九百年來に及ぶといへり。かの梁札に、
霜柱氷のたる木雪のけた雨のむな木に露のふきくさ
弘法大師の御筆のよしにて、火防の哥とて人ゝ用ひ來れり。

一假名の物をば墨跡といはず。宗祇斗を云と、人の申されし。

一白峯云、偶(寓)言をばいふべし。うそは付くべからず。

一すがる啼、万葉 蜱也。古今 鹿也。但スガルは、古くす

がれたる事也。蟬も腰ほそくすがれたる也。鹿も同じ。打物なども、古をすがれたるといふにてしるべし。

一鹿は伏ては啼ぬものゝよし。

一蜷川新右衛門とて連哥の達人ありし。その子連哥に、琴に松風を付たりしに、その外に折檻ありし也。その後の會に、琴といふ句付來てさゝへたりしに、いかんとて松風を付ぬと又、いさめられしと也。いつものとなれども、時節により物によつてよく聞ゆ。

一この手柏とは大枋と云木也。葉を風のふけば、うらおもてへかへる也。葉ひろき柏葉、世上にほう柏と云。

一五月十三日、竹醉日。此日竹を植ればよく榮るといへり。竹を植るに、足にて蹈む事惡し。手にてたゝきつくべし。

一似雲といへる隱逸あり。武者小路實陰卿の御門弟にて、和哥の道を心得たる人也。都大佛のほとり近く住けり。常にかの者、西上人の身まかり給ふ所をしらざる事をなげき、ある時淸水に通夜せしに、西行の墓所は河內國廣川といふ所にありと、正しく靈夢をかふぶり、それよりかの國へ尋くだりて見れば、疑ふ所もなく圓位の廟所あり。大きに悅、その後、その所に庵室のありしを寺に取立て、廣川寺と號く。末世といへども我心の實だにあらば、寄(奇)特はたがふ事あらじと、人の仰られし。

一法然上人

うきとのかさなるにこそ嬉しけれ身をいとふべき便とおもへば

なきといへばなきとや人の思ふらんとへばこたへる山彥の聲

ありといへばありとや人の思ふらんこたへて見へぬ山彥の聲

一得道したる人に、佛國禪師の示給ふ哥に、

折得ても心ゆるすなさくら花さそふ嵐のありとこそきけ

一尾州滿松山惟惠和尙は、六十年附臥の人也。人來て法をとへば、只居すと示されしとかや。

一狀元の事。唐の民、嬰兒の喰初に、餅に狀元といふ字

をべににて書。今日本にて年賀に壽饅頭とて、壽の字を紅粉にて書も状元の事にや。

一當代のあづま舞といふは、後水尾院の御作なり。古代のは絶て知る人なし。

一鎌倉に山をうがちて、昔火の雨のふりし時、爰に住しといふ所多くあり。火の雨にあらず。今の氷の降事也。右大將家の鎌倉に御座ありし折は、民の家居も佳木にて、氷をふせぐために此編をまふけしにや。ひふるといふ事、源氏須磨の卷にも見へたり。

一かた言いふ人に、ある人おしへ給ひしに、

橋　端　箸　垣　柿　蠣

此ごきおなじよみにて、云わけがたき事あまたあるべし。謠の章をさして覺よとのたまひし。

一小倉山の色紙百枚は蒲生秀行の家に有しを、五十枚町人に給り、殘五十枚は蒲生家にて燒失す。その町人所持の五十枚が今の世迄も殘れり。

一蜷川新右衛門、人に利根に成やうを敎んとて、只聞書をせよとの給ひしと也。

一名乘を聲にいふ事は、堪能の人を賞翫の事也。公任卿も、我もいつか、こうにんの卿と人に言れんと也。

一晦日ごろの夕月夜といふは、七日以前の月をいつも云べし。

一河内國土師の里道明寺は、菅家の伯母君覺壽のおはし給ひし所也。菅家左迁の時、一夜とゞまり給ひて、曉に鳥の啼けるに別れ給ひて、

啼ばこそ別れをいそげ鳥の音の聞へぬ里の曉も哉

此後より今以此さとに庭鳥を不飼とかや。奉納法樂などにも心すべき事にや。

一圓光大師素絹御影贊。

南無阿彌陀佛

佛說にまかせ六字を喝(唱カ)ふれば、必たすけ給ふと斗心得て申也。この外に別の心をおこせば、本願に違する也。

一三井寺の撞樓堂の片脇にさくら一もとあり。此さくらを能因法師の、入相のかねに花ぞちりゆく、とよみし一木なりと敎へし人ありしが、山崎たから寺の少先に、あま村といふ所あり。爰に邇逅山金龍寺といふ寺あり。

此寺の鐘を、山寺の春の夕ぐれとよみし鐘のよし。いづれかさだかならず。

一西行法師行脚の時、いづれの所にてか宿かり給ひしに、所の掟とてゆるさゞりし故、牛部屋のあきたるありしを、それに入て一夜を明されしに、夜明てその所の牛の主來り見て、牛一疋見へずとて、西行をせめさいなみしに、我は牛など盜べきものにあらずとの給ひければ、西行ならば聞及びし哥よむ人にこそ。一首よみ給はゞ免しなんと言ければ、とりあへず十二支にてよみ給ひしとかや。

馬(午)羊(未)猿(申)鳥(酉)犬(戌)はそちへいね(亥)うし(子丑)とら(寅)ぬ身もう(卯)きなたつ(辰)み(巳)に

當意卽妙など言は、かゝる事をや申なるべし。

一ある人の許に人ゝつどひ居て、謎をこしらへて遊びしに、待よひにふけゆく鐘の聲きけば、といふ哥の上の句をなぞに出したるに、人ゝときかねたりしを、かたへより、くるまうしと解あてたり。又、あかぬ別の鳥は物かは、と同じ哥の下の句を出したりければ、此謎はおもひめぐらすにも及ず。はじめの謎と同じ心にて、はなれうしならんと云しは、興ありておかしかりし。

一(註)牡丹を夏にするはふかき故あり。

春さかぬ花のこゝろやふかみ艸　宗砌

一流俗珍重

流俗の色にはあらず梅華　右大將實資卿

珍重すべき物とこそ見れ　致方朝臣

流俗(よのつね)　珍重(もてはやす)

一くれのをも

あさつき也。朝つくるゆへに、くれをおもといへり。

五辛は、大ビル　小ビル　クレノチモ　ニンニク　ニラ

一眺望の事、常光院の云、遠近とも二あるべし。

一奉納法樂の事

一法樂は會ばかりにて、懐紙・短尺を奉納せざる也、奉納は卽納る也と人の申されし。

一埜なる一本の色をしも兒におくらまだ見ぬ三吉野の花

多くある事也。澤庵の哥とかや。

一元の國より江南を責る時、白顔を大將とす。軍終てその國の物一品もとらず。大庾嶺は梅の名所也とて、梅の枝一兩枝を折て歸る。

一曾子曰、受ル人ニ者ハ畏ル人ヲ、弔ル人ニ者ハ驕ル人ニ。

一伊豆のりさふるひをまいらすとて、

万法は唯一心と聞ものをのりにふたつの名こそ惜しけれ　光廣

返し

万法は唯一心と聞ならばのりはふたつもふたつならじを

亞相の筆のおくに書付てと所望ゆまゝ染筆ゆ也。　宗彭

一光廣卿御作のなげぶしとて、御自筆に書せ給ひし。

をなじ空なる影かとおもて見ればあやしや月さへサマと共に見ぬ目はかはるげな

一薫物　一香合

たき物の香ならば袖に留てまし身はゆく〳〵も心斗を　平野一十郎若衆へまいる。

かへす〳〵かくて猶きれる心とおもふなよ出家なればぞ若衆なればぞ

右三品は、芝神明別當前の金剛院所持にて、彼亭にて一覽したり。芭蕉庇の瓢・長楠(柄)の文臺も共ニ一覽。

一英一蝶、淺妻舟畫贊ニ、

傳聞、美濃國野上の里、近江のや朝妻の江は、そのかみ遊女のはじまりし所となん。わなみわかかりしころ、さゞ浪や東あふみにわたらひ行て、鍋の數見んと、名たゝり傳ふつくまのいにしへなどながめつゞけて、朝妻のさとにもとめいたれば、畑うつますら雄・四手ひくすなどりのみにて、なになまめきたるゆかりも今は絶たるに、その所に床の山といふ名どころうちつゞきたるも、ゐにしありやと興じて、一曲の章歌につゞりて、うたかた人の口ずさびこしも今はむかし。

此跡に通例のあだしあだ浪の哥あり。此前書あるは、まれに見侍る故爰にうつす。

一人の物がたりに、寶晋齋其角は經(敎)祖日蓮上人の筆意を

學びしとかや。

一雪中庵嵐雪の申されしとや。たとへば朋友にもあれ、家人にもせよ。能き事を見出さんと心がくべし。さ思ひても、人のあしき事は見やすく、よき事は見へがたき物也と。

一是も嵐雪の申されしとかや。あづまの人は誹諧にも訛有とて、度〳〵上京いたされしとかや。東潮はみちのくの生れたり。誹諧かならず訛たりと申されしと也。

一腹赤贄　元日腹赤贄とて、魚を筑紫より奉る。はらかとは鱒といふ魚の事也。

一惠茱摘　万葉　君がため山田の澤にゑぐつむと雪解の水にもすそぬらしつ

ゑぐとは女萎と書て、ゑごとよめり。くとこと同音なり。花すはうにさく草の水邊にある也。或はゑぐとは芹を云と云儀あれど、六帖には芹の外に別にゑぐをあげたり。俊頼朝臣はわか茱を仲實朝臣のもとへをくるとてよめる。

をかみ川うきつにはゆるゑごのうれを摘しなへてもそこの御爲ぞ

返し

いさゝふかきみつのみたにゝ摘ためていしみゆすりてあらふ根芹か

今云、此哥はゑぐをゑごとよめり。かへしはせりとよめり。ゑぐと同物とおもへるか。又ゑぐとかける所を、万葉に芹とよめり。さればゑぐとせりと、ひとつ物の名と見へたり。

一春加氣氐　春にかゝる也。曉かけて・夕かけて、是に同じ。

一春麻氣氐　春かけてといふ詞也。

一春左禮　八雲御抄に、夏されともいへり。春は・夏はなり。去ル心によまず。春去と書は万葉書也。去ルの心なし。

一百千鳥　顯昭云、もゝちどりは、もゝちの鳥と云事也。もろ〳〵の鳥也。春になればよろづの鳥のさへづる也。

一芦角組　草のつのぐむ、皆春也。芦にかぎらず。眞菰・荻(萩カ)・篠・

薄など、つのぐむといふ。春也。

一菫(草カ)黒薄
すぐろの薄とは、春の焼野の薄の末くろきなり。ゑもじを略して、すぐろといへる也。或人云、すぐろはすゝきの古キくきをば、すと云、その古キくきの焼てくろければ、すぐろといふ。それゞつのぐむ也。袖中抄

一苗代　植物ニうちこかしを可嫌。非水邊。新式

一樺ざくら　古今、物の名に、かにはざくらとある、是也。和名には朱櫻と書。うす紅の花なるべし。

一顔鳥　春也。かほよ鳥、おなじと也。戀によせてよめり。只うつくしき鳥也と、定家卿仰られしよし。

一閑居鳥　鳴鳥狩　朝鷹
春は宵に雉子の鳴所を聞置、未明に行て狩たゝせて合を、鳴鳥狩とも、聞すへ鳥とも、朝鷹とも云也。

一鈴篭指
朝鷹にかぎる。鈴が鳴れば雉の知る故に、鈴の口に樺を細にしてさすを、鈴のことといふ也。

一蛙　かへるとは、かくし題の外はよまず。八雲御抄

一踏青
唐ニ上巳の日、曲江のほとりに都の人はらへし、酒などのみて草をふみ、遊戯する事のよし。

一花筏
花のちり懸たる筏也。又花のうきて流るゝをもいへり。

一櫻人
催馬楽のうたひ物也。花人などゝいふ。褒たることば也。又うたひ物ならで、さくらのあたりに居たる人をも、さくら人と云り。

一茅花　淺茅の花の事也。

一青簾
青葉のすだれとも。翡翠のすだれとて、四月朔日あたらしき御簾を御殿ニ懸る也。

一筑摩祭
近江、四月初ノ午の日祭禮ニ、おとこに逢ふたる數ほど土にて堝を作り、板にいたゞき、祭の場を通りしと也。東近江朝妻といふ名所のつゞき也。今は里も

たへて田と成、祭もなきがごし。所の人はちくまと云。哥にはつくまとよめり。ちとつと相通也。

一蛹葉
夏葉を虫のさしてあかくなるをいふ。わくらはにとふ人は、枕とば也。此時ははの字すみてよむ。

一樗佩
五月五日俗人取二樗葉一佩レ之避二悪鬼一。樗は俗にせんだんの木といふ物のよし。

一萱草　萱草也。北堂ニ栽レバ萱艸ヲ能忘レ憂ヲ。

一鴨子（カルノコ）
鴨の子を、かるの子とも、かりの子ともいへり。りとると相通。

一櫻麻　麻の中ニさくら色したるをいふ。

一令法　はたつもり
畑を守る神也。つは助字也。誹諧の花卷に植物ニはさみて書て、紛らはしければ爰ニ記ス。

一擣衣
八月十五夜ニ始てうつ也。その前ニ不詠。

一宇治花園
草花也。野花　秋花　花野　すべて秋。

一杜父魚　かじか　とも
山川にすむ魚也。形は大サ鮎のごし。惣躰色紺色にして腹白し。水中にて鳴く聲は、黒つぐみといふ鳥に似たり。晝夜同じ所にて鳴。秋。

一うづら衣　うすく、やさしき衣也。

一殘鴈　秋也。越路に殘て、おそくわたる也。

一葉守神　植物ニ雑也。万の木を守る神也。

一しまき
よばかりも冬也。時雨に風のそひたるもの也。雪のそふをば雪しまきといへり。ふゞきに似たる物也。ふゞきは雪と風と斗。雪しまきは時雨と雪と風と三色也。みぞれは雨・雪二色まじるを云。

一くたら野　冬野の名也。

一神樂　大内の外は皆さとかぐらと云。

一秋沙（アキサ）　河に居る鳥也。濱にもよめり。

一多和田杜谷橋たての松にて硯の箱つくりて、賛望れしに、

硯に添て海をさらず　墨に倚て霞をひく

是臘の一器歟

一不居庵紀貝、點印の箱に銘を乞れしに、

華を押て春をとゞめ　句を撰て點をわかつ

不居庵中四時を入る庫

一吹よせといへる盃を所持せし人の望にまかす。

酒徳を賞して夕の君とかしづきたまふあまり、かの器を物數寄して名を吹よせと呼る。

後京極攝政

木のもとにつもる木のはをかきつめて露あたゝむる秋の盃

と聞へしにも趣のかよひ侍るにや。橋だて近き人の所持なれば、かの松の葉のちりうせず、めぐりめぐれるさかづきの影も久しき樂しみならんか。

吹よせる浪の一葉や酒の淡

一白柳田社所持の本、平家の序

信濃前司行長、此物語を述作して、盲人生佛におしえて語らしむ。その後生佛誰にかつたへ、誰か又福永勾當につたへしを、米花庵田社、福永よりつたへ得て、秋暮の友として閑席を養ふ。元より塵を飛する器有て耻かしむる所なし。よつて彼所持の本に聊序辭を加ふ。

一挽哥幷序

秋風人を驚せる中に、渭賢主人の紅閨、銀河の長きちぎり夕に盡て、文月八日の月もみじかく雲にかくれ給ふかなしび、無常手のうらをかへすがごとく、轉變又定がたし。爰におゐて千秌万歳の執をなしがたし。

あまの河星のまくらは明ゆけど、又來る秋もあるものを、人にはかなき人の世の、秋の夢とてたのまればこそ。

跡にあるとの葉は皆にしきかな

哥の道などうとからぬ御方也。

一ちかきころ假名の詩といふことを人ゝ言出侍るを、たはぶれに作。

惠比壽大黒

かるさんはいて鯛をうろ〳〵　俗かたけて米は〳〵と
遊んでいかぬうき世知れとて　七福神も異見いゝ兒

憐捨子

籠に啼鶴は子のために鳴　月に叫で猿も子を呼
さるに此子を爰に捨しは　父や捨にし母や捨にし

風呂吹大根

爰にふたりのおもひ人あり　尾張練間の色を爭ひ
片輪車の箸にさゝれて　口より外にやる方もなし

讀曾我物語

梅は兄にて花ににほはせ　松は弟の枝もあらびて
十八年の心づくしも　不二の裾野の短夜の夢

傾城

風に柳の身はまかせうち　世をうき草のうきを思ふに
笑てかなしき日をくらしかね　泣てうれしき夜を惜むらし

一金龍精舍に爰の遊女どもの、千もとのさくらを植侍し時、戯作。

和讚 三首

枯木も花のさくと聞ば　うきも若きは頼みあり
さはりの雲も曉の　花にまがへと植つらん

其二

泊瀬は遠し蜑小舟　あさくさ川に舟得たる
その御佛のいにしへを　花と頼みて植つらん

其三

うそをつく夜はうそながら　頼みは同じしめぢがはら
さしもちかひに身の後を　花になれとや植つらん

一放鳥辭

鶵ゝ、籠中の鶵。汝久しく籠にこめられて、雲を乞るうらみやむ時なし。我又久しく病に勞て、遠く遊ざる愁、日〳〵にあり。鶵ゝ、籠中の鶵。今汝をもて我にあて、我をして汝を思ふにしのびず。みづから起て籠を開て、汝をはなさん。

鶏ゝ、籠中の鶏。五柳先生の古郷をしたへるおもひ、慈鎮和尙の籠上にそゝけるなみだ、律のいましめにかなひて、みづから起て籠を開て、汝を放さん。

鶏ゝ、籠中の鶏。今幸にして籠の中をのがれ、野外に遊ぶとも、餌を貪てますら雄の網に入る事なかれ。遠く翔て箸鷹の爪にかゝる事なかれ。

鶏ゝ、籠中の鶏。長く千歳の松にあそびて、共に千歳のよぶきを囀るべし。鶏ゝ、籠中の鶏。

一冬瓜說

狛のわたりの眞桑瓜は哥によまれ、夕皃の實のふつゝかなるも、花は惟光があふぎのうへに折とられて、やさしき中の中だちともなれり。然るに爰に冬瓜といふ物ありて、天性質素にして、朝にも夕にもつかず。權門高家の臺のうへにも乘せられず。まいて嬋娟美質の手にも撫られず。寂ゝ寞ゝとして馬場守の軒端を宿とし、あるは柴をく屋のうへにこけはらばいて、かたちにもかまはず、諂る色もなく、誠に天地の一閑人なるべしや。紅花の風にちれどもをどろかず。黄葉の霜にうつるをも、をのれが身にはうるほひと待わび、百花にひとつの實をむすびて、うそつきの荷擔人に曳るれども、我だにつきありかずばと、風にうそぶき日にこがれて、夏は若く秌は壯んに、冬は老たる人の口中を煖め、はだへをとゝなへ、鰒汁のときより、にぶき冬瓜汁のあたりさはりなきをと、雪のあしたに愛せられては一輪切られ、風の夕に用ひられては一輪きらるれども、日ゝに又新也。元より王元が富につかず、顏子の貧を樂しめるにや。行なりしだひに蔓をまけて枕とし、蓏によもぎの友をも隔ず。松にかづらの高上りをもうらやまず。常に中人以下の膳のうへに遊びて、假にも晴がましき坐敷へ出ねば、高位貴人のむづかしき箸の先にいびられず。一生を風雅の横に樂しめる物ならんかし。渠が菓類のうちにも、瓢簞は若手のうはきものにして、瓢は年寄の疝氣持なるべし。それは炭取の細工に横ひらめに押付られ、是は根付の物好に尻がしらをからげられて、はからずもからきめみたらんは、石の能有てくだかれ、龜の智あつてみづからをそこな

ふたぐひならんかし。冬瓜の味ひ淡薄にして、かたちのふつゝかなるや。外の事にみをくるしめず。かの一文不知の青入道のたぐひならんをや。されど夕皃をうてなの觀音もましませば、冬瓜に來迎の勢至もあるまじき物ならず。只をこたりなく精進日の調菜をつとむべきと也。

一夏日の長きを愛して、獨吟の歌仙一卷をなす。

初がつほ空に戸のなき夜明哉
　ひく時汐の分かるうの華
人は武士その五文字の派が利いて
　關のひがしは柱なりけり
宵の間や尻もむすばぬ草の月
　さはれば物の瘦る秋風
十如是のどれぞにあたる鹿の聲
　祇王の時を知て居るなり
からかさは涙の雨の上へさし
　山ほとゝぎすをらが〳〵と
青物はつかんで來ても深みどり
　百と言れて怖くなる年
店請は伯父をも添て捨たがり
　大さかづきに照る月を見て
きり〳〵す春中で鳴はひしがくし
　世をよそ人の露に目が寄る
花の雪雨手をかけてすくひあげ
　苗しろ水のまがつては折れ
傀儡師をぐらの野邊を小云(言カ)にて
　近年乳母に名代ものなし
拾うりにしてさへ夢を買ぬなり
　あらし木がらしさても極月
指を折る間が出れば空さびし
　汲んで仕廻てうつぶける桶
あさがほは梅に桔梗にたをされて
　實にも嫌らいの多い木食
風の月二百十日は後の事
　膝抱しめて淀の夜すがら
行かよふ心の駒も追かへし

うそと氣の付く迄の戀艸
五月雨降出す日から死だつら
あたらし鐘のはやい九ツ
(胡)故麻塩は今にすたらぬ包形
掛たはし子を登るかげろふ
蝶鳥の身を持くづす花ざかり
をしめば春の行はいやよひ

是を開ば明乎達乎。それよく物の名目を辨へ、百歳の人といふとも先生とせん。文章は俳諧の謫仙、晋子が下に立ん事かたし。句は下戸なれど酒器也と、沈醉塢の七十翁、跋して書す。

荷簡齋
癸酉初秋日　林　志

[玄對山木]　[牀頭一壺酒]

寶暦四年甲戌三月
東都　書林　日本橋通二町目　鶴本平藏

# 靫随筆（うつぼずゐひつ）

一・二・三

米仲著

# 靭隨筆（一）

權道米仲著

一何條ことなきを筆にまかせたれば、とり所なき控木のるいならまし。控は靭にかよひておかしく、毛のむさ〳〵とはえたるなどは猶おかし。

一ある日、春來師のもとへ往て雜談のうち、先師六盌仙の發句に、

名月や花なき里へ夕びくに

是、秦がすみたつを見すてゝの哥によりてせられし也。穐にして正花也。今は花の一字を秋、あるひは夏、冬にさしこみて、謾に其季の正花とする、いと興なしと申されしか。

一靈昭女の繪をかけ物として、つねに見られけるが、ある時贊して、

我戀は釋迦や達磨を仲人にて
その曉にあふよしもがな　春來

行基菩薩の波羅門僧正の手をとりて、眞如くちせずとよみ給ひける意にもよれる歟。

一むかしの遊女・白拍子の名は、大かた釋語によせてつけたり。小野ノ宮大臣の愛し給ひし遊女は香爐といふ。あるひは佛・淨る梨・熊野・如意・觀音など也。さゞら浪たつやれこさつとうたふたる室の長者も、普賢といふたるなるべし。靜・微妙亦そのうつり也。今も利生などゝいふ名はあり。名義集に摩登祇は女の惣名とあれば祇王・祇女もおもふべし。磯の禪師がめしつかひたるはしたものは、さいほう・そのあまといひし也。東鑑に建久四年里見ノ冠者義成を遊女の別當となすべしとあれば、すべて古今の異なることを考べし。

一男の假名は、元來はしのをの字なるに、いつからか奥のおに書く也。小男鹿・棹鹿同じ。又潟乎無・片男浪、はしのをにて通用す。奥のおならば片男浪の借字は相違すべし。万葉に左小鹿、又乎等古乎美奈能波奈ともあり。猶神代卷につまびらかなり。近來のかなづかひの書に、音ンに、はねる字は、訓にをのひゞきの時はみなほと書くといへり。しかれども塩、是ははねる音ンゆ

へ、しほと書くべきか。潮汐はいかゞ。竿、さほならんに、棹にはねる音なき時は證としがたし。よしや左小鹿・小男鹿・棹鹿みなかよへば、さをと書べきか。鰹もかたうをにて、タウの反ツなれば、おしまかせてかつをと書んや。しかあれども万葉にも楫を可之とも可治とも出し、又奈流門能宇頭之保とも、之乎路可良とも用ひたれば、一樣には定がたかるべし。走を、はしるとも、わしるともよむ例にて、皆同韻通ずるにや。

一又たぐひあらしの山の麓寺杉の菴に有明の月、俊成卿の哥也。舟辨慶・卒都婆小町なども、耳なれたればこそなれ。たゞしき名目にはあらず。六盌先師も宮樣櫻といふ句は申されし。時に宜く變に應じては一座の興ともなる。何かくるしかるべき。芭蕉に皐月富士、其角につくま汁などもあれば、よろづかたむきにいふはよしなし

あはれ親なしとも花の子順禮　米德
卽涅槃醉ふて倒れて手枕野　春來
白魚やこと問はずとも都魚　超雪

掃て後塵あたらしや落椿　仙桂
降うづむ櫻おろしや麓寺　畔水
つくづくときりかね柚の若葉哉　米純
けふといへば鯖もさ月の藥汁　米仲
木がくれや息つく道の蟬時雨　紀裳

淺草川の早舟もおもふ人には又遲しさ、三枚かたに袖すりの宮なしのぶらめ。

蝿帳を顏にかけてや夕頭巾　米德
六月の雨は父母たり豊兼覺　春堂
名月やうはの空漕ぐ早をぶね　米山
詩か哥か松あるかたへ雪小舟　關宮 阿誰
みよしつく堀の別や蒲團雪　米仲

かたひら雪はいづれの日にや有けむ。

市人や節季退治の狩衣　春來

一同意の句ありとも、あながちになじりがたし。さすがの白炭の忠知にも、白ずみやふたゝびつもる雪の枝

といへる作例はある也。卜宅が、夫婦といがみ給ひけり　も延寶に、おもはくや夫婦といがむ猫の聲　と見えたり。均朋が、ほゝ螢とゝ飛火野のどもり哉　とは一句一人のやうなれども、是も亦ひとしき類あるかもしらず。

一梅干と梅ぼうしは別歟。

禪寺で見るやしゆそ漬梅法師　一好

なには女やちぎりて落す梅ぼうし　貞兎

季吟法印、青梅の題にて撰られたる句なり。梅干の句ぶりにはあらず。青梅の丸きを法師といふにや。

枝ながら一夏を送れ梅ぼうし

弘永句にて毛吹草に出たり。

一拾芥抄、食禁物の部に、三月五辛を喰はず。九月生薑をくらはずと有。あさつき鱠は雛の膳供にさだまり、芝神明の生薑祭(シヤウガマツリ)、食品にあてずして何ぞや。

一猿をましらといふは、梵語の一轉にや。名義集云、摩(マ)斯吒(シタ)、此云獼猴(ミコウ)。

一妹背の道をやはらぐる媒を、花鳥の使とすといへば戀か。

一伊勢嶋宮内は江戸虎屋源太夫が弟子にて、宇治嘉太夫が師也。一流語出したる者也。

いせ嶋を似せぬぞ誠鉢たゝき　其角

其ころ專、伊勢嶋が流はやりしと見えたり。

一安宅勸進帳のこと、辨慶にはあらず。俊章なりといへども、まづ本躰の勸進帳をよみし事、たしかに證文なし。況や辨慶・俊章におゐてをや。

一檜垣の謡に、老てかゞめるすがたをば、三つ輪ぐむと申なりとつくれるは、袋草紙の假名によれる歟。しかれども其さうしは傳寫の違にや。假名のまどひすくなからず。後撰に、興範(オキノリ)朝臣の水たべんとこひ給ふによめる哥は、水はくむなり。

年ふれば我くろ髮もしら川の　ひがき
みづはぐむまで老にける哉

嫗(オウナ)の面かけおしはかるべし。増賀上人も、みづはさす八そぢ余りの老の波とは詠じ給へり。八雲御抄に、老かゞまりたる人を、みづはさすとさぶらふは全く姿のことに

はあるべからず。しかし又、はの字を用ずして輪といふ證もありや。博覽に尋べし。

一流俗の色にはあらず梅花　といふ句を、流俗者人間ノ謂と云々。しかれば人間の色にはあらずと、連歌にはしたるかと清輔朝臣の說なり。さある時は、よの中の色にはあらずとも讀るゝ也。大概よのつねといふ。

心なく拂ふてもなし梅の笠　雪淀

酢のものゝ世なるゝ頃ぞ梅のはな　葵足

梅がゝに何占ん豆腐串　米純

恩をつむ日向こそあれ宇梅のはな　春望

人の送りし梅をうつし植て、春のさかりを得たれば

黑出なる男がくれし梅見哉　許道

風ひかぬうめの野守が咄かな　諸東

垂撥もむめの鏡や古社　海如

梅咲くやいかで白ぬめ緋ぢりめん　閑宿 阿誰

梅が香や迯し道もおのづから　和貢

足袋ぬいで梅の野守にやるも有　萬立

梅咲くや臥猪の床の表がえ　呑江

さほ姫の待女郎や梅つばき　巨龍

春日路傍情

梅の袖風は柳の腰を押　米鳳

雪ふりや老鶯のほいろもの　春來

鶯の古郷あれぬ竹の穢　紀逸

うぐひすや藪の懷垣の袖　扇裡

鶯に投る小判の光かな　朱明

鶯や七賢人の枕より　米璘

うぐひすのうつり心や小笹原　庭臺

鶯や障子におのがふりを見る　佐原 青藍

鶯と春をためたり梅花　龍眠

一俊成卿の說に、しほじり、たしかに不知よし見えたり。よろづのこと、牽鑿過て還て附會に落る多し。釋日本紀述義ノ部に熊神籬・天狗はありて、その釋をいはず。天地ひらけて、山川いまださだまらざるに鶺鴒は既にあり。是等も深くたづねて益なかるべし。

一衣通郎姫のこと、古事記に允恭天皇の皇女とし、日

本紀には妃とす。甚相違せるも故あることにこそ。くものおこなひ今宵しるしもの哥は、公望私記にさゝがねは山の名なり。雲の於支天也とあり。蜘蛛のふるまひはつねのこと也、彝物歟、生類か、いづれに遠慮すべき。さし合は時のよろしきに随ふとは是等のこと歟。

一みか月に日をつけることきらはずと、貞德のさだめ也。說文ニ朏ハ月未ダ盛明ナラ云々。しかれども訓にみかといふ時は三日の月のやう也。按ルに日本紀、星辰あり。古記云、大星を美加保志といふ。今の俗大蜂を美加弟知、大栗を美加久利といふ類也とあれば、月いまだ盛明ならずといへども、初月のはや大ィに見える心にて、みか月といふにや。大伴家持、初月の歌に、振仰而答月見者ともあり。此ことのもとにて日にきらはざるか。（年中行事歌合三日月はきのふのそらの初秋にけふはふたつの神まつる也是は二ツ三ツ也）

夜は朧二月の雪をこかしけり　許　道

花影上欄干といふ題を探りて

朧とは橋に蟲く鎗の影　米　仲

彌生下旬にほとゝぎすを、きゝけるといふに

月にうかれて花の雪見にか時鳥　龍　眠

忍　戀

人しらぬ奥歯にものや朧月　旨　原

暒の身赤裸なる月夜かな　米　仲

十五夜に出し月かも十三夜　百　巷

大黒の鼠にひづみや十三夜　秀　億

醉ふてひと夜さめてふた夜の月見哉　米　仲

此のちにさらに雲なし十三夜　京　太　祇

明月といづれあやめ歟十三夜　常　樹

月か梅か夢かと斗雪の朝　春　來

月ひとつかくしかねたり枯尾花　買　明

閑伽桶に風氷る月夜かな　米　德

一貞德說に、たそがれ、誠の夕時分にてはこれなき賦。たどうそくらき時を、ふといひ初たる詞なれば、夕時分に治定せざる詞かといへり。猶、御傘に委き辨あり。是は阿加等伎乃加波多例等枳爾など、万葉によれる考にや。

一鷄冠井良德が書ける物に、貞德いはく、誹諧といふ字篇旁（ヘンツクリ）を取はなして見れば、言葉みなことばにあらずと讀るゝ也。これ連歌の風流なる詞と引かへて、いひ度ことをいふ故なりとしるされたるは、長頭丸の心とも覺えず。良德も亦かゝることを、さもと用べきにもあらざるに、何としたる吏にや。大にあやしむべし。

一あるかたへ其角まいりし時、三鳥傳授のこときかまほしと仰けるに、稻負鳥は馬、よぶこ鳥は猿也と申ければ、わらはせられて、それはたれ／＼もつねにいふことにて戯にひとし、誠はいかにとかさねて尋給ふ時、其余はおのれも存ぜず。俳諧これにて濟ゆよし申けると也。殊勝におかしきはなし也。

一西山宗因、江戸旅宿の折から、ある人、此頃俳諧し侍りと、添削を宗因へ賴れける。

うへをしたへえいとう山の花見哉

宗因いはく、おもしろけれども連哥めきたり。ケ様にて宜かるべしとて、

花見衆やえいとう／＼東叡山

卽時に引直して、扨脇をし侍らんと、

霞ひけ／＼押す車坂

とつけられたり。えいとう山の句、連哥めきたるとや、厚きはいかい也。

螢火は百がものありなめり川　宗因

驚けや念佛衆生節季ゆ　同

一俳諧の流行も時によろしきといふ肝要にや、檀林十百員に、

獄門の眼にそゝぐむら時雨　正友

にせ金ふきしあとのうき雲　雪柴

又

上京下京しぐれふりゆく　卜尺

ひかれもの木の葉衣を高手小手　在色

是上手のはたらき也。延寶のころより移り來たり、當世かうやうの句は案じもつけず。きくもこは／＼しきや。

一はいかいに本繪とうき世繪との差別も在か。まづ本繪といへるは、正風つらぬいて古今にわたり、天地造化の雅をたがへず。名畫者流の妙手變ずることなきがごとし。

うき世繪は菱川師信が手をつくせしも、其時過ぬれば又當世のはやりごとを書て菱川古し。是時〳〵によろしといへ共、流行にいたつては當世も亦古からむ。

一芭蕉の近江にてしたゝめられし文に、

花曇鐘は上野か淺草か

とあり。雲とはのちのことにや。

散捨てる花の心のすさまじや　米山

枝〳〵に笑ふ聲あり花盛　秀曉

はなの山露とは見えぬ命かな　道院

花の雲二月やぶれて五六日　米仲

おもへば此鐘うらめしや花の山　子誾

木兎に物いは橋や夜の花　巨龍

順禮の棒をつく〳〵花見哉　默齋

拜見も醉ればつるに花見かな　許道

山のさくらに目こそうつられ。それは北山の僧都のうどんげなり。

うどん屋の花待得たり下谷の町　米仲

谷水の花にとく〳〵德利哉　米年

剃捨て櫻の奥の月夜かな　田旦

道灌の繩ばり廣し山櫻　百義

狼の中垣結ふや山ざくら　田社

此櫻待得て勸化はじめけり　昏嵐

三千世界を眼前につくしたる心上おもひよせて

この頃の海はちいさきさくら哉　梅郊

散きはのふたつも若き櫻かな　春堂

上見るな櫻が下の庭左久良　章雨

鐘撞のおのれを厭ふさくら哉　環山

東叡の仁王門、めでたくいできませし年に

深山木をその仁王とは初櫻　米仲

笑ふたも杖にわすれて姥櫻　載二

櫻かな頃は巫女の笠の雪　青洲

乘掛にとふ〳〵眠るさくら哉　山雅

ある人のもとより、囘向院の晩鐘といへる題をおこせたりければ、

よめる。

見せ物も散るやゆふべを來て見れば　珠來

白けれど目にも藥のさくら哉　米儀

下戶はそも人に醉也山ざくら　吐月

散のこる櫻は幾重雨のいろ　京　太祇

一宗釋論云、大自在の廟に金をもてつくる像あり。其高サ六丈、瑠璃を眼とす。大に神驗ありて求願かならず得る。時に、龍樹の弟子提婆（爲二佛怨一提婆達多と混ずべからず。）是によつて曰、神なることは神也。本は精靈をもて物を訓ずる也。假に黃金・瑠璃をもて世を威炫する、何ぞかく鄙やとて梯に登り、神の眼を鑿と云〻。金ー躰玉ー眼の佛像などは、ことぐく提婆がとらざる所なるべし。

一阿耨多羅三藐三菩提を秦ニ無上正徧知道と飜す。今の神者と呼るゝ人、無上靈寶神道といふも、同じやうなるもの也。

一ある日、春來師、我老ぬ是見よとて出されける。

年老て田舍にすみ侍る時、嵐はげしき夜、埋火を力にふしけるに、いつのまにか夜のものと小袖に火もえつきぬるしらず。夢こゝ地にたれならん。起よくとしきりによばひぬると覺えて、ふと目ざめたる。むねつぶれ、あはてゝ水をおもへど、かたはらになし。とかくして、うめきけしたる心おもひやるべし。此時ふととりあへず兒にて

暫老

身はいつの煙もおのがころもでの
いきて此世になかばもゆらむ　春來

一花まうけ序

造化景色も視るに動て、聽に次り。閑に居て四時をたのしまむものは窗なり。やゝ梅のほころぶるより、人來くの聲やはらげば、縫てふ手業の南あかりも、おのづからなる風薰じぬと、むしろうき世の肱枕に醉醒の蝿をにくみ、螢をつゝみて握翫すれば、閨の風戶を今やさゝましと、音する雨の草木をしほるは、龍田姬の細工染歟。あまの戶わたる月かげには、しでうつ衣も聞耳さぶく、熏鼠塞向も時なればなり。手を吹うたふ丹波のみゆきは、たまれこゆきといふべきにやと、又孫康

があぶらとほしき夜學の趣向も、みな其ところの影にたよりて、それ〴〵の道行れぬ。爰に池西氏の何がし、余力を誹に用ひ、机下に來りて予が百花窓の號を乞はるまゝ、其こゝろざしのふかきをくみて、是を讓るにあらましをのべて、佳句の修覆をくはへ給へと持なしやうを申贈りぬ。

もろこしや歌にも大工花の宿　六䝢

一京うちまいりせし頃、嵯峨野わたり尋ねありきけるに、祇王・祇女・佛刀自が舊跡をしるしたる所あり。いづれか穠にと哀深し。ふとおもひよせけるは、後撰にさくさめのとしとあるを、壁案集に諸人一同しうとめの名のよし。和名鈔云、古語ニ老母ヲ爲レ負ト又俗人謂テ二老女一ヲ爲レ刀自ト(トジノ字しらず)今誤テ以レ貝ヲ爲レ自ト(刀名度之)又呼テ二老女一ヲ爲ニ太宇女一ト又乎佐女　故ニ次ニ於貢ニ耳　として、刀自を媼專の間にまじへ入たれば、老女の稱と見えたり。曾我物語の刀貝も貢の字をわりたるといへど、負の字もと刀による字にてはなき歟。又、顯輔朝臣は早草女の說にて、若草のとしのまつに消えぬべしとよめるか、ともしるしたまへり。淨御原天皇の夫人字を氷上大刀自と申し、大伴佐手丸が妻の字奈刀自、端正美麗の故海神のためにとらると見えたるなどは、老女にあらざる歟。ある書に刀自女は宮女也といふ。續日本紀などによれる說歟。

孀て力なきがごし。

青柳のうすものにだもをうな哉　米仲
紙雛のたちつくしても逢ふ夜哉　甘棠
雛にこそあられぬ姫の鍋のぞき　米運
ひなかざる妻のむかしや干大根　小嶋句當 露英
賤が家に源氏は來たり雛祭　曉翁

寸馬豆人

遠まさる人やさながらひなの豆　米仲
まゝ焚キといはれて嬉し雛遊　汶長
出かはりやいはぬ女に見ぬ旦那　都十
物ぬひに賣れぬ身ひとつ春の月　米仲
人妻となりての春や元旦那　米宇
かけ香のいづくともなし更衣　朱明
梅漬やくゞつは色に染やすき　畔水

女中客ゆるさぬ庭の牡丹かな　米幸

娵姑丸きこゝろや初なすび　春望

中村久米太郎、人の衣の裏に、立わかれいなばの哥をたはぶれ書て都へ登りけるそのゝちの便に申遣す。

來んといふそのうらもみや更衣　米仲

せめて蚊にうき文捨る紙燭哉　百義

只忙然とさめて

夢の女哭は蚊屋に殘りけり　佐原 青藍

忍ぶ夜や菖蒲が中の辷り道　草雨

蚊も我も入れじ待夜の蟵の鎖　雞口

藻がり船殿と御部屋と座頭哉　機夕

たはれ男の垣にも造るあふぎ哉　萍社

風になびく唐繪の女けしの花　尾州鳴海 蝶羅

早舟に乘て來て起て今朝の秋　米帆

色紙のはやる世間や星の友　米仲

七夕や妹にささふ水あらば　米策

星祭女筆指南の格子かな　米岑

うば玉の鳥の羽風や妻むかへ　碑明

をみなへし今宵は星に負にけり　米仲

織姫の二八かづらや大角豆畑　山子

戀に啼く我身もいれよむし合　文幸

穐草や小野ゝおつうがちらし書　畔水

小町とはながめせしまの躍哉　慶子

朝露や君がとる手のつめたさに　汶長

おもひやむ時たしか也鹿の聲　尾州鳴海 鉄叟

白菊や美人のひらく十の指　曾嵐

水仙の出丸へわづか女武者　章雅

埋火に女のわらひ更にけり　汶章

戀せぬを人の指さす頭巾かな　春望

妻ごもる草も埒なし雪の原　環山

一樽を妾とおもへ冬ごもり　友以

葛飾や眞間の入江近き龜戸といふ村に、霜のかしらを剃り、おどろの髮をつかね、ながらへ殘りし夫婦の者あり。かしこは我が産砂なれば、折ふしのあゆみをはこぶに、はからずも道にゆきあひぬ。故人

零落のゝちは、古郷異郷となるのおもひ、おれにせまり、しきりにむかしなつかしく、かのもさへいざなはれ、ことに、一夜いやどりまで也。あるじの夜のものをわれにうちきせたれば、叟は蛙の夜着引合ふしたる、亦むかしなつかしくや。

老夫婦ある夜おかしき寒哉　默齋

女房は夜のあらしや黑頭巾　米帆

一都鳥はいかにも鷗とおもはるゝ也。

すみだ川すむとしきゝし都鳥

けふは雲井のうへに見るかな

水のうへに遊びつゝいをゝ喰ふ。京には見えぬ鳥なればとたしかにあるを、成季、此鳥をある殿上人よりあづけられて、喰ひ物などもしらで、万の虫をくはせけるをわらふたる也。又伊勢物語の都鳥は全く鳥にあらず、人なりといふは、ことを求るに似たり。羅山先生の丙辰紀行にいはく、都鳥はすみだ川のものなれば、好色の人とりて家に飼て侍るを見るに、誠に觜と足と赤き、鷗の大さなる。此とり蛤をこのみて喰けるなりとあれば、かもめにてもなき歟。

一むかしの長点は、卷中の秀逸とする也。その後風流うつりて、趣ある句を長として拔群とはせず。沾德いはく、發句・脇・第三までは主客功者のすることあれば、さはることなくば第三まで長点然るべしとなり。近來は發句より表八句、大かたぬしなき句にて詠藻したゝめける。沾德のこともいたづらに成たり。脇起のはいかいも今は只一通りにて、意味の差別はなし。

一千載集　九月十三夜の月を、

秋の月千ゞに心をくだきゝて

こよひ一夜にたへずもある哉

はらゝこを千ゞにくだくや後の月　其角

かすめて作れる也。本歌などとること心得あるべきか。あしく取なしたらましかば、古哥の註をするやうに成べきか。尋べし。

一まだきといふ言葉は、いまだきの心にて連ッ字のよし也。未來(マダキ)と書たるは、何とやら文字も心も不自由なるやう也。たゞし借字か。

一源廷尉義經著ニシ赤地ノ錦ノ直垂紅下濃ノ鎧ヲ駕ニス黒馬ニと
あり。義經の鎧、紫すそごとも見えたり。吳藍も黒赤
の間色むらさきにて、緋色とは各別也。唐令ニ衣ハ紫ヲ
爲レ上ト緋次レ之ニ綠ヲ爲レ下ト とあり。紫の朱をうばふと
いふことにて、秋齋、茜根の染を、むらさき也とし る
したる據ある歟。

一よほどあとの年七月十四日の夜、春師閑を得て、盆中
三日のあらましを書すてられける。

獨夜獨吟　小家がちなるわりなさを

玉棚に貧しさ見せぬ心哉　春來
おもては地ぬし盂蘭盆の月
辻施餓鬼是生めつぼうかいにして
團粉と西瓜腹は無差別
みそ萩の味噌すり坊主納所坊
此世の勘定さし引の穢
骸骨の躍芝居を取くみて
閻魔の口の釜の蓋明く
寺まふで罪淺草や深川や



三日の精進落にきかばやき
蓮のめし饐るばかりぞ女郎花
水司もとも〳〵送火の影
塩尻をいたゞきつれて死出の旅
鬼が屁をひるあはれ初秋
晝の月虎屋大隅うす煙
殘暑かけ取火の車ぞや
露の世に樒を花ともてはやし
夏書仕廻ふて極樂〳〵
うば玉の所化の子も來て生身魂
索麪地藏とあらはれ給ふ
石爺は日光よりもおそろしや
おいとま乞のけふあす斗
欠落の君かも市のしほれ草
いとし可愛の甘茶や挽茶や
棚經の法師が膀ぐらたゞれたり
なすびの牛や寐て斗居て
白瓜の馬鹿〳〵しさよ高灯籠

町家で談儀月ひかりさす
鼻の下建立佛も秋の聲
振廻水も露たむけ水
やぶ入や泣の泪の百旦那
身のあぶらけを齋日にして
ごま〳〵のよごしに口がすべり莧
花火せんかう書寫山の僧
御朱印も濟んで聖霊かへらるゝ
まこも流れてあとのしら波

心のゆくまゝ筆のおもむくまゝ、ひと夜のたはぶれなれば、もじのさし合・てにはの同じきも有べけれど、人に見するにもあらでと、名さへ無名氏としるされたり。

一八月いつの頃か、誹話に盃をふくみなどせし時、紫師のいはく、李白が思レ君ヲ不レ見と、清溪三峽の間に月をもてあそびたるによりて、良夜の句に君とばかりいふて、月にせんとおもふこと久しけれども、いまだなしとて、

名月や顔で丸書くひとりごと　春來

君とはいかなら秀逸ならめと、たゞにこのましく覺えけるが、今はやまふのつよく、かり初のことも世にかくれければ、何などは猶さらにて、多年の趣意もいたづらに成なむかと、いと涙多し。

先ひとり我影來り月の友　存義
頬杖にかたぶくまでやけふの月　萍社
名月や峯をこぼれて麩屋の桶　默齋
新月は走る歟沖に滿願寺　栖鶴
さよ更て箱根は月のあなた哉　雪淀
新月は海も露もつ盛かな　米仲
名月や鳥ひと聲書ごゝろ　關宿 阿誰
明月や瀧の行衛の野川まで　呑江
元船をふりさけ見ればけふの月　米幸
くまなしや衣きぬ山の霽ほども　珠來
名月のゆくゑや草の沖津浪　吉門
生壁や今宵は月の影を嗅ぐ　米仲

是は新居を得たる秋のこと也。

月今宵四角な顔の親仁さへ　子聞
盛長に酌をとらせてけふの月　柳尾

一口にいふはつたなし今日の月　佐原 百道
名月や人にことわる海の荒　平砂
五月雨によく生キて居てけふの月　紀逸

旅店

いでや月團子喰ふ里五十三　米德
我膝に人の影置く月見哉　佐原 青藍
酒わびる手をさゝらえやけふの月　米仲
片隅の蚊屋に夜は有けふの月　十曉
名月やゆるさぬ親も明け烏　朱明
碓も古郷寒し今日のつき　環山
名月や寐て居る物は星斗　梅郊
そとにたつ不用の人の月見哉　米仲
古き世の下手うらやみて月見哉　雞口

竹裏月

蒔ちらす金に欲なし竹の月　遊翁
名月や通る間の帆の曇　道院
名月や今宵は虫の高く飛ぶ　龍眠
利酒や待宵月のはらみ歌　春望
空にけふもみぢ袋や月の兒　露牙
闕守の花にはもれつ今日の月　女 民うた

一經に金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀など續くは、吳音・梵音相交る也。瑠璃は梵語にして青色寶と譯す。頗梨は飜して水精也。

一君といふ言葉は、どちらへも用ることなり。將軍義尙公、近江國鈎里の御陣中へ、內より（後土御門院）御製を給はる。

君すめば人の心の鈎をも
さこそは直ぐに治めなすらめ

義尙公御かへし

人心鈎の里ぞ名のみせる
直なる君が代につかへつゝ

一木曾殿には、あふひ・巴とて二人の女將軍あり。葵は去年となみ山の合戰にうたれぬとあれば、ひとしき寵の女と見えたり。鞆繪は名をのこして、葵は人口に稀也。幸歟不幸歟。軍防令に、凡征行者皆不レ得下將二婦女一自隨上とあるにはそむけり。

一囊軒貞室獨吟百員

秋日從二女院ノ御所樣ニ探幽齋に勅ましまして、曙の山水を圖させおはしまし侍しを、下官拜領し奉り、かたじけなさの余り、此發句をまうけ、百員いさゝかの思を伸るならし。

曙の叡慮かしこし秋の山　貞室

のぼる御亭の露の玉はし

霧はれる軒端の風鈴音はして

類柑子には春の山とありて、こと書も少異也。

一俊成・定家・家隆の卿などゝ、多くは音ンに呼ぶ也。高位をたふとむならば、御堂ノ道長公・一條ノ兼良公などをこそいふべけれ。又、和哥の德によらば、柿本ノ朝臣人麿・山部ノ宿禰赤人を音ンによぶべきにさはなし。もしや。亞相黄門などいふ後の酒落より起りしか。そもそも故あることなるべし。

一大閤とは御息に關白をもち申されたる時申也。御出家あれば禪閤と申なりと有。東鑑に淸盛入道をさして平相國禪閤と見えたり。頼家卿をも左金吾禪閤とあり。

是にてもよきや尋べし。

一小野小町の遍昭とよみかはせる哥は、むづきに淸水にまうでし時とも見え、後撰には、いそのかみ寺にまうでゝと、こと書あり。いづれにや。後撰の異本には、遍昭を素性とあり。いとゞ不審也。古きことさへかゝる品あれば、まして近くうきたる事などは、さだめがたき歟。

一近衛院仁平三年四月、鵺といへる怪鳥の内裏のうへを鳴わたる。兵庫頭頼政、勅をうけたまはつて是を射落すと云々。此文段にては常の鵺鳥と見ゆ。又十訓抄に、高倉院、御殿の上に鵺のなきけるをあしき事也とて、頼政に射させらる。畏て宣旨を承て心中におもひけるは、晝だにもちいさき鳥なれば得がたきを、さ月の空、闇ふかく雨さへふりていふばかりなしと云々。是亦異形の沙汰はなし。怪鳥の二字によつて後人附會せるものか。諸書に近衛院の御宇にあり。十訓には高倉院と見えたり。尋べし。頼政卿の鵺を射とめられしこと、兩度といへる書あれども正史には見あたらず。

一寛文の頃、はいかい非季詞のうち、
かげろふ　とんぼう　花火　花蝉　天川　雛遊
の類より　梨　椿　菜たね
員數の數〱まで、星霜うつりて誹諧の流行にしたが
つては、一句の姿にてそのおの〱の季となること、
當風誹諧に用るごとく也。汐のひるなどつねの雜なれ
ども、汐干と名目に押出しては、春になる例にてよろ
しかるべしや。
鰈味噌の手心もあり潮干狩　汝章
枕より足より蛸の汐干かな　米仲
人もけふ沖の鷗やしほひ潟　常樹
さゝ濁す鰈にくるふ塩干哉　中和
足首に清水流るゝ潮干かな　春來
舟よともあづまからげの潮干哉　其風
乙姫のすふて見せたる潮干哉　米仲
切芝の舟にころがるゝこてふ哉　碑明
田にし抱て蛙や歌の楽じくせ　湖十
白魚は闇をしらざるすがた哉　五紘
しら魚は海を絞りし泪かな　米仲
白魚の火は炭となる鵜かな　吉門
白うをに花火見せねぞ本意なけれ　再賀
白魚の網に是非なき鱸哉　米仲
山吹や水さへ色に井出の里　湖海
蛙飛ぶきのふの雨のおかち町　西山氏 魚川
傘へ遠くて近きかはづかな　臺籥
聲〱や小田の蛙も隣同士　友以
釣針をのまぬ蛙の夕かな　米寄
葛飾の橋の下ゆく胡蝶哉　飛鯨
江の嶋にむれつゝ人やさくら貝　機夕
一網に白きはさくらうぐる哉　米帆
芹やこゝに育ッも風の綵　子間
雲ぬれて温泉を吐く川や皐雨　春來
さみだれや浪さへぬれて音もなし　米仲
康秀も三河擽やかきつばた　葵足
明星に鵜舟は暮て戻けり　米鳳
とし頃中わろきめをさの、一子な

まうけたる所、今は鵜などつかふ
とほのきゝし折から、かせぎの鮎
などもちて、余がもとへ來りける
に

水と火の中に育チて鵜飼哉　默齋
うか〳〵と見れば涼しき鵜舟哉　許道
我影も流るゝまでと清水哉　牛香
蓮の花に酒のまぬ菴主獨哉　西山 魚川
涼しさや松がね洗ふ浪のいろ　十曉
形代やとても腐らば須磨赤石　永機
蚤はらへつごもり過る川邊哉　米仲
秋來ぬと舟こしらへる柳かな　春堂
川中や花火に見する秋のそら　海如
うら枯の芦間の蟹や片鋏　米仲

村居重陽

筏士よ鍋ことゝはむ菊の水　春來
湖のうごかぬ水に穐の暮　買明

羅漢寺の日沒に舟中はくれぬ。

なく鴈や三ッ目四ッ目の水の闇　米仲
菊水やむさし玉川鮎屑　再賀
水鳥の夜すがら岸を氷らせず　永芳
鷺や通し紅葉の水の色　牛春
川むかひ氷へ下りて雷詫哉　旨原
水ひとへへぐや氷の朝な〳〵　米山
火を焚て野渡に人待時雨哉　清泉
淺し川岸と川とをむら時雨　慶子
松風とめきれぬ夜の千鳥かな　乗也
あたゝかな御衣給はる歟さよ鵆　春來
榾焚て妻や待らむ筏乗　平砂
踈るゝ水の怒やはつ氷　祇亟
あぢむらの雌鳥雄鳥や水の道　米字
水鳥は水に繪を書くすみか哉　菊丸
千鳥かな片耳ひやす拜枕　四川
水鳥にまだ目のさめぬ薄氷　青霞
水鳥に芦まばら也みやせ川　素鎌
みづ鳥や何をうしろに山から　碑明
滿て行潮に逆る身生海鼠哉　和貫

降らぬ間を驚はつもりて寒哉　呑江
鴨つかぬ岸歟ゆふべのうす氷　米窓
松へ逃て又浪を追ふ千鳥哉　萍社
草枯や馬場にも似たる野路の川　芻狗
あはぢ嶋かよふ千鳥の羽骨かな　海如
芦陰の湯舟にもろきみぞれ哉　百義
瀬枕や網代の床の膝の下　中和
巨燵して遠く聞夜の千鳥哉　紀裳
木がらしや水は劒の星の影　春來

一集俳傳云、ひとりの道士あり。甕（モタヘ）に酒を滿しめ、敎ていへるは、能く是を飮（ノマ）ばすみやかに仙去すべしと。時に麥をうつ者多く有り。全家擧（コゾツ）て是をのむ。一時に輕く擧（アガツ）て、空裡に麥をうつ聲をきくのみとヽ。空中のむぎつき唄（ウ）何の益かあらん。笑ッべし。

# 鞦隨筆（二）

權道米仲著

一花見車は作者をしるさねども輙士なるべし。團水と申あしけるか、鳴弦といふ書に、はいかい好の癖として、增長慢にうつりやすく、人よりも上ミにたゝん事をおもふと、ことごとく花見車を難じたり。其角ともよからざりける歟。左の文の趣也。

一誹諧に御入學候よし。いか樣御としよられては重疊の御事ニて候。先年むだ書いたし進候ものをすてずに御もてなし、殊に人にも御送候などゝの御心入かたじけなく、乍去その時分より酒がさがり候て人がら少仕あげ申候ゆへ、今程はもつたいつけ候て、めたに物かき不レ申候まゝ隨分御たしなみ可レ被レ下候。尤誹諧一通の御用は何事にても御申こし御遠慮なされまじく候。御馴染と申何にてもつゝみかくすべき事に不レ存候。我等口から自慢いなものにて候へども、ひいきの貴樣などがあてずいりやうに御心得被レ成候

も、又よくはいかいの心を知て、ひいきいたすものも以テは同じことニてゆ。近年は京大坂おびたゞしくてんじや出來ゆて、てんをかけて人をだまし申ゆまゝ、よの事とほりものゝ代には、誹諧にてだまし可レ申ゆ。よく〳〵御心得御ゆだん被レ成まじくゆ。われら江戸に居申ゆても、國〳〵にてばけるやつらをよく存ゆまゝ、筆ぶせうながらも文ニて隨分可ニ申通一ゆ。轍士事どこへかふき飛され申ゆよし承ゆ。山〳〵に御ざゆへ共、飛脚急ゆのよし申ゆゆへ早ゝ。猶ゝ重而委可ニ申承一ゆ。以上

七月五日夕　　　　寶井其角

一鰹は江戸風の魚なり。既に六𥁕先師も、時雨ゝそらの初鰹と關西のさたをば申されける。ある書に、延喜式に鰹は供御に用るもの也。兼好ら古き書は見ざるにやといへり。万葉集に赤人、藤井の浦に鰹釣り、又浦嶋見の堅魚釣り、その余人の名などにもあれば、さすがの兼好、是をしらぬにも有べからず。不審也。賦役令、堅魚三十五斤、鰒十八斤、烏賊三十斤などあるをかうがへて、鰹の供御照らしたづぬべき歟。鰹を干しかためたる、松の節に似たれば、松魚と書くは朝鮮名也。漢名には黑鰻魚と書て宜かるべしやと、ある名醫の考也。堅魚と書くは、まさしくかた魚にて、鰹字宜く借りたるや。鰹のふし・煮鰹・うち鰒・串貝の類、みなむかしより調味に用ひたるなるべし。庖丁が牛を解くと、百里が初鰹をたくみたるあたらしさは、後の勢ひならん。

初　鰹　朝　鮮　人　を　銜　て　ゆ　く　　春　来
手ごゝろは千人切やはつ鰹　　雪　浣
水　淺　し　新　場　に　咲　る　初　が　つ　を　　曉　翁
伊　勢　原　や　山　か　ら　活　て　初　鰹　　米　舟
一　聲　は　裏　町　チ　遠　し　初　鰹　　米　車

荀子がいはゆる氷は水より寒く、
その藍は

水をいでゝ藍より青し初鰹　　米　璘
水を銜てかへすものかは初堅魚　　米　仲
是は鎌倉行の前なり。
けふに成て李白なつかし初鰹　　菊　丸
見てのみやあの一艘ははつがつを　　米　平

物數寄は綿にこそあれ初松魚　蓮城

初がつを羽織につゝむ勢ひかな　東鶴

忠々最も中將重衡東國下向の時、清原ノ滋藤きよみが關にて、杜荀鶴が詩をおもひよせて詠じける、漁舟の火のかげ寒きにはあらで、その岡崎の山をゆくは

松明で越べき山やはつがつを　米字

一日に二度ある時も鰹かな　再賀

鰹見て又見まくほし松が岡　菊院

夕月のこゝろ待哉堅魚哉　米山

今朝見せぬ富士もつれなく鰹賣　米仲

更て行短夜遲しかつを舟　秀曉

鰹喰ひ荒夷なとのたまひそ　諫子

いろはなる鰹のはじめ江戸の海　萬四

鎌倉に烏帽子すたりて鰹賣　田社

吾妻にて梅花とはかつをかな　米徳

あいた口へ餅といふ名の鰹かな　米運

涼しさや鰹のつらへ大檜扇　万年

鰹着て入江の町や人の波　扇裡

因に云、鰒を訓てあはびとす。淡干なるべし。是鮑は乾魚の類にて、貝などをもあはびといひ、熨斗をうちあはびといふか。なにゝても魚類のほしたるは淡干ならんと也。既に石決明を呼て生貝といふ名あるにて考べきと。先言か聞けり。生鮑などもいはゞあはび歟。

一榊は神樹にかたどり、鱈は雪國に習び。鰯はよわしの訓にもとづく。ともに和製の文字か。扠といふ字も、はじめは眞名書にて叉手と書たるを、五山の洒落などにて一字につゞめて扠なるべしと、あるかた仰られし。さもこそ。

一西行法師の哥は、多く涙などを詠れて、あはれなるさまのみ聞えけるに、任大臣のことにて公衡中將のもとへ弟子をつかはし、文を持て山は里のうちに、西行は世をのがれ身を捨たれども、心は猶むかしにかはらず、だて／＼しかりけると也。おもへば弱々としたる人にはあらざりけるか。鎌倉にても右大將家に謁見の折か

ら、詠歌は僅に卅一字をなすばかり也とて、弓馬のことを具に申ゆ叓、東鑑に委し。

一同書云、太輔坊源性は無雙の算術者也。奥州より下向し頼家卿の御前にまいる。御物がたらひの折から、源性申て云、松嶋に獨の住侶あり。其僧のいはく、吾は天下第一の算師也。隠形の算といふとも龍猛菩薩の術におとらんやとて、算を源性が座の廻りにおく。時に雲霧の掩ふごとくして四方はなはだ闇く、方丈のうちたちまち大海に變ず。着する所の圓座磐石となり、松風頻に吹き、波浪[illegible]に、心惘然として存亡を辨へがたし。かの僧いはく、自讃已に後悔ありや。源性後悔のよしを答ふ。しからば永く算術の慢心を停止すべしと。源性諾するに及て蒙霧漸く散じ、白日すでに明也。欽仰の余り傳授の望をなすといへども、末世の機根におゐてはさづけがたきよし、是をゆるさずと云々。頼家卿御前に、その僧を伴ひまいらざること甚遺恨也云々。まことに眼前ならざることは信じがたし。[illegible]幻術の説にかうやうの類すくなからず。越度の二字にいたつては、さすがの源性赤面たるべし。

一琴ときくより三絃といふ者は出來たり。琉球の國里子等がてまさぐる樂器と[illegible]まで、女童の遊[illegible]のためと書つたへたれば、いづくも同じ淫聲ならむ。五雑俎にも三絃は[illegible]の習ふところのみ。[illegible]んで度を過キ艶にして實なしと見えたる。さはいひながら咲きも残さぬ花のもとに鼓をたづさへる輩、むら雨ふりぬ、あなにくと羽織うちきせて、あるきまどへるさまおかし。秋かぜはらふ月の前には、かぶき子共のきのふの酒にいためる枕ともなるぞかし。近くは閨の外、遠くは旅のうち、うきにういたるこゝろだま、置どころさへさだかならず。[illegible]は情を[illegible]る者と[illegible]春秋にもいへり。

三味線をかつぎかた[illegible] 米仲

[illegible]むしに[illegible] 老瓦

[illegible]の小便[illegible] 米徳

むし賣の寐心もさぞ草の原 [illegible]業

[illegible] 四川

松虫や露ひと口に聲の色　米平
蜩をかねに戻るや爪木樵　時雞
獨してやたけ心や轡むし　再機
秋風に買のこされし螢かな　木董
きり〴〵す足より籠の折れやすき　菊陸
夕かげの藥師まふでや虫づくし　與一
松むしや何指南する竹格子　米旭
草の葉の色にそだつやきり〴〵す　都十
鈴虫や耳に凉しき籠枕　米郁

春ノ鶯(トリ)之囀二花中一秋ノ蟬(ムシ)之吟二樹上一、
汝もむしの一字にかうぶりながら、
黑茶碗のりむさもきこえねば

鈴むしのすんともいはず墓　米仲

一山川行

梶が茶も薪に花の時分かな　さ雪
中がいひしにさたりて

今も名を鳥居のお百合郭公　六猊

南に續く如意嶽、わしの御山の雲や
霞さヽ、あらしさゝもにうせにけり。



ほとゝぎす兇界のシテの目さし哉　米仲
うなる間の鐘飛越て霍公鳥　米山
山伏をあはれとおもへ郭公　百花
かれといひ是といぶかし時鳥　秀億
よし原の眠れる頃やほとゝぎす　鯉風
茶斗歎うかさるゝものゝ子規　小嶋勾當 露英
見送りの鐘はものかは時鳥　章雅
明星や山は淺黄にほとゝぎす　田旦
君がすむ翠簾を照る日や杜鵑　米謡
馬士唄の嘐黑しほとゝぎす　飛鯨
五文字を敎へて通るほとゝぎす　青霞
戀の道哉とはつらし蜀魂　嶋海 和菊
吐出してあかき月夜の時鳥　米仲
唯啼て往であらふかほとゝぎす　遊翁
雨をり〲妓有をなぶるか郭公　雙鯉
噓はその一聲かほとゝぎす　吐月
同勢へ初時鳥行足らず　義莚

あさいの枕を驚かす奴の使あり。

文箱やしかればあくる霍公鳥　米仲
むすぶ夢室でほどくや時鳥　巨龍
津の町は二日にたらぬ郭公　曾嵐
ほとゝぎす啼くや添寐の蚓のうち　佐原　百道
賤やしづまだ子(ネ)に臥さず時鳥　關宿　阿誰
蜀魄あふぎのはしの筆あたり　巴流

一むかしの兵百員(ツハモノ)といふもの有。山水獨吟にて、判は西山宗因也。其頃の風流なるべし。紙やぶれ、むしはみなどしければ書寫のちがひもあらめ。見ゆるし給へかし。

兵俳諧、鎗句(ヤリク)をひつさげ、鐵炮のうち越し、本歌のかすり手、竹手把(タケタバ)の付合、城の堀句に、はまり句旗のさし合をもかへり見ず。虎口に吟ずる時の聲、都合其數一百員、着到に付立て、古今風流第一番のやり梅の翁の實檢にそなへて、一句の働、善惡の批判なうかゞふ物ならし。

ト聞ぬく八幡太郎ほとゝぎす　山水
百員の卷頭、源家の棟梁たれかあらう

ト貞任うでをまくる五月雨
十二年の謀、つゐに雨聲となる
\水越るその田村丸かきまぜて
取し餘よ鈴木ものかは
\夜食とて更行かね平出されたり
\一鏡はれ飛樋口かる口
ト四斗入の上杉にほふ初あらし
はこぶ金子に露ぞ亂るゝ
\持(ウ)あまる兼房その時中やう
\渡邉にての樂を得しらぬ
世話をやくますほの薄千種殿
入鹿の聲を聞たかく
どうけ者小山の月に捧ついて
\かゝへて笑ふ原田ノ次郎
ト藥鑵ほどはれたるきん。(原註)むしばみあり。
みとせは爰に寸白板垣
\新枕一條揩木からしあへ

〽百首のうたにいさむ宗盛
〽小倉山安開十願にとらせばや
〽麓の原に保野を添て　柴薪ら山しくて
〽いかいこと木村の源五茂林
切賣にする狼之助
〽夕まぐれたゞ冬の季は物すごし
〽ひよつと出たる三角入道　見こし入道にこそ
〽もと陶も親も子もなし法の花　誠にすえもなくなりゆ
燒がねあてゝる。(頭註)むしはふてとめず
心中の霞まぬ所お蘭丸
〽戀路にまよふ孤夫坊
〽文使三浦助がいでたちて　狩装束にて出たるか
〽曾我の十さまうらみ百六ッ　百六言葉の外にゆ
〽判官ぐはん二聲鐘をつきのこし　よくかぞへられゆ

〽共曉をしはい武藏め　判官の舘略はからひゆへ
出世前髪勒き胄、はなされて
扨はさとりに和泉酔や入
一枝の花を刺身のかい敷地
燒鳥山にもとは嘩る
〽朝鷹のその足利にへをつけて
夜もろくに寐ずふら〳〵山良〳〵
〽月更てかうべや先に信夫らむ
〽大淫亂な頼朝の秋
還露に千手重衡ぬれさせて
泪くらべん瀧口が袖
〽時鳥清水の冠者そゝのかし
淺野小太郎逃るむら雨
夕嵐松の根の井やさはぐ覽
[illegible]漬さして津浪うつ星[illegible]
〽相場聞よせては歸る塩俵
〽共お篤寄り寄賦左衛門　當世に相叶ゆ

（原註）寫本誤テ句ヲ脱ス句體ノ員相違本ノマヽ

黑墨五十七句　長廿五

七十五歳　梅翁判

一八幡殿奥州合戰の時、味方軍兵の中に三浦平太夫爲道といふ者、靫の矢こと〴〵く射つくして、箙の矢のあとへ梅の枝を折てさしたり。是より花うつぼを家の紋とする也。梶原が箙の花は、後の風情なるべし。

紅梅や由舍の水を一二升　鳴海 鍋盛

是ありと繪の蠟燭や闇の梅　米仲

むめ咲や隱者に酒の絕ぬ頃　鯉風

一二輪飛子を連て宇梅見哉　柳尾

霞の時をあまぎる色やうめの花　潭鳥

何に万里花かあらぬか梅華　米謠

風鳥にそゝなかさるゝ柳かな　我梁

わらはべの結んでにげる柳哉　紅丸

五斗に折る苦患（クゲン）もなくて柳哉　遊翁

青柳や女ごゝろをねぢり切　米山

いろ〳〵に姿のよれる柳かな　米策

ゆるき日を柳の枝のうき世かな　山子

人しらぬ風をやなぎの姿かな　青霞

時の色早く染たる柳かな　尾州鳴海 鉄叟

宇治なりける松尾何某、予が草菴に來りて對話しける序、茶の銘の白きはいかにとたづねしに、松尾がいふ、靑きは極て白きもの也。白馬をあを馬とよみ侍ると申き。都近き人なればかゝることもいひ出けるにや。松の葉のいろかはらぬさ詠しもしりてんをのこ、心にくしなど、物かたらひて

青柳やきのふと明けて白むかし　由林

大汐を背ぬ斗の柳かな　水路

いたいけに年ふたつとる若な哉　栖鶴

とし玉に若菜くばるや黑木賣　開宿 浙江

駕下りて供をのこして若菜哉　米宇

道問へば苦い顏なり野老堀　輕羅

山濁活や苦み一ふし土の味　米璘

伊勢武者のうしろ見せたる椿哉　百菴

稲妻のつまに落たる椿かな　鳴海 和菊

秋冬のあいだ腫氣をわづらふ事久し。藥力針治の功によりて、漸快復におもむきぬ。是を川〱の滿水に思ひよせて

春や千代水にいたまぬ礒馴松　凡鳥

めばり柳に履新の色　春來

享保・元文の頃いつゐとし歟。

あちらから折る手見せたる蕨哉　米璘

菜の花やたゞ捨置し垣の外　佐原 百道

大根の花や淺黄のおぼつかな　清泉

龜戸村

御膳とは覺束なめし野大根　米仲

なにともな男の口につく〲し　文幸

芦の芽や矢數こぼれしあたりより　再賀

山吹や文字あらためて何かせむ　米二

山吹や二枚屛風の下流れ　桑也

子をつれて牛のあゆみや菫原　我又

若草や野山に寒き所なし　米礎

洗濯の川ぞひゆくや山ざくら　菊隣

雲の中にあそぶ仙あり櫻山　府月

旭出て雲を隈るさくら哉　東爲

家〱の毛氈出しゝ櫻狩　再機

むかし繪の熊谷笠や櫻狩　吉田 魚川

有漏無漏の繪の具にひらくつゝじ哉　米齋

わすれてはしの字なるべしふぢの花　露牙

藤棚や柱もそよぐ物ならば　蝦水

郡山に夏をむかへて

喰はず聞かず目には素堂が若葉哉　米德

やり水の淺黄にはしる若葉哉　青門

しらぬ樹の名乘出たるわかば哉　我又

闇なれて牛もかよふや若ば陰　呑江

四阿に蓋をして來る若葉哉　蝦水

開元の錢は惜しむや牡丹好　半砂

千金を一りんづゝの牡丹かな　五紘

獅子舞のすこしとゞまる牡丹哉　三字

轟くや門の車の牡丹まで　山林

佗たりなほたむ長者の庭がまへ　與一
陰若き楓や茶屋の片柱　中和
つのもじや芋の二葉にかたつぶり　秀億
卯花の垣根は雪の夜の道　千里
梅賣や一把の紫蘇のあいしらひ　玉蛾
心ほど盛りこぼしたり小梅賣　文幸
河骨や首筋ふとき姫御前　芻狗
をもだかや心ひとつを鉢の水　米璘
芍藥や椽に地黃は干ながら　嘉延
晝眠る生麥村のむぎの風　米旭
折れし葉も風情となるや杜若　柳尾
紫陽花は泡より輕し掌　米丈
駿河路やさしもはつかの初茄子　桑也
大名も香をなつかしみ初なすび　都十
あぢさゐの仕着せそろふや單物　友以
しらぬ火のもえたつ斗はかた百合　圓大
鬼百合の其丈五尺ばかり也　社鼠
澄むかたへ植てゆく田の濁哉　龜成
恐しくすべりし跡や苔の花　時雉
藻の花や天水桶になにを種　如鷹

　　奥澤禪林にあそぶ。

牛嶋の牛見つけたり木下闇　由林

　　甘香隔壁聞

花は筒にくらはせたいな眞桑瓜　萬立
白露や夏はいきれる草ながら　扇裏
露ばかり醫て育やをみなへし　五紘
女郎花薄の手にて撫もせむ　米字

　　聖海上人のかいもちひは

いざ給へ目黑の臼の姫押(ヲミナヘシ)　米礎

　　瘕なるもの久しく病にふして、死
　　になんくするころ

　　　所爲　つゝからぬはだの習なれに也。

露けくて心よき日やをみなへし　春來
割兒やさだめぬ垣の裏表　曉翁
あさがほや江戸紫の花の泡　米山
朝顏やあふ坂までの旅送り　機夕

蕣やこがねの山のつると蔓　三字

攝待

萩すゝき同じ茶碗や攝取不捨　存義
満る時落て見するや草の露　龜成
風の芭蕉ふみしだきたる椅かな　米二
薄よりやさしき聲はむかし哉　女吟糸
玉川へ身ぶるひしたる一葉哉　吐月
造物の嘘やすらん稲のとし　翁狗
梧桐葉落て獨樂山子の手がら哉　由林
稲苅の手拭とれば坊主かな　再賀
可愛さや誰が芋の子の洗たて　米齋
苔より咄せば長しきくの花　山雅
菊を得て茄子まれなる畠かな　米仲
枝ついて花の盛やきくの徳　和貢
まだ見せぬ植屋が奥なる菊花　玉蛾
數の菊見てや止なむ土いぢり　米純
菊作たり白露口紅粉二三千　秀信
つくらねば作らぬふりの小菊哉　米仲
穐もやゝ佛寒ん冬瓜汁　許道
萩原や夜寒をつける風の音　輕羅
御角力や陸奥も出羽の花紅葉　清泉
新嘗や給仕のにくき小笠原　沅水
谷陰に下部は青しもみぢ狩　百義
雁がねに下染させて紅葉かな　默齋
鹿鳴草朝酒すゝむ山居かな　載二

醉鹿紅葉外　牛呑

ひと樹ふた樹紅葉也けり野のとまり　青洲
鶯にかはるや目白梅もどき　中和
大根よ土のあまみをわするゝな　米璘
落葉して社は淺く成にけり　曉翁
二股に心ありて大根引　時雞
おとなしや我をさし出ぬ歸花　吐月
大寺のうら道せばき落葉かな　十曉
水仙と腰元とのゝ別離哉　米丈
雨去つて首に吹こす落葉かな　如鷹
水仙にかゝりし[illegible]や[illegible]のすみ　鄰十

凧や實さへ花さへ干葉さへ　子閭
水仙の花にもてなす折れ葉哉　我又
茶の花に荒くも宇治の流かな　米幸
ひとつ家の月夜に似たり枯野原　潭鳥
木がらしに障子あかるき梢かな　米車

有感

唐鳥の囀る日かな寒牡丹　梅郊
北山をうしろにしての梅や冬　米黛

一ほろ〳〵と土のこぼれる、むらさき色の短策となげきしは、元祿のむかしも同じ。近き頃はことさらにて、あらぬ模樣書し手もとの紙など、たち合せて濟す事になりぬ。地紋にかゝりて一句さへさだかによめず。晋子が、赤い色紙をうらみかな　思惟すべし。

一すべて物の起本にさせることなきも、潤飾につれて牽合附會し、故實となるもの多し。たとへば如意はいにしへの爪杖にて、骨角竹木をもて人の手の指爪をつくり、柄は三尺ばかりにして、もしは背に痒あつて手の到らざる所を、是にて搔抓す。人の意のごとしといへるにて變は濟たり。今いふまごの手の類也。しかるを譯經の論にいたつては、如意の制は心の表也。爪杖に局ば文珠のごとき、豈これを取らんや。私に節文を記し、忽忘に備ふこと俗宦の笏にひとしといへるは、後生のことをむづかしくなしたる物ならん歟。又昭明太子の木犀如意は、かならず爪杖にて、菩薩の執給ふ雲ー葉心ゝ字の如意とは異也ともいへり。

一むかしより大磯の化地藏といふて、旅ゆく人の目近く、路のかたはらに雨・つゆしのぶ笠もめさなくいませしが、今は堂など嚴になり、榜して身代地藏と申也。いか成人の危難をすくひ給ひけむ。身がはりとも、へんぐゑとも共土人さへしらず。

一春豪上人、いちしの浦にて蛤を買とり、海にたすけ入られて、由ゝしき功德つくりぬと思ひて、ふし給へる夜の夢に蛤多く集りて、うれへていふやう、われ畜生の身を請て出離の期をしらず。たま〳〵得脫すべかりつるを、上人よしなきあはれみをなし給ひて、ふたゝび重苦の身となりぬるとて悲しみけると也。出離を知る

におゐては、上人より蛤のかたはるかまされり。もて異端といふべからず。韓相が碧玉の牡丹・八岐の大蛇が槽・釋氏の血の池にをよぶまで、作意の至れる也。建久の頃熊谷ノ直實は、久下直光と爭論によつて遁世しける東鑑の趣は、興なしとやおもひけむ。敦盛の美少年を討て世をば捨しと、いさゝか若道のなさけをこめたるはたらき、尤面白し。

一寛正年中、將軍義政公春日御社參の時、御能十三番被レ行。觀世・寶性(生)・金剛・竹田是をつとむ。出雲十柄・二見浦・浦嶋・鶴次郎・星宮など、今きけばめづらしき番組也。

一火雨は大雨の書違ともいへり。日本紀 大雨 久しき雨歟。大火の二字、かたち似たる所有り。ひさめの訓も火に通る也。氷雨をひさめといふは各別也。

去年へは遠き枕やはるの雨　連城
春雨にとまり定めむ哥かるた　章雅
春雨や晝のうちにも夜の聲　其道
革足袋にかげろふたつや春の雨　默齋
春雨の堀出しものや蝶ひとつ　紀裳
連翹の胡蝶にひらく小雨かな　米車
五月雨や雲の淺黄は松檜原　其道
さみだれや竹の子供の亂髪　甘棠
山ぐちにつもる煙やさつき雨　米仲
さみだれて今朝はなかりし草の菴　米轍
綿入もかごと斗やさつき雨　蘭風
五月雨に雪のすがたや今年竹　硨明
雨止んでやつぱりもとの暑哉　輕羅
霧さめやまだ皃出さぬ高瀬舟　楚纓
秋の雨尺八を聞く夜なるべし　米杜
穐の雲又吹よせて時雨哉　扇裏
松は世に贔屓の多きしぐれ哉　嘉廷
初しぐれ昨夜は小豆斗る音　春堂
馬の萎西日さながら村しぐれ　米德
草菴に人音もありはつ時雨　三宇
はね釣瓶みづからくむやさよ時雨　米宇

しみ〴〵と雫を脊中の雨夜哉　米璘
よい人の是が心かむらしぐれ　一瓢
燈臺になくや霜夜の油虫　常樹
啄る鳥にも折れず霜ばしら　龍眠

一山水・人物・鳥獸・草木の類、筆勢に畫意をあらはし、家々の名工・上手すくなからず。近來は生うつしといふ事はやりて、其物〳〵を一毛もたがへじとのみにて畫勢にかゝはらず。是死物ならずや。その生うつしといふを見んよりは、生なるものを有りのまゝに見むにはしかじ。姿は借りて別に活法あるこそ、繪の賞翫として珍重すべき事なれ。稀なる唐鳥・薬草の類、又は山川屈曲の地理など、自由に得がたきを正しく寫し得たるより、段々つたへてかくあるにや。譬喩品

一雄略紀に、吉備ノ上道ノ臣田狹が稚媛を稱たる詞に、鉛粉弗御蘭澤無加とあれば、日本にて白粉を用たること久し。製の始はそのゝち貳百余年を過て、持統紀の沙門觀成と見えたり。

一　春來愛醉夫戯語

治兵衛といふ庭つくりや、かたち痩枯て顔色老たり。勝間田の池に鬚なきは、若年なりける年齢六十余り、もとより妻もなく子もなし。富貴をしらず、飢にもおよばず。たゞあしたゆふべ、夜もひるも、まなく時なく酒の奴となりて、片時も臭からぬ事なし。一日の業事、あるひは石にたち、樹によい、花草を友とし、山水を我物にして、土を鋤き水をそゝぐ。かの念きざす時は、たちまち鍬を擲ち箒を捨て、例のいせ屋へはしる。誠に詩を賦さばたれ、哥を詠ぜばたれとかいはむ。和漢一般の大馬鹿ものなるべしと一句をふるつて

涼しさよ寐ても起ても丸裸　春來

一春來師、ちかき頃はことさらに病まさり、老くづをれて、久しきことも有まじきかと、たのみすくなく思ふ也。貞心尼も老病、心よき日まれ也。我姉老ぬ。我妻

老ぬ。われも亦老ぬ。ひとつころびたらましかば、将棊だふしのやうになるべきかとおもはるゝ也。

一千本釋迦念佛のことは、つれ〴〵草に、文永の頃如輪上人はじめられけるとあるを、一書に寛仁年中定覺上人、音亂名號(オンランミヤウガウ)大念佛の始祖たり。一旦破滅のゝち二百余年を過て、如輪上人ふたゝび執行せらるゝと見えたり。どちらにても當時俳諧の沙汰にはすむこと也。ふとおもひよりてかくいふ。いらざる叓なり。

一山門(サンモン)は叡山をいふ。よのつねの寺院にあるは三門(サン)と書く歟。釋氏要覽云、寺院に只一門あり。呼で三門とするは何ぞや。佛地論に云、三解脱門(ゲダツモンノ)爲ニ所ー入ノ處ート見えたり。空門・無相門・無作門、三ッの意なり。

涅槃會に

ねそべるや其きさらぎの餅の蝶　春来

臥龍梅によつて

寐ればとて釋迦うらやむな梅花　永芳

年禮に男のわせる彼岸かな　永機

畫賛

柳に鞠西行しばしとまりつれ　米仲

灌佛や法の花香のこゝかしこ　朱明

灌佛や八もゆあみのよき時分　礫島

手ゝに汲む釋迦にあべ茶の浮世哉　米仲

鎌倉紀行　長谷にて

笄や此御(ミ)佛のその長さ　米舟

茶坊主もとゐこかしの松もどき　米仲

夏雲多奇峰

雲のみね五百羅漢のあたま哉　青徳

取あへぬ鰹なますや生身魂　米峯

ながらへて浮世を牛の茄子かな　祇疏

長生(キ)のくり言聞やたま祭　永機

辨慶が借狀といふに、馬一疋・紬一端、あるひは沙金・粳米の類

辨慶が馬もかりの世魂まつり　米仲

秋来ぬと目に見えにけり貝福寺　鎮中

春はさめ夏ゆふだちに秋日でりよの中よくて我乞食せむ

わすれめや二百十日の鉢ひらき　旨原
兒に照る葷酒門内のもみぢかな　正川
虛無僧の足跡寒き野菊かな　草雅
古寺といよ〳〵見せて落葉哉　五紘
達磨會やから松ふくむ鳥の聲　春來
達磨忌やその圓相の餅くらひ　子英
達磨忌やよしあしの葉は枯るゝとも　溪梁
世の中をじつと達磨の寒かな　閑宿 浙江
頭巾から角ノを折こむ十夜哉　鳴海 和菊
むら時雨經書堂を舍かな　存義
墨染やせめて紙子の下紅葉　田社
所思　こと書あり略
榾の火や最明寺殿ましまさず　米仲
瓢より輕き身もちや鉢たゝき　米山
鶯のあるかぬ里や鉢たゝき　森羅
けふは人の留守をして居鉢扣　花礫
木魚にも寒のかはりや耳の底　遊翁
身は佗る鯨の墓や寒念佛　由林
山彥はつぎくたびれて寒念佛　共道
毛衣や厚き頭巾のかんねぶつ　菊院
土佐ぶしのむかし男や寒念佛　永機
寒念佛極樂ちかき夜明哉　沉水
今出る聲の名殘や寒念佛　うすい
ゆきあふはむかしの友か寒念佛　來青
ひともじの鍋あたゝかや寒念佛　米礎
煤の日は平仲兒や若旦那　岩附 米及
馬の脊に鰤の寐て行師走哉　青德

一　狂語

如夢幻泡影如露亦如電　その中に物あり。あたまは藥罐にひとしく、鬢は猫の毛に似たり。まな尻あくまでたれ、頤おもふまゝにからびたるが、玄冬素雪の寒きにも赤裸にていできたるは、こともおろかや、無佛世界の腹ふくれ餓鬼坊と名乘る弱武者也。父もなく母もなく、箸もなく汁もなく、てゝの椀の山盛りをつかみくらはんず目さしの膝をかまへてむかふ時、一飯變じて炎々と燃上れり。是娑婆にて海道湯漬をもてなしたる

人の行衞か。不便にもおかしけれ。つく〴〵汝が用をおもへば、のろまのかしらはしばらくさしおき、甲斐なくたゝんたまくらや、楓のやうなる爪はづれは美人によそへて耻しからず。ちからなきそのあし田鶴にあゆみゆくも、千とせをや經ぬらんと賴母し。あなかしこ。むさぶるこゝろざしをとゞめて、錢金とおもはぬ氣より、わきいづる大腹中をたゝいてたのしむべし。

すき物に女餓鬼はらむな蓮の飯　米仲

一よにしれがたき類も知ることと有にや。癸酉ノ日は吉祥天女誕生の日也。素盞烏尊出雲にて八咫大蛇を退治し給ふも同日也と、金烏玉兎集に見えたり。しかし其書の眞僞はしらず。いかんとなれば、述者をしるして安部ノ清明朝臣入唐傳と有り。安倍ノ晴明ならずや。

天津風乙女のふりや鳳巾　沅水

一腰の殿は小坊主いかのほり　玉蛾

先一重汲山口のかすみかな　鳴海 蝶羅

かげろふやきのふは降りし岡の松　六器

水飴もぬるみて町の日ざし哉　米旭

寐てぞ見る御藏の松の朧かげ　吳雪

日本の晝は阿蘭陀の夜といふが、ある夜松亭にあそびて美人の壯觀、よるながらひるのごとし。

紅毛の夜を夜〻なり孔雀染　米洞

虹吹くや兩國橋のくれ遲き　三字

潮煮の眼には靑葉や櫻鯛　沾路

出代りの髭を直すや御家風　赤子

紺くさき下馬の日なたや初袷　四川

とりなりもまだ定らぬ袷かな　湖海

兒ほどの屛風ひろげる扇かな　普子

喰ふほどに足る歟足らずの田植哉　塵匡

嫁りして今宵ぞ凉し蝈の中　衆賀

晝いねたり兒は紗にすく團哉　來靑

ほら貝の身はどこへ飛ぶ夕すゞみ　作者不知

うち水や濡て笑の凉し聲　再賀

干あがりて川の底まで暑哉　呼童

遠く見る火も更る夜のすゞみ哉　米齋

擬寶珠や橋に座頭のゆふすゞみ　米礎
雛を水に寐てきくあつさ哉　環山
褌も男むすびのあつさかな　道院
死ぬ時の稽古して居る暑哉　買明
戸に水の跡もたちまち暑かな　梅郊
葛水やすゞしく曇る錫の色　珠來
五更とは腹にこたゆるすゞみ哉　(閑宿)浙江
勢ひのぬけぬ暑やからしかき　(女)吟糸
雪に似て鉄砂原の暑かな　棲川
帆柱に笞干す船の土用哉　海如
呼ぶ聲は水物でなし心太　臺簾
草匂ふ頃を扇の盛かな　山子
白はへの吹つくしてや雲のみね　青洲
(椅)倚子買ふて晝寐心や雲の峯　米策
初秋の狂ひかゝるや蚊屋の褶　米鳳
はつ穐やいまだ露見ぬ庭座敷　子英
鬼緑子の肩にこそしれけさの秋　(カナ川)米布
躍夜や人も穗に出て頬かぶり　萬立

うたかたの泡を輪にとる躍哉　米仲
人間の猫に似る夜を躍かな　鯉風
誰が娘たが妹ぞをどりの輪　桃里
墨染や奴の髭をかけ踊　慶子
躍〳〵鉄屋富御宵のうち　如鷹
投たりなさる御方の關角力　田旦
一手桶水を褒美や辻角力　圖大
すまふ取みな腹〳〵にまし〳〵ける　米仲
草の戸を出て都の角力かな　丹鳳
支離とはつれなき沙汰や相撲取　曲裳
南山の褰けぬ生れやすまひ取　赤子
おすまふやおとなげなくも鹿嶋立　(西)魚川
百姓のもとへ戻るや角力とり　米丈
細工には火もつかはれて花火哉　庭臺
琴の音の亭には高し花火賣　棠賀
ゆく水に稲妻さます心かな　潭鳥
さよ砧たがひに槌を枕かな　我又
衣打ひと夜〳〵や北の窓　青鼓

すまふ取泊り合せて砧かな　米儀

まごろまで詠まさてのすさび哉
あさのさ衣月にうつ筆　宮内卿

曉を兼るほど殘すきぬた哉　一瓢
霧しばし旭のうらを見せにけり　万鉻
取あぐる箸の輕さやはつ嵐　許道
鹿から落る物ありあきの風　湖十
石や切る伊豆の御山の秋の聲　養蓮
古簾の一度にきれて秋淋し　烏皮
秋の夜や二ッ三ッ夢のむすび玉　西月
終夜燈火寒しあきの聲　秀曉
油買にゆくあしもなし秋の暮　樓川
こんと揰く鐘を伽なり穐のくれ　菊丸
關守の鏘うちはらふ袴かな　連城
うら枯や酒屋一軒こけら葺　超雪
正面もなくて案山子の矢先哉　社泉
此人をどこへはかるや賣の市　米徹
初冬やそのなれ衣をころもがえ　正川

口切や心に遠き壁隣　湖十
口切や亭主娘に客若衆　玉蛾
くちきりや響に付たりの開門　超雪
十月や女は髮の日出たけれ　鳴海 鈦叟
十月の中のあしたや茶の煙　同 鷄盛
薄氷の鱠も賣り爽かう　庭壽
うたかたの網にゆくらむ夷講　秀億
日光にかゝる晴ありえびす講　御尾
日の興の心の駒やかみな月　[illegible]提未
先祖へ三ッが七ッもるのこの餅　米策
冬籠眼について行日脚哉　米風
老ぞかへる雛遊書冬ごもり　[illegible]中
口笛や膝を鼓の冬木成　米道
冬ごもり八疊敷をうき世哉　呼道
下戸ならぬ身に時あり冬籠　連城
冬ごもる宿や燈挨の様り汁　鯉風
さほ姫の下葉見する小春かな　我梁
入相やうつかりと見る冬の山　潤滌

六十の耳にたれたり置頭巾　秀億
四方山と心安さの巨燵かな　梁宜
牡丹とは是をいふらん丸火鉢　カナ川 米布
にらみ合ふ使者と障子と火鉢哉　米二
百年にさま〴〵かはる頭巾哉　米岑
わらはれに今年も出たり古火桶　水路
鐘さえて時計もしまる心哉　衆賀
四ッに折角にこゝろや置頭巾　西月
鈍汁にかくしあふたる親子哉　許道
石鉢に寒さをすくむ生海鼠かな　老瓦
ふぐ汁にけふ味ふる寒さ哉　秀曉
かくて鐘横幅廣きさぶさ哉　山林
けしからず障子明く夜の寒かな　輕羅
道問へば聰で教る寒さ哉　道院
懇懃に廣き座敷のさむさ哉　畔水
鐘の聲つもれば白し今朝の霜　鳴海 蝶羅
凩や星をもみ出す檜山　樓川
分別の坂を登つて紙子かな　百道



身もともにもみつくしての紙子哉　米儀
抱た子の杖にほつきと氷柱哉　赤子
乘替の鐙にたまる霰かな　章雨

材場といふ所に遊て

いくつやは枯野にわたす橋の霜　珠來
皃見せや三人よればふたりうそ　臺簾
髪置に乞食が重は乞食かな　米仲

一　貝銘

いで其頃は寶暦五年三月十八日、折からや、汐の干潟にうかむ瀬の貝太郎といふ物を視る。もとより我は江都のはえぬきにして、見ぬ西國のよしあしはしらず。何にもせよ、たふ〴〵と引うけたるこそ心地よけれ。眼前浙江の潮に秋を浸し、あるは卯のはなさらす玉川の玉の盞ともてはやしぬ。されば、一斗詩百篇李白が面ヽにかぶりけり　とは晋子が醉吟。それは瓢、これは又、なにはめの〳〵よろばふ老が足もとを、お松にたすけられて、捲簾の花の陰に月とともにふしぬ。

紫子春來

# 靭隨筆（三）

権道米仲著

一江都の四流に產れて、老まさるまで地を改めず。とし
ごとや元日は川ぞひゆきて、新大橋の水色を見ること、
花かはらぬこゝちして、風情いはむかたなし。過し春、

年たつやはかり替たる潮がしら　米仲

とながめけるが、いまだ山林田家の元日を見ざるは、
他の日ならねば也。

正月が來たか畠に下駄の跡　春來
元日や田面をかけて鳥の際　同

よし野ゝ山の奥深くも、德をつゝむ君子の又なき春の
旦を、かくれてや見ますらむ。是山水は懸隔の幽玄な
るべし。

初霞ひくや藏王の鼻の下　存義
三國のうちや日本のはつがすみ　米舟
富士の裾一刷毛はくやはつ霞　哥鳳
元日の雪山居に魚のあるこゝろ　雛口
淺草は上野に似たり初がすみ　与一
みるくひの売は見せじな雛の棚　平砂
雛の兒卯の売に目鼻かな　米德

四方にいまだ花を見ず。

雛の園へ花さかせ爺めされずや　老瓦
雛たてゝ親は娘を詠めけり　梁宜
よせて見る磯の小貝やひな祭　女李道
さるぼうの口を守るや雛の中　米仲
毛氈で内裏をつくる雛哉　呼童
酒濁山川白　牛呑
白酒や目さへ花さへ桃のいろ　古賀女春里
ひな祭夜の御殿のあかり哉　竹史
雛祭鼠のひきし小盞　來青
雛の幕さすがに榮花物語　慶子
藥日や鍾馗といふも草のうち　米仲
そとに來て藥降る日の乞食哉　米德
切れるほど似たりやにたりあやめ太刀　祇亟
藥玉や見ぬ大内を咄し好キ　赤子

羅の風や五日のきそはじめ　鳴海 鐵盛
さするをばお乳や教えし柏餅　潭鳥
そよ風のかほり始や軒あやめ　東鳥
兵を餅でもてなすかぶと哉　峨月
いとし子にさすられ出るかしは餅　楚纓
素人繪の先とりあへず初幟　古來
燕の宿たづねけり軒あやめ　万輕
さうぶ湯に心も清しすが莚　米帆
金太郎風にもまけぬ幟かな　カナ川 米布
竹の葉のいと〳〵しさや星むかへ　汝章
百姓の心に安し天の川　うすい
天冠のやうな星あり銀河　青徳
星合を窺て見ん物か舟の屋根　來青
梳流す内裏女郎や星むかへ　米裳

七夕のあまの川原のなみまくら
かはしも果ずあかぬこのよは　とし頼卿

七夕やまつすかぬもの岩枕　米仲
金ばかりかさぬものかは星むかひ　臺簫

山をのむ流なりけりけふの菊　鳴海 鐵盛
馬の脊山路の菊に殘りけり　米仲
聟になる人美しき師走哉　紀逸
筑摩なる鍋の數見むとしの暮　雞口

煤とりの日、書齋に入て

曾晳が杖のしなへや古疊　米徳
年くれぬ定家宗隆も明は又　百菴
幞洗ひ是や師走の哥のさま　米仲
親の川にたつ子幾人年の暮　京 太祇
世中の師走をいかに十寸鏡　女 李道
破屋も音はしてまし年のくれ　再機
行としを枯れては苔む暦かな　万輕

をちかた人に物申す、梅つはななるや。折にふれては夕皃の白きにおもひよそへたり。此夜の花は山吹の色こさに

御川とは何の花ぞも大晦日　米仲
ひとしほの松のみどりや師走舟　岷山

煤はきやにげぬ人には花もなし　普子

米仲

**獨吟百韻**

降曇るそらは小倉のみれの雪、それにもあらぬ車僧、おせど押されず、ひくもひかれぬ。

穴藏のゆかぬ車やさつき雨
　不増不減の蠅の一うち
椀の酒汝が欲に殘すらん
　旅は杖ひき足曳の山
古池や野守の櫻影見えて
　月常住に寐ぬるうぐひす
春來ても旦那巨燵を去り給はず
　茶漬まいつて御歸りあれ
腹合はもの丶けのくる力なき
　六條かよひ手綱ゆりかけ
あみ笠をふはとかぶせた路の影
　盜をせずにたゞ乞食也
氏は釋名は西入歟西念歟
　あつぱれ涼しき盆のさし引
月かげに踊法度を觸てやれ
　鹽を燒て喰ふ庄屋どの
詩にいはく機織の子は嫁に宜し
　色は思案のほかにしておけろ
籆の目に加茂の川波ぶちこんで
　すりきり逃る山のしら雲
つゝみ物花の下枝にくゝりつけ
　拾ひ殘したすみれの野べや

二

子共等は春の日なたにいさかひて
　むかしまつかうつねり餅あり
教訓の口の下から眠るらむ
　今川仲秋ゆふべけの事
歌舞妓にや里のすがゞき取合せ
　鯨を屠る浦へ來ませり
虎のふすもろこし船の吟味にて

八宗九宗町衆の沙汰
いつのまにあだし野ゝ露これは扨
小萩をはしる小便のおと
戸やさゝんさしも更ぬる月の皃
(寄)
油奇進の御燈のひかり
山崎をたのみにかけし商ひに
狀ことつてんやよくだり舟
二ウ
いつぞやは雁がね寒みほとゝぎす
千首の和哥をいそぐ老らく
松風の住吉まふで御太儀や
岸の蛙のくたびれ足の
朧月かしこに戰ひこゝにふし
名乘もあへぬ春の夢都
つちのとの巳待の夜這わすれたか
鎌倉道でかのに逢ふたり
天狗太平記にもさぶらふぞ
咄シじや〳〵霰の礫
せんじ茶の釜こそもらね板庇
地しろいくらで住や荒せる
なかりけり長ゝ牢ゝ花紅葉
定家流にていろはにほへと
紙屑も嵯峨の川瀬をはしる覧
まで清涕をたらす筏士
三
藪醫者の加減なれども飲んでくれ
鍋ノ大陽うしほ煮の骨
降る雪を犬よろこびに悅て
けふの鷹野はやむ妹がもと
翁さび人なとがめそ口すふも
かくし所の瘤なるべし
何やらん厠の隅でうめく聲
主の罷には苦勞めされた
目前に木ゝの古枝打て捨
十津坂本まで一面ンの月
冷じやなふ〳〵旅人水の色
鰭はきらめき秋のさふ風
三ウ
御膳過障子明けいとの給ひて

はれぬおもひに千壽をや召す
戀衣やぶつて死ンでのけうよう
　逆上しては六法をいふ
花に醉へり眼は三角酒旗ノ風
　市の胡蝶やめぐる禪林
ぬる猫はいかんぞ春のながめふる
　糊すり婆はのりに成たり
腰だきよはやめ藥よ産れるよ
　かねてぞ持し伊勢の雛形
豈だちてこんすお江戸の同者衆
　こゝに團子鄭錢屋はいづれ
普請のうち當分向ふの月凉し
　さい槌あたま撫し住僧
名
さき生はもし甘鯛で有つるか
　神奈川舟へ買ふ三世相
長持の屆く便はいつ幾日
　奥でこがるゝ御前あやつり
尤也貴賤上下の戀風は

　道中臭くあくるしのゝめ
灰こやし煙もあへぬむら時雨
　稲荷の山の社領中て
小鍜治にもうち劣らじと奈良刀
　身躰もぬけ扨からりちん
生く藥仙術既にしそこなひ
　馬鹿の文字は是ぁほう宮
虹をさして鵲の橋ともいふ月
　白かたびらにそよめく秋風
ウ
薄の陰女あらはれ出つるは
　伊勢物語の繪のよきたぐひ
いたづらにつゞくり捨し古屏風
　三匁五分樂坊ンが宿
裏通り岸うつ波や朝ゆふに
　汐なれ貝をはらむおごのり
雛段の横に置ける花の枝
　共天赦日くりあたる春

二條大宮な南がしらにあゆませけり。

春雨や馬に水飼ふ綱がもと　米平

雨音はきのふと成ぬつくし狩　米京

うちまけた上をふるふや皐雨　龍眠

五月雨や田舟の中に鳴く蛙　存義

あらすごや井戸も五月のまさり水　京 太祇

さみだれに眠らぬ臼の目切哉　鳥皮

夕立に肩衣ゆゝし馬の上　青瓏

夕だちや風の懐おしひらき　米山

ゆふ立や橋の雫もいかばかり　裴月

雨過ぬ海棠の葉のたまり水　左俊

秋の雨宿は鰹に霜ぞおく　岷山

草菴中

鉢盥一斗は漏りぬ秋の雨　由林

ものくれる人の數にやあきの雨　鳴海 和菊

あら淋し比丘尼の後の夕時雨　素勇

音聞くや駕にしばしの村時雨　歩跡

芋俵門田この頃しぐれけり　錢丁

一 列子夢を解く。巫覡の占夢も論説多し。袋草子に、ある人の夢に、野途に目より薄おひたる人あり。小町と稱して、秋かぜのうちふくごとにあなめ／＼おの（又たの）とはいはじすゝきおひけり、と詠じたり。（徂徠曰猥褻なる書なり）夢さめてたづね見るに、ひとつの髑髏をもとめて、小町の屍なりと閑所におくと有。しからば極て小町といふにもあらず。思夢か正夢か。いづれ夢中妄想のたはぶれに似たり。或は下の句は業平・實方などいふひとしからず。いかゞにや。捕亡令に、死人の姓名家屬をしらざるは、其所に藏し埋て、榜を上にたて老幼をしるし、行人に見せしむることあれば、親族なきものとても、屍みだりに道路にはあるべからず。ことに小町は姉もあり、孫もあり。猶不審也。高見の君子にたづぬべし。

一 延享丙寅のとし二月十五日、深河宜雲寺にて受戒ある安名は、義山道智上座といふ。

ことし二月十五日死す。行年四十

九さはし書有て

活ながら死人に花のふる日哉　春來

寺にてうから・やからへ非時のまうけある。翌日師のもとへまいりて俳話、春師いはく、芭蕉は正風の土臺をすえたり。古流・秀句・口合などはやりし中を美しくあらためて、詩歌の意に同じくせしは器量也。其角ははせをゝひつくりかへしたる物也。作者也。芭蕉はひつくりかへすとも、其角はひつくりかへしがたきや。

翌卯のとし、みづから一周を訪ふて

きさらぎやしきりに鳥の啼く日哉　春來

くはしくは市風流に見えたり。

東烏、娘をもてり。おふさといへるが、久しく病て、惜しや二九の盛を、よもつの秋風に吹とられけり。いかにおもひよせけるか、其夏發句せしを辭世にやなりぬるとて、のちにぞなげかれける。

實櫻のかけおもしろし春の夢　十九歳ふさ

七月廿三日にわかれて、晝ひるならず、夜も夜ならず。

長の夜も子に逢ふ夢はさむるなよ　東烏

子をうしなふて

埋火やまだあるやうな心もち　再賀

岐蘇川・飛驒山の材木に富し大野屋條助も、榮枯地を易ての後、十徳姿の曙漸と化したり。つねにあたらしみを愛して、世の變古いやつといふがすきなり。つゐに新花臺と成ける。

すはされば古いやつあり雪佛　米仲

一相國清盛入道殿の北のかた八條二位殿の夢に、たとへば猛火の夥しうもえたる車に鐵札を打て、鬼形の雜門内へ遣入たると見たまひて、（一書に、二位どのゝ夢は轉變がつくりごとにて、閻魔へふれひろめたる謀なりといふは、あさをしらざる說也。是をとらず。）入道殿ほどなく逝去し給ふこと、平家物語にたしかなれども、これよりさき故事談に、義家朝臣として趣さらにかはることなし。いづれをまことゝ夕時雨のはれがたき疑多し。蒲藤德元京上りの頃、粟田口にて火の車の鬼共へ、烏を煎藥にしてのませける西鶴が戲書を、なにはのよしあしともいはず。

みな同じ文作にて、誠とは見ざる也。

一季吟法印云、哥・連歌は疎句に秀逸有べきよし、心敬僧都さゞめき給へりき。俳諧には親句の耳ちかならんをと、長頭丸など申されし。所詮そくりとつけおくも、しんくりとよくつけたらんも、さま〴〵にて捨べからず。

一山水・草木はさら也。雲に起ふし露をあはれみ、たつきもしらず友よぶ鳥の覺束なき曙も、暫し旅だちたるに社、斗藪行脚の骨ならめと、其こゝろざしは有ながら、おもひをとげざるは何ぞや。前に風雅をいだいて後に俗情を負ふ。みづから耻しむれども、さとすことあたはず。此まどひ多年の慙悔也。臨命終時不隨者ときく時は、一軀を風雲に遊ばしめむに、豈かたきことあらんやと、見識めく人あれども、其人も口ばかりにて、めたとさうはせぬ也。

商人の万三千里春日かな　祇亟

信州三國峠にて

樏の梢にのこる二月かな　旨原

菜の花や何ごゝろなく井出の里　買明

山道をいざしら雪や順の峰　米丈

いつの間に瀧をつゝみし若葉哉　沅水

早乙女の膳居る間を眠けり　老瓦

早乙女や我黑髮も一つかね　梁宜

大名のさきへ鳥毛の暑かな　永芳

古河繩手をゆく　松の並木には栗鼠飛ちがひ、梟眞晝ながらふくみ聲なり。

夏菊や狐を乘せて戻り馬　米仲

ゆふ皃や此一村はつくり取　我梁

夕皃や茶もほの暮る札の辻　寛里

心して伏猪もいねよ小萩原　湖海

むく鳥ややがて一俵一里塚　關やど浙江

蜩や槇たつ山のあたまから　米璘

溫泉の地獄に悲し鹿の聲　田社

鷹もなけ五尺の稻の花の時　葵足

初雁や千住から來る片便　甘棠

今泉より建長寺へ下りること十町ばかり、そのみちかや草ふみわけ、あるひは岩に手をかけなどして、口うるほすべき茶店もなし。こゝにこそ天狗の腰かけ松といふはあんなれ。

我も休む山のにしきや天狗松　米舟

鐘に又覆輪ほそく鹿の聲　米山

鹿の音やおもへば腹の内も秋　其道

魂はみな笠にある案山子哉　蜂水

新田のかゝしも同じ姿かな　艸樹

山田守身躰ともに案山子哉　米璘

染色に奢つくして枯野かな　栖鶴

木がらしや臥猪の床の鼻の先　曾嵐

我宿を時雨の宿にまいらせん　雪淀

溫泉の山の椅するどき氷柱哉　田旦

兀山や凡しぐれの日數ほど　圖大

一むべ山風の初嵐ふく頃、古賀の姉がもとより茄子を多く送りける。誠に濃むらさきの色うつろふて、さまかたちいとにくし。

秋なすび鼈に似てあはれ也　米仲

とたはぶれければ、善六きゝて、情なしとわらふ。

疝氣をば棚に上げて秋の茄子を切る　古賀 善六

いやそれは草鼈甲ではなくて、草陰囊なりと又笑ふ。

一何変ぞ古き世のみぞしたはしきといふによりて、新規をいやしめる。蓋これもはやりもの也。あたらしきによき事いくらも有べし。むかしの草紙を見しに、その頃の寛濶は、袖なり大きぎにそぎて褄たかく、金鍔の中脇指、うねざしの足袋に出たち、さかやきは耳のもとまでうす鬢に剃さげ、髭喰そらし、大編笠まぶかに引こみたるでん中風のたゞ中也と書たり。此古風したはしからず。

一ほとゝぎすは和名にあらず。もと梵語にて十王經に出たりと、多田氏もいひあへり。其のち見れば、佛說十王經ニ云、我レ汝ガ舊里ニ化テ成ニ鸞鸞ト示ニ怯語ヲ鳴ニク別都頓宜壽ト と見えたり。一書の說に、是今いふほとゝぎす

にあらず、鳲鳩の類なり。寂蓮法師の此經文によつて、子規を冥途の鳥といへる誤れりとし、猶梵語ならざる證は、節時過の和訓もあれば全く別鳥也と、こと長く辨あれども、とかくほとゝぎすの名は此經によるやう也。和名鈔にも[illegible]鵑を保度ゝ木須とよませたり。節時過もかくし題めきてさだかならず。尋べし。

耳を越す雨の夜きませ猫のつま　米岑

籬のくづれよりかよひける、古ごさなおもひよせて

猫の戀庭の筑(築)山たつた山　米峩

姑を旦那にもてり猫の妻　子英

となりを飛直しても蛙かな　音子

我哥を卑下する蜂の蛙かな　萍社

田螺等が啼にないても蛙かな　五雲

夜もすがら雨雲喰ふかはづ哉　溪梁

鶯やまだこもりくの初芝居　信鳥

きのふ來てけふかけ歩行燕かな　嘉廷

つばくらや疊にこほすおのが影　女　民うた

たゝずめば人にも狂ふ胡蝶かな　時雞

てふ〳〵や加茂の芝生に目もすがら　存義

蝶〻や晝寐して居る植木賣　十曉

葉にとまる蝶もふた葉の合り哉　菊丸

高飛の雲ともなれる雲雀哉　米黛

もどかしく芝生を走るひばり哉　圖大

碑の銘の背中へ落る雲雀哉　一瓢

野心を見せて飛らん雲雀籠　竹史

九重の寶鐸なりて雲雀哉　芻狗

蜂の巣や蜜にうるほふ八庄司　樓川

巣の下のおもへば此蜂恨しや　米布　カナ川

大津繪贊者之贊

春の夜の犬はあやなし目くらうち　米仲

田にし啼て泥田に椿の雫かな　四川

雨テ晴しゆとりやほとゝぎす　和貢

錦木の青葉建てや郭公　森羅

目に見えぬ蚤とや脊中帶の下　龍眠

飼の蚤かと斗詠けり　旨原

蚊すい蝸牛をかむよりも、中〳〵おそろしげ也。

更〳〵て水雞もやすむ扉哉　庭臺
肥ても鰹すゞしき姿かな　曲裳
淋しさに蛤にも書ぬか閑古鳥　五雲
造營の飯時ならん閑古鳥　龍眠
夕立のあとやきよろりと蓬　米儀
草の露空へこぼるゝ螢かな　巨龍
またぐらを水くゞるとは螢とり　米仲
水と火のよい中見たるほたる哉　理帆
葉隱に夜の春のほたる哉　清泉
三ッ五ッ水をあやどる螢かな　李道
青貝の噂になりぬ飛ぶ螢　女 花礫
日暮ては濁にしまぬ螢哉　超雪
蚊の聲や汚泥を出て君が顏　正川
聲ありて蚊の罪輕し夕まぐれ　露牙
物怪も失れと焚なる蚊遣哉　起來
うたゝ寐に鳴雷やひとつの蚊　酉月

(蛼)蛼の蚊は紙燭に見ゆる命哉　米黛
ほうふりのふるや金魚の鼻の先　潮十
枝〻の露を絞るや蟬の聲　米岑
日盛は煮たつ蟬の林かな　小嶋勾當 露英
むざんやな鳥の口に蟬のこゑ　由雅
辛崎や蟬の時雨に日傘　一瓢
うつせみに醫者は利口を嗤けり　米泉
葭雀のそは〳〵と夜を明しけり　水路
汗も日も入て小鯵の盛かな　米運
酢を貰へ鰯ぞ沖の雲のみね　子閑
牛の腨かりの枕や下すゞみ　溪棠
夕露の虫聞くならば遊行寺　竹史
はなれ鴨の身の秋いかに根なし草　雙鯉
ふし折れの声や共まゝきり〳〵す　米仲
朽たる葭にきり〳〵すになるといふ也。
初雁や宵にあはれな蚊がひとつ　梁宜
馬人に馴て身ぶりや小田の雁　米運
入相を喰へてなくや雁の聲　紀嶽

初鴈やそろ〳〵重き番葛籠　章南
盗人のひとりは逃る鶉かな　鳴海 蝶羅
一寸の草むら痒き蟋蟀哉　荼陽
木々よりも心や痩る鹿の聲　米車
凧や鳶のすがたもふところ手　振水
とぶ千鳥窓にうづまく鳴門かな　葵足
生海鼠かな人も手足は出さぬ頃　露牙
牛の子に新場のなまこ踏るゝな　米仲
生海鼠の身うき世を牛の脊中哉　文幸
すゞやかに鷹の目ざしや朝嵐　西山 魚川
人中を鷹は目はしの拳哉　與一
酒の君はじめてや今鷹頭巾　米平
鷹狩や兵どもの木綿もの　理帆
水鳥の何を養る歟尻ばかり　山裘
からく世をのがれたる藻や蠣小舟　荼陽
鵜の糞に松がえ寒き川邊哉　五雲

一人參を順和名には、くまのい又かのにけくさとあり。古事記仲哀天皇の條下に、新羅人參渡リ來ルとは見えたれども訓はしれず。

一文德實錄云、百濟ノ朝臣河成在ニ宮中一ニ令下ニ或人ヲ一喚中從者ヲ上或人辭スルニ以レス未レダ見ニ容顏一ヲ河成取ニテ一紙一ヲ圖ス其形體一ヲ或人遂ニ驗シ得ルと見えたり。人の面を繪にうつすも來ること久し。もはら今はやりて畫く類とは、其意はなはだかはれり。混じていふべからざる歟。

一海棠に似たるものは躑躅にてもよし。日本の櫻は各別なるもの也。履中天皇紀に、酒獻ル時さくら花御盃にちりいれり。冬十一月のことなれば時にあらず。めづらしと愛し給ふ。又仁明天皇、右大臣藤原良房公の園の櫻にめで給ふなど、さくらの風流既に久し。

日ぐらしの里にて

大名やぬるとも花のそとを行　春來
八重に散る雲も有けり花の山　甲州 閭如
花に鞭柳も駒にたはるらむ　錢中
手折ても他國へ見せよ江戸の花　理帆
花戻り鞍に見えたる嵐かな　正川
生キて世へ出たる心やはなの山　花礫

とし寄に花もあるもの姥櫻　遊糸
さくら狩惟茂すこしも醉ぬ也　青瓏
只一木雲のちぎれか庭ざくら　うすい
夕暮のいちどに白き櫻かな　森羅

飛鳥山にて

君命の石碑に由ゝし櫻狩　青徳
舟長はぬれ手に安房の月見哉　米黛
名月や空で浪うつ箱根山　水路
穗も浪も滿汐見たりけふの月　府月
仙人の住家によらず松の月　米謠
名月や降るべきものは柳の葉　五雲
水晶で口洗ふべし月見船　米仲
豆　見　月　栗　喰　娘　芋　僧　都　女さなみ
たのしみの跡の長さや後の月　嘉廷
もる程の木の間すきまや後の月　米ゝ字

姉なるもの寅のとしにて、守本尊のおぼしめしいかゞと、鰻なくはざりければ、戯て

かば焼の菩薩尊し十三夜　米仲
初雪に鈍とはやすき命かな　甘棠
ころがせば我としむるや雪の音　佐原青藍
初ゆきや先あらましを笠の上　雙鯉
雪輕し日頃ほねなる瀧の松　萬立

花柳前川の曙も、風そよぐゆふべにあつさはらへば、はやさゝ竹流す七夕過て、菊の水身にしめるも、屋根舟に火桶さするころ早し。

雪中や瑠璃に流るゝ水の色　米山
初雪の朝がほきゆる垣根かな　米仲
鈍提て傘にしのぶのさとの雪　丹鳳
降れや雪あとは野となれ麥畠　吉門
はつゆきの配りかねたる枝もがな　山子
はつ雪や袂へ拾ふ椽の塵　凡鳥
古郷を噺すや雪のかゝり船　繩成
八王子雪よりたちし煙哉　再賀
黄昏を曙にして雪見哉　珉呂

初雪や木々の姿の福〴〵し　米轍
水仙にもろ手は重し雪の傘　府月
塩竈も焚かねば雪のたより哉　米崴
雪の旅天が下みな佐野の暮　信鳥
降しきる雪にわからし瀧の糸　山雅
下モの口著はじめや雪のそら　（女）吟糸
北風の富士やさながら雪の糕　米仲
はつゆきや共口を盜る猿の聲　米純
鎮るや雪の上野ゝ松柏　米旭
竹の名に積も又雪宗覺哉　米謠
山賤のもどり新し雪の道　律砂
藁火焚く田舎の雪のにほひ哉　米齋
皃見せや雪の中なる濃紫　許道

一 菴中記

夢中にふと假のすみかをもとむ。しもつふさかつしかのほとりと歟。從横四十壺のうちに六疊ふたつ。ひとつは主人、ひとつは同菴の老尼なり。はたすこしの厨めきたるは、旦暮の煙を見むとなり。もとより竹の籬に松の門、晝もさしこめて、たゞあが佛につかふまつるの他なし。

葛飾の蚊にまかせたる此身哉　春來

郊外

梅が香や足駄草履につたひ行　衆賀
小町ほど老ても梅の色香哉　西月
古鉄の鏡にうつる柳かな　由崴
むすばれて柳も道を教けり　鳥皮
左葛西の舟待寒き若菜哉　菜陽
若草や上野の下馬も馬の糞　塵匣
菜の花に響車の啼音哉　再馬
春の野は衣の袖も蒲公哉　（女）吟糸
山吹や今朝は重たき花の數　桃里
酒に明けて梨花の露そふ緋の袴　丹鳳

まへの中村傳九郎を書し繪に

山吹や馬に多葉粉を喰はせむ　米仲
牡丹見の又驚くや臺どころ　紀逸
たとふるに物なし余花や薬の戰ギ　菜陽

世中をとしより茄子人の中　再機
倭成の門をたゝくや初茄子　丹鳳
紫陽花や夕ゞの雨に百日ほど　桃里
百合咲くや傾くかたへ一雫　栖鶴
ひるがほに枝をかさぬも哀なり　鳴海 欽叟
立よれば晝顔にらむ暑かな　錢中
朝皃の捻もどしたる夜明哉　飛鯨
あさがほの一輪咲くや利休垣　呼童
鬼灯や蚊にくはれじと売衣　普子
手燭して菊のにほひや心あて　女 李道
菊の香の小袖にひとへ羽織哉　再馬
月雪の間のにほひやきくの花　花礫
落栗や落て程ある谷の聲　理帆
點炭にとまり烏や夕もみぢ　渓梁
丁ゝと杣かすかなり谷紅葉　青瓏
通天のうらは繪具の紅葉哉　森羅
きつね火に又一葉見る落葉哉　鳥皮
京近く大根ひくなる女かな　女 さなみ
團子喰ふ馬を枯野ゝ笑かな　再馬
鬱口の割れた酒屋に枯野哉　四友
又色を夕日にかりて枯野哉　桃里
やけ笠もつるに枯たる冬野哉　汶長

一堀河夜討といふは諸書にあまねく知ること也。一書に、土佐坊昌俊兵を卒し、文治元年九月十七日、日中に六條室町の亭をとりまくと見えたり。東鑑に甚夜の沙汰なしといへども、豫州壯士西河邊逍遙して殘りとゞまる家人いくばくならずとあれば、夜ル深く家人等逍遙もすまじ。日中としるしたるも亦故ある歟。

一著聞集にいはく、匡房中納言、太宰の權ノ帥になりて任に赴れたりけるに、道理にてとりたる物をば舟一艘につみ、非道にて取たる物をば又一艘につみてのぼられけるに、道理の舟は入海して、非道のふねはたいらかにつきたると也。江帥ほどの人、非道にても取られし意、不審也。故あることにや。

一一角仙人がさしも靈堅の通力をくじきたる旃陀羅女は一人の名のやうなれども、さには有べからず。傾國・傾

城などいへる類にて、せんだら女は遊女の惣名と見えたり。翠眉・雪肌、情慾人のこゝろざしを奪ふ。何ぞ角仙が鉄肝溶けずにあらんや。なるほど宮女の耻をふくみ顔うち赤める、素人にては叶がたかるべし。

一舟はもとより魚のかたちにて、艪櫂は尾鰭にはたらき、よく水をゆくなるべし。落くる蜘蛛のふるまひ、げにもとおもひ初しよりたくみてとは覺束なし。

石河をこそぐり登る小鮎かな　如鷹
つごもりの闇にもそまぬ白魚哉　珉呂
手を洗ふ淙ありしほ干潟　米轍
龍のすくあたりをけふの汐干哉　起來
鳥の吸ふ水は殘して潮干哉　義莚
夏川に風の生るゝ柳かな　府月
涼しい歟水を蹴て行鳥の音　米宇
御屋敷を舟へはかつて涼哉　米運

秋風辭
やかた船大勢なれど秋の暮　旨原
降る雪の下行水やなめり川　米舟
十露盤にあたらぬ雪やそとが濱　春來
流れ來て生海鼠は塵に吸れけり　義莚
橋杭をめぐりて鴨の夜明かな　祖平
山〻も枯ての後や薪舟　青壚

一名のみありて卷はなしといへる雲がくれ、巣守・さくら人・法の師・雲雀子・八橋の卷〻見侍りしに、うたがひなきにしもあらず。源氏の君、松ふく風のあともなき行衛なめりとの給ふて、飛仙となり給ひぬるなど、博覽の君子にたづねまほしけれ。たゞ信ずべきは、紫式部雲がくれといふ名をもて、千歳後進のためにまどひを殘せるぞ妙なるべし。源氏物語に荘子の意あらば、伊勢物がたりは列子といはむや。

一加茂川のみなそこ澄て照る月をゆきて見むとや夏はらへする。後撰の哥也。つごもりにもかぎらざること歟。鴨河の禊はいつにても也。癸酉のとしみな月、痲疹はやりければ、小蝿なすあしき神を送らんとて、おかしの形代をつくり、舟にうち乗せて、美人糸竹をもて遊ぶ淺草川を漕ゆく。

川すゞみ金はすなはち水と成て　米仲

兩國長橋の風流、夜光はことさら也。

屋根舟も同じ夕風夏はらへ　米裁

裸にてみそぎぞ夏の佃じま　米菴

索麪や鼻の下まで夏はらへ　米璘

來る人の大晦日や夕はらへ　常樹

眞桑瓜すゝを流るゝ夏秡(祓)　米二

虵籠にも神風こもる御秡哉　汝章

帷子ゃとても神代の立すがた　秀億

稲荷にまふでゝ

眞先やさみだれつたふ豆腐串　千里

葛水は笠鉾續く盛かな　汝長

すゞ風ゃ玉兎晝眠る法師武者　子英

御祭のゆふべ凉しや舟の幕　規外

祇園會や古き言葉の分明し　米窓

祇園會ゃ夜の手水の近まさり　慶子

出てあるけ日和ぞ人の放生會　永芳

けふ祭神田の臺の毛唐人　米國

飾る也神田祭の衣紋數　友以

宮司の一日なぶる火鉢かな　青洲

三石はなら茶領也里神樂　米仲

烏帽子から昔ぶりたり里神樂　機夕

初午にあをかりし物踏のたう　米幸

はつ午やふとんをぬぎし飛鳥山　万髫

初午や雷いまだ(原註)聲おとなはず　米仲

賤が子のつくしとる日や初稲荷　雙鯉

初午や耳は陽氣の早合点　秀億

初むまや注連新しき小田の松　龜成

これは〳〵初午も花のよし野紙　蘭風

暮春のころ、しもつふさ佐原の里

青藍のもとに連日とゞまりて、こ

さらのあるじまうけ、謝するに

言葉なければ

岩躑躅かたじけなさの鹿嶋まで　春來

宮守の廡下にたばこくゆらせて、

眺望いふばかりなし。

御利生や霞をなめるあたご山　許道

牛頭天王奉納

春野ゆくすみだ川上の酒屋哉　米仲

一俳諧に祕事・傳說をさま〴〵こしらへたるぞうけられね。松貞徳門の立圃・重頼・西武・貞室等に條々の覺書有て、誠に初心へはゆるさゞりけるも、いつしか印行せられて、大概趣はしれたり。それさへ連歌のかたはしとおもほゆれば、傳說は連哥の名達にゆいて尋んにはしかじ。俳諧盛ンに纂觸をあらそふ時にいたつて、杜撰をもて人を欺くも多かるべし。ひめつゝむこと、宗因・芭蕉・嵐雪・其角などには聞えず。たま〴〵遺書にありとはいへども、後のつくりものにして用るに足らず。今もてあそぶ傳授の句作りといふに、ひとつも面白きはなし。たれもしりたる事をよくするにしくはあらじ。人知らぬ事を我のみ覺えて、耳目を驚さんとおもふより迷ひ始めて、窠臼に落いることこそ又まよひなれ。道におゐては教訓口授を得て、稽古修行なくては成就すべからず。ことがましく祕傳の切紙など名づけて、若俳をおびやかすは、市に售類にて荷擔しがたし。俳諧に居て、はいかいをはむとやいふべき。

一千載集は壽永三年に始りて、文治三年に奏覽あり。其間三十四箇月と承る。古人云、校合ハ如シ風葉塵埃ニ隨テ掃ヘバ隨テ有リとや。ましてつたなき筆にまかせたる事は、みな魚魯刀力の誤なるべし。なにをかしたり皃に月をも經べき。とまれかうまれとくやりてむ。

寶暦己卯年　彫工　吉田魚川
同　木童

△遺編
俳纂語　近刻

江都書肆　本町三丁目　西村源六
京都書坊　堀河錦上ル町　西村市良右衛門

# 南北新話

上・下

涼袋

## 南北新話 序

みづから佛中の隠士と稱するものあり。予と風流相許す。はじめ難波にあつて、をしへを野坡にとる。西海の好士その才をしる事久し。後東武に下つて其門にあそぶ。又走つて尾城に寓し、しば〳〵蓮二が一派に接す。はたいつの春ならん。予が八仙觀を扣によつて、ひそかに麥林の意匠をすゝむ。則馬を躍らして北海に行。北海に希因有。かのうつはものを愛して止ず。爰におゐて發句をしる也。文は能浦の司鱸をもつて鳴る。時に金城を發して南海にゆく。南海に梅路あり。かれをこのんで常に夢寐す。爰に於て連句をしる也。さりや神都に杜菱あり。大和に古山あり。いづれも據とせざるはなし。すでに敷島のあたりちかき櫻井の里に住果んを、ことし倉梯山の留別に、鶯に呼るゝ子ありとして、笠を夏木立に見うしなひぬ。されば東海に歸る時は、金龍山のもとに草をむすび、いま涼袋と戯呼とぞ。はた法師が都因と號せる比より、南北の日記を懐にす。予かねて櫻木にのせよと云。今やこれに應ずるによつて、予をして序のぬしにさだめんと也。本より戯論の遊びにをける。何をか辭し、なにをかをしまむ。青殺のはしに書付て、飛脚の笠にゆひつくるのみ。

于時延享四稔丁卯初秋

洛陽　法橋百川題　（印）百川

## 凡例

此二篇は聊麥林下の論を記す。さりや朱弦ゆしのびやかに聞人をゑらみ、白雪のたか〳〵さかたらふ友を待にもあらず。たゞ笑て捨、笑てさる處もあらんやとなり。

發句の撰はみづから物するにあらず。多くは麥林の判を旨として、通志の廣く論ぜるを引。

平句は麥林・梅路・希因、及同志の手柄を加へて沙汰す。又古人の句もさる處あり。

句法の目錄にいかめしきは、羊頭を懸て狗肉を賣ルさいはむ。かならずや法をもてさきんずべからず。

凡物はちかくてしたはぬもの有。遠くてしたふものあり。その遠き人に見せばやとなむ。

# 南北新話（上）

涼袋著

## 目録



### 發句の變化

凡發句の變化をおもへば、既に泰山も砥のごとく、樵は謡ひやんで手を拱し、鳥は飛に倦んで歸る時ならん。あるは櫻の枝を伐て、紅葉に蠟引の秋を作り、あるは霜雪をそのまゝに、よしのゝ梢と見せたらん。彼をゆがめ是をたはめて、手爾波に茂山のすがたをかざれど、既にしてみる時は多くに俤をのがれざるべし。ことに平句は雑のみ多く、たゞ云捨ても句とはなれど、發句は季節の扱もひとしく、感情も亦おもむきを同ふすれば、天地を以て書籍とすとも事のすくなき物とやいはむ。されば云つくし案つきて、いまあらたに句を得んものは、まとに桃源に迥るがごとく、再びその道は尋ぬべからず。爰に新古の扱をしらねば、麥林のごとき絶唱あらんも、これはその俤より得來れり。是は彼が句脉よりと、いづれも同句の論におとし、終には我も句なきものと成て、今の遊び處をうしなふべし。さりや、かの變化といふは〽鹿の音の聞へぬ山や薄紅葉　是宗祇の發句にして、とゞかぬ山はまだ靑し　と麥林の扱は俳諧ならん。〽夕がほや秋はいろ〳〵の瓢かな　とちかく芭蕉の發句ながら、秋は扇にのせられず　とおなじ言葉に案じたれど、同句の難はあるべからず。〽浮草もあちらの岸にけさの秋　と洛の百川が先吟ながら、けさはあちらの岸に咲　といづれも妙手段に作りかはりて、好惡の手づまも此うちにあらん。〽うき我をさびしがらせよ諫鼓鳥　我もさびしいか飛で行と事もかはらずといはゞ云む。たゞ變化のふりを以、流

行のすがたも見るべきなり。ましてや一字の手爾波もかはらず。あるは一二字のふりをかへたるなど、世はかぎりたき物としるべし。爰に好悪を論る時は、小松の字中が柳の句に、

花さかぬ身は動きよき柳かな

これは落花の論にかゝりて、うごけば散〳〵と實に落し、殊に語勢のおだやかならぬを、

花さかぬを身をすほめたるやなぎ哉　麥林

かく作れば木姓を立て、花にまけたる柳のすがたに、語勢のさはやかなるもひとしほならん。又北海の希因が句に、

うぐひすのあかるき聲や竹の奥

といふを麥林の判じて、冬ごもりにかじけたる聲をはなち、七文字の働なのめならず。よつて此句のうら山しければと、

うぐひすのしらべも深し竹の奥　麥林

かくまでは作りたれど、是は先吟のまさりたりといはん。又奈良の元梅が集の中に歟

八朔やおどりのあしの休まりぬ

と趣向をこらして作りたるを、踊つたあしをかしこまり　とすがたに魂を入たるなり。かゝる死活をしらぬ人は、その事にこのことは古く、此もとに是は先吟ありと、あたら句作をそこなふべし。俳諧のみかくある事とおもへば、中華の詩章も此論ありて、すでに雪片大如筵と李白が人をおどろかせしも、雪片大如鵞と明に到て風流をかゆれば、いつしか唐人の妙境はうせたらむ。殊に賀の希因は爰を得て、一字の變化に句を作れば、多くは麥林の俤に通ひたるもあれど、是をうばひたるなど沙汰せむは、風雅の通志にはあるべからず。はた同作同意の句評と云は、よき句は兩作の手柄にして、あしきは兩作の未熟ならむ。又一二字のすがたの變は、好悪はなを先論のごとし。和哥はまして同類多く、詩も亦論を同ふすれば、俳諧ひとり何ぞ反せむ。只句になると、ならぬとの微意なり。さらばとて初學のおもひまどひ、よし古人の句を作り直すにはしかじと、爰にむかつて俳諧をやらば、驢鞍橋を以て阿爺の下頷ならん。

朝皃やあすさく花のねがられやう

とちかく聞へたる發句ながら、賀のちよが、それともしらずあすの花　とてねがておくと、死活の扱にすがたをかへたり。

うぐひすの笠おとしたる椿かな

といふその道具をそのまゝに、鶯や椿おとし迹て行と伊勢の人の妙境をつくせる。下手は只道具にありとこゝろへ、嫁入の道具をあつむるやうに、何ぞ新らしきとたづぬれば、終に蛛の巣に雷とも、却て古き境に落ん。上手は蛛の巣に木槿を案じながら、只句に成ル場を尋ればなり。新古もし道具にあらば、梅の花に鶯とは、子共もしりたればとて止べきや。鶯に初音かな　といくつも發句はあるべき事なり。ひたぶる一字一作の變化を悟すを、今の俳諧をしる人といふべし。

## 麥林の說

麥林、常に左右にしめす。世に發句せむとおもふもの、先句法をしるにしかず。只おもふ事を七五にすれば發句也とこゝろゆるは、それはせぬかたの益ならん。發句は平句とすがたをかゆれば、淸語と平語のわかちをしつて、句法はうごくと動かぬを沙汰し、躰はたゞやすかるべし。此故に案じて得ずんば、はやく止ムべし。やんでもし興つきば、あしくともよく聞へたるをすべし。よき句に似たらんあやしきものは、風雅の罪人といふべしとぞ。

## 希因が辯

俳諧を案ずるには、機は胸より上におくべし。趣向はまのあたり見置キたる事にて、誰もおもひあたるものを求メ、句作は辯者のものいふごく、語勢は帛を裂くがごとく、全躰は口先の事といわむとぞ。

## 句法の論

句は只幽なる處に物を見出し、すがたに書キ出す時は、誰もかゝる事はあるものなりと、實境のよく目前にうかみ、こゝろにこたへて忘れぬ場あり。幽人の工夫は、常に委

におくべし。さればきり〴〵すの鳴所を見つけて、水風呂も物入てあり　とその家のさまの貧きも、又鶯の頃を見出して、雪折も茶の下に消へ　とおの〳〵その處を得んときは、四時に風情を養ふて、爰に養生主の一助ならむ。又無心の物を有心にしなして、造化に魂を入る事は、古人もその沙汰をつくしたれば、いまはたいふべくはあらねども、女郎花のたをやかなるに、女の魂をうつし入て、狩人に立ふさがるとすれば、矢先の邪魔は趣向としるべく、又ほとゝぎすの啼キ行あとより、曉キがたの流星を見出して、聞かぬぞと追行星　とは今一聲の所望なるをや。又三伏の暑キ日に、風鈴の物わすれするといへば、そよりともせぬけしきをあらはす。是を句法の働としるべし。旅は又おかしきものにて、我幽情にたをるゝ故に、人のしらざる場を見付て、ひとりおかしとはおもひまどひぬ。この故に旅の句法は、つねよりすがたを細かにせよと、古人の論もさる事なり。又事をもふけて作る法あり。これは一座をおどろかして、よくはしたりと見ゆれども、強て好まばあるひは非ならん。譬へば雲雀を見あぐるさまを、猿引も日和見る手の　と物を出してすがたを作り、化ものは春の物なり朧月　とも、人買の舟漕入る霞かな　とも云事はいひ得たり。かの幽玄の場には遠し。あるは紅葉に事をかざりて、隱すへた殿おき合す　とはよく彩色をつくしながら、月ひとつあたゝめて出す紅葉かな　と其景色をとゝのへながら、林間の奥のことばをふくみ、只をだやかに風流をつくせば、遙かに先吟には劣リぬべし。又その作者も評者の上にも、其句の骨折をかへりみて、一字の扱に死活を立よ。新古はその中にある事にて、爰に老婆の言を下さば、野ゝ宮に黒木の鳥居は、誰もいふべしとて捨べからず。たとへば卯花の過てとも、夏草に痩てとも、おぼろ月殊にくろ木の鳥居かな　とも、いくたびも機變はあるべし。さて春雨と五月雨とは工案もおなじ處に落て、境のおぼつかなき物なれば、古法も春雨には春季をむすび、五月雨にも同季をあつかふ。されど治定のすがたを作れば、季かたの論には及ばざれど、たとへば鳩部屋にはら立聲とは、おしむ春日を降くらすと人情の腹立も爰にひゞけば、全ク春の雨に極りぬ。又野遊

の夢をぬらすとも、沙汰なしにはじめて居るとも、いづれも春の雨中と見へたり。又五月雨は渺々として、湖の水まさりけり　と古人の論もはべりしなり。それが中にさだめがたきは、枕崩る謡本　帆柱の所もかへず　など置きたらん。春にもあらず夏にもあらず。すがたの治定しがたき物なり。又硯には海の果ありとも、もらひあつめし竹の奥とも、是は五月雨の頃をたがへず。又、菊苗に淵のはじめ、釣鐘を蝶のやどり、又橋守も鴉のうき巣、あるは晝から馬屋に飛ほたる、ともいひ出すよりすがたのわかれて、たちまち春夏の雨をむすべば、蛙口の論は會て無からん。又、茶にちかきむしろ織なり　とそのとばの扱をもつて、春の雨のあきらかなるは、上手の手づまと云べきなり。しぐれにも又此論ありて、初しぐれ・一時雨・露しぐれ・夜しぐれも早く先論の一隅にしれや。又行春・行秋は支考が細かに沙汰し置て、今は行といふ字のすがたをこそと、初學の眼を爰に入れば、既に行秋に種瓢の古けれど、腰にさがるのとば新らしくてと、麥林の評も聞へ侍る。月にも四季の差別あれど、これは大ィに事をかゆれば、烏焉の論はましてなからん。凡上手の場はあやうく、下手のをる場はたしかなれば、下手はあやまちをまぬかれて、いつもきこへていつもうとく、上手はあやまつて聞へぬもあれど、いつも花やかに、いつもかしこし。されば名人は此間に立て、かしこからずうとからず。よく聞へてよくやすし。學者は又工夫を轉ぜよ。長く名人の弟子の下手とならざれ。

## 自定句法

凡句を得たらむ時、みづから句を定る事かたきものから、古人も此事に舌を下せり。又爰に事をかさねば、たとへば句を得たる際は、先新らしくよき句なりと、我に驚く時ありとも、かならずや速かに出すべからず。まづ先吟も無かりしやなど、つら〳〵辨じかへりみて、さて語勢の急緩、動不動、自問自答に事をつくし、忘るゝばかりにさし置きて、又推敲して後共すがたをみるべし。風景忽まなこにうかみて、畫圖に寫さるゝものならば、是衆人の取句にして、一句を得たりとおもふべき也。なるほど

おもふ所句にあつまり、語路も手爾波もとゝのひながら、其すがたの手にとられず。文彩請上にうつらぬものは、あやしき處ありと熟練すべし。されど爰に二法ありて、すがたを以て定ると、言葉の扱に作ったるもあれば、爰はその句のむまれにあれど、ことばのみに扱たるは、多くは情中のあやを作れば、かのおぼへある手ぢかき事にて、万通の情をしるべきなり。もしひとりうつぶし顔に、かゝる事はある物なりと、ひたすらおもひしづむべからず。たとへば戀する人のごとく、我ひとりの義理にせまり、命に及物思ひには、いろ〳〵の道理もこもり、耻も不足もある事にて、進退針にあたるがごときも、元一己心のくらがりなれば、外へ通ぜぬ尤といふべし。情に落ちたる句案もさのごとし。又廣く天地を胸中に容れて、寒の中に寒ィと云、六月暑ィとつくり出せば、天下能寒暑をしる。されば人情の通用をしり、山は高く海は深しと、眼前の風景をつくすにはしかず。

## 句評の箴并麥林しゝかきの句評

我このむ處をもて、句を評すべからず。只句中の骨折を見出して、成とならざるの境を論ぜよ。されど同志にあらざるものには、屏息して避べき事なり。麥林みづから句を定めず。常に曇舟が聞を好みす。秋のくれ猪垣の齒もぬけて行　と案じて曇舟が耳を鏡に、舟云へりけるは、此句上五文字あるべし。もしなくんば行の一字外にあらん歟。今一工夫なからんやとなり。林退ひて百練し、又曇舟が窓をたゝき、上の五文字なく下の一字なし。那句いかんかせむと云。舟曰、此句尤よし。もとより秋の暮の五文字に決し、ぬけて行のことばに定れり。たとへば此庭の秋海棠の四葉を圓にひらくべきを、などや此花の木瓜鍔に似たらん。是本然のむまれにして、ゆがみていとよしと云べきなり。猪がきの句むまれあしく、またあるべくは聞えながら、外に一字のおくべきなきは、一句の治定とおもはざらんやと。賞さる事ぞかし。

## 諫皷鳥の句

かんこ鳥我もさびしいか飛で行　とは案ゆへども、聞得

る人すくなく候。さりながら曇舟は受合申候。貴境の御評承りたしなど、希因へ文通ありし時、因此句をよろこぶ事命のごくす。かさねて麥林の文通に、貴丈御受合此うへは安堵致シ候など聞へ侍る。

## 遠寺の鐘の句論

ある人のいへりけるは、涼しさや遠寺の鐘のちかひ日はこの句倘すゞしとおくべきやと。まことに倘の字に下の七五よくしまりて聞ゆ。されど句意いさゝか異なるべし。常に遠寺の鐘を聞てすゞしくは侍れども、ことさら涼風のそよぎよせて、よくきこゆる日は猶すゞしとや。又涼しさやと云時は、下の七五はしまらねども、林は其場をよろこびて、只何となく云捨たらんか。

## しぐれの句解

僧は歸る笆のあとや初しぐれ　此句意聞えかね候とて、麥林に問けるものあり。其後金城への文通に、外に趣意もなく候へども、たゞ松原のそこともなく、落葉掻たる寒空に降來る時雨に、笠をそらせ袖を拱たる僧ひとり行と、うち見るけしきをのべたるのみなり。諸人の耳に聞へぬ句は、かならずわるきものなれば、恥入るばかりに候と書けり。此簡は賀の柳戸が篋におさむ。



## 麥林集解嘲

麥林集と云ものは、杜菱が大なるあやまちなり。今すこし句を撰たらん、奥深うおほへぬべし。さしてもなき吟も多く、又は同ジかたを案じたるも多し。是、林が名をうすんずるに似たりと云。これらは一通の論といふべく、畢竟麥林をしらざる徒なり。我先に菱に代つて、ある人に文通せり。今爰に事を擧ぐ。

何ゝ麥林集句數過候よし、鹿句及同じかたの發句がちにて、林が素意を失ひしは、杜菱が未熟に候よし被レ仰候や。又貴境の御評何ゝの句はわるく、何ゝの句はおなじかたなりと、御沙汰被レ成候やしらず候。俳風はたゞまち／＼の見所にて、強て論じがたき物に候間、俳諧にては中間敷候。世に李杜が集、

及明の詞客おの〱一代の詩文集御座候。その中より唐明の詩選御座候。そのごとく麥林が家の集と可レ被二思召一候。されど和哥の家の物好などに、事をすくなふして、家の集と號したるもあるべけれど、それはやはり撰集にて、よしなしごとをありのまゝに書あつめて板するも、大家の一流にてあるべく候。もし麥林句選などゝ題し候はゞ、爰が未熟とや申候半。書境におゐて明眼の風子、麥林句選御出し可レ被レ下候。又その御目も無二御座一候はゞ、世に座頭の窓のぞきとやらん可レ申候。過當御用捨。

月　日　　大和　都因

## むすぶ句法

むすぶとは緣語にして、一句に緣なきは和哥の腰折におなじく、例のうごく句とはなりなん。

客僧に薪のいらぬさくらかな　有竹

是、十八町奥に里あり梅の花　と意を同うせり。麥林も稱したる句にて、櫻に霧のすがたをこめ、薪に鉢の木の趣向を立て、客僧をもてなしたる也。爰をもて三隅をしれや。

## 自然の句

簑笠を竹田へもどすしぐれかな　晩九

予、のとの七尾に遊し時、此句の作者にしば〱接し、かの句那箇よりか得來れると問に、作者はたゞいひ捨て、其骨折もしらざりしが、その後麥林の稱歎にあづかり、又諸家の議論を聞に、もし伏見とも八幡ともおきたらん句にはあらじ。竹田もし簑笠の名所ならば、又句にあらじ。たゞみのかさのもどし處に理屈をはなれ、ほのかに簑笠の緣も動かず。しかも淀・竹田の堤づたひに、しぐれの風景を盡せるとぞ。まとに名句の場に至つては、手段の及べきものにはあらじと、その時的當せる事も侍りき。

## 觀相

觀相とて別に句法を立、あはれにも悲しくも事をかまゆ

る物ならねど、自然と號していふ事ならん。

蜘の網かけて夜に入むくげかな　希因

百生や蔓ひと筋のこゝろより　ちよ

前吟は只そのまゝの事ながら、槿花一生またゝく中に、秋の日のいとゞ暮やすく、情欲の網羅を出やらで、たちまち迅速の幽冥に入る事よと、麥林も此句を賞ぜり。ちよが句は題をもふけて、三界一心の事を作れり。

## 隨宜の句法

隨宜は假にもふけたる名にて、句はたゞ境と變機をしりて、宜に隨ふ事もあるべし。爰に不自在ならんには、行脚の眼を具せずといはむ。されば其國その所に入ては、其境の通用をさとすべきなり。又かたくなゝる風人は、自己の俳諧とやらんのゝしりて、人のために笑をとるとも、是は吾師のをしへなりと、目鼻も無キ事をいひ出す。是をかの擔板漢と稱して、杜賣の細道にたとふ。凡句法は万化なれば、弱きも、强も、細かなるも、さびしきも、おかしきも、句法のあつかひをたがへねば、いづれか風流にあらざらん。ちかく麥林の漫興にも、三味線を聲にしては、東繩手に螢を飛せ、五月雨の瀧落しには、二階の曲をにぎはしたらん。あるは伊勢音頭の妓觀に遊んで、三千の聲ありと、女郎花のさびしみにしづめ、機變は時の宜に叶へり。ましてや即興の挨拶には、只一口の俳諧としらんか。

## 流行の客論

客來て問、此ごろ三都合といふものを見るに、かく流行してもてゆかば、小うた・淨瑠璃のさたにして、終には川崎音頭のうき名にも立らむとぞ。盧元が言故ありとおもふ。こゝろみに師の言を聞む。予曰、すべてかくのごとき討論は、その人にあらずんばしるべからず。凡、虎を陷しいるもの機關あり。人を敎るもの警策あり。盧元にいかなる趣意ありとも、我をはかつて論ずべからず。されど戲に我意をいはゞ、盧元と反せる事鵜鷺のごとし。もとより俳諧と云ものは、かの晋人の淸談にひとしく、無用に無用を云かさね、無益の無益にあそぶものなり。

されど風流瓜のごくさけて、あるは道と說て是を敬い、あるは慷慨して交を斷つ。是なんと云事ぞや。道はなをし。大路のごし。豈俳諧の小みちをや。絕交又小家の論なり。豈和哥の和をや。凡益あるものは理非を生ず。無益は造化と共に道す。此故に我俳諧は上瑠璃・作文・いせ音頭・鴉鳴・鶴唳・浪潮音、皆是はいかいのあそびにして、天地と共に不益なれば、不益は則流行にして、西より東とは云べからず。又俳諧の行衛を望、大河に手をあつる譬諸は、杞國の人の病とおもへば、俳諧もしいひつきて、外にめづらしき道も出來よと、我は其新を待もの也。されば流行は彼がもとよりにして、別に流行に論なからん。すでに惟然坊はばせをの句を作つて、鉢たゝきにうたひありき、梅路は諸家の句を音頭にして、都鄙の街にうたはしむ。是なんのうき名ぞや。俳諧はしばらくおゐていはず。神楽雲上のよしあしも、難波の淨瑠璃には作らずや。ちかく春雨のあしらひに、三十一字の辭を付たる。終に和哥所のとがめも聞ず。俳書をもて大道と說く家より、何とてかゝる小言の侍りしや。

## 初心學道

はじめて發句を學ばむもの、ひたすらよき句を語して、常に吟じ、つねに味ひ、語勢の響をしるにはしかず。されど魯魚を辨ぜざれば、何をかよき句といふやらんと、爰におもひまどふべきなり。されば明師を得るにはしかず。もし麥林の風骨をしらんと要するものは、麥林の句法に約束ありて、よきもわるきもその法をたがへず。先論に階梯たれど、爰に舌頭を落さんには、予はじめて希因に接せし時、かねて京よりの文通に、いつその人をみる事よと、おもひ置し事など書て、

木のはしの友待得たりむめの花　希因

因、いへりけるは、我しづかに百練せば、おかしき一節もあるべけれど、早ゝ追あらねばと也。予此句を評しけるは、實(午)さもべし。されど木の端の五文字動かざれば、當季の扱のすわりたる事よと歎ずるを聞て、穴かしこ、發句の約束をしれり。もし初櫻・はつ紅葉ならば、たとへいそぎて句なからんも、木のはしとはおくべからず。梅

のすがたの何となくたはゝにあらぬ物なればとぞ。その時、麥林の句評の話に、

うぐひすの乳母も出來たり冬の梅　蘭輅

これは誰〳〵も云べくして、此場古しと打なぐらん。さもあれ。冬梅の荅あへる、よき鶯の乳房ならんに、鶯の子の春待顔なるも、季候と共に躰を得たり。句はたゞ是らを手本として、物の新古に驚く事なかれと也。

## 句數の修行

初心の句を修行せむには、十日くるしんで一句を得よと、をしゆる師道もあるべけれど、麥林の句のをしへと云は、數万句胸中を洗つて、後やうやく一句を得べきと也。さてその修行は、題を立て一時に百句も二百句も吐ク。されどいさゝか句法をしらねば、實にくらやみの礫にひとしく、一句も的中はあるべからず。只語勢と不動をさとし、新古の論を打捨て、たゞやす〳〵と案ずれば、おのづから語勢も淸く、むづかしきたくみもほどよくまわりて、後には熟せる工夫にもいたらん。ちかく筆意の修行にも、はじめは尺餘の字をならひ、熟して後細字に到る。これより細太のほどよきを知つて、書方万躰に及ぶ事なり。世間の伎藝もさのごとく、しづかにそのわざをつくす故に、自然と急緩の功ミをしる。況や心上の風雅に於る得てすら全きものにあらず。もし好んで風雅をしらんとならば、ひたすら句法の味を知り、はやく取捨の用をさとして、無用の工夫に落ざれとなり。



## 句の訛の論

言語に訛のあるがごとく、語勢何とやらにぶく聞へ、尻重にゆがみたる物あり。されどその門よりは此門をさみし、是よりは彼をいふに似たれば、同志のために此論をあけん。凡語勢のさはやかなれとは、訛をぬくの用にして、手爾波のまわりのわるき句は、すべて語路のわるきものなり。此故に語勢をたゞして、爰を専としらぶる事也。たとへあの國の詩章における、和人は平たふ訓ならへど、名人の詩はさはやかにわるきは、何やら吟じにくし。呪や俳諧の和語における、爰に語勢をさたする事也。

## 古語の扱

古語古詩をあつかふ事は、殊に上手の手段としるべし。たとへば、

さびしさの門に入なり三日の月　麥林

曉の山屼としてほとゝぎす　仝

後の月葉落て四百八十寺　希因

是徳に入ルの門なりを轉じて、秋のはじめにすがたを付ケ、蜀山屼どしてあけ行けしきも、南朝ノ僧房寒けき峯に、落葉秋月の季節をあつかふ。殊に八十ヶ寺と唱ふれば、語勢のひゞきもおもしろく、滑稽の人はよろこべども、是俗學の唱なりとぞ。されど俳諧の論にあらねば、それらは勝手次第といはむ。

## 麥林鹿の句の二判

予暮柳舍に客たりし日、人來つて云へりけるは、麥林の發句書る扇ありと。希因其句を問ふ。客の曰、今の事にて忘れぬ。谷水や鹿の何とやら天の川　とはべりしやと。此吟は麥林集にあるをば、因も我もおもひよらず。さらば鹿の七文字を置て見ばやとて、因は鹿の星毛をとおけり。我は鹿の上にはとまで置て、いまだ決定なかりしに、かの扇をとりもち來れば、鹿の爲にはとありしなり。因、歎じて云へりけるは、此句、爲といふ字のやすければと、こまかにすがたを付たりし。むかし麥林の一棒を受に似たり。まとに句の淺深の躰をしらねば、何もかも深く入つて、終には聞へぬ場にも及。強弱　淺深　細太のほどよき、此日工夫を決したりと、踊躍せしもさる事なり。

## 麥林自適

麥林の云ッけるは、諸國に俳風の異なるは、猶音曲の異なるがごく、吾妻のかたに哀れなるも、都の人の聞時は、あの節なからましかばといひ、都の人の耳をすますも、遠かた人は聞も定めず。まして俳諧の無量なる、十人をしてよろこばせんより、一己のたのしみを極るにはしかず。されば句上に魂を入て、一己の格調をまもる時は、人喜び人あつまる。亦吾俳諧の安堵もなきに、足に草履

の尻を折り、唇に秋の風を吹すも、たゞかの男女の魔魅にして、却て名眼のはづかしみを受んとぞ。まとや麥林は燕居して、一步も行脚の沙汰もなけれど、千里の通志を句中に得たり。只間然しがたきおやじと云べし。我ばかりかくおもふにや。

南北新話　上終



# 南北新話（下）

涼袋著

目錄



## 流行の論

凡附合の流行をおもへば、いまや黃河も帶のごとく、人は舞雩して雨を乞い、牛は月を見て喘ぐ時ならん。爰に苗を拔いて根を枯す人は、翔つて蕉門の寂を失ひ、こゝに

油然たる雲を待ものは、稲の葉のびのちからなき、終に談笑の世の中をしらじ。さるは新百韻に花實をそなへて後、支考は阿誰の話の屈に入つて、囁々たる理論にをわり、涼兎は三疋猿の拍子にほこつて、そのあかつきのほとゝぎすを聞果ぬ中に、かの乙由ひとり、翁の稱嘆をも喜びすまして、述べき戯論もしらで、只月雪の變化をたのしみ、しづかに麥林を閉たれば、發句は世にもれて傳へもしつ。附句は一座にかいやり捨れば、其地の人は妙手段も知れど、遠くてしらず。しらであざける人も多かり。故、麥林を評する徒は、平句はあやしなどおもひまどひぬ。既に鰒の臆病の句論に、支考がおかしき事書て、柱に懸て去し事は、世に人のしれるものながら、それを高しとするにはあらねど、只眼あつて見る人の無ればならし。又世に集作る宗匠は、多くは別に一手段を立れば、その一卷の模樣取りも、わたりも、拍子も琢磨したらん。略、麥林の附合を出せるものは、たゞ一座の云捨たるにて、是作らんと事をこのめるはなし。されば百ほとゝぎすの表、及近頃板したる續百韻も、其座に一興のものなれば、ほとゝぎすの第三に、馬の句の麁相も多く、まして瑣々たる事は論ぜず。されど同志の風躰をうつさんには、名達の手づまをしるにはしかず。もし麥林を怨のごくせば、俳諧かくかろ〳〵しくば、誰も好む句はありぬべしといはむ。されど理論に耽らん者、句は歴劫も得べからず。まして幽玄の場にいたつては、中人以下には語るべからず。それが中に流行と云は、上手と上手の間にあつて、たとへ千萬の俳人をならぶるとも、工案にとほしき作者ならば、鰕の升中に踊るがごく、いつも不易とこそおもひなさむ。たとへばひとつの泉を得て、一朝一抄の用をなさば、終に其水のつくる事をしらじ。又一夕十荷の工案をして、互にその底をつくす時は、此泉もかいつくし、その泉も汲つくして、終に地軸に行あたり、世に堀ぬきの富貴にや遊ばむ。此故に其ほどをしらず。とく〳〵のながれに、桶をおろさんとするものは、かけつて失ひ、もどつても又失ふ。さればいづくに立命せむと、多くは大澤に陷つて、あやしき俳諧とはなるぞかし。爰に不易と云事をしつて、やす〳〵と流行せむには、只付

合のつき合なるとをさとし、常に盡ざるものをしるべき也。人倫もしつきば俳諧盡むと、天地と共に流行すれば、流行全不易にして去年の花のごとし。あたらしく咲けるがごとし。又雨降風吹と云捨るも、其句中の手づまにあつて、きのふ聞たる物語には飽〻ど、けふは上手の笑はせたらんあと迄おかしく、新らしきは上手と下手との口ぶりにあつて、新古の論には有べからず。されど事をもふけ句を飾らんとせば、桐の枕に夜着の鳳凰といはむも、恒砂の屑とおもひ捨べし。まして山の錦に肌寒のかけ合せは、三十年前の沙汰なるべし。誰ぞ落たら橋が直ふ と常の事おかしくいひたらん万化は、人の日用にして、爰に高く眼を着るを、今の俳諧をしる人といふべし。

### 麥林の説

麥林常に左右にしめす。附ても惡キ句は取べからず。附ぬ句は猶とるべからず。それが中に附句の論は、七名もなヽ八躰もなく、只日用のまのあたりを機に轉じ變に化し、あるべき事を趣向として、句に一ふしの手づまを盡す。



すべて初心の學道には、かならず附になづむべからず。前句の作におどろくべからず。たゞ其物の本体を見出し、ほどよき作をかいつまみて、梅の花に鶯を案ずるとも、句の骨折をあらはす時は、二句の間に意味を生じて、新らしき附とはなるぞかし。さりや附ても惡キ句はとるべからず。つかで好句はおしむべしとなり。すでに、伊丹に住んで下戸は珍らし と古山が瓢を裂破せられしも、只一作の沙汰なるべし。

### 梅路が癖

附はそつと手打つて、掌のわかるがごとし。音無キ物は附遠く、あり過るはいとうるさし。又古寺に狸の附句古しと云べからず。狸はよし千疋にすべし。誰か暑氣見舞に寒しといはむ。たゞある事を案ずべしとぞ。

### 言葉の扱

麥林を判者として、おの／＼集りし巻の中に、石に腰かけて詠居たるすがたの前句に、に

どふつもつても十兩の山

と附たるものあり。一座も此句をこゝろにくゝおもひゐしに、梅路が傍より評しけるは、此句点なからん。故いかむとなれば、どふ積つても言葉念入りて、むねいたむさま見ゆれば、一兩の山と棒にふりたる人を作るべし。又十兩はかさ高なれば、幾つもつてもと喜ぶべしとぞ。作者も驅馬の追がたき事を悔ぬ。ほどなく祭をひらく時、麥林のわき書に、數ちがひ中て幾積つてもとありたし。賀の希因、南方に遊びし頃、旅寐を訪ふものゝ夜話に、此頃麥林の高印あり。いとあやしなど受合ぬもの多し。その句に、

裏へまはつて芍藥をみる

方〳〵にいづみ式部は墓がある

これ何か一ふしの侍るや。因、喜んでいねられずと答。客あやしむで詰つて問。因いへりけるは、此句たゞ一字の扱にありて、和泉式部の墓としたらん句にはあらじ。式部は墓と云時は、語路もあしく聞へながら、意にそこばくの雅趣を得たり。客、掌を拍つておどろく色あり。しばらくして云へりけるは、此句はもと初心の附たるにして、いまだ一句のふつゝかなりしを、岸虎が傍よりむづかしがりて、いづみ式部の墓がある　ともしてなんとなげやりたる物なるを、麥林、はと手爾波をなをし、しかも賞美の印に及ぶ。今吾子の符合を驚くなりと云てさりぬ。かさねて麥林の聞を問に、いづみ式部の墓があるとすれば、名主のむすこが伊勢參宮に、日記留たるにひとしかるべし。式部は墓と云に感情をこめて、さて〳〵無双の女なりけり。東北の謠にはなけれど、此芍藥もいわれなき事はゆまじなど、くち〴〵いひ過るものゝさまも見ゆとぞ。

## 死活

すべて句をせんもの、死活のわきまへなからんは、いつも眠たき事がちに成つて、終に死漢の名を業らん。およそ句は七分云て三分は佛に殘すべし。されど句のまはりみしらねば、云足らぬ事に落て、我ひとり聞へたる筋にならん。あるはいひつめて殘す事あり。あるは云あまし

て残す事あり。爰に麥林の論ぜる句に

人の皿へ拍子につつて植て行

これ死句なり。爰に活潑(溌)の魂を入んには、拍子につつて植そふなとすべし。これは云あましてこゝろを殘せり。

封じてはとき封じては解く

伯母に似た鏡の顔に物いふて

これはいひつめてこゝろを殘せり、附ごゝろは身をうしなふものとも見て、書置のあはれを作りなし、身はうき草のとひよるたづきもなく、我と我顔に別を惜める、まことにうらむべしく。

## 一句の立

句上はたとへむづかしき趣向なるも、かるく廻してさはやかなるべし。

きらひなものに欲はおじやらぬ

雨降に來て川音をもどる也

隣村へあそびに行たるなるべし。あかのめしか、すまし汁か、しるべからず。

口にまかせて付る俳名



茶の下へ毎日垣が透て來る

桃と藤との間に開帳

鳥無き島の蝙蝠たまくり手に、韻字留の説法者ならん。

筆まめにひとくだりつゝ逢やうな

伏見安井邊のさかり懸御目度ゅ。此頃金札に付て、いろく咄ゅ御座ゅ

隣は笛に成つてしづかな

春雨に夜の名所へ起キたがり

詩人ならば梅花こそおもひおこすべき。物は定らぬこそおかしけれ。

たしかに届く狀でうれしい

凩に朝の蔀で暮れてゆく

タアとまりたる人あるべし。けふも又吹からして、

わたし場の凉しい風はいそがしい

蝿追たればしろい餅なり

これ草津の姥が餅か、はた岩淵の粟粉のもちか、たゞし市日のけんことりか。

あさがほに消て見せたる月の影

兒を剃ル日はみなが身にしむ

玉は山に捨、寶は海になげうつ。いかに況や髫髮をや。

持碁にして壽麦の亭主の定らず
　見へる山へも水が打たい
　　ことしの土用はしのぎがたし。残つた見舞はあすすべし。
投出すに一物も無き頭陀袋
　大字の雫殿に間近い
　　これ一休の一の字か、たゞしはしの字か、しるべからず。
正月の餅も隣へあつらへて
　背中にひとり乳にまひとり
　　あはれいとさびしやなど云、夕顔の宿のあたりならん。

### 抜て作る句法

長き趣向を云ほどくに、是もいひたく、あれも云たく、果は十七字のみじかくて、おもひ立ながらやむ事多し。麦林是に工夫を付て、句作を抜いて言葉をつゞめ、能聞へたる手づまを作る。いたつてあやしき句法なれば、或は仕損じて謎にもなれど、此處を學び得ずんば、いつも傖夫の談のごとく無用の言葉のみ多からん。抑此法は俳諧にかぎらず。あちの詞客も是をつくす。この故に滄溟が詩に、徂徠の解を入たるなど、事を同ふせると云べし。

さりや麦林の附句の中に、夜もすがら踊ありき、露にぬれてたゝずめば、わが家の中に打しはぶきて、のらめはいづこへかうせしと云。たしかに親仁の聲なるはと、二句の間にすがたを作りて
　赤い踊リを下へ着かへる
此句よりぞ、ぬきて作る句法をこのむ。あるひは朝ぐもりの晴たれば、はや晝前の空を見あげ、道者の腹あしくのゝしる前句に、
　矢はせへいつて戻ルほど待

### 長キ趣向を廻す句法

趣向は二句の間に立て、いかほどの物語をこむるとも、先論のごとく廻さゞれば、中〳〵句上にほどけがたし。そこをかの手づまに句作をぬきて、
　一あらし通れば瀧の音ばかり
　　本尊もどして盗人が剃ル
何を付ても附べき前句なるを、何事に風靜り、清浄池の水音耳にしみわたるところを入て、爰にひとつの物語

あり。此山の本尊いとたふとくおはしますをば、しら波のそこともしらず。ぬすみもて行ぬるに、このほどその里に咳病(シハブキヤミ)のいできて、おどろ〳〵しき事多かり。おどろきてもりきたり、其あやかしも終に猪刀を擲つて、目出度キすがたになりしなど、緣起說キの口ぶりをおぼへ、作者のてんがうにしたるものならん。又

　闇をしらずやくらい行燈

かゝる前句は、親かたの手代しかるとも、師の坊の小僧をおどすとも、只付ヶはつくべきを、闇をしらずやの語勢には、汝しらずやのひゞきもあればと、たゞならぬ趣向を立るに、さるかたの木像を受合て、その日限はいつしかに、あら削のまゝころげありくを、尊像もこらへかねてや、夢中に佛師を催促せらるゝとおかしみを付て、

　はかどらぬ佛師の夢に見へ給ふ

先に論ぜることばの扱を見るべし。又

　尻に物おく機の行燈

半蔀おろして、ひま〳〵より見ゆる火のひかり、螢よりほのかなるに、一夜の宿を乞ふものあり。都人の聲と聞ていとをしく、みだれがはしきからびつ、うつはものおしやりて、いざとて飯まいらせ、いづかたよりいづくへと問へば、初瀨より伊賀越を伊勢のかたへなどこたへて、賤のしわざさしのぞきほゝゑみたるに、ほとゝぎすの一聲過たるを打あをのき、くらはし山もあたり近にやと云。さては今啼たるがほとゝぎすといふ物かなど、いなかびたる風情をつくりて、

　あれなれば夥らに多しほとゝぎす

かくまでその夜のけしきを賛せらるゝも、一句上の手づまと見るべし。

## 戀の論

蕉門には戀の詞をもて戀とせず。こゝろの戀をむねとすといへり。これはある法師の云ひろめたるを、かの法師の趣意もしらで、古法をやぶり私のしやすきに居ルもの多し。もし傾城とも、娘とも、禿ともいふを戀とせずば、何とておもてにはいむ事ぞや。此一條をもてもしるべき也。世に戀の句ほどむづかしきものはなしと、さゆふ

人を見るに、外のこゝろやすきと云句作におゐても、打驚く手づまもなし。戀の句もし難きものならば、雨降、雪降ルと云もかたからん。句は物によるものかは。いづれかやすく、いづれか難からん。たゞ上手と下手との論なるべし。たとへ娘と出るとも、こゝろの戀なきはと、おぼへたる人にいふべし。むまれてよりふかくかくれ、猫の綱手よりは引よる袖のうつり香もしらねど、縫出鴛鴦是とかの夢陽が謳ひしごとく、かほどになまめきたる戀句はあらじ。傾城・禿はまして論なし。たとへ筒井筒に石打こみて、たはぶれ遊ぶふり分髮も、桃花の媚に三千年をつぼむと見て、猶おもしろき戀ならん。凡こゝろの戀といふは、あらはに作り出せるものは、耳に立てうるさからんと、ほのかにいひそめたるこゝろの戀を、かたいなかの人のかたむきに、おもひそこなひたるならんか。ましてや前句二句をからみてなど云、それは一座の扱といふべし。戀の句よく輕重の句作をおぼへ、一句はふかく一句はあさく、あるは戀のこと葉をよの物に譬諭(喩)し、あるは戀の詞を用ざれど、そのすがたに戀を見せたるなど、抑一巻の變化なれば、李趙が麥畠の集の戀に、紅のとなりの麥ゐ恥るなど、おかしく扱ふて談笑すれば、三句のはなれの心やすく、見わたしの轉所もしからんか。又或人の說を聞に、娘もし戀ならば、むすこも戀ならん。女もし戀ならば、男といふも戀ならむと。世にいふ鐵槌論の沙汰もあれど、これは宦所の設にして、風雅の論にはあるべからず。女と云ィむすめといひ、自然と麗情のひゞきあつて、男の髮にてよれる綱には、大象も繫がるゝのいましめはなし。又此上も水懸論に、もし宗匠女ならば、むすこも男も戀とせんとや。かゝる理論に及ぶ時は、風雅の天然は棚へ揚て、火箱の中を遊ならん。しかし一碗の茶をあたゝめんには、

たんだ一夜にうき名立られ

此句さらりと聞へ過て、次に物おもひとこと葉を出せば、手紙書たるやうならんにと、其人のそぶりを作りて、

腰かけて居てもつまらぬはしご也

殊にはしごの戀の場に、入用なるを見るべし。これらをこゝろの戀ともいひ、又はすがたの戀ともいはん歟。又

あらはにたはぶれのすがたを作ながら、おかしく云なしたる句に、

姉よりは妹のかたがおとなしく

そんな事する足は禁制

又前句のこと葉をよく見こみて、その人がらをたがへぬ付に、

此襖明ずばわろとたゝきたて

(一)戀はそふした物で無ィわい

明ずばわろとかしましきいひかたに、はしたなきふる舞を作れり。

又前句のすがたを、うづたかく見出したる句に、

夜の明やすい白無垢は損

惟光が馬はしのばずいなゝいて

これ扇に夕がほの頃ならん。

火燵へもよらぬ男猫のたゝかれて

嫉妬の夢の廓見て來る

嫉妬のことばのかたけれども、おそろしき響を寫せり。

酒のめど十日の菊も淋しふて

巻つきそうな文が來て居る

前句のもの字を能見出したり。きのふの紋日を迯たる人ならん。

いろはでは長ふなる名をうれしがり

戀する寺も祖師のおゆるし

かくのごとくわたりて、打越のすがたのさだかならず。例の戀のこと葉を借つて、あさ／＼と轉じたる附に、

昆蒻がふるへば指も切ッそうな

されば戀のことばをかるく用ひて、千變万化の句作をなさんに、何のおもひしづむ事かあらん。達者の手づまを見るべき也。

## 三句の論

俳諧は三句のわたりにあると云事を、瓔珞のごとく首にかけて、人と俳談に及にも、打越の句をわすれさむらふといへば、さらばその句聞に及ばずなど、かたむきにおほへたるもあれど、凡世に附句してあそばむもの、三句のわたりをしらぬものやあるべき。まして附と句の間に自

在を働き、句作のこゝろまゝなるに至つて、三句のわたりの不自在なるべきや。此詮儀は麓の草分にして、擧ていふべき論ならねど、惡ルがたふおぼへたる人に對して、三句の轉所をきかせんとならば、

此年の寄るまで鍬に遣はれて
むすめひとりは何處へなりとも
葬當を棧敷へ見せてうなづかせ

娘ひとりのかたづけ場を轉じて、自他の附句にわたりたるなり。

出かわりの身幅をせばふつくばふて
鍋のくろもの是はうぐひす
花ばかり吉水院はあたらしい

前句の御所言葉になづみて、そのあたりの事も附べきを、轉所おもしろからずと見て、芳野の皇居の跡なつかしく、花見ゞ道者に靈寶を云立ると附たり。されどかの寺には、村上が陣簑宮の御太刀ならではなかりしかなど、律義一片の一にはいひがたし。ましてうぐひすの名を春季に借り、吉水院の古びたるを、手爾波のまわりに聞せたる變躰を見るべし。

## 平生底

附句は常にある事を作りて、一句も亦無造作なるべし。

〽生玉へ無拍子に來て何も無ィ
あたらたばこを挑灯で吸ふ
〽よそのいさかい我をたしなむ
もらはれて親を四人ッもつて居ル
〽脩行に道を迷ふ今剃
世の中は腹のへる時あらはれて
〽手水遣へばひるめしの膳
つとめとて脚なげ出も氣のつまる
〽晴たらば漏ふとおもふ雪降りて
大勢ながらにくひ子もなし
〽さかづきのひかりは古い瓢にて
疊の施主が上座いやがる

かゝる場に遊ぶ人を、俳諧の常をしる人といふべし。

矢ばせより瀬田はたしかと云て行
八卦があへばいきて居る筈

此等の附に工夫あるべし。まことに平生の扱にて、俳諧

せぬ人もうれしかれば、まして地ばしりの蕉門下は、此場を〳〵とこゝろがくれど、是をしらんと要するもの、これを學びて得べからず。句に万別の手づまをつくし、あやうきもおもしろきも、自在の句作をおぼへて後、やす〳〵と此場に遊ぶならん。未熟の作者爰に學びば、まことにさいたらはたけなるべし。

## 軍の句論

むかしより軍の句あり。中にもかゝるけやけきものは、第一作の扱にあらん。實に落して附たらんは、軍書讀やうにておかしからじ。

　水渺〳〵と松の出はなれ
　武者一騎見かへる城のいとま乞

かゝる事は小束の細工見るやうにて、日やすからず。それより一むかしすみだはらの附句に

　星さへ見へず二十八日
　ひだるきは殊にいくさの大事也

これ滑稽のおかしみにして、此句によらばあやまち無けむ。ちか頃梅路が談笑に、

　からすの立た森はあかるい
　伏せてある勢があくびにあらはれて

世に實にはまりたる作者は、伏勢の夜露に當り、あるは下冷してなどゝおもひしづみ、ぐさめに作るべしといとおかし。

　寐ものがたりは灯が消てから
　米櫃へあづかる鎧入れて見て

下の五文字の働を見るべし。

　おやしらずとは波の悪名
　敗軍がもちをつかせて喰ふて居

これらは一段手づつまをかへて、一巻のもの好などゝみるべし。只虛にしておもしろき物あり。實にしなしておかしきものあり。是を用うるを虛實自在とはいふべし。

## 観相

　今の間に雪はちとづゝ降れど
　にくふて牛をたゝくでもなし

又

剃らぬ先衣の店を見てまわり
　水仙さげた片手ふところ
次の句は、觀相の人躰を作り出せるなり。
　手をあへものに早乙女のめし
　さられても此島織た窓見へて
よくまわりておもしろき句ながら、此場によつて、おもひしづむべからず。

### 前句の變

附句すみて後、我句をしかへる事、席上の法度今さら云べくはあらねど、もし上手に手づまをかへて、次の句を補ふ事あらば、とがむるわざにもあらず。されど作者は前句の模樣を人しれず見こみて、一字の間にも趣向を立れば、次の作者にうかゞふべき也。ひとゝせ神風館にて、
といふに梅路が、
　うつくし顔は人のためなり
　方丈は饅も喰はるゝ宗旨にて
と付き、次に
　畑のいきれをしきる風蘭
と付き、一折ばかりも過ぬ。しばらくして傍より、宗匠の句に戀無からんや。又饅に夏季の付たるは、いかゞあらんといふものあり。路笑つて、さらば我句をぬきかへんとて、
　魚くへば還俗に似た宗旨にて
これ戀を扱、冬季をぬき、しかも前句のこゝろをかへず。一座も頤を解し事なり。
一とせ蓑柳舎にて
　ちる柳烏帽子に拂ふ藪の中
といふに希因が、
　別るゝ頃はさびし野ゝ宮
と付てのち、前句の作者帽子に拂ふとしかへたり。さらば附ごゝろもちがふへしとて、その句をもどり
　盆に成ては墓引たがる
いせにて支考を判者とせる會に、麥林の附たる
　きのふの事をけふ笑ひ出す

女房にかゆひ背中をさしつけて

一座此句をゆるし侍りしに、支考わづかに長を掛たり。伊勢はむかよしり点をはげんで、こゝろへぬ点はあだに聞捨ねば、一座此句を印とこそ判じたれ。もし見落したらば無点なるべし。すでに点考長に及び、何とて印をわすれたるやと、悉しく申遣しけるに、支考が答へ侍は、一句宜シ此故に長をかけたり。附は前句の見たがへやあらん。かゆひ背中をさし付て　と夫のけんゐをいふときは、きのふの事を笑ひ出す　むつまじき中はおもしろからず。きのふの事をけふも腹たつ　と云前句ならば、おのれ女め、まだやまぬかと、灸ばかりの背中さしむけたらん人がらも、おかしからずやと也。誠に判者の眼高しと云べし。

## 拍子

拍子は前句よりすゝむもの也。附句より求むべからず。

秋霧や伏見竹田に淀鳥羽も
如渡得船と呼べば糞舟

これ附句には拍子もなけれど、前句のひゞきに語勢をうけたり。

いなづまはしらけて明て月落て
宮の大工のゐぼし着て來ル

## 地の句

世に地の句と云をこゝろへちがへ、只ひらことを云ならべて、一卷を埋草にしたらん。いとほゐなし。發句のみ作るとおぼへ、平句は口上書とおぼへたるさへ、いとおかし。わづかに清談と平話の境をしりて、滑稽の常に遊ぶべきなり。たとへば云捨て行、地の句の中に

芥子の花ほめる聲にも散そうな
ゆふ立はかゆひ處へ降て來る
傘も一本したる花ぐもり

かくのごくあつかふべし。殊に地の句の尻おもに、かしこまりたるは、角力取を前におきて、祭見ルこゝちやせむ。

## 古語の扱

あるは、かたきこと葉をそのまゝ出して、附の間におもしろみを入たる手づまもはべれど、殊さら滑稽の落所をしらねば、下手の詩を吟ずるやうにて、興盡るわざにやあらん。麥林の附句の中に

　畑打に花さく門とおしへられ
　　鐘さへ匂ふ處々の春風

かの雍陶が、村園門巷多相似　處々春風枳殻花　と友人を訪たる田家のけしきを、前句の模様に見せしなり。さはとて識者の俳諧に入つて、左傳・國語など引入たらん、執筆の難義といとおかし。

　冷な水も新酒にしのがせる
　　宰予で晝寐しかる兄弟子

　又

　打寄て粥をほめるもさめかげん
　　問答までは柔和忍辱

いづれも卷中の模様とするべし。

## 折こむ句法

　わざ／＼も參る墓なり道のはた
　　こちらを旅にありついて來る

これらの句には、解を入て見るべし。今ではこちらの在所を旅にして、他國でありついて、さる事有て來るとなり。

　しまの名も歪のうちに工夫して
　　賣るほど嫁る子にも泣れる

これらも人買に賣つてやるものほど、よめりする子に、わかれをなかるゝと見るべし。

## 風情

風情はけしきなり。されば風景の句立といふは、あやまつて連哥にもながるゝものなれば、句中の寂をこゝろゆべし。

　蜂がのぞひてもどる風鈴
　　一軒おきたから臼の音

一句に千万の意味あるを見べし。

麥の茶筌に小雨ふる時

柴舟のあそこ行やら鳥立て

又

辨當に花のあるじを振舞て

あたゝかにとく繪馬の風呂敷

又

秋ひとしきりむしてねむたい

管笠に蜻蛉もかはく音がある

又

道のしるしにむすぶ若草

見てゐれば物もいひたい遠めがね

かゝるさまは、俳諧のふぜいといふべし。

### 當季を隱す法

これらは猶一卷の物好なり。もとより此句法とて、別におしへの有にもあらず。只句作の働を見るべし。秋の附句に、

障子の閾に月も通さぬ



勘當も夏のまゝなら寒からふ

夏の句に

敷て來ル芳野の鮎も若葉にて

まだ三月と筆がわすれぬ

これよし野よりの音信と見て、この頃その山をもどりたる人ならん。

女の三井寺詣といふ季かたは、扱のむづかしき物を、うらのかたよりいひかへして、

聖靈にめんぼくも無ィ髮ゆふて

おとこ交にまいる三井寺

### つきはなす詞

何ともしらず詞をはなつて、下に何をかいひ出すらむとおもふ句作あり。殊に席俳諧の興にはなりなん。よく人のおぼへたる物語に、ほとゝぎす啼比、うへし田を刈てといふ類、おもひよらでいとおかし。梅路が句作にこの類多く、人をして感動せしが、一とせ越の小松にあそびて、一順の前句をゆづりしに、聞及びたる作者なれば、

いかなる妙音をや聞らんと、満座息を呑て待るたるに、案じ入るけしきもなく、うつむけて　といひ出せり。執筆聲をあはせたる時、舟のやすみが干てある　又

　見ちがへをしつて妓王の受こたへ

といふ前句に、はづかし　といひ出して、やねの泪はど漏　と次り。又ちかき頃なりし、

　剃〃氣はあれど咳氣して居

と云に、おかしやな　と云ひ出せり。何事をかいひ出さんと、聞かぬ先より打ゑみたるに、捨たいものをぬすまれて　さりや尾の巴靜がむつの花ゑらみし時、麥林の第三に、錢出すめしをいたゞいて　といふ七五あつて、上の五文字なかりしに。おもしろや　とはきわまりぬ。これらの一言万縷の手筋とはなりけらし。

## 前句より産る句

前句の事をあつかいながら、下手の附〃はうわさになり、上手のしたるは模樣となる。是らの句作をしるべき事也。

　治つた代は小判迄ほり出して

　ぬれほとけにはしておかぬ也

是御堂建立の入用ながら、うらのかたより句作をまはし、御堂の花麗は治世にかゝり、小判は工料、ほり出しは佛の應化ならん。殊にぬれといふ字迄、入用なるぞかし。

　ゆひ立の髪をのれんに氣遣ふて

　つくま祭はめし焼てから

前句のかしらのおもむきを、句上の作に轉じたるなり。

## 古人の名を扱句法

古人の名を出す事、軍の句法と相同じく、實に落さる處を工夫すべし。

　ちる花のなぐさみ畑に箔おいて

　齋藤六は蜂にめくばり

　又

天狗には寺中殘らずおどされて

　使者ひと通ッ清盛でいふ

## おかしみの論

おかしみは道具のあつかいと、言葉のふりにある事也。たとへば風呂に入て、いとぬるし火をもやしてといひたらん。なんのおかしき事もなきに、やれあつや水うめよとは、其人がらの億（臆）病と、又裸にて立ゐたらんすがたも、言下におかしみを生れば、俳諧の談笑は只常にして、狩人が蜂にさゝれたといふはおかしく、ひとり子を蜂にさゝれしは實なり。又手枕の塵を拂ふとは、常にしておかしからず。蟻を拂ふて起るといへば、吹出すばかりの趣向となる。其角が焦尾琴の附のうちに、屁をふるわする烏帽子かりぎぬ　といふ句は、禮服の嚴重なるに、とりはづしのすがたはと、いとおかしきふしにいひなせども、至つて野鄙なる作といふべし。屁がはじまつて蚊帳に寐られぬ　と麥林の作りたるは、はじまるのヿばおかしくて、逃出る人ざまも見ゆ。先論にいへることばのあつかひと、句作のまわりをしるべき事にぞ。爰におかしみの一兩句を引て、

水かけて追ふ寺のぬす人
くたびれてからしかる觀音
藪の病も醫者にたづねる
搔せてもおく婆々の疱瘡
春の頭巾は蜂の用心
よう此家へ鑓がはいつた
おこしてくれと鎧着た人

もし談笑の句作におゐて、一毛も理論あらば、落しばなしの根問にあふこゝちやせむ。中むかしの談笑は、多くはいやみの事ありて、自然のおかしみに至らずといはむ。

## さびしみの論

俳諧にさびたるすがたなきは、調膳に香の物わすれたるにひとし。されどさびしみを心得ちがへ、閑寂の事にのみおぼへたる多し。又閑寂にあらざるにもあらず。只ものずきの寂と見れば、さびしみは俳諧の躰にして、談笑も漫興もいづれか、さびしみにあらざらん。それが中に物すごく趣向を立たる句に、

窓の自慢もいやないなづま
横川から般若のとゞく秋の風

かく附たらん、前句の窓の自慢といふことばをのかさず。近江邊と見なして、八景を見おろす窓はよけれど、三上山よりかきくもつて、光りは矢をのべたるごとく、墨をながせるばかりの湖水のあなたに、一むらしげる森の中より行者の聲〳〵、いたふあらゝかに聞ゆと見たり。

　吹あぐる木の葉は空にむらちどり
　　宿かし〳〵もこはい上臈

二句ながら希因が作にて、彼はとりわけかゝるすがたを得たり。

### 作りたる句

　萩の下葉をかへすいなづま
鶏におはれた夢を啼うづら
　又
　しぐれぬ先と捨子いたはる
黒木賣ならべば小柴垣に似て

いづれも一卷の模樣なるべし。

### 模樣を轉ずる法

附の轉所は句作よりし、句作は趣向の轉所よりす。爰に一段の手づまをかへて

　よの事はみなどんな宗匠
　傾城のあばれる中でまめに成り

是雪月花の風流になづまず。養生主の躰にしなしたるなり。

## 第三

脇より三四句の運びといふは、あるは發句の模樣にしたがひ、あるは一卷の立にもよれば、そのすがたの極たるはなし。殊に古人も此沙汰をつくせば、今さら贅する事にならねど、

　ほたる火を一雨づゝにかき立て
はやぶさがよいもの一羽蹴落して
　枯木かとおもふ柱に帆を懸て
冷〳〵と股引はけば眼がさめて
　あたゝかになるは何よりかよりにて

惣じて第三は、發句のすがたに案ずべきなり。それが中

におかしみも、言葉にてあつかひたるも、只發句・脇の受となるべし。

## 麥林夜芝居の附句

續新百韻の序にも出せる、

　くいものも無ィにからすのむらがりて
　　晝はあはれに見ゆる夜芝居

いでやその卷は、諸家おの〳〵漫興して、玉を振ひ金聲を發す。麥林ひとり晏然として、今宵は句なきものに似たりと、若キ人〳〵はおもひもしつ。かの夜芝居の附句に至つて、滿座口をつぐむばかりなりしと。その後梅路にいへりけるは、かの句はじめに案じたるは、晝は化したやうな夜芝居　としたり。これおもしろき一作ながら、いづれも曲節にほこる時は、一段しづめて勝をとる。これ一座のこゝろへなり。汝よく曲節の句を得たれば、爰の一工夫あれやとなり。此談まことに殊勝にして、梅路が閑居に爐をかこみし、その夜の事もわすれやらず。雅神何ぞはやく梅路をうしなへるや。抑附句の自在を得たる間然しがたきおやじなりし。我ばかりかくおもふにや。

南北新話　大尾

東野　李趙校書

## 跋

麥林先師、茂秋を伴ひ、冷しさやどれおき直すやまもなし　と我幻ゝ菴に玉壺をたゝき、古を論じ今をしめす。その示す事法ならず、密ならず、傳ならず。たゞ默然としておかしき句あり。はた此徒南北に多し。南方の人連句にかろく、北方の人發句にはやき。これより〳〵の茶話なるをおぼへ、いま袋師の新話に跋するも、南北の二字折にふれて、むかし見聞るものがたりも、梓の上にあらたなりと、ことし東武の旅寐を慰し矢立に、淺草の露をしためて、吸露庵主の請にまかするのみならし。

延享五戊辰季夏　和州麥湖樓主人　［麥湖］［古山］

書林　東武日本橋南一町目　梅村宗五郎
　　　京都寺町二條上　井筒屋庄兵衞

紀行

# 俳仙窟

涼袋

## 俳仙窟序

予從預俳師于梅鎖由來向夜日於秋光菴壁而求風流那邊之落處將杦俳仙之二集卒哉先生之撰集如林巒不及此兩篇之玉於此祕校密板左有者於月雪之寶夜許光出者乎者

丁丑夏五月

東武秋光菴輕素 秋光 輕素

## 紀行俳僊窟序

我遊于山科之春而所見於四方之景色從伏見桃蹊提手于釣竿與杖笠而顏色蒼然男子來了見之武之俳師也左有者語古情於花衢日長迚東行我將東行于此歷其日有約支哉今俳師撰集也俳仙窟南仙錄何歷爲記夫奇事者乎于時丙子秋門入洛東青山序於

武城清友菴 青山 處白

# 紀行俳仙窟

吸露菴凉帒先生著

風路註
輕素校

旅は杖つき笠打着てぞ、土地もたちはなれたるこゝろすべき。これは大きやかなる浪華の船に、枕ながら移して追風待なり。殊更に此住居一とせ半あまりなれば、黯として魂を消すといふ友どちも多かるべし。楚辭ノ語ヲ用 きさらぎ五日澧はなれたるやうにて、おなじあたりにかゝる。けふも吹ず、けふも出ず。けふはそも幾日ならむ。けけふは海のおもて、十里ばかり澧出たりと云。

遠山にして人戀しうす霞

雨催したればあやうしとて、平戸の湊にかゝる。使していひこしたれば、雨夕・烏道、よし村なにがしも來たる。此地は風雅の同志も多きに、行る人あり病るものありてきたらず。さるはかたり出て止ず。春の日はみじかきものにぞありける。

舟も出な是も散なと花の友

あくれば花もちり、舟も出ぬべし。

是よりかの五十里の灘を追ほどに暮んとす。

遲い日を捨て東へ帆懸船

水は西北をつくして三韓に分れ、山は東南に起りて九州に峙り。打けぶりてそことはわかねど、伊岐津嶋・玄解の島、ほかはあまりに多ければおぼへず。

箱崎生の松原は猶見えねど、太宰府の御神なんおはしますは、あの高きあたりなりといふに、船の人もぬかづき臥ぬ。

舟の長いへる、入相の灯(ヒ)はなど擧(ゲ)ぬ。楫取の翁うけたまはりて、うや〳〵しく火とぼしたれば、まへなるもうしろの舟も、光(ツ)あはれにとぼしつれて日暮ぬ。いづれの事とへば、これより北の國に燒火(タクヒ)の御神と申なん立せ給ふをまつるなりと。

十日あまりなれば、月は定めなき雲間より漏て、朧げなる岩間にあたる波の音を聞に、さひつころも此わたりにてぞ舟はくつがへりぬ。よくをへといふは長の聲也。文字が闕もほどちかしや。汐もかはらじなど聞ゆるは、をのこどもの聲也。又先なる船にやあらん。火とぼしたれば、次(キ)なるも其あとなるも是なるもとぼしつれたり。これは夜(ル)はしるふねの道なん合するにぞ有ける。まとやあやしきもの〻變化して火を見するなど云、か〻るわざのあればならし。

夜は半過る頃、檀の浦にか〻る、

朧夜や寄來る波に松の聲

今宵ぞことさらにあはれなりし。

あかつきかたより降出て止ず。

かくて三日ばかりも過ぬ。風出ていつきの灘をもわたる。巾の時ばかりならん。波やはらぎて吹ず。白き濱邊に松の生出たるあたりに、いかりはおろしたりとおぼゆ。

夜は明たるに、佛の日なりとて魚をなめず。王臣貞江行ノ詩 二十日不嘗魚

人居遠ければ鐘もきこえず、唯うら〳〵となぎわたりて、その日も暮ぬ。須磨ノ巻ニ海の面はうら〳〵となぎわたりてトアリ。

泣て飛鷗に問へば涅槃哉

それより後も此わたりをはなれず。けふ幾日、けふいくかと數ふほどに、およびもそこなふべし。土佐日記ノ文段

出る日も入ル月も見えて猶永し

かゝることばは海の神も聞入たまはず。風なければ早き瀬にながれもどりて、かはらぬ島山にむかふほどに、朝夕にみればこそあれと打ずして、筆もかきずわづらひ臥ぬ。（朝夕ニミレバコソアレ住ノ江ノキシノムカヒノアハヂシマヤマ）あまりの事にあきれて、小さき舟おろして釣たれつゝぞことなく行に、大きやかなる巖の苔むししたゞり落て、ざれたる常磐木の陰茂れり。（浮舟ノ巻ノ文段）猶行ほどにひとつの洞ありて、舟も過ぬべければ棹さし入たるに、そことなく咲出たる桃の匂、かの武陵の人のさまよひ入たるもかゝる所ならむ。（武陵ノ人桃花源ニ入ル故事ヲカリ用ユ。）それより路めぐりて、いとこるきに片折戸しめたる、住ばこそあれたり。（風人隱士ノ住ドコロト見ユル也。）打しはぶきて（俳子戸外ニコハヅクリスルナリ）あるじやおはすらんといふに聲して、（艸菴ノ中ニ人聲ノキコユルナリ。）こはあやし何人ぞ。爰は俳仙の窟なり。こゝろあらばいざたまへ、かたるべしと、ありしむかしの姿もかはらず立出るは、希因・梅路のぬし也。いと珍かなりとて百川・司鱸もむかへ出ぬ。（此四友俳子同調ノ故人也。）猶別れし友は座をならべ膝を組居て、おの〱舌を動すと見るほどに、翁、一幅半の裾を拂ひ、手を拱ィて曰、世の人吾をして俳諧の祖とす。凡道を開き、法を興し、風を立、教を遺す。是これを云。吾にひらける道もなく法もなく風もなければ、只世の人のおもひまどへるなりとおぼゆ。（翁自風雅ニアルコトヲ忘、莊子ニ魚ノ江湖ヲワスルトイヘルガゴトシ。此ノ人吾ヲ俳祖トスルハ、オモヒマドヘルナルベシト云ナリ。）我はひとむきに好める事のありてといひさして其角をまねき、是は晉子也。（晉子ヲシテ俳子ニヒキアハスルナリ。）一とせ春の名殘なりしが、武のばせを菴にありてといひさして又支考を招き、これは支考也。（又支考ヲシテヒキアハスルナリ。）此子が書る葛の松原にも見つらん。かの古池の一章、晉が山吹の五文字をあにじたる、皆老が論のごし。（此一段長語ヲ用ズ。葛ノ松原集ニ支ヲユヅル。）我はたゞおもふ。（翁自ラ云ナリ。）俳諧は質也。（論語曰君子ハ質而已。）されば質、文に勝時は、我ども野逸なる也。春は梅の林に入て、手鼻かむ音さへ梅の盛と按じ、（翁李由カ門梅盛ニアリテ、手鼻カム音サヘ梅ノ盛リ哉 ト云句アリ。）秋は松風の軒をめぐりてと、秋暮の天をながめつくして、（翁浪花ノ旅亭ニアリテ、松風ノ軒ヲメグリテ秋クレヌ ト云吟アリ。）終に枯野の夢を見果たりしが、（旅ニ病テ夢ハ枯野ヲカケメグル 是辭世ノ吟。）いま此道を行人は誰ソ。（此道ヲ行人ナシニ秋ノ暮 翁嘆息ノ吟。）汝行ノ。此道はいとさびしくて、少年繁花の聲もきかず。（蕉門ノ風流何ゾ遊戯ノ間ニアラン。）ましてや絲竹の耳をみだり、月

さへ花さへ友としがたき。照前結後ノ文法、凮雅ノ正道ニイタルトキハ月雪花ノ風流サヘ友トスルトコロニアラズ。
滑テヤ婬聲ノ耳ヲミダルヲヤ。身を脩、家を齊へ是大學ノ八條目ナリ。その子耽れども親しさめず。夫あそべども妻ねたまず。君許し臣藏さず。是正道ナり。さるは此さびしき道こそ、我俳諧の大道なれと言て、一ト間をひらけば俳祖盤溪禪師。

按ズルニ、溪禪師ハ細川玄旨法印ノ社友、嵐山ニ庵菴ヲ結ブ。此時ノ吟ニ「猶アハレ吹ナグラレテ鹿ノ聲　コレヨリサキ玄旨、紹巴ニ伴ツテ東山ニアソブ。頃ハ彌生ナレバ山ノ櫻サカリナルニ、

此山ノ契約ナレヤ花ノ時　玄旨
夕日ツラヽニ眠ル海棠　紹巴

禪師耳ヲ峙テ曰、今兩師ノ句ヲ聞ニ、契約トツカヒ海棠トツカフ。是連歌ノ詞ニアラズ。アヤシムベシ。玄旨ガ曰、カヽルコトヲ俳諧トモイハン。我ハ志ヲ和歌ニユダネ、紹巴ハ樂ヲ連歌ニ置ク。世ニ俳諧ナクンバアラジ。禪師ヲシテ草創タラシメントアルニ、禪師ウナヅキテ、

樂ミノ四境ヒトシク霞來テ　盤溪

カクノゴトキ第三アリテヨリ、俳諧ノ内句モ起レリ。別書ニ傳アルヲ以テ略ス。

貞德・季吟・守武・望一・素堂・鬼貫の輩、只善ィ哉やと云聲のみす。イヅレモ翁ト意ヲ同スル也。翁、左右を目顧して曰、汝達おの〳〵見ル處を説ケ。我にかざり彼に設くるとなかれと云て默す。翁左右ノ俳徒ヲカヘリミテ各一見處ヲ説ベシ。カナラズ翁ノ見處ニアハセテコトバヲ飾リ、客ノ俳子ニアハセントシテ別ニマウケテ説ベカラズトナリ。其角襟をひらき眉を拂て曰、俳諧はおもしろかれ。只人をよろこばしめよ。句は强かれ眠るべからず。我、翁に拾薪のむかしは軽口拾新澁味かくさびしかれとおもひしも、翁に准ンずる德なければ言行一致せざるを破りて、其角性活也、句ハ翁ニ習フトイヘ𪜈志虚逸ナラズ。

あかつきの返吐は隣かほとゝぎす　其角

と案じたれば焦尾琴ニイヅル。青樓の公子おかしがりたまふを聞て、青樓繁花ノ公子、志サカンナルガユヘニオノヅカラ賞ヲトラズ。故ニカクノゴトキ放逸ノ句作ヲトル。むかし我云捨たりし

秋の空尾上の杉にはなれたり　同

と云句を是晋子ガ妙境終に秀逸とはかたらざりし。其角ミヅカラ此句ヲヨミンズレ𪜈、聞ウル人スクナケレバ終ニ自讃ノ句ナリトハカタラス。しからば、我惑へるかとおもへば、さはあらず。おぼへず時の拍子にほこり、いまは此處といはむに誰か非とせむ。卑陋ノ句ヲ是トシテカタリ、秋ノ空ノ吟ヲ非トシテ語ラサルニハアラズ。只人ノトルトコロニマカセテ、時樣ノ流行ハカクノゴトシト云ツノリタルナリ。我は英雄也。晋子ガ自讃天下の俳徒をあざむきしむかしがたりも、ほゐなうこそさふらへ。カヘリミルニ談笑ノ過タルヲ悔ルナ

り。嵐雪・嵐蘭・沾圃の徒、我〳〵は一むきに翁をこそ尊とめ。私に何をか読む。是一定ノ見處。杉風曰、風雅は人倫の一道也。翁は大とこなり。そむくべからず、あざむくべからず。俳諧は戯論にあらず。戯言なれども思ひより出となん聞けば、いとはづかしき物にぞ。張子厚、東銘ノコトバ。丈艸曰、風雅は心の念なり。念は風雅の魂なり。一念起リテ一句トナル。さるは六字の彌陀の號も、十七文字の風雅の吟も、いづれか妙音にあらざらん。草木風声念佛ノ意也。人は只障りなかれ。障りなければ念をたもつ。鑑曰、兵主礙サハリナキトキハ不動ノ念ヲタモツ。我は蛙に観相して、風流此去ッて亦いづこにか求めん。トリツカヌチカラデ存ム哉ノ吟ナリ。鑑曰、去此不遠、是丈艸カ観相此ニ爰ニ一定ス。去來曰、我は只好めり。そのこのめるや、句に何となくうごかざる場あり。案におのづから幽艶の地あり。是を練是を巧めば、樂又其中にあり。句ニウゴカザル場アリトハ、タトヘバ翁ノ、三井寺ノ門扣カバヤ今日ノ月　是三井寺ニアラズンバ句ニアラジ。行春ヲ近江ノ人トヲシミケル　モ只其近江ノコトバヲエタリ。按ニ幽艶ノ地アリトハ、山路來テ何ヤラユカシスミレ艸　言外ノ餘情只シル人ゾシラン○樂又在于其中。論語ノ辭。孤屋・正秀が徒十余人、只たうとがりて同時にうめく。翁ノ門人三千人、其内ヲ學テ學ス、露通が曰、風雅は詭道也。さるは兵は詭道也といはむがごし。孫子曰、兵ハ詭道也。かの詭て治ュと云。我風流もさのごく、或はほとゝぎすに夜をあかし、或は名月に立

つくすなど句に作れども實事にあらず。されど志を爰に置たる翁の本意にもかなふべしといはん。露通ガ見處亦人ニ異ナリ、風流ハ心外ニ偽ヲ述ルモノナリ。サレド是ヲ常ニスルトキハ、ヲノヅカラ風致ニ叶フトナリ。野坡曰、汝に面せしはいつのむかしぞ。俳子壯年ノ昔浪花ニシテ野坡門ニ入ル。其時、我いへることのありしが、能風雅をたもてりな。野坡、俳子ヲ評シテ曰、彼ハ風雅ノ逸物也。老ナバ當ニ益〻サカンナラン。風雅は流行をしらずんばあらじ。されどそのほゐはうしなふべからず。句は只細かなるべし。詞はあやをなすべし。野坡ハヒトムキニ流行ヲ志テ、時様ノ一流アルベシトオモフ。サレド蕉門ノサビハウシナハジトス。翁モ細カナルコトハ野坡ニシカズトユルサレタレバ、自モコマカナル場ヲ專ラトス。「鶯ヤ茶ノ葉ニソヽグ畑ノ端　ナド野坡老後ノ吟ナリ。或ハ「松散ルヤ風ヲ二葉ノツヽミ紙　カクノゴトク按ズルヲコマカナル場トオモヰイリタルナリ。猶コトバノアヤモカクノゴトシ、されど汝は此場をとらず。俳子ハ此場ヲトラザレバナリ。

からかさのかつらをとこや杜鵑　　野坡

竹に来て猶脚早きしぐれ哉　　同

かゝる程を好むで、汝が家の寳とす。かくて梅從・風之やあると云に、雨子出て、彼は我徒の絶交なり。雅を分ち志を異にす。ものいふべからずと云て去ぬ。雨子、俳子ヲ疎メテ野坡ノ菴ヲ裏ラントス。俳子、坡門ヲ破リテ賀北ニ到リ、伊勢ニ行テ一家ヲナス。北枝曰、風雅は高かるべし。くだるべからず。時に應じ人に合せむとするは雅人にあらず。是巧言令色の徒なりと、のゝしつてにらむ。巧言令色、論語ノ辭。北枝ハ賀ノ

金城ノ人。翁ニ從テ風流ヲヒトシウス。名句多シ。性野逸ニシテ志高シ。「吾頭巾マゲタリ今朝ハ南枝花　是北枝ガ早春自得ノ吟ナリ。」支考曰、惜イ哉。汝と時を異にせる。汝遲ふして我文盡ャ、我早ゥして理論に墮ッ。汝ト時ヲ同ジタラン文章モ良クツタハリ、且ツ理論ニモ屈ハマジキヲ、吾過チハ理論ノスギタルナリトゾ。されど我は宋儒也。汝は晉人也。兩朝の風化なくんばあらじ。支考自理ヲ以論ズルトコロハ、正ニ宋儒ノ見處ニモ同ジトナリ。俳子ハ理論ヲ言ハズ。サレドサマ〴〵ノ風化ノアルモオモシロカラントナリ。又おもふ。理論の高きも不是なり。清談の高きも又不是也。風雅ハ只平話ノヤスキトコロニアソブニゾアルベキ　願くば我風流も婦人の耳にやすからんこそ、天下に及ぶ秀逸とはせめ。ヨクキコエテ、風流ナルコソ願シケレトナリ。中におすて出て丹州貝原ノ俳、風雅ニ名アリ。我に向ひ、此我ハ俳子ミヅカラ云　支考の詞さもあらん。いまは昔のむかしながら、我貝原の山里にあやしき娘たりし頃しも、洛の季吟と聞えし人ぞ時の名譽とおもひ戀しが、水無月の土さへわるゝあつき日水無月ノ土サヘワルヽアツキ日ニヒトリ露ケキナデシコノハナ　丹波の山越を、此里にくだり、我家の門にたゝずみ給ひて、水ひとつと乞へれたるを、此人よと思ひつゝ汲出て參らすれば、いちはやくうけんとあるを、洛の季吟にてやおはすらん、何あらばまいらすべしともどく。オステ水ヲ汲出テアタヘズ。即一句ヲ乞也。　打笑ひ給ひて、こはかど〳〵し、カタマシキト云コト也。　何事ぞとて、うけもちながら、



葛水や鼻の下行よしの川　季吟

と聞えたれば、當座の吟ながらをかしかりし。女はつたなきものにぞはべる。かゝるたぐひは聞うべきも、むづかしき文の詞はわかちはべらず。何も横ざまに巧みたるわきまへがたし。只いせの叟こそよく聞えたるやうにぞといふに、知興ありて、大和ノ國萩原ノ里、森川氏ノ女、父モ俳林ノ徒ニシテ古山ト稱ス。知興壯年ニシテ身マカル。遺書モ俳林ニ學ビテオサナキヨリ名アリ。京板ニ石居ト云集アリ。　我はおさなかりし時より、文字の教も一トかたならず。風雅のわざもならひはべるが、をさなくてさへよくわかちさぶらふとかたる。素心尼、耳をかたむけつゝ、賀ノ金城ノ俳。智月にむかひ、智月ハ蕉門ノ集ニ出。翁の教もさにこそありけめと問へば、智月打うなづく。兩師ノ教モ只ヨク巧ミテ、ヨクキコヘヨトナリ。　園女ありて、伊勢ノ産、ノチ東武ニ住シテ、其角ト時ヲ同ス。女は執心の深きものにぞ。此道に思ひ入てより此かた、浮世にをのこはなきものゝやうにおぼゆ。風流ノ鐵心男女ノ間ノ情ヲ忘ル。園女ガ風流ノ至レル、大キナル論ヲ作リテ是ヲカフムリ居テ男子ニマミユ。　遊女奥州ありて、京島原ニ流ヲ立ル、風雅ニ志アリ。翁壯字ノ吟ヲ撰ム。　我は川竹の起臥しげく、かゝるわざに心はゆだねはべらねど、此身のさまぞ、よく俳諧の友とやらんには似はべる。百夜に百の枕をかへて、うれしきもおそろしきも、ひとよのつまの心〳〵に、此人

たないとなかし。來てやたまへかしと、おもふにつのりて打あかしたれば、雨にも月にも戀わびたる。さるは心の友なればならし。さるはくるしみあかす人には、コレハ心ヲアカサズ、ヘダテタルオノコ也。つとめばかりの何をかかたらむ。是しら雪の調べにあはずとか、いとはづかし。女のまばゆからず物いはんも、おもてふせなりとて止ム。白雪ノ調聞人ノマレナル詞ヲ云出ナガラ、サスカニ女ノ風情ヲツクセリ。麥林曰、我は句を好む。理もなく論もなし。魂は只風流に置て、句の巧みはあつかひにあるべく、あつかひは只詞にあらん。句ノ巧トハタトヘバ鶺鴒石ノ句ヲ作ラントテ、鶺鴒小町ノ謠曲ヨリ案ゼントスル、是巧ナリ趣向ナリ。アツカヒトハ鶺鴒ト云詞ヲ入ズシテ、ヨクキコユルヤウニセントアツカウ也、ソノアツカヒノ云ヒトリト云フハ、「此石ノ内ゾユカシキ秋ノ暮 つよきも又一場也。よはきも又一場也。細かなるも大なるも、只句に成ルと、ならざるとの間なりとて、細大強弱ハ句ノ生レニシテ、イヅレモ句ノ一場ナレバ曾テ好悪ノ論ニハアラズ。

強　雞頭ノ立往生モ十夜哉　麥林
細　海棠ヤアタマ刺（剃）子ノ顔ノ色　希因
大　奥州ノ笠キテ伊勢ノ案山子哉　三十六
弱　白イ手ノ雪間ニツモル若菜カナ　地余

希因をみれば、希因頭を擧て、我に一辯有。案只細にくだる。白、是を一跳せんとて、うき世も名残ちかき頃ならん。

たばこ火はあれど乞食なり鹿の聲　希因

と迄案じたりしが、あやまてるか。希因ミヅカラ細ヲマヌガレンコトヲ欲シテ、コノ場ノ案ニカユレに、細ナアヤマテルカトカヘリミルナリ。禹洗・素風の輩をはじめ、越の先哲座をならべて、北海の風流いかむと問。西子ハ麥門也。北越ノ先哲トハ三越ノ間ノ風人也。露川・支考等ノ門人多シ。涼兎・曾北出て曰、我はかるく、曾北は重し。天才か闘るやと云に、涼兎カコトバナリ。曾北ハ子氏ニ伊勢ニ住ス。梅路曰、我は發句を得てす。句ナキニアラズ。内句ノ秀タルヨリ是ヲ見レバ發句ハスクナシ。みづから其ゆゑむをしらず。おもふに工夫のおく處を異にすれば也。發句ノ工夫、内句ノ工夫別ニアルベシトオモフ也。凡内句と發句の違は、平話を三つにして發句也。平話ヲ三ツニスルトキハ清話ハ十ツナリ。タトヘバ梅ガ香トハ清話ナリ。山路哉共清語ナリ。ノツト日ノ出ルトハ平話ナリ。是清語ハ過テ平話ハ少シ。清語を一つにして内句也。清語ヲ一ツニスルトキハ平話ハ九ツナリ。カヘル雁トハ清語也。雲舟ニ成リ狩野ニ成リトハ平話也。さるは其風景も、

撞ねば成らぬ釣鐘に蜂　梅路
「平話 氣違の歸る處も「清語 夕がすみ
いまの喧嘩はおれがもらふた
「平話 兩方へ兩國橋は「清語 暮かゝり　同

いづれも發句の風景にはあらず。爰を以希因をみれば、

ミヅカラ嘗ズル聯ヲ以テ、稀ニカ嘗スルヲミレバ、彼が内句の風景、各發句より投じきたる也。

芦の穂綿に船頭の夢

吹れ來てまだ土ふまぬ雁の聲　杏因

西風に降來る鷺は寒からず

植あまつては皆も投合ふ　同

かゝる巧みは彼が家にて、人上のあつかひも此場をさらず。我は發句のみ(ん)にじ入とも、只人上をはなるゝことかたし。嘗テ事ヲ[illegible]、何ノサマヲ[illegible]。柳居ありて曰。我長水のむかしは、これなる沾徳の風を學で。点を競ふことをこのみしが、いつの時雨の夕ならむ。此宗瑞と膝を組て、宗瑞モ武ニ住ス。蕉門の意旨を探らんやと云に、同ずる者共に五書、額を合せて集を撰み、五書ノ集アリ。其、東國の風洪をして、蕉門の寂には入しむれども、終に頭に一歩を進めず。[illegible]、長水後ト稱シ柳居ト改ム。麥林ヲ師トス。サルハ社中ヲ右風ニス、ミ入テ、理論ノ間ニ風雅ヲ説キ、聊志ヲ合セタレド、終ニ活發自在ノ風致ヲ不レ許、故ニ一步ヲ進メズト歎ズ。又曰、武城の俳諧林いごく、翁を以祖とする者あり。其角を以流を立るあれど、武城は武城の風化をかまへて、其の俳諧と云もの多し。其俳諧殊に奇にして、妙に入神に入ル。

其内句の一句を以是を論ずるときは、いせも又及ぶべからず。惜むらくは一句にして、附もなくわたりもなし。武城ノ内句ヨク人中ノサマヲツクシ、人情ヲ述べ、見ルトコロヲ句ニス。奇ニシテ妙也トイハン。サレド一卷ノ變化三句ヲ論ゼズ、撰點ノ者モ亦シカナリ。マシテ附ノ味モ論ゼネバ、[illegible]。嗚呼、梅が香を櫻に匂はせたらん、あるとかたし。あら闇浮戀しやとかたる。梅ガ香ヲ櫻ノ花ニ匂ハセテ柳ノ枝ニサカセテシガナ。是人情ノ顯ヲヨメリ。柳居ガ歎息モサノゴトク武城ノ内句ニ支考ガ論ヲ加ヘバ玉也。サレドサアルコトカタケレバト歎ズ。百川ありて只笑ふ。百川ガ性柳居ト大ニ異ナリ。故ニアザケル也。天下の俗徒、俳諧を以一大事とし、かなしひ哉。蕉門のおとろへたる。彼は才子なれども放逸なり。彼は文あれども實少なし。彼は俳諧にはおくれたれど、いかにせん人のおさまれるなど云、皆頑愚の徒也。百川ガ己[illegible]ハ雨花[illegible]ノミ。何ゾ人[illegible]ヲナサムルノ[illegible]ナラン。[illegible]ヲ論ズルトコロニアラジト也。されど我書を賣てみづから給ふのいとま、百川、昇角ノ名ヲ變ジテ、久シク俳徒ヲマヌカル。後京師ニ住シテ漢書ヲ寫シ、賣畫自給ス。ト稱 かの昇角のむかしをおぼへて、頑愚の徒、書讃を乞ひ集を乞ふ。我このまざれど、あたふれば賓に代ふ。書讃ヲ賣リ、或ハ撰集シテアタフルトキハ、俳徒[illegible]ニカフ。かふれば又妻を養ふ。是此一事也。書すも業とするにあらず。只流聊耕に代ると云て欠(アッヒ)す。百川ガ印ニ[illegible]。[illegible]代耕。許六・[illegible]八・巴静・桑八・李由・[illegible]元 角上の輩、由よりくだりきたりて、障子(ソウ)ノ陰に立聞をしらず。おのおの

むれば、希因・梅路も作ひ出て、北海の風流おぼつかなし。（風雅ハ新古ノ間ニ志ヲ置トキハ誤ナシ。）只ひろかれ。せまるべからず。（北海ノ人氣一處ニセマル。希因コレヲ嘆ズルナリ。）是をつたふると足下にあり。梅路又たもとをひかへて、いせは繁華のちまたなれば、奇をつくし新をうしなひ、却て新古の間に漂ふ。（伊勢ハ俳徒多シ、故ニ新奇ヲツクシテ或ハ其稽ヲウシナフコトアリ。）此一卷は我賀北にありて、諸子と遊びし一座の句也。好キも惡キも此場にあそばゞ、あやまちなけむと、我とともがらにあたへよやとて、（俳子投手スルトコロノ一卷、別ニ撰集アリ。南仙錄ト號ス。）兩子も此ほとりにたゝずめば、我は杖笠を手にあつめて、いづれの道をやかへり得むと、うす紫の霞を分るに（仙家紫氣、山青水みどりに多シ。）して、人家も白き軒をならべ、花頂山の鐘遙にひゞきて、その日も午の刻ばかりならむ。伏見の桃の林に出ぬ。猶夢の心地すれど、旅より行身なれば行キゆくほどに、かゞみ山のふもとにいたる。年經ぬる身は老やしぬると打ずしたるも、かゝる沈ミたるさまは何とか作ルべき。（句ハスベテ沈情ノモノニアラズ。屈スルトキハ機格ヲウシナフ。故ニ俳子、カクハ云也。）

眉掃キは野に捨てありかゞみ山

おもひ入たる事にはあらねど、當季の折にふれたればならし。

美濃路
野上の宿シユクはいさあれしが、むかし歌舞の地なりけむとおもふにも

床の霜別ワカレれ〱て麥畑

東海道
是より東にのぞめば、大道猶糸のごとし。

一筋の道より出して柳哉

佐夜の中山

鐘撞に報ひや眠き春の夜ぞ

駿河路

暖な雪さへ高し山ざくら

うつの山

踏かねて猶細道やすみれ草

此後は句もなかりし。

## 俳諧南仙錄序

我仙篇を別れし時、梅路此稿を與て曰、公わがことばをあやまつべからず。我諾シて曰、季布何ぞむかしの人ならむと。さるは懷にして是を讀に、かの夜ル光リ出たらんものゝごとし。我門に翀羽なる者あり。久しく風雅をこのむ。見すればひた抱いて、鈎を按ぜずはた梓に乞。ゆるすに彼が管見を加へ、集を號るに南仙錄とす。路は南方の仙なればならし。

吸露菴序

子仲冬

# 南仙錄

梅路

### 附句心得の事

凡風雅をたしむもの心えあり。我遠く他邦に來たりぬ。かゝる句作・かゝる趣向は、我古郷にも程經たればしらじ。まして他邦の人をや。しからば此前句を受て此句を入たらん。先人をおどろかすべしと、俗にはめ句とか云。是たしなむべき第一にして、かゝる事に志のひくからん。生をかふるとも、風致にはいたるべからず。若久しきを忘れて、こゝろの外に似たる句作などいひ出さん、神もしるべからず。夫さへ風雅の歪キには非ズ。只勝をちぎりて、古人の糟粕に醉ざるを、風流者家のたしなみと知べし。さはとてひとむきにおもひくして、遲吟ならむは猶止がまされり。はた他邦に入て其座中を見るに、各他客の句を守て、聞入ルさまなんみゆれば、おのれ誦、ひとをおどろかさずんば死とも止マじ。好キ句やせむ。よき趣向やあら

むと、我に惑ふを有。是はた風雅の未熟にして、全く絶唱を得ざるの元也。發句は退ィても案ずべし。附句は當意卽妙なれば、機に臨ミ變に應じ、まづ聞へて一作あらば、安々と出すべし。只一兩句口をひらけば、胸中おのづからほがらかに成て、名句はそのしりへにあり。凡名句は金のごとく、平句は又いさごのごとし。金を堀ルもの、先いさごを穿つ、名句はおのれがちからを以、みづから胸中にそなへたれば、まづそのいさごを穿にはしかず。意、前句に臨んで凝滞せず。打越・わたりを大凡に見なし、一作目を出ス時は、かならずわたりも打越もはなれ、附は猶云べからず。又此わたりに屈するやからは、嶮岨を見上ておそるゝがごとし。我足を以何ぞ踏マむ。我ゆかじ。われゆかじとみづから此わたりに屈して、一句をいだすに所をうしなふ。達者はその嶮岨を見ながら、爰を踏ミかしこをつたひ、やす〳〵とのぼりこえて、総に打越の難所をしらず。しからば唯行にはしかず。行とは前後をかへりみず、何を吐んにはしかずとの謂ィ也。爰に

**肩衣草といへど泥水**

といふ前句あり。人はむづかしき前也と云。さにあらず。かゝる前句は此句を付よと、前句より趣向を教えて、誠に後句の師也としるべし。肩衣草を以て禮服とし、泥水を以、田莊の場とし、一句のあやを盛衰にとれば、

　肩衣草といへど泥水
　鎌倉は今百姓の馬肥て

我かく付たり。天下の俳徒誰か難ぜむ。また、

　夢もまことに成た富士山

といふ前句あり。是も又先論のごとし。人は前句を見て趣向を立るに、只遠く探り深く入。故に句も遲く作も又いとこちたく、多くはきこえざる所に到る。附句は直チにとるべし、もてまはるべからず。前句の意旨を動スべからず。

　夢も誠に成た富士山
　乗懸の上も夕べのふとんにて

はた、しりへに二三十章を出すを見よ。我法は直指也。かならず深遠の場におちいることなかれ。

小子峠羽、備おもふに梅路先哲の附句、作深うしてことばかろく、よく長きをしてみじかうし、みじかきをして詞にあつかふ。長短屈曲をの〳〵ことばに見る所ありて、趣向

雪解すまして山の日うつり
舞た手に妓女が小鍋も長閑也
しめなをす帶にも岸へ船よせて
まだ尻出さぬ瓢箪の花
うけられてこゝろも細き暮の月
戸立てのれば駕の部屋也
切ばりの後は障子も物いはず
世間がまめで匕は俗に
温泉の山のちかづきもどす迎駕
麁相な負が袖に一目
楊弓もそれて日向に羽を休め
くゝればひろい幕の振舞
大木の花の由來は古暦
蜂の巣共に守る輪番
牡丹見ぬ目の奢る芥子畑
綿ぬいでかるめば旅が高う成ル
きのふから來た出代りの聲
手間取て髪ゆふくせはうつくしい
棒組は船のはなしをあちらむき
着て居る濡は着てかはく也

## 人上

ふりむけどまばゆうもない夕日影
嫁入についた婆ゞの物しり
藁で葺ても作の觀音
若い衆に耳さへ利かばまだ負ぬ
相撲に負てやつて中よし
江戸見るを德にせうなら駕が有ル
きり〴〵すこちの袂をはなれかね
歸參を馬で迯る在鄉
開帳も立テならべたる札の辻
疊が干てあれば留守也
大根の瘦る畑うらみる
おれが顏むづかしいやら聟が來ぬ
瀧はあられの音にまぎれる
鉄炮も捨たいほどの無仕合
草花に遊をかへて町はづれ
咳氣のあたま直に撫付
煮賣のはなし直に献立
笈摺をぬげば凡夫の氣にかへり

三味線も折〱かゝる刀かけ
　欲は妾に若う成たい
常さへも長い日脚の物おもひ
　ちぎれ具足を見せてかくまふ
夕立にとまつて隙な櫛田川
　くゝつておくが氣違に慈悲
戻つても心は旅にまだ殘り
　味噌におごるも坊主ではない
商の夢を元手に旅の空
　女房のこゝろ無理云て見ル

## 季万の扱

　菫が咲てむらさきの原
水○茶屋はぬ○るむでからの杜立
　青いけしきを和かに踏
別○れても笈の佛○は身に添て
好ィ秋とめでたがるさへ歯のぬけて
　小春○の來るは餅米っでまつ
今日の酒花から醉てまだ醒ぬ
猿ってもどした玉ᶜ生の近付
　呑メそうな物明て取出す
しれた事練っ〻で供○養を見にゆかぬ

遣吟凡三十五句

## 跋

先生吸霞菴の主人、俳仙の窟にさまよひ入て、其記また爰になれり。さるは朝な〱に帶ゆるう、悲の腸きざ〱に斷〻ざるも、まとは遊仙の窟にあらざればなりと、此集いとたふとくおぼえ侍る。

武山雙飛稿

紀行俳仙窟了

秋光庵藏板

寶曆七丁丑九月

書林

江戸通油町
須原屋太兵衛
京二條寺町西入
井筒屋庄兵衛

# 蕉門一夜口授

麥水

# 蕉門口授貞享之式　第一章略

## 俳諧の道とする事

式ニ曰、俳諧は何の爲する事ぞや。答曰、俗談平話を正さんが爲也……………………されども俳諧の姿は歌・連歌の次に立ッて、心は向上の一路に遊ぶべし。

古池や
蛙飛こむ
水の音
翁

# 蕉門一夜口授



ことし秋いかなる風緣にや、片葉の蘆の片たより
に聞し故友を尋んと、此難波津に旅寐せし五たり六
たりまで、十とせ廿とせ過こし人〻に面して望ミ足
りぬ。此人〻の日〻に導キて、古キ跡・尋キくまぐ〻
見侍りつるが、是を云ンは事ふりにたれば止ミツ、國
にし相見てるより、ひたぶるに芭蕉翁の道のみひが
める迄に好ミぬれば、是をこそとて友のいざなふて
一屋にいたる。爰なんはせを翁の終りを取たまふ御
堂の前、花屋仁左衛門とかいへる人の屋なり。此裏
坐鋪、翁の假屋せられし、今其儘なりと聞へしに
ぞ、常の家居ながら我心しも禪林古宿の心地し
て、久しく打守り歸りし。近き頃に此わたりの人〻
爰に文會を始ムと聞へし。やさしく床しきや。
野拔なる人の無名庵のあと見侍るに、今は風流の人
も不レ住。月雪のうつりかはるはさもにや。爰は極
樂橋と歟いゑり。其頃は此庵より外は、鴈わたり鶉
啼野原なりしを、いつしか此軒端につゞきて、高津

新地とやらん氤氳の娼家に埋ミぬる。其人あらば、又野ずへにぞ菴うつしてんとおもへば、廢れるも亦口おしからず。

おにつらは伊丹とやらんにゆかり殘り、之道・洒堂・舍羅・車庸のたぐひ、その名ごりおぼろげにも聞へたれど、たづねも盡さず。古翁の吟魂を祭るいしぶみは、あまた所拜しつ。かゝる道明らかなるに、其風韵は絕てし聞かざるに似たり。云合ひておしむ。

○故友曰　卿(鄕)にありし日は、予が門に遊ンで蕉門の一路ほの聞しが、今や繁華のなには、甚ダ風雅奢美に流レたるやうに覺へて、おのづから口を閉たる事十年。今日子に面して又もとの風遊をおもふ。只この一ト夜の物がたりに、正風の一路端的に聞受る事を得んや。

答曰　翁の道は意也。形に預らず。思無邪ノ教を思へば、一言のもとにも得べからずとせず。尋たまへ、中侍らんに。得べくば得、捨べくんば放下せよ。

問曰　今世に蕉門と稱する人ゝの句風悉クかはれり。是皆翁の道たらんか。いまし發句、いまし附句、其正風なるといふものを論ぜよ。

答曰　世に行ハるゝ蕉風、門を分ッ事かぞふべからずとも皆是正風なり。只俗理と雅理の差のみ。是を端的に分たんには翁の詞を證とし、二十五ヶ條に云所の俳諧は何の爲にするぞやと問ふて、俗談平話を正さん爲也と答ふ。此たゞすといふ字を以てすべし。今や俗風の誹諧及ビ附合、俗談を正さず。加ふるに俗中の卑俗猶邪言をさへに入るゝあり。此正の字さへ胸にあらば、かばかりにはいたらじ。

其うち發句は多ク形淳なる物也。然レども蕉門の魂をうくるものすくなし。されば、

古池や蛙飛込む水の音

此吟有ッて貞享の頃の門人、此句に依ッてはじめて正風の目を開けりとか。是此句中無形の珠有ッてしからしむる。此珠を心付カば自ラ發句出ずとも、蕉門の寂に樂しみを置に足れり。此二ッの物、よく蕉風の發句を

貫クちかみち爰にあり。

○二條示りぬ。猶委ク聞ん。

曰　蕉門を以て世に鳴ルもの多し。先云はゞ美濃の東花坊、續イて此地ノ半時菴也。東花坊は翁の枕席に侍し、自ラ晤語をうけ、半時庵は其角に從ひて翁に一世を隔ツ。皆正しく芭蕉の親韵を受。世に鳴ル眞に宜なり。然れども東花坊は道を俚俗に引下して大に蕉門を說廣ム。其功は多し。初メ支考なるの日は句々朴實にして翁の餘韵あれども、終りには三藏も長太も聞うけんをこそとやらん云て、一向に俗談卑理、損德の街に落ツ。其頃の小集は只世話詞の俗本よりいやし。又見るべからず。半時庵は高情奇語、正しく其角が風韵は備れども、只付句の意、鄭聲をなし、蕩言に流れて、父子同坐して見るべからざるにいたる。此兩幣(弊)、皆是俗談を正スの字を忘れたる失のみ。此幣言を除ケば、直なるも曲なるも、魂をうけたる句は蕉風ならざるはなし。左はいへ、又蕉風只直なる事のみよしと定めて、けふも月花の古ミ、翌日も雪・ほとゝぎすの其儘なるをいふのみに、時を費す一門あり。是は蕉門の木偶人にして、是又正風ともいひがたし。俳諧はもと一作の表向キにて、諷諫談笑を以てすと云ながら、正風の本意は、諷諫の句に談笑の心なくとも、談笑の句に諷諫のこゝろなくんば有べからず。

○古池の句に無形の珠ありとはいかん。

答曰　此句、初心蕉門の人は名吟秀逸のやうにおもへるもあり。左にあらず。只是翁常の吟にして、强ていはゞ少は不出來なる方ならんとも思へり。然れども貞享の頃の門人も此句より正風の心を知り、今の人我輩の如キも此句より高情をさとる。誠に蕉風の梯階なるべし。門人一論ありて此五文字、山吹や　とあらば如何にと。然れども忽チ悟ッて古池に服すと也。是又其頃の高弟なる哉。この句は常に心上に置イて考案すべきの吟にして、爰に句解を付べきにはあらず。然レども予老ぬ。鄕に歸らば生死を隔ンとすらん。さらば强て此句論を云はゞ、五文字、山吹にもせよ、藤にもせよ。上に見るものあれば景の句にして形の吟也。世人

多クは閑静を賞するとし、或は侘、或は寂、只此細ミと稱すれども、猶左にあらず。是は只音を聞クの吟也。古池は、おとの蛙なるべき理をいはむとのみ。形にあらず。蛙飛込と云ふも、蛙を見たるにはあらず。音の理をいふ。水も又同じ。然レば音といふ字のみにして音といふ時ははや第二義なり。我等ごときもの、音の句を案じなば、蛙飛込ム音淋し　とかすべし。句弱ク、理淺ク、聞べからず。古池に水あれども爰にて水の音といふ處、禪機第一義を見るべし。六祖曹溪の一聲の碓も、過去の聲は盡キて未來の聲は不レ響カ。終日只一聲とか聞べし。爰ならん。音を譽れば第二義ニ落チ、音より上には見ルものなし。此飛込と音との間の聲を聞ク。爰に無形の珠あるを知るべし。此意味の事は翁一生の句ミ、此魂なき句はあらじ。然レども他の句を以ては此魂を見得がたし。されば今世に芭蕉の句註とて八百餘章の吟の中、八九十章を撰ミ出して句解をなす。此類書多ク見へたり。只纔に文字のすみにごり、句語の上下、よみと聲との違を論じて大切の事とす。さるは格物致知の類ならんかも知らねども、先ツは象尾象脚をさがす人に似たり。今夜の論に至りては、是も木偶人のかざりにやなぞらへ侍らん。

○問曰　綾足といふ人、とはじ草と云を著ハし、この道をたはやきぶりのかたうたとし大に譏ル。子が先キにこたへし條ミを見たり。事長ウして覺ユべからず。是も捷徑に聞ん。

答曰　綾足蕉翁を不レ知ラ。混じて俳諧を譏る。定めて其いはれあるべし。予も俗誹を顧れば、其そしりなきにあらず。只はせを翁の一門のみは、俳諧無形なれば此そしりにあたらず。片歌とも片詩ともいへ、我蕉門の遊ぶ中也。名の名とすべからざる事は、則二十五ヶ條の第二條　俳諧の名とする事の下を押ても、心を付ヶば知らるべし。綾足は俳諧士の名を忌ミて、よし原鳥の鳴に似たりと別に名を求めらる。其名を求る所蕉門におとれり。かた歌と名づくるが爲に、詩の如き句に遊ぶ事はあたはず。蕉門には何とも名づけざるが爲に、詩の如キ句もあり。万葉体の句もあり。俳言を入ざる

はもとより也。種々に流行して遊びを放にす。片歌の哥にばかり、くゞまりよりたるとくらべばいづれ。

○問曰　白尾坊といふもの、かさりなしと云集に予を譏ル。予聞てこたへず。又怒らざるはいかん。

答曰　白尾坊は予を實なし栗集ニあそび、貞享蕉門と稱すと譏ル。是は予が願の儘なり。此事一人にても告足らざるを恨とす。然ればこの譏は予が方人に似たり。實なし栗は其角が編處にして翁の跋あり。しかも鹿嶋禪窟の頃にして、芭蕉洞桃青鼓舞して記スと有。へ其話震動、虚實ヲ分たず。實の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を冶ふと云云。かゝる蕉翁の稱譽の書を捨て見ざるは、蕉門の人にあらず。其意を取ッて味へば、翁の句魂悉クあらはる。又白尾坊曰、翁ニ貞享・元祿とて二人の芭蕉あらんやと云こ。是は白尾坊が翁の句を探サざるゆへなり。實も翁の一意なるは知レたれ共、句風は度々に替ル。世には、はせをを七度變風の人と號れども、今夜の早口授に云はゞ、先ッ目のあたり見る所三度なり、貞享以前・貞享・又元祿の頃と也。句意はかはらざれども姿には違あり。たとへば釋氏一代の說經、釋迦に二人は有ルまじけれども、其聞受る處、人々の氣殊にして宗々相分ル。翁の句も又左のごとし。白尾は只己が師鳥醉の句風にのみ胸ふたがり、他を味ハざるの誤也。

○翁三度の變風、つぶさに聞ん。

曰ク旅中只おもひ出るまゝにす。世に年譜・行狀の記あれども、ちかみちに大体を云はゞ、

正保元年　申　　蕉翁生　伊賀上野藤堂家中

寛文三年　卯　　翁廿歲　浪人シテ京ニ出ル松尾氏

延寶二年　丑　　翁三十歲

此間宗因風の誹諧也。一說に泊船堂宗房と云し由も聞ゆ。

又北村季吟の執筆として東都に赴カル。桃青坊と云。

内裡雛人形天皇の御宇かとよ

などの句ありしも此間にぞ。

天和三年　亥　　翁三十九歲

此頃は深川に住居、鹿嶋に參禪の頃也。

古池や蛙飛込ムの吟などありし。
貞享元年　子　翁四十歳
實なし栗　冬の日　春の日集出ル　野ざらしの記
甲子吟行　等あり。
續いて　あら野集など出ル。
元祿二年　巳　奥州・北國等行脚
おくの細道　出ル　ひさご集　猿蓑集　炭俵　深川
集　其外前後ニ集ニ出ル。
元祿七年　戌　翁五十一歳
此年の十月、此地の客舍に終焉也。

如レ期(斯)の趣キなれば、其頃々に心を付て聞ずんば有べからず。元祿ノ年は翁の末年なれば、句風彌々盛熟の時の如クにはおもはるれども、其相會(クノイ)する人、才足らずば又是が爲に高情をも吐きたまはじ。其頃の翁の文(フミ)にも人なく友なきをなげきたまひしを見れば、かならず此時を成就とは定がたし。強(シイ)て年を以ていふ時は、一年々々に翁の俳諧上りたると云がごとし。是もかならず非ならん。我密におもふは爰にあり。此年翁五十一、猶老たりといふにあらず。もとより東西南北の人也。今や西國に杖をひき、長崎の旅枕に唐士船を見んなどゝて、伊賀を越へて大坂に來り、痢(サン)を疾で、不レ立と。然ば是事未成就の間なれば、炭俵・續猿蓑等の巻々は暫ク門人の求ルに任(マカ)され、歸庵の後其人を得て又々變風の時あらんにやと思へり。然るに半途にして枯尾花の一變ありしかば、門人只闇夜の歸路を失ふて、終におのが好めるまに〳〵風をつたへて、今日の錯亂に及ぶか。然ッば貞享元年の頃は、翁、貞德の風を離(ハナ)れ此蕉風の一門を起す始也。尤深川の菴、左右に杉風・其角・嵐雪が輩有ッて、此門の英士滿ルの時なり。さらば其頃の俳卷眞(シン)ならずして、いづれか眞ならん。世には翁終年の頃の卷、すみ俵のたぐひをやすき道とて好ム曹(トモガラ)多けれども、これまた正しく翁の志とも見えず。故に予は堅クむづかしき句をもさがし、ひたぶるに貞享初門の時の事に心を置ク。しかあれば延寶・天和の初年、他風にありし句を嫌ふが爲に、好ンで貞享蕉門と門人にも唱へさせ、人の聞ン事をも望むものは爰なり。

○問曰　蕉門に七部の書と稱するは何〳〵ぞ。悉ク見ざれば叶ハざるか。

答曰　さにあらず。七部と稱する事、翁の意に叶ハじ。是は日頃の行狀にても知り給へ。二十五ケ條も前に四大ケ條あれども、其口傳・傳授などに落ン事をおそれて、重字・重言、宵闇などの輕キ條々をも加へて、二十五條と而已号ヘ給へり。門人こそ白馬經とも貞享式共稱して、事々敷名を傳たれ。翁に何ンの此号あらん。七部の書とは、あとより人々の寄たるもの也。されば今世に聞所のごとくんば、

　實なし栗　冬の日　春の日　曠野　猿みの

　ひさご　すみ俵

如レ此なれども、東花坊の門には其角の高情を忌ゆへに、實なし栗をはぶきて續猿簑を加ふ。或は又東花坊の續猿簑をきらふて、代るに深川集を以てするもあり。處々の物好に依るべけれども、七部と定たる事なしと思はゞ強て何をも論ずべからず。只、冬の日・あら野・猿簑は、眞に翁の親韵殘れりとおぼゆ。みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。巻中に氣凱・高致の吟多し。

○中言ながら先問ン氣凱・高致とはいづれの句を指ぞや。

答曰　みなし栗は氣凱・高致の吟殊に多し。然れども急に指示さんとならば、

　氣凱　我句人不レ知ラ我を鳴ものは子規　其角

　高致　花にうき世我酒白ク食黑し　はせを

其外其角詩商人ノ吟、是よリ翁と兩吟の歌僊聞がたきに似たりといへども、よく味へば手を打て感嘆するにいたる。是を捨るは形にのみかゝはるの人なり。只常の暇にも蕉翁の發句を取ッて、其清意味に馴給へ。

○問曰　俳意の事良解しぬ。必ズ俳席に交ハらむ。然レども近年季寄セの類に論有ッて、種々の說かまびすし。おだまきをも、問答書度々に出る事をも聞ク。是等も近道に聞得べけんや。

答曰　是猶さらに安し。おだ巻に議論ありとも、貞德門の預かる處にして蕉門の聞べき事にあらず。何にても見安キ多ク季物の入たる一書を懷にして、夫にて濟

すべし。元來蕉翁の志シ爰にあらず。季を正は形を正スなり。蕉風無ー形を眞とす。故に蕉翁に季書なし。季を定る人は、花の下をつとむる家の役ぞや。隱士の好む所にあらず。依テ發句も題より案じ入らず。心ー頭の念より案じなして其頭の事を演ば、おのづから當季のあたる所に任すべし。是貞享の蕉風也。少しく其證據を云はゞ、翁、

子ども等よ晝顏咲ぬ瓜むかん

瓜・晝ー皃の季文字はあれども、題とすべきは老ー心の子孫を愛するのみ。猶ー又季を心とせざる趣キを云はゞ、

何の木の花ともしらず匂ひ哉

集には春の部に入たれども、翁四月のすへ伊勢の神垣に詣ての吟なり。

這ー出よかいやが下のひきの聲

蟾も蛙も春なれども、此句は翁五月の頃出羽の旅ー舍リにての吟也。

蝸牛角ふり分ケよ須磨あかし

蝸牛は夏の季たれども、蕉門是を雜の句とす。これらの類イ數多なり。尤モ諸家に論ありて其時ゞへ引落す。出ー書引ー歌など悉クきこへたりといへども、翁はじめよりさまでむづかしき引書をも用ひ給はじ。只目に見るに寄せて當季を大事とせざればなり。是皆心を主として季寄セ本を恐ざるぞ。凡ソ四季のうつり替ルを我ー物にしてあつかふは、蕉門無ー形の道なり。

○問曰　雜の句といふはいかなる心得にゆや。このみてもいたしなん事か。

答曰　是は好みてすべからず。翁に季の定メがたき句五六章ありて、これを雜の部と部分したるは誤リ也。もとより季を心とせざれば、發句の全体備りて季の定メがたきはあるべき也。或又一題の物を四季に詠じ、また雜の体にも作るは、詠ー物の体にて各別也。心ー上に趣意をうつし出す句を、別ー條に押ー分ルは拙キ也。かゝる事は書作る爲にや入らん。今宵の論にはあずからじ。

○問曰　悉ク心安ク聞ゆ。しかはあれど今日禮服を着して會席に趣(赴)キ、文臺に向へば、其式は勞事ー多しと見ゆ。

是をも急に知る道ある歟。

答曰　心を安ンじたまへ。蕉門の道はいよ〳〵早し。都テ文臺を飾リ、席を改メ、聖像など床にくだす。爰に至ッては悉ク連歌の式を主として、略すとも是に叶はん事をこのむ。然ラば蕉門の人の恥べく懼るべき事にあらず。其席に臨まば、其日の宗匠に敬ヒ問ヒ、着坐の後事ー〻に尋ねて句を並ぶべし。此問を蕉門の耻とせず。只心のひがみたる句を吐キ、理窟をのべ、損德を云、或は淫事のざればみたる句を出して懷帋を汚し、衆人の心をも狂はす。かゝる人だも席にのぞむ。況ンや蕉門清ー意ー味を胸に持して、或は諷ー諫、或は厭ー世、或は慷ー慨、この本心をうつし出さんに、誰にかは恐ルところならん。卑ー理の句を吐て宗匠の式をよく知たる人より遙にまさるべし。是又一夜の口ー傳なり。

○問曰　式は人の求くに依ッて短尺・色紙に筆とらんにも耻らふ事なきか。

答曰　勿論の事也。歌・連歌の式を以てせば、たやすく調ふべき事ならねど、俳ー諧もと名歟の心を以てゆるしつれば、かならず人の求メに應ずべし。其書法は、古人の書したるを見て、夫より少しつゝしめよ。あまりにつゝしまば、書ぬかた勝れり。墨次ギ。筆終り、强て論ずべからず。教ゆる人あらば習ふにはしかず。誤字あらんは、いかにもゆるしがたし。是は節用集に譲りて一夜の埒は是迄也。

老舌鈍、鶏ー鳴キぬ。さらばあらましかくにや侍らん。しかれども法なきに誇ッて論につのるべからず。季を心とせじとて、我儘に云出る事なかれ。矩をこへざるものは蕉門の形なり。先にもいふ思無邪の言、只有のすがたをもて、其虚に妙あらんより其實に拙からんこそ、道を學ぶ者の常ー也。そこを、姿は歌・連歌の次に立ッて、心は向上の一ー路に遊ぶべしとは聞ユならん。爰に予が愚なるおもひあり。今や歌・連歌の次にたつ形にのみ習ひなづみて、心向ー上の一路に遊ぶ修行を忘れたまへるかと。此一ー言のみは蕉門に遊ぶ世ー人にも告んと、漫に梓を剞劂に附して、故園の雲にしぶ笠をめぐらす。贅言多謝。

安永二癸巳中秋

加賀　樗菴麥水述

金城の樗庵主、節をなみはやの津に曳て、古翁の舊事を探し、因に蕉風正俗談、古池音の二珠を投ず。こがために潮色悉ク澄清すらむ。遠ク北浦につたへて、目を潔ふするに足れり。歡又喜、折から初鴈いたる。是こし路の聲ならんには、跋といふものにも。

吉浦　梅嶺樵　龜選　云

浪華俳諧書房　河内屋八兵衛梓

# 俳懺悔

春夏・秋冬　大江丸

難波津や大江の岸近ふその家代ゝ礎をかたうして、名もふる國といへる誹士あり。東都雪中菴三世のあるじ蓼太より、はせを・嵐雪、正風の遺書をつたへて、風流にも富るをのこ也。其業遠つ國の雁章を傳えて、事とはるゝ君が代の靜なるためしなるべし。よておのづから其名四方にひろがり訪ふ風騒の人も亦おほし。これにちぎる折からの句有。無下にかひ捨むも本意なしと、ひとつの冊子をしたゝめ、此みちのよしとなく、あしとなく書とゞめむとなり。夫がはじめにあらましを序せよと乞ふ。もとよりみじかき芦のふしの間の才をもて、かゝる初めの筆とらんやといなむべき事ながら、蓼師の需に應ず。將四とせの先にや。かの地に冬ごもりせし契もあれば、咲にほふ言の葉は、すみよしの濱の眞砂とつきせず。岸の姫松のあらんかぎりはと、ねがふことをしかいふ。

安永二年初冬

篠光齋　天府

## 俳諧懺悔文

倩、我この道にあそびしこしかたをおもふに、廿とせあまりのむかし、東武の活ゝ坊舊室の門に入て、芥室の號を爲たれど、たゞ蕨且・せいほの二句をなすのみなりし。とし經て浪花の半時庵・勃ゝ庵の社中になりて、旧國あるひは舊州とあらため、流行の点取に勝負をあらそふを是として、蕉門の風雅は、ちからなき物とのみ心にとゞめず。松露・吸露又は雪中の庵主たちへも面をあはせながら、そのみちのおくをたづねさぐる事もなく、さながら天上天下唯我獨尊の思ひに、我も浪花に一人の作者也と、鼻のあたりうごめきて、翅も生なむこゝちなりしが、四とせ已前のはる家の業によりて、みちのおくに下りしが、かの松がうらしま一見せばやと、千賀の塩釜の浦より、ひと葉の舟にさほさしてうかれ出たり。こゝや名にしおふ扶桑に三つの勝地なれば、あだに見過さむも本意なしと、かねてのあらましにて、袴羽織の禮服おこがましう氈うち敷、筆硯の調度もきよらを盡して、こと〳〵し

く置ならべ、舟人に物がたらせて漕出ぬ。比は彌生も半過ぬる比なれば、行〳〵さくらは梢にほころび、すみれ・たんぽゝは堤に咲みだれ、木の間のうぐひすも入江の蛙も、おもふ所みる處風韻あらずといふ事なし。江の中三里浙江の潮をたゝふと、ばせを翁の詞も思ひいでられ、あだかも仙境に入かとばかり、やをら筆をとりて案にしづむに、風景にけおされて一句も出ず。とかくして舟は雄島の岸につきぬ、それより瑞巖寺・五大堂など名だゝる處を見盡して、寺前の何がしが許にやどり、この樓に昇りて見わたせば、松どものいくとせへたりともしらぬ色なるが、潮にかげをひたして誠に笑ふがごとし。高欄に倚て硯引よせ、おもむきをさがすに、日既に西に沒し、斜影紅をなして海上又ひとつの景色を添り。江の間〳〵小舟み漕つれ、魚をわかつ聲〳〵またあはれなり。ほどなく晩鐘告わたり、ものゝあいろもみえず。いざ夕ぐれの松しまをと筆をとりたれど、草のうへの露もうかまず。夜も早更行むとおもふにも、又あひがたきこの夜なるにとうちも眠らで、高欄にふとんうちかけ、悠然としてもたれゐたり。折ふし廿日餘りの月のさし出たるに、磯うつ浪の月に映じて白妙に、島〳〵の松のいろもおぼつかなきさましたる、墨繪のまつしまともいふべし。これをもとかくにおもひぬれど、一句のおもむきをも得ず。春の夜のならひとて、ゆめばかりに明わたるよとおほへて、東の方しらみてわたり、鳥の聲枝に聞え、朝がすみうちそびき、海の面靄々としてきのふにかはる風景なり。かくて日のひかり竿ばかりにさしのぼり、霞の衣のほころびたるに、島こそひとつみえたれ。あはやとおもふうちに、こゝかしこあらはれ渡る千島の松のみどり、きら〳〵しく、名工の彫めるごとく、妙手の繪がけるが如し。心詞も及れず。この時興に乘じて心頭にうかぶ物あり。うつゝならず筆をとれば、

朝霧やあとより戀の千松しま　と書終りて、よく〳〵おもふに、是は雪中庵前のとし行脚せられ、此島にあそびし句也。東都にてものがたり有し比は、たれもいふべき事ならむと、大概に聞なし置たるが、このときの實境に催されて、心にうかびたるなり。暫くひとり推敲をなす

に、朝霧のたちおほひたるが常ならずと賞して、五文字を置、跡より戀の　と艶詞を加へたるおもしろさ。意味深長なる事、古人のほね折し處みなかくこそあらめ。我も人も同じ事いふとのみおぼえゐたるが耻かしさ。はじめて我及ざるを知たるも、此松島一見の德により、かゝる絶妙の境をさぐり得たるも、外ならぬ因縁にやと、このとき胸裏に雪中を師と尊びて、我をしりたるは、あつぱれの大悟ならむと自得し、江戸にかへりて雪中菴主にこの事をざんげす。師しめして曰、よし〳〵夫こそ我家のりくつをはなれたる、一路向上の風流なるをや。世塵得失を忘れて、月下推敲の句を點頭すべしとぞ。それよりこのかた花にうかれ月にあくがれ、雪に寒き日も、蕉門の意をさぐるに、仰げば彌高し。去ども老若貴賤のわいだめなく、老後のたのしみといふ教なれば、こゝろを遊しむるにたれり。猶行すえの修行むなしからずば、下手の數にも入なむ。そは生涯の本懐、このみちの冥加ならむかし。

明和七年庚寅冬十月十二日

浪華荒陵山下於蕉翁牌前　同心齋　旧國　謹誌

## （俳懺悔　春夏）

元日やこの時人壽二万歳

元日やうぐひすもなかでしづか也

老のはるめがねに蒔繪かゝせばや

元日のあそび所なさがせに

新町の元日やこれ姫のくに

うまれしむかしの暦にかへれど、

南州のことぶき猶たのみ有。

百までは三十九年はなのはる

樂ニ其樂ニ利ニ其利ニ

唯起てかん祝けりわれが春

霞けりはやかみの町しもの丁

とし喰ふおにの行衛やはつ霞

いつはともあれはつ鳥〳〵

まさ夢や浪花は梅のはなのはる

武州鬼石福田氏八十賀

ふくわらやおくある八木のはいり口
元日や二日とかゝる夕まぐれ
　ひとの心をたれとして、万のこと
　のはとぞなれりけるとは、我生艸
　のみちにも尊し。
なにはづのはるや二日は淺か山
門松は王母に戀の染木哉
見あるかむいざ門〻の松の月
かど松やかゞ見のおやに物申
　有感
つながるゝ三尺の世やさるまはし
さる引の友にあひたりうつの山
　住吉奉納良能勸進
しら鷺のかすみこぼすや松の陰
なゝ草やおやの拍子にかしこまり
七草に不二の山彦うとふ也
　楓橋夜泊書
とだへては船に聞ゆるなづな哉
雨がちに雪ふる朝やわかなつみ
さむき方に立て若菜の御供哉
袂ふく若ながすへや小まつ川
鶯かへて腹立させむ妙しろ女
一キ角つねに申されしは、
好氣根藝この三つにくらぶれば
　すきこそもの〻上手なりけれ
將棊の師、大はし宗桂も、つね〴〵この哥を誦し申さ
れし。
ほろゝうちてちらすな花のきしかくし
　すみだ川にて
櫓聲浪をうつて妹がるはたぞおぼろ夜に
　古畵に
かゆ杖や馬の内侍をしとゝうつ
　二股大根の畵
此大根人にはみせぞはつ子の日
　屈原畵
むめひとり咲ぬこと木はまだ寒し
時人に諂らはずむめさきにけり

武州兒玉郡春貞寺といへるにむめあり。花五色にしてめづらし。

花さらば又いつ色のむめの庭

香を狩てむめのはやしに入夜哉

ちるむめや獺のかつぎし魚のうへ

ひらの町神明境内、出世天神は松木家より奉納ありし神躰也。

さくや此花みむまつの木の間より

たえず匂ふ梅又もとの香にあらず

梅咲て木をとこがちの花見哉

後朝

我袖のわが袖ならずむめの花

一支考曰、俳諧はたゞ梅の花のやうに有べし。此はなのかたちは世にへつらはず。たゞ有のまゝに咲いでゝ、殊勝のものなり。しかるにあやなきやみの夜すがらにも、たゞひとりにほひゐたる雪の裏は更なり。花の佳名を世にもとめぬは、俳かいの人のためにして、名をいそぐまじきたとへにてあるべくゆ。さればとて捨はてゝ世をするすみなるもにくき物なるが、深き時は暗香の月にうかび、あさきときは踈影の水に横たふ。風流ならざれば俗におちやすし。さびしからざれば酒色にまどふ。あるひは寒く、あるひはあたゝかに、世に殊に自在のものにて、これらを法師がよのつねの工夫にいたすにてゆへ。

鮀さげて出たりな梅の亭主ぶり

おもひ切て梅見に出む日こそなき

几董が夜半亭になりし賀

一條院の御時、花有喜色といふ心を人々につかうまつりしに、刑部卿範兼、君が世にあへるはたれもうれしきに花は色にも出にけるかな。と詠玉ひしも、かゝる折からの事におもひあはせて

はるの夜も半になりぬむめがやど

散しほや香もそゞろげに梅花

主家のつとめ功なりて、國にかへり申さるゝ信濃ゝ人に

おとらめや陶朱買臣むめの笠

むめひと日〳〵かゝゆる餘寒かな

下もえや忘れて過しかきつばた

木曾深坂といへる所にて

下もえてあつもの富る山家かな

春庭曲

むめ柳出あひも上手同士なり

一洛の諸九、松しま行脚の折の添へぢからにとて、案内のために遣しける元二郎といへる、あらおやぢの七十五才になりたるが、風景のおもしろさにめでゝや有けむ。

いのちこそたからの山の松しまや

かく不風流のものだにも、時に感じて自然とうかびしものなり。又みちのくにの二本松に、俳諧すけるもの共、さくらがもとに酒くみかはしあそびゐける中へ、所の百姓のいでゝ酒のませ玉へと乞ふ。ほ句いたし申されなば、いかにもとたはれしに、この人しばし案じて

きのふより翌よりけふのさくら哉

いひ出されて興さめ、人々ほ句も出ざりけり。

うつかりと名所の中に田うち哉



母やまたむ我うつ畠のおほき事

川島もはたけうつ也淀かつら

いて解や木わたの里のかり足駄

歯ごゝろの又冴返るなます哉

雪消て遠山松となりにけり

和州榊原玄賓庵主勧進

七十賀　松延齢友といふ事を

松につれてあるじにつれて松の花

伊豫の國朝くらの庄官かたに、今治の太守の名を玉ひし青三位といへる松に

陰深ししるもひろはで松の花

覺英僧都舊跡みちのくくづの松ばら　六百五十年忌

松にこそ葛のむかしを呼子どり

上毛にて

茎立や左のゝ酒やのひたしもの

ひとつ呑てうす紅梅や蘇うり

おとろへやむらさき匂ふ藷のとう

一おにつら曰、未熟の人の俳諧は、春雨のと五文字をいひ出し時、はるさめ先に出ゆといへば、秋さめのとつけかへ侍らんといふこそうたてけれ。春の月はくれ初る〻おぼろだちて物たらぬけしき。夏の月は灯をとをく置てながめ深し。秋の月はまどに、軒に、海に、川に、野に、山にながめ有。冬の月はひとむらの雲の雨こぼし行、ひまをてらしていそがし。

はるの雨は物こもりてさびし。夕だちは氣はれて凉し。秋のあめはあはれにてさびし。冬のあめはそこよりさびし。うぐひすはきく、郭公は待侘るこそ詮なるべけれ。四季折〳〵の草木ひとつ〳〵辨ふべし。

はるさめや舍がてらの年八卦

地にあらば連木すり鉢猫の戀

あかつきや猫の戀するはつせ山

戀〳〵て猫のおなかやはるの月 (原註)腹中

おもひかねて猫はなちやる雨夜哉

はりまや九兵衛 三廻

北ばまの獨尊さもいはれし人なれば

今は三とせぼさつの中のねはん哉

しらうをに有明月のうるみ哉

白魚やこの傳奏はなにの君

父なうしなへる人に

霞日やのこせしめがね見れば猶

かすませも果ず江戸ばし日本ばし

三條や霞ひとへに人ひとり

帆ばしらに霞の袋脱したり

内田活丈子、上がたへのぼり申さるゝに、我は先だちてのぼりし折

すみよしに松とて笑ふ山かづら

きさらぎや手もとおぼゆる薹の水

おぼろ夜を見つけ出したりすみだ川

述懐

おぼろ夜や我もむかしのをとこぶり

朧夜や越路にかへる鏡磨

凡十子の國にかへり玉ふをおくる

に、なにか別れのかなしかるらん
さは、大江の白女がいのちをかこ
ちしことのはながら、左にあらで
かならずよ似た春の來てかたるべし
いとゆふや南に向ふ東大寺
かげろふやたちも及ばぬ不二の裾
あしたにはかげろふ立ぬ鳥邊山
花頂山にて
かげろふや僧の答ふる小かぢが井
湯炎や荷鞍ほしたるはし驛
たがために酢みそ待らむはるの艸
長閑さや簀にはぢかるゝ海苔の香
信州上諏訪自得所持、はせを翁よ
り傳來のうぐひすの水滴に、人々
の句を乞はれけるに
おし親のうつはや道の月日ほし
うぐひすの旭むかへてはつ音哉
うぐひすの巡るや軒のいも俵



金色鳥や鉋つかはぬ家のさま
鶯の初音やちさくうちかへし
きぬ〳〵にうぐひ啼てうとまれず
まだ寒し畠うつりしてなくひばり
我はたに雲雀舞はせて日は入ぬ
樂人町にて
破を舞ふて急に落るかあげ雲雀
落しほの月をおくるや蜆とり
すみよしや粉濱の蜆赤みそに
生のりや江戸の南の小むらさき
西の京　西大寺など見巡りて、遍
照がうたをおもふ。
柳にも誠少しつゆの玉
きのふ今日あすの柳のみどりみむ
章臺
見盡してかゞ見にうつす柳哉
老情
春やむかし出口の柳みてかへる

青柳やおもへば長きつゆのみち

なか〳〵に柳のあるじはる易し

大筒の玉にもぬける柳かな

女あふぎをひろひし人に

落にきや女のこしのやなぎより

江戸両国逍遥

漁舟みえて吹なりはるの風

しのぶ夜のしら玉椿散にけり

夜半亭蕪村を悼　この叟の潔き性質を思ひて

鶴舞ふて若鳥〳〵ちる日かな

老少不定の心を

落るときおちし椿の一期哉

霊山・丸山あるは花頂の風葦水晋、みな此會式の興を添ふるなるべし

落つばきうつろふ花は枝にあり

糸竹の花の雲間や墨直し

うどの香や詞少のをとこ文字

遠州高達の恵むら氏、集道のほまれ有しが、二月廿五日故人の數に入申されしを聞て

西行のもちより二十五日哉

夕がすみどれが女のふまぬ山

やぶ入りの二日にたりし夕日哉

[illegible]客

我は生きあえずも山葵たゝきしを

一活々坊の云、一座の宗匠は軍中の大將軍、商家の番頭などの心もちにして、一座作にほころときはしづめ、一席しづかならば、又引たてゝ句をなすべし。ひとゝせ初午奉納の畫馬、連衆作に作をあらそひし跡へ、楼川が

初午やゆらり〳〵と人通り

かくいひいでしかば、かくべつきらびやかに出來ばえせし。是死活のあしらひ也。此一句ばかり聞たる人のなに事もなき句なりなど評したらむ。物その場の差略

あり。これを思へば發句ばかり云つたへて、いにしへ
人の句を評せむは、おぼつかなき事ならむかし。

はつ午や有ともしらぬ古社
はつ午や戸に拍子とるめくら兒
はつむまや新別當の靑あたま

二月堂

水取や非をうち廻る僧の息
苗代につくばのこのもうつる也
なはしろやきのふは艸の水がくれ
苗代や小蛇のわたる夕日かげ
君が代や米喰ふとてわらびうり
たんぽゝや野をめぐり來る水の隈
なのはなやおにの諷ひし門の跡

尾崎氏江戸下りに

四方は花あ遶川もちに江戸女良
三尺の松みどり也やけのはら
眠さめてひとゝき春の夕日かな
はるの日の風巾ものぼらず夕くれぬ
鯛かふて海女と酒くむはる日哉
ぬれ鶴やす黑の薄分て行

畫圖

紅梅に兒の唐輪のそこねけり

一蓮ニ曰、誹諧はたゞ物の本情にまかせて、木のよろしきに遊ぶない。古式につながれ、其粕をねぶるまじき也。たとへば八卦には、離坤兌乾坎艮震巽とあるを、易には乾兌離震巽坎艮坤といへば、おなじ文字にてはしる也。走てよきもあしきも、其時にのぞみての事なるべし。古人の格式は初心の人のため、中品已上の俳諧は、われしりて我するなれば、一字一点の學文も入るべからず。學文は階子也。はやくのぼりていらぬとはしるべし。下品のうちはしり過て、階子ふみはづしたらんもあやうし。

紅梅に日本ばれの天氣哉
紅梅はさめて彼岸の夕日哉
鳶の輪の下に鉦うつひがんかな

伊勢山田ある寺に、秋葉山勸請の

やしろ有り。かたえなるひこ木に

三尺の接ほも梅の匂ひ哉

ひがし白にし紅梅につぎほかな

物さはる夢のみ見する接ほ哉

關口七郎左衛門風士が七十賀

猶花にちぎらむ那知の若衆ぶり

亡妻三周の追悼

わかれにし其日ばかりはめぐりきて、とい
せの大輔がふる事も

にた花の物いはぬ日ぞ恨なる

上毛淸水寺奉納

花さくや御瞻りの屆くまで

雪中庵七十の賀

老師が古稀の祝に、我も二つちがひの老弟
といはむもをかし。

たえずみむかたみに花のかげ見山

播州滿杭矢島氏へ八十賀

山口や花の千もとの八十せ川

かはらけに味噌も置れぬつばめ哉

つばくらや其子もかゝる思ひせむ

家分てつばくら待む棚つらむ

河州岸田堂

かけしるや其梁のつばくらめ

一古き哥を折よく誦しいでたらむは、あらたによめるよりも風情ありとや。淀のわたりのほとゝぎす、宗盛の宇佐の奉納など、手がら有てきこゆと承る。ちか比をはりの人のつまの七とせまで、腰たゝで有しが、つひに身まかりしとき、其丈のおもひいてゞ申。

麥喰し雁とおもへどわかれかな

野水が句をつぶやきしは、いとあはれにして、野水が作せるよりも情あつかりけると、鳴海の蝶羅ものがたり也

行雁や北斗の外は雲の浪

つまなしや一羽たち行雨の雁

かへる雁紀の路や花のほころびし

衣擣ばかへり來よ雁かへり來よ

雁風呂にうちくべられし染木哉

大旦那となりけり春の雨やどり

鳥の巣や小僧にしめす事ひとつ

　荘子の畫

其鼻に入れて眼覺せ蝶のゆめ

蝶〳〵もしろきに事はたりぬべし

雫して羽扣く雨の胡てふ哉

たちいでゝ初蝶見たり朱雀門

世を世とも三月がほのこてふかな

莖立に翌飛ぶ蝶のすがりけり

蝶の髭立ふるまひにかくしけり

なる神の聲ぞや胡てふ舞出よ

みよし野の吉野のおくや蜂の聲

にしきゞにはちのす有と申けり

　山里

雪解や今更木ゝの下紅葉

雪どけや谷の戸いづる檜もの

片隅に鍬のひかりやはるの雨

　高雄山にて

はつ戀や袈裟も紅葉も青きより

一鳥醉曰、ばせを翁古池の吟、世上にいろ〳〵と解をなす。恐らく翁の心にあらじ。其比尾城の四五子やゝ正風にもとづける折なれば、ひとしほ易きかたに骨髓を盡し、衆にしめすの五文字ならむ。キ角が山吹やと申せしは、おもしろけれど、衆口もとの且風にかへらん事をなげき、山吹の花なる汝にはよからむ。我はかくこそと御申ありし何上の事はさもあれ。みちに志のあつき事をおもふべしと。

　清女が御簾をかゝげし畫に

猶みたし花の夕邊の月のかほ

ねむき日や水をはなれてなく蛙

思ひ出や蛙一匹御溝水

ふり出して眠しづまるかはづ哉

　ある諸侯の御やかたにて、

ほり池や御領のかはづるてまいる

信玄の團扇ゆら〳〵かはづかな

千町田に聲あはせけり井の蛙

雨のかはづあるはつま戀夜もあらむ

有感

青からば憂には泣かじあか蛙

ほしかけに田にし鳴也豐浦寺

龍にかしてあとにごさるゝ田にし哉

革足袋のもえいづる春にあひにけり

其中のひとつは落よいかのぼり

いかのぼりどちらへ落む安藝黒田

物洗ふ側へ落けりいかのぼり

庄田腸音を悼

いときれて風巾のゆくへや西の空

越後のくにゝ有といふなる

むら消へし雪のまに〳〵簾かけ

出かはりの人ひと月はおにもなし

でかはりの井戸には淺きちぎり哉

南京行

子をおもふ闇はあやなしたゝき鹿

鹿の角おぼつかなくも拾ひけり

上巳

ひなの膳揚名の金太郎あらしけり

白桃の莟にひなのかほかゝむ

おもかげのかは子を出ぬ古ひいな

飛彈の山中に

六十の息子もちけりもゝの花

桃分て來たぞや伽羅の油うり

咲初て桃なきさとはなかりけり

桃さくや跡目披露の片山家

狐去て桃林しばし春を笑ふ

東方朔、山岡頭巾をかぶりて、桃をぬすむ畵に

此もゝや年の眞砂は盡るとも

叔父前田良阿君悼ム

はるの夜のかたはれ月も入にけり

はるのよやふしみあたりの片はたご

墨江に落日を見る

人去て三日の夕浪しづか也

靈とりて甲に物かくしほひ哉

和哥の浦にて

潟は干て便なきかにのはさみ哉

ながき日やけさ追やりし黑き蝶

永日やまだ中山の八から鉦

寺もちし初や花のてい主ぶり

くゝられぬ豆腐も來たり花の比

世は花になるともしらずおく吉野

ありもせよひと夜は花にいなびかり

花を分てはなさきにけりよしの山

江戸酒にいたみの衆のはなみかな

花に下戸あはぬ敵とは無念也

花に世をとりて七口の上戸哉

白麻五千句に

さくやこの五度はなのよしの山

あらし山の花みむと、たれかれ訪ひ、野の宮・天龍寺など見めぐりしに、臨川寺のあたりより、雨しきりにふりしかば



花とちるは雲也雨のあらし山

落貝の提重遲きはなみかな

仁和寺にて

花を踏て蛇のうへ行人の聲

はなの山伽羅ぬす人をみつけたり

歸坂

京の花見ゆめにもあらずぶとの跡

花みぬ人唯ちるまでの名也けり

ちり〳〵て花の氣違しづまりぬ

老はたゞ涙おとして花にたつ

一船留て陸はさくらの花車　西鶴

此第三の事　後水尾院樣ゟ御たづね被レ下ㇾ候に、宗因が申つるが、留て候へば、とまりも可レ仕と御答申上し、其とし柄人がらにもよるべし。

初ざくら田舍の人が見て仕廻ひ

由斷して二番ざくらのはなみ哉

手をうたばちりもやすらむ初櫻

うぐひすのしろき眼やはつざくら

山家

白箸に蕨のあくやはつざくら

客ぶりはさくらにあるをわらび汁

暁に雨の降たるさくらかな

月は雪はおしなべて櫻ながめけり

上毛烏遅先生八十賀

さくら咲とほ山も何君が杖

世にうむや十日過たるさくら守

豐竹越前司馬の叟、八十の賀しけるさき

わかや和哥ならば人丸ざくらかな

もる神の廿日も過ぬあさざくら

一活々坊いへるは、沾徳の詞に、俳の魔心といふは、人の師にならむとおもふ故也。此疾にて修行半途なり。いつまでも人の弟子たらむとおもふべし。弟子になりて終るへからすと云々。雪中庵もつね〲此事をいひて、御互にいつまでも稽古あれかしと、おもふ也と申されし。

海棠やかたけて過る日本ばし

かいどうの花さきにけり永日に

吉野出て又おもしろし三月菜

奥州二本松西支坊といへる僧、錢笛といふものゝ妙音を聞て申、いかに伯雅の三位なりとも、この笛に由斷すべからず。

葉二ツの笛にもかへそおぼろ月

蚫むくいせの浦人はる深し

花咲て人にはうとき大根哉

はる三つきおもへば我もあふむ石

一日は不二見ぬ山や赤つゝじ

一雪中庵にて夜話のせつ、門人山幸申けるは、キ角五元集の中にしへまむろに茶を申こそしぐれ哉　といへる句、いかなる事にやとたづねけるに、蓼太の曰、此事先師吏登物がたりに聞しは、むかし初代の一蝶はキ角と相よし。しかるに蝶故ありて公の罪をかふむり、伊豆の島に流さるゝに、友人これかれ別れをおしみ、舟

場までおくりて、信友の情をなす。一蝶申けるは、かゝる身のふたゝび相見む事かたし。是までの御懇情、いつの世にかは忘申さむ。我かの島の事を聞に、大かたの人、魚をとり日にほしかはかして、江戸の便にひさぐと承る。我も又さこそあらめ。然ばうをの腮に、木の葉やうの物をすこしづゝいれをくべし。若、さやうのものゝ入たるほし魚あらば、蝶がなせるものよと思ひ玉へかしといひて別たり。人ゝ其舟かげのみゆるまで見おくり、キ角はいとゞむねふたがりて、立もさらでありし。其後ひとゝせばかりありて、キ角が僕、日本ばしの魚の店にて、乾魚の有しをとゝのへかへり、かてぐさになさむと、たわゝなるうをゝ火にあぶりけるに、むろといへるひうをの中に、さゝの葉のやうの、なにともしれがたきが一枚出たり。のこる魚どもにも各おなじやうに有し故、扨ゝ、島のやつらは、をかしき事をなす也と笑ふを、キ角ふと寐みゝに入り、やをら起あがり、蝶がいひし事を思ひ出し、此乾魚はいづかたの島よりまいりしものかと、其ひさげる問屋へ人はしらせてたづねけるに、大かたは八丈・大島よりわたし申よしを申。角こゝに於て、蝶がいひし詞を思ひ、傍友の情しきりにうごき、蝶がしたしかりし友どちをあつめ、茶を申入、此干うをゝ出し、これこそ蝶が申のこさ(せ)しかたみなれ。いまだながらへて、かゝるさわぎをなしけるよと、みな〳〵そなたのかたに向て、はるかに信友の情、今更涙とゞめかねたりしとぞ。角が句もこのときの事なりと、師のものがたり有しとぞ申されし。

いなさ吹彌生の末や大がつほ

むさしのにて

なしの花有といふなる逃水は

ちるなしを花のみぞれと申さばや

けば〳〵と旭さしけりなしの花

なし咲る夜をしろがねに價せむ

仙臺つゝしが岡にて

木瓜さくや此玉川はむつの外

菊植る叟や秋にあはむとす

都へは人して菊の分根かな
春さびし蕗の古葉に夜のあめ
嘴太も子に泣雨の夕かな
いざ竹の秋風聞む相國寺
谷の藤泥に尾を曳風情あり

ちぬの浦

行はるや堺のうらのさくら鯛
うり聲はとほ山どりかさくらだひ

上毛のくにゝ侍て

桑子もりつけの小櫛の落かゝり
夜の守護ひるの守や蚕棚
衣川蚕の蝶のながれけり
月もはるの朧に細きかぎりかな

玉東江戸下りに申遣す。
みつけ番にしかられな。らす雲・高尾に長じりすな。

行はるや江戸は牡丹に杜若
ゆくはるのしころは切れて遅ざくら
ゆくはるも銀杏の花のひとよ哉
行春や鯵にうつろふ鯛の味
春かへれ〳〵と深山ざくらかな

もろこしまでも行ものは

石火矢に船出す春の行方哉

中さいふ字をかゝせて、家の政事をつゝしみ給ふ御方へ

はるの日や有のまゝなる午の影

晩春曲

この月にほとゝぎす鳴ケはなの雪
朔日とたしかに申せはつ袷
さくら狩家にかへればあはせ哉
なにとなう夫婦みかへる袷かな
どこやらに女さびしきあはせかな

きのふは、紅にさかりをみせし薗生のさくらのむなしく散て、けふや、うのはなのしろきにかはる世

のはかなさを思ひやりて、はやし
氏いもとへ申遣す。

花のいろにそめし袂をはつ袷
衣がへはゝきとる氣になりにけり
こゝろまで酢にあふ日也衣がへ
向ひ同士物いふ夏のはじめかな
琴のはる三線の夏となりけらし

一鳥醉曰、附句は次の句ぬしのために、よろしきやうに
と心がくべし。鞠のあしらひ成べし。猶さしあひ・去
嫌の多きものあり。たとへばかのあふみの筑間祭など
いふ季は、夏にして神祇なり。戀也。名所也。所名也。
句に依ては人倫、おもかげなどのさしあひ有。むざと
遣ふまじき季なりと申されしか。

汗ふきやつくまの鍋の二つより
花去て鳥まつ籬の青みかな

十南齋はじめの叟、一日一万三千
のほ句を吐て、俳道の和左大八な
りさ世になりしも、光陰のつるを
さ早く、二十五年に成ぬる事よさ、
今の主迄懷舊の情を述侍る。

發句を射し名の通矢も九千日
白綠のうら吹かへるわかばかな
大太刀の御朱印もちし若葉哉

鳥醉居士十三廻
この翁、なにはやにたびれして、
おはしける事などおもひいでゝ、
烏明・百明の二叟へ申おくる。

葉になりて殘るさくらや壬生山家

花丹の功、ます〱江林墨水に名
をなし玉へさ、にしむら氏が新宅
に

しげれ〱若葉の花の宿はるり

はこね山にて

夏木立伊豆の海づらみへぬなり
卯のはなや曉の風月をふく
ひとゝせの天地易き四月かな
大かたのみどりを盡すうつぎ哉

もえぎ地のあやおり亂す卯月哉

一支考曰、月雪花・ほとゝぎすは、君にもあらず、父にもあらず。我らがためのなぐさみもの也。くそともいひ、味噌ともいひ、人參・附子ともあがめて、四季に心やすき出入のものともいふべし。擧てよき時はほめ、をかしき時はそしりてもあそぶべし。心にとゞめざれば氣一物の人なりとて、月花もはらはたてぬもの也。

竜花會

灌佛や五段かへりもなさるべく

木といふ題にて

庭更に木鋏の音かすかなり

こがねある塚とこそ聞ヶ桐のはな

春過てはやさくみかんかうじ哉

香久山の花や見捨て晒うり

閑寓に

たちばなや碁盤かゝへて下手ふたり

橘やならの都のふる手かひ

この段に人しづめたるぼたん哉

切て遣るあとの明たる牡丹かな

已の刻のかねをぼたんの花の時

漢相國蕭何畫

無事にして芍藥の花ちりにけり

芍藥やおくに藏ある淨土寺

一はせを行脚の文中に、女性の俳士にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬもの也。此みちに親炙せば人をもて傳ふべし。流蕩すれば人散ふべからず。此みちは專一無適にして成す。能をのれを省べし。

芍藥のちるや落るやいつの間に

芍藥や末の十日の雨に落ッ

千雨のかくしづま有かきつばた

杜若凡のこさぬみづのいろ

其色のひとつに富りかきつばた

からふじて芥子の使の市を出る

愛女をうしなへる人に

芥子ちりぬよしや牡丹も廿日艸

幟を立はじめし祝に

紙子着む音たのもしきのぼりかな

芥子咲て抑雨とふり風とふき

有所思

白芥子のおのれをしるか花ひとへ

白髪を吹るゝけしの主かな

咲ときや淺間に向ふけしの花

さきつめて莖みじかけの葵かな

上毛小林里旭が父を悼。

老松の千代を譲りておちば哉

そらまめやしどろに花のこむらさき

妙觀が刀花柚に円んや

竹の子も切盡しけり明知風呂

若竹や月の細りも二十四五

一蓼太曰、都鄙人の句を聞に、其場・其人・貴賤老若にかけて、景曲觀相のうへを以て辯ぜずば、あらはに口をひらくまじき事にこそ。新古の沙汰に及ばむもおなじ。たゞ人の句を聞て、其まゝ成ほどゝ早速に感じたらむは、其人の俳諧しられてはづかし。



麥秋やよしのゝおくにこもるとも

加藤二にめし喰せけりむぎの秋

島田驛(桃)排舟にて

苗に其たびねなつかし手作麥

かづらきの神わざなれや麥の秋

麥秋や嵯我(峨)もさがにはしてをかず

宇治殿のせうじ立けり麥のあき

おのれさへ時ある蚤の四月哉

閑居

花落る江によし雀のはつ音哉

よしきりの鳴止ムかたや筑波山

よしきりのよし一株にたか音かな

蜘の糸つくろふ雨のはれ間かな

やぶれけり俗の蜘の親しらず

金春なにがしかたにて

僧臨の月は出にけりほとゝぎす

ほとゝぎすくゝり枕の茶も匂ふ

綿鞠の膝に落けりほとゝぎす

紅の舌一枚やほとゝぎす

ほとゝぎす月の暈(笠)着の連哥哉

　すみよしにて

遠里小野ゝ油なめたかほとゝぎす

はからずよ向さまなるほとゝぎす

ほとゝぎすぬけ出しあとや三ケの月

　三井でらにて

寺といへば初音といへばほとゝぎす

　東都の往返五十度に及ぶ。

百不二や月雪花にほとゝぎす

東山嵯峨はみぬ戀ほとゝぎす

一更登翁の云、世にはらみ句といへる有。趣向うかびながらも句を惜て其場をまつ。今の世の懐剣・辨當などゝいへるさもしきこゝろとは、おなじ日にかたるべからず。むかし、源の順が　揚貴妃歸唐帝思　李夫人去漢皇情　かねてたしなみ侍りしが、對雨忘月といふ題を得て、この句を出せし。津守の國碁(基)が、うす墨にかく玉づさとみゆる哉のうたもおなじ。ふし柴の加賀　白川の能因　なども皆このたぐひなり。　はせをの翁も　うき世の果はみな小町也　といふ句を、ひさしくこゝろにかけて、品かはりたる戀をして　といふに出せり。

四火既にもぐさ盡けりほとゝぎす

　かまくらつるが岡にて

なけよやよ百万たゝけ郭公

　三所權現にまうでし比

きゝ初て二百町坂やほとゝぎす

ほとゝぎす喰てはこして六月や

一雪中庵云、一座の連衆をかうがへて、むさとさしあひの句をなすべからず。むかし、はせを行の杉風がみゝのうときをあはれみて、つんぼの句をせられずとかや。是一座のさしあひくり也。

川はねや中刻さがりの使者男

刀もたぬ露こそなけれ昔のはな

物おもひ昔いはつ花みる日かな

かんこどり狩や都の腹ふくれ
千觀が馬洗ふなりかんこどり
よしきりの岸うち過ぬ閑子どり
かんこどり江戸を去る事八百里

流羽を悼。

音をいれし末の十日やうぐひすも

一嵐雪曰、句を吟ずるに、なまりてはくちをしとて、ひたもの都にのぼり、後ゝは少しも訛らで、執筆へ句を渡されしとや。

花の京かまくらの夏はつ鰹
水かけてかつほ一世のきほひ哉
南鐐の箔のしろみや初がつほ
おちかへる八百町や小鯵うり

粟津奉扇會

腰にあるうちは不易のあふぎ哉
これみつが蜘捨にたつ扇かな
廿年女あるじのうちはかな

山中

麻生てゆがまぬ家はなかりけり
乞食の世にある夏とみゆるかな
朝風や魚の血こぼすみさごの巣
紅うらの袂こぼるゝ野ひるかな
夕すゞみ地藏こかして逃にけり

左専道友三寺

禮まいり各凉し伽留羅畑
孑孑や方四五寸の和田のはら
孑孑に水そゝぎけり寺參り
あけがたや鳴音血を吐蚊のあゆみ

伊藤なにがし轉役加增の賀。
めでたき事のかさねさせ玉ふ方へ

御庭までも皮脱竹のきほひ哉
蚤夜毎不二の五文字の狂ひけり
江戸みぬはをとこにあらじ閑子どり
紫蘇畠や雨の蹴上のうすぐもり

一キ角云、さしあひくりといはれむより、まづ句者といはれよとは尤の事也。句者と成ば、さしあひは自由な

るべし。たとへば非常のとき、なりもの、音曲今より御免とある。早々まちかねて出さむはよからじ。一兩日もさしをきて、扨可ならむ。句者は此處につまらで外のものを作せむ。さしあひくりは六句めづゝに、松の句を出さめ。

三界無安といへる心を

立山の人京に寐て蚊のぢごく

拂ふ手にはかなや蠅の雨やどり

うきゆめのあるとき嬉し蠅の聲

高安の戀はさもあれめしのはへ

蠅うちや上手になりし我こゝろ

扨こりよ餘り葉末のかたつぶり

此句は、位のぼれる人のすゝめられし事によせて申侍りし。

かたつぶり這合たりつの大師

事さまやめでたき雨のかたつぶり

雨の日や日の岡のぼるかたつぶり

躶子の夕がほさしてかくれけり

手にふるゝ園のかげや水の月

萓のとう雨のけあげのかひ〳〵し

夕立やおくれし雨に日のうつり

許六のほとゝぎすに對

ひとしほやさ浪くゞりし鱸の味

月の夜はおのれを遊ぶほたる哉

ちやうちんにあたりて黑き螢哉

夕かぜやほたるの中の洗ひ馬

一淡々曰、詩は長刀、和哥は刀、連哥はわきざし、俳諧は懷劍也。こゝろ切におもひつむれば、其利事はやく始皇の胸先をさすにいたる。刄長くば其所にいたらぬがたらむか。むかし戀といふ題を玉はり、

夏瘦と問はれて袖のなみだ哉　と

いひけむも、卽懷劍のきれ味なり。

なつやせや西日さし込ム竹格子

むらさめや灰の落つく藍畠

小さめふる空やむくげの朝ほらけ

さゆり葉やむらさめ過る虻の聲

水僊の根をほす軒のあつさ哉

日ざかりをしづかに麻の匂哉

しのぶ戀といふ事な

吉田屋の蚊に喰れけり伊左衛門

一長嘯子の云、はじめて物を詠し、よみかぬるは、夏中人の家に入てしばしあれば、そのもの、かのものとわかるが如しと。

かたびらやなべて世にある人のさま

かたびらやさもなき人の折日高

かはほりやせめても苔の花に鳥

宇治にて

かはほりや大黒彫む板間より

讓られてけふはつ舟のうがひかな

その外の罪はつくらぬ鵜飼哉

月入て鵜川に高し老が聲

月みせて船に子を守うがひかな

麻生庵再坂三十三廻、無名庵にて

風律興行

塚に生ふ藜もゆかし杖のあと



さらでだに乳母かしましき粽かな

哥によまれ湯にたかれたるあやめ哉

五月五日、加茂にて

のせ勝て埒を出たる馬の汗

東武馬光卅三廻、石激興行

ありし世のそのすみの香や入梅じめり

降事にみなしておりぬさつきあめ

どの雲のふるともみへず五月雨

春麗園蝶羅ぬし、五十の宴催されしも、まだ四とせのほどぞかし。あはれ七の叟のむしろかみにもさちぎりしも、今は空ごとゝなりぬとて、鶴章山父のもとへ申遣る。

百とせも牛鳴ほどやさつきあめ

一吏登の云、我句を人に聞しめ、きこへがたくいふものあらば、よせ直すべし。口論のいつも我に理有がごとし。樂天が老婆に問ひしも、この事なりと申されし。

二つめの清水に足をひやしけり

呑てから富守のみゆるしみづ哉

蝶のほめのこしたる田うたかな

おもひかねて学補に老の田唄かな

田植唄疎に拍子をすゝめけり

加州沼水、国にかへり申さるゝに

かへる山雪のしら山夏ながら

豫州松山法秀寺南嶺和尚　わかるゝ詞。

月日は百代の過客にして、行かふ人も旅人也と。さればいくかぎり人のうちにて、かく寝食を倶にするは、ひとかたならぬ因にや。夫は再會たのみありと、別れにのぞみ互に手をとりて一笑す。

相蚊やに何かくす事夏の月

己亥夏、偶謁花蔭園、今與同上洛、到二草津驛一而分レ手時有レ寄。

共是東西過客人
同行千里日相親
別離今朝暫分手
再會尚期明日辰

豫章南嶺艸

あぢさゐや人はいつまで同じ事

繡毬花の飛鳥川にや生ぬらむ

丸裸これほど暑きことはなし

あつき日や濱に下魚の算をなす

同夜叙書

ひとり聞時や蓮のひらく音

から濶の岡にはゐなし夏の川

涼とる舟漕ぬけてなつの月

道問へば川にそへよと夏の月

ある人の文拾ひけりなつの月

二柳庵東行に申遣す。

古竹のあるじも笠をひらき、山崎の坊様も夜具いまだに及ばゞは、このたびの行脚成べし。

留主遣ふいほりはよもや夏の月

東西夜話に、支考の曰、かゞり火にかじかや浪の下むせび　かゞり火におどろかす魚はあまた有ながら、むせぶといふ一字をよせていはゞ、かじか・小海老のほか有べからず。句は其魂を見、本情をとるべし。

ある人云、風雅のりくつといふはいかに。曰、風雅にりくつなし。おの〳〵こゝろのりくつ也。人の心をまなぶべし。句をまなぶべからずとなり。

氷室守七世の夏にあひにけり

ひむろもり近くめしなば消ぬべし

なきさしてにべなき蟬の行方哉

鳴盡す終りや蟬の水調子

一つねに風流の心なき人も、ものゝ善あしきに感じて、おもはず秀逸の句あり。遠江の國に、あるひとの子をうしなひて、其ひとゝせのめぐり來し比、

去年まで叱つた瓜を手向けり

かく千万のあはれをふくませ申出しとや。

葉をもれて凉しや瓜のひざがしら

雪中庵の畵讃、からす瓜の一軸、

丸形氏へ遺すさてうら書に

我薗の夕くれなるぞからす瓜

はつ茄子公家ひと口にまいりけり

ほの明のはこねこしたりはつ茄子



手にふれば瑠璃やくもりて初茄子

あつ盛の畵

はつ茄子いづこに薄刄あてゝみむ

ぬれて猶雨の水鷄のさやかなり

一雪中庵云、キ角がつけ句に、毛拔にも名を給ふ君が世とあるは、かの尾州なごやの毛拔師南方といへり。孔明出師の表に、深く不毛の地に入て今南方定と云ゝ。不毛といふよりして、むかし、近衛殿下の被下し名也と。

たさへ盡しの榮耀に、もちのかわ、

さいふ事に

京の人や鉾見にのぼるひがし山

祇園會

我子にてゆへあれにほこの兒

宵かざりあれほこの町山の丁

いつはあれど水みる夏の都哉

一雪中云、句振は我生れのまゝにして、修行ありたし。つくろへるはいやみなり。土地によらずして、句に都ぶ

り有、鄙ぶり有。高雄といふ遊女の、ある田舍人に異見しけるは、そこには、いなかにて歴〻の御かた也。此ほどは江戸衆のはやり詞など似せ玉ふがいやみなり。能おとこと、金つかふ人と、はやり詞に、傾城は倦てゐれば、只ありのまゝなるが可愛なり。其ありのまゝなる人に、おろかなるはなきものなり。ゆめ〳〵にせ玉ふなと申せしと。一座せし貫支といへる人の物がたり也。かゝるあそびものゝうちにも、名だかきは心の置所格別なり。しからば風雅も。

一希因云、大かたは初のほどめづらしく、様〳〵と句をねり、二の折よりは退屈して、いゝがちの様になりはてゝ、三四の折より巻の面あらめに、一巻の模様をうしなふ也。是つれ〳〵にいへる木のぼりの上手といへるは、木にのぼる時はいはで、下りる時あやまちせそと、ひたものいゝしににたり。

名聞に四條へ出たるすゞみかな

洛のてふむ、涙花に下り申されし折、はじめて逢けるに

にごり江のこゝろ遣ひもはちすかな

今は三十餘年の知音なり。

雪中二世吏登居士二十五廻通題

江戸深川　要津寺

定恭法師のとのはゐ、けふの法莚におもひいでられて

本堂に蓮のかげさす夕日かな

さらし井やをとこ世帶のけふはとて

入江子を悼。

酒ひやす泉には唯月ばかり

奥州でのうへ等舟出店の賀

呼井戸にご猶手がらある清水哉

さらし井や家のうちなる六玉川

一書林何がし、わづらひて心地死ぬべくおぼへしに、菩提所の和尚を請じ、末期の安心をすゝむるあらましにて、念比に後生の大事を述られけり。なにがし、むづかしきをのこにて有ければ、おもき枕をあげ、様〳〵の御しめし、ありがたく存ゆ也。ひとつ御たづね申度事のゆは、みな死ゆ跡ニ而野おくりのせつ、御引導と申

事きゝ、さだめて能所へまいる事を御教被下候事に候半が、折角御聞られても、其時は息たへ耳もなし。生たる人のみ承り候。あはれ御情には、只今御下されたしと願ふ。和尚、すつとたちて、佛前にありける法然上人の一枚起請をとり、よみ聞せ、これ有がたき所へ行道中紀也と被レ申。病人大にさとり、扨〻けつかう成道中紀にてこそ候へ。有がたし〲と、息のかぎり念佛し、往生をとげ申ける。これ書林に對して題のうごかぬ處也。

手枕や町のいづこに井をさらす

川狩や半‐日無‐爲の境に入

ほとけとは魚狩ときの心なり

雲抱て夕立こゆる北のうみ

三‐五粒蓮に落けりなつのあめ

夕立や江戸は傘うりあしだ賣

加賀の紫狐、はし立へ行。

先にたつ丹波太郎や道しるべ

阿波・加賀・江戸の風士十餘輩、荒陵山下の天曉院にあそびて、見わたる名所・古跡を題にとり、ほ句するに、天王寺を

舎利拾ふたもとは玉の風かほる

ひるがほや轍にくほむ作りみち

鼓子花やかくれて住る女蜘

ひるがほや眼の玉のちりてのち

一淡〻、猫を飼けるに、我喰けるめし夜菜などを我箸にて分遣し、膳の脇にてくはせけり。門人の曰、先生餘りなる不行跡の飼せられやう也。猫のくせあしく成候半と。淡、笑曰、さればとよ。初め二三疋の猫は隨分と行儀に飼つけ、首玉なども奇麗に、諸事めし遣の女共の取斗(計)たりしが、いづくへかぬすまれ、十日と内の用にたゝず。必竟うつくしく飼たつる故、人もほしがる也。依而此猫は飼しはじめより、かくあしく育たる故、一二度は盜まれたれども、行儀あしき故追かへされしとみゆ。いづれも能御考候へ。猫は所詮ねづみの書物を荒すをふせぎの役が專一也とみる時は、餘事に

かまはず。唯鼠の徑といふ所が眼のつけ所也。俳諧も又かくのごとし。こゝが眼字、それが其題の專といふ事を見さだめたし。

風吹てひるがほの花みつけたり

夕がほに角力が母のすがたみむ

夕がほや戻つたうしの臭で見る

駿州白子山觀音堂奉納、江戸升屋

貞岡勸進の繪馬

禮まいり彌ひらけめうがの子

抱かごやかくしかねたる山かづら

不二庵の句に、頭に貞女立ぬく水

鶴哉　さありしに句兄弟せむさて

手もさゝじ兄の抱かごころぶとも

抱かごやたしか妹は玉はゝき

むしほしや紙魚追ながら物書す

むしほしや立いづる戸も桐卿

花見小袖うつりにけりな葛水に

むしほしや鈍く傳へし厭の物

一はせを翁の文に、他の短をつけ、おのが長をあらはす事なかれ。人をそしりて己にほこるはいやしき事也とかゝれし。今世の中大かた蕉翁の教を守といへ共、この遺訓を守もの、百人にひとりふたりならむ。

名越夕秋

子をつれて茅の輪を潜る夫婦哉

夕かぜや夏越しの神子のうす化粧

形しろや戀しき肌もふれきなむ

五十くしに鐘の烟かゝるなり

洛の几董、はじめて相見しける時

これからの實になる秋を隣哉

なるみ、千代倉鐵叟、予がもとにたづね來ませる折の文をこゝにうつす。

難波がた安井蒼園のぬしは、もとこりのちなみ深かりければ、此處に至らばたびのつかれをも息めむなど、伴なふものにもかたりなぐさめて、夜舟の蚊をうち拂ひ〳〵、漸三津の濱邊にあがり、大江のあるじをたづねけるに、予が出坂をまちまうけ玉ふの志あさからずなむ侍れば、誠にさくや

この花の都人の情、かのから國の梅酸のそらごとにはあらず。その厚を謝して以、一句をつゞり賀し侍る。

乾く日も更になにはの梢かな

藏六岡
七十二叟書

己卯中夏日



（はいざんげ　秋冬）

一西山宗因に俳諧の去嫌をを問に、因曰、むかし昌琢新式を講ぜられしに、何はなにゝ嫌ふ。他は准之と云ゝ。この准レ之とあるが第一の要語なり。其准レ之とある、准る人の了簡、よきもあしきも其人の旨に依る、俳事又准レ之と申されしとか。

元日のうら打風やけさの秋

形しろやあとに流るゝあきのみづ

大坂やまつりの跡のあきのかぜ

秤口のにしに聞えてけさの秋

秋たつや持佛の箔の目にかゝり

民家

がつしりと鍬に音ありけさの秋

桐ちるやむめの暦の下の巻

駝鳥さいへるものを

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみせ

けふとくれて二日のかけも秋の月

なりひら、清女などのこゝの葉を思ひて、枕の草紙の趣にしたがふ。

彥ぼしよこれ牧方の馬やらふ

ほしあひや石ともならで待課せ

中に落るほしや七日をよしの川

しのぶれどあの光也ほしの戀

御祓せし水にもあらず天の川・

ある妓家にてほし合を

七夕の今宵大ほし力彌かな

此句餘りけやけくいかゞ也と、申さるゝかたおほきよし、沙汰有につけ思ひ出し事有。ひとゝせ東武にて雪中庵の附句に、おれも是れから醫者になるはづ といふ前句に雪中、「ひそ〳〵と矢間千崎ほり小寺 と附られけり。其席魚汶・蓮丈などいさめて云、おもしろき句ながら浮世めきけり。こゝは間神崎などゝあらむにやと申。蓼笑て、夫にては近代にて遠慮もあり、實にはまりてもいかゞなり。都而和朝のてあそび、源氏・いせ物がたりなど、上古の人あながちに不レ可レ尋ニ其作者ニ只可レ翫ニ詞花言葉ニ而已 と戸部尙書もおく書有。これらをいふにあらねど、俳事又八雲の末なればト下略。へちからとあらむには風流なし。七夕のあふぼしとつゞけて、力彌とされたる宗因の風到をおもふ斗、ひとゝせに數千の句をいひ捨るうちの我なぐさみなり。我にはゆるせとありしひとつの辭と、大様に見なし給はれかしと。

戀〳〵て花よりほしの七日かな

送られてみなしらぬ火と成にけり

鶴脛かゝげて商ふ叟を見て

中〳〵に死なで此世を麻木うり

瓜・茄子・さゝげなど書しに

草市やいづれの家のたまの床

たま棚の花ぞむかしの櫻鯛

魂だなや雛傳し影法師

たままつり八千世諷ひし一座也

うらやまし迎鐘つく他のおや

たて済す其夕ぐれや高燈籠
影さすは月に成しよたかどうろ
露下梧桐一葉飛
椿桐のいま二葉にとなりにける
子はかくしおやはかくれておどり哉
おどり子やまだ片形のたつたひめ
眞中へ旭のいづるおどりかな
人のおやのちやうちん赤き踊哉
さとの子のおしやられたるおどりかな
上毛小﨑地藏奉納
盆のはへ地藏まつりにしくはなし
痩たかと背中みせけりほんの月
初月のかげかた過ぬ芋の莖
桐ちらできのふも過しあつさかな
舟はりの露にかけろふ花火哉
八朔もから〻三八あけはなれ
途中吟
いなづまや不二の莘のはなれ杉



稲妻や乞草臥しあめの空
いなづまや鐵漿つけかゝる妹がかほ
雨の萩うらがれてみゆるあはれ也
追はであれ萩喰ふ馬謀にかゝむ
ちる萩にうたれて萩の咲にけり

一空摩居士物故のまへ、今の雪中庵のするがの國に行脚とて、たび立ける暇(ママ)別にとて、あさがほの花を畫て、ちるともちらめ蕣のとありし俊成御の御うたは、かのから國の桓温が枕をなでゝ、人と生れては、たとへ臭きものといはれて成とも、世に名ののこれるやうにとの心ばへにおなじ。つとめよや道の修行としたゝめて、
あさがほやおろかながらも花心
白麻と雨人へおなじ樣に書て渡されし。其行脚の留守のうち故人となり申されて、今はかたみとなりし事よとて、完來ぬし右の畫讃をみせ申されし。遺訓の心通じけるにや。
おもひ出す蕣の花の手折るゝ
蕣に鉦鼓のあふてあはれなり

あさがほや今更ひるをふみこたへ

これは秋のすゑに申ける句也。

あさがほに傾く塔のしづくかな

これも　興寺にての吟なり。

蕣の松に并びて旭かな

手折間に秋風たちぬ女郎花

呉逸が家を訪ひて

肌寒き秋のちからや堺箴

一なるみ千代倉蝶羅云、我は酒屋なれば能酒を造りて、俳諧はおりふしのなぐさみ也。知ある人の藝を好キたらばあそぶべし、ふけるべからず。狂ふは癩あしゝ。北所は飛脚屋なり。通路の事にくはしくば、扨たのしみに遊ばれよ。家を捨、業を止て名人上手になるは、夫人によるべしと申されし。又、江戸藏前祇德といへる人の

風月より家業はおもし傘の雪

とかゝれしも、これにおなじからんや。

酒造る桶に音ある夜寒かな

尾陽鉄叟を悼。

この比おほき世や更にと、なき人をいためる。いにしへ人のことばも思ひ出て

世のゆめや西へ見おくる秋の雲

嵯峨い重厚、加古川の山李など、花やがうらに案内して

雨の日の薄にも似た案内哉

聲かれて夜寒の禿不便なり

かへ駕の曉寒し宇都の山

朝寒や蔟〱と鮫のうしろ影

月落てひとすぢ蘭の匂かな

きのふみし馬昇入ぬむくけ垣

夕がほの實も市に出て朝寒し

麻生庵の訶を思ふ。

長松がおやと申て西瓜かな

鳴うかと髭かきあげてきり〲す

人家

きり〲す猫にとられて音もなし

ふたりぬる夜は面白しきり〲す

媟に追やられけり蟋蟀

とんぼうや岩切通す水のうへ

　關東道者のよし野よりいづるに

とく／＼の水も呑だか赤とんぼ

とんぼうや秋としもなき眼玉

　信州簑虫庵承和坊勸進

みのむしよ月の有夜は出てかたれ

　月にも鶴人、花にも鶴人とあけくれむつみ交しも、いつしかそこの國にかへりて、能友ひとりうしなへる事を

秋はものゝ松見ても其人戀し

霧雨に小むろうたふはたれが馬

　耳鳥齋ふりの畫なかきて

蟷螂が斧九太夫やよこ車

松むしやひるをば何と瓜のさね

芋うりや月にわかれし秋の聲

からめくも秋の聲也夜はまぐり

日の辻や雨こぼし行秋のくも

　北濱といふ題を得て

雲こぼす雨にもちらず市の秋

鰐のゐる海たいらかに秋のくれ

　糸瓜の畫

洗へとや三千人のあきのみづ

　をとこ山放生川のほとりにて

鯉桶の水そゝぎけり女郎花

一はせをの翁、加賀の一笑が塚にて、〽塚もうごけ我泣聲はあきのかぜ　と。其後に駿河の府中、籠つくりの九兵衛といへるおやぢの死したるに、又此句を書て手むけられしは春なり。門人かれこれいぶかしく思ひ、たづね申けるに、答、九兵衛が死したる、頓に聞ておどろき、一笑を悼たる時の心に同じく、外にいふべき詞なくして認たり。世の人の噂はともあれ。我泣聲は春ながらも秋の風とおもふべしとなり。八文字を換骨して春となし申されし情、鬼神も虚空に聲をのむべし。

見ぬ戀や夜のあらしの荻をうつ

あきの風まづ荻に來てけたゝまし

雨過て庭の荻はらしづかなり

九つの花みな空しけいとう花

若たばこほしたりいせが家のあと

青なしや薄及わたせばあきの水

江戸青山邊にて

南瓜の一番首や組やしき

世の中や紫蘇にまかるゝ唐がらし

唐がらし舍利に成てもまだからし

木がくれて大内山の唐がらし

一良能、あるとき一卷の變化を說申されし序、物がたりに、むかし淨るりの作者近松門左衛門、國性爺といへる狂言をつくり出して、大あたりせし跡を、猶おもしろき趣向もがなと、枕をわりし工夫にわたる。其時の芝居ぬし竹田近江申は、作者のこゝろには左こそ存ぜらるべきか。去ながら大あたりのあとは、大体すら〳〵としたる事をなしてをかるべし。國性爺にてよほど德分あれば、一二年不當りしたりとも、我等式がたべゆほどは澤山なり。其間に古きものにても出し、其内には自然とよき狂言も出ゆ半。夫らうへ、それよりうへと趣向に趣向をかさねたらむ。かくもて行かば我家業は盡果申さむ。たゞ天然にまかされよと申たるは、一道に秀たるものゝ詞、諸道に通じ、俳諧の一卷の變化も、この心專要なるべしとかたられし。

ならい宿にて

鱠うつ宿の外面やしかの聲

雄にみせそ雜水にひたす鹿のつら

夜の明て山の高さよしかの聲

ひとしきり鳴子音して日は入ぬ

鳥有てけふもくらしつなるこひき

百舌鳥鳴て曉杉のしづく哉

谷風梶之助が畫に

鬭角力偃とともにいでける歟

あの腹にやどりしものか角力取

撫られて母に身をまかす角力哉

すもふとり丼ぶや雨のひる餉どき

のり掛の角力にあひぬうつの山

からくして厠を出ぬ角觝とり

防人の名たゝる谷風・雪見・いづみ川などゝ呼れしつわもの共も、早二代のものとなり、見物につれだちし好人の家も、既に二世三世の人に伴ふ。我身ひとつはとよまれし哥には似げなけれど

五十年角力を見たり福祿壽

大井子がめしも喰たか角力とり

出女の物ぬふかげや秋のくれ

不知明鏡裡

秋盡すしろき鼻毛や秋の暮

百里來て袴づとめやあきのくれ

妹がりの分別いでぬあきのくれ

新宅に馳わたるや秋の暮

大いそにて

鳴立てあとに宿引をとこ哉

たちもせで鳴二羽ならぶ夕日哉

嘤々深草裏



むし聞や古稀宜ひとり誘ひ出し

なくとばかり聞なば虫の笑ふべし

篭明てうれしき虫の聲聞む

肌いれてうづら聞けりかはらけ師

磯ばたや日のさす粟にうづらの子

風ぼう／＼うづら見せたる草のはら

一宗祇法師名月の句、ひとゝせの月をくもらす今宵哉又雨のふりけるときも、此句を誦して用られけり。詞は古きを以て、心あたらしくせよとのしめし。いろは四十八文字みな切字也と、中おかれた故人の金言こゝにありと、淡々老人門弟にかたられし。

ぬれ色や飯一濱朝の月

月の夜や聲細／＼とあぶら賣

藏格亭の反古などさがしけるに、いさなつかしさもいやまして、かの貫之・定家の雨燭、天王寺の鳥井にのこされし事などおもひいでゝ

月にうつれ忘れてしのぶ人のかほ

百千万劫菩提種

ひがんの蚊尺迦のまねして喰せけり

凡十ぬし、須磨の行かへり九度になりし折、一集を催されし。猶たへゞ通行し玉へとて

見のこすな月見の松もいま二本

此二本といへる事たづねし人のありしにて、おもひいでらるゝは、いつの比にやありけむ、殿下の君立入の去畫工をめし、御襖に須磨の風景をゑがくべしとなり。即つかふまつりまいらせしに、能出來たり。たゞし月見の松今二本たらでやと仰あり。かの工は須磨のちかきあたりにうまれし者なれば、いかでかこの處の事、あやまりぬべきとおもへども、心すみがたく、其後國にかへり須磨に至り、月見の松をかぞゆるに十一本ありし。我畫て奉りしは九本也。ふしぎにも恐入て、御内の衆にうかゞひしかども、いかにたゞうち笑ひてかたられず。としを經て又承りしに、いつの比にか、しのびの御遊ありて、よくおぼしめしこめられし事と、みそかにうけ玉りて、おどろき入しと、即畫工のものがたり成し。

をさまれる月に鶴なく夜半哉

入月や鵙のわたるあまの川

荻なりて月半天にさやかなり

有岡のさとにあそびし比、呂東ぬしの案内にて、月もやどかるさいひけむ昆陽の池の堤を巡れば、今宵の清光いづくにかある、唯水面しろかれをうち敷たるにひとしく、一瞳一物の外さらに物なし。

影滿て池一輪の月夜かな

鎌かけのまだねぬをとや秋の月

囊中自有錢

酒かふてかはらむ月の渡し守

野に立て月存分のながめかな

北上川に舟呼聲の夜毎に聞えてさびしく、又あはれに秋のさまを思ひ、國分氏のもとへ申遣す。

舟に聲巴狹（峽）の月の猿よりも

不二庵伊賀へ、月見にまかで申さるゝな

我みちの魯園の月見うらやまし

ふしみ豊ぶれいのかしましき事な

名月はてうちんゆるす夜舟かな

信夫呑溟傳

水流れ人去て唯月ばかり

鐵扇几掌は万にたのしき叟なれば

ひとりかへる道又月も淸からむ

月の夜、墨江にて

我も見たり七十年の松に月

まつ宵や情のまじるうす曇り

一おにつら曰、誹諧の道はあさきに似てふかく、易に似てつたはりがたし。初心のときは淺きより深きに入、いたりて後は深きよりあさきに出るとか聞し。むかしは初中後を經しかど、今は其修行する人だになく、心みなさきにはしり、いつしかひともゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、誹諧はたゞ當座あたロにして、根もなきいゝすて艸なりと、かろき事におもへるなるべし。これも又和哥の一躰とかきく時は、かりにもあさ〳〵しくおもへるは、ほいなき事にぞ侍ると。



名月や月の名所は月にあり

花雪と見捨〳〵て月の鴈

栗のはなふみし夜もあり今日の月

あきつきの雨にもあへりけふのつき

西みればまだ夜はふかし今日の月

我家池魚の災にかゝりて、人くひそみつゝしめる中、おのれに過たる造作のさま、いかひあほう宮さや笑玉はむとて

足代の山兀としてけふの月

名月や更て皆鳴蛬すゝき

月今宵荻も音せよ萩もちれ

十六夜や雲により添ふ月の痩

あさがほのかげかすか也十七夜

夜半興行續一夜松

北野天滿宮奉納

御意に入む北野ゝ森のむめ紅葉

紺かきの火おこすかげや秋のあめ

あきの日のくれて馬呼ぶとほし哉

山みえて秋ひとゝきの入日かな

仙臺しほせ布朴かたにて、和哥の友のよりて、おの〳〵當座ありけるところへまいりあはせしに、題のひとつ餘りぬるに、ほ句いたすべしと申さる。

名所砧

衣うてやあつさはきのふけふの里

夜は夜とて筲やがつまの砧哉

若衆や近所のきぬたうち歩行

娵もきぬたうちけり宵のほど

雨催ひ須磨のきぬたの通ふ也

一良能曰、初心の修行は、いかにも無分別つよきとおもふほどの句をする人、上手・名人の場へもいたるべし。初からおとなしく姿情とゝなひ侍る人は、功者といふ中途にて終るべしと、細川公の耳底紀にもしるさせ玉へり。都而の藝能みなかく有べし。

から衣下手にうたせてね入けり

寺の砧念佛にあはで月白し

母のきぬたつま持べしとおもひけり

閨怨

留主の砧江戸へひゞけと打たりけり

一雪中庵曰、ほ句を案ずるにこゝろにうかび、我にめづらしく、したゝめ見るに、不レ思も前人の趣向におなじやうなる句がいづるものなり。是かねて聞感じ、心裏にのこれるものか。又は案じ其境に行あふもの、故人の句に方弗（髣髴）たるあり。皆好の道よりいづるものにして、初心悪功の入たる人の他の趣向をぬすみて、一二字を入かゆる事どゝは、混ずべからずとかたられし。我もちか頃、

後シテや月のおもても痩女　几董が句ににたり

飯だこや朝むらさきのひとしほり　巴人が句ににたり

水鳥のかしらならべてあさ日かな　布舟が句也

猶去秋の句　ぼたもちや小豆のかたにあきのかぜ　と案じて、我もをかしく人もめづらしと申ぬ。後ふと江戸の春來が東風流といへる集中に、附合の句　ぼたもちはあづきのかたに秋の風　とありしにおどろき、句帳を脫したり。故人の句に作者のちがへるもまゝあり。かやうの事にや有けむかし。しかれどもつねぐの俳力をみて、人の句をひらふものと、古人・今人の句に同巣の句をなすものとは、一がひにこゝろうべからず。人こそしるらめ。我句の事をいふにはあらず。世情のあらましをのぶるもの也。見む人ゆるさしめ。

樂頭の眉しらけたりあきのかぜ

吹ぬける鱸の口や秋の風

反かへる鯵のひものやあきの風

いつしかにかはく砂糖や秋のかぜ

北越のならはしな

三越路や雪に追るゝあきの風

八十島さいふ所にて



あき風よのざらしぶりの哥開む

洛の蝶夢、あづまの巻阿など伴ひ、すみよしの升市に詣て、高拜殿・千珠・滿珠の丘などおしへ侍て

松に月玉出の岸と申なり

おなじく十五日、四天王寺の念佛會、伶人の舞樂をみて

月さすやはちすのうへに舞のかげ

夜半亭・有文の二子を伴ひ、すみよしにあそびて

たがうゑし松にか千世の後の月

日のいろや野分しづまる朝ぼらけ

木犀のおもひ出しては匂ふかと

杏谷子へみづから彫し石印をおくりて

おし分てめでよ花のゝ品さだめ

手折まじとても數ある花のはら

川こす人の直段をきはめて、八十文川・九十文川などゝいふも

水に目の價や秋の大井川

（仲）義仲寺芭蕉翁塚名錄集

とりとめた風こそ見へね花すゝき

花すゝきふかれながらに日は入りぬ

一曾呂利は滑稽の人也。（十）太閤秀吉公有時諸臣に向はせ玉ひて、世に恐ろしきものはなにならむと仰あり。君こそ恐ろしきものゝ頂上にてゆと、一同に申あげたるに、坊が曰、御前樣ほど恐ろしからぬ物はなし。手柄をすれば御ほうび、あしき行ひあれば罪を糺し遊さるゝ。よしもあしきも我心にあれば、君は恐ろしきものにこれなし。たゞ世に恐ろしきものといふは、無分別ものにとゞめ申たりと申上ければ、公大きに笑はせられ、諸士もあつと口を閉たりしと。からくにの東方朔、我朝の杉本、あつぱれの俳諧なりと、するがの乙兒はなしなり。

駒牽やけふ切立の白ふどし

琵琶と號し手水鉢に

伯雅に柄杓とらせむあきのかぜ

いざ掌てきぬた聞たし塔のうへ

細腰や寐覺る老もたつ鹿も

大かたの草におくれて尾花かな

江戸曙鳥子をおくりて

まねくらむおくる薄にまつ尾花

一蓮二坊くずの松原にかける。この比一般の才人恐ろしき詞をもて、計奈秘訣の書をのみめづらしといひ出たるに、しらぬ人はしらず。知るものはいかに淺ましとかおもふらむ。下略

此しらぬ人はしらず。しる人はいかにをかしからむといへる。世上大かた此そしりのがるべからず。

川口道達

淺づまに鰤の雫をおびせけり

少將にかしらはられしふくべかな

なにがしの殿に似たるふたねふくべ

蕎麥咲て花の都とおもひけり

そばの花峰は淺間の夕烟

草を踏てはおなじく惜小める哉

狩人にたけ守めでゝ山易し

二の足にふみ潰されしきのこ哉

　放野群牛引犢休

いねかりて天地にこわひものはなし

ふくむ木を落して雁のはつ音哉

船たてる畑のすへやかりの聲

雁鳴てきくのひと枝つぼみけり

花と呼ぶ鯛より鮭のもみぢ哉

　九月九日、高津の宮に詣。

たかきやにけふは栗むす畑みむ

酒ことし一二の船のきほひかな

雫も解よ不二見て過る新酒の香

一細川玄旨法印の我も大回し・三段ぎれの仕やうは習たれども、いまだせぬほどに、もはや一期すまじき也。人のしらぬ事つよくしたがるは、まぎらかしの下手の事也。

　されぱこそ花におもひし野分哉

紹巴が一段ほめて、扨かやうのほ句は重て御むやうなり。さあれば人がしたがりてあしき也。耳底紀にかきたまへり。



孔明がやぐらの琴、よしつねのひよどり越、それらは無ㇾ據事にやあらめ。今どきたまく物おほへたる人の三段切・素秋などゝ好ていたさるゝは、きのどく也と魚汶のはなし也。

　置ヶや露菊よりのちは花もなし

　あらそはぬ秋とは菊の上手かな

　菊篁筍通して起る野ぎく哉

　露帶てあるじも立りきくの朝

　馬牽て菊一本の所望かな

　きくおなじからず然につくる人

　菊あはせ花ものいはゞ歎ずべし

　鱧たゝく音は隣かきくの花

　我ものと成て十日のきく淋し

　起〱て菊に十日の朝寐哉

　老みせじ〱と菊にこてふ哉

　　十三夜

名月の其夜は丸しけふの月
兎の子百日になりぬ后の月

畫讃

夕霧に立盡したるかゝし哉
大かたの月を見果る案山子哉
霞ませて尾上に見たきかゝし哉

清水うかむせ四郎右衛門かたに、はせを翁の一軸有。
松風の軒をめぐつて秋くれぬ　と
これ翁、はなやがうらにて遷化ありし前、九月廿六日したゝめのこされし物なり。これが祭を後ゝまで執行むと、二柳庵のぬし、あらたに松風會といふ事をはじめらるゝに

いく千ゝの秋吹わたれ松風會

たかのゝ御山にて

あさ霧や御廟にまいる兒の聲
うらがれて不二三尺のたかみかな

中山由男舞臺納

夜噺もこの人の事千ゝのあき

雪中庵蓼太宗摩居士、九月六日身まかり玉へるに悼む句、呼かはす聲や霞のうらおもてと、はるの文のめでたかりしも、ことしの秋のたよりはかなくて

そなたぞとふり向ば唯秋の雲

暮秋

くれ〳〵て秋の行方や雨の音
翌をいかにさびしき秋もなごり也
あきの月九月も廿九日かな
初しぐれ露のうたがひ解にけり
うらぎくのそよぐ斗や初しぐれ
神のたびかしま殿よりしぐれけり
月はまだ有かなきかにはつしぐれ
初しぐれいはゞ關寺小町かな

おはりの巨舟ぬしを泣て

たびがさによし降とても初しぐれ

一淡々老人の曰、むかし水無瀬の上皇の仰に、春・夏のすがたはふとく大きに、あき・ふゆのうたはほそくからびてよむべしと勅ありし。我俳かいもこれにならひ奉りて、四季のほ句もその心をもて詠ぜむこそ、本情にかなひ侍らむかし。又竪の題はおもしろく、横の題はうつくしく作せむも俳かいならめと。

半時庵淡々二十五廻忌

しは〳〵と涙にいる日やむめの花　と書おくられしたんざくを取いでゝ

香は今も其ふたむかし冬のむめ

一古物がたりに細川三齋より　太閤様へ　献上の兜立ものは八日月成し。又、千の利休よりさしあげし石燈籠、火袋のすかし八日月なり。物其わかち有ながら風流の心あへりしと、人々かんじ申けるとか。

爐びらきや泥鏝のひかりも八日月

としよりに來年を問ふ小はるかな

初しもやひと足すべるわたし守



夜半亭几董、はじめに春夜樓といへり。去とし東都へ下り、初代の夜半翁がすまれし石町のかねのほとりにて、雪中庵など俳諧有て、二代目蕪村のあとをしりて、夜半亭となのられしは、ひとゝせふたとせのうちにして、酉の十月廿二日、伊丹なる士川子の別莊にて、はからずも身まかり申されし事をいたみて

二度の名もうしや小はるの夜半の聲

冬日

日あたりや寒菊も子を僞すほど

たま〳〵に鳥なく冬のひなたかな

豐後の人の國にかへるをおくる人にかはりて

しぐれずに笠縫の島に見るまでは

花屋がうらの事

一はせを翁なにはのゆめと、むなしかりしたびやのあと

は、御堂前花やのうらと斗にて、さだかに其處をもたづね申人なし。我もひさしく此事に志有ながら、能よすがもなくてうち過ぬ。今年いかなる幸にや。おはりの千世倉蝶羅翁のふるきあとを、たづねばやとのおもむきにて、羅川・十叟・雄山の二三子、こゝろをあはせ、かろからぬ御しるべをもてかたらひよりしは、南の御堂前南久太郎町花や仁左衛門といへる人にて、元祿のむかしのまゝに家つゞきて侍るが、これがもちつたへし地は、はなやのうらといふめり。又、寸馬・呼見の兩子もかの仁左衛門とは故有てちなみ侍れど、此家こそかの旧地といふ事をも聞侍らざりしに、ふと物の次手に此事申出せしも同じ比にて、おの〳〵手をうちて悦にたへず。さらばかの亭をとかりものし、羅川・十叟、これが主まうけをなし、石巌・雲亭、其席の事にあづかり、都而連衆十八人うちこぞり懷旧の一會を催ふし、はるかに翁のたましるをまつり奉りぬ。又、樵風といへるは之道の孫にして、蕉門の志を起し、花やのあるじも生木とて、これも我徒のみちにいらんとのあらましにて、かれこれうちかたらひ、そのかみ翁かれのゝ吟、かつ丈草のくすりの下と詠し申されしのち、たへてひさしき旧地にてかく文臺を立、之道の孫弟、はなやのあるじの一句を手向申さるゝは、祖翁の靈神さぞ嬉しとやおぼしめすらめ。風雅のみちたえず、因と緣との薄からざる事よと、涙もおつるばかりになむ。今そのおもむきをかきしるして、翁をしとふ人々に、其古き跡の正しくのこれる事をしらしめ侍るもの也。

かれ野見しかりねのゆめや八十年

くすりの下をおもふ埋火　羅川

其せつ諸國よりあつまりし短册は、みな花屋仁左衛門に納む。かつはせをの翁、元祿七年九月、ならより大坂へうつり玉ひ、十月十二日物故のゝち、あふみのあわづ寺におくりし毎日の事實、おなじく花やかたに藏レ之。

大坂のはせを塚は、天王寺毘沙門坂の下藥師院といへるに有。卽門人野破(坡)叟の造立にて、表の文字は堂上かたの御筆、うらの銘文は[illegible]前の醫者月なにがしの作る

處也。六行會といふものにくはし其のちいかなる事にや、野破(坡)門人梅徒といへる人、天王寺椎寺のうしろに塚を立しのちは、此つかたれまつるものなかりしにや。寺も今は時宗となり遊行寺と呼ぶ。塚も墓所のせと口にありし。明和七年庚寅の十月、寸馬・旧國こゝにたづね、位牌なども往、野破の納しをもとめ出して祭事三四年、そのゝち加州の三四坊二柳、この塚を寺の前にうつし、年〳〵會式俳諧あり。

翁忌

しぐるゝやむかし夜伽のかゆの音

はせを忌や長良の山もけふこそは

芭蕉忌やキ角が餅の冬牡丹

行燈の糊につたふや冬の蠅

御命講やあさ日を拜ム御上人

おめいこや女中の法花けふばかり

人投て念佛申十夜かな

若後家のことしも出來て十夜かな

ちりめんのおめこ紬の十夜かな



一雫中の叟、夜ばなしに云、句のあたらしみといふは、古よりいでゝ別に奇を求むるものにあらず。ある娘の子のいと寒かりし日に、友どちとの咄しに、風も寒ひかしてふところへ入たといひし。去ば寒はうごかぬ處、肌に通るは本情也。ふところへ入るといふがあたらしみ也と申さる。魚汶の曰、この頃も去寺にて古後(御)達のよりあひて、扨〻今どきの嫁共は、かへつて姑どもをなかせます。左様〳〵わたくしも隨分きけんをとるが、當世じやと申あひたり。そしるは本情にして、なかせらるゝとあやまりがほに申が、あたらしみならむと、俱に笑ひて茶を過しぬ。山幸のいへる、亘燵にいくたりもあたりてねるは、きくの花の咲たやうにと、支考がかけるも是也と笑ひて、又一腹を過す。

爐の灰の暦にかゝる冬至かな

山本羅川七廻

亡人戀しき折ふしごとや、ひとゝせは冬の日、又のとしははるの日とかぞへ〳〵て、ことしのけふの手むけには

はや七部のち猿みのにしぐれけり

京淋しぐれ狩して遊ばふよ
風吹ば木にもかやにもしぐれけり
落付てうしの物喰しぐれかな

夜半几董身まかりし事を、江戸の
成美がかたへ申遣して

おどろけやおどろくだ此世のしぐれ
師走野や鶴追のけて麥を蒔く
影追ふて破魔矢ほしけり冬日向
正面に祠堂のぬしや御取こし

しれる關取のさし老て、杖にすが
り、本願寺へまいりしをみて

御取こしや三つ輪くみたる角力とり
御火たきや宮司がをとこの鼻の下
芥にもならで果けりかへり花

一良能云、世に來山が、門松やめいどのみちの一里塚といふ句をもて禁忌なり。いかにあたらしき事をいはむとて、風雅の罪人になれりと云人あり。これは來山がすみける家のうら家にすまるせしものゝ、大卅日に身まかりけり。來山が隣は宗ぬしにて、不斷は庭を通せしかど、元日なれば翌こそと申。うらのをのこはやもめにて、遠き親類などのとり賄たれば、はやくとり仕廻たき人なるをと、來山聞てきのどくがり、我は世をのがれたる風人なれば、かまひなしと許して、元日の夕がた我家より、野おくりを出しやりての詠なるよし。夫を罪人といふも又道を重んずるの謂にて、殊勝には侍れど、物は其時の樣を能ゝ考ていふべし。人の句を聞むもおなじ。

口切やつる松太夫いまだ來ず
くちきりや御次はならのあられ樽
御師どのに灰かづけゝり麥の畦

羅川十三廻

十三年その霜月のしもはおく
鳴ながら霜ふるひけり明がらす
朝しもやおしなべてかものぬはれ伏

伏見船中

むろにねるむめさへ有に笘のしも

うか〱と白きく老ぬしもの朝

岡橋叙夕十三廻

十七年(マヽ)霜置松はそれながら

上毛湖鏡悼

みなかるゝ草とはしれど此別れ

天満如瓶一周

歸厚室のぬし身まかりける又のとし、かの舊庵を訪ひて

石蕗の花も其すみ染にさけよかし

殘菊や小雨のうつるにし日かげ

ほし合る冬木の梅のたち枝哉

水仙の能く雁かもに煮られずよ

水仙やひともとの花とおもはるゝ

大空は煠にかすめり寒のむめ

中山與三郎がやぐら初に

むかしは嵐、今は中山、三代のやぐらぬし、是優門の世家といふべし。

三代ぞ外になにはのふゆのむめ

すみよしや松の外には大根畠



こがらしや白衣の僧の門に入

松苗にこがらし落てしづか也

月もるや榧のはな散土手のうへ

一活〻坊旧室、傳馬町の新道にゐられし時、門人たれかれ寄つどひ、俳道の奥儀をたづねけるに、其答例の高調子なりければ、門人の曰、今少しひきく仰られよ。外面に人や聞ん牟と申せば、活〻笑て、これほどに申ても熟得なきかたも有に、此みち執心にてたち聞する人はすせう也。呼込てもきかせ度事と申されし。活ゝを悼

活〻の字もたのみしかれ尾ばな

はつ雪や家の工に酒汲む

やゝ有て雪より暮るゝ野山かな

雪一丈かゝる日にのめおにころし

鯛あげの聲横たふや雪のうへ

駿河の乙兒國にかへり申さるゝに、我もかみつけにたびだつさて、雪中庵にして手をわかつ。

いざ雪のはなし契らむ不二淺間
蝶有てこのふる雪に舞はゞいかに

家のわざに行來する事四十餘年、
半はくるしみ、半はたのしむ。

月の富士雪の不二とてはたびいくつ
乙雪や未進ねがひの小百姓
雪に駕るん居の轉ぶ所まで
鴨賣の雪かきわけて尾こし哉
笘もるやたる氷をたゝく磯の浪

一麻生の云、人に句を見せ相談に及ぶとも、しれた事にても書て見すべし。ことばにては聞あやまり、いひ誤にて、所のたがひめ五音の不通にて、句の姿情わかりがたく、あたら句を夫ほどに受とらぬ故、捨る事まゝあり。

智者福者申入たりふぐと汁

一むかしの判者はいかにも覺悟おとなしく侍り。つゞきの原に、

ちる梅を梢に返す羽蟻かな

宗祇のほ句、ちる花を梢にかへすあらし哉　此姿情のわかり無覺束に、なにともかゝず。左もあしきにあらず。他につがひ侍らば(つゞきの原ニ先し)下にたつ事かたかるべし。と素堂判也。

金屏にことしの雪のひづみ哉
さく／＼と藁喰ふ馬や夜の雪

三世雪中庵蓼太居士
さみだれゝある夜ひそかに松の雪

右のほ句にめでゝや、明朝の雲南 裡劒南といへる唐人よりからうたおくりしと聞て、英名たかくからくにゝさへ、ゐてはやしぬる事このみちの規摸、殆て蕉門のほまれなるべし。

雪のあとかゝげて松の月夜かな
雪の日や火桶に硯うちわたし

雪中待人といふ

うさぎ煮て樵の音きく夜哉
鷹の殿鷲が娘を獲かな
ひる過や氷のうへのはしり水

念四坊半脩半俗といへる人の、よしの山に分入、とく／＼のみづの

ほとりにて、一つの石をひろい得たり。其かたち西行に似たるも、

風流の志こりし處かとて

氷うつて得たりしや此玉かしわ

一本のかしわにさはるみぞれかな

ひとりねや御油赤坂のかし蒲團

夜話

幸齋がはなし何〳〵帋ぶすま

つもる事しらで霰のはしる哉

獵人の火蓋をはしるあられ哉

炭はねて庫裡に狸のはしる也

終年帝城裡不識五侯門　といへる事を

ほだたくや殿様しらず年しらず

寒月や經よみしうる法花坊に

一山川旧跡したしくたづね入べからず。まして私に名をつける事なかれ。主あるもの一針一草たりとも取べからず。山川江澤にもおの〳〵ぬしあり。つとめよや。



四季いひ習たる季の詞の外、めづらしく季に用べからす。世の人三歩が二も合点のうへならでは、季に遣ふ事なかれ。とは、はせをの翁行脚文のおもむきなり。

たゞし、四季のことばにうち添て遣ふは、又おもしろからむか。

上總戸の釘あらは也冬のつき

冬ごもりこゝろに須磨の月見かな

かれしやら桂もみえず冬の月

有感

けふに成て叶はぬ戀や冬の月

冬の月夜ごに照とおもひける

ふゆの月椋の梢をはなれたり

冬の月人にくもらぬひかりかな

寒梅や蕾はづれて五三輪

むめさくや冬の月夜の朝ぼらけ

尼といふ題にて

清盛の文張てある火桶かな

した〳〵と雨ふる宵のさむさかな

藍に似て寒し野づらのたまり水
あら寒し／＼と淺間見あげたり
吹立る鴻のうは毛の寒かな
あづかりし人の小判の寒かな
つとめては日を焚人の寒かな
あら釜の鉄氣たき出す寒かな

佛につかうまつるべきさし比なればさ、ことし神無月の末、我淨土門の尊き敎を受侍りしかど、いまだ世のわざののがれがたきまゝに

十念につゞく霜月師走かな

尾上菊五郎が京へのぼるを祝して、わざをぎのいさをしになうして、なにはのさためでたく、都へかへりのぼる事を見はやして

東風吹むたよりまつ也梅の冬
莖つけや女にわたるちからすぢ
樓高し寒夜に聲をさらす人
寒聲の若は念佛申けり

あら書を誦て

生葱や小仙の世を爪はじき
丸盆につや／＼白しあらひ葱
最上川この月ばかり大根ぶね
大根引て松風の音ばかりなり
あくる戸の人より先に落ばかな
聞なれて糊たく宿のおちばかな

これは道因法師の姿を畫にかけるなり。

むさし野を二日吹るゝおちばかな

まつ戀の題に

こぬ人やとにあかつきの鐘さゆる

しのぶこそ風情あれさいひしに

をし鳥にしらすや戀のおもしろみ
かもなくや衣／＼の戸のうしろかみ
鴨の毛や吹亂されて水に入
ほしみえてかさゝぎはらむ夜比かな
千鳥鳴キつゞいて老の念佛かな

三州國府柳雨子所持、あはぢしまさいへる貝盃に

疾ほして見よや綸島の浦千どり

聲さびてねぶとにさはるちどり哉

雨止てうしみつ過るちどりかな

寒さうに人はいふ也あじろ守

なまこもし柳の露のかたまるか

一手にはと丶なはざれば、天地の神にかなはず。我人ともに受ざる處有べし。かのいせの園友、さぬきの浦にて、〱なまこともならで果けり平家蟹　との初案認ながら、いまだに心行ぬ事のあればこそ、其夜のゆめにあまたのかに丶せめらる丶と見しかば、再案、〱なまこともならでさすがに平家也　是かけ清のうたひにも叶たる手には自然と備り、句ぶりもかく別也と、我心中に腹せしかば、心神ともにおさまり、其夜はいさ丶かのゆめにも見ざりしとか。又キ角が、〱此木戸や錠のさ丶れて冬の月　平家ものがたりのうちに、此木戸は錠のさ丶れてゆぞこなたへ下略。

酢をさせば闇浮にかへるなまこ哉

網子むれてふみ潰されし海鼠哉

ある僧の女の手からなまこかな

かづらきの大君の畫に

采女より先へまいりしなまこ哉

つれ〲を訥て

しやせましかくやあらましふぐと汁

叱られし鰒も喰たし母戀し

洗ふ事ふくは外様にまかせたり

鰒の屝をうつ丶や煤の亂れ容

たれやらが脛より白し洗ひ鰒

乗房にさたばしするなふぐと汁

分別の家に抛(拋)むふぐの腸

去ぬるとしの冬、三島の驛にさまりし折、はせを翁のすみつかぬさありし詞もおもひかへして

置ごたつこ丶よと不二の見ゆるまで

我は七十、婦は六十。

かげほしやこたつに向ふつ丶井筒

老情

睨まいと一町廻る頭巾かな

くろかみと見ようば玉の投頭巾
あかゞりや君にひかれて雲のうへ
　加茂の明神勧請の祠奉納
水潜る色も丹塗のもみぢかな
　晩年
猫板にかくてぞとしのかくれ里
まちかねて寐屋にほむらの湯婆哉
むつごとも古きたんぽのもれやせむ
　石町のかねに枕をそばだてゝ
冬ごもりわづかに石蕗の花をみる
拝領の鼠馴付ぬふゆごもり
冬ごもり蝿の古巣をながめけり
七日みる若菜の巻やふゆごもり
　過さりし人の事を思ひ出でゝ
暦かへばその月と日は有ながら
　都のさまも碁うちはてゝ、けちさ
　すばかり大路のゆきゝのきは〱
　しくも
ちやつせんや宗左が門ドもうり過る
ひとゝせを風にとられつ暦うり
鏡屋のかどに立けりこよみうり
うしとらと恐ろしき野をはちたゝき
鹿ひさぐ家ともしらずはちたゝき
山里はさびし都もはちたゝき
何踏だ念佛なるらん鉢たゝき
　いさゝむしさ見ゆる夜の
辻君に衣かられなはちたゝき
北は黄に石蕗咲ぬらしいぶき山

一支考の曰、風雅のかたはしをこゝろへたるもの、たま〱名家の一巻を見て、此句はをかしからず。その句は味うすしなどいふあれど、一巻につらぬる事、あながちに一句のうへを論ぜず。ひと度は雨となし、ひと度は雲となし、中品の眼をとゞむべき事を恐るとなり。

　法然上人の語を聞て
寐念佛目のさめたらむほどは聞け
師走の雨世にある人のほめ申

寒椿咲てちりけり伊豆が崎

大藪や竹の子はらむ寒のあめ

かほみせや衣に掃るゝはしの霜

かほみせやひいきの馬をまちかねる

寒の紅粉團十郎へまづ参る

すゝはきや盥のうつる日のひかり

佛名のおはりに僧の笛聞む

かん明や三味線ばこにものゝ音

節分の豆こぼしけり角力とり

一防人丸山權太左衛門が角力の高名はいふも更也。全躰心やさしく風流にして、雪中二世吏登の門に入、俳諧のほ句をなす。あるとき連中の望にて、我手のひらを墨にて紙におし形をなし、其かたはらへ、

ひとつかみいざまいらせむとしの豆

かれが身の丈六尺三寸七ぶ、手のひら長さ七寸九分あれば、よき祝の句也。あら〳〵しきわざのものながら、かく風流なりしも、いとやさしかりける。

あひる三度巡りて暮るゝ冬至哉



庚戌十月、はせをのやどり塚にて

我戀は松をしぐれの十二日

茶のために月うちならす氷かな

川風さむき夕ぐれ

とらへよと君にすれあふ頭巾哉

めうがやに一夜遊ばむとし忘れ

さしのいそぎとて、餅つくあらまし、井のもとにたちまふ下女どもの我はがほなるゝ、晏子が御者の風情なるにさもかし。

かたはらに尻なき妹や米洗ひ

橘の木に引さきし紙子哉

舟床し鴨が鳴てもすみだ川

驛路寒

雲助が衣紋つけたる蒲團哉

大佛の窓よりたかししぐれ不二

たからぶねうるや宵間のひとあらし

あはれいかに寶舟うる人のさま

紅うらの衣もらひけり着たりけり

霜鬢明朝又一年

花ちつてのち月雪をとし忘ゝ
とし忘れつの國のなに思ふらん
而うちも見よや師走の人のかほ
たれかをしむ師走の月も十六夜
こがねなる世は面白し年ひと夜

世のいそがしきを忘れむと、なにはの大寺にまうでけるに、としのなはりのたまゝつりなどいへる、ふる事のおもひいでられ、むすぶちほりのすへはかはらじとよみし、しら石玉山の水にむかへば

親にあふとしのかめ井の水かゞみ
行としや白髪をかくすおやもなし
としの市子にまじりたる餅かな
年の市たつうら町は月夜かな
としの眉いざ傾城につまゝれむ
寢覺せぬはるの夜ちかくなりにけり

翌しらで三日先みつ　さは松江の叟の不二の雪みたりし、風流の觀相もおもしろけれど、我は廉破(波)馬援が老壯にならひて、猶いくさせの東行を願ふ。

鬢髭も不二と常盤に六十五

さし忘貝ひろはむと、なにはのうらづたひして、すみよしの社にまうでけるに、生茂る松どものみどりなる枝うちかはすときは木、きれがつゞみのうらかぜにひゞきて、世の外の心地ぞせらる。まとや無事をもて寄特さすといへる御神吒(詫)も、ひさしほありがたくて

としのくれ住吉はよき宮所
年ひと夜あらおもしろの飛鳥川

播州ふく原、沙月九十才にて、十二月廿五日身まかり申されしに申遣す。

人壽百歳のくにゝうまれて九旬を一期とし、はるちかく見やりてもとの國にかへり

申さるゝ翁をうらやみて

たる事をしるや命のとし仕舞

異方の災にあへりし去年のくれに
ひきかえて、あらたなる家にはる
をまつとて

めでたさや大卅日の夕がらす

立春在蠟（臘）

はるや來しけさは五つの花の雪

旣春

餅つきやこしきがうへの山かづら

初とりやめかりの息のゆるみより

四季のほ句千あまり、すみつきの
事ぐさ百三十かさねのもの、みづ
から筆とりかき納て

ふたおやにみせたし今年六十九

寛政二庚戌年十月

それ大和哥は天地ひらけ初しより、地の花の天にはじまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道たゞちに詞となりて神を貴み君をあがめ、世を治め身をおさむる道とはなりけらし。先梅かざすより、桃の雫の盃にしたゝり、菖蒲葺軒には、のぼり・甲なんどを立ならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらむいく世のすへまでをいひとぶき、一陽來りかえる比には、おさなき人の髮を置初、袴着そめなんどして、神に詣せんとて出たちたるを、老たるひとの杖に腮かけて、見送りゐたる心のうちこそたのもしけれ。四海浪しづかにして、橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず。かくおほん惠みふかく治る國のためしには、民くさうるほひて、俳諧のつらねうた、なを万歳をうたひて、人皆鶴龜の齡をしとふ。かゝる御代こそあふぐべけれ。

おにつら

## 附言

安井舊國名政胤華名宗二號同心齋又稱大江隣其先出村岡之清流在武門而姓於小島圀初卜居民間從事銀山之役政容胤道頓之系改姓安井揖北海諸州之產大啓交易場又享保中政勝創東都脚力之職以令采翟參商讓業於舊國職道益盛居士舊國共性清雅九歲班職中交替兩都寓都七十回黽勉不弛者殆六十年以是久任職掌流範于當世大起家聲垂訓于后昆加旃于歌道于俳諧于鎖術于筆鋒各倚名家探其祕賾專名俳流不必涵其伎而常言夫俳自然聲感事述其志耳不必潤飾譬如花木天生者自然可愛剪裁者容態可惡俳之所貴在語近於耳意徹於神也可觀其志操卓異概如是一時居士遊于松嶼臨扶桑三絕之妙境沈吟苦思未得一句夢寐有感著讖悔一章以演其所自得又背西上之辰釆遊於北陸凡所經歷山川之美驛程之奇恐圖書之以貺未見未聞衆庶其宅所鈔錄不勝枚擧也予素有師檀契識居士者熟今見俳諧讖悔一帙幸書居士生平萬乙聊供夫讖悔之一端者而已旹寬政庚戌中冬訶

阪陽城南圓通叢光誌

印 印

寬政二庚戌年十一月

大江隣藏板

江戸 西村源六
大坂 藤屋彌兵衛
京都 橘屋治兵衛 板

# はいかい袋(ぶくろ)

春夏・秋冬

大江丸

## 序

嵐雪に其袋あり。我にまた續そのふくろあり。なほこれにも拾ひつくしがたき月のかけたる、花のしぼみたる。春と秋との藻しほぐさ、かきあつめばやといへるふる國のぬしが、はいかい俗のはじめに、紐とひてしかいふ。

雪中菴蓼太

此序は蓼太叟の文京庵にかゝせて與へられしを、翁が例のおきどころを忘てせんすべなければ、こたびおのが月居に筆をとらせしなり。はたこゝにあらはす名印は、在世におくられし記念とぞ。

なにはづの大江丸、いまだふるくにたりし時、この編集の企ありしに、先人蓼太その緒をといて贈られしを、なほあめつちのふくろ、とこしへにひさしく、月日のひもをたゝずして花鳥を緘にす。延命袋を探りて七寶を得るがごとき、俳諧圓滿の徳をことほぎて、その紐を繼ぎ、其嚢を括るものは

東都　雪中庵完來。

雪中菴主　完來

## はせを翁行脚の掟

一一宿の外再宿すべからず。あたゝめざる莚をおもふべし。

一腰に寸鐵たりとも帯すべからず。惣じてものゝ命をとる事なかれ。君父の讎あるものは門外にあそぶべし。いたゞきふまぬのみちをしのびざる情あればなり。

一衣類・器財相應にすべし。過たるもたらざるもしからず。

一魚・鳥・獸の肉好てくふべからず。美食珍味にふける人は、他事にふれやすきものなり。菜根を咬て百事をなすべき語をおもふべし。

一人のもとめなきに己が句を出すべからず。望をそむくもしからず。

一たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念起すべからず。おこらば中途より歸るべし。

一馬駕に乘事なかれ。一杖の枯木を痛脚とおもふべし。

一好て酒を飲べからず。饗應にして固辭しがたくとも微醺にして止べし。亂に及ぶの節、迷亂超罪の戒、祭にもろみを用ゆるも、醉るを憎てなり。酒に遠ざかるの訓あり。つゝしめや。

一舟錢・茶代わするべからず。

一夕をおもひ旦をおもふべし。旦暮の行脚といふとは好ま

ざることなり。人に勞をかくることなかれ。しば／＼すれば疎ぜらるゝの言をおもふべし。

一他の短をあげ、己が長を顯はすことなかれ。人をそしりて己にほこるは、はなはだ賤しきことなり。

一俳談の外雜話すべからず。雜話出なば、ゐねぶりして勞をやしなふべし。

一女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬこと也。此道に親炙せば人をもて傳ふべし。惣て男女の道は別をたつるのみ也。流蕩すれば人敬すべからず。此道は主一無適にして成ず。よく己を省くべし。

一主あるもの、一針一草たりともとるべからず。山川江澤にも其ぬしあり。勤よや。

一山川舊跡したしく尋ね入べからず。私の名をつくることなかれ。

一一字の師恩たりともわするゝことなかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人におしゆるは己をなして後のこと也。

一一宿・一飯の主もおろそかにおもふべからず。さりやさて媚諂ふことなかれ。如此の人は世の奴なり。此道に入ものは此道の人にまじはるべし。

以上

# はいかい袋　春之部



市に梅翁のたんざくを得て、さりあへず其としの歳旦とす。

七十やなにほどの事千代の春　宗因
あくまでもみむ門の松竹　大江丸

おなじ年下されし御句を、あけのとしの歳旦とす。

諸國一見の宗ニてゆこきのはる　天府
われこの度はめいぼくのむめ　大江丸

おなじときに下されし御句に、人この句をつぎて一卷とす。

七日から猶つみそへむ梅若な　不騫
はるのひかりも其雪の跡　大江丸
東風さそふ鶴の一聲關越へて　不二
いふ言を聞く牝馬かはゆき　嘯山
麥えます桶に澄たりあさの月　八千
橋に石をく秋の水音　紫暁

衞府むれて門ドをとさめく放生會　闌更
下戸と上戸の常は中よき　雨什
右一順下略

壬子ノ歳旦

かはらぬよ三千年のけさの春　大江丸
霞そめぬる四方山の空　完來
紅毛が船のたかどのきらめきて　不二

癸丑のとし、我樓上より遙拜して

住吉のすみのかたこそ惠方にて　大江丸
あれ門ド〳〵もきしのひめ松　完來
羽子のこの昇れば下るもゝちどり　不騫

甲寅　うまれしとしのこよみに廻れば

とらの春今四五疋のつらをみむ　大江丸
龍のひそまる若艸のやど　完來
汐のぼる沖の中つせのどかにて　天府

乙卯歳旦

蒼松翠竹知多少
盡在祥雲五色中

大伴の三ッ物かゝむ筆はじめ　大江丸
おやぢ分也元日の梅　嘯山
陽炎に百馬百牛ひきつれて　八千

丙辰歳旦

はいかいのわらべとなりて、いざ一文字の修行をはじめむ。

守武も宗鑑も我かどの松　大江丸
今朝あらたまる父母の春　月居
分直すゝり蓬(萊)來たかくつみ上て　如泥

丁巳歳旦

一紀年の修行はじめ、はいかいあそれほどよからん。

かき初や去年よりは又うつくしい　大江丸
鏡花水月見さだめし春　完來
うぐひすの聲驚にもどるとき　不二
淡雪にむめちり止ミて小一日

一守武神主は誹道中興の祖にして、天兒屋根命二十九世の孫、荒木田從三位守房の子守秀の九男、正四位上薗田長官と號ス。天文十八年八月八日神去ル。七十七齢。

かみお山我こしかたもゆくすへも
　みねの松風峰のまつかぜ

　戊午歳旦

千代もこえむ我蓬來ははこね山　　大江丸

三都に花の友むつみ月　　午心

凍解る鼎の漿味ひて　　闌更

　己未歳旦

　なゝそぢのとし下されし御句をかうぶりにして

諸國一見の宗ニてゆ八十のはる　　大江丸

なにはにふるきめいぼくのむめ　　天府

かすみ汲むふもとの流酌とりて　　完來

　庚申歳旦

いつもみる初日は哥の心かな　　大江丸

代ゝの霞も大和しま山　　完來

桑めだち蚕蛹く時はきて　　不二

　さめてさへ下さらば

ことしも又御無心申さう花のやど

元日の人や無弦の琴のをと



けさう文のしゆくの松とかゝれたり
　次手にけさう文の見かたほしさて、秋
　なりのもさよりうつし玉はりし。

むかし京の町を、元日には、けさう文といふものをうりけるよし、反古の中より見だし侍る。

かけてはいかゝ崎ひたちの海のひたすらことを、初すみの筆はじめにかきくどき聞へまいらす。けさあけそむるあさみどりの空に、山のはの雪のむらごの御着流し姿こそ、しどけなう世にめづらかなれ。ほそ腰のやなぎに、しろきおひつきのかほるは、むめがゝよ。御ものごしはひとく〳〵といとはせ玉ふとも、もえいづる艸のはつかにも、かいまみ奉らばやと、たゞこちかぜのこちよらせ玉はむ事を、あまつかぜのつれなからぬ御かへりごとをねがひあげりゝ。めでたく〳〵し。

　きのふまで峰にさびしき
　　門の松のき男

むつきたつの日

はるかけてひへの
お雪（篠）石
り〻

花のちまたに有といふなる
うそかへてはらたてさせむ妙しろ女

鼠の畫に
物名のひとつなるべし嫁が君
ふく引の順にあたりてものさびし
春たつて二日霞のいこま山
はつ芝居神樂を湊して舞玉へば

六ゝ齋のもとにて
元日や二日とかゝるはつむかし
元日の代くだりて二日三日かな

有馬のはつ湯
さゝがにゝ初湯の御輿むかふなり
この地にては蜘を大事にあしらひ、むかふて御ざれ／＼といふよし也。

元日やしらぬながらに公家のまね

一梅翁宗因は俗名西山次郎作豐一。肥後國主加藤清正の三男有馬之助忠之之臣也。有馬どのは連哥の達人にて風窓といへり。加藤家忠廣の代となりて、公の事にたがはせられ、奥州岩城の城主内藤左京太夫殿へあづけられ、豐一もかの地へくだりしが、後江戸にいでゝ昌琢の門人となりしが、ついに一家をなし、西山宗因といふ。又洛にのぼり、松江雄（維）舟の門人となり、誹かいを學びしが、これも又出藍し、みづから檀林の一流を起し、海内ひとたびは此流に俗（浴）せざるものもなく、信徳・桃青もこの門にあそべり。岩城の親子も因よりはいかいを傳、風虎・露沾と世に名たかゝりし。因、のちに大坂の天滿に住し、天滿宮の連哥をふたゝび起したり。夫よりのち子孫つゞき、世ゝ西山の家をのこせり。一説には法印守信のむことなりしといふ。天和二年三月廿八日七十一才にて沒す。

天滿西寺町宗福寺に代ゝの墳あり。

月居、にはかに京へのぼるに
扨はあの京のうぐひすよぶかいの

月居

なにはづのむめのにほひが忘らりよか

むめが香のさそへば遠くあそぶなり

指畵のむめに

いかに辨慶このむめに書く札は何と

烏帽子きよはつ曉の鐘つきら

七艸やあとは上手に菜をきざむ

若なつみ〱はるの野にいでにけり

元政が母にまいらんよめなかな

う　島が畵

今更いふ大事のふたを明のはる

かんとりの卵かへすらん花の春

元日の愚痴世とゝもに無盡也

はなの春万里一條の松かざり

一良德の撰せられし良藥集にかける。むかし、元亨の亂に、兒島高德が　主上をうばひ奉らむとて、舟坂山より馳來りしに、はや院の庄へ入らせ玉ひければ、せめても忠義の心をしらせまいらせばやとて、御庭のさくら木をけづりて、天莫空勾踐　時非無范蠡　とかけりしが、このながれのレ文字と、ときにとのト文字に連聲なし。このゝちの心ざしも空かりしとしるせば、韵韻は大事につくべし。



なづなの日ことさら嫁の物しづめ

拍子していやしめられそ薺うち

さくうちにはるは來にけり梅華

山おろし二三里むめの世を覆ふ

これは岡もとの山梅をよめり。

あたゝかさ梅に大事の日なりけり

へしおれといふ人むめの長者也

かゝはゆきぬす人しけり月のむめ

むめならぬ里むめならぬ風もなし

このもなしの手には、ほ句に遣ふと、つけ句に遣ふとの差別もありと、よき人の仰られし。

京への文のおくに

むめのとき御ざれなにはゝむめ斗

あはれ花の心にあらしむめが香も

むめありてうぐひす竹にあそぶ也

屈原がはなこくりけむむめのはな

人寒しむめさむしはる二三日

どふしてもむめの花見は若衆なれ

洛東いづみ式卜追忌に

これはむめに八百年のひとり武者

客立てのち梅かほりさゆあまし

こたつからむめ見てゐるも又はるか

有かほもせで世の中をむめの花

むめが香や壺歩せんじてのむ里に

春の雁風呂のけぶりにむせびけり

てふ二つ黒髪山を行衛かな

うぐひすや鰐をのがれし磯のはる

一乙兒云、閑人を訪ふならば風雨の日行べし。此方のおもしろき日は人もおもしろく、出て留主也。よしつね大物の舟出をおもへと申されし。

うぐひすやさははしたなき戀はせず

うぐひすのむめに行かふは山哉

金衣鳥やこのあたり守護不入の地

たつ雲や皆うぐひすの口の湯氣

はつねしてうぐひすしざる事十歩

小島斧巖を祝す。

この子又其うぐひすの子なるべし

千歳のうぐひす更にいろかへず

才麿　和州宇陀織田山州公之臣。生駒則武、后椎本少文舊德。初西鶴門人西丸、宗因直門ト成り、元文三年天滿死、八十三才。正月六日。

平坂をあちらへこせば花のはる

支考　美濃山縣北野之人。各務氏。黄雲山大知寺僧。十九歳下山。東花・西花・野盤子・蓮二・見龍・白狂・黄山・梅花佛、中年伊勢十一庵。濃州獅々庵。享保十六年亥二月七日卒ス、六十七才。

つな曳や例のいち松とらの助

かゆ杖かおほうち山の山ひこは
ふく壽艸蓬にさまをかくしけり

松とりて人の門ド又ときはなり
門松に三更の月みてをがむ
むこ撰ふ木の丸どのやかどのまつ
十日過て日もかくやくとかどの松

鳥屋まちにて

物かはのほねもたゝくかなづなの日
万歳がほめし柱にむめ活む
万才の次男家しるぬかりがほ

一支考云、たま〳〵名家の一巻を見て、この句はをかしからず。其句は味なしなどいふめれど、一巻をつらぬる事、あながちに一句のうへを不レ論。一度は雨となし、ひと度は雲となし、中品の眼をとゞむるを恐ると。

又一集もこれにおなじ。

女子をまうけられしかたへ

翠えらぶゆくすゑしるしひめ小松

厦大六十一の賀

あはざのむすこどのかへり来る。こよみの右左り、どちらをみても只よし〳〵。

ちと見せよことし王母がけさうぶみ

上毛の志計の父、八十九才にて身まかり、其子・うまご・ひこまでも二十餘人めでたくさかへぬる事を

花を踏で同じく惜むとしでなし

ねこの戀鼠もいでゝ御代の春

一信夫のいふ、はせを翁の、人もみぬはるや鏡のうらのむめ　といへるは、菅沼外紀(記)曲翠 眞忠にして家潰れ、其つま琴の上手にて、さかいの津にかくれ、名を破鏡とあらためたり。破鏡ふたゝびてらさずといへる心を、翁の甘じてたづねられし句也。のち〳〵推了して、いろ〳〵とかき傳ふ。世に此様の事おほく、得とものを正さぬあて推の評多し。

城のとのに臭のこされし芽獨活哉
ねこはつかり名だてがましや百千どり

春たつといふばかりニや三毛ねこの
ぬすまれし猫法輪に聲すなり
ねこの聲あかつきの雨となりにけり
水時計ねこのほむらに吹れけり
ねこのつまいかに久しきこたつより
老を泣くねこも有らむはるの月

　そのきさらぎのもち月の比

仇ねこに哥も御のりもなかりけり

　さゝや羅國さいへる人の、(四)此十に
　みちて身まかり申されしを悼。

をしや春兼好ひとりほめうとも

一良能曰、不易流行は俳道の兩輪、左右の手の如し。世に實情の句を不易とし、あたらしきすがたを流行の句とすなど、いろ〳〵にいふめる。唯時勢のうつりかはる處、世界みな流行し又不易あり。たとへば宗因流のすたれし折、はせを流のしづかに情をこめし句を流行とし、左あらぬを不易といひし也。これ即時〻のとなへにして、ひとむきに思ふべからず。

還城の笛聞て寐るつばめかな
安かたのもの喰ふて居るつばめ哉
つばめ糞す法藏院のはなのさき
あそぶにもものかたよらずはるの月

一廣南大泥國より象のわたりしは、享保十四年にして大坂を通り、寛保のはじめ比まで江戸に育られし。いづれ八十年のふる事、思へば我もいきたり〳〵。象ものち〳〵は一丈五六尺に及びしなり。

七尺の象みた町よはるの月
名人の場もうちこして春の月
こちらから友だちにせむはるのつき
人魚もとむ方士かへらずはるの月

　洛の拙人を悼。

あとゝへば月もおぼろのかゝるなり
雉子啼て有明の月とみる間なし

きじの戀人は聲だにいつはれる

くろがねのつるやはみけむきじの聲

中〳〵に雉子しづかなるかぎりかな

一茶坊の東へかへるを

雁はまだ落ついてゐるに御かへりか

なく雁やかしら掲れば はるの月

蘂に雁は野水をいのちかな

七十になりし人のもとへ

たてこきやなしつぼからもけさう文

松とりて二日になりしやなぎかな

猩々のまんちうを喰ふ畫に

むさしどのゝ手枕もこのはるの夜か

九十麿仁而、人丸の像感得の悦に

申。

さとの海士のいにしへは、さぬきの守が夢裡の感得。今の聖像は九十麿のぬしの眞ごゝろより來現ありしもの。今古神人和合のふしぎ、まのあたりに有がたくおぼえて

色も香も思しむめの誠より

高砂のやしろの御影の讃



門の松夫婦と現じ玉ひけり　　不二

長崎の周禾を送る。

かへりまつ日も長崎のさくら人　　周禾

浪花のさくら笠にかさねて　　大江

ほとゝぎすものいひそむるこの比や

はいかい飛脚つる德が八十の賀

那知ならば若衆さかりぞ花の春　　不二

男つくらむいでかゞみ餅　　つる德

雲に入る千里のつばさ鎭に　　大江

江戸臨海主人より筆初の文に

ゆく水もかすむ葛餝郡哉　　春蟻

葛西の若菜きのふつみしか　　大江丸

目見へするかほうす赤き春の日に　　閑更

老情

月にまでうしろをみせてはるの夜の

又獏に喰せはじめやゆめのはる　　一炊

万事休せよとその一炊　大江

不二庵より

此ほとりの活達なるを見侍りて

はつ鷄や孟嘗君が供廻り　不二

この歳旦はあふさかの關　大江

おぼろ月すわ里下りの夜ごろなり

のぼる日に梨花とく〳〵の水とならむ

朱雀の大はしがかける色紙の下に、ものかけさ有に、あはれ世をもおなじうせば

枕せむ其はるの夜のゆめばかり

醜盲女の琴を彈畵に

春の夜のゆめ〳〵由斷すべからず

廿日正月

あしはよしの・さらしなに行むため、手はからやまとの史をうつす大事の〳〵道具也。

月花に我ほね祭る廿日かな

四天王寺聖靈會

世は澆季に及ぶといへど、かゝる大會のたえざる事、誠日のもとのほまれ成べし。

譯しられておぼろに泪千餘年

龍神の棧敷拜まむはるの月

一東花坊曰、名所に當季をむすび、又其場を案るに、文字の數もむづかしからむに、名所などは雜の句もよからむと、はせをの翁の御申有しとか。

一人が渡し舟をよぶは連哥の情にして、わたし舟が人をまつとは、はいかいのかけりなりと、支考のことば也。

やぶいりの赤染右衞門はなしける

藪入や四日の鏡におやのかほ

やぶいりやことし目につく金閣寺

はるのみづ去年の處にながれたり

たび馴ぬ人のにごしつ春の水

おのれさへあそびありくよ春の水

知恩院御忌

元祖大師の、左ゝ木高つなにしめし玉ひし詞をとる。

御忌に着よ目のさめたらむほどの衣

われ鍋も聞にまいれり御忌の鐘

我杣の山葵に泣くや大旦那

つながるゝ三尺の世やさる廻し

むちのさる救人間にあそぶ事

土井侯の若殿漣洲君より、ひこ社のとのゝ六十の御賀の句可レ仕よし仰らるゝに、三寶にのしを畵て、

先のけろ長生殿への御通りだ

をつぴらけ六十初度の不老門

よごの東秀の君より、つるべにさくらの花を書たる畵に、讃仕るべきよし仰有しに

人の花にふたゝび千代がもらひ水

烏ばら戈馬所持の書物

履をはきてくつを忘るゝは、くつのたがへる也。閑にゐて閑を忘るゝは、閑にならへる也。

眼を明て聞てゐる也花のはる　大祇

かの卿の本の亂れたるを、定家切れとめてはやせば、この書たるものを納て大祇きれとめ申べし。　月居

この一軸の脇にものかけとのぞまれて

あとゝへといな仰どり百千鳥

雪中完來ぬし先年、

花ざかり山は名利の境かな　と

ありし事をしらで、我こさし

花も夫月も名利の外になし

思はず御兄弟にて、實にあふたる事をかたりあひて興じ侍りし。

蛙

古蛙人一寸をにげるなり

きく人もなき曉のかはづかな

遠蛙枕すたれし窓の日の

風落て山あざやかになくかはづ

子をもちしあしたがはらのかはづ哉

なく蛙楚王のゆめをうつあらひ

雨を呼ぶ鮒おしのけて蛙かな

びはの緒のよつも更行くかはづ哉

阿曾沼に鴛の跡なく蛙かな

一古雪中庵曰、はいかいも年よりて、段々とことばを伊達に遣ふ様に心がくべし。左なくては物ふるびて、しづかなる句も出ぬやうに成もて行也。されば妓家の長といひし中村富十郎慶子がこゝろがけを、心の師として我はする也と仰られし。

はつ午やあれは夫かとうしろ帶

初午の一の座ふりや金狐神

はつ午や唯おもしろき砂けぶり

出羽の双柳といへる人、大坂へのぼりての談に、ちか比はいかいの大尾に、追加としてよき人の句を出す。是ははじめより乞ふてのする也。しかれば追加の字儀(義)濟(辨カ)がたかりしに、大坂にてしばゐのやぐらの前 、大入といふ札をあさからかけてあるにて、此事わかれりと申されしも又をかし。

う治にまかりし時

存分に冴返る巨椋つゝみ(原註)堤かな

むすびとの上手に折れるつばき哉

角落て雌鹿にかほをかくしけり

しかのつのよしのゝ川の中に落る

たよ〳〵と雄にかくれけりはらみ鹿

壬生念佛

心猿の朱雀へさそふ念佛かな

桃二つ畫たるに

方朔はひがしへ逃て遠がすみ

あつものに死なでやけふの鷄あはせ

一はせを翁の、大佛の御見て置き申されし如く、凡物ひとつあだに見捨るものかは、己〳〵が心のふくろに入をきたらむにこそ。其席に臨み物に自由ならざるは、つねの心掛うすきによれるもの也と、吐月のぬしの物がたり也。

はじめ終りたしかにたるゝ柳かな

青柳のやまとの国と申さばや

やなぎ人を春の心になしたりけり

にし寺に日のよくあたる柳かな

みしま江や水影の柳旭さす
鶴舞ふてかけのさだまる柳かな
人中にかうはたゝれぬ柳かな

一キ角　大津産、坂下(マヽ)順哲。寶晋齋。寶永四年亥二月廿九日、五十五才沒江戸。

いはゞよき女のさまやはるのあめ
飛鳥川の水音遠きはる日かな
はるの雨しばるのさくら咲にけり
はるの人に雨のあしもとみられけり
春の雨ふたき木の楠にかくれけり
しら魚は煮られてのちの名也けり

去やかたの婦人、四十初度の祝

おいの假名御めづらしさのかきそめか
むらさめの日は花とちるこてふかな
からし酢にあとをくらます胡蝶かな
もの嗅ていやしめられぬこてふかな
よど鳥羽のてふ〳〵とまれ京の衆に
ゆめにだになむしは見ざるこてふかな
戀ねこに吹かへされし胡蝶哉

一春堂の云、喜撰法師、世をうぢ山と人はいふなり、是人はいへどもにてあれど、こゝが和哥の向上大事とも承れ。されば人にまじはるとも、人はいふなりにしてあるべし。いへどもすらは、あらそひのはし成らむと。

富士山の讃

あふみへのやぶ入りもせで二千年
乳みせて菫こぼしぬはこね山
風巾をちてよき嫁ひとりみつけたり
より政の月よりはやしいかのぼり

一令德　鷄冠井良德。良薬集撰者、延寶二年寅三月七日六十八才。コツケイ太平紀九十才。

いそがしの春やいきとしいけるもの

一山崎宗鑑の事、世にさま〳〵の說あれども、いづれもあたらず。江州の生れにして、性は左ゝ木、足利義尚公に仕へて出家したるまでは皆ひとつにして、其餘の

行狀・沒年までの事、古人いづれも正さずして誤來れり。予宗鑑考にくはしくあらはせり。いづれに俳道の二祖たる人なり。仰べし。

元日の日は長うして二月かな

松ほりに二日たびする二月かな

老によきうしろ詞やとをがすみ

霞ふては霞の外に須彌もなし

うち霞み加茂の水くむ日なりけり

はるの寺遊び處にしてかゝる

この比まで膝をならべてかたらひし遠雅のぬしの、けふはなき人さきゝしまゝ

いつもある椿とみしはきのふ哉

二月盡四月もはるとおもひける

ふしみあし丸勸進

もゝのかげ宇治のあじろにかゝりける

麥の事いふてはもゝの花見かな

小橋の三味にて

あしたには紅顏の桃夕けぶり

味はらのほとり

つの國のうしはかくさず桃の薗

もゝの花あまりおほくてのどかなり

なにとなう雀の下りるしほひかな

しほひ狩もみうら既にぬれむとす

京の人としほひの中で年始かな

苧から賣る聲は秋也洲蛤

一たのしきにゐては、さびしきにたのしみがたく、又さびしきにゐては、たのしきに樂しみやすしとは、古き人の詞なりと、仙城の白居ものがたり也。

みづうみをひと吞づゝのしゞ見かな

かつ間田や蜆川にはしゞみなし

守子去て就〳〵ひなの神ゝをみる

世の奢りとし年雛のからころも

いそのかみにたゝせてしがな紙ひいな
かみひなの相馬内裏と見やりけめ
赤松頂山、初女のひなまつりに
申。
父母にかしづき、夫にしたがふ。其ひながたもけふのあそびなるべし。
ひめ事のはつ花や是三日の神
己亥二月廿四日、本願寺中興蓮如光壽上人三百廻忌。京都及び諸國のまつれるにぎはひをみて、同宗のかたへ申遣しける。
國ゆするはるや十万八千忌
とし五十菊うゆる事はおほへたり
きく苗やむすめはくれて置ながら
さるい兒を愛する壽に
獲となれ〳〵とやよぶこどり
くわくといへり。猴ゝとはいさゝかちがふも夫人の仰有し。
かげろふやあさ鉄漿こぼす土のうへ
千代能が水かげろふともゆる也



蠑の耳高天の雷を聞く
はつ雷しまばらはよき迯所
住吉の松は相生なる苗な、脚力のたよりに奉るとて
忘れ艸わすれぬまゝに春の松
かく申上ければやがて御句を下されし。
なにはから松も喰けり梅の友　天府
こらへるといふさぐり題
杉もとか器わさびに泣ぬなり
いたみ東瓦の子息前がみをとりたまゐしに壽く。常二郎紫金也。
おとこかな松のつね二郎春くれば
はるかぜや出てみれば又春の風
閻王のはかりうごくやはるのかぜ
修するさいふ一字
三たびまで蓏蜂蜂にさゝれけり
共あまき心はしらずはちのつら
巣の蜂の地ぬしさしたる騒かな

一狂言師鷺仁右衛門曰、我門人に自然のひやうしよき人有。なれども拍子先ト不拍子なるゆ、ねりに煉て修行したるが誠の拍子也。かの人も其處を心掛てあらずんば、かへつて不拍子ものとなるべしと。是初心の人のこゝろえ成べしと、魚汶のはなし也。

としよりの氣によく接穂する事ぞ
つぎほすといふたる人の日比かな
はるの日や建仁寺へもまいりけり

迷ひ子の泣出すはるの日ぐれ哉
くれなひとしてはるの日を覺えたり
はゝき木にふり課たり春の雪
土肥しさとにこそふれはるのゆき
あは雪にむめちり止ンで小一日
大坂や有て過たるはるのゆき

雀のひなど集のかたはらに有書

子雀も內裏のめしが喰たいか

芭蕉翁之像讃

父や雪其母や月はなの兒

こさしも花の山ぶみせざる事は、知らぬ我生涯の餘慶あるな。南のほしの神のせかさせ玉はぬにやさたのもし。

まだしらぬいのちのおくのよしの山
日の神のうつ火こぼれて初櫻
まちながらむねうちさはげはつざくら
散ればこそいとゞさくらははつ櫻
巳の刻のかしらうつ也はつざくら
はつざくらことしいのちの手際かな
初花や我臍の緒のゆめごゝろ

江戸深川三之丞といへるものゝ父、百四才にてよめ・うまごさもに皆孝行を盡しぬる由、公に聞へあげて、子ご父には所の地子など許され、子ごもらへは、しのかねあまためぐみ下されしさ、雲中ぬしよりつげこ

されしめでたさに申遣しける。

南極の御免許は花にいき次第

江戸南溟勸進

花のあたりはなゝき家のすごき事

馬もさるもひきづられけり花の山

たが魂のあそぶか夜の花の中

子をつれて花くどる親これ春よ

江戸午心、制者なりしに

キ角いでゝふたゝび花の眞向哉

花のひかり史みる窓はなかりけり

狂哥堂眞かほの父、七十九才にて
二月十四日身まかり申されしに

花ふりて釋迦にひとつの弟かな

舍風老人を悼。

根にかへる花や七十五年ぶり

惜花老人の本卦

もとの卦やはなにむすぶが岡の松

百花の榮枯、只毘玉の盤を廻るが
如し。雪中老師よしの山行脚のむかしを思ふ。

この翁去てよしのゝ花さけり

當世に大野九郎兵衛はな見かな

狩〱てさくらに花をうしなふ歟

安居山の散花

それ花につらゆきが雪寒からで

觀念のまぶたに白し日のさくら

三月につめたきものはさくらかな

一野ゝ口立圃　俗名紅粉や庄右衞門。畫は探幽に學び、
書は幽〻師たり。寛文十二年子二月十七日、七十一才。

抱かれし時よりみたるさくらかな

風の間のとぼらしていざ櫻みむ

さくら咲て花十分の日本かな

ひさゝせ左やの中山にて、飴やが
軒にかく。

又こへむ花の中山七十二

雨風とたくみしものをちるさくら

去ふる寺にて

科ほどは人來であたらさくら哉
この比や猫しづまりて花に人

奈良綾賀母八十賀

花守の女翁や八重ざくら

ある山家の人に賀す。

自然蕷をほる手で壽の字習ひけり
ひとつ家の夜は峨ゝとしてかいこ哉
こがいする閨や子しらず親しらず
丹波口へ見おくる霜の別れ哉
雨二日而てしもをみざりけり

一蓮二云、百員は百變にして、ひとあしもとゞむべからずば、新古自在のはいかいといふべし。あたらしき句の二句もつゞきたらむあとへ、ひだるいにめし喰ふとふるきことばをつけたらば、又あたらしき詞よりもめづらしからむ。たとへば人のよき女ほうもちながら、あしき下女に思ひしみて人目しのぶを、よきはふるく、あしきはあたらしき故ならめ。

かいどうよみろくをまちて花となれ
海棠の花まんぢりとみる日なき

一吏登・蓼太兩代ノ内、判者周竹・乙兒・人左・白牛・六窓・石髮・信夫・吐月・月窓・魚汶・雷堂・山幸などの人々に、一言半句の教をうけし事のなつかしければ、こゝに記す。

山吹にものいはすべき鳥もなし
やまぶきのちりかゝりけり馬の金精

松の繪に

よい松や藤が見たらばたゞをこか
菜のはなの風土記にいろもかへぬ也
なの花にかしらのいたき天氣かな
あふみなの花ちいさくも咲にけり
藤捜るつく摩女のおもひかな
かたれ君茅渟のうら鯛酢もよきに
しまの鯛あはぢの國となりなまし
ほね酒にをのとはいはじさくら鯛

妓家のまれものさいひしあらし小六、三月廿九日あし揃への日、ゆやの舞をかなでながら頓に死しけるを、たれ〳〵もおしみあへりしに

竹の秋も捨るものかなあふぎの手

晩春

行はるの目にさへぎるやうしの尿

よいつれのやうに行く春ちるさくら

ひるの月三輪の木の間の遅ざくら

くれ〳〵て春四五日の旅にたつ

燈籠にさるののぼりゐる畫に

はる雨の人見て傘もほしげなり

あるひとのいふ、この集中、上さま・しもさまのわかちもなしにあつめたるを、いかゞと仰らるゝ。道理の御さつとながら恐ある代々の御撰にも、いやしきものゝ名までも、風流にめでゝ御ゆるし有とこそ承れ。ましてやはいかいぶくろ集なれば、うぐひす・かはづはいふも更也、あめつちの中にあるものゝへだてはせず。みむ人ゆるさしめ。



豐後佐伯の人の八十八の賀

方朔・彭祖とこも人壽をかさねたるたゞの人なり。夫つとめ玉へ、生玉へ。

屠蘇に月十二年してまだ百か

一山本西武　延寶六年二月十八日、七十三才。

一貞室　安原、かぎや庄右衛門。延寶二寅二月七日、六十四才。

椛亭御會

七十の賀に下されし御句を以て、雪中・午心とゝもに獨やかたにめされて、つかふまつりける。

諸國一見の宗ニてハ古稀の春　天府

われこのたびはめいほくのむめ　大江丸

みち深き雪消のしづく波分て　完來

うつ音遠き椿の家〳〵　午心

大かたの人はまだ寐じ月の窓　丸
とみに燗する樽のあら酒　府
ウ
秋風に斧入れ初る宮木山　來
北へとばかり人のあし跡　心
おのゝきと官女かたまる後夜の鐘　府
兒に僧正のえくぼをかしき　丸
見る處きく所皆布留の里　來
ゆふべの糯しぐれそひ行　心
月寒うふくさ袷を着たりける　丸
はなしの多き角力とりの宿　府
焚碎く土瓶のほこりはき集メ　心
九輪にかゝる緣山の雲　來
ひろ庭のこゝにも花の七曲ッ　府
和哥はかうかとみするカピタン　丸
こゝろにはあたゝかならぬ戀ごろも　來
わほく調ふ祝言の輿　心
長光の鎬に馬の毛を通し　丸
土用の風の秋をあざむく　府
ほり起す祕劑の壺のねり藥　心
七世の長者ものたゝりして　來
二三町ひとすぢ道の杉ばやし　府
荷先の車雪にとゞろく　丸
寸白のふりちうふぐりあふるらん　來
飽く日は取らぬ良工の鑿　心
のり玉ふ象も叱りて月のゆめ　丸
にしに行衛の霧のあけがた　府
椅さへ人には葛の關守て　心
あつめてしろき髻を燒く　來
鉦うちて宗旦狐よび出さむ　府
てりて夕日の雨を追はへる　丸
諸國一見の花にてゆ亭の不二　來
伺公の袖もめいほくのはる　心

老懷

若い衆のほつ〳〵往ぬはるの月

安貧守道といふに

花に日も拜む茄子の治部右衞門

大江の叟より、住よしの松のめで
たきためしを引て、我松風園にう
つしをくる。老人のふかき志を謝
するとて、雪中のもとまでかくは
申侍る。

園にふくその神風や松の花　羅無尼

一抑、大江丸がはいかいにもとつきし初は、をはりの國なるみの郷、千代倉鉄叟と申せし人のたのみにて、半時庵淡々のもとへ状を届けしより、折々かのいほりへ行通ひしは、いまだ十二三才の時成しほどに、此道覚ゆべしとも思はで、只おもしろく賑やかに有しになづみ参し。其後由縁斎貞柳の高弟成し雪縁斎一好のもとへいざなはれて、八とせ斗狂哥をならひしが、又勒々庵良能の門に入、或は松露庵烏醉の大坂にあられしたびのやどりをたづね、江戸にくだりては吸露庵・活々坊などへ行たれど、いづかたにも心をとゞめでありし



が、ひとゝせ松島見物にくだりし折、去ル因縁有て、雪中庵を師とたのみし事は、はいざんげ集にくはしく記したり。然ども家のわざに大事をふみ、三拾餘年はこのみちを捨さる斗、其日々のつとめを懈怠らじと守りつゝ、やゝ七旬に及びて、家のつとめは子なるものにさづけて、はいかいをたのしむ身とはなりけらし。これ壽をたもてる徳によれるものか。然れば教を受、こゝろへのはしをも承りし人々は、花鳥のしほりごとに其名をあらはし侍りぬ。別し而は師とたのみし雪中庵蓼太は申に不レ及、活々坊旧室・吸露庵涼岱・勒々庵良能などは、ひとたび師と仰しゆかり、其外にものをたづねしは、竹阿・二柳庵・烏醉・蒼狐・麥水・後川・蕪村・無腸・蝶夢・闌更・竹巣・嘯山・呑秋・青羅・完來・八千などの先達なり。分て半時庵淡々は、我ら少年のときゆへか翁、もこゝろをゆるし、大切の門人へつたふる事どもゝ、かたはらに有て承りし。今より〳〵に思ひいでゝ、甚ちからになる事のおほければ、ひとへに教外の師とも仰なれ、又、入楚・蝶雑・成美・午心・東瓦・雨什・

春蟻・一無名氏・喜斎・木朶のひと〳〵は、みちのしるべの友なり。かならずや人を撰ぶにあらず。故有て外ならずかたらひ申也。其餘のかた〴〵は、よつのときのうつりかはる風月・草木の風情をながめたのしむ數〳〵、濱の眞砂の盡せざらむにもたぐふべしや。

寛政十とせひとつとかぞふるとしの

なつみな月　大伴の大江丸しるす

この大江丸といへるも、なにとかこと様に世に有がましうよばれがほなりと、おほすかたも有らむが、唯大伴のうらちかき大江のきしのうへにすまゐすれば、其所の人といふ事にこそあれと、おほけなき御かたより物かきて下されし。よて旧國といへりしふるき名は、かねてまうけしたのみ寺の石牌の面にえり入たれば、はいかいのよび名は、大江丸の外はもとめずといふ事を次手にしるす。

# はいかい袋

## 夏の部

をこたりし人の家も訪ふ四月哉

花飛び蝶おどろいて袷着たりけり

心の矢うつぼにのこる四月哉

おやの代の時斗つくらふ卯月哉

あはせきた男のこしをながめけり

門うつりや夏女ほうになつをとこ

はつ袷むめ見しほどの寒さ哉

一なるみの山父曰、山崎宗鑑がかきつばたの脇の事、古人いろ〳〵と沙汰しぬれども、皆ひとつとして慥ならず。松江維舟(重)が犬子集十七の巻にしるせしと、去かたにて承りしと事おなじ。或とき連哥師宗長、三條殿にまいりたれば、公の仰に、山崎の宗鑑法師は何を達者

にすると聞り。汝つれてまいるべし。我ほ句せんずるほどに、汝早く脇をつけて、かの法師せかせてあそぶもおもしろからんと仰也。長、かしこまり、或日宗鑑をつれてまいりければ、なにか四方山の御物がたり有て後、庭の杜若けふ翌と咲り、おもふほど折とるべしと御許有。鑑、なにの心なう有がたしとて、池のほとりにのぞみ花を折る。公〽宗鑑がすがたを見よやがきつばた　ト仰らるゝ。長、やがて〽呑むとすれど夏の澤水　といまだ詞も引ぬうち、〽くちなわに追れていづちかへるらん　と鑑つかふまつりければ、ことの外めで笑はせられ、員のたまものありしとぞ。この第三なども、いかにも其時代の調とこそ思はるれ。又支考が童平をつれてよしの山に遊び、哥書よりも軍書にかなし吉の山　と申せしも、貞德の紅ばい千句に、

公家は衰ふ元亨のすゑ　正章
哥書よりも尺(禪)書を専にもてあそび　可頼

この附句をひとつにして句となせり。いづれも風流のたはぶれ事、今の世の人の句をぬすむなどの心とは、同日の論にあらじ。古書は常によく見て覺悟すべしとぞ。

筑摩のや二つへつゐのかけはづし
さよごろも重きは鍋のふたつより
青すだれ横たふ松のみどりかな
ひとゝせの天地易き四月かな

一さほ姫はならのひがし、たつたひめはにしにして所名、春秋のいろ、造化の神にもあらず、又あらざるにも有らず。用ひやうにて一がいにもいひがたしと、月窓の咄し也。

さらしほす名のさほ川とおほえたり
遣れて狐のきけりむぎのあき
麥あきや母にかくしてつまをもつ

一古雪中曰、はいかいは、ものゝ模様だてなる中に、さびしみを聞せたらむこそよからめ。たとへば古閑十郎が顔はあかくくまどりながら、紙子着て樂屋に居たら

むやうに有べし。此あしらひよかるべしと。

北の三青亭にて

あめつちよく〳〵のひ花をそだつるが、またくあるじ夏江子の志のあつき處ならむとふかみ艸深くかんじ入侍て

ぬしもぬしたれば牡丹もぼたんかな

浴してあしたを契るぼたむかな

夕ぼたむひがしあふみをかくしけり

あかゞねの雀なくべきぼたむかな

玉つくり去家のうらに、いさゝ大なるほだむ二もとあり。むかしはきさしたる人の園にやありけんとおもひやらる。花のさまあはれに覺えて

物かはりほしさほ(原註)桿もたすぼたんかな

と申出たれば、つれだちし人のとりあへず

からの池のぞけどぼたんなかりけり　と

申されしも又をかし。

天王寺の某家にて申ける。

日のもとの花をひだりにぼたんかな

夕ぐれやぼたむの株をあらし吹く

ぼたむは日の巳にひらき、さるのかれに花をうちあはせ、たゝむなり。蝶などの香にめでゝあそび過し、このくちにふくみこまれて、花をあかす事こそおもしろけれ。

あさねしてしかもひるねの牡丹かな

殘月も日もいたゞけるぼたんかな

牡丹ひらく時雷坤にめぐるなり

元信が三十四五のぼたむかな

亂鶯の聲しづまりてぼたむかな

日のもとの花納りてぼたんかな

日もさゝず星もうごかぬぼたんかな

一古事中に、門人三句のわたりをたづねしに、我つけ句うかびたらば、其うちこしの句につけて見よ。少しにてもなじみあらば、其句は捨て外の趣向を案ずべし。

いかにしてもうちこしへなづまぬ句ならば、一卷のはこびよからめとおもふべしと御申有し。

農牛の百疋もどるぼたん哉

娘婦が書たるあふぎに

にくやたが手折ぞつゆの白ぼたむ

一鼠腹云、芍藥の花は句になしがたきものにして、其質愚うち見にあらはれず。凡慮にてはうごかしがたき人のやうなる花にて、いまだこれを見とゞけて句に仕立ず。古人とてもみゝにとゞまる句なし。いづれいたしにくきもの也と。

悼方廣

ひとり徳をつゝみて物かげにおのれをたのしむとは、この人、あらをしや、この道のうつは。あらをしや、はいかいのかしこ人。

芍藥も散て方ー廣ー佛の事

しやくやくやぼたんのしもにたてる事

芍藥を忘れて訪へばちりにける



たとはゞ阿波の內侍かな　さは、其花の名をおもひ、すがたのなまめきたるをいへる季吟老人の洒落。我はこの花の情に思ひ入て、句のはらからをうたふ。

芍藥をたとはゞ馬の內侍かな

龍花會

灌佛や裸はおなじ乞食の子

すみよしや市兵衞、俳名泉明は、ふるき好ものにして、自己をたのしめる風流のひとりなりしさ。

酒ひやすいづみには唯月ばかり

三尺の鯉得てこの日狩をとゞむ

川がりや罪は思はて世見もの

一石髮の云、かぶき役者二代目の海老藏が門人にいふ、修行はおのれかかつ手あしきかたを、ならぬまでも情に入てはげむべし。得たるかたは夫につれて、上達するもの也と申せし。我はいかいも其如し。ほ句かつけ

合か、かつ手あしきと思ふかたを修行すべしと。

松本蓮英、卯月のはじめ狂哥百首詠ぜしを、やごなき御かたの御間に入りて、こよなうめでさせられ、自得齋の号を下されし祝に

おのづからみちの安居や自得齋

江戸竹はらなにがし、其子なる竹里になにはの店をまかせ、心ゆくまゝに物さゝのひて、國にかへり玉ふめでたさ見おくりて、又の再會をちぎる。

若竹のさかへ年〳〵見に來ませ

井のうへ春蟻の父七廻に申。

たかむしろ仰ぐもことし七眞如

有思處

一たんにかなぐり捨ぬ蜘蛛の糸

ほり池の脩正默す蝿の中

畫讃

この蝿によく〳〵盧生寐ほう也

臥龍菴東薗、白兎薗を譲り受て宗瑞となのられし祝、江戸へ申遣す。

ゆづり葉の茂りめでたし白兎薗

つくれ唯いせも源氏も紅のはな

あたら野の野守も己が蚊遣りかな

一炊庵勸進。雲州ノ士、六月十三日身まかり申されしに

この人にのこりおほさよかつら錢

鹿の子や願もたすつゝゐづゝ

一白幽子の白隱にしめされし語の終りに、なにの病か治せざらむ。いづれの仙かならざらむ。何の徳かつまざらむ。いづれの道か充ざらむとは、閑田子のかゝれし文のたのもしき事を、

なめくじり己も戀のゆがみ文字

江戸の普成、阿波の白醉たづねまいられしに

ほとゝぎす聞む不易と流行と

いせ津岡本氏の勸進

十二景のうち、洋遊亭のみゝきかず山といふ事を

かけたかと其鳥の音や廻避牌

バテレンノ本尊かけたかほとゝぎす

とまりては愚にみゆれほとゝぎす

郭公千手の臂のもどるとき

鳥羽どのゝ古跡にて

蠹にせし碁盤もあるをほとゝぎす

ほとゝぎすはこねの手形ひらくとき

かわやには犬の幸助ほとゝぎす

ほとゝぎすなくや子種の降るとき

鳴をくさのどけからましほとゝぎす

八十島のほねやなりけむ郭公

妄心正斷絕

越中がきぬを裂ときほとゝぎす

二千里の外は唐じやとほとゝぎす

あふみの草津、あらものや九右衛



門、其わざいくばくの田なもはたなもつくりながら、あさ夕筆なすつる事なう、四十餘年の修行むなしからず。東海道にてひとりふたりの物かきさかぞへられしがことし夏のはじめ身まかり申されしな

其ぬしはしでの田長かほとゝぎす

蓮花王院にて

ほとゝぎすひと聲すごせ和たはしらなりひらのさくら宗鑑ほとゝぎす

ほとゝぎす諫皷に糞を落しけり

ほとゝぎすの事、南邊にてはあま茶はじろといひ、上野の國あたりにてはチツタカヤウともいふ。四國のあたりにては又こつ手鳥ともいへり。いづれも時節と、なく聲の聞なまりにて樣〳〵にいふならし。コツテとは木の葉の朽て卷たるやうにて、朽葉・わくら葉などのたぐひ、このかたちの吝のやうなる故に、クツテともいふか。あふみ・大和・山城にてはこれを、ほとゝぎすのまき葉又おとし文ともいへり。皆のちの稱にして好

手のとなへなり。この鳥のたま〳〵になくこそ、あはれはふかけれと去人の仰られし。都のうつけいかにまつらむ、とよみしも又をかし。

いせの津の他力といへる人の家に、阿濃の句なあつめらるゝに申遣しける。

これ斗あこぎに聞むほとゝぎす

ほとゝぎす黒羽二重をいやがるか

霍公鳥万葉　時鳥古今新古　呑乞　郭公イセン　子規金　鵑
催帰　勧農鳥　蜀魂　納鳥　杜鵑ゴセン万　不如帰　周燕
鶫　望帝　杜宇　子嶲　保度ゝ木須　トウケヱン　鷗
鸀　陽雀　怨鳥　䳏鴂　四手田長

されば月雪花のみつにならひて、景物のかしらにもてはやさるゝは、いづれにやう有鳥と思ふてゐるがよからむと、よき人の仰也。

きく人のあればこそ鳴けかんとり

千溪に千羽なくらむかんこどり

一羽づゝ哥仙に添ふか閑古鳥

よろづ代とよぶひとつかなかんこ鳥

ほとゝぎすの留主ていねいに布穀

秸鶪江戸見たしとやこぞりなく

しるよしのならにすみけり閑子どり

鳲鳩戀の奴につかはるゝ

さくら蓮中といふ手打中間の、露中さいへる人の三廻忌、(弔)吊ふ人の句な乞けるに、其花鳥におもしろがられし人も今

ありや〳〵ありや葉ざくらになくかんこ鳥

よき史のつくりがたきやかむこ鳥

つま乞ふてなくかもしらずかんこ鳥

かんとりくれて小鳥のさはぐなり

近所に熊坂のうたひうたふな聞夕ぐれ

軒の蚊のなくほどころもひさしけれ

露雲・半輪のぬし、津軽におもむき申さるゝをおくりて

月雪も見よはる夏のころも川

あぢさゐをみるはきのふのあるじ也

妙法の妙はとむせる蚊遣りかな

一俳に名たゝぬものも、世におもひ出ぬ天然のよき句をするもの也。妓道に名高かりし初代の山下金作里紅、盥よりたらゐにかへる寒さかな　とはよくも生死の門を出入せしもの也と、あるひとのかたられし。

洛の三宅嘯山老人、四月十四日身(まカ)かかり申されしを、斗雲ぬしまで申おくる。

雅俗の二つにとめるものから

みじか夜やこの人にして八十四

又こゝに拾ふ句

郭公そつちは海じや人がない

鳥鳴てかけうちわたすぼたんかな

牡丹さくあした寶永まつりかな

ぼたむのぬし高尾かゝへし心あり

欏襹の皇子ぼたん敷てうつし奉る

三府ほどは萱も植けりぼたんの地

宮中

ある夕邊貴妃をほたるに吸せたる

青梅のもとにもかくし目付哉

戀の文としらでたちまふほたるかな

しばらくは風を驕らぬあつさ哉

すゞみとる果は我家にすはりけり

一信夫のいふ、はいかいの文通のおくに、ほ句したゝめ遣すには、よく文字・かなを正して認べし。本文はともかくも、(詮)全ずる處、ほ句の通用するが眼目ならめと申されしか。

追ふ人にあかりをみするほたる哉

かきつばたあざむく鷺もあらまほし

今は鵜にとをざかる老叉あはれ

江戸玉竜奇童、八才にてうせにし三とせにあたりぬるた、其父なる人へ申遣す。

わすれ草といふもの咲て中／＼に

七杉堂轉庵の賀

はいかいの根あはせはこゝこの軒端

方山主人十三回忌

あゝゆめじや十三年もみじか夜の

蚊遣り火や涼ませうとてたくものを

若竹に折ふし雲の往來かな

なにとなう女さびしき袷かな

一維舟　俗名大文字屋治右衛門。松江重頼ト號。初貞徳門、后里邑門人也。延寶八年庚申六月二十九日、七十四才。宗因・鬼貫も此門學俳諧。毛吹草之作者也。

笋の夜はかげろふものぼるへし

竹の子や身はうつせみのからしあへ

竹の子やあまりてなどか人の庭

若竹の畫かれしとや風さむく

竹の子のこだまをのれをせむる也

若竹やいまだ無品の宮のうち

なら坂やこの手買うとさらしうり

母なうしなへる人のかたにて

破れ／＼て隅に吳猛がうちはかな

白團となりの羲之にかゝれたり

むしをうつ時は鈍なる扇かな

氣に入らぬあふぎかされしあつさ哉

ものは一がいに呵られず。

蚊のために團を張る蜘のつとめ哉

一良能曰、人のよき句したらむにおどろき、我も負まじとおもふ心、これ即俳魔也。その句は其人に手がらをさせてあそふべし。未來記にいへる、負いくさ功者に引てかへるなり　といひしごとく、かやうのとき我も／＼とあらそふ心いできたらむ、己がはいかいの地までうしなふべしと。

かく承りながら餘人はしらず、大江丸この慢心た

び〳〵いでゝ、修行地をウしなひし事あまたゝび也。後悔あとにかへらずよと、ざんけしてこゝにかく。

おしろいの花笑ひけり唐がらし
三日見て光琳たゞの百合をかく
百日の鯉きる水に夏書かな
夏書すと巾に由斷すべからず
人のためにする様にする夏斷かな
角とれて風情うしなふ扇かな
石菖や津の町過てかた折戸
胡瓜いでゝ市四五日のみどりかな
帷子やかしこき代とてつち百性
夕だちに能人ぬれてしづか也

六哥仙のうち

けぢ〳〵を喜撰が袖にかくしけり
黒ぬしに尿しかけゝむ枝かはづ
かはほりのたちばな寺にはつ音哉

宵は水鶏夜半はくゐな曉は
買島すら既に一字のくゐなかな

一許六の詞に、皆人發句を案ずるに、趣向より入たるものは格別の句をもとめがたし。姿より思ひよせたらむこそ能句はいづらめ。又數多句を吐て、きのふの我にあくもの、はいかいの上手也とは尤の事なりと、あふみの白翁ものがたり也。

治に入って侍栄の日がさかな
青むめに又このごろやしのばれむ

有馬名よせ、おくの坊のなつ

おくの坊へござれ見せふぞ夏の月

いし山寺にて

ほたる見も二十餘年は平家の間
飛ほたる今はうたでは叶ふまじ
ほたる〳〵汝が魂は火の外か
きはすみにほたるこぼれて哀れ也
かげろふとまではさはがぬほたる哉

一又白翁の噺に云、少しにても我より上手の人の有場席

にては、ほ句にても附句にても、はやくうち出して指南をうくべし。我よりをとりたる人の中にしては、一段しづめて大事に案ずべし。又他國他門へ行ては、あくまでもあんじ入べし。師の前・上手の前にてはあんじるがむやくなり。早く敎を受べし。いろ〳〵のこゝろえ、德ある事どもを聞事ありと。

これはいかいにのぞむ第一の心得ならむ。

なつの森といふ題

鬱落す峰に一二のきをひかな

さぬるとし江戸に下りし時、雪中庵と兩吟おもいてゝこゝにしるす。

先人の舊弟、大江の翁と往事をかたりて

夏瘦も似て父在す懷かな　完來
その父います共なつの月　大江丸
なべつるも鴻も眞鶴もあそぶらん　仝
耕地景なき國の雨べら　來
つみ下すばかりに霜の炭だはら　仝
聳る壁も砂すりの土藏　丸
ウ
百雙の屛風つたふる家の松　仝
うぶ子にすゆる龍門の鯉　來
三輪くむ僧の腰抱く女ども　丸
あやめうきくさ浪のうき舟　來
むら雨のはら〳〵はらとうち過て　丸
神湯の鼎に向ふ木綿襷　來
五位のさまはじめて月にひけらかし　丸
名古曾の關をこの秋の旅　來
わたりゆく鳥の行衞はにしの方　丸
茎そゞろに櫃のうせもの　來
なにくれと壬生の俳優花ちりて　丸
畠うちもどる垣の外の聲　來
二
日のおぼろむしはむ空のひつじ過　仝
隱岐に網して東ゝの魚　丸
ひきまとふ還城樂の百万騎　來
奔馬にむちの按摩追ゝ　丸
臼轉け車そこらに片小路　來

鉾草臥をもどす夕だち　丸
羅に美人の膚にくげなり　來
つゆのいのちを君たゝむとや　丸
浪よする外に音なき島の秋　來
月のかつらに見るめ荒昆布　丸
息を呑ム座行七日の竹むしろ　來
檜の戸ざし風の香をうつ　丸
ものかれし雪の巨椋も捨られず　仝
ひとり狂じてたどる丿貫　來
ひしりもち左に提し日がらかさ　丸
線香廻す月まちの聲　仝
花いく世國の掟もむかし繩　來
雲にかへらぬよるの水鳥　年

ある人より望の題

こせうの粉野中の清水ぬるくとも

ひちりきのあさからもるゝ若葉かな

國とりや雲の峰ある下ゝやしき



はゝきゞの生りやすらむ雲の峰

雲の峰雨とふりをれくだけをれ

一凉袋曰、銀屏は夏の凉しさをいはむ本情也。花すゝきは風雅也。金屏は又冬ごもりの本情にして、松の古びは風雅也。いづれにも風雅と本情のふたつははなるべからず。

むかし江戸におりける人の、今はなにはにすめるが、あやめのせつくにまいられしかば

かしは餅にかたれむかしの首尾の松

一吐月云、むかしの名だかきものは、其いふ所かくべつ也。三代目の遊女高尾の文のおくに、

御うつりのみ忘れかねばこそ。日へおもひ出しは不申ゆ　このこそと切て、おもひいだしは　と

おもしろき手にはのこなしなり。これ文中のはいかいなりと。

一白牛云、はせを翁の日はつれなくもの句、これはむかし鵞氏のうたとて、

すまよりもあかしのかたぞあか〳〵と
　日はつれなくも秋風ぞふく

このうたを、かねてをかしと耳底にとゞめ、ひとゝせ北國行脚のとき、北枝をたづねて、秋の風・秋の山の推敲に、枝がうつはをはかり玉ひし。これらもはいかいふくろに入たるものとかたられし。此うたいづれの書にありしやしらず。

けしの花うけとりわたし濟にけり
蝶二つ芥子をかゝへて吹れけり
芥子の花ちるものにしてちるも見ず
けしの花道頓堀を過にけり

有思處
むしに灯をけして古人をみぬ夜哉

兵庫の北風といふ家すぢに、そのかみ神功皇后の異國退治の御時より仕へ奉りし舟の家也といふ。又新田義貞より北風といふ名た玉はりし家の、今に血脈たへせでつゞきたるよし、いづくにもたぐひなかるべし。

北風が二千餘年のむめ青し
なつの夜やまだ香にある唐がらし
おやなしが苗うつ戀はおほへたり
なつの夜は寒夜の御衣のうらや哉
辰松がおやまに着せむ杜若
かきつばた曉雲はなかりけり
ひぢりこの灰やさしけむ杜若
水酒ぐもの愚なりかきつばた

一連丈の日、人情をはくには、その人をあくまでもうつし得ざればいかゞ也といひし。いづれ俳力の入るもの也。

はつがつを重衡みやり玉ひけり
初松魚宗盛むつとまいりけむ
はつがつを高時喰はで死たりける

はじめは三位中將のかのゝ助が、もてなしをあだにせられざるみやび、中の句は八島のおとゞのおろかにして、

人前をはぢざるさま、末の一句はかまくらの入道の田樂法師に、もてなさゞる恨をのこせり。

はいかいに古人なし魚にはつがつを

鰹呼ぶ外顏色はなかりけり

いづの海やかつを島なす夕つたひ

日蓮とゆきあひ川やはつ松魚

曾我兄弟の畫

北條の使は來たりはつがつを

長刀にのせてさし出す花柚かな

なく鹿のもみぢも見へぬ青田哉

夏さらに日くれてものをいそぐ也

一凉俗云、はいかいにさびたるすがたのなきは、調膳にかうのものを忘れたるにひとし。さびしみは閑にあらず、あらざるにもあらず。

つのもじやいせが古戸のかたつぶり

雨の日や葵のうへの蝸牛

羽二重の機夕がほにくれかゝり



羽蟻たつ家にとつがぬ美人あり

こゝに二句あり。男女のこゝろ遣ひなれば、句のはらからさやいはむ。

手もさゝじ兄の抱籠ころぶとも

手をとりて嫂の蛭はらひけり

田家

こちの芥子まだちらぬよと叱るなり

江戸深川はせを庵にて、祖翁百回の大法會あり。一卷のほ句を申來りし。これ乙丑のとしの四月中日なり。

けふも卯のはなやがうらのむかしかな.

谷素外の一陽井をたづれて、そのかみ宗因のかゞみさすなりの句をおもいでゝ、折から床に生し花を見侍りて

江戸をもてかゞ見と花のかきつばた

雪中菴・雨什・午心さもにすみだ川

にあそべる日

ほとゝぎす聲ひとつ家に宿からむ

ある人の新宅の賀に

新御殿かふもり入れて祝しけり

鳥醉　二十五年　鳥明にて、居士なにはにいませし事などおもひいでゝ

四月四日

其四日をおもへばひさし壬生山家

大躰に拂ふて置しはありかな

一周竹云、ほ句に聞へがたき有、其心をとふべし。句のおもてより心のよき趣向有るの也。はせを翁の門人に初心の人あり。夕すゞみの句を、いろ〳〵にあんじたれどよからず。翁曰、いざまづくつろぎ玉へ、われも臥なむと宣ふ。御ゆるし可レ被レ下ゆ。しだらくにおればすゞしくゆと。翁の云、今の詞、即ほ句なりと。しだらくに居ればすゝしき夕哉　宗次ト有。又去來の、おもかげの愚にゆかしたままつり　翁其心をとふ。答に祭るときは神在すがごとしとやらん、玉棚のおくなつかしく覺侍ると申。翁云、しからずば其心すぐによろし。玉棚のおくなつかしや親のかほ　と直し、七文字なつかしや　として、下をけやけく、親のかほ　としてよろしかるべしと。都て其おもふ所すぐに句になる處をしらず。ふかくおもひしづみ、かへつて心重く詞しぶる也と、敎玉ひしと承る。世上大かたかくのごとし。早く心をうちひらく師に、敎をうけるがよしと申されし。

佛狼逃の沈魚に似たり蚊屋の君

ものいへば隣の蚊遣りとなりの蚊

叶ふ戀蚊も万歳とうたふなり

江戸京傳句帳にかく

夜あけたる李白かこしにたもの蚊

本山おゆふれい蚊とあれど又有べし。

せみ啼てそのはら山はなをくらし

なのりして摘はたか子ぞ青山椒

ねぶの花ちるやこはたの別れみち

一人に依りて德のかくれしと、名のあらはれたるあり。おなじ活達のうへにも

ほとゝぎす湖庵人してきかせけり

好齋が厠へちぎるぼたんかな

いづれも其人情、つねぐのわざ柄を思へばかくもあるべし。二人とも浪花の活達、名のあらはれたるもむべならずや。又誹人にしては淡々なり。能く所の人情を動かしたり。其比大阪には、才丸・鬼つら・野坡・祇空・來山など有し中に、俳かいせぬ人までも、ことしの淡々が歳旦御聞なされぬかと、申せしほどの事にて、俳道の孟嘗君ともいつゝべき男なりし。

ある方にて支躰を題として、

我等輩もにさぐりあたりし。

一心の無爲こゝに有さ、かの大久保のなゝがしも、これなさぐらば安堵すべし。

藥玉と見るたふさきのあるじ哉

一大かたの人の句をつくるを見るに、たとへば、三尺か四尺の處へ板をとゝのへ渡すに、その寸尺だにあひぬれば、すぐ様用ひるやうに有なり。こゝは杉か槻か樅か松にてやよからむ。水のかゝる所なれば、槇にやせむと思ふは、外の題にふれやせむと考る也。其うへふき入るかぬくひうるしやなど思ふは、手には又新古をためす也。かのあらけづりのまゝ再吟もせず、披露に及ぶ麁末なる俳士斗也と、しのぶの謙常つねにつぶやかれし。



銅佛の膝のほこりや夏の月

なつの月たゝみのうへのものさびし

くち辷るむかしの戀やなつの月

金鍔のこのときひかれ夏の月

人肥たるが故にと笑ふなつの月

水ならば疾うちこぼせなつの月

蚊遣りたく翌もろこしに雨ふらひ

柏木に蚤とらせけりねこのつら

のみのちへ晝はあさまの夕けぶりの

蚤にねぬ其ゆめ虎を手うちにす

凉帒の云、鹿の音の聞へぬ山やうすもみぢ　とは宗祇

のほ句なりしを、しかのねのとゞかぬ山はまだ青しとは麥林がはいかいのこなし也。既に雪片大如席、と李白が人をおどろかせしも、明に至て雪片大如鷺と、風流をかへたりト。

一松永貞德　松永彈正久秀男、永種といへるが、妙顯寺に法師となりて有しを、下冷泉妙壽院、妹を嫁して德をうめり。幼名勝熊、假名備右衛門、道遊軒、晩年復束髮、着童服、自号延陀丸、后又長頭丸ト云。元龜元年未のとし生、承應二年癸巳十一月十五日、八十三才。

單物着てみられけりあやめうり

なには江やけふは湯にひくあやめ艸

さねかたの馬躍りけむ紙のぼり

去かたの幟はじめに

家の風吹とて門トの幟かな

五月雨傘なき家にはなしけり

さみだれや凡天下のころもがへ

大やまとやまとの國の田唄かな

すみよしにて

虎に泣雨を御田の笑ひ女郎

田うへ笠よめに拍子をすゝめけり

一信夫のいふ、月次・臨時の會にのぞみては、その宗匠・執筆又は一座の古老にうち任せ、外々何かといふべからず。又雜談等もたからかにいふべからず。行儀あしくいたし習ひぬれば、他所の正しき席にのぞみ、にはかに心あらたまり、修行地の一二段もをとりて耻をかく事なり。つゝしむべしと也。三都にて点とりのはいかい癖がうつりて行儀あしゝ、つゝしむべし。

孑孑の富士ふみちらしあそぶ也

乞〳〵て釘倒雨にながれけり

蜻蛺やたゐずしてしかも元トの水

いつはあれど水みる夏の都かな

一同じ人のいへる、一巻のおもてのうちは、大事に句を案じ、人にもうかゞひ、恐ろしき事する様にひまどり、肝心の二三四の折の處に至りては、宗匠の下知をもたず、心のまゝに句をすゆる。これらは道のおとろへかなしき事也と、いつも悔かたられし。

一雪中庵蓼太の句に

　さみだれやある夜ひそかに松の月

といえるを、からくにより、ほめてこしける事のめづらしければ、こゝにしるす。

　撒蜜他列耶阿兒要披倪革尼摩子那

次吉　　雪中菴　蓼　太

蓼太先生者隱君子也都人士以爲金馬侍從之流亞矣乙未春於崎陽客館得俳偕（諧）歌一章言是先生所著僕不能讀其國字故就譯士某得解解則興在景中意在言外大非俗品可知盍僕亦有所感也因賦一絕寫其意傚顰之詩所不辭也

　長夏草堂寂　連宵聽雨眠

　何時懸月色　松影落庭前

乾隆四十年孟夏月望後三日

　　　雲間　程劍南

句のうへはとまれかくまれ。俳諧の道の唐土に聞へて、かく賞し送れるめでたさにしるす也。將ひとゝせ、東叡山の御殿にめし、はいかいのさまをも御聞あらせられむとの仰事、諸太夫鵜川筑後守殿より、御つたへ有て、卯月廿日可罷上の定なりしが、其日頃に紀の國の太守、宮にのぼらせ玉ふとて延引して、翌廿一日めしけるに、門人誰かれも共に昇りける。卽鵜川殿より仰有て、かくても俳諧の發句になれるやとの仰也。蓼、恐れてかしこまりて、御脇つかふまつり、やがて百員みちて、員のたまものいたゞかれける。

　きのふは諸侯にさえられし悵を

一日は人がとりけり廿日艸　御

　御遊はちゞに深きなつ山　蓼太

水車米つきあさは臼引て　素文

　下略

これ等の事、蓼師道の冥加有し事也。

　炎帝

見わたせば柳をはじめ暑さうな

子の員に升うたせたる鵜がひかな

つかれ鵜の腮に月のしづく哉

罪なしと鵜尉御僧に申けり

持佛からうつしても出す鵜の篝
月いでゝ小便しけきうがひかな
　かもの齋に
競馬見る木のぼりやまず五百年
一員九日、阿佛の尼公あづまに下り玉ひし時、人ほ句を
乞ふ。長月晦日なりければ、〽けふは早秋の終りにな
りにけり　としてあくる日の會に、〽けふは早冬のは
じめになりにけり　として次手にいふ、哥は其題をほ
句とし、連哥はほ句を題としてよろしからむ。しから
ば其時をたがはず有べき也と。
　悼午後主人を
猶地のぬしは、果蔵のいちくらに
かくれて、常に蔡邕・李白がこの
めるみちを、心の友さしたはれし
事をおもひいでゝ、三とせの今日
を弔ふ午後のぬし。
三年酒とかゝれし人もこの夏は
羅の君やいづれの贄に行く

目さむれば蟬百丈の梢かな
ゆふがほの今にしろきをあらためず
夕がほやノ貫が來てずんと切ル
上毛野國藤岡のさゝにすめりしは
七川榮宿は、四十餘年の知音なり
し事を其友なりしかたへ申遣はす。
わすれめや其夕がほもひるがほも
ひるがほやつゆとしもなき馬の尿
草あればつゆ有世なりひるがほの
ひるがほのはつ花みたり忘れ水
夕がほや中にしろきはをとこの子
一信夫云、なにのみちにても四十年斗前かどは、名人上
手功者下手とわかり、下手は下手なりにたのしみ、年
をつみて功者となり、上手といはれ、天然と名人の場
へもいたりし事也。今はこの下手に成てゐるものなく
なりて、なりおしに上手といふものになる故、名人
といふものも出來ぬ樣になりしと、かたられしも早貳
十餘年のむかしがたり也。この下手になりてゐたる人

こそ風流最上の人ならむに、左様の人なき世こそ恨なれ。

ならみちにて

ほしうつる井手に水なしわたのはな

ふみ出す一歩のうちや夕すゞみ

夕すゞみ風ぬすびとに酒くれむ

ゆふ涼虎ふす野邊をさがしける

一季吟　江州むらの産、北村又助、貞徳門人、拾穂軒、芭蕉師、再昌院法印。寳永二年酉六月十六日沒ス。八十六才。

大江丸が句に、ひむろ守まだ名もつけぬ子を抱き　此句はじめは、まだ名もつかぬ子を抱き　とせしを、ある人のいふ、この比出生の子の七夜のうちに、其父むろよりかへりて、すぐ様いたき抱上たらむ。しかるを名のつかぬとは、なにとか他人の子のやうにあらむ。名をつけぬといはゞ、てゝをやのかへらば、名をつけさせむとまちたるに聞へ侍らむと申せし。いかにも尤也とてかくは直したり。これ一字の椎敲ならむ。

夕だちに鹿よぶ下駄もはかれけり

泉州左海山脇義昶、六十初度の祝、寄龜祝といふ事を、詩哥・連俳をよせて祝せらるゝ。六月廿九日の出生の日をふくみ申遺しける。

かめによするといふ祝に思ふ。あろさし百川老人の、この佳客に名をつけくれしふる事をもて壽し。

よろづ代の魚市見なせきやらの介

一半時庵淡々者、大阪西横堀阿波屋ノ子、延寳二年甲寅出生。幼名熊之助、後傳七、江戸え下り、小網町ニテ呂國、曲淵宗治、キ角門ノ滑北、京都住下川原森三揚、松木淡々、江戸堀百川又勃窣翁、晩年左界ニ移り、又大坂島之内ウナギ谷龜亭別庄(荘)ニ沒す。寳暦十一年十一月二日、年齢八十八歳。墳ハ難波鉄眼瑞龍寺、法号高源朝水居士。

あさしもや箒で畫し不二の山

此句者前年詠處、其時節故、用之。

江戸にてキ角が門に入り、はせを翁の終焉之時は、キ角二十五才、淡二十二才なり。

大江丸が江戸ほりにて相見せし比は、元文之初、翁六十四才也し。

はせを翁に淡が相見したる句は、白かゆに炭つき足やしかの聲 あたゝら集ニ出す。又かねて二樹二石のしるしをのこす。文選古詩 古墓犂爲田松栢摧爲薪の謂なるべし。此塚寺中門の右脇有之。

横ぎりに鉾見て過ぬ児のおや

人分て風こそわたれ宵かざり

祇園の日ぎおんに宵のほたるかな

かたびらも着ぬ人もなしぎおんの日

夕だちにむかつてまつりさかんなり

おなじ日に清水三つ見るあつさかな

呑でから宮守のみゆるしみづかな

うなぎ焼てむしはむ佛あぶらばや

殺伐の香も哀也川桒ぶね

ひらき満て白蓮暫しさむげなり

みな月晦日の夜更るまで、地車なご引めぐりてさはぐな

まつり大皷いかに鬼つらたしかに聞ヶ

なでものや丸ひ苧桶にかくのふた

小式部も小町もぬけしちの輪かな

懐古

なつ木立なを泣れけり方廣寺

一なつの季寄に、住吉の御秡火替と有し。この火かへといふ事、いまだ句にもむすばずや見あたらぬ。これはとし毎の六月晦日、住吉の神輿をさかいの津、大小路のみなみなる宿院へ(一名名越しの丘 夏こしのおか)うつし奉り、夜に入て又御本所へ還御なし奉る。泉の氏人、かたひの町人、手ごとに松明とほしつれて、七堂の濱といふ所を巡り、大和橋の北なる御輿の居へ石に休め奉る。津の國の氏人、すみよしの郷民、各〻てうちんをかゝけ迎奉り、御こしをうけとり、かき揚奉れば、いづみの方の松明一度にうち消して、くらがりををどりかへる也。この御祭を遙拝して、きのくに・いづみ路・あはぢ・兵庫の

湊、にしの宮・尼崎の浦〳〵に漁るもの共のかぎりはいそべにいでゝ、ちやうちんをてらし、かゞり火を焚つゞけ、祭まいらすに、いづみのかたの火の光りのきゆるを期とし、各還御を拜し、をのれ〳〵が濱邊のひかりどもけちて、家に入とかや。さればこの火の光をせんぐりに目あてとし、ほど遠き浦〳〵しま〴〵までも、かくの如くまつるとか。しかれば境とをきみち、はかりがたき廣大なる御はらひなり。これを住吉火かへの神事と申奉るなり。いづみの人どもの家〳〵にかへるときは、はや夜半なれば、秋にうつる折から誠に夏ごしの正しき事、これにまさるはあらじとぞ思はれ侍る。

火を替るさかひの町や秋の風

ひとゝせ梅亭の御館にめされ、はいかい仕りけるさき、けふの有がたき事を

ひかれては先憚を忘れくさ

とつかふまつりしに、御脇給り、雪中完來第三を致されたり。是を席上にておの〳〵筆をとり、三枚したゝめ、御やかたと雪中庵と我かたにのこしとゞめ、永く御恵情を忝うす。このたび月居のぬし、これに又つぎ句いたして一巻とし、雪中ぬしよりよろしく申させ玉へとふみ遣しける。

俳諧之卷

ひかれては先憚を忘れぐさ　大江丸
こゝすみよしの月のすゝ風　天府
詩をおもひうたをうらやむ筆とりて　完來
かくありしにつぐ
梅亭と申御館いつみむ　月居
はるも早とまり〳〵のとろゝ汁　仝
子をよぶつばめ空聖ム雁　丸
ウ
唐の代とたしかにしるき繪のさまに　丸
たがうつけたる綾の袖ぞも　居
いざうたふ二十四五日かそゝろの戸　丸
よるの芙蓉をちらしかけては　居
風更にあやなく月の雲はしる　丸

海むらさきの網をひくとき　居
今も猶前内裏島の名を呼て　丸
つれおもしろき彦左二郎作　居
餅ぎらひ酒ぎらひとはしりながら　丸
花にとがむる聲のどかなり　居
東叡の七歩のつゝみ遲き日に　丸
こゝろ空なるわれ人のはる　居
うき雲に似て行ふねのなつかしき　丸
きのふ入たる八專のてり　丸
市に出る氷室の翁眉しろし　居
杯をさゝぐる襁褓の皇子　丸
むら竹の雀もあける夜を鳴て　居
たとへしなくや金まらの神　丸
いづかたの戀よりかゝる初しぐれ　居
あはぬ歯ぐきに伽羅をかみたる　丸
御佛に宿かすまでの淺ぢふに　居
富士にみとれる母に見とれる　丸
よろづ代の月すが〱とさしのぼり　居
水にちりなき秋の漏刻　丸
ウ
新掌（嘗）のをとづれそむるいんや殿　仝
只をし默る人ばかりなり　居
手にとりし夕だち雲のやり過て　丸
苅くさ百駄牛のらり行く　居
はゞかりの關もる花のにしひがし　完來
風のゆきゝもうみ山の春　牛心

## ふる國妹と脊をおくる

〔柳緑花紅〕大江のふる國、むかふ堤の跡尚かりし比より、家の業つとめおほせて五十年、としは妻をも供して、爰かしこめぐり、昔に聞ふる大井川、蓮臺頭ごしにやす〱とうちわたりて、そなた百迄こりや九十川と謡うた興じて、江都にも廿日あまり、夫より日光山又善光寺、伊勢や尾張の神にぬかづき、佛をおがみ、都は祇園のころなるべし。

難波津に此夏かたれ冬籠　雪中　蓼太

# はいかい袋（秋冬）

俳諧は見る物・きくものにつけて、おもひを述るたはぶれなり。それが中に中昔迄は、たゞ狂言にいひ來れるを、ちかき昔芭蕉翁より、始めて詩歌の情を寫し、風雅の心を俗躰に云る事になりにたり。たとはゞ詩經・万葉集の風躰に似たるべし。さればかの蕉翁の門弟、おのがじゝ得たる方ありて道のちまたに別れ、糸の色〳〵に亂れたるやうにいひもてゆけば、その末〳〵になりては、その師の得たる一かたをのみ學びうつせば、おの〳〵纔に蕉翁の一躰とはいふべく、實に蕉翁を盡せるとはいふべからず。是をたとはゞ眼くらき人の象といふけだ物の尾を撫、足をさぐりて、漆桶に似たり。箒のやうなりといはんがごく、かの象にあらずとはいふべからねども、明眼の人のまことの象を見たる大にたがふべし。扨、蕉翁の風雅はいかいにぞといふに、詩經・萬葉のはかなき草木・魚鳥のたぐひに多くの思ひを寄たるやうに、風雅の心、物にうつりて、おのづからなし出せることぐさ人の耳を驚かし、かく百年の今にもめで興ずるは、ひとへに邪なき風雅の心の根本に土かひ、水そゝぐ故、いひ出せるとの葉ぐさ、ひとつ〳〵に珍らしく、自然の姿をなし侍るならし。その詞に出るに趣あり。たとへば新奇の詞、豪邁のと葉をつゞけぬるも、その本の趣向拙趣といふは、霞をあはれび露をかなしめる人情のおもひをも、物にたぐへて、五七の詞におかしくつらね出す事なり。かくいへばとてもかくても戯言なれば、いかやうにもあらめといふ人侍るべけれど、小道なりといへども觀つべき事あり。また無下のやくなし言にも侍るまじ。　隨齋

俳諧をもて修身齊家の道にあて、或は老佛の心にかよはしめて、高妙に說なす者あるこそ心得ね。その道を高くせんとして、却てしれる人の譏をひく。俳諧更にさやうのものならず。佛語聖言によらずして、俗中の風雅を述、別に趣はある事なり。

いつのとしの秋にや。雪中庵・夜半亭往來の哥仙あり。こ

としつちのとのひつじの秋冬は、ふたりの翁の遠忌にめぐれば、追善のひとつにもと、とりいでこゝに記す。

此一巻、ひさしく物にひめおきしかば、むしはみて文字のゆきかひもさだかならぬを、九二庵のぬし、はやくよりうつしおき申されしをもて正す。

わかゝりしさきは、武江にして俳林の花をあらそひ、實をもとめ、今は關山をへだてゝ、いつあふさかのあなたこなたに、たがひの老情を申遣しける。

君と我月にうつらば嘸泣む　蓼太
ゆめのゆきゝも二千里の秋　蕪村
くづの葉に荻のうは風吹添へて　仝
かど守ひとり履つくりゐる　太
歴ゝのなでしとみゆる古火桶　仝
祕曲つたゆる息なゝめなり　筆
ウ
つくし舟唐土ぶねに漕ならひ　村
廿日あまりの夜半の雨風　仝
女にもまがへる宮を背に負ひ　仝
引ばなびかむ袖に御經　仝
朝まだき戸ざせる三輪の山陰に　太
五合ばかりの米のしら水　仝
からき目に夜釣の友のこりながら　仝
髪に霜をく母のくり詞　仝
在すかとかざいて鎧ほし兜　仝
月をかさねしはつ春の餅　仝
花むこも雪中庵の三ッ物に　村
小舟つけたるむめの片町　仝
てら／＼とむらさめ遠きにしの空　仝
頓寫の施物引あまる迄　仝
傳なる藤太が袴壓こへて　仝
いばらの花の匂ふ大原　仝
澁あへる夏の炭櫃の冷じさ　太
こがねに富る僧あはれなり　仝
なきあとの公事に成たる甥二人　仝
たちながらこそ雪のにしき木　仝
神の矢のひとすぢ思ひ初玉ひ　仝

庄司がやどの鷄の羽たゝき　村
大水の三尺落しあさの月　仝
いこまの山の淡き秋霧　仝
攝待に古郷の人のこしかけて　仝
土藏もたてしとかたる嬉しき　仝
天草の亂より後は時津風　太
狀につばさのなき斗也　仝
とも〳〵の花におもふ夜半亭　仝
やせ臑いさむ千艸の比　仝

右往來哥仙、大江丸執行て滿尾しなり。

# はいかい袋

## 秋之部

秋來ぬと目にさや豆のふとり哉
かと鳴てあとたつ秋の烏かな
いせの鬼いせへ往けむけさの秋
蚊のあしも大事ふむ也けさの秋
あきたつとおもふ心が秋かいの
によつぽりと僧こそみゆれけさの秋
散るものとちりけり春のさし柳

長恨哥之讃

方士しばしと呼かへし、天にあらばひよくの鳥。

魚ならば鯖やと貴妃はかくれけり
方朔も王母も何ンのひとつぼし
かさゝぎやながらのはしはあとたへて
ほしの戀負ふて迯ふも丸い同士

七夕や二千餘年のひとつ鍋

舍弟の能登の守さ、子供のうたふに

ほしの夜の明星ひかり〳〵哉

にたほしの似たほしに照る情哉

晋子のけなりがられしも

七夕やふたりはこまる娘の子

無功德のとなりに高し揚燈籠

一活ゝ旧室曰、一巻の變化は起承轉の三つ、又見聞志の三つをむねにとりて、其場のはたらきに有べしや。むかし太平記にいづる楠判官正成が、討手として六波羅より須田・高はし數万騎にてせめ下りしを、正しげ方寸のはかり事にて散ゝに追ちらせし其あとへ、宇都宮わづか五百騎にて向ひしかば、楠はやく天王寺を迯て公綱にかちをとらせ、扨近邊の山〳〵浦〳〵にて篝火をたきうたがはせ、又ほね折らずに追かへしたり。これほど面白き三句のわたりはあらじと、かたり申されたり。

公綱もかうむされけむ高灯籠

なき人の袋をつかめば切籠哉

あるじしてことしも過ぬたまゝつり

もてなしも蚤なり靈まつり

さもたくましかりしもの共の、こさしははかなき人のかずに、かぞへらるゝ事よさて

娑婆で見た與四郎に小七たまゝつり

目にみへばをかしかるらん玉祭

浦しまがはこの行へやたまゝつり

もしやはと蝶さへ追はずたまゝつり

一享保改元の比は、浪花の誹諧いとさかんなりし。

鬼貫　才丸　野坡　員九　淡々

祇空　芳室　布門　昭雁　白羽

法策　海音　矩州　瓢水　來山

はかりいもまだ初月の宵〳〵に

迎ひ火やけなりさうなる門徒の子

壬戌之秋七月既望、蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。

この月夜こそ末世相應の月見なれと、西山公の仰
ありしとか。

薄よりまづそよぎけり娘の子

地藏まつりよこ町あれば衆生有
ほんの月哥よまいでも氣が張ぬ

をどり子やほしも交らず人の唄

踊子のくちびる白く明にけり

おはり有ものとはみえぬ踊りかな

かりそめのをどり成しか夜半の月

川せがきしかも夏ごしの水にあらず

ながめせし間に八九本花火かな

一古實中曰、人丸・赤人・定家・家隆も人なり。つらゆき・
みつねも人也。貞德・宗因・はせをとてもおなじ人の修
行したるなり。修行つもりなば、など其境にいたらざ
らむとおもひて、はげむべしと申されし詞のみゝにの
こり、我も八十とせの老の身ながらも、今一支干の修
行をはじめたり。

京、丸山主水、園の繪をかゝれ



しすりものゝ、いまだ人の手にわ
たり行ぬうちに、身まかり申され
しを

園より丸山主水すてたりや

風折有丈を悼。

おどろかれぬるぞや秋の風折に

芦間に弦月のかくれし書

月はまた實相無漏の象の牙か

はなしがめ是万年の行路難

えくいもの花ちるさとへおやふりか

中元

人のしほみするやとしの中筒雄

中元の日や見わたしもいものつる

人に尊脾あり、支躰に俚富あり。
さをきはちかきに愛せらるゝも、
尺伽鬼面がたぐひなるべし。

叡覽のしりこぶた也すまふとり

にくまれていきたるかひや角力取

負ずもふ食事日頃に十倍す

一近年はいかいのうちにて、人情をよく盡すものは蓼太・蕪村の兩叟、ことに其妙あり。すまふの句にても、へ大内の砂を土產やすまふとり　蓼太　これはかのいにしへ名かみの成むら・さつまの氏長がたぐひにて、田舍のいゐづとに、守りのかはりにとりかへるさま、こけても砂といふをかしみをふくめたり。又へ負まじきすまふを寐ものがたりかな　夜半　つまにあひての情、おもひめぐらすべし。へしらむめや北のゝ茶やにすまひとり　夜半　すまふの祖野見のすくねも、菅神の御先祖なれば、ひとしほ道の信心もこもれるなり。これらの力にて風月花鳥の情をいひかなへたらむ、道に手だれのほどをもおもふべし。鳥虫のうへばかり凡にさつしやりて句作したらむ、大かた人形のふえ吹やうならんと、さる人の仰、さもあるべく承れり。

負すまふおのれをゆるすはなしかな
白びやうし兒のすもふにかくれけり
なげられしすまふが親の念佛かな
むさ〱と上下着たりすまふとり
角力老てやどもつ京の月夜哉
　かちの助が死ける秋、其弟なりけ
　ゐだてがせきへ申遣しける。
谷風が居風呂空しあきの水
むかしをとこひがしいかづちつるの助
　去ゐんきよのへらず口
をらが角力轉てくれたで夜が寐よし
　まかせぬはうき世也。
六尺あるむすめもちけり老角力
　東にたちける人を送りて
日のもとの露みてござれ大井川
我いろを捨ればつゆの世は易し
ぬきはなす簭七尺の野太刀哉
　妙莊嚴王の事を
つゆ須彌におまりつ芥子に置たらず
たつたひめ又しらつゆと成にけり
なりひらにあびせて逃ししらつゆか
しらつゆや抑はつ鶏のねぐらより

玉置玉東を悼。

つゆの玉ひんがし既に白き袖

はつ雁やほとゝぎすめはまたせをる

必花老人東へかへらるゝ。

はすいみの飛んだ事でもなし古郷

なくとばかり思はゞむしの笑ふべし

かまくらやむくげのうへの大佛

市女がさきたる繪に

雁鳴てほとけ御前の家出かな

椀久、杖にてさみせんひく畫に

あきのかぜ京の大佛はとばかり

秋のかぜ秋風となりて衣うつ

去年うりし牛にあひけり秋の風

紫蘇の實のむらさきさびしあきの風

一天落月晒銀砂

出のくちに砂糖ほしけり秋の風

浪人や刀提行くあきのかぜ

陵王の撥かへすとき秋の聲



いく杖とかむちうたるゝ罪人ある
をみて、善惡不二さやらんのささ
りがましけれど

あき風にみする苦肉の聖哉

史うつす灯にかくれけり秋のむし

夏書せし筆をあさがほ日記かな

あさがほやたけくまの松のあとに這ふ

二百日のねこ葬をくらひけり

あさがほや先百日のあさぼらけ

夜もあけぬいざ葬をみて寐ばや

あさがほの人笑ふのかくち明て

あさがほの花やうき世をむさぼらず

一先師つねに御申有しは、御たがひに死るまではけいこ
いたすべしと。又洛のうた人の、

更ぬとてかゝげそへずばながき夜の
なをくらからむまどのともし火　と

申されしもこゝならむか。

あさがほやこれも旦那にあはぬがち

九月蚊屋ふんで娘の踊る也

よきやうに聞ふる餘所のきぬたかな

一雷堂云、人に句を聞するには、かり初にも物にかきつけて見すべしと嵐雪の詞なり。さなくては大事の句の眼字、自他をもきゝちがへられ、集などにあたら句を誤る也。はせを翁のキ角が柴の戸・この木戸など正し申されしやうに、俳かいに深切にはあるまじければ也。又文中に、何〳〵此ごろ申捨候とて句をかく事、ひげの心かしらねど、さしあたり禮に背けり。我心に能とおもふとも、御評可レ被レ下候と有たし。我さへ申捨たるを、人に見するは無禮にあらずや。又、貴詠かならずや御もらしなどゝかくもいやらし。古人の文に此やうのいやみはなかりしと、門人へもくれ〳〵申されし。

鬼灯に娘三人しづかなり

不夜庵大祇七廻（太祇）

この人と在世のちなみをむすばざる事より風流の我にひとしき、今さらのこりおほし。

ひとり灯のもとに文月過て又七日

高臺寺にて

万石のつゆこの萩にをきたらず

露やどせ萩のちからのたゆるまで

妓女を畫に

ぬれ萩のうつくしけれど重からむ

さく萩とちる萩と日をおなじうす

うかぶ瀬の萩にあぶなし李白垣

つゆによるお竹がめしやきり〳〵す

一世に秀逸の句あり。貞室のこれは〳〵、又貞柳のにくまれての狂哥などは、物しらぬ作者をもしらぬものまでいひもてはやす也。誠に世をおほふものなるべし。これに次では淡〻の、くちぐせのよしのものはるのくれ、毎にはかならずいひ出す也。これらこそ道に入たる本意なれ。かゝる一句も願はしき事にこそと、なるみの蝶羅かたられし。

八雲坊新宅

よき折の土のなじみや牡丹の根

うつくしき山みへ初てあさ寒し

鳴かで蚊の行燈巡る夜寒かな
庭訓も八月習ふ夜さむかな
雨瀟々萩千株の夜明かな
萩あれて又細布のむねあはず
狼の幸みたり萩の月

堅田滿月寺

いなづまに拜せたらぬほとけかな
稻妻のかさなり落ぬ月の山
あきのうみ水よく舟をうかぶ也
秋の水ふしみの指月ひくき哉
叶ふ戀砧しばらく四手をうつ

一半時庵曰、風雅は我氣のかたち、容心有意むすびつゝめ、氣の心にたゝかひかつときは佳句となり、心氣和合すれば地の句となる。心に氣のまくるときは、只あしき句となる。又夜中の句、夜あけておもひいづれば空なり。たゞ寅卯の間に無一物に案じ出たらむにこそ、すぐれたる句はいづるなれ。早世事にわたりては富のこゝろとなると申されしも、はや六拾餘年の耳底にとゞまる。

とんぼうや日本に似たるかほもせず
のわけして旭まん丸にいでにけり
大玄關鱸にものをいはせけり
たけがりや和尙をどけて是何ぞ
さけの魚南天の實や喰ひけむ
大松だけ一座しゞまの心あり
行〱て糸瓜みえけり華清宮
年こしの夜の串子か澁柿は
澁柿に後世とりはづす法師有
ちぎりきなかたみに澁き柿二つ

卯のとし八月十一日、しまばらの管鳥かたにて月をみる。むかし貞柳の、つみなくて配所の月をみるとはしまのうちにてあそぶ也けり、とありしを

けふの月顯基どのにみせたいな
砧みなはくやうちけむ今日の月

月に柄をさしたらば誰か何かゝむ

天竺のはなしを聞かつりて

名月や牛に汗して犀の角

丸山正阿彌亭にて嘯山・其葉・鄙雀

など一座、

地主からはとは、北むら氏の古き詞、漕ぎ出せやとは、半時庵が洒落。

京の月丸山てらの木の間より

見るかぎりかしこ所ぞけふの月

岡崎五升庵にて、てふむ上人の三

廻忌、瓦全・寺廣と共吟

たゞ今唯このいをり此月のかげ

露ごに月やどる夜のひかりかな

小坂邊がつゞみうつらんけふの月

あゝ暫くこよひの月に年問ふ事

やまと大路にて

待宵に更行くかねはせつた也

かけ乞も來べきさま也まつよひは

轍豪がねずみ音なしけふの月

一眠腹坊曰、古人のかけるもの、いづれに過不及のあやまち有に、支考がくづの松原こそ、かの坊が中心の書なれ。つねに能ゝ見るべしとありし。いかなる處が中心なるや我はしらずと。

のせ餘る地の外なり海の月

峰の月身延の彌陀もこちら向ヶ

六つに出てむつに入けり秋の月

けふの月兜唄の釘うちし梢まで

一輪も下らず万水ものぼらず。

けふの月都に有て夜半のかね

大津なる五來の正德樓に、月居・馬遲などゝ湖面の月光をみる。

びはを抱く月滿面の美人哉

名月の海山くれて繪に畫なし

糸海・紫狐齋勸進　悼紫燕尼

御月さまこゝろたき身もなかせるか

けふの月くろかね盜む夜也けり

雲卷が父の追善とて、有　世ぃす

がたな請かせて一軸とし、讃を乞ふに、

露おもしろくらつばりの塵をどらせ、ねじめ頓に重衣の人をなかしむ。其術をよくなすものにたれ、はい卯法師　浮還居士。

花にうたひ有夜は月のしのび駒

一去御かたの御説とて永に名月の文字、史記・月令・爾雅などにも見あたらず。又源氏須磨の巻に、こよひは八月十五夜にてと有。夕がほのまきに、八月十五夜月のあきらか成とあり。詩哥の題にも八月十五夜とあり。たま〳〵明月とかけるは、たゞ月の清光なるを詠ず。按に八月十五夜は名月といへる、誹かいの家よりいひ初て、本邦の俗称となれるならむか。良夜とは、いつにても月のよき夜といふ事也。たゞし中秋の十五夜はうごきのとれぬ良夜なりと仰られき。今更これをあらためかほなるもいかゞ。心にこめてあるべしと。

雲を踏て月團〳〵とのぼるかな

名月やゆめみし蝶に露をうつ

笘をのむ鳴門の音やけふの月

道風の朗詠うらんけふの月

大-食のしらべ傳へて月は入ル

五條の中島なる秋里氏のすめるほとりは、いにしへ河原の院のしほがまのあさなるよし。こゝをなつかしみ、ひさ夜かたりあかして

名ありげに鳥なくなり明の月

いせの秋屋、闌更の百日なりさて句を乞はる。あらはかな、巳のさしのけふは西阿彌がもさにて、一夜はいかいせしものを

去年の事月やは物を思はする

職人盡しの筆結

なく鹿よ我いのち毛も細元手

八月十五日夜雨ふりけるに、生涯にいつ〳〵とあてはめたる大事の夜なるを、いかにかくふらさせ玉ふぞ。よし〳〵此かはりに又三百六十日

又ひとゝせ命の神よかし申ゝ
入る月やあと吹おくるもやひ風呂

有鳳五十賀

五十年花みたほどは月も見よ

安部の仲麿の讃

月みればこれほどの人里ごゝろ
十六夜やたが子捨たるかどの聲

悼澄月

空ことや其澄月も雲かくれ

一春堂の云、能太夫はし本なにがし、友人とふたり、古專助が辻能を見物せらる。其日は道成寺也しをみて、いかにも感心の躰有しかば、友の曰、辻能はにた事をして間をあはすものとこそ承れ。いかにかくまでほめ玉ふやと云。はし本の答に、さら／＼左様なる事にあらず。專助が道成寺はじめて見申せしが、甘心いふばかりなし。今の世にて口利く大夫のうちに、これほど道成寺をこなすべき人あるまじく覺ゆる也。其かたちはともあれ、一躰が我ものになり濟してゐる也。外のものをするとかはる事なし。故にくつろぎ有て面白し。道成寺の場かず專助ほどつとめしものあらじ。たれにてもあれ、スワ道成寺也と心のあらたまらぬものあらじ。是くつろぎをうしなふ處なるべしと、申されしと也。しからば俳席にても、はいかいに心あらたまらず、くつろぎありたきものなりとかたられし。

香秋庵南芽坊は、市中にかくろゝひとりにして、心ざしひろくものにわたりながら、事さまつきなうして世にへつらはざれど、むれのうちのめでたきに、人皆したひむつびけるが、つれに酒をこのみて、夫がためにやぶられ、いまださしたけたるといふにあらで、ことし未の九月しもついづみにおもむきしをいたみて、其門人のかたへ申。

蘭花

行かれしかほだいい造りの加減見に
やどかへや先一ばんに蘭のはち

らんの香のむかへば更に愚なり　仝

所の長さない玉へる人に　二

掌ラに秋はまかせつ雨に風に　仝

左邊勸進　高野山圖會の附錄　御
廟のおさまうでを

槇百町佛法僧鳥鳴て夜明たり　丸

陸規僧都の畫に

芋がしらいでやこの世に生れては　仝

つくしびさのものがたりに

しらぬひの東シすでに八朔か　二

寛政十一年未九月、雪中庵蓼太空
摩居士正當十三廻

追薫俳語　雨吟

月やむかし今はた斷し琴に泣く　不二庵

九月七日のあかつきのゆめ　大江丸

沖津風庭の萩はら昔づれて　仝

かけの膳からまづ揚る也　二

かしましや其子うまごとつどひつゝ　仝

うちわたしたる谷の柴はし　丸



ウ
むさゝびの羽袖も夏をしりがほに　仝

名利をすてゝ紫衣も物うし　二

遠州の茶の前禮に行ばやな　仝

城の大鼓も雨ちかけなる　丸

張絹のしるしはづれて辻うらも　仝

なれはなにまつ蜘のふるまひ　二

はつ秋のけぢめみせたる夕あらし　仝

濱名の月の浦づたひしつ　丸

松江の鱸の腮されぱこそ　仝

孔明机ひざにほどよき　二

つれ〴〵にさうはいへども花盛　仝

春を問あふ伊兵衛吉齋　丸

うす霞國阿の料利見下して　仝

あの着だをれを御覧いへ　二

封じ目を切らずに文をかへされし　仝

奇楠のほとけを寺に投うつ　丸

もとめ得ぬ師走の市のいもがしら　仝

日くれみち遠し曾我の中村　二

松の木にあほう烏い鳴てゐる　仝
　こがねの鶏のあしたする代を　丸
のり合は大坂衆と見うけたり　仝
　無心といつぱ何と丸やく　二
酒宴に敗北せしめ亭の月　仝
　樽次とても七十の秋　丸
遷宮のいせと申せどあこぎ也　仝
　異見の再話にたのむ先生　二
今少し長桀の灯の高過る　仝
　仰ばいとゞ〳〵まばゆき　丸
花に見し飛雪の曲をくり返し　二
　くりかへしてもあきたらぬ春　筆

右

一信夫の菊丹云、はせを翁の古池のほ句、世にさま〴〵の說あれども、翁のこゝろに叶ふまじく覺ゆる也。我宗旨の祖たる親鸞上人、道のために肉食妻帶にておはしまし、人のそしりもいとはで、一宗の建立ありし御志にかよひたらむと、有がたく覺ゆと申されし。いかゞあるや、しるてたづねでのこり多し。

蜆子の賛

影落て海老にまじるや三ヶの月

貞德の賛

柿園や和哥ならば其柿のもと
秋はものゝいかづちの雨しづか也
吹のぼるこだまや不二の峰のしか

一石髮曰、はいかいの句は鈍なるかたがおもしろし。人を投たりといふ句は、投られたるがをかしからめ。論にもいひ負たるといはむも、又風流ならんと申されし。

一炊庵より文して、此句にたゞ今脇の句してさ申來る。

ことし酒菊の匂ひがするでゅ　泊帆
　堺の魚屋鳫行に飛　大江

又ある日おもふ處有さ書て

我背も去年には細し四十雀
　されば其事露のあわめし　蜂友

この第三もたゞ今と乞来るに

月は其浄頗梨よりはあかるくて　大江

しら川二所がせき、もちや宗左衛
門にて

能因にくさめさせたる秋はこゝ

一こし路の一音坊曰、蚕は秋也。蚕飼は夏を専とす。夕がほの花は夏にて、實は秋なり。かんぴやうむくは夏なりと、無言抄先よしといへり。

市川五代めの團十郎、わざおのがれて午(牛か)嶋にかくれ、白猿と号し、少きいをりをむすび、老をたのしむこゝにたづれて

いろのしろきさるどのにそと見参まく　大江丸

とつは冷酒けふのもてなし　白猿

月を秋の花とながむる世にすみて　完来

其處の見わたしに

八反の素袂なりけり柿林

梅亭の御館にまいりしさきの事
いつとせばかりの先にさしあげ奉りし松苗の心よく生たちしを拝見し、はた其根にありしつちをもて、不白老人にひとつの茶碗をつくらせられ、忘れぐさと號しうつわにて御茶下されしありがたさに

猶いくよへぬらめしもの忘れ艸　大江

一陽かほるふゆの大ぶく　天府

蔦分てかへ鶴来たりうつの山

くもる日ははれる日はとて雁をまつ

一するがの周竹曰、この比一般の才人おそろしき詞をこのみ、針灸秘訣の諺をめづらしといひ出たるに、しらぬものは知らず。しるものはいかにあさましく思ふらめと、支考が葛の松ばらにかけるを、毎度にかんじ侍ると。今の俳言大かた此事多し。はづかしき事にて候。和哥・連哥の人ゝに笑はるゝ事よと、度ゝくやみ申されし。

後の雛五条より下はなかりけり

羽盛する鴫もゆふべのひとつ哉

そく才な人あはれ也秋のくれ

あき風にせはしき蝿の立るかな

きく活て八日九日十日かな

過坂町

見渡しに菊なげ入れつ關東屋

一許六　彦根侯ノ臣、森川五助。五老井ヌ菊阿佛、正德五年未八月廿六日、六十才。

一鬼貫　播州伊丹油家平泉氏。重賴門、后宗因門。郡山候平泉三郎兵衛佛兄。
元文三年戊午閏八月二日、七十八才。

一かいはらのすて女は、丹波國氷上郡柏原人。元錄(祿)十一年寅八月十日、はりまのくにゝ終る。
田氏、盤桂禪師受法。納于竜門寺。
貞閑尼首座、后大法正眼國師仕、六十五才。

一周竹云、支考がかける、つね／＼は出家の事をうらやみて　菓子盆斗のこる寐所　このつけ句つね／＼はといへば僧に成てのち也。つね／＼にといへば今なり。扨人の望有事知たるは親にあらず、又子にあらず、つまにもあらず。友だちのしりたるなり。くはし盆　とは夕邊までも友のあつまりたる邊や也。さみせん斗といはゞ、おかしからんなれど、前句に出家の望をしりたる相人をこしらへむとて、くはしぼんとは出したりとしるせり。よく勘味すべし。

しらぎくや何中／＼の小むらさき

開闢の日本はしらじ菊華

しも旭一輪のきくのうへに有リ

山をみるひまこそなけれきくのぬし

にし山に日の照るきくの匂ひかな

天下皆菊の秋とぞひゞきける

古人賛請状之事

一この菊と申女、仙家より、むめの翁の當坐幌にておぼへられしは、たしかに此山路のはひ出なるべし。

きく四五本まだ名もつかで匂ひけり

曾祖父のよりあふきくの山路哉

一十三夜の月は、中右記、長承四年九月十三日、今夜月清し、寛平法皇今夜無雙の明月と仰出されしより初る。後來永きためしとなりし。

あきらけき御代のむかしの秋よりや
月も名におふ今夜なるらん　頓阿

この上手人にあれかしのちの月

人にさえ親鸞キ角後の月

雨ふりつゞきける比、師の句を換骨してよめる。

さみだれもあるよひそかにまつの月

九月もちの夜、ことさらに月のひかりもほがらかにして、こゝろよく澄わたれるに思ふ。鑓につく手なし、長刀にうつ手なしとかいひけむも、たゞ名と利とのふたつをわすれたらむにこそと、寸馬のぬしの申されしもおもひでらるれ。

月よ月忘れし處めい月か

京傳が田舎談義の序に書遣す。

いねかりて天地にこわい物はなし

紅葉にふたつの案

女みる日も恐ろしきもみぢかな

女みぬ日はおそろしき紅葉かな

みる人に不易・流行を任べしと去人の仰られし。

しかももとの水にうつらぬもみぢ哉

かざす手のうら透通るもみぢかな

ゆく秋の裳ふみしだく紅葉かな

すみよしにて

もみぢして松のきとくを(をカ)あらはして

武家のもみぢといふ事

おにどもが度ゝ申てともみぢ狩

大津絵　藤のおやま

色かへぬ松とだかれに行をるか

粒々皆辛苦

夫ほどにいたゞかぬものことし米

ことし酒いなのさゝ原風にふかれ

神楽所に日のさす秋のまつり哉

助松なにがし七十賀

浦賀みる人やにる綿ことし米

落ついて鮎もすがたをみせにけり

釜焦て柚味噌七歩の詩をうたふ

我癖のひとり詞

一支考がくづの松ばらに曰、晋子が語路、大むね酒杯にわたれりといふ人有。宋泊宅篇には、白氏が二千八百言、飲酒の詩九百首たりとこたへ侍とかいへど、晋氏が情人にまぎれねば、楽天が飲酒は猶かぎりありけると。さればいにしへの尊きひじりすら、我にはゆるせと有しひとつのくせ、やつがれは三つよつのほ句のくせ有て、巻のおもてにつらねたらむもいぶせく、餘りの事に玉はゝきひとつ處にはきよせて、もしほ艸のちりをもはらぬものにぞ。

さつた山のふじ屋が望嶽亭にて

百不二や抑元日のあしたより
すみよしのいつは正月二月かな
はつ東風に厠のとぼしうごく也

こゝかしこ御禮申てかへるさ

けいせいに物いはれけり松の門ド
うぐひすにけいせい帶をさがしけり
かげろふやたちも及ばぬふじの裾

出れば駕あり、あされば茶やあり。

つい出ても春はすみよし天王寺
うぐひすのしどろ鳴也あれ厠
まれ〳〵にけいせい立て梅見かな
ふじの根に戀のはつ花咲にけり
けいせいと花いきかはり死かはり
けいせいのきもとは花のあぶら哉

一けいせいといふ詞は若き人が遣へば、ばさら過ておかしからず。實に落る也。七十らうへのものゝいふは、はいかいなりと、呼見のぬしの噺申されしと。

けいせいにならふよめの蝶よりは
事たりてひなの厠をさがしけり

渡唐の畫

等揚のふしの畾紙かみな花か

一世に三上の案といふうち椿上の案と申は、かはやの內の事にて、はせを翁のへ不二の雪つばきにかくれ家に出　とあるもこれならめと、不二庵老人の話也　厠は信玄は山とかへ名し、なにがしどのは思案閣と仰られし。

又へねこ板やかくてもとしのかくれざと　と淡々老人も御申ありし。太子の夢殿にもまさりて、こゝに有うちは陣の小口ゟのがるゝと、柏舟の斬し也。

長せつち二輪の椿おちにけり

ちるさくらけいせいといふ人になれ

むめが香もふじの畑のひとつかな

すみよしや夕の雲になくかはづ

東風いくつ不二に碎てはるのかぜ

一尺の富士やつゝじの木の間より

吹ためて住吉出たりはるのかぜ

けいせいのとり廻ひてみるのぼりかな

傾城の身をまかせたるあつさかな

せみのなく空とさらに不二白し

なる澤に背ひたしけむほとゝぎす

うら若葉厠教る灯のうつり

かたつぶり不二の笠木にのぼりけり

もちの日や暫し素がほのかくやひめ

一江戸の狭者はよく利口をいへり。物は附といふ事はやりしに、みえぬものはへ不二から駿河町、といゝ、又川柳點に、寶語教よめば不二山腹たつる、とかいひし。これら其事を貫く也と、石漱子のものがたりせられし。

けいせいの町ふみしけりけふの月

松に月松につきこれ住よしか

月はしめ住吉の松いつはゐた

このしろの不二祭るらんけふの月

雲水僧の厠洗ふやなつの月

舷にけいせい立て花火かな

吹のぼるこだまや不二の峰の鹿

しなの路にて

ふじの雪のかひやなからんそばの花

百日の不二見よしものあさなく

はつ雪や初て不二の雪をみる

旅中

置ごたつこゝよと不二のみゆるまで

水無月望

あさつむしほす日や不二も丸はだか

酒十駄ふじ見てもどる冬至かな

炊ひと日不二のうしとら潤みけり

　病中吟　妻子珍宝及王位

ひとりみる月はめいどゝ厠かな

としのくれ住吉はよき宮どころ

行あきや唯すみよしの夜の松

大根引てすみよし斗やのこるらん

　かぢの助をたひやにみて

からふじて厠を出ぬすまひとり

けいせいとひなよみにせむ花のはる

富士の山雪ふるときはふりにけり

　伊丹蜂房十三廻に、今の竹瓦樓は

　ち女集の催ふし有。其腹に笑し句

によつほりと秋の空なるふじの弟子

住吉に一本見たるやなぎかな

　東海道のゆきゝ六十餘年、首尾よ

　くつとめおゝせて其悦をのべし折、

おなじわざの人ゝにしたゝめ遣し

ける。

百不二や月雪花にほとゝぎす　我擱の終り

　上ノ太子にて

こゝをされかしこをと看す花のかな

尼が罪青梨ひとつうせにけり

ちぎりきなかたみにしぶき柿ふたつ

とし越の夜の告子かしぶ柿は

しぶ柿に後世とりはづす法師あり

　百才の人のかける命さいへるに、

　かたはらに書つく。

いのちあれば稲あればこそいのちあれ

　雪中庵裡、むれ人判者成りの祝

きぎくしらぎく巾にかざして司めし

　六玉川うち近江

にほどりの於吉奈我我波の萩の月

　黄花庵のいほり初にまねかれ、難

　波の別荘にまいりて

こと足るや那古の入日に須磨の月

福綠（祿）壽の讃

きくの香や人壽さうれと北向いて

大かたの月を見果しかゝしかな

この月此日、龜亭居士小祥忌にめぐり玉へり。されば涙化に誹門の古老なりしものをと、今更におもひいでゝ

月の日のぬしいつのとき忘れやうぞ

江戸旦ヽ坊勸進　去來百廻

果峨顯倫のあたひをものとせざるいにしへ人こそなつかしけれ。

今もその梢は柿のあらし山

青なしや花よりたしむ春の水

三緣山にまいりて

御靈殿のはゝきしづけし秋のあさ

なかぬ鹿中〱秋のすがたなれ

かいの國より名所の砧といふ句を乞來りけるに

けさ秋とさし出の磯のきぬた哉

蒙光大德のすませ玉ひしいほりのあたりをゆきゝして、一とせの其さきを思ふ。

めぐる空や入にし月のかけばかり

木犀にかしらいたむやたゝみさし

秋の影さして銅冶ふ人をみる

あきのくれ境の夜網人はしる

南部宗石より乞來るよしにて

名月の暮るゝ境か尾花飛　宗石（ナンブ）

江鳥なきつく岸のうす霧　五明（アキタ）

とし若き衛府の細太刀露帶て　大江丸

一すさむといふ事、さま〱なり。風雨のすさむはつよき事、吹すさむ・ふりすさむはやすむ事、人をすさむは捨る事、月花をすさむは愛ずる事也と、祇公之文集に有と、信夫のぬしかたられき。

北濱の畵に　初相場の水うちといふ事を

露うつや世わたり艸の花のうへ

ぬすびともなくけいとうを伐て行く

　其人のゆかしげや

願ヒある人とは見へずはなし鳥

　八月十三日、八千・半輪をさもな

　ひ、小舟にさほさらせてあそぶ。

どこやらが東坡に似たる月見かな　八千

　はつしほさそふ蘭のおも楫　半輪

人や見て雁のひとつら亂るらん　丸

　うつぼをたゝく唄のひなびて　千

竹の雨そゝへりふれば又晴て　輪

　焚漬したるかぶら大根　丸

ふるの宮ふるきいはれをかたり出　千

　妹をぬすみに其夜深ける　輪

くちをしと心あまいて衣を裂く　丸

　小判こぼるゝさゝら目の音　千

夕ぼたんあしたの事も忘れ果　輪

　たびめづらかに入道の君　丸

雲ひとつ置かで南の海の月　千

　黍の畠につるのいねむる　輪

秋風にとなりの館のうちはやし　丸

　まうけの聟の花さかす見ゆ　千

なにくれと柳はみどり膝をなで　輪

　血刀ぬぐふかげろふの小野　丸

御ほとけにかへらぬむかしうち泣て　全

　京もつれなき所ではある　輪

門ド〳〵の雪掃をとに寐覺つゝ

　やゝ月のぼり、うすくれたれば止む。

　新米のはつ相場に

あきの神白手ぬぐひにやどるらん

　畑花の席上

ついとみぬかほせられけり唐がらし

今喰ふてあふれ蚊禮はかゝぬ也

　天王寺のはやし町は、梓巫のすめる處

にして、二季のひがんには在所の人の

こゝに來りて、なき人のくちをよする
さて、あづさの弓に其おに神をまれき、
往事を泣く。ここにあきのひがんは、
ひさしほあはれにおぼゆ。かしこのは
やし町にすめるみこの名のむかしめき
てなかしければ、かきつく。

たちばなや小女郎　ゐんきょふち
くろかうしのもさいゑ　せんだんの木の姉
やぶのうちのかめ　ころかうしのまん
升や の 女 郎　くろかうしのよめ
ふぢやの小女良

其外にもあまたある中、くろかうしこ
さに名たかし。

はたかむしなくやひがんの黑かうし

九月十五日は天王寺、念佛會・一乘
會さて、ひさゝせに三度の大會に
て舞樂あり。其處の俚語には柿ま
つりさなむ、いひならはしたるも
なかし。

**擬何とかほのほてりや柿まつり**

當極樂土東門中心

天王寺極さいしきのひがんかな
ひがんの蚊尺迦のまねして喰せける
胡麻をはむ牛かいとりしひがん哉

法の國天王寺のにしの海づらを、那古の浦といふ也。は
るの入日は武庫の山の北にしづみ、冬至のみじかき比
の日はあはぢしまのかしらに入玉へり。又二季のひが
んの中日といふには、落日天王寺の大鳥居の中心にか
ゝりて、須磨・あかしの中間ごに入なり。これを日想觀の
大事とか申て、むかし後白川の上皇と圓光大師とゝも
に、この岸の落日を拜玉ひし御あとを源空庵と申せし
が、今の一心寺也と申つたふ。又壬生の二位もこのほ
とりにいほりをむすび、なこの浦の入日をみて七首の
和哥をよみたまひしあと、家隆つかとてのこれり。
慈鎭和尙、天王寺の別當になり玉ひし比とかや、いゝ
つたへたり。

雨つゞきにて、ふじのかたちのひ
**さしくみへざりし時**

どなたやらもかも川の水あきのふじ

さきほこるあしたがはらのむくけかな

をのれより夕くれそむる薄かな

霜下りてふた夜に成ぬ花すゝき

三夕之内　寂蓮の讃

秋ならぬあきこそなけれ槇の葉も

章臺

いなづまや青貝の間に客ふたり

江戸にて

四郎兵衛にはを出されけむきり〳〵す

老情

手ざはりの繻子我秋をなかせるか

十とせまり先の秋八月十七日、春市のぬしにいざなはれて、なんばの氏原なにがしへ月見にまかりしに、酉のかねうつ比瑞竜禅寺にまいり、こゝかしこ拝めぐり、半時庵の残されし二樹二石のはとり、こと更に月なごりなく澄わたり、いとゞ懐舊の心うかびしかば、〽霊あらば淡ゝ月のあるじせよ　と手向して、その夜はうちはらの家に酒くみかはしてやどりせし。ゆめにもあらず又うつゝともなう、うしろに聲ありて、〽疾置ィてまつつゆをしらずや　と聞ふるに、やをらふりかへれど人なし。ほどなく夜も明て件の事をおもふ。露をしらずや　の詞のつねならざるをと、この翁にゆかりある八千のぬしに物がたりせしに、ふしぎや此しらべまたく百川の翁にあらむ。其夜の情にひかれ、枕上にあらはれ玉へるならむ。外の夢想などゝは事かはり、これはと深くも感じ、このまゝにやはと、其あらましを雪中庵へも申遣しけるに、誠風流の神に通ぜしものならめ、しからば其神をまつるにしかじとて、雪中・八千との三吟を催ふし、脚力の行來に調ひしすえに不二庵の句を結びて、ひとつのかたりくさとす。

三吟　表合員をつぐ

霊あらば淡々月のあるじせよ　大江丸

疾く置てまつ露をしらずや　御

世はむかし秋の中なる松かしわ　完來

やぶしかくれにみゆる北の家　陀岳

いさみたつ駒のかしらを鞍つぼに　丸

夏まだきむき朔日のきぬ　來
水の藍松魚の藍も我からと　岳
唐ふねつくる御場所あちこち　丸
鶴髪の翁と世をやかたるらん　來
踊經過ればうしみつの鐘　岳
ものなれてかゆ焚かゝるかまの下　丸
夜にみゆる桑田の水　來
月となり雨となり又ひるとなり　岳
つまと呼るゝ千兩の秋　丸
折ふしの口舌に富士を爪はじき　仝
笏ををとす大鼓なるらん　岳
底霧の夕しほ花に立かくれ　仝
北斗の御燈峯にかゞやく　來
降參のえびす心もはる過て　仝
酌にまいりし妹が三平　岳
故もなきしのぶの亂れ壁に書　仝
大家の思案易をあざむく　丸
玉川の水すめらば禪洗ふべし　仝
朽木とやせし齋の僧　來
雫を煮る鼎のひゞき遠からず　仝
今に聯句の沙汰し申され　岳
ヘングヱの來ぬ夜さびしく成にけり　仝
ひやうしのぬけしふくはらの月　丸
さといもの花をかしげに咲いでゝ　仝
まつり過ても居びたりの客　不二
むこ撰ぶうちに小姫のねびまさり　仝
もろ矢はづれて鳥は逃たり　岳
もやのたつ朝な〳〵の海山に　仝
紅毛人のおも長なかほ　丸
たのしめや世は實花の半時庵　二
よしの〳〵も口癖のはる　筆

あすはいかにさびしき秋もなごり也
宗薫がまどや九月もひと夜きり

一西鶴井原氏、住吉にて二万三千句を吐て、夫ゟ二万堂といへり。浮世ものゝ作者にして、近松が誹かいは

鶴にならへりと云。元祿六年酉八月十一日、五十三才。

宗因之門人也。

作吉大矢數者、貞享元年子六月五日也、
此ノ時矢見キ角也ト申說あれど、このさしキ角十六才。

一淺草にて去人の御申有し。手にをはすべて自得すべし。そけるやらんとはたれもおぼえたる事にて、夫までのものならば更に工夫は入べからず。鬼神をなかしむるもたゞ手にはの事なれば、おろそかにいひまぎらはすは何の感かあらむ。凡我國のならはし、かな文字をもて埒する習なれば、傳授・口決によらずしてあきらかならむもの也。其しるしは常語・平話といへども、ひとつの手にはたがひぬれば、とてむきの聞えざるにてもしるべし。去が中に詞は世をもて變ずる物なれば、手にはといへ共ことばにしたがひて、今古いさゝかのちがいめ有べし。万葉・古今のうたの中、今の世にもちゐざるてにはも所〻みえ侍る。しゐてむづかしくいはむ人には、はいかい一家の手にはといはんもあしからじや。

# はいかい袋

## 冬之部

はつしぐれ忘れて雨の音を聞く

あさがほのあしたに似たり初しぐれ

北濱や水うつうへのはつしぐれ

基佐のしちながれけむ初しぐれ

やうかんのこしきを見こす時雨哉

芭よりＡにみえけりはつしぐれ

しぐれ〳〵ふり定て雨のをと

長町にて

韃の車〻行くしぐれかな

江州ひら松の里より、神嶽の美松
さいへる句を乞來りしに

この松のしぐれ呂政のやどりせば

はせを百廻法事、四天王寺の坂下
遊行寺にて、

雪中庵上坂あり、不二庵ともに三

ヶ日のはいかい執行、寛政五年十

月十二日

この道のしぐれこの地にふる世哉　完來

なをみちかれずこの塚の冬　大江丸

あさ嵐馬上の殘夢うち覺て　桃居

連叟三十餘輩

江戸くらまへより、はせを翁の肖像に讃をいそみ來りける。　隨齋成美書

神依人欲增威　人依神德添運

さはかまくら貞永之式日

十二日この祭祀又古人なし

あはづ寺にて

から崎の松は花よりけふはしぐれにて

巳のさし遊行寺のやどり塚にて、

なにはづのよしあしもこのみちの外に出じ。唯見闘志の三つの浦風とこしへに、吹つたふるも、ひとへに此つかの神心なるべし。

百餘年不生不滅のしぐれかな

古翁むかし終焉のちかき比ならむ。かのその女が家にあそびて、しらぎくの目にたてゝ見るちりもなし　と詠じ玉ひし其墨痕や、なにはに終のかたみとなりてけるを、さらにそのゝちの行衞をしらず。されば心有限はしたひ、ひそかにおしみあへりけるに、ちか比はからず大江老人の手に入しこそ、誠に風雅のあつさがいたす所か。しかも支考のおく書まで添ひて、實も無雙の珍寶と稱すべし。こゝにおゐてもちぬしの叟、はせを翁の百廻忌をかねて其しら菊の會をまうけ、この圓成精舍に終日の法會を催さるとて、各ちかうまいりて拜覽するに、紙上うるはしくて、すみいろ猶かはかぬ如し。吾聞く、公の殘菊の宴も故有て、このかんな月に行るゝ例とかや承る。今此會のおのづから其時にあへりけるよと、人々さゞめきあひぬ。

しのぶるやいさしらぎくのむかし文　不二庵桃居

支考おゝ書

此一章は先師濵花におはして、その女が招請にこれを申されし句也。さるは甲戌の秋長月末の事なるべし。これを生前の筆のなごりとおもへば、ことさらになつかしく、今この事をこゝにかきつけたるなり。

元祿ひのとうしの年　東花坊 印二

一軸のうらに
早稻の香の高詠をのこし玉ふ有磯なる右吉亭にひめ置し事、さし有。誠にこの一軸、そのかみのやの推敲ありしは、その女が佳會の後成べし。

寛政子晩春　闌更

寛政五年癸丑十月廿七日興行
百廻忌後宴於大江隣江戸衆さ

六吟哥仙行

しらぎくの後しらぎくのちりもなし　完來
仰げばいまもそらにあさ月　大江丸
たび衣露の岡のべ杖曳て　哥白
外にひゞくのはたがこだまぞも　午心
まちかひのうぐひす聲はやせながら　馬肝
冬のひなたのあさかげり行　完來
張わたすしるしあやなき古絹に　大江丸
うしろ姿は十九のそき尼　哥白
燒香に忘れぬ奇楠も身だしなみ　午心
紀の山二日さとにやう〳〵　馬肝
挽すてゝ松の木臼の下清水　完來
三たびゆめ見る陵のあと　大江丸
くすり喰餘寒の床に月は入　哥白
みな札提て進上の花　午心
すがた鏡も讓る觀世が春舞臺　馬肝
ゆあみする間にかゆるたぶさき　完來
名のつかぬ雨うち過る山のたわ　大江丸
蜀魂飛てさひきひと聲　哥白
ひらけたる自問自答の高笑ヒ　午心
きぬ引裂ておもひたつ戀　馬肝
かぶろ皆寐よとの鐘の大恩寺　完來
雪けちらかす歲末の供　大江丸
湯豆腐の湯に膓をそゝぐらむ　完來
津で目のさめし太々のゆめ　午心
シヤタラの糸のほつれの物うさに　大江丸
筆うち震ふ丹精の聲　哥白
成佛の召やふたゝび泣ぬ也　馬肝
夜の眞葛のうらしろきつゆ　完來

風さはぐ心に滿る月もみつ　午心
身はうつせみの笠島の神　大江丸
盜人のかへした古き片鐙　哥白
わらうつ槌も重きしわ腕　馬肝
さいばらのにしの御寺とうたひつゝ　完來
日は午にめぐる七曲の山　午心
しらぎくのめうかう炷む花の座よ　不二
もゝとせしたふ蝶とりのあと　執筆

な

しら菊の一軸傳來の由緒

一軸は元祿七年九月廿七日、會の一順にて杉はら紙のきれなり。連衆は、

芭蕉　支考　惟中　園女　諷竹　涉川
何中　惟然　舍羅　洒堂　十人

其折のかたみればと、後に支考かた(へ)おく書を望遺しながら惟中は死し、園女も江戶へ下りて死したれば、其まゝ支考が手より有磯の人にあたへぬとおもはるれ。この人と闌更とは一門なりしほどに、常はこの所へ行て、此一軸をもよく見おぼへたりしが、いかにして越前へはつたはり、又浪花へもどり玉ひしにやと、半化もふしぎに申されける。これもと越前よりは、澤田むめ三といへる人のもとへ來たりしが、浪花に有べきものとて、むめみつもとめてさしをきしが、此人は狂哥のすき人、我ははいかいの好ものなればと、夫〳〵のものにかへて我らにつたへ侍りしが、むめみつも寬政十とせの春むなしくなり被レ申、はせを堂のあるじもおなじ夏身まかり申さる。かさね〳〵のかたみのしなにこそあれとこゝに斷しるしぬ。

ある人の云、去ぬる比遊行寺のうちにうづもれ有し位牌をもたづね出し、寸馬のぬしと二人して、花やがうらのあとをもあらはし、八十年たえてなかりし處にて、はいかいの法會をつとめ、遊行寺に安置せし木像、ひと度ハ江戶にありしをも尊み守りて、上がたへのぼせ申されし事抔、神靈もうれしくや覺しけむ。この一軸のこなた

へ來ませるものならむと被レ申けるにぞ、いか樣故ある事にもやあらんかしと、かたへの人も申されき。

又ある人、此一軸の入しはこのふたに、

たぐひ有とたれかはいはむ末句ふ
　あきよりのちのしらぎくの花

これは是　寛文の帝の御製にして、細川家の奇楠の御銘なり。次手おもしろければとて、したゝめ申されし。

其外遊行寺法要之式百員のはいかい、又雪中宗來、義仲寺にての獨吟抔は、雨庵の一集あるべきけつかうなれば略レ爰。

一寬延の末より寶曆のはじめ迄、大坂にてはせを流のはいかい絶たる如く成しも、能登の馬明といへる人庵をかまへ、寸馬といふ人に道をつたへたり。其後二柳・竹阿など段々と出坂して、人々むれをたすに至る。

　うつくしい聲もあらふにねこの戀　寸馬
かゆ杖やなしつぼ五人うちはづし　羅川
氣に入らぬ帷子きたるあつさ哉　稍舟
しらむめや吹さらされしあしたより　石漱
夕がほにすきふが母のすがた見む　只呼見

　右人々は蕉門中絶内之眞實ノ好人也。

一白午日、我句のうへを人もほめ、師匠のほうびし高點有しなど、をこがましく人々にひけらかしながら、我心になにといふ樣なるが、よきといふ自得ならでは、さるの狂言のおそめ・久松をするにひとしからめ。我得とくせぬ内は人にかたらず。はいかい成就の時、おのづからしるべくと申されし。是につけて大江丸が思ひあたれる事有。三十とせ餘りのむかしにや、

　とし忘れつのくにのなにおもふらん

夜半二代の翁、この句を大にほめ申されたり。われも慢じて居りながら、何といふ所がよかりしやしらず。其後古今の戀の卩、へ津國のなにには思はず山しろのとはにあひみん事をのみこそ、といへるうたにかなひしよと、はじめて蕪叟の賞をしりぬ。又蓼師の高點ありし句ふたつあり。然ども其譏をいまだしらず。いつに

か自得の期あらんやと、修行のほどをたのしむ也。

かへり花ちりもし落もいたす也

孫の背もとつてみる也小六月

小にし占風のすまれけろいほりに、ふたさせのむかしの事を思ふ。十月二日

かへり花人は佛にふりむかず

御命講や祖師に向てよめ披露

門前の松に鳩なく十夜かな

太平

えびすこうもみぢの山もけふこそは

禪僧の見たきよしにて戎こう

ふし拜む爪の長さよえびすこう

阿耨多羅三百膳の大師こう

山川下腸　十月廿五日身まかり申されし。現在の果を見てさかや申せば、此翁の道に餘むのたのしみも、讃佛乘の因ならめと思はれ侍る。



まつてゐたとぼさつも二十五六日

十月十一日梅醬院にて

はせを忌やなにはゝここに涅槃の地とは、そのかみ天府公の金城に御役有しときの手向なりしとや。去ば翁の神位、この國にあさなとゞめ玉ひしも、既に七處に及ぶといへど、けふの法會はこの梅ふるき御寺のつかにて執行るゝは、また其靈神のこゝろよくしづまりますものと、ひとしほ信をます事にこそ侍れ。

ふるあとの中にこの塚このしぐれ

竹はらの竹里館にて

この樓上を我ものにせし趣は、卯花の流るゝあしたより月の影うつる夕まで、夏は涼しき風を得ルなり。物におもしろく事にめづらしきぞ、かの大井川の三舟もものかは。

冬は又しぐれの筏雪のふね

酒をたしなまずといへる人の、きさくなれとほめて申。

去ながら呑ヶでも須磨の浦千どり

小くろ式部殿本ぷくの賀

本ぷくのかほみせ玉ひ手をうたう

一六窓云、秋の句は随分にぎやかにと案じぬれば、おのづからさびしみを起す。冬は又あたゝかならむ事をもとむれば、寒き念が生る也。をかしび・かなしびといふも、天然にそむく心がいづるもの也。此心にて案ずべしと申されし。書道に名高かりし守國の門人に敎へしも、猿は鷄がほとりをさるかほと、申されしもさる事にや。

千日三昧にて

烏三匝して烟も白ししもの臺

虎は死して皮をとゞむといへど

三線のいとにもならじ霜の眉

寒菊やすみよし裂に露かゝる

ひさゝせ雪中・午心など伴ひて、うかむせにあそぶ。各貝抔をうけもち、飲貝を狀にしるす。我も帖にはづれじと例の我慢さしいでゝ、

いくせさいへる貝抔にして、いきなしに二つのみて筆をさる。

生涯の一下戶、雪勸亭に奉るいくせ二盃

我眉のしもに寒月てりかへせ

笏シ市ゆめのゝしものこぼれけり

よど船や霜ふむ水主をみては寐る

三つ輪くめるうばゐ・うばそくの、法のために身を忘れたるも、有がたくもすさまじ。

法恩こそ百鬼おのゝく斗也

文ゝ句よむしもの灯しらけたり

大津畫　おにの奉加帳もちたるに

雪のいほむすぶかおにの追からし

民いかに雪には雪の耕す

はつゆきや門ドに畫たるおにの首

美僧みる雪のあしたのはつせ山

はこね路や雪にこぼるゝ馬の汗

雪の音盡し〳〵てよるの海

ひさ日うかむせが亭にあそびて、

淡々の句に、へいなづまの有夜しらせよ四郎右衛門　と有に、又内山枝柄の一輌、へ冷しさや北にはれづの四郎右衛門　とかゝれしおもしろさに、我も

雪ふらばいふにや及ぶ四郎右衛門

うてば雪うたねば花の梢なれ

一天和・貞享には旦林、元祿の比は正風、寶永には斗角が酒落、正徳に不角が化調、享保に沾州が比喩、長水の五色墨、乙由いせ風、元文に淡々の浪花ぶり、湖十が浮世など〻流行すれど、一人のはいかいにあらずして、天下の誹諧也と師の仰られし。

山丸し都は雪のうすけれど

戯場の雪

あまりの大雪に中事さへ遠さじき

さすがなり甲斐うた諷ふ雪のおく

馬にふれば與作丹波のこゆきかな

もとの子と母の文して雪のうを

はり口に軒のしら雪辷るなり

建凉岱がなり〳〵卿を引て、ちか頃漫遊記などいへるものにかける所は、我もまのあたりみたり。

雪のたびほり起されて又ありく

紅ゐのかり着出口の雪に長し

かくしては雪喰ふにしの禿かな

雪に投てみれども舞はずふぐの蝶

ゆきこかし大きう成てしまひけり

雲井の雪といへる事を

雪丸はや仲國とめさるゝよ

ひとゝせのうば玉かへせよるのゆき

雪の妾みなしら髪の君丸人

一貞德、芦の丸やに藏をたて、法華經一千卷納玉ひしも、物かはりほしうつりて、たからのくらもやぶれ、御經も諸所に散在せしを、洛の嵐月と中人のあつめ求て、こゝろざし有かたへ送り申されしときとくの事なりし。此經のおく書に、

これは人丸・赤人をはじめ奉り、よろづの哥仙は不及申、過去現在未來のうたよみ、連哥はいかいにいたるまで、此度しきしまの道に心をよする一切の貴賤上下道俗、其外まろが御恩をかうぶりし尊師たちの御ぼだひ、皆具成佛の御ためなり。

南無三寶　諸天善神

慶安三年庚寅正月廿八日

長頭丸　敬白

いにしへ人の物かゝせ玉ひしすなをなる事を、思ひめぐらすべし。初心の人のよくみゝへも、入るやふにとの志ならめ。

何となう雨ふる冬の田づら哉

つる下りて世間つくらふ冬田哉

一史記滑稽傳云、滑稽猶俳諧といへる語を以て、世の人はいかいをこつけいとし、者流の人だにおほく左おぼへたり。はいかいは猶こつけいの如しとあらば、こつけいともいふべし。こつけいの人の意、はいかい一條にも通ひたるを以といへり。物の躰用こゝろえのちがふたる人のみなり。よく此理を考べし。猶又人にとりてこつけいといはむは、

淳于髡　東方朔　優　孟優　衛青

本朝にては　一休　そろり

などの詞ならんかと、不二の翁もたび〳〵御申有し。去ば平治の亂れに藤はらの信頼、ほしゐまゝに政をとり行れ、かれには何の官、たれには何の官・何ゝ介と、埒もなう官位・俸祿あて行れしを、德大寺どのゝきゝ玉ひて、扨は今の世にては人を多く殺したるものに、官位・俸祿たびてんなれ。さらば三條どのゝ井戸ほどに、すぐれて人をほろぼしたるものなし。いかに賞をやたびぬらんと仰られしも、こつけいのひとつなれと、周竹のものがたりもおなじ。かやうの事にて曾呂利が君をいさめし事品有。

紙子又かくす腐ににたるかな

納豆配り飛鳥川とぞたづねける

南禪寺先なつ豆のかしらうつ

川涸て水鳥さむきあしたかな

蓼太曰、哥仙のうらうつり二三句の間は、おもての心にていたすべし。一二句のうちにすゝみたちて、おもしろき句のいでたる卷は、大かたすへのよからぬものなりと、折ふし毎に御申ありしとか。

山鳥のはなしして居ることたつ哉

炎ゝと二十四五郎が巨達かな

こたつ明て天下の由斷はじめける

置ごたつ引ずりはてゝ所なし

をし鳥よひと夜わかれて戀をしれ

ねこ又にあふて落し頭巾かな

勘當の子のつらなでるほし菜哉

大坂名所の題のうち　今宮

來山やおにつらわせてかぶら汁

寒-月やからりと捨るから玉子

くちをしや四そぢに死なで玉子酒

玉子破て酒に夕の雲をなす

たまご吸ふ褒姒がかほの月白し

去ルはさくやにて

尿せしと人にかたるなつわの花

父もなく母もなし唯寒念佛

かん念佛玉子盗て吃(叱)らるゝ

この句おのづから五戒をやぶると、去人の仰られし。

利休居士の畫に

寒ぎくや三千石キのこめのつゆ

かりそめに白うふつたるあられかな

蓬來の山兀として火桶かな

ほだの火に三尺の烟うごくなり

をはりなるみの山父をいたむ。

をしや共みちになるみのはま松

名所圖會に名をしられし竹はら春朝齋、しも月晦日身まかり申されしに

深山樒をし分ひくかめいどつゐ

念佛して目にほとけなしはちたゝき

齒のぬけて夜のうつりや鉢扣

彌兵衛が子つれて出けり甚之丞

にしへ行く文ことづけむはちたゝき
人かいの我子と寐たり冬籠
冬ごもりはつかにひかれ蠅の魂
ふゆごもり中〱いづる夜有けり
冬ごもりあふさか山に窓もなし
こがらしに月宮の管弦かすか也
たき口が窓こがらしにはづれたり
大般若花見せやうとのこがらしか
小者いふ冬至から夜はみじかしと
ひがし向ひて月のいろみる冬至哉
雪ふらぬなにかなにはの浦さびし
籬かけの竹をこぼるゝあられ哉

一妓家の人と夜話の折ふし、おもひいづるまゝの句をなして一笑す。
かほみせや旦那みつけし馬の窓
うづみ火やしのびの鼠來てあたる
湯婆又籠にうらみがかず〱御ざる

これら餘りばさらなりと仰らるゝ人もあらめ。我師等中の詞に、おり〱はほどに過たる放逸の句ぉたし。有さなければ心古びて、のち〱には句の出ぬやうに成とて、へかくれ家はしばるなるべしとしのくれ　へかほみせの笛は若衆の下駄かそも　など御申有し。
かほみせや先づ馬の衆に淺黄たび
かほみせや淺ましと泣夜もあらむ
かほみせに父の若衆ぞなつかしき
かほみせや都で泣たかほもせず

耳鳥齋がおどけ畫、ぢごく盡し。
いしやののごへ、のりものゝ棒なほふばらせしかたはらへ
ふんでとれ死出の氷のわらぢ錢
こほるとき氷るや野路のかくれ水
水涕や諏訪の氷のうへに落ッ
池の鴫きのふあそびし鳥なるや
こがらしにくちびる赤き武士のつま

雲をかぬ高根もみへて落ば哉

さばかりの好ものなりし山曉の身
まかりしないたみて、あしむらぬ
しへ申送る。

きくにさむし日頃の山のあかつきも

一石髪の日、宗因・はせを・き角・許六其外の文通、いづれも常の如くの狀にて、唯事の通ずるを專にしてかゝれしぞ。今の人の狀はからか、やまとか分がしれず。文字の見えぬ樣なは高慢か、じたらくかといつ〳〵も申されし。

人の事はともかくも、かく承りし大江丸が文づら、みえぬ〳〵と何かたよりも仰らるゝ。其狀も又五つに二つはみえぬ也。つね〳〵とりやりの人は、大かた見おぼえてよむなれども、遠き國〳〵のかた〳〵、いかにこまりやし玉ふらん。猶、ほ句はことによくしたゝむべし。見損じられてはいかゞなり。



ふぐ喰ふておとこと思ふあしたあり

ふぐ汁や舌三寸の戀ごろも

西施が乳吸はどやと書し手紙有

ふぐ喰はぬ奴もたじとふぐの人

河豚わかつ交はよし和氣丹家

ふぐのさまむさし鐙に似たりける

飩くへば佛も我もなかりけり

乙子朔日

はこ王にかげの餅つく寒さかな

畫師惇法橋閑月

やき筆とみるまで霜のかれ尾花

つるな畫るに

年沙汰をいはねば鶴ものどか也

朱雀なる福亭にて、大こくの畫に

しまばらはこれ子まつりの都哉

孝子

麥蒔の洗足母にまかせたる

老ぬればから鮭のひく手あまた也

人訪ひて中〳〵冬の夜ごろ哉

かのへさるのさしのせいぼに

能う生た大事のとしを忘れやうか

しも月二日、八千坊にて半時庵の忌日を祭り玉へるに、公には三陽我は利助、はいかいに居てはいかいを學ばずといへど、又其みちを聞くになかしき因なりけり。

ありし世や七十年のしもの聲

寒聲もかち修羅うたふ夜かな

妙の一字を題にとりて

寒聲やふたゝび通る見宜門

水仙に日のあたるこそさむけなれ

三-冬の優-艸水仙とこそなのつたれ

とし明ぬうちぞ水仙咲ほこれ

京で見るいこまの山はさむき哉

まな實の間なくはしるや冬の雨

あさ風やかもの川原の洗ひ葱

氷るとて池水ふたゝび光るなり

をちこちに鹿の毛立て霜白し

壁の明りむこ撰るものとをろ覺へ

一嵐雪　服部氏。童名久米之助。住濱町、雪中庵不白玄峰居士。寶永四年丙亥十月十三日、五十四才。

一さる強氣のものゝふの京に有て我國への文に、一筆啓上、火の用心、子供泣すな、馬肥せ、かしこ。と書おくられし。武夫の實情あり。たゞ入用の專斗かぞへたる。これらもはいかいにとりて、たゝみあげたる働、道の一條の工夫なるべしと、なるみの山父のはなしなりき。

たかの眼やふりむくかたにかゞ見山

ぬくめどり唯有明の月になく

許さるゝ鷹となりてやぬくめ鳥

ぬくめ鳥あかつきの霜口に入る

かみをきやかゝれとてしもうは久三

髮置や兒に抱かせる神の松

つるぬすむ人おもしろき頭巾かな

頭巾とる人すくなきもたよりなき

よい頭巾うる冠してなら傳受

捨た世にまた手をかける頭巾かな

人投る時に頭巾を正しけり

雪中庵の東へかへらるゝを、せめてあはづの邊までも、なくらばやと思へど、折からの時候に恐る。

送られぬ我老にくし冬にくし

婆心君より、御あかつきの衣にみづからむめの花を畫かゝせられ、下さるゝとて

このはなに少しはるあれ冬籠 と

あそばしけるに

きて有がたき一陽の衣 と

かく御脇つかうまつりて、さし上ける。

一夢太曰、いづれにてもあれ一卷のうち、ひと度はしぶりて句のいでかぬる事あり。又我句前いかにしても趣向のとり得がたき事あるもの也。このとき眼をひらき一氣をとり直して、つかぬとおもふほどの活達なる句をはくべし。既に未來記の三吟にさへ、

夏寒き闗の孫六ぬきはなし　嵐雪

たしなき風の石菖へ來る　はせを

この次さしものキ角、いかにしても趣向つきがたく、かつ手に退き、例の酒二三盃引つゞけて活氣を出し、

うしの子の牛にせかるゝ市の中　といふ句を出して、又卷のおもてあたらしく成しと、吏登の御はなし有しと申玉ひぬ。

五升庵を悼詞

てふむ法師をたづねしは、寶暦七年の三月、幻阿彌陀佛と稱ふるは、寛政七年十二月二十四日也。

會ひしは花雪と離れて五百月

朱雀すみや福亭の臥竜梅に、家相にくはしき人に承りし事のあれば、あらめでたの庭ぶりや。

雪を積ンで乾へ松のつういつい

重ばこのすみまで屆くなまこかな
錠口にとり落したるなまこかな
面目坊海中に入てなまこかな
五百生女の手からなまこかな

一蕪村　性(姓)は與謝氏。生國攝州東成郡毛馬村の產、谷氏也。丹後の與左の人といひ、又天王寺の人といふあ、別に村が所謂ありといへり。江戸内田沾山に倚り、後に巴人宋阿の門人となり、夜半亭といふ。俳は門人几董に讓り、書は月溪に傳ふ。洛東一乘寺邑の金福寺なるはせを庵の翁塚を再まつれり。別號、長庚・三果・春星・紫狐庵・又、寅とよぶ。天明二(三)年卯十二月廿五日沒す。七拾才。俳道・書道ともに一家をなして、世に賞せらるゝ事は、いまだ沒年ほどあらずして、遺墨のあたひ尊にてもしるべし。几董、又俳に名をなし、江戸に下り、宋阿がすめりし石町のいをりの跡にて、師の因ありし雪中蓼太執して、三世の夜半亭となのりしが、寛政九年巳十月二十三日伊丹にて死したり。月溪、今京坂に名を高うす。月居、洛に有て書道に鳴る。いづれ近代にての名家なるをや。

すゝひと日不二の埋つるみけり
すゝとりし晩やさながら小の月

後大物の舟出に

せうが酒すゝめ申せば判官も

万和、舟町に庵をひらかれしは、未の極月八日也。

けふいほりはじめのほしのめぐりもめでたくて

正覺のはじめや師走八日坊
蕓桶に和爾が閑哥張れたり
冬ごもり嬉しきまでに夫の屁

くらはしの庄方大根をもらひて

かめぎくが妹又よし大根引
風人を巡りてくれぬ大根引
人丼に師走まづしやひは法師
御衣(原註)下をりし三とせの冬やかゆやろふ
石の火にたばこのみけりこよみうり
よし〳〵とありし夜戀の古ごよみ

一極永貞德の御中有しは、一時一教の人をも師とおもふべしと。去ば與謝の翁は、雪中庵と世々の因有ものから、我をも外ならぬもの也とて、折ふしとの教示有し事などつねく忘れず。ことし慈明の遠忌にめぐりければとて、

十七年しもに夜半のかねを聞く

いたみの紫狐齋、この叟の追ふくないさなの玉ふに申遣しける。

ほだもえて恐ろしきまでの美人哉

木阿彌がめがねさがすやほだの中

後家ふりて炭澤山の火ばちかな

一好のみちながら、俳書をとゝのへ見るにも用捨あるべし。修行相應の書は見てもよからめ。いまだ夫ほどにもいたらぬうち、たかき書をみたらむは、心先にはしりてよろしからず。畠にほしかの過たるやうに、もえて仕まふ也と、雷堂のはなし也。

在五中將さしおさこの畫に

むかし男なまこの樣におはしけむ

いなさどり

ひと聲のくじらに覆ふ念佛かな

しもの音やふたゝび闇のおやくじら

中島の瑞光寺にくしらのほねなもてつくれる橋有。

竜門原上にはしごわたせるくじら哉

七浦やくじらのあとの古手うり

耳みつがたの文臺に、なにはのうらのなになりさも、しるしてよさ有りしにかく。

みるめわかぬ千どりのあともうら書か

寒蓼堂
婆　心

名取川文臺　表千鳥　名取川

浪華之旧國、以名取川之埋木爲此器、而吾師雪中庵乞諭故執毫爾。

うら書に

なにはの旧國、みちのくのかへるさ、名さり川の名木な

携來てこの器なれり。おもての畫は三河の城主の御はらからの君の玉手なる本り、まき繪は公の御ぬし所山だ常嘉といへる人をして、これをいろどらしむ。かく三つの望調ひぬるも、ふるくにがふるきをしたひ、今猶このみちのこゝろざし淺からざるものと、いさゝかうら書にとぶき侍る。

あさたえぬためしや雪の友ちさり

雪中庵　蓼　太

不二庵のぬし、北濱のかきにいほりをうつし申さる。こゝや大さもの三津のうらちかう、大江・たみのゝはしもさながらなれば

舟町の名もおもしろしさよちどり

はつはるの神よびたつる千鳥かな

ふじ川や千鳥いくすぢ別れなく

尿すれば皆たつ關のちどりかな

是は須磨のうらのはいかいなり。

洛の高木去水ないたむ

蕪逍風流篤實の三つをかね玉ひし都雀のぬしの身まかり玉ひしを

たれもその千どりの跡をなくばかり

千鳥聞く夜や松山が茶ざうすい

一小西來山は生國攝州大坂の人、幼して俳才有て由平に道を學ぶ。廿才未滿にして宗因を師とし、鬼貫を友とし、常に晋子角に志を通じ、居を今宮村にまうけ、十万堂と号す。享保元年申十月三日沒す、六十三才　一名湛々翁。其跡小西伊右衛門といふ。翁が遺命を守、風流は心に捨すして句をなさず。連綿として四代に及び、かくたしかにのこりたるはまれなるに、來山のみ誠西山の名家、名譽世に知る處也。

安宅のせきにて辨慶が勸進帳をよむ畫に不二庵の讃有。

經よむか牛房たゝくかとしの關

といふに、脇の句せよと七杉の申さるゝ。

まめからを燃くなやらふの宵

みの内可董所持、夜半亭の遺墨

寒梅を手折るひゞきや老の臂　月居

この扇面、先師讃く慮うたがひなきもの也。

依以二狗尾一繼レ貂所也。

岡見を呼ふ孫ありひこあり　月居

千金もこゝ万寶もこゝなれや　大江

一炊のもとより文に

月も日も王質が斧と古ごよみ　一炊

ほしの碁もはやとしの四五目　大江

山しなのほとりにて

御國忌やかたしの脊にみそさゞゐ

なにはづのはし／＼かうがへ來て

夜半の雪寐ぬ家一ッ大江丸　月居

千どりも追ふて月の居所　大江

年わすれ忘れむと思ふこゝろこそ

としわすれ妖靈ほしとはやすらん

御わすれの杖と文してとしの事

封とかぬ文もまじりつ札納め

人いかにたえて師走のなかりせば

太子樣とのがれぬ八日うなぎ哉

たからぶね袴のまちにはさみけり

鬼ありてけふもくらしつ柊うり

はらはせておになき夜半と思ひける

としの市としかふ人はなかりけり

ほし人になれ人になれとしの市

生鯛のおどるとなしにとし十日

万聲の千どり夜明をうばふなり

老驥伏レ櫪志在二千里一とは、大江老人のことなるべしと。　東通禪師

いさましやせいほのませにふしながら

踵にさはるふじのしら雪　大

きのさのうのさし

ほとゝぎす有らんそよやとし樵　大江

今に氷らぬ養老のみづ　不二

ひのへたつ

行としや車のつめるしほ肴　天府

二日はるたつ金陵の市　大江

ひのとの巳

茶蕎麥もきのせきもりやとし忘　天府

海苔もねぶかも香にたつか弓　大江

甲寅

とし忘れわすれ過して旭かな　大江

冬あたゝかにすみよしの里　不二

つちのへ午

小男よ淺草市のみそさゞゐ　天府

しもの花ちるしづく千軒　月居

うたふらん万歳〱萬々歳　大江

己未

さがも住じ須磨もちとめじとしのくれ　午心

松たつかぎり皆金馬門　大江丸

大みそ日とし忘れしたかほでなし

我ひとりうつ大としのからごろも

としのくれ三井の古寺鐘はあれど

あくる日のめでたさに、今ひとつ
さりはづして

しづかさや大つごもりの隣の屁

この四季二帖のもの、すみつき九
十五枚ながらみづからかき終りて

ふた親にみせたしことし八十二

## 貞德誹諧未來記ニ云

はいかいはむかしより有けれども、百句つゞきたるはまれ也。しかるにいせ人は千句をつらね、山崎衆はいかいの式をつくれり。其後もてあそぶ人もなく、連哥などのあとにて紹巴・昌叱の言捨のはいかい侍けるを、予若年の比は連哥の執筆をつとめける故、みゝなれて其樣をよ

く覺え、ひとゝなるに及て、深く思案して俳諧を中興し、都鄙・遠境までのもてあそびものとなり侍る也。扨右としの元日に三ツ物をはじめて行ひしに、その翌年去御かたに三物をあそばしけるを、点を引返上申ける。一兩年の間に、かなたこなたにあまた三ツ物出來たるをみれば、皆、常に我に点をたのむ人也。いまだ俳諧のよし惡辨へず、片形なる時さへかくかやうの我儘也。いはんやくちなれたる行するは、点者大勢に成に隨て、我がちに他をそしり、みづから上手といはむも餘りなれば、おかしき限にて、其点者ははいかいはよくめさるれ共、身が弟子の誰かれにくらぶれば、宗匠といふとも中〳〵及まじき也。與治といへるもの、己が鷄をほめむため、向ふの福太どのゝにはとりつよき事、恐らく日本にあるまじ、されども其ふく太どのゝとりに、身がにはとりはよりもなく勝也といへり。是を與治がにはとりほめといふとかや。誹師の外よりいはぬ上手のかほするも、元愚味よりおこる事ならん。其故は、はいかいはたゞいひやすき事とおもひ、百人一首の淸濁をだにしらねども、われほめばかりする也。其如くなるひとの下手功の入にしたがひ、むざとこはし、先は大つけにして一句分明ならず。三句目の吟味もなく、其儘なる挽をいふ。中略若未來にはいかいの品下り、よからぬまゝに似る事あらば、我弟子のすゑ〳〵のもの、かならず心をひとつにして、我存現の時の風にかへすべし。さあらば和哥の冥加に叶ひ、又は我なきあとの手向、何事か加レ之や。

右は貞德未來記の詞のうち、肝要の處をさりて此集の跋とす。

大江丸藏板
毎部此印

享和元年辛酉二月

江戸　野田七兵衛
大坂　鹽屋忠兵衛
京都　橘屋治兵衛　梓

# 俳諧落葉考

上・下

闌更

# 落葉考　序

こゝかしこにて書集たる反古やうのもの懐になし、ちくま犀川のほとりを周流しけるに、ある夜栗菴のかり寐に、何となく落葉考の三字を夢見るとあり。覺て此趣を語るに、彼句合のはじめは落葉の句なりければ則題名となし、小冊共なさばなさなんと、人々のすゝめにまかせ、梓にちりばむる事しかり。

明和卯正月　　加賀　半化坊（更閑）

一番　持

左　落葉

落つかぬ木の葉にあたる雫かな　　風水

右

おち葉とて富士のつゞきに塔一ッ　　松濤

左の句、景氣微細に心ゟ付たり。右、又あらはなる富士の詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中目にみへたる切字なし。五文字にて云殘したれば、切字なくはへて見るべきにや。猶分明ならざるを難じて、持と定侍るべきか。

二番　勝

左　霜

親と子の霜夜をかこふ野馬かな　　溪石

右

霜ふかし扇をかざす夜の舟　　勇招

ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子を思ふ、と詠たまひしこの歌に便して、野馬の子を思ふさませつ也。右の句、さもあるべきながら、左の句秀逸なればまけ侍らむかし。

三番　持

左　夜興

我笠に月夜わするゝ夜興哉　　コ齊（羅）

右

いづれ狸得失覺て犬もなし　　文鱗

左の句、しげみ深くわけ入狩人の形容、いふかし

き所あり。
右の句も姿つよく、言葉もたくみにきこえ侍れども、其得失、我もわきがたし。
よつて以持とス。

四番 勝

左 枯野

松苗も枯野に目だつ嵐かな　枳風

右

大橋を枯野にわたす入日哉　全峰

ひだりの句、木枯の吹盡して、苗松のそよ〳〵とうごきたる風のやどり、目にたつべきもの也　寸松虹梁のすがたを含て一句たけ高く、右もまた、かれ野ゝ風景見捨がたく侍れども、苗松のかたや目に立侍らむ。

五番 持

左 網代

子をつれて夜のあじろに簑狭し　心水

右

網代木のゆるぎやみぬる氷かな　不角



網代の床に子をつれたる作意、めづらかにしてやさし。右また、あじろの杭の氷にとぢて、寒さいやましたるけしき、左右、感心わきがたし。

六番 勝

左 石菜

破れ葉のつはに顔だす鼬かな　調和

右

石菜咲や誰が引捨し雪車の跡　立些

左の句、鼬とかいふものゝ、我方を見おこせたると云けん、お野ゝ薄もおもひよせられて、おかしく侍るに、引捨し雪車の句意、しかと聞得ず。仍以レ左爲レ勝。

七番 勝

左 鴨

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し　嵐雪

右

鴨くはで菜を干枯す塩家哉　魚兒

鈴かもの聲ふりたつる、秀句かぎりなし　一句やすらかにして、嚴寒のけしき盡たり。彼妹がりの哥

を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと云けん、さる事にや。右の句も、蚕を飼ふものゝ、きぬ着ぬためしも、あわれに侍れども、鈴鴨の鈴の聲、句調たかしとやいはむ。

八番

左　氷柱

凩に來て氷柱にさがる楓かな　一桃

右　勝

門閉て閑居をしゆる氷柱哉　琴風

氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、細くからびて哀なるに、右はなを畑たへ〳〵にして、むぐらの後はつらゝに門を閉たる閑居の扉、感情まさりたる樣におぼへ侍る。

九番　持

左　霰

あかつきの霰は冬の信かな　李下

右

森ふかく野馬飛込あられかな　仲風

烈風寒威、曉の鐘ざめ、冬のまとゝいへるに、かくてはよにもあられふる哉　と吟聲さびしきに、右はまた、野馬の霰に驚たる樣、能云ひ叶はれたり。聞處、見る所、師曠が耳をそばだて、離婁が目のさやはづすといふとも、左右の是非、辨ずる事あたはじ

十番　勝

左　神樂

御神樂や火を燒衛士にあやからむ　去來

右

鉢扣まじりて狂ふ神樂かな　孤屋

左の句、させる難もなく、秀たる所も見えず。右は、鉢たゝき、神樂にまじる事いかゞ。右に難あるをもて、ひだり勝たるべし。

十一番　勝

左　頭巾

山里や頭巾とるべき人もなし　京　觀水

右

づきんきぬ出家見らるゝ野中哉　鹿言

日にふれぬ山中の客も、そゞろに愛せらるゝ楓林

もある歟。右は、日にたちて猶すごき冬野ゝ法師、人にはいかゞおもはるゝ心ばへもあらなむ。左まさるべし。

十二番

左　煤拂

何方にゆきて遊ばん煤はらひ　擧白

右　勝

煤とりて寺はめでたき佛哉　不卜

煤はきの日の遊び所作たるも、優にして艶なり。右は、寺の煤拂と思ひよりたる先珍重也。兩句、滑稽のまとなうしなはず。感心わきがたく侍れども、目出たきほさけかな　と云し句のいきほひ、猶まさりて聞へ侍れば爲レ勝。

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境にしたがひせまりて、心ざしは雲るゝ山のいはねをたどり、あるはよし野ゝ花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅のやつことなる事年あり。是より先に集を顯す事再に及といへども、春秋遠く雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま〲に、唐朝の牡丹も花しべを異にす。梅の佗、さくらの興も、折にふれ時にたがへば、句もまた人をおどろかしむ。猶其しげき林に入て、花の香の清につき、色こき木の葉をひろひて、左右にはかちて積て四節となす。判士よたりに乞ふて、我も其一にしたがふ。まとや樂にゑらるゝものゝ、笛を盜に似たりといはむ。されども青鷺の目をぬひ、あふむの口を戸ざゝむとあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の潮にそゝぎ、つゐに蕉庵雪夜の燈に對す。

桃青書

# 初懷紙

日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角

元朝の日のはなやかにさし出て、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩みにかけて言つられ侍る祝言外にあらはす。流石にといふ手爾葉感おほし。

砌に高き去年の桐の實　文鱗

貞德老人の云、胳躰四道ありと立られ侍れども、當時は古く成て、景氣を言添たるを宜とす。梧桐遠く立て、しかもこがらしのまゝにして、枯たる實の梢に殘りたる氣色、詞こまやかに、桐の實といふは桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に木末は冬めきて、木枯の其まゝなれども、ほのかに霞、朝日にほひ出て、うるはしく見え侍る躰なるべし。但桐の實見付たる、新敷俳諧の本意かゝる所に侍る。

雪村が柳見に行棹さして　枳風

第三の躰、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少し替りめあり。柳見に行く　とあれば、未景不ㇾ對也。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節その柳を見て書んと、白舟に棹さして出たる狂者の躰、珍重也。桐の木立詠やう奇特に侍る。付やう大切也。

酒の幌（トバリ）に入逢の月　コ齊

四句目なれば輕し。其道の樣躰、酒屋といふもの能出し侍る。幌は暖簾など言ん爲也。尤夕の景色有べし。

秋の山手束の弓の鳥賣らん　芳里

狩の鳥を得て、市に持出て賣躰とも有べし。酒屋に便りたる珍重の付樣也。手束の弓は短き弓也。秋季を持たる鳥の名多く言はずして、秋の山と大樣に置たる大切の所也。看人心を翫味すべし。

炭竈こねて冬のこしらへ　杉風

前句ともに山家の躰に見なして付侍る。獵師は鳥を狩、山賤は炭竈を拵て冬を待躰、別條なき句といへども、炭竈の句作、終に人のせぬ所を見付たる新敷句也。

里〱の麥ほのかなるむらみどり　仙化

付やう別條なし。炭竈の句を初冬の末、霜月頃抔の躰に請て、冬畑の有樣能言流侍る。その場也。

我乘る駒に雨おほひせよ　李下

是等奇意也。何を付たるともなく、何を詠めたるともなし。里々の麥と言より旅躰を言出し、むら綠などうるはしきより雨を催し侍る景色、辯口筆頭に不ㇾ掛。

朝まだき三島を拜む道なれば　擧白

是さしたる事なくて、作者の心に深く思ひこめたる成べし。尤旅躰也。箱根前にせまりて雨を佗たる心、深切に侍る。

念佛に狂ふ僧いづくより　朱絃

此句僅に興をあらはしたるまで也。神社には佛者を忌む物なり。參詣の僧も神前には狂僧也。三嶋は町中に有社なれば、道通りの僧も寄べきか。

淺ましく連歌の興をさますらん　蚊足

連哥の興をさます付樣珍し。度〻我人の上にも有事にて、一入珍重に侍る。

敵寄せ來るむら松の聲　チリ

聞えたる通り別意なし。連歌に軍場をおもひ寄せたるなり。

有明の梨打烏帽子着たりけり　芭蕉

付樣別條なし。前句軍の噂にして、又一句更に言立たり。梨打ゑぼしにてあしらひ付樣かろくしてよし。一句の姿・道具、眼を付て見るべし。

うき世の露を宴の見おさめ　筆

前句を禁中にして付たる句也。烏帽子を着るといふにて、却て世を捨ると言心を儲たり。觀相なり。

憎まれし宿の木槿の散たびに　文鱗

宴は唯酒盛と言心なれば、世のあぢきなきより、戀の句を思ひ儲たり。木槿のはかなくしほりめく、我身の思ひしほると言より、にくまれしと五文字置なり。戀の句作尤感情あり。

後住女きぬたうち〳〵　其角

後住女は後添の妻といはんため也。憎まれしと言にて後添の物と和せざる味をこめたり。砧うち〳〵と重ねたるにて、千万の物思ひつるやうに聞へ侍る。愁思有心にて前句を乘たる也。翫味淺からず。

山ふかみ乳を呑猿の聲かなし　コ齊

砧は里・水邊・濱・浦等に多く讀侍る。尤姨捨・更級・よし野など山類にて讀侍る。砧を山類にてあしらひたる句也。乳を呑猿といふにて、女といふ字をあしらひたる也。幽なる意味・しかもよく通じたり。

命を甲斐の筏とも見よ　枳風

猿の聲悲しきより、山川のはげしく冷敷躰形容したる付やう、尤山類をあしらひたる也。

法の土我剃髪を埋み置む　杉風

筏のあやうく物冷じきを見て、身の無常を觀じたる也。甲斐といふは、古人佛者古跡等多く、自然に無常も思ひ寄たれば也。剃髪を埋み置作意、新敷哀なること侍る。

はづかしの記をとづる草の戸　芳里

別意なし。草庵隱者の躰なり。さもあるべき風流なり。

さく日より車かぞゆる花の陰　杉風

前句、隱者の躰を斷にる也。尤官祿を辭して隱に住人のいかめしき花見車を、日々にかぞへて居る躰也。唯句毎に句作の和らかに珍らしきに目を留べし。

はしは小雨をもゆるかげろふ　仙化

春の景氣也。季のつかひやうは、かろくやすらかにしたる所を見るべし。花の閑日などはやす〳〵さかろく付る物也。

殘る雪殘る案山子の珍らしく　朱絃

是又春のけしき也。付様させる事なし。野邊・田畑のうち殘りたる破たる案山子の立たる姿、哀なる景氣見とめたる也。秋、冬こめて春まで殘りたるに、淡雪のかゝりたる、尤感情なるべし。

しづかに醉て蝶をとる哥　擧白

句作の工ミなるを興じて出せる句也。蝶をとり〳〵哥に醉てさ興じたる躰、誠に面白し。

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　チリ

此句、付所少し骨を折たる句也。前句蝶を現在にしたる句にあらず。蝶とる哥といふを諷物にして付たる也。殿守は禁裏の下官のもの也。蝶とる哥といふに、風流なる禁裏に思ひなして、夜すがら夜明し興有て、殿守等が眠て猶珍敷長ヶに見ゆる躰也。

はげたる眉を隱すきぬ〴〵　芭蕉

朝ぼらけといふより、きぬ〴〵常の事也。はげたる眉といふは、寐過してしどけなき躰也。伊勢物語に夙に殿守司が見るになどゝ言へきも、この句の余情ならんか。

罌子咲て情に見ゆる宿なれや　枳風

はげたる眉といふに、老長たる人のなさろへて、賤の家なとにひそかに住る躰也。器子は哀なる物にして、上つかたの庭には稀也。爰にとり出て句をかざり侍る。是等の句にて植物・草花のあしらひ、所〻に分別あるべし。

葉分の風を矢筬切に入　コ齊

矢筬切と言詞先あたらし。前句民家にして、武士の若者ども與風珍らしき物陰など見付たる躰也。大形は物語などの躰をやつしたる句也。或は中將なる人の膺すへて小野に入、浮舟を見付たるなどのためしならん。されども其故事を言にはあらず。其余情のこもり侍るを意味と申べきか。

かゝれとて下手の懸たる狐わな　其角

藪陰の有樣あり〳〵と見へ侍る。しかも句作風情なめきて、たゞ有のまゝに言捨たる句續き、心を付べし。

あられ月夜の曇る傘　文鱗

冬の夜の寒深き躰を言のべ侍る。傘に霙ふる音いと興あり。しかも月さえ〳〵と見ゆる尤面白し。狐罠といふに、こまかに付侍るはわろし。

石の戸樋鞍馬の坊に音すみて　擧白

あられは霜雪といふより少し寒凪冷敷聞ゆる物なるに依て、鞍馬といふ所思寄たり。昔は名所の出しやう、砧に須磨の浦・十市の里・吉野ゝ里・玉川などゝ付て、證哥に便りて付る。霙は那須の篠原、雪に不二、月に更級と付侍るを、當時は句の形容によりて名所思ひ寄る、尤心得ある事也。

我三代の刀うつ鍛冶　李下

此句詠中の奇特也。鞍馬尤人〻言傳へて、僧正が谷など打ものに便る事也。石の戸樋などゝいふに、鍛冶近頃違〻おもへ、寄たる珍重也。淨き地・清き水をゑらみ、名劔を打べきことおもひしより一句感情不レ少、三代といふにて猶分骨、かぢ名人といはんため也。

永祿は金乏しく松のかぜ　仙化

永祿は其時代を言ん爲也。鍛冶の名人多くは貧成る物也。仍て金乏と言る也。前句しかも明らかに聞え侍る。是等よく心を付て翫味すべし。

近江の田植美濃に耻らむ　朱絃

只上代の躰也。金乏といふより、むかしを言句也。

昔は物毎簡略にして金もさぼしき事、人々言傳へ侍る。美濃・近江のちかき所にて、田植などの風流も遠き田舍とは違ふべし。

とく起て聞勝にせんほとゝぎす　芳里

時節を言合せたる句也。美濃・近江と一所を言にて、郭公をあらそふ心持有て、聞勝にせんとく起てと句作れり。

船に茶の湯の浦哀なり　其角

ほとゝぎす、水邊・津・浦などにいふ事勿論也。船中にて茶の湯などしたる風流奇特也。思ひがけぬ所にて、茶の湯を出すは茶態の好士なり。されば思ひよらぬ物を前句におもひ寄たる、又俳諧の逸士也。

つくしまで人の娘をめしつれて　李下

此句、趣向・句作・付所各具足せり。船中に風流人の娘など盗て、茶の湯などさせたる作意戀に新らし。感味すべし。松浦が御息所をうばひ、或は飛鳥井の昔などを盗とりたる心ばえも、おのづから等(英)紫の人の粧に便りて余情かぎりなし。

彌勒の堂におもひ打ふし　枳風

此句、尤やり句にて侍れども、邊土の哀をよく言捨たり。句段々其理つまりたる時を見て、一句宜しく付捨たる逸句不レ勞。

待かひの鐘は墮たる草の中　芭蕉

彌勒の堂といふ時は、觀音堂・釋迦堂などゝ言様に參詣繁昌にも聞えず。物淋しき躰を心に懸て、鐘の地に落て草の中に埋れ、龍頭わづかに見えたる躰見る心地せらる。五文字にて一句の味を付たり。註釋に及ばず。能々味聞べし。

友よぶ蟾の物うきの聲　仙化

友よぶ蟾、近頃珍重に侍る。草村の躰、物すごき有様。前句に言殘したる所をよく請たり。うき聲といふにて、待便りなき戀をあひしらひたり。

雨さへぞいやしかりける鄙曇　コ齊

蟾の聲といふより田舍の躰を言のべたり。雨と付る事不レ珍といへども鄙曇珍し。しかも秋に言詞にあらず。古き哥にまゝ侍る。惣じて句々、折々古歌・古詩等の言葉所々に有といへども、しゐて名句にすがりたるにもあらず侍れば、その外こと〳〵しく不レ記。

門は魚ほす磯ぎわの寺　舉白

郡の躰あらは也。濱寺などの門前に、魚干網などうちかけたる躰多し。曇り笠にほし付たる、却て作者の器量思ひ寄べし。

理不盡に物くふ武者等六七騎　芳里

此句秀逸也。海邊の軍亂れたる躰也。民屋・寺中に押入て狼藉したる様、亂國のさま誠にかく有べし。世の中穩に安樂の心ばへ、有がたくおもひ合て句を見るべし。

あら野ゝ牧の御召撰みに　其角

前句の勢よく替りたり。野馬どりに出立たる武士の躰尤面白し。三句のはなれ、句の替りやう、句の新らしきをよく〳〵眼を留べし。

鵙の一聲夕日を月に改めて　文鱗

段〻付やう文句きびしく續きたる故に、よく言流し侍る。か樣の所功者の心付べき義也。夕日淋しき鵙の一聲、と長嘯のよめるに、西行の、柴の戸に入日の影をあらためて、と讀る月を取合せて一句を仕立たる也。長嘯を本哥に用ゆるにはあらず侍れども、はいかいは童子の語をも、宜しきは借用ひ侍れば、何にてもあたるを幸に句の余情に用ゆる事先矩なり。

糺の飾屋烼さむきなり　李下

洛下の景氣の光やり句也。月・夕日に其地思ひはかりて見ゆ。

稲妻の木の間を花の心ばせ　舉白

働き言語にのべがたし。糺あたりの道すがら森の木の間勿論也。木の間に稲妻面白し。誠に秋の夜の花ともいふべし。

つれなきひじり野に笈を解く　枳風

此句の付やう一句又秀逸也。物すごき闇の夜の稲妻ぴか〳〵とする時節、聖・野に臥侘る。近頃新らしきはいかいの眼、是等にとゞまり侍らん。

人あまた年とり物をかつぎ行　楊水

此句秀逸なり。聖の宿かり兼たる夜を大晦日の夜におもひ付也。先珍重。聖は野に臥侘たるに、世にある人は年とり物をかつぎはこぶ躰、近頃骨折也。前句の心を替る所、猶〻翫味すべし。

酒もりいさむ金山が洞　朱絃

金山は我朝の大盗人なり。前句をよく請たり。註

に及ばず。付様明らかなり。

當時の俳道賞味心得がたし。願くば句解したまはらんやと侍りければ、即興に加筆し給ふ。終日の席、はせを翁の持病快からず。五十韻にして筆をたち給ふ。

（去）貞享三丙寅年正月

右五十韻にさきに撰せる花の故事に出すといへども、書寫の誤少からねば、今これをあらたむ。ちなみに參林要の評とて一溪堂が抄物の中にありしを、こゝに一二をしるし侍る。

蜘のあみかけて夜に入る木槿哉　希因

蜘のこゝろなきさまあわれふかし。

松風もたゝけばそまるきぬたかな　仝

砧に吹通ふ松風の景色、見ゆるごとくに覺へ侍る。

帆の腹や花のうら風呑で行　作者不知

此作ふたゝび有べからず。たちまち邪路に落べし。

又ある卷のうちに

雨の降日ばかり苦の夫婦にて

そなたの襟は髭にやぶるゝ　作者不知

尻に鉋屑もつけてゆ

末略

五吟

餅つきのこしきかぶりて戻りけり　佳峯

雪に馴たる駕籠の百助　乙孝

餅つきの甑は流行にして俳諧の艸也と見るべし。脇は駕籠人の戻る便宜にかゝる才覺もあるべし。駕籠に行き、人にやさはれ、何かに尻かるな男なれば、雪になれたると風流つけたるなるべし。

二階から言傳呼る船見へて　龍羊

鳥が飛ば鷺も追つけ　京莵

心よしの百助なれば、二階の言傳にふりむきたる姿おかし。船見へてとは第三の一節なるべし。是等は第三の格にはあらで、一卷のかるみおもひ立ぬるより、かくは言なぐりたる物ならし。次は江邊の暮色にして別の子細あるまじ。

氣のつかぬ所に御座る晝の月　信晶

柿にふら〳〵客の木のぼり　峯

鷺か烏かと見あげたる空に、ふと満月を見つけたるが、おもひもかけずと言なせるばかり也。中の七文字にわらべもまじりしと見て、柿喰ひ客の木のぼりといへる句は、一かたおそろしき眼力なり。

天台のふもとの秋は一乗寺　孝

おの／＼鼻の高きともがら　羊

柿の場ごころ客の行所也。山里とばかりあらんよりは、寺こそたうとき遊び處ならん。次は天台といふあたりより天狗と思ひよせたるは、此麓の法師達も自慢のかたにはあるべし。

おめ／＼と女子に公事を負てきて　蒐

逢夜のこゝろ仲をとらるゝ　晶

此所俳諧の命也。天台に天狗と付られて世の人いかん／＼とおもふべきに、子細らしき人〻が女子に公事はまけたりとは、鼻の高きばかりにて何の實義もなかりしと、前句を自在に見こなしたり。次は口説の公事と見へたり。男心のそう／＼しくて、いふべき事得いはぬも、色深き心よりまどひぬべき物なるべし。

こいすねを長ひ袴にまぎらかし　峯



神の葵のたふとかりけり　孝

一句の興也。物のまぎるゝこゝろより、其夜の仲もとられたりと前をうけたり。然れども此あたりはかゝるはこびのみにもあるまじ。次の句むづかしければ、袴に祭とのみあいしらひて過ぬるか。

青やかにかまはぬ杉の立のびて　羊

どれも坊主にみゆる月影　蒐

此所猶附のべたり。神前のありさま、たゞ見るやうにこそ。次は夜遊の納涼也。杉のうつろひ、いと涼しげに影法師にあそびたるは、そゞと靜なるさま也。

ひらき戸に勝手の砧ひゞく也　晶

八幡の午房今や引らむ　峯

此句、居所にてちゞめたる也。靜に長棒になみゐたるが、あなたもきぬたのみ物いふ人なし。次は時節をおもひよせたり。今や引らん望月の駒、と一句のいきほひをかりたるにや。

爰かしこ類族多き花盛　孝

去年の手柄ことし千石　羊

家の廣き人ならば、竹の子時に嵯峨をおもひ、午蒡の秋には八幡へと、花の句なれば余所〱しく付たり。贔屓の人多からんには、思ひがけぬ知行も又さるべし。

噫の出かぬる顔に春の風　菟
由断をすればまた飯を盛　晶

此所付がたし。千石の手がら男なれば、座上にありて何とやらん横柄なりと見て、くさめにあふのきたりとは附たり。及ぶまじき作意ならん。次またむづかし。前句の淺き所を見すかして、くつさめ由断したる所を三抄ばかり盛られたるも、わかき供仕のあはれなるべし。

孫六が吹革まつりは雪も降　峯
古き着物の尻に紋所　孝

此句別義なし。振舞に祭として志津孫六が吹革ならんと、食しゆる田舎をいひたり。次は客人の一興也。か樣の句ざまは未練のすまじき塲也。

久しうて逢て何から申そやら　羊
夜船にちかき墨染の町　菟

此句乘かゝりたればやむ事なし。打越は祭の雪とのみとりて苦しからず。一句おかしければ附所の變化にしてゆるしもしつべし。此あたりむづかしければ、伏見あたりにて殊に夜ぶれにさる事もあらむ。

居眠のやうに茶をもむ朝ぐもり　晶
鉢の次手に談義ふれゆく　峯

此句附所よからず。まづは手帳の部に落べし。居眠りは茶をもむものゝ拍子かな　とは東花坊が句也　此所はたゞ草木鳥獸にて過べし。談義ふれ行鉢ひらき坊と一句を居へていはざれば付所まぎれやすし。門にありて物いふ序でなるべし。

宿老といへば機嫌もとりまわり　孝
松にしぐれのさらぬ躰なり　羊

寺〱の輕薄も、數ならぬ宿老に又愛る也。宿老の門を先觸行と見るべし。次は雨也。宿老のさらぬ躰とばかり付たり。つれなき松はとおもひよせたる、あしからぬにや。

月の影はづかしぶりの宵の程　菟

鳥居籬の野と宮の跡　　品

宿老の句は余所のうはさなれば、こなたは自句と見るべし。女心のならひありて、宵の間のはづかしぶりも、いつしか世づきてさらぬ躰なるも、何にさはかりがたき人心なるべし。次はたゞはづかしからぬ女子の形容也。野々宮とは黒木の秋なり。

腹の形何としのぶの單衣　　峯

一すじわきへ溫飩こぼるゝ　　孝

此句打越定てわるし。野々宮といふあたりより其味ひわすれかれたり。此次何がたし。腹にもちかれたれば溫飩もそこにこぼれたり。一すじとは一句の風流也。數多は句の姿むさし。

呼に來る使に星をくらわせて　　芊

寐間にたしなむ例の長刀　　菟

此句見がたし。けふは溫飩ならんと星ないひたるはおかしけれど、前句うつり如何也。溫飩の座にありてならば、星の字またおかしからず、難ありと知るべし。次の句たしかによし。汝とためて我なたばかりて、とにもかくにもなさんとや。心得たりといふ例の長刀なり。

よいかぶが殘りて今に花が咲　　品

どふ行かふとも道の春草　　筆

長刀のたしなみよのつれならで、むかしゆかしき花の咲たりと比興していへる也。執筆の句別義なし。別義なきをあげ句といふ也。

右餅つきの一卷は曲がちにして花やかなり。はなやかなるにながれて、過たる處又おほし。一卷の變化心得あるべき事にや。

東花坊解

元祿辛巳のとし六月十八日

鳥水丈

句の姿は青柳の小雨にたれたるが如くにして、折々微風にあやなすもあしからず。附意は薄月夜に梅の馨へる心地こそめでたからめと、先師の文にも聞へける。今やうの句を見侍るに、枳殼に瘤有がごとく、附合はなみ松の一木宛立たるにひとしうして、何の味もなきこそうたてけれ。能々工夫し、執行肝要なるべし。

北枝

御連中

## (俳諧落葉考　下)

加陽二夜庵闌更撰

世に謂風流の一筋は、只物に感じて情を動かし、終に言葉に吐て句となる。是詩哥・連俳のもとづく所にして、此間に一毫の私を容ざるを誠の風雅躰とはいふなるべし。故に我祖芭蕉の翁も若き時は、一たび談林の快活にあそび給ひしが、

庭訓往來誰が文庫より今朝の春　桃青
内裏雛人形天皇の御宇かとよ　〃
大比叡やしの字を引て一かすみ　〃
秋來にけり耳を尋ねて枕の風　〃
一時雨礫や降て小石川　〃
なりにけりなりにけりまで年の暮　〃

附合の中

虫の髭白髪とこそはなりにけれ
瓜の中ごの實盛が首　〃
捨る身も鬼の餌食の生肴　〃
南無や酒樽醬油米迄　〃
あつたら眞桑泥水の末　〃
此界をひつくりかへす大砂鉢　〃

此句は江戸廣小路といふ集にあり。延寶六年と有。

終に古池の蛙に睡をさまし、道のべの木槿に感を起して、

山路來て何やらゆかしすみれ草　翁
夏ごろもいまだ虱を取つくさず　〃
あか〳〵と日はつれなくも秋の風　〃
ほしざきの闇を見よとや鳴千どり　〃

正風一派の風流をさだめ、かの談林の荒唐を改め給ふ。もとより其變風に至ては論もなく辨もなく、只天地人情の自然より出たるのみ。祖翁の私をもて風俗をあらため給ふにはあらざるならん。さるを其門人の世に至て、面々得たる所の風骨にしたがひ、あるはさびしく、あるは花やかに、おもひ〳〵の風流をつくせば、

北枝の曰

いざふるや龍眼肉のからごろも　其角

梅の花赤いは〳〵あかひはさ　惟然

梢から舌喰きつて椿かな　露川

一聲は片器に乘せてや杜宇　見龍

此人〻は蕉門の英雄ながら、一度は此あやまちなきにしもあらず。

立聞に耳を取出す頭巾かな　とは、予もあやまれり

果はあら野の駒の己がじゝ、狂ひもてゆくやうになりて、夏殷周の損益もやゝかさなり、終に風に似て風にあらず、雅に居て雅を離るゝ作者なきにしもあらず。まして我金城はもとより、北枝・秋の坊の徒、祖翁の風骨をしたひ初てより、其名の世上を經たるもの少なからず。しかはあれど沅湘の晝夜を舍ざる流行に、露とゆき霜と成て次第にかわりもてゆくに、中ごろ暮柳舍の主人いでゝ北枝を師とし、程なく北枝世をさりて、東華坊の行脚をとゞめ、其のち伊勢なる麥林老師の一風をしたひ申されしより、口調やうやく一變したるに似たり。されど猶祖翁の遺薫つきず。古へをもどかざる作意も多く侍り。

柴舟の立枝もはるや朝がすみ　希因



實ざくらや寺中の人の聲ばかり　、

たばこ火はあれど乞食也鹿の聲　、

ひとりにも舟出す頃や川千鳥　、

況、麥林師はもとより祖翁の傳燈を繼たる高名なれば、是又いにしへに耻まじき句のさま〳〵侍り。さるを林主人世を辭し、柳先師古人の數に入られし後は、たゞ冶傾の衣服を餝がごとく、形容の文にのみ走りて、素撲の質を失ふやうになり行、いよ〳〵巧にたくみをかさね、岩ほに石をたゝみ上て、終に行路難の嶮岨に深入し、いよ〳〵勤ていよ〳〵苦しむのみ。果は桃源の舟を破り、流沙の渺漠にうんじて、誰か風雅にたのしむといふ事を辨へざるやうに成りし。其次第を云ば、

螢火や荊は花の針しごと　二夜庵社中

あの波のあちらに夏や藤の花　、

兀とした山ををし出す枯野哉　、

牛ひきの鼻も通すや梅のはな　、

又

藤咲や鐘は湯となる夕日かげ　、

植そへて聲も青むや田うへうた　。

又

仰向て水のうらみる天の川　、

牛の子の風なめて行枯野かな　、

附句の中

角力をやめて祖父の元服　、

此作一變して

大盃は分別のふた　、

下手が作て肥た本尊　、

又

白粉でをろす船人の灸　、

木馬の療治鉋もて來る　、

又

灸に來ぬも食に案事る　、

喰ふてしまふて筵原に客　、

あたまの火燵袂から出る　、

かく究竟頂にのぼりつめて、はては俳諧はたゞむづかしきものになり行たる事、あまた年にいたりぬ。是ひとへに人々の奇を好み新につくのあやまちにして、實は敎へ導くものゝ飽念といふべし。やつがれも一度此間道にふみまよひたれども、あるときふと心づきて、それより古しへを恐れ今を悔み、二三子を導く事已に十ケ年にも近からん。是又予がみだりにヿを好み、風を變じたるにはあらず。近ごろは國々所々に、古風を信ずる風士も出來ぬと聞ゆ。是いわゆる天地人情自然の變化といふべく、全く我門人のあやし事にはあらざるならんか。されど他邦の事はいさしらず、予が門派に至りては、祖翁に延寳・天和の作あるを我翁の魂とあやまり、あるひは漢語を用ひ、やまと言葉をかりて言を巧にし、あるひは無益の長句を作りて、是ぞ祖翁の洒落と思ひ、又は五十歩の近走りして、風流もなきたゞ言を咄、似て非なるをもわきまへず。是を蕉門のあきらかなる所とも踏たがへたらん。是又恐れ戒むべきことなるをや。故にいとまあるおり／＼には、

詩の躰

馬に寐て殘夢月遠し茶の煙　翁

哥の躰

かみきぬのぬるともをらん花の雨　、

影射の法

冬牡丹千どりよ雪のほとゝぎす　、

字あまり

枯枝に烏とまりけり秋の暮　、

からすとまるや　とありてもくるしかるまじきを、かくのべ給へるにも、漢語をたちいれ給ひしにも用有ときゝぬ。

已をかへりみ諸子を教へもて行に、たま／＼中古以來の枝にからまれ、徑に陷て其苦しびをまぬがれ得ぬ輩は、今我黨の學ぶところをあやしみ、奇を好むとぞしり、師をもどくと嘲るもありと聞ぬ。旣に馬祖禪師の非心非佛も、大梅和尚の是心是佛も、師にたがふ所、則師にかなふの妙處なるを、況、正風の俳諧とても情は一筋の不易ながら、姿は日々の流行あれば、かの七部の附合とてもすがたは七變のたがひありて、

籠輿ゆるす木瓜の山あひ

ほねを見て坐に泪ぐみ打かこち(つ)

まがきまでつなみの水にくずれ來て

佛喰たる魚ほどきけり



三味線からん不破の關人

道すがら美濃で打ける碁を忘る

年よりて身は足輕の追からし

泣て酒呑乘物のまへ

來るほどな(ゑ)乘かけは皆出店衆(家)

奥の世丼は近年の作

破れ戸に釘打つけるはるの末

見せは淋しき麥のひきわり

順禮死ぬる道のかげろふ

何よりも蝶のうつゝぞ哀なる

入込に諏訪の涌湯の夕間暮

中にも脊の高き山伏

堤より田の青やぎていさぎよき

加茂の社はよきやしろなり

雪の跡吹はがしたるおぼろ月

ふとん丸げてものおもひぬ(ゐ)る

はつち坊主をうへゝあがらす

泣ことのひそかに出來し淺ぢふに

山伏を切てかけたる閨のまへ
鎧もたねばならぬ世の中
まぶたに星のこぼれかゝれる
引立て無理に舞するたみやかさ
堺こもる飼の宿に冬の来て
火を焚かけに白髪たれつゝ

三十年以前の作者の好み興じたる物好を、今日にいたつてこれを見れば、誠に弊髪芻狗にひとしく、釋迦牟尼佛の五時八教も、夫子のいわゆる瑚璉簠簋も、必此さかひならん(二)おと、我はおもひとる事になん。

旅行

風流の國主なるらん山ざくら　北枝
曲たる家を櫻のかたへかな　万子
水打てや蟬も雀もぬるゝほど　其角
靈する人は古代のすがたかな　曾良
道のべや昨日の雨に田にし鳴　一笑

麓の里を見おろして

衣がへせしや綿干谷の家　句空
雉子の尾に春風ゆらぐ日影哉　尙白
花薄戸にはさまれし夜風かな　牧童
起あがる墳のうしろの小鹿かな　孤舟
折れふせし黍のうへなる霜夜哉　秋湖

烁の坊の行脚に

疾く起て米をも貰へ朝涼み　李東
磯の家の畑かぞへつ山ざくら　楚常
抜綿に物買ふ賤が朝かな　一風
夕涼み夕顔ひとつ見付たり　麥林
拾はれてさすが田螺の鳴もせず　海人
おのが音の山彦おわゆる雉子かな　露川

烁の坊によする。

御坊そも紅葉の秋か世の秋か　東花坊
別るゝや柿喰ながら坂のうへ　惟然
ひとり只亂れ初てや啼雲雀　秋の坊

岸の山吹さよみけん、芳のゝ川上こそ皆山吹なれ。しかも一重に咲こぼれて哀に見へ侍るぞ、さくら

にも、おさ〳〵おさおさおじきや。

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　翁
睡るなら叩給へや花のくれ　希因
言はぬ夜や音あるものは皆寒し　幾曉庵
綿ぬきや我をわが見る影法師　梅路
夕虹やおなじ谷から雉子の聲　左菊
蜩や馬士は餅喰ふ軒の下　下ヤマ二川
蚊帳にさす月を寐覺の凉かな　白推
みよしのや花のいづこに人の家　麻父
捨舟にながめも有や芦の花　梅之
薺もきのふまで花の咲にけり　畫龍
萍や吹寄られて裏かへり　一壁
ぬれながら穴掘熊や夕時雨　倚彥
薺や咲かぬ朝も又あはれ　其汀
茶のからも其根にかへせ冬籠　封卜
笈に寐て道のつけ有かんこ鳥　可枝
おもしろきものに逊るや初時雨　芦丸
花ざかり雨も大事に降にけり　イ杜セ菱

春之部

蝶追ふて鷄の草喰ふ日南かな　居翼
朝日影霞はれて立木かな　塢夕
白鳥の池を去る日や霜の果　晚魚
業ながら野を燒く人の心かな　季生
燈も細く烏賊釣舟の終夜　春蘿
鳥の巢にむざんや虫の這ひあがり　吳山
鶺鴒の囀りありく岩間かな　仝
打返す土とも成らで田螺哉　眞白
網引の踏さへおしき防風かな　南嶺
雨風もなくて汐干のけしきかな　一風
萍の生初る中の朽木かな　下問
一日はれて花は殘らずひらきけり　兎白
行雁の跡は賑ふけしきかな　鬼候
影法の櫻に移る月夜かな　思賤
いとゆふの中に交るけぶり哉　蘭風
日にかわく砂生嗅き汐干かな　栗斗
雪解や駒買に行里もあり　素甫

春の暮おなじながめの友もがな　菊閣婦その

心なき人にはおしゝ山ざくら　きよ女

淋しさや花は見ながら雨の暮　つき

櫻狩や脱で捨たき下小袖　眞山

花待て心せはしふ咲日かな　菁莪

山川や岸に田螺の二ッ三ッ　淇竹

霞あるうちに見せばや浦の松　一舟

波ひきし跡にも咲や岩つゝじ　見妃

北からの風も春めく田づらかな　五嶺

山吹やかげ定らぬ瀧の下　沙岸

木の根から羽蟻の出る日かげかな　奇石

朝がすみうしろに犬の聲しけり　一千

朧夜や東寺の鐘の聲ばかり　巴劦

きのふまで一人ふたりや山ざくら　都夕

思ひ切て出れば櫻の散日かな　可友

雪解て心定ぬ埜原かな　冬歌

春の日や夕〳〵は有ながら　爲鈍

けふも花に命をつなぐ乞食哉　蘭里

躑躅見んと岨のつゝじを手草かな　寥々

人絶て田螺鳴なる夕ゞかな　山曉

大きなる鯨引けり浦の春　野白

花散や世上は心靜なる　五萍

苗代のかげ有ほどに延にけり　沙鷗

四季

育てゝも末へは氣づよき蚕かな　葦雪

咲日より枝の分るゝ牡丹かな　、

漁火に明り横ふ夜寒かな　、

水のうへに夜は明に兒網代守　、

魚の飛ぶ音のみ春の入江かな　葛風

雨の日は虫の落ける茂りかな　、

梧の木の高く吹居月夜かな　、

鳴蛙まばらに成し朝かな　萬國

水底は草の横ふ皐月かな　、

驚かぬ身は浦山し秋の風　、

枯果し野を問ふものや鉢扣　、

閑なる日を春風の木梢かな　蛙井
石白ふ河原はされて雲の峯　丶
夕暮を尾花吹込む山家哉　丶
月も星もさへたる空に嵐かな　丶

前後略

我等事氣配慥に成不レ申候内は發句案事不レ申、只出次第に申捨候。扨江戸の俳諧にはかに正風になり候よし、去春より參宮の序に尋被レ申候人ゝ有レ之候。併ながらなぞ／＼はいまだ殘る候とて、其人ゝもおかしがり申候。東國は惣而正風／＼と申入候由。猿蓑・炭俵之昔をしたひ候との事ニ候。西國もそろ／＼正風に成べくと存候。

二月廿八日　乙由

希因樣

花さかぬ身をすほめたる柳かな

夏之部

わくら葉やいかなる風のあたりしぞ　市邑



裸身に添ふものとては團扇哉　竹ノ坊
わくら葉は一木の中のあらしかな　仝
蚊遣り火や馬も川邊に放し置　亘卯
青梅や今は淋しき雨となり　季標
晝顔に我身甲斐なく覺へけり　北虹
思ひやる蜀の雨夜のほとゝぎす　蟻栖
捨杭に鵜の塒りたる夕べかな　素秋
蝙蝠の笠へたち込夕べかな　一朝
今朝見れば雲はくちなる卯月哉　芥舟
雨晴て土をはなるゝ蟬の聲　露竹
時鳥鳴よ卯月も十日すぎ　遊輪
夏の日に草干て置山家かな　塢夕
夕立の晴行森は月夜かな　桃々
五月雨や笘屋の烟薄く立　兎白
分入や山ほとゝぎす松のかぜ　大渓
よのとりは絶し深山ぞ諫皷鳥　枝川
植る日も蓋なく小田の夕べかな　蒼梧
さまかへて雨もいとわん羽ぬけ鳥　蘭渚

ひらく戸におそれて鳴か夜の蟬　邑亭
しづまりて若葉にたるゝ雫かな　浦夕
螢瀬に向ふ男はなかりけり　也イ
道よこてあゆむ情や明ぬけどり　楚南
夏の夜や扇の風の身にまかせ　女 旭山
寐入まで風をたよりの蚊帳かな　きち
吹まゝに身をまかさねば暑かな　むめ
芥子の花うつくしきこそ浮世なれ　呉夕
蚊の聲も稀にも聞ぬ淡路かな　呉牛
蝸牛朽木とゝもに流れけり　以文
吹けや〳〵いとまなき身の夕涼み　岱阜
心よく清水流るゝ岩間かな　兎玉
吹れ〳〵わづかに鳴や夜の蟬　素遊
竹叢や機織賤の汗こぼる　女成
植しより日ゝに水汲む山田哉　梅蘭
草むらへ歸らぬものか夏の虫　如流
杜宇急ぐこゝろはいかならん　塘草
水茶屋をはなれて吹や青嵐　桂露

五月雨に沙子の清し軒の下　時習
藪陰をはなれな雨のかたつぶり　竹谷
葉柳や日ゝくらき井戸の中　素琴
五月雨や苔青〳〵と橋の裏　東阜
萍も芦の葉風に吹かれ行　半醉
雜茂り石碑も見へぬ山路かな　仝
蚊遣り火やしばしは我も井の邊り　眞臼
竹の子の芥の中に出にけり　哥蝿
鳴立し鷸の羽音や夜の舟　蛙三
臼立て麥搗門のむしろかな　素人
蒜の根は堀捨てからすかな　淡二

・翁、山中にて少人桃蛘(妖)、山人の菴寐をしばれ蔦かづらと申たるを、翁幾度も吟じて、葛かづらと申されたる。桃蛘心に聞ちがへ給ひしかとおもひ、蔦にてゆと申ければ、翁の曰、山人に蔦はおもしろからず、葛かづらならむと宜ひしよし、北枝の物語なりとなん。

### 四季

燒原や雉子鳴なる夕小雨　斑車
暑き日や水打跡の土の嗅　、
けふ咲と知らで我のみ庵の萩　、
埋火や灰の落いる朝ぼらけ　、
おれ伏し野竹の下に殘る雪　北人
吹落て病葉とこそ覺へけり　、
心澄ば身に入む風の吹にけり　、
羽をたれて人にもたゝす雪の鳥　、
打うちにつひ陰となる山田かな　壺友
世の北も南もおなじ夏の雨　、
早稲の香に田守の笑める朝哉　、
更る程鴨の集るながれかな　、
菜畑も入れば花摺衣かな　梢波
春も過夏の雨にも枯木かな　、
萩咲や散るもちらぬも土のうへ　、
夕霜や野路八丁に我ひとり　、

ある時暮柳・梅路・芦丸の三子、他なく一巻を催さんとて芦丸墨を取、さかさまにすりければ、三子共に笑ふて、是を發句の趣向にもやと芦丸、墨さかさまや　と七文字を出せしに、梅路取あへず、杜宇　と下五文字をおけり。柳師に上五文字を好みければ、しのゝめに　とおけるとなん。誠に風流のまじわりなり。

### 秋之部

日に榮へ日にうろふや夕紅葉　籟山
夜嵐のあだに吹ぬる鳴子かな　寄晶
秋の暮雲をながめて居にけり　芦曉
物くらく明るく秌の埜末かな　爲水
庇までたばこ干置山家かな　僊呂
定なき世の斷や秋のはな　巨卵
中〱に市は住よし秋の暮　家佐登
雁の聲聞や野中の夕あらし　滿路
芭蕉葉の影は日南と成にけり　東皐
秋淋しながむる事も聞ことも　半醉

蕣の花のちいさき九月かな　初橋
衣脱で見れば重たし秋の霜　一川
朝がほの花のすがりは日毎かな　龍風
鳴啼て遠よする澤邊かな　楪イ
惠み深き稻葉の横の流かな　衆木
露の夕べ心靜になりにけり　何遊
野分して蔓はさま〴〵と成にけり　菊路
虫よりつ片山かげにすだきけり　小ゝ雄
片そげの山はあやうし女郎花　大虫
鷄頭に押合ふ草はなかりけり　女苧圃
朝顏や又のちにとは言かねし　千花
鷄頭やつよきおのこの見かへりし　左柳
秋風やひとりぬる夜の薄ごろも　蓼下
心づよく烏うつ人や秋のかぜ　鈍物
ほそ〴〵と三井の鐘聞夜寒哉　見柳
吹ちりて秋果るけふの梢かな　大梅
芭蕉葉に露のこぼるゝ軒端哉　松卯
塩を燒煙はけぶりけふの月　幽志

秋ぞ猶案山子に雨の降日かな　哥丁
起ゝの身にこたへけり初あらし　兎向
いつまでも水田の稻葉青きかな　左柳
葢戀しかりけん椎がもと　一素
此うへのさまは有まじ種ふくべ　乍凡
枯竹の中にくだけてからす瓜　愚谷
秋立て曉ごとのあらしかな　梅門
かひくれに人は來らず浦の秋　木父

名月前態ゝ御隙に被レ成御待可レ被レ成義、御用候はゞ御勝手に可レ被レ成候。拙者下り候事、いつとも難レ定候間、名月過にも成事可レ有二御座一候。越人も如レ此發句いたし候。

稗の穗の馬にかしたる氣色哉

愚句又

猪もともに吹るゝ野分かな

いかゞ候半や。能と申ニては無二御座一候。先懸二御目一候。さて加生、越人へ挨拶、

男ぶり水呑顏や秋の月

八月四日　はせを

四季

山吹や雨の日ならばいかにせん　苦萊
暑日や桑の葉摘し業ざうき、
菊植て詠め居る人手折ひと、
霜寒く梟叫ぶ夜るの山、
世をうしといふ人もがな春の空　太郎
三夜三夜はこゝろもとなき紙帳哉、
吹おろす風の中なる鹿の聲、
寒さより思へば寒き衾かな、
かぎり有ものにはあらじ松の花　松吏
業にさはらぬ夜の暑かな、
露霜の後哀なる梢かな、
取あげてまだ其まゝの生海鼠哉、
何事も氣まゝに暮す春日かな　東里
住なれて嵐も友よかんこ鳥、
澁柿はからすも喰はず野中哉、
陽炎や日の脚近く成まゝに　菱歌
百合の花中に雫はなかりけり、
杯の蟬啼さす道の並木かな、
冬籠なればこそ唯暮したり、
白魚のしろきも月の朧より　吉良
青柴の匂ひや夏の夕小雨、
靜さは野に咲く菊の白さかな、
くらがりに寐る火燵しの寒哉、

夢想の俳諧

秋の夜にかわる衾や秋の風　御
片田の餠の香に匂ふころ　希
賑かな月見に鴫も立かねて　蓮二
濱は夕日の出舟入舟　(一〇)

又第三四句目

名月の馳走に鴫も暮待て
雲はきわくる村雨の跡

此度の一順、別而ほね折申候。句作に用と不用の論有。用をしらずして句作を好み候へば、聞へぬ方に落申候。此度の脇・第三に餠の一字は句作也。此用と申は、ほ句には衾の一字のみ付所なれば、稲と云はずして餠といへ

り。第三は夜分をのがれんとて、鳴の句作は其用なり。四句目は兩様共に會釋の句なれば論なけれど、出舟入舟の賑はしき用と、雲掃分る馳走の用と、是等も句作は同じ心得なり。跡略ス

霜月　日　　連二

希因様

前後略

病氣をのがれ晴明に逢ふ事を

窓に寐て浮木の龜やけふの月

と申候。又すりものには、逆なら　と置かへ候て、連中の好みにまかせ申候。五文字にて黑白のちがひに成候。例の高論御しらせ相待候。八仙主人へ御相談可レ被レ下候。

八月廿九日　　暮柳判

代明雅兄

冬之部

松原をうしろに冬のけしき哉　化物
ぬくめ鳥其夜〳〵の命かな　丹丘
霜降の月に雪見るところかな　素人
貧さにくらべては淺き寒かな　三峯
吹止て淋しき軒の氷柱かな　素白
朝まだき道に氷を蹈身かな　園樹
積り來る身は白雪の夕べかな　後和
雪吹夜や月出るときとりのこゑ　梅門
初鰤や海づら暗く成しより　淡二
氷朝折音もあり釣瓶縄　座連
初氷うへと下とに木の葉哉　如猿
數あるも沖は淋しきたつべ哉　稻守
和若布刈跡より滿る汐路哉　松濤
ふしづけにひとり沈し眞菰かな　思賤
埋火も更行まゝに寒さかな　花楊
滿汐のまゝに鳴來る千鳥かな　枕水
實初雪窪みし所はくぼみけり　越鳥
いつしかに嵐靜る深雪かな　石亭
雪吹にも泊り鳥の渡りけり　少年 一知
降雪やしばし詠むるうちにさへ　女 李英

あわで猶恨むる道や夜の雪　女 つな
今朝見れば手のとゞく雪の木梢哉　、せい
野の時雨牛の下行童かな　一舟
落葉して迷ひし道を覺へけり　可然
漣は下に動て落葉かな　甫邑
足跡の水うごきけり薄氷　素扇
思ふほどぬればや野路の初時雨　沙鷗
柿の蔕梢に黑き霜夜かな　石鳴
つれ〲とつもりし雪の寐覺かな　洪水
夜時雨や明て流るゝ水の音　仝
雪降や門につなぎし馬のつら　蝶阿

翁衣通のはしに

信濃路は雪深き所にて、野山も白たへとうつりかわり候へども、着物にはいまだつもり不申候。

雪ちるやほ屋の薄のかりのこし

四季

誰がうへに夜の朧の氣色かな　浮鷗
更衣深山の人にもの問はん　、



此原の露に折懸切籠かな　、
雪や降竹ひしぐ音の夜もすがら　、
陽炎や汐干の石に日のひかり　蘭居
夕暮は葉裏を出る夏の蝶　、
水音の山にこたへて夜寒かな　、
安からぬ世のさま〲や網代守　、
梅が香や碓の横の庭邊り　十舟
樓を好て啼か行ゝ子　、
碪打夜るのふせ屋に風なきか　、
人絶ゝ霜夜の橋の闇かな　、
春風や鵜行かふ海のうへ　馬來
藻の花に釣の翁の睡りけり　、
あり〲と月夜を吹や秋の風　、
馬あらば借らん野守がもとの家　、

おとめ石 參る　はせを

じこいどの無事ニ御そだてなさるべく候。よしにもはるか申上候。

此ほどは加生老・去來御みまひ、御たいぎながらゆる〲と名殘をおしみ、よろこびかぎりなくぞんじ候〲。

ふゆのうちは山ふかき方へかくれまいらせ候。春になり候て、また〳〵御めにかゝり申べく候。なが〳〵の御なさけども、わすれがたきのみ申つくしがたく候。きるものどもよろしく御こしらへ、さむくも御ざあるまじく候。御きづかい被レ成まじく候。御ぶじに春を御まちなさるべく候。

よひ〳〵はかまたぎるらんね所の
　みつの枕もこひしかりけり

小本一冊、三とせかり置、失ひし頃、ひたものせつかれ、かわりもとめて遣す時

我ばかりわすれはてゝはくらせども　闌更
　人のわすれぬ世こそつらけれ

翌はあすけふはけふにておもしろき　五萍
　きのふのうきに死なざりければ

文通のはしに

鰒汁やあなたまかせの身は安し　舎来

かへし

鰒汁やいたづら者のおそろしき　楚雀

今一疋馬を参らせ候。句料も遣し申候。御取次頼入候。

廣野へ馬ははなれて大根引　支梅
　奈固羅文

## 諸國之部

行脚呉夕に逢て

そこ爰の花野はいかに越の人　伊勢 入楚
過行けば又見へ初るさくらかな　、 樗良
水涼しひら〳〵見ゆる魚の腹　、 坡仄
梅の落る音のするなり五月闇　花洛 蝶夢
霞日や只波の音松のおと　、 李完
みよし野や花の流るゝ水七日　江府 巻阿
下掃て置直しけり萩の花　、 秋瓜
出る事もしらぬ神馬や春の雨　尾張 僧几
朝顔や火を打つ音の隣にも　浪花 才馬
鶏頭や十王堂のつかみたて　美濃 以哉坊
夕暮も此けしきなしかんこ鳥　津輕 里桂
はきよせて又一輪の牡丹かな　相州 金化坊

若草やはなれし駒のとらまらず　相州 丈水
初秋やさくればこれも夏衣　越後高田 彫波
松栢ちるや巣だちの四十雀　、泰龜
くだら野や朽すも水と鐘の音　梅史
鳥啼雪の夜明ぞつれなけれ　日國早川 牛倚
夜は涼し行たい方へ行身なる　行脚 魚曰
械立て入けり海士が門の雪　、一音
紅梅や半かゝげし玉すだれ　信名 麦秀
雨晴て巳の刻斗の紅葉かな　、石鳳
なき〳〵も蟻にひかれて秋の蝉　、烁水
夕暮を出行蝶や鐘の中　甲名 黒澤坊
水澄ていよ〳〵沉む雁の聲　行脚 素嵐
見渡せば海又うみや秋の暮　播名 山李坊
月涼し歩行にあてはなけれども　丹後宮津 馬吹
菜をあらふ女に遠し池の鴨　讃名 帶河
薄から人の出る日や魂まつり　行脚 桃也坊
日の出より日の入るまでや蝉の聲　豐前 一中
烁立ぬ起て何着ん老の肌　越前丸岡 梨一

朝なぎや白魚礒に遊びけり　越前福井 小瓜
鶏頭の一本立や秋しぐれ　仝所 聲々
散そむる葉はいづれから今朝の秋　仝三國 哥川
稲苅やうしろに暮る山の色　仝鯖江 松因
見もわかぬ朧夜人に逢しかな　仝府中 之丸
夜嵐に吹おとされな網代守　越中富山 烏角
欝として遠くこそ見ゆれ夏の山　、知足坊
朝ぼらけ狐の走る氷かな　魚津 勃茂
長き夜や山鳥のねぐら思ひやり　氷見 馬十
白魚やさすが浪にもくだかれず　、洞芓
余の草にもたれて萩の咲にけり　、萊洲
草分て見るも哀や魂まつり　、得十
今日こそは柳静に鶴の聲　高岡 江由
雪を見れば我庵に道のなき日哉　、九満
涼しさは小魚の走る早瀬かな　石動 交琴
誰が春のものと見初て柳かな　戸出 康工
春寒し親呼鳥の口重し　福光 作孚
驚て蝉の啼さす一葉かな　城端 李夫

けふの月北國空はなかりけり　、吒石
誰がために咲や野閒の卯の花　、秋の坊（安江田）
蝶〳〵や代かく馬は汚れつゝ　、陸史（井波）
短夜や月はほだしとなりながら　、大器
いさゝかに物音遠き帋帳かな　、見推（能登）
菊植て是から上への命かな　、總船
水音に物影おしむ暑かな　、芦水
結ひさして粽の謂を聞身かな　、左汀
夏衣着つゝなれにし二日より　、指月
秋立や涼しひ跡に鳥も寐ず　、金毛
冬籠只置蓑のあらしかな　見風（加賀津幡）
爰も花にさし捨てある庇かな　素園（松任）
菖蒲苅一足づゝに濁りけり　、知休
實ざくらの大和かわちと成にけり　、白烏
菜の花に鉄音遠き野中哉　宇洪（野々市）
板の閒を掃ちぎりたる寒さ哉　梅夫（鶴来）
涼しさや蓮の葉叩く雨の音　、其山
窓明て涼風待や夕まぐれ　、竹市（少年）

はり上て駒鳥鳴や朝日かげ　、太乙（少年）
蟬の聲聞もまばゆき日南かな　、蛙吹
夕顔や月は月にて消にける　、宜睡
水斗あやめの池の六日かな　、可泉
卯の花やどちらが月の影日南　、都柳
杜宇しらぬ野山に韻あり　、何遊
いざはしれ夕トの石へ夕納涼　、五柳
風止で山陰凄しかんこ鳥　、可山
見るうちに高ふ成けり雲の峯　、示之
綿ぬきや今朝は嵐の身にこたへ　、その
解じと結びし物を粽かな　、ひさ
思はずも又立よりて清水かな　、市朝
紫陽花や日に〳〵色の新なり　、朱絃
よく見ればあやうげもなき柳かな　、李仙
橘はひとかたならぬ匂ひかな　、珂石
思ふまゝに牡丹咲せて見せにけり　、夕吾
月影も畔をめぐりて青田かな　、文士
牧童の中に隱るゝ夏野かな　、楚六

夕皃や植たる人は花も見す　、岩涼
吹おろす風もつめたし氷室山　、見水
五月雨や岸の青葉も水の中　、巴菊
埜も山も茂り滿たり夏の草　、梅雫
螢火や川邊に凄き猿の聲　、百翠
白山の森も日南に蟬がなく　、六歳一英
花にはづれ實はまだ青し諫鼓鳥　、本吉大睡
麥搗や古きむかしの人かたち　、小松野冬
山伏や岩はしたどる夕紅葉　、松井
花の幕水も一桶入にけり　、竹至
風の音ばかりして月夜かな　、机方
雨の日や紅葉の下に濡てみん　、卯鳴
月の輪に一聲くらきほとゝぎす　、青坊
溪一ッ山吹咲て靜なり　、菊上
秋や立うらむがごとき松の風　、皈白
柊の落葉するどきあらし哉　後川
寐にいそぐ鳥もしらでや夕雲雀　如本



雪折の寐覺がちなる片山家　巨井
雲はまた雲と見へけり初櫻　尼珈凉
薺や人は世をうらみ身をうらみ　溪夫
賴ある空や月見の夜もすがら　不鳴
杜宇穗麥が岡の風はやみ　麥水
似我蜂や己が姿もかへり見ず　闌更
ひた／＼と着物身につく五月雨　、
枝に葉に花の付けり雨の萩　、
枯芦の日に／＼折れて流れけり　、
雪降も雪の中なる詠かな　氷壺

雜之部

金城の留別

我笠もかくや行かふ橋のうへ　春渚
何事も只身ひとつのこゝろかな　北人
人に問ふことなきものやひとつ松　可中
戀しきは見ぬ世の人のこゝろかな　呉夕
ともにしたはん翁の道のありのまゝ　闌更

大坂心さい橋北久太郎町南へ入
塩屋忠兵衛

稿本
俳諧寂栞
上・中・下
員外
白雄編

# 俳諧寂栞　巻之上

白雄坊編

古池や蛙飛込む水の音

道の邊の木槿は馬に喰れけり

此二句は我家の奥儀なり。修しつとめてのち其意味の深きを知るべし。

おとろひや歯に喰あてし海苔の砂

やがて死ぬ氣色はみえず蟬の聲

あの雲は稲妻をまつ便りかな

ともかくもならでや雪の枯尾花

四時の観相よく歯牙に味ひて、祖翁の常を知るべし。

起よ〳〵我友にせんぬる胡蝶

先頼む椎の木もあり夏木立

行秋や身に引まとふ三布ふとん

雪毎にうつばり撓む住居かな

生涯の行状を句の上にあらはす。隠者の常を尊むべし。

草臥て宿かる頃やふぢの花

ひとつ脱で後ろに負ぬ更衣

送られつ送りつ果は木曾の秋

いかめしき音や霰の檜かさ

旅を好み給ひし故に旅中の句多し。

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅

ほとゝぎす大竹原をもる月夜

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

煤はきや暮行やどの高鼾

道に入より此四句を常に吟じて、日暮の龜鑑とすべし。初學はまどひ安き故なり。

去來、正風の大意を問。祖翁曰、俳諧は能く万物に應ずる事をむねとす。前にあげたる祖翁の句にて知るべし

去來夜話曰、俳諧は物を憐む事を要領とす。物を憐とは草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑に苦しむ也。されば道に臥たる乞兒にむかひて、きたなしとおもふ念おこらば一句にむすぶ事あたはじ。不便と思ふこゝろは則風雅の一句なり。さりやとて句ごとに、感情をのみ好むとにはあらず。例のよく万物に應じて哀樂ともに數ずべし。詩に沓

嗟咏歎あり、和哥に余情あり、俳諧わづに十七言まして歎ずる事を先にすべし。且云ひ忘るまじきは、風姿風情也。俗にくだらず、雅俗に遊ぶべし。

蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便

元日や何にたとへん朝ぼらけ　忠知

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角

かくの如く、祝言は祝言のやうにちからを入て歎ずべし。

## 姿情の事

姿情の事昔より論多し。姿を先に情を後にすといふも初學の事也。情を先に姿を後にすといふはもつともいはれなき事也。姿情は天地のごとし。姿情の論にまどはず、例のよく万物に應ずる事をおもふべし。

野ざらしを心に風のしむ身かな

おう〳〵といふ(へど)に扣くや雪の門　去來

鹿の音に人の顔みる夕かな　一髪

姿情の事、前後にかゝはらざるを知るべし。



## 三の情の事

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

さびしき余情かぎりなし。

秋はきぬ紅葉は庭にちり敷ぬ
　道ふみ分てとふ人もなし

わたり掛て藻の花覗く流かな　凡兆

涼しき余情かぎりなし。

道野邊に清水流るゝ柳陰
　しばしとてこそ立どまりつれ

うき我を淋しがらせよ鳴鳩

たらち女の湯婆やさめん鐘の聲　鼠彈

中〳〵に子をこそおもへ秋の暮　肅山

此ごろの思ひはるゝかな稲のはな　土芳

秋いまだ七日の夜の明やすき　猿雖

是等いはゆる通情なり。親子・夫妻・朋友の情はさらなり。春の花のはなやかに、秋の夕邊の露のもろきたとへ、いづれか通情にもるゝ事なし。情はきらふ。いかにとな

ればおのれ〳〵の情にして、聞く人いかで歎ずべきや。

## 歌題俳諧題の事

鶯や餅に糞する椽の先

五月雨や硯箱なる唐辛子　嵐雪

芦の家の燈ゆり込む擣衣哉　立志

幾たりか時雨かけぬく瀬田の橋　丈艸

是哥題也。哥題は其心にていさゝか言葉つよきも然るべし。

神垣やおもひもかけず涅槃像

綿ぬきは松風聞に行頃歟　野水

角力取ならぶや秋のから錦　嵐雪

爐をめぐる命つれなし榾の蟻

是俳諧題也。ます〳〵幽玄に言葉を艶にすべし。さなくては平句に落入べし。

## 漢語をつかふ事

馬に寐て残夢月遠し茶の烟

さよの中山の吟なり。

名月や湖水にうかむ七小町

寒食の日旅人たばこに飢つらん　藤匂

順禮にうちまじり行く歸雁かな　嵐雪

禅門の革足袋おろす十夜哉　許六

かくのごとく一句の漢語を二つつかひたるあり。とがむる人あらば答へよ。元日　灌佛　名月　臘八　皆題さへ漢語なり。好みてせよといふにはあらねど、深夜　雨後　蝸牛　馬上などの類、句に任せていふべし。

## 和歌の言葉をつかふ事

紙ぎぬのぬるとも折ん雨の花

蓬生に鶏追んむしの聲　玄梅

わびしらに貝吹僧よ閑子鳥　其角

帷子や舟に髪ゆふ玉くしげ　凉菟

炉びらきの日をしめし野の冬菜哉　嵐雪

和哥の言葉を嫌ふといふはあやまり也。古哲曰、言葉をもて俳諧とせず。意をもて俳諧とす。故に好みてせよと

いふにはあらねど、萬葉およびすべて古書を用るは風雅の力也。風情也。一句俳諧有時、いかなる和哥の言葉をもつかふべし。和哥の言葉、俳諧のことばとて二ツはなし。日の本のことば也。

### 五文字の事

荒海や佐渡へ横たふ天の川

十二文字にて濟たる句也。いさゝかも有やうの五文字置たらんはくはし過る也。無用の五文字はもつとも論なし。

千とせふる松も小松となりにけり
大原山の雪のあけぼの

此哥、雪の深さよとあらば云きりてせんなしとなり。

艸の葉や足の折れたるきり／＼す

まどはゞ此句、はかなしやなどゝあらば、云切りて詮なかるべし。此こゝろあながち五文字にかぎらじなれど、有用にして無用、無用にして有用の言葉を深くおもふべし。

### 字あまりの事



芭蕉暴風して盥に雨を聞夜哉

牡丹芳しく水に包める匂ひかな　莚支

たち葉浮葉此蓮風情過たらん　素堂

わづかに一字餘りても吟ずるに苦しきは、風雅のうへの病なり。

ありそ海の波間かきわけてかづく海人の
いきもつきあへずものをこそおもへ

たとへば、朧月や　あやめかるや　吟ずるにくるし。月朧に　かるやあやめ　言葉靜まる故に吟じ安し。万通すべし。連哥に二三の字餘りをよしとして、二四の字余りを嫌ふ。しかはあれど雲おり／＼　の類二四の字余りとて吟じ安きは苦しからず。且いふ、切字に苦しみて文字をあますなどいふにや及ぶ。

### 字を余して句の意を深くする事

砧打て我に聞せよや坊が妻

よしのゝ山の吟なり。

みよしのゝ山の秋風さよ更て
ふるさと寒く衣打なり

此哥を深く感じ給ひ、我に聞せよとせちに申されし也。
や、はもとより、よに通ふ。

蟋蟀鼠の穴にて啼おはりぬ　嵐雪

啼止ぬと有べきをかく云しに子細あり。啼止みぬとありては、唯其夜のさまにして感薄し。夜毎に啼つる蟋蟀の今はなき終りぬと、暮秋の吟なるをおもふべし。

## 換骨の事

物いへは唇寒しあきの風

唇や蔓喰しあとの秋の風　許六

師弟おしならべて、唇の秋風是にて換骨を知るべし。

朱簾暮捲西山雨

朱簾乍捲西山雨

又

鹽鯛の歯ぐきもさむし魚の店

聲かれて猿の歯白し峰の月　其角

其角曰、此後に轉して猫の歯白しとも、海人の歯いやしともあれ、發句の一體備りたらんには、等類の難ゆめゆめ有べからず。一句の骨を得てあまき味ひを好べからず。

## 俤

蝸牛角ふり分よ須磨明石

卯の花やいづれの御所の加茂詣　其角

いかのぼりきれて野守の鏡哉　工迪

軍書・物語すべて古代の事をおもひあはするなり。又いふ、古人の名を句中にいはんとならば、正に對するやうにはせぬがよし。

義仲の寐覺の夢か秋悲し

是火打山の吟なり。

祖翁に景清の句有といへども、こや延寶の頃の句也。すべて延寶天和の頃の句は正風に用ひず。貞享より元祿の句をことごとく證とすべし。

## いろたて

卯花やくらき柳の及ごし

身ぶるひに雪間の雉子の綠哉　徹士

雪のある山を柳の見こし哉　支考

五色はさらなり。烏に霜も白黒の色たて也。

詩にも　江碧鳥逾白　山青花欲然

歌にも　都をばまだ青葉にてみしかども　紅葉ちりしく白川の關

いろたての句あまり懸り過たるは賤し。白然の色たてをよしとす。

### 名所をおもひ合する所

口切に堺の庭ぞなつかしき　素牛

つもる雪越の友人朝寐せん

喰積や木曾の匂ひの檜もの　袋水

其所にいたらずしては、かくのごとく思ひ合せていふべし。東海道の一筋もしらざる人、住吉の汐干、宇治の螢、正に云出したらんは興さめぬべし。

### 名所にのぞみての句

菊の香や奈良には古き佛達

朝櫻よし野ふかしや夕ざくら　去來

白露やゆびにはさまる宇都の山　肅山

武藏野や幾所にもみるしぐれ　舟泉

又高野にて

二上や榾からげし鷹の露　其角

父母のしきりに戀し雉子の聲

伏見の夜船

### 名所をつかふ事

五月雨にかくれぬ物や瀨田の橋

木母寺に歌の會あり今日の月　其角

下京や雪つむ上の夜の雪　凡兆

かくのごとく五月雨に隱るべきものゝかくれざる瀨田を稱し、名月に哥讀むべき所を木母寺に定め、雪の上の夜の雨を下京に定める皆名所を遣ひたる也。いさゝかも名所につかはるゝ事あるべからず。たとへば華の句を案ずるに吉野・初瀨をかり、月の句を案ずるに姨捨・冇山をかり用るはせんなき事也。

ぼんのくぼに雁落かゝる霜夜哉　路通

瀬田にて

我駒の脊あらためん橋の雪　湖春

當麻寺曼陀羅を拜みて

更衣みづからおらぬ罪深し　園女

すみだ川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎喰ひに都鳥　貞室

是名所に臨んで其名所を句中にあらはさゞるなり。ます〱他の名所にまぎれざるやうにすべし。奈良に鹿、隅田川に都鳥など、景物を句中に結ぶも一法也と知るべし。

## 名所に臨て雜の句の事

歩行ならば杖突坂を落馬哉

哥書よりも軍書に悲しよしの山　支考

名所に臨て雜の句いはんとならば、春は春、秋は秋、句中に自然と春・秋なるやうにすべし。尤好みて雜の句せよといふにはあらず。

朝よさを誰松嶋ぞかたごゝろ

松しま行脚思ひし前のとしの秋の吟なり。

## 古事古語古歌を遣ふ事

知足亭新居の賀に

よき家や雀よろこぶ脊戸の粟

淮南子説林曰　大厦成而燕雀相賀

さびしさや花のあたりの翌檜

撰集抄、中務元輔扇の歌二首讀み給ふ處に、此ふたつの扇のうた勝にさだまりたれば、其外ゆかしかりし扇の哥どもに、花のあたりの深山木の心ちして、心さむる人もなかりけりと。

あか〱と日はつれなくも秋の風

秋風吹斷暮　古道行人稀
登此微陽色　射我霜中衣

今宵誰よし野ゝ月も十六里

伊賀のみのむし庵の吟也。伊賀の上野よりよし野山へ十六里也。

今宵誰篠吹く風に身たしめて
よしのゝ嶽の月をみるらん

白雲に鳥の遠さよかずは雁　其角

古今　しら雲に羽れ打かはし飛雁の
かづさへ見ゆる秋の夜の月

文もなし口上もなし粽五把　嵐雪

清女枕艸紙に、五寸ばかりの卯槌二つたうづへのさま
にかしら包などして、山たち・花ひかげ・山すげなど
うつくしげに飾りて御文はなし。下略　齋院より定子居へ參
らせ給ひし也。

春立や今朝の雀の額つき　一髪

おなじ艸紙に、鳥むしのひたい少さく飛あがりていさ
よしさあり。

袖につまに露わけ衣月いくつ　素堂

一水一月　千水千月

## 名所に臨みて古事古哥をおもひ合する事

躶にはまだきさらぎの嵐哉

増賀聖の大悟を思ひ合せ給ひし句也。此句のはし書に、

二月十七日神路山を出る時、西行の涙をしたひ増賀の信
を悲しむとあり。

象潟や雨に西施が合歡の花

若採西湖比西施　淡粧濃沫兩相宜

卯の花をかざしに關のはれ着哉　曾良

古人冠を正さ有をおもひ合せし也

黑塚や鬼籠るとも一凉み　維舟

大和物語に　みちのくの安達が原の黑塚に
鬼こもれりさ聞はまことさ歟

不二にそふて三月七日八日かな　信德

旦出芙蓉下　夕宿芙蓉下
宿々既三宿　未出芙蓉下

此句は信德の句より後也と。此句古きをつかひたるには
あらねど信德のほまれなるべし。

## 神祇

尊とさに皆おしあひぬ御迁宮

手を打て御靈祭らん時鳥　凉葉

白雨や面もふらず御輿舁　諷竹
神慮かくそと梅の直幹哉　風和
神風の雨こそ匂へ夏の草　除風

神祇奉納に五音相通の事などいへど、正風に用なし。唯句讃は心付べし。

春たつやけさ　露清しぬれて　梅が香やむかし

## 釋教

觀音のいらかみやりつ花の雲
夜あらしも花のうへ來る御山哉　粲貞
我日にも師走八日の空寒し　杉風
とにひゞく涅槃の暮の鐘の聲　乙由
華摘や先行く人は兒の母　其角

奉納の時に句讃、神祇にひとしと知るべし。

## 戀

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ
秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜哉　荷兮

蚊屋を出て寐顔又みる別れ哉　長虹
朝櫻寐髪にかゝる匂ひかな　山川
藤やたゞ君にふれたるむすぼゝれ　園女

身の程〳〵を案ずべし。和哥には題詠有て、偽として戀の哥もよむなれど俳諧に用なし。若し據所なき事あらば誰にかはりてと端書有べし。

## 旅

年の暮笠着て草鞋はきながら
草枕蕣うつ人時とはん　山川
馬の尾に陽炎のるや萱はたご　惟然
旅の秋いづれも聞や暮の鐘　横几
つちの火の哀も見つゝ秋の暮　助叟

旅の句は細くからびて作るべし。戀はさらなり、古郷をおもふなど尤本情たるべし。去來叟の道の記の奥書に、

にしひがし哀さおなじ秋の暮

かく申されしにても知るべし。

## 贈答

己白亭にて

舎りせんあかざの杖に成る日迄

越後國醫師何某が許にて

藥欄にいづれの花を艸枕

嵯峨落柿舍にて 二句

破れ垣やわざと鹿の子の通ひ道　曾良

豆植る畑も木部屋も名所かな　凡兆

閑人を尋て

鳩眠る冬木ながらや桔槹　言水

翁に逢ひ奉て

幾落葉それほど袖もほころびず　荷兮

素堂亭にて

隱れ家やよめ菜の中に殘る菊　嵐雪

其角をしたひて

木枯やいつ敲けども君が門　山川

翁をやどして

面白ふ松笠もへよ薄月夜　士芳



洩らぬ程けふは時雨よ艸の庵　斜影

人に問はれて

此外にみする物なし炭瓢　木因

門人乙州に問はれて

艸の戸や日暮てくれし菊の酒

膳所の草庵を人々にとはれて

あられせよ網代の氷魚を煮て出さん

**贈答の句に親疎あり。又は貴人老人へ對して下知の言葉用捨の事。**

見よ　ゆけ　見給へや　ゆかれよ　此さかひをよく辨へ知るべし。且、鳥獸草木にたとふとも、正に其人を鳥獸艸木になす事なかれ。たとへば年賀に

猶幾代長濱あゆめ春の鶴

かくいふ時は正に鶴になせし也。

鶴とともに長濱歩行め春の風

かくいふ時は鶴に比して祝言よくとゝのふ。贈答の句す**べて此心得なり。餞別　留別　哀傷　追悼　祝ともにおなじ。**

## 餞別

膳所におもむく人を送る

獺の祭見て來よ瀬田のおく

翁の旅立給ふを送る　二句

箱根山時雨なき日を願ひけり　山之

ころしもや大井の嵐佐屋の霜　蚊足

友なる孤屋をおくる

雲霞どこまで行も同じ事　野坡

髪そりにさてまかる友を送る

囘雨たぶさ見送る朝月夜　卓袋

自他・親疎の辨へをおもふべし。

## 留別

川崎にて人々に分るゝに

麥の穗をちからにつかむ別かな

旅だつ曉

よく咲て人に見られよ宿の菊　巴風

道にて翁に別れ奉るとて

行〳〵てたふれ臥とも萩の露（原註イニ原）　曾良

九月朔日旅だちけるに

菊の日と月見いづこの泊せん　枳風

越より歸るに

おもふさまふるまはれけり越の雪　凉菟

自他・親疎の辨へをおもふべし。

## 哀傷

嵐蘭身まかりけるに

秋風におれて悲しや桑の杖

其角が母を失ひしに

卯の花も母なき宿ぞ冷じき

翁の送葬に

なきがらを笠にかくすや枯尾華　其角

おなじ葬中　三句

何事も涙になりぬ冬の庵　槐市

忘れえぬ空も十夜の涙哉　去來

爐開きになき人來ませ図雨　枳風

翁のなくなり給ひしよし告こしけるに

聞忌に籠る霜夜の恨み哉　北枝

妻に別れし頃

寐られずや片へ冷たる北おろし　野水

人の妻なくなりしをいたみて

水無月の桐の一葉と思ふべし　去來

母を失ひし頃

けふの秋いつ逢事ぞ親にまで　鬼貫

子を失ひし頃

似た顏のあらば出て見む一踊　落梧

母におくれし子を憐む

稚子や獨めし喰ふ秋の暮　尙白

孫女を失ひて

宿を出て雛忘るれば桃の花　猿雖

友なる呂丸が葬送に

ふみきやす雫も名殘の野邊送　去來

野送や膝がくつきて朧月　史邦

友なる嵐蘭をいたむ

かたみにはいづれの艸ぞ墓の露　仝

なきものゝ蚊屋ふるひて

あだし世の蚊にむせかへる涙かな　桐雨

## 追悼

なき人の小袖もいまや土用干　鬼貫

うたてなや櫻をみれば咲にけり　鬼貫

鐘さへて今更はやき月日かな　知足

翁の一周忌にぐは像を畫て

髮の霜無言の時の姿かな　許六

母の年回に墓參りして

花水にうつしかへたる茂り哉　其角

丈艸の墓にて

無き名聞く春や三とせの生別れ　去來

青亞が追悼に

乳のみ子に世をわたしたる師走かな　尙白

追悼・哀傷ともに親疎・自他の辨へをおもふべし。

## 懐旧

世にふるもさらに宗祇の時雨哉

手づから雨のわび笠を張てとはし書あり。

新古今に　世にふるはくるしきものを槇の戸に
やすくも過るむら時雨かな

宗祇の發句に

世にふるもさらに時雨のやどり哉

是をおもひあはされしなるべし。

芭蕉庵の古きをさひて

菫艸小鍋洗ひしあとやこれ　曲翠

母を夢に見て

蓮の實を含みしは夢の乳房哉　風洗

古戰場

首塚や人ものほらす夏わらび　山店

霜月十五日懐舊のこゝろを

帶解も花橘のむかしかな　其角

## 述懐

此秋は何にとし寄る雲に鳥

遊ぶ事三十迄ぞ夜半の秋　八橋

母曾月と共に三井寺へ詣て

兄弟といふぞ親子が老の秋　乙州

葉がくれて見ても蕣の浮世哉　野坡

古足袋の四十に足を踏こみぬ　嵐雪

## 畫讃

髑髏の畫に

稻妻や顔のところがすゝきの穂

源氏の畫に

傘持は月におくるゝ姿かな　其角

卒都婆小町の畫に

霜けふり卒都婆に寄るはくるしい歟　ほと

遊女の繪に

殿方をおもふて居るぞ闇の月　鬼貫

人丸の畫に

月花の鏡なりけり御年ばへ　才麿

三夕の畫に

和哥寄槇たつ山のゆふべ哉　其角
秋は此法師姿のゆふべ哉　宗因
舟あぶる苫屋の秋のゆふべ哉　嵐雪

樂器の畫に

青海や太皷定まる春の聲　素堂
散花や鳥もおどろく琴の塵
けしからぬ桐の一葉や笛の聲　其角

畫讃は他の句に作るべし。

我ものとおもへば輕し笠の雪

此句何某の集に東坡の讃とて出せり。自の句にしていかで讃なるべきや。笠重呉天雪といへる語を反轉せし其角叟が句なり。又案山子の畫讃に

あのやうに嚢も秋ふる案山子哉

まさに筆とるものゆへに、あのやうにといふべきやうなし。此やうにとあらば讃なるべし。

## 發句体をわかつ事

### はなやかなる句

黄鳥や柳のうしろ藪の前
名月や疊のうへに松の影　其角

### けしきことなる句

春なれや名もなき山の薄霞
しら／＼と霞はなれぬ出城かな　沾蓬

### ふとくたくましき句

傘におし分見たる柳かな
湖の水增りけり五月雨　去來

### 細くからびたる句

藥のむさらでも霜の枕かな
かた炭の崩れ哉身のなる行衛　湖春

### 艶にやさしき句

山路來て何やら床し菫草
ひとつ葉や一葉／＼に今朝の霜　支考

### ・丈夫なる句

松葉を焚て手拭あぶる寒さ哉
鰤の尾を提て立けり年の暮　正秀

### 一句のおかしみ

むかし聞け秩父どのさへ角力取
何事ぞ花みる人の長刀　去來

## 詩のごとくなる句

艪の聲波を打て腸氷る夜や涙
風妖てすゝきに夜の雨すごし　李下

此句はみなし栗の頃の句にして、都て延寶天和の句は正風に用ひずといへ共、是等の句は格別としるべし。

## 一句のしほり

蛤(ハマグリ)の生る甲斐あり年の暮
我もらし新酒は人のさめ安き　嵐雪

いける甲斐ありのしほり、又新酒の醒め安き人のさめやすきなど、是はおのづからにして一句の栞幸也と、祖翁も申されし也。始より女郎花の花といふ字になづみて栞じるは惡し、猶下卷に委しくす。

## 一作ある句

床に來て鼾に入るやきりぐ＼す
馬しかる聲も枯野の嵐かな　曲翠

作にすゝむは惡しゝ、一作は一句のちからたるべし。猶下卷に委しくす。

## 手を離れたる句

春の夜は櫻に明て仕廻けり
蚊柱に夢の浮橋かゝるなり　其角

なりけりと云は、發句百句一句の格なりと知るべし。是等の句は深く思ひ入て其上發明せし句也。よの常の句を也鬼といひ放つ時は、無心の物に魂を入るの案じ方を大ふ。万象をよんで自己とすべし。自己をはこんで万象とする事なかれ。

又

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉

むし干や猫の爪とぐ因果經　西吟

又

辛崎の松は花より朧にて

去來曰、御興感偶にして發句たる事疑なし。第三は句作にわたる。若句作にわたらば第三に落入べし。其角曰、近江國にて此句を人の論ぜし時、にては哉に徹するのひゞきある故に、哉留の發句に、にて留の第三を嫌ふと是にて知るべしと云ければ、祖翁の曰、一句の論においては然るべし。我方寸のうへに介別なし。

さゞ波やまのゝ入江に駒とめて
ひらの高根に花をみるかな

此哥を吟じ給ひ、たゞ眼前なるはと申されたり。

## 回文

まつの木の雪やはやきゆ軒のつま　卜宅
なかしつゝ波白しみなつゝし哉　氷花

## 物名

うつゝならん時日はおしとびしきかり　菊峰
（鳶　鴫　雁）
鴨とばでたゞ巣にやせし水のよど　立吟
（加茂　鳥羽　糺　八瀬　小野　淀）

回文・物名好みてする事にはあらねど、かくのごとく古人の句あればせざる事にもあらず。すべて祖翁及古哲のせし事を用るは我俳諧也。古きを改る事なかれ。



一卷の句數二百十九、中に名をはぶきたるはみな祖翁の句にして、其余は祖翁相見古哲の句なり。句々能味ひて正風の眞意を知るべし。

俳諧寂栞卷之上　終

# 俳諧寂栞　巻之中

## 脇の事

脇は字眼を定めて後趣向を作るべし。字眼を礎に置くならひなれども、句意とゝのふ時は上下の論なし。たとはゞ發句に云殘せし事を脇に云なり。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
　鍬かたげ行霧の遠里

是其場を字眼に定めしなり。

淡川集
刈株や水田の上の秋の雲
　暮かゝる日に代かゆる鴈

是は時分を字眼に定めしなり。

炭俵
梅が香にのつと日の出る山路哉
　處々に雉子の啼たつ

是發句に場も時分も出たる故に、時節を合せたるなり。雉子の啼たつべき梅の日の出をおもふべし。

となみ山
こがらしや沖より寒き山のきれ
　高き所に生る冬麥

是打添の脇なり。たとはゞ家といふ句に、軒垣など附るを打そへといふなり。此心にて舟といふに海川と附るは惡し。海川といふに船と附るはよし。古人曰、芳野山に花、姨捨山に月と附るはよし。花によしの、月に姨捨と附るは前句の噂なりとの脇のみならずすべて此心得なり。

いつをむかし
ひとつ松此處より浦の雪
　鴨こす峰を入かたの月

是てり合せの脇なり。浦・峰とてり合せし也。たとはゞ海といふ句に山と一目に見ゆるやうにすべし。

あら野
郭公待ぬ心のおりもあり
　雨の若葉にたてる戸の口

是心附の脇なり。

雲に鳥
馬士の手に火を摑けり秋の霜
　梢は柹の落つくす頃

是頃留なり。頃の字をかく礎に置ならひなれども、發句の頃を定る時は上下の論なし。

春の日
蛙のみ聞てゆゝしき寐覺かな
　額にあたる春雨の洩ッ

是自の句に自の脇なり。かゝる脇句、平句に落入り安し。心得有べし。

ひさご
色〳〵の名もむづかしや春の草
　うたれて蝶の夢はさめぬる

是手には留なり。一句の仕立心得有べし。脇躰そなはりたる時は手にはとて別に子細はあらねど、初心の及ざる處と知るべし。

冬の日
霜月や鸛のつく〴〵並び居て
　冬の朝日の哀なりけり

是格をはづしたる脇なり。ひそかにいふ、發句の躰を受けられし成べし。此第三に

　樫檜山家の躰を木の葉降

と附たり。此句を證として脇の手には留の第三には、是非五文字かなをすべしといふ輩あり。悪しと云には有らねど、唯此第三を證とのみするはせまし。芭蕉庵小文庫に餞別の句とて

新麥はわざとすゝめぬ首途哉
　まだ合蚊屋の空遙かなり
午時の過て淋しき牧の野に

樫檜の第三は發句・脇ともに、てには留なれば也。句ゝ考て知るべし。

深川集
梟の啼止む岨の若菜かな
　朧の月の椿つら〳〵

是重ね字にて留たる脇なり。重ね字は文字にひとし。尤此つら〳〵は列ゝと書。深川の庵にて

あら野
雁かねも靜に聞ばからびずや
　酒しゐ習ふ此ごろの月

是違ひ附の脇なり。たとはゞ客の自の句に、亭主の自の句を附ては、違附にして附ゞといへども時宜の法にして、すべて贈答の脇は違附を免す格としるべし。

宇陀法師
寒菊の隣もありやいけ大根
　冬さしこもる北窓の煤

是客發句・亭主脇なり。

笈日記
霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申

古人かやうの夜の木がらし

亭主發句・客脇なり。すべて此のごとく、贈答の脇は皆違付也。

笈日記
しるべしてみせばや美濃の田植哥
　笠あらんためん不破の五月雨

是國の名に其國の名所を付たる例なり。ひそかにいふ、不破にみのと附るは惡し。

冬の日
炭賣の己が妻こそ黑からめ
　人の粧ひを鏡研寒

いつをむかし
鴨啼や弓矢を捨て十余年
　刄ほそらぬ霜の小刀

是等の事擧てかぞへがたし。其時〻の風流にして初心の證とする事なかれ。自得のうへはさま〴〵有べし。

## 第三の事

たけ高く作るべし。發句十分の位、脇五分のくらゐ、第三七分の位也とあるにて知るべし。故に、にて留　に留　らん留のたぐひ一句の丈ヶを附るなり。

冬の日
齒朶の葉を初狩人の矢に負て
冬の日
　野菊まで尋る蝶の羽おれて
こなみ山
來る春の用意するらん木具提て
猿みの
二番草取もはたさず穗に出て
續さる
大根のそだゝぬ土にふしくれて
あら野
引捨し車は琵琶のかた木にて

是、にて留たり。發句哉留の時、第三、にて留嫌ふ。にては哉に徹するのひゞきある故なり。

　新疊敷ならしたる月影に
　烏賊鱠春のものとて白妙に

是、に留也。かくのごとく上の五文字に、てにはのなきものを居て、下よりも讀返さるゝやうにすべし。月影に敷ならしたる新疊、此心得なり。さなき時は云殘して二句一意の心になる、それを嫌なり。

小文庫
午時の過て淋しき牧の野に

此句は上に、てには有れど、牧の野に馬時過て淋しきと、讀返さるゝやうにせし也。是に留也。

あら野
藤袴誰が窮屈にめでつらん

深川集　水せきて晝寐の石やなをすらん

是らん留なり。らん留はかくのごとく疑の言葉を入べし。や　誰か　誰ソ　たれ　なに　なぞ　いかに　いづれ　いづ　いく　かは　かも　さて　いゝが　などのたぐひなり。

あら野　夕霞染ものとりて歸るらん

此第三に疑なけれど、染物取てやのやの字を句中に込たり。

久かたのひかり長閑けき春の日に
しづこゝろなく花の散らん

しづ心なくいかで花のちるらんと、いかでの言葉を添て讀べしとは古今の傳に有よし。

深川集　山雀の笠にぬふべき草もなし

是、もたし留也。

さるみの　雲雀啼小田に土もつ頃なれや

是、たれや留也。

今の日　花荊蕀馬骨の霜に咲かへり
句兄弟　荷の跡にひとりづゝ負ふ遠干潟



是五文字かなの第三也。手にはの入らぬ五文字を置事と知るべし。簟　時鳥　机　滌　朝朗　などのたぐひと知るべし。尤其心得有べし。假枕　假御殿　假の枕　假の御殿などてにはの入は惡し。一理萬通すべし。

ひさご　背ふとのわやくに啼し春の空

かく始よりてにはの入たるはよし。初めに云如く七分の位有事を心得て案ずべし。四句目句作をば輕ふせよといふは、發句・脇・第三と位をもつが故也。折はし・擧句の事尤心あるべし。

## こほれ月の事

春の日　松風にたふれぬ程の酒の醉
賣殘したる虫はなつ月

炭だはら　蜀黍は殘らず風に吹たふれ
馬場の喧嘩の跡にすむ月

かくの如く月といふ字を礎に置べし。尤虫はなつ月、跡にすむ月と云如し。云切て月といふ字を置習ひなり。

猿みの　醤油ねさせてしばし月見る

といふこぼれ月も格をはづしたるなり。古式の法を守りて其上の事と知るべし。

## 他季移りの事

句兄弟
きほひ来る神輿洗の人に人
　露ふく風や公家のあみ笠

本須歌仙
名所のおかしき小野の炭俵
　きぬた打るゝ尼たちが家

たとへば蝶は春季なれど、夏も秋も飛かふものなれば其心得にて作る也。露・扇のたぐひ勿論なり。

## 花の定座の前に秋季のかゝはりたる時の事

小文庫
　袖にかなぐる前髪の露
咲花に二腰さして無人足

ひさご
　雁なく方や白子若まつ
千部よむ花の盛の一新田

他季うつりのおもきにて前句心有るべし。たとへば春秋二季にわたる露　鴈　蝶　茶入　藪入　出代　彼岸　釋奠（八上ノ丁ノ日孔子并十哲ノ影ヲ祭ル孔子ノ祭トモ云）などの類勿論也。

深川集
洗足に客と名のつく寒さ哉
　綿舘ならぶ冬むきの里
鶺鴒階子の錢を傳ひ来て
　春は其儘七種もたつ
月の色氷ものこる小鮒賣
　築地のどかに典薬の駕
相國寺牡丹の花のさかりにて
　椀の蓋とる蕗に竹の子

かくのごとく八句の間に雑の句なきにて知るべし。尤好てせよといふにあらねど心得置べし。

## 二句一意の事

鉄炮を今宵かぎりとおもへども
　妻のあぐみし痩子三人

春の日
秋蝉の売に聲聞ク静さは
　藤の實傳ふ雫ほつちり

續みなし栗　瓦葺おりよと急ぐ晩鐘に
　　神鳴つべき雲をながめて

二句一意は前句に云殘したる物から、句作を近く付べし。さなくては附ぬものなり。

### 佛

春の日　咲わけの菊にはおしき白露ぞ
　　秋の和名にかゝる順

あらの　恨みたる涙眼にとゞまりて
　　靜御前に舞をすゝめる

深川集　聞へ能加賀の藏元ゆるされて
　　夫婦かたむく木菴の禪

又

句解百員　敵寄せ來る村松の聲
　　有明に梨子打烏帽子着たりけり

春の日　須磨寺に汗の帷子脱かへむ
　　各〳〵涙笛をいたゞく

深川集　山伏を切て掛たる關の前
　　錏持ねばならぬ世の中

かゝるしたしき附も、一卷のかざりと思ふべし。

### 大勢の中の人を定る事

ひさご　入込に諏訪の涌湯の夕間暮
　　中にもせいの高き山伏

續みなし栗　つは者雇ふ三石の粟
　　先ひとり花盜人をからめ置

かく作らねば附ぬと知るべし。

### 戀の句の事

冬の日　忍ぶ間の業とて雛を作居る
　　命婦の君より米なんどこす

春の日　傾城乳を隱すあかつき
　　霧拂ふ鏡に人の影うつり

あらの　衣〳〵やあまりかほそくあでやかに
　　風引給ふ聲の美し

ひさご　文書クほどの力さへなき

羅に日をいとはるゝ御かたち

炭だはら
　帯ときながら居風呂を待ッ
　君來ねばこはれ次第の家となり

猿みの
　大膽におもひくづれぬ戀をして
　身は濡帋の取處なき

深川集
　ふすまつかんで洗ふ油手
　かけ乞に戀の心を持せばや

戀の句にあけたる此七條を我家に七部集といふ。他門にて深川集をぬき、續さるみのを入レて七部集といふなり。續さるみのは祖翁滅後梓行の集なり。戀の句の事言葉をもて戀とせず。一句の戀、二句の間の戀をもて戀とす。他門には女・聟・娘のたぐひ皆戀なりとす。戀にあらずといふにはあらねど一句の意、二句の間、戀なき時は戀とせず。證句の趣に習ひて知るべし。

## 名所に名所を附る事

冬の日
　加茂川や胡摩千代祭漸近み
　岩倉の聟なつかしの頃

是、思ひ合せし也。おもひ合する時は日の本の名所に、もろこしの名所も附らるゝ也。

宇陀法師
　此度は母の願ひの身延山
　そこくらの湯を下に見おろす

是は路次からのさま也。路次からの事いはんには、たとへば伊勢參りといふ句に、其道くだりの事は何にても附る也。前句を能くさばきて附べし。

深川集
　深艸は女子斗の下屋敷
　伏見の戀を晩鐘に聞ク

是はおしならべて付る也。一目に見るやうにすべし。

同
　はつ花に伊勢のあはびの取初て
　樫若やぐ宮川の上

是は國名に其國の名所を付たる也。名所に其國の名を付るは心有べし。

## 聯句語路の扱ひ三句轉じの事

猿みの
　稻の葉延のちからなき風
　發心のはじめに越る鈴鹿山

内藏頭かと呼聲はたぞ

句解百員
筑紫まで人の娘を召連て
　彌勒の堂におもひ打ふし
待宵の鐘は墮たる草の中

花つみ
　鳴子驚く片藪の陰
盗人につれ添ふ妹が身を泣て
　祈も盡きぬ關〳〵の神

貝ふたぎ
いかやうな戀もしつべき薄みぞれ
　琵琶を抱て出る駕もの
晨明は毘沙門堂の小方丈

あらの員外
家なくて服紗に包む十寸鏡
　物おもひ居る巫女の物いひ
人去ていまだ御座の匂ひける

今の日
岡崎や矢矧の橋の長きかな
　庄屋の松を讀て送りぬ
捨し子は柴刈丈ヶに延つらん

みなしぐり
花に泣美女盃を江に投て
　なびく歟とく歟柳もどかし

世は蝶と遁世おもひ定めける

續みなしぐり
月冴て砧の槌のつめたしや
　人は風引寐覺なるべし
傾城の淋しがる顏哀なり

萩の露
獨りたゞ身を遊して鳴子引
　蚊遣り種干す秋に成けり
有明もすくなき鯖のきざみもの

其帒
霧の外の鐘をへだつる松の聲
　呑にはさまる石原の露
入る月に薄粧ひたる武者一人

となみ山
此宿をわめいて通る鮎のすし
　青田うねりて夕立の風
平目なる石を敷たる行水場

ひさご
　順禮死る道の陽炎
何よりも蝶の現ぞ哀なる
　文かく程のちからさへなき

春の日
うつかりと麥なぐる家に連待て
　顏懷に梓きゝいる

黒髪をたばぬる程に切殘し
（句兄弟）足もとの菜種は伏して罌粟の花
　茶を煮て連す八瀬の學寮
下張の反古見へすく枕して
（小文庫）蓬生に戀をやめたる男ぶり
　濕の吹出のかゆき南ミ氣
丹波から便もなくて啼く鳥
（いつを昔）盃付て鶴はなちやる
嬉しくも顔見合する簾の間
　又手枕を入かへて寐る
（住日記）しほ〳〵と虫歯押ゆる眉の際
　結縁經を讀終るまで
哀れさは無言の時の杜宇
（三とせ草）朝起も佛の弟子になり初て
　口に幾度も手を洗ふ癖
恨みても吉野の御所の菅蓮
（宇陀法師）かた作の妻を取込十二ぶん
　やがて可睡の江湖はじまる

風呂敷にきせるさしたる草枕
（續さるみの）あらこと〴〵し長櫃の萩
川越しの歩にさゝれ行秋の雨
　ねぶといたがる顔のきたなさ
（炭俵）下京は宇治の糞船さし連て
　坊主の着たる袋はおかしき
足輕の子守して居る八下り
（深川集）ふたりの柱杖跡先につく
乘懸の挑灯しめす朝おろし
　汐さしかゝる星川の橋

語路のあつかひ、三句の轉じはさら也。是等の趣にならひて一句〳〵に風情をいふべし。且いふ、二句の間の余情を専一とすべし。

## 聯句自他の事

硯にむかひすだれ卷つゝ　自
梨の花咲揃たる夕小雨　時分
雉子におどろく女一むれ　他

迎火に尼が涙やかゝるらん　他
　松風落て水の行すゑ　其場
さつぱりと醉の醒たる明屋敷　自

かくのごとく中に人情なき句有時は、自他をふり分て句作すべし。

　並木の露のはら／＼と落　其場
乞食の子をかゝへたる朝の月　他
　余所目も更に鍛冶の勢ひ　他 向附
いかに苦しき赤枯の髮　乞食のあしらい
ものゝ哀れも盆の名殘ぞ　自 向附

此三句の外附方なし。

落瓦嵐は松に靜まりて　其場
　皆忘れたる明がたの夢　自
着るものゝ手ざはりもはや秋深み　自
看病の粥吹さます小くらがり　他

此二句の外附方なし。

ひとつゞゝ手本囉（モラ）ひて粽ゆひ　他
　しかる局に笑ふ局に　他 向附

跡や先裾に莚の下向道　他 局のあしらい
染ぎぬをおもひの儘に賣付し　自 向附

此二句の外附方なし。

　鯨突一二の銛を爭ひて　他
　無分別なる顏に雪ふる　他 あしらい
願はしや我も浮世をあの如く　自 向附

此外附方なし。

　藥のなづむ病ひつれなき　自
人ごともいはで日中の神垣守　他
　こぼれ松葉を手まさぐり居る　御垣守のあしらい
ほろ／＼落る家根葺の臺　他 向附

此二つの外附方なし。

新しき草鞋に旅のあらたまり　自
　命なりけり洛外の春　自
見よかしに櫻が本の女房達　他

此外附方なし。

　卷藁に弟も向ふ手束弓　他
うき世の中も賴母しき哉　自

西國を打は都も旅なれや　自

此外附方なし。是自他のわかち十四体也。此外附方なしとは人情をわかち附るに、外に附方なしといふ事也。人情打つゞきたる時は、時分　時節　天相　其場　のあしらひ。此五句をもて附べし。

### 時分・晝夜・旦暮の事

時分　けふの日もはや八下り也

時節　置わたしたる朝草の露

天相　雨とふ雲にあらし催す

其場　杭四五本を門の馬繫

其場のあしらい　赤く煤けし行燈のさや

人情なき句續くは惡し。轉ぜざる故なり。人情有句を人情なき句にてはさむは惡し。是も轉ぜざるゆへなり。人倫・人情同じさばきなり。人倫は二句去、二句續く也。人情は何句もつゞく。唯自他のわかちなり。人倫とは　鰹賣　關守　人情とは　鰹うる　關守りて　此心にて一理萬通すべし。

### 附句をもて前句の自他をさばく事

朝まだき狩弓狩矢持添て

うしろ姿もはたち內外

かく作る時は前句、他の句に成也。

つめたかりけり步行わたり川

かく作る時は前句、自の句に成也。かやう成る自にも他にもなる前句の出たる時は、三句を見はからひて前句の自他をさばくべし。惑ふべからず。古哲曰、聯句は前念に戻るまじ。又曰前句をうごかすべし。又云、有用にして無用、無用にして有用の案じ方專らたるべし。是等の趣を能く辨へて句ゝ風情を盡すべし。

俳諧寂栞卷之中　終

# 俳諧寂栞　卷之下

### 類ひ有べき發句の事

諸流に對して言にあらず。我輩の愼みなれば正風のまことを得んとおもふもの、句毎にたくらべて知るべし。

### 其一　情といふ事

明日の事おもひ出す迄涼みけり

星合や何に付ても人心

上卷にも云しごとく是等の情は己のみ聞ゆる句にして、聞人いかで嘆ずべきや。余情・通情のたぐひにあらず。

### 其二　理屈の事

ふかぬ日は歸帆の遲き柳かな

柴ならば腰を懸ゝんに柊うり

是も情より發句を案ずる故なり。なぜと言葉のかゝるは皆理屈なり。理屈をはなれて萬象をおもひ、無レ邪の良友とすべし。

### 其三　たゞ事の句の事

精出せば氷らぬものぞ水車

餅花に折らるゝ脊戸の柳哉

斯案たる所も、見なしたる所もなければ只事なり。古人曰、あはしき所に妙有を發句といふ。自然の句と只事の句、似通ひて殊の外たがひなり。能く辨へ知るべし。

夕暮に木の葉散込入江かな

是も只事なり。猿啼て木の葉散込む入江かな　とあらば夕暮はもとより余情にして、猿の三聲腸を斷のおもひを起して、いかにも山おろしの風、句中の余情とやいはん。

### 其四　物に紛るゝ句の事

此道は樵夫も踏ず閑古鳥

是、苔の花にも成べし。是等の句中頭の案じ方にして、十二文字いさゝかも鳴鳩にたよりなきなり。

憂我を淋しがらせよ鳴鳩　翁

やう〳〵に出て啼く時歟鳴鳩　丈草

かよふに本情を辨へ、心を入て案ずる時は物にまぎるゝと云事なし。二句のつゞき閑子鳥なる事を知るべし。

蝶ひとつ吹れ來にけり風の筋

是もとんぼとも成べし。

色〳〵の事思ひ出す櫻かな

こや伊賀の上野、故主の殿にて申出されし祖翁の句なり。源氏に、日長くつれ〳〵なるに須磨の若木のさくらほのかに咲初め、色〳〵の事おもひ出さるゝ事多かり。かく有をおもひ合せ給ひて、何意に老木・若木の換骨、物にまぎるゝの類ひならざるをしるべし。

四時の風

春風に帶ゆるみたる寐顔哉　越人
東風吹やうけ桶並ぶ汐塚　野水
青あらし定る時や苗の色　嵐雪
日を拜む海士がふるへや初あらし　仝
あだし野や蛇のきぬふく秋の風　野童
荒れ〳〵て末は海行く暴風哉　猿雖
木がらしに二日の月の吹散る歟　荷兮

四季の雨

春雨の木下を傳ふ雫かな　翁
世の中はせはし五月の傘の下　虎角
夕立や檜木の匂ひ一しきり　及肩
ぬしは誰木綿なだるゝ秋の雨　尚白
竹賣て酒にかへばや露時雨　北枝
天地のはなしとぎるゝ時雨哉　湖春

四季の月

朧とは松の黑さに月夜かな　其角
清水の上から出たり春の月　許六
市中は物の匂ひやなつの月　凡兆
盆の月寐たかと門を敲きけり　野坡
瓦ふく家おもしろや秋の月　野水
待宵や二見へ分る道者連　其角
名月や池を廻りて夜すがら　翁
既望はわづかに闇のはじめ哉　仝
鵯の聲けふとしや後の月　一伴

此木戸や鎖のさゝれて多の月　其角

四時の雨・月・風、かやうに紛れ安きものなれば、兼て云、案じ方を能く辨へ知る時は、物に紛るゝといふ事なし。

## 其五　當季掛合未練の事

陽炎や野は若草の雨あがり

ぬるみ行ゝ水にしたがふ柳かな

無用の當季掛合するはせんなき案じ方也。句中にあらはさで、若草もかしこに、水もぬるむべき風情をいふべし。且いふ、物に紛るゝ事を苦しみて、當季を掛合せるにやおよぶ。先に云しごとく自づからなる當季の懸合せはよし。句々分別すべし。

## 其六　頭の文字へすがる未練の事

手折られて關を通るや女郎花

鷄頭や誠の鳥は根に遊ぶ

上巻にもいふごとく、おのづからなる栞は一句の仕合なり。初より女郎花の女といふ字になづみ、鷄頭の鷄といふ字になづみたるは詮なき案じ方也。和哥に專ら此言葉つゞきあれど、近く云ば言葉多きもの故に、さ云ても一首の趣とゝのふ成べし。俳諧わづかに十七言、題の文字になづみて一句の意を成す事かたし。且云、いかやうに云なすとも先人の糟粕まぬかるゝといふ事なし。

艸刈の御手はと問へば金銀花

是等の案じ方、專ら美濃・尾張に好む所にして、正風に曾て用ひず。能く分別すべし。

## 其七　平句趣向の事

鼻紙を扇に遣ふ女かな

起よとて顔に物書晝寐哉

かやうの趣向は、いかやうに云叶るとも發句にならず。平句と發句の趣向よく辨ふべし。

## 其八　句がらの事

小刀の夫より見えぬ接穂かな

云得たる様なれども、小刀のみえざるとて短冊に認る程

の風情なし。是銘〻の愼み成べし。

隣へは落ぬやうにと接穗かな

是等の句殊に恥かしき事なり。

山櫻世はむづかしき接穗かな　猿雖

かく有てこそ風流は有るなるべし。古人曰、發句云出さん毎に、砂子蒔たる短冊に認んとおもふべしと。是銘〻の愼み成べし。

子をほめて芋燒そばに旅寐哉

いと淺まし。

初雪や犬になるとも君が門

是何某、貴人の前に出て云出したる句なり。いと淺間し。

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭　翁

唯大なる庭をよし野山に比して、とく〱の庵もあらんと申され給ひし也。句〱志しをあらはすものなれば愼みおもふべし。

春の田を人にまかせて我はたゞ
花にこゝろを任せぬるかな

我里にしばしさゞまれほさゝぎす
人は初音をなぞで聞さも

和歌にもかゝる哥はあしゝとて、證歌に引れ侍る。

## 其九　故事につかはるゝ事

梅が香や是も遠くて近きもの

枕草紙、清女　遠くて近きものは、極樂と船の道と有を思ひ合せし成べし。しかはあれど是もといふ、もの字は全く故事につかはれたる也。故事に遣はれざる證句上卷に委し。

卯の花やいづれの御所の加茂詣　其角

うの花の盛りなる頃ほひ、やごとなき人の行かふをみて、清女の時鳥聞にとて、加茂詣の歸るさなる卯の花車をおもひ合せし也。是故事をつかふなり。夢〱遣はるゝ事有べからず。

## 其十　作に進む事

木枯やつくと取るゝ鐘の聲

松原へ人吹入るゝ枯野かな

人吹入るゝといふ言葉を遣はんと思ひよりし成べし。作に進む時は其作にのみ遣はれて、余情も風情も通情もなし。是等の案じ方は邪路に落入たる成べし。

### 其十一　二作三作の事

爰に又酒吸ふ玉や月今宵

月を珠といへる一作、酒すふと琥珀の盞すふといふより案じ入たる一作也。かゝる案じ方邪路の上の邪路なり。

抜はなす聲の刄や夜の雉子

同じ事也。是等の處を面白くおもふ人は、二作三作に及で發句のさまを失ふ。此句伊勢麥林叟が何を見てと五文字を置れしよし。一作はまぬかれたらんが、聲の刄といふ言葉正風にこのまず。

### 其十二　見立句の事

曲水や岩もみつ組五つくみ

鶯や岩を屛風に立ながら



かゝる所に遊ぶもの、何をもて余情になし何をもて風情となす。夢〱見立句の案じ方有べからず。是等の趣きよりさま〱の邪路に落入る也。

### 其十三　斷りなき句の事

五月雨や中にして降る十五日

幾日に云出せし句にや分らず。十五日といはんならば中にして降ると有べし。晦日に云出したらんには中にして降しとなくてはわからず。能く分別すべし。

けはひよき二日の月や初ざくら

二月二日櫻いまだ成べし。三月二日ならばはつ櫻なるべし。虚より虚に案ずる故に皆かくのごとし。虚實の事は正風の奥儀也。修して知るべし。美濃尾張に專用る支考が十論に虚實の事、支考の委しく書顯はしたれど、實に居て虚に遊ぶ。此趣を能分別して分別の外なる事を知るべし。唯に書顯はし唯にいはるゝ事ならば、何か正風の奥儀とはいはん。去來叟の遺語なり。

## 其十四　一句自他の事

夜すがらや川風つらし網代守

年ごとに雪につめたし若菜摘

かやうに網代守・若菜摘ともに他〻見たること葉なり。川風の何と十二字目にして一句とゝのふべきやうなし。あらば然るべしや。

是ほどのものに音なし今朝の雪

夜すがら降たる雪を朝起ておもひ合せたる句也。然ば音なし今朝とはつゞくべきやうなし。過去にして音なりしとあらば然るべしや。

右落て左はかゆし鹿の角

かゆしやいかに、鹿ならで知るものあらじ。かゆげ也となくては自他あはず。都て是等の句擧てかぞへがたし。皆一句の自他、手に葉のとゝのはざる故なり。和哥・連哥のことばとて別になし。日の本の手にはなれば、句〱其意をなす手にはを先とすべし。文字余る苦しきとて意をなさゞるは發句にあらず。

## 其十五　上の五文字にことはりたる句の事

出て何處へとまる鳥ぞ今朝の雪

野へ出れば馬骨の露の夕寒し

かやうのことはりたるは、いと悪しき也

行く鳥何にとまるぞ枝の雪

道野邊や馬骨に露の夕寒し

など置かへて、はじめのことはりたる五文字をおもふべし。

## 其十六　其人に應ぜざる句の事

綿線の我手に冴る夜寒かな

賤しき女の句なりと聞ゆ。綿線の音聞く旅の夜寒かなとあらんには誰が云出しても然るべきにこそ。

十貫はゞ花はまけふぞ蕗のとう

蕗のとうを賣る人の句也。世上の俳諧をみるに是等の句いと多し。本情をのぶべき俳諧成るを辨へず、唯人に聞せん、人を驚かさんと珍數事のみを工夫するゆへ、かゝ

る句出來るなり。

元日や家に讓りの太刀はかん　去來
鎧着て疲れたゝめさん土用干　仝
秋風や白木の弓に弦かけん　仝
老武者とゆびやさゝれん玉霰　仝

是去來叟の句にして、四時かゝる句の有にて、よしある武士のさまを知るべし。

鴨啼や弓矢を捨て十余年　仝

是や嵯峨の落柿舍に世を遁れし後の吟なり。

それと聞くそら耳もがな時鳥　望一

伊勢の望一の句にして盲人の常を思ふべし。

鼻紙の間にしほるゝ菫かな　園女

その女の吟にして婦人の常を思ふべし。

篝火にみれば知りたる鵜匠かな　落梧

長良川の吟にして長良川住なるを知るべし。落梧の句なり。祖翁の頓てかなしき鵜舟哉　と聞へ玉ひし時の吟なり。かゝる句旅人の言出したらんには、誰有て嘆ずべきや。知りたる鵜匠の罪を作るよと、打かこちたる殊更に哀深きなり。

散花を南無阿彌陀佛と夕哉　守武

あら野集に末期と出せり。其角叟の曰、唯一の神職にしていかで此境をにくみ給ふべき。只嘆美にして嗚呼と打おどろきたる落花なるべし。

朝顔にけふは見ゆらん我世かな　仝

又

神路山我こしかたも行末も　仝
（イ二本　しかたも又行末も神路山）
みねの松風峰のまつ風

發句・和哥ともに荒木田守武の辭世なり。今神路山宇治橋のほとりに守武社と仰がれさせ給ふ。尤尊むべき事也。宗祇法師二十五禁の始めにも、難句の事其人に應ぜざる句の事とあり。皆自他の辨へなり。假初に句を云ひ出す事なかれ。自他の事人倫のみならず。鳥獸草木に對しても、さけ　ちれ　みのれ　撓め　たもて　忘れよ　忘るななど、察し、或は思ひやり、或は下知する、是心なきものに魂を入るゝの案じ方なり。自他、過・現・未來の三を常に心得て、一集の趣きを能く考へて正風の眞意を知るべし。

祖翁曰、詩哥連俳四門の下に附とも、心は向上の一路に遊ぶべし。又人のこゝろ旦暮同じからず。まして春秋をや。秋にはなど老をいはざる。又我家に夏爐冬扇の教しへ有。又名所に望みて句を云出んには其日・其夜の天心に任すべし。又和歌の傳授はさら也。家〳〵の祕事は其家の人に問ふべし。若又貴人の前へ出る事あらば其日の災難とおもふべし。はた行脚の掟十七ヶ條、是をおもひめぐらすに淚こぼるゝ斗なり。

祖翁の世に今をたくらぶるに、名のみ行脚にして馬駕籠の榮曜にほこる有。名のみ宗匠にして妻妾のほだしに苦むあり。傳授〳〵と人をまどはして、或はぬりごめをかまへ寶をなさぼるあり。世外の身なる事もわすれ、こと〳〵しき苗字を名乘るあり。月花の定座を覺るやいな、萬句の式をして判者となり、己がわかぬ句〳〵に墨を引て世渡りするもあり。是等の人いかで祖翁の意に叶ふべきやうなし。正風のまことを得るべきやうなし。夫のみかは年頃祖翁の名を賣て、ほの〳〵世に名をしられたる恩をわすれ、淺間しき一集を出せるあり。はた僞筆を梓にちりばめて、祖翁の申させ玉はざりし聯句を世にひろめて、おろかなる者をまどはせる有。是等の罪いくはくぞ。旦暮心おだやかなるまじ。おだやかならずして、いかで正風のまことを得べきや。いはじ〳〵。是等をかひつけたるは我輩の情也。

## わずらひ有聯句二句の間

### 理屈の事

　禁の町の借も荒はて

一聲も呼ばずに通る松魚賣

耳をもて情よりつくゆへに、理屈にして一句立たず。目をもつて荒たるさまを見る時はさま〳〵有べし。

### 一句理屈の事

　いざりの拜むそり橋の下

いざり遙に反橋のもとゝ有んには理屈をはなるゝ也。物をかくしていはんとする故に、理屈に落入なり。

### 句がらの事

行水の時面目を失ひて
　我等が病は殿も御ぞんじ

名月に來いといはれし觀音寺
　そなたも余程若衆では有

美濃・尾張に好む處なれど、餘り俗なる言葉多くして雅俗を失へり。且云、二句の間のさまいとつたなし。戀は哀にも深せつにも云なれ。句作心得有べし。尤戀句にかぎらず、前に出せし證句のごとく一句の上の風流を本とすべし。

　兎としらで膽をつぶいた

是、美濃尾張の句作なり。

　兎としらで膽をつぶした

是、中頃伊勢などにて用し句作也。

　兎と知らできもをつぶせし

是、我輩の句作なり。

又

雨の音篠をつくとは此夜なり
　亭主にかくす椽の小便

かゝる句は申さずとも心有べし。一座興をさましぬべし。

又

　百姓寺へ伯母の藪入

などいふ句けやけく聞へ候。百姓寺、作寺、とつかふまじといふにはあらねど、元祿の風流をいはゞ

　一夜かる宿は馬かふ寺なれや

此句にて知るべし。

又

さま〳〵に品替りたる戀をして
　もゝ夜の門に雪の少將

と其角叟の附られしに、人も稱し其身も附得たるなどおもはれけるよし。其後伊賀の上野にて、同じ前句、さま〳〵に品替りたる戀をして　といふ句出たるに、翁何と附給ふやとうかゞひしに、

　浮世の果は皆小町なり

と附られたり。誠に名人の句作は安らかに言くだして余情深しと、先非をくひたる趣、雜談集に其角自分書殘したるにて知るべし。今の江戸俳諧といふもの其角の流れ

なり。雑談集のおもむきとは替れり。

俳諧は俗談平話、又火を水にいひなすべし。又上手に虚をつくべしなど、古き言葉ありといへども、後世取ちがへて發句聯句ともにみだれり。俗談平話とは歌連歌につかはれざる言をも遣ふなれば、一句の仕立又前句を受けていふ時は、さむしろとも疊とも藁藉ともいふ。是を俗談平話といふ事也。歌連歌に遣れざる疊、ねこだをもつかふといふ事也。火を水に云なすべしとは、發句たとはゞ一情にのべ、聯句はよく前句を我ものにして、妙なる處に至るをいふなり。上手に嘘をつくといふ事は、發句聯句ともに有事ばかりをいふにてはなし。さりやとてもとより無き事を云んは悪し。たとはゞ祖翁明石の夜泊に、

蛸壺やはかなき夢を夏の月

聯句に、

釣場の先に咲る山吹

春を經し七つの年の力石

是等のおもむき也。なを一卷の證句をよく味ひしるべし。

是三卷の書、祖翁の遺語、去來叟の遺書、先師烏醉の夜話を擧げて、これに祖翁および古哲の證句を撰て一派の教とす。他言憚るべし。同心たりとも其人に對してはゞかるべし。若此旨を背きたるに於ては禽獸たるべきものなり。

春秋庵白雄居士

俳諧寂栞卷之下 終

# 俳諧寂栞　員外

## 題の哉

傘にをし分見たる柳かな

雲雀哉　螢哉の類にして別に心無し。

## 治定の哉

春立てまだ九日の野山哉

山路哉　廣野哉　野山哉の類にして、其さま治定せしなり。

## 稱美の哉

蓮瓶のせまき中にも浮葉哉

いかにも稱美すべし。あした哉　日さし哉の類も句によりて稱美あり。

## 嘆息の哉

牛叱る聲に鴫たつ夕哉

いかにも嘆ずべし。思ひ哉恨み哉の類も皆句によりて歎息なり。

## 願の哉

曉を引板家にかたる妻もがな

それと聞そら耳もがな子規

なくもがな初かみなりの稲光り

願の哉は友なき時に友を願ひ、朽木にも花を願ふのたぐひにして、ゆへに、も哉とつゞく也。

又

我をしる友かな竹に雨後の月

是、もがなに等し。句の治りに心付べし。

## 割哉

此頃の思はるゝ哉いねの花

中に哉を遣ふが故に割哉なり。一句の治り慥にすべし。

## 五文字の哉

櫻かな箒の先にかゝるまで

かくのごとく上に哉といふ時は、一句を貫く故に若き者又初心等のせぬ事也。よし云ひ言得たりとも先遠慮すべし。過當の哉也。老人など言得たりと思はん句あらば、生涯一句二句に過べからざるにや。

### 浮哉

月涼し今夜は汐も滿るかな

ウクスツヌフムユルより續く哉、皆うき哉也。故に此句の上に切字を遣ひし也。浮哉は切ざると云にあらず、切るといふにもあらず。分別有べし。

木枯の身は竹齋に似たるかな

嬉しさは葉隠れ梅のひとつ哉

是も浮哉ながら一句の治りをみるべし。連哥におもふ哉は取分け過當の哉成よし、肖柏老人も申されしよし。尚一句の治り工夫有べし。

### しづむ哉

冬枯に風の休みもなき野かな

吟じて知るべし。

### 疑の哉

花に寐て夢より直に死ん哉

哉はすべて疑の心あれど、かと疑て、なと疑ひ返す心あり。句〻分別して知るべし。

### 詞きれて意の續く哉

ものゝふの聲慰まん霓かな

駕籠借りて淡路へ乘ん汐干哉

聞なぐさむべきの意也。淡路へ乘べきの意なり。故に意は下へ續くなり。

### 察するかな

蕣の種とる人のこゝろかな

聲かれて瀬にたつ鹿の思ひ哉

人情はさら也。鳥獸草木ともに其物にかはりて心をおしはかる也。

### 三段の哉

裏ちりつ表を散りつ紅葉哉

一句の治りを吟じて知るべし。

### 疊かな

梅柳嘸若衆哉女かな

嘸と察したるにて知るべし。尤是も三段の格も籠るなるべし。

### 口合のやを捨る哉

飛蝶をあはやとみたる淵瀬哉

叢の霜踏む鳶やからす哉

吟じて知るべし。

**を廻しを捨る哉**

湖のむつき寒きを舟路哉

枝長くきらぬ習ひを椿かな

能くをゝ廻して扨別に廻るごとくにいふ也。能く廻らざるを、てには却て哉とまらず。

湖のむつき寒きを船のうへ

枝長く切らぬ習ひを花椿

かくのごとく能く廻したるをなり。

**言葉を中にて切るかな**

初春の遠里牛のなき日かな

傘張の眠り胡蝶のやどり哉

遠里牛と續かず。眠り胡蝶と續かず。かゝる句は唯句中の治り也。分別して知るべし。

**名所の哉**

かづらきや高まの山は月夜かな

道灌や花はその代をあらし哉



名所の哉の事、宇陀法師にも出て有が故に、呼出しのやと心得、又は名所に、やかな　くるしからずなど心得たる人多し。名所なればとて、やかな遣ふべきやうなし。證句のごとく二つにふりわけて遣ふべし。山は　花は　此はの字に心付てみるべし。名所のや哉心得たらんには、

夕顔や秋は色〳〵の瓢哉

此や哉の趣きも分るべし。此句さま〳〵の說あれどもさにはあらず。祖翁の意は、秋は千艸・百生・夕顔・瓢と色〳〵に替れど、花はひとつとの句意にして、二季を一句にふり分け玉ひしがゆへに、や哉也。秋はのはの字尙心を附て翫味すべし。

**題のや**

春雨や蜂の巣傳ふ家根の洩り

春柳や　竹の子やの類にして、此や別にこゝろなし。

**治定のや**

原中や物にもつかず啼雲雀

道の邊や　海原やの類にして、其さま治定せしなり。

**稱美のや**

濡色や大土器の初日影

いかにも稱美すべし。

**願のや**

蓬萊に聞ばや伊勢の初便

吟じて知るべし。

**嘆息のや**

身の秋や赤子も參る神路山

いかにも嘆ずべし。

**おしはかるや**

春なれや名もなき山の朝霞

吟じて知るべし。

**下知のや**

水うてや蟬も雀も濡るゝほど

吟じて知るべし。

**はさみや**

旅をして見しや浮世の煤拂

**口合のや**

是や世の煤に染らぬ古盒子

口合のや、あへて切字にもあらず。なれど此句は一句の治り慥也、尙分別すべし。

**捨や**

年の暮女の日鏡すさまじや

疑やはかくのごとく、上五文字に手に葉なきをよしとす。譬へば上にて切たる意なり。下のやは云はなしたる也。

籠り居て木の實草の實拾はゞや

願捨るやともいふ。

一さとは皆花守の子孫かや

疑捨るやともいふ。是等は上に、てにはあれど、木の實・草の實中に手にはなし。花守の句は皆といふ字言葉に當りたるが故也。尙分別すべし。

**休めたるや**

いかめしき音やあられの檜笠

降や霙　たつや烟の類にして、定家卿のやの字安からずと、仰られしも是等のやなり。

**疑のや**

人や來し閨亂るゝ宵の窓

疑のやに二色有。片疑といふは、やとばかり云て下におさへぬをいふ也。春や立らん　宿やからまし　君や來しの類ひ皆もろ疑也。倘分別すべし。

**とや**

星崎の闇を見よとや啼千鳥

問ひ懸け手にはともいふ。吟じて知るべし。

**呼出すや〳〵**

汐越や鶴脛ぬれて浦涼し

是、名所のやは呼出すやなり。

**疊や**

遠里の麥や菜種や朝霞

おなじやう成るものを押重ねて云也。

世の秋や海人が捨子や啼鷗

是も疊やの格ながらいさゝか違へり。倘分別して知るべし。

**腰のや**

むづかしき末のとまりや織竹

腰のや能く治らざる時は、遊びやといふに成て惡し。やは都てよに通ふが中に、取分腰のやはよと吟じ替て、よとも云るゝやうに心得べし。

**やと言て捨皃捨也**

行年や親に白髮をかくしけり

年の瀨や鵜川に見しは昔也

やに歎息のこゝろあり。尤百句一句の格也。のとも　もとも　にとも　と　ともいはれざる句にて知るべし。

**こそ　れ**

元日に田毎の日こそ戀しけれ

花に來て人のなきこそ夕ァなれ

雨の鶴巢にこそ物をおもふらめ

虫の音に深き闇こそ思ひなれ

中〳〵に子をこそおもへ秋の暮

是等のごとくこそといふ時は、エケセテネヘメレとつゞく也。舟こそ忘れぬ　人こそゆけ、それこそゆるせ　などの類ひ也。

されぱこそ荒たき儘の霜の庵

此句は、こそ　れ　のつゞきのみにあらず。こそときれ

たる句也。又さればこそあれと、あれの字を句中に籠めたる也。

　五合帆に蚊のあらばこそ沖の月

是はこそと云はなしたるにて、こそ　れ　の論ならずと知るべし。

### ぞける

石女の雛かしづくぞ哀なる

菖蒲賣日和簑をぞ着たりける

かくのごとくつゞく也、

　年よれば聲もかるゝぞきり〳〵す

是はそと切たる句にして、そけるの論にあらずとしるべし。

### なそ

盃に泥な落しそむら乙鳥

ふみかへしそ　物な思ひそ　などいふ句續き也。句續きによりて、なとなくとも忘れそなどいふて同じ意に通る句有。尙分別すべし。

### ぬ

かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅柳

一つ脫で後ろに負ぬ更衣

彌陀賴む今宵に成りぬ後の月

是等は畢ぬなり。なりぬ　しりぬなど言捨て、別にぬの字の付は畢ぬにして切字也。ならぬ　しらぬ　かく言濟ざるを、ふのぬとて切字にならずと知べし。且云、畢ぬは皆なりぬる　しりぬる　と、るにつゞく也。ふのぬは、るにつゞかざるにて知るべし。又同じ言葉ながら聲のかはりて、畢ぬにも、ふのぬにもなるあり、上より續きがらにてしるべし。エケセテネヘメレよりつゞくぬ皆皆まぎれ安し。みへぬ　きへぬ　はてぬ　あけぬ是等の類と知るべし。

### し

山里は萬歲遲し梅の花

現在のし也。

ことごとく寐覺はやらじ鉢たゝき

未來のし也。みな〳〵切字也。過去のしはきれず。久し　黒し　床し　遠し　近し　淺し　現在なり。

遠からじ　近からじ　淺からじ　みたじ　まじ　白からじ　あらじべし　未來也。

遠かりし　近かりし　淺かりし　白かりし　有し　おもひし　なかりし　聞し　詠し　過去也。

**みゆ**

小舍人なんど小弓引みゆ

雨落るみゆ　鳥の飛みゆ　などの類にしてウクスツヌフムユルよりつゞくなり。

**短句のて留にどめの句**

枯し柳を今におしみて

篰は柴に月はま上に

いづれも言殘す方然るべくや。

**を廻し**

わざとさへ見に行べきを雪の不二

**二字切**

君火焚けよきもの見せん雪丸げ

**三字切**

子ども等よ晝顏咲ぬ瓜むかむ



**二段切**

夕べにも朝にもつかず瓜の花

**三段切**

目には青葉山郭公初松魚

**玄妙切**

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

又

世を旅に代かく小田の行戾り

人に家を買せて我は年忘れ

古今抄に挨拶の切と出せり。案ずるに唯一句の治り也。五老井の云し如く正風の發句は、四十七文字皆切字になり、又一句にいくつ切字有てもよしと。猶いふ只一句の治りなりと知るべし。

**病の哉の事**

**其一　首切の哉**

離れ山鳥啼たつ時雨かな

拮槹むかしながらの柳かな

上の五文字手にはなき時、哉留心有べし。

時鳥啼音にくもる茨かな

小傘さす手にひゞく霓哉

時鳥啼く、小傘さすとつゞく、是首切をまぬかるゝなり。

冬籠夜晝竹の嵐かな

ふじの山師走ともなき景色かな

是等の句、冬籠夜　不二の山師走と續かすながら、一句の治り首切の類にあらず。題のかな　治定のかな抔と、歎息のかな　稱美のかなゝとは尤事替れる事にてゆ。

其二　腰おれの哉

家根葺の藥よ〳〵と時雨哉

笘舟の隣もなふて千鳥哉

さびしさに庭を覗けば柳哉

此外も有なれど、先腰のとてはより哉留心あるべし。

麥喰ひし鴈とおもへど別れ哉

南天に箒さはりて啼く蚊哉

花一木二木おもへば春日哉

おもへとわかれ　さはりて啼　おもへば春日とつゞくにて知るべし。

其三　疑返さるゝ哉

何に居て暴風のあとの蜻蛉哉

誰が爲に紫深きすみれ哉

上に疑の言葉有て、哉留心有べし。

何鳥のたま子が落し野松哉

是何と云字を疑ひ返して子細なし。

何の木の花とも知らぬ匂ひかな

是も上に疑たれど、花とも知らずと疑返したり。尚分別あるべし。

又いふ、古集にもまれ〳〵哀哉などいふあれど片言なるべし。又ちら〳〵やなどいふ五文字もあれど是も片言なるべし。手に葉は我日の本の手に葉なれば、いさゝかもたがふ事有べからず。

俳諧寂栞貞外　終

也哉鈔（やかなせう）
無腸

# 序

夫、切字をしらんと要せば、まづ切字となづけたるは、いかなる字義ぞと眼をつくべし。さて其むねをさとりえて後、切字といふ目は、字義あたらずといふ事をしるべし。されば我門には切字とはいはず、しばらく是を斷字といふ。猶口受有。切字はありてなきもの也。なくて有もの也。切字ありてきれぬ句有、なくて切るゝ句あり。此妙境に入て字々切字ならざるはなし。夫が中に、也哉の二字をおく事、きはめてたやすからず。いにしへの名ある集にも、あやまち少からず。まして今の世の人のつくり出さん句は、いはでも知べし。爰に我友無腸居士なるものあり。津の國かしまの里にかくれ栖み、客を謝して俗流に交らず。ふかくやまとの國ぶりにふけり、人しらぬ古き書をさへさがし見ずといふことなし。もとより俳諧をたしみて、梅翁を慕ふといへども芭蕉をなみせず。おのれがこゝろの適ところに隨ひて、よき事をよしとす。まことに奇異のくせもの也。此ごろ一本を著し、其門生二三子余にしめす。(于)ゝなはち也哉抄となづく。其說數條、おの／＼古き書によらざるなく、たま／＼さとしやすからんことをおもひて、みづからの論を加ふといへども、つゆも古人のゝりにもどらず。臆說といふべからず。余つら／＼よみゝて、たゞむきを扼げていふ、是不朽の書也。二三子はやく木に上して、同志の人の聞につたへよ。二三子諾す。すなはち序を余に乞。余いふ、わが(此)言贅也といへども、理おのづから明らか也。更に序して花をもとむべからず。二三子とくされ。ともにはかれ。

于時安永甲午孟春下浣　平安夜半亭蕪村誌

几董書

奇なる哉我師、僻なるかな我叟、臂を事として効をかたらず、才をゆるされて名利に鈍し、習ふてあく時をしらず、教ふるに倦る色あり、師をもて稱すれば、友をもてこたふ、こゝをもて當世にたがひぬ、人皆云、白眼の徒也

と、師みづから云、外剛にして内柔、是我性なりと、因てさらに無腸の號をえらびて、紫陌を田舎に住かふる時、月に遊ぶおのが世はありみなし蟹　と云句あり、我輩亦辛きを蝕するの僻ありて、師を陵藪に追ひ、しば／＼閑談を貪る、一日俳諧をかたり、且切字を問ふ、師云、世人寒暑をとぶらひ、米塩をかたる、其言語におきては、てにはのたがひあるとなし、適文藻につきてことわりのあはざるものは何ぞや、其外を華にして、内に實をわするゝがしわざなり、木伐る山賤、みるめかづく蜑をとめらがさへづりまでも、てにはのことわりたがはざるものは、天地のあひだにうまれたる、自然の妙用なりとしるべし、猶をれかたらんの言に從ひて、筆を執らことい くたび、ほとんど一部の書册成ぬ、しかるに、其說の高邁なる、古抄の辨義と異同少なからず、こゝにして、我輩井蛙のうたがひを抱き、ひそかに是を洛に攀けて、蕪叟の溫雅にこゝろむ、叟云、是溫故の言、木にゑらせてむなしからぬ物にせよと、於是書肆らとはかりて、事既に成ぬるを、れいの名利なき僻疾に呵責せられて、いたづらに十余年を過し來りぬ、師は其後老母の命をかたじけなうして、鄕にかへり、猶紫陌を草野にひとしき物に、芦蟹の穴居、こゝろゆくさまなりしかば、鄕友の交りむかしに淺からず、「常に來往す、「此頃書肆ら來りて、ゑらせたる木の、束薪にひとしきをなげく事頻なり、師ながき息をつきて、嗟呼、我老ぬる哉、繞(饒)舌の罪誰にかあると、こゝに我輩雀躍して、書肆らが需めのまゝにせさせ、かつ古人蕪叟の昔の序辭を載せて、此度世に推廣むるものなりあなかしこ、天明七年の秋門生露堂秋律竹母記す

# 也哉抄

## 統論

一近來言語の遊びさかんにして、博識の士都鄙にきそひ出。手爾波の抄書を木にゑらす事しき〳〵なれば、今は誰やの人も祕めかくすべき事にあらず成にたり。たゞ俳諧の游士のみ、連哥家の抄物を推戴きて、柱に膠し、舟に刻むさまなるは、むなしく時世をしらざるに似たり。抑言語者和漢ともに何の教への書も、注譯を待ずして、其世の人はよく聞しりたるを、世かはり時のゆければ、言語もそれに從ひてうつりとうつり、何といひし言は、昔はしかのみの義なりしを、今はかく〳〵意得べしと云につきては、てにはの活用も、時世にすこしづゝのかはりめ有といへども、其はじめに立かへりて後を下し見ば、かくれたる事もあるまじき也。上古の常なる言は、中古にして雅言となり、中古の俗言は、下世の雅語となることわりは、紀氏の、今をむかしに戀ざらめかもといはれたるにおなじものにやこゝろうべき、或人の抄に、てにはに六度までの轉運あるよしをいはれたり、誠にしか有べき事也、ことに俳諧は、二百年來の下世に、雅俗打まじへていひはやせる遊びなれば、利口に過たる活用多く聞人もそれをこゝろして見わかつべき事也けり。

一哥のてにはの抄物、近來の人ゝの木にゑらせたるは、最くはしめきたり。連哥家の抄古來あまたが中にも、連哥提要と云書、享保の後世に成て、諸抄を陟獵しよくつとめたり。俳諧家には、元錄の新式、をだ卷、曉山集等、ねんごろにことわれり。是らには古來祕藏の事をも餘波なげに書あらはしたるなり。然ども其名目におきては、柱の膠株のまもり、更に雅俗のわかちなく、むなしく時世の教訓にあらず。是その故をつとめず、たゞ末につきてことわれる故に。言語の本義をさとらざるが致す所なりとこゝろ得べし。

一抑言語は、文字を假て物を記さゞるいにしへにも、口を開けば阿伊宇衣於の五十の音出る。その音二合三

合して、天地の中にあらふる事物、こと〳〵言語をなさゞるはなく、此こと葉を用て、おの〳〵思ふ心をかよはするに、相覺らざる事なし、然ば五十韵と云物の妙用を、こと葉といひ、言靈とも稱せしが、上古の名目也、そのゝち漢土の文字と云物を渡し來るにつきて、それをこゝの言語に假もちゐて事を記す、是を假字とゝなへ、又此假字に法をもまうけて、假字用ひといへる名目なれりけり、そのゝち又漢土の字義をさとらしむとて、一字の四面四隅を遶らして、種々の点法をまうけ、言語の活用をもて便あらしむ、是を点圖とも、をことは点とも云、是亦其世の名目也、此点圖には、江家菅家淸家、又延暦園城東寺等、家ゝ寺ゝの法制ありと見えて、今は意得がたきもの也、其をことはの目よりうつして、今のてにをはの目も呼出たるものなるべし、さて此てにをはの名目こそ中世に呼出たるものなれ、其活用におきては、卽太古の言語の活用にて、打出る語の意をたすけつゝ、詠歎をなすよりして、物を指し、事を令し、あるひは願ひ、或はうたがひ、或は事物をわかち、かぞへなどもして、言語の妙用をなすもの也、又其てにはの中にて、詞意結絕の用をなすを切字と云は、又後なる名目也としるべし、さて此切字と云は、何を切る字と云詞を略して、卽名目となれるもの也、是には十八の切字と云が古來の名目也、然ども傳へ異說ありて、猶十八にかぎるまじく云人あり、しか云も又二十三十の目を立て說なす、つひにことわり盡すべくもあらず、言語の妙用それらの數目にかぎるべき物に思ふはいまだしき事也、先ッ切字の目は、手爾波大概抄やはじめ也けん、此書は定家卿の作のよしにいへど、さは僞ッ物にて、最信用しがたき俗書也、さて此表題をもても、切字卽てにはなる事をさとるべし、此目ありてより、是はてには、こは切字と、こと物の如くいひわかてるよりして、別にてには切レと云事を、口傳祕藏の事に云は僻言也、如此よく意を得ての於は、是らの事は會て云まじきものぞとしるべし、前にも云、てにはと云も、言語の中なる活用の物をとり出てよべる俗目な

れば、すべてはこと葉と云ぞ雅言なる。

一五十の音の中にて、發語となり、體語となりて、活用をなさゞるは、わづかに五七音に過ず、四十餘の音は、こと〳〵てにをはの活用をなして、打出る心の主に從ひ、言語は是が臣妾となりて、下につゞき、上に倒り。或は句を結め、事をかさね、或は情を餘して、不測の妙用をなすもの也けり、

一俗目の切字の中に猶俗解ありて、くはしからんがため、かへりてことわりの踈かなるがあり。其條〻

[や]には〳〵切や 一にまたるゝや〳〵口合のや〳〵腰のや〳〵中のや 一名「とにかよふや 又云「はさみや〳〵すみのや 一名「おさへ 一云「おとゞや〳〵捨や 「捨てとがむるや 「かへるや「名のや 「羽のや 「助字のや

[かな]には〳〵治定の哉 一に「落着のかな〳〵現在のかな〳〵浮たるかな〳〵沈む哉〳〵かへる哉〳〵やかな〳〵こそといひてとぢむる哉〳〵誰・何などゝうたがひてとぢむる哉、是ら說得んとして、かへりてまぎらはしく。且無用の辨義をなすもの也。仍て今は言語の義を專らとして、名目を約し、且漢の助字をも牽合せて解なすもの也、是必漢の助字のこゝろ、てにはに同じきと云にはあらず、たゞこゝろ得安からんための諺解のみ也、さて古人の作例には、かたはら雅俗をまじへ詞をそへなすは、ある人の發明にならふ也、よくこゝろを得て後は、すべて解を去て、もとのまゝにてこゝろうべきもの也、

一近來歌よむ人の木にゐらせる抄を、然是よみて見るに、十が七八は同じく、二三のあひだには、とかくにことわりのゆきあひがたく、かたみにうけられぬさまにみゆるは、言語の活用の事廣きが故なるべし、又今古をおのが好む方に引れて、さるさまにたがふも有べし。俳諧はとにいたりて後の世の言語にて、しかも雅俗の別なきのみにあらず、あやしの俚語、聞とりがたき方言までも、心のゆくまゝに打出るものなれば、てにはも又それ〳〵なる主どりして、奴僕のはたらきをもなすべし。仍て連歌家の作例の外なる變格もあるべし、且さばかりの俚語方言も、おのづから言語をなすといふは、すこしく物心得たらんうへの游(遊)びなれば也、たとひ物こゝろえぬ人也とも、おのが思

ふ心ばへを打出なんに、彼寒暑をとぶらひ、米塩をかたるほどの實よりいひつらねん言の、てにはのことわりたがふましきを、なまなかに連哥家の抄書を讀ては、彼俗目になづめる意得たがへも稀々聞ゆる也、よく〳〵しらべとゝのへて打出べきもの也かし、

一歌は、今や詞をえらびて、よむとよむまじきのしらべ、最くはしめきたれば、詞はやゝ廣からぬ物に似たり、されどてにはの活用におきては、世々の轉變に格ひろまりて、はかりきはめがたき物に成にたり、仍て人々の抄に、十に一二もゆきあはぬ解ざまも見ゆる也、連歌は代々の哥集の外に、夫木集などの聞え異なる詞、あるは物語ぶみの中なるをもとり出、又は漢字の音のまゝをも、例にまかせて打あへれば、歌の詞のえらびくはしきにくらべては、すこしひろきものと見えたり、たゞてにはにおきては、作例の活用、哥の格ひろきにはいたらずとおほゆかし、俳諧は、あやしの俚語方言までも打まじへていひはやせば、言語のひろきはもとよりいふまでもあらず、然どもてにはの格のみ、連哥の敎へを推戴きて守れるには、彼十八目をもてかぎるとも、思ひなかばに過ぬべし、それがあまりなる變格をいふも、又わづかの俗語に打あへたれば、哥の抄書の格さま〳〵なるをまで、廣めて云べくもあらず、猶それらをまであまねくしらんとおもはゞ、彼人々の木にゑらせたる、何がしくれがしの抄共をよみて、うまくこゝろうべきものなりけり

## 也哉抄

［や］

［や］は咏歎の辭也、願ふ辭也、疑辭也、又物を指て云辭也、物をかぞふる辭也、さて漢文に、乎耶歟與哉諸夫等の七字を、［か］とも［や］とも［かな］なども訓むは、咏歎、願ひ、疑ひの三義也、又也の字を音のまゝに讀むは、

物を指すと、かぞふるとの二義也、是をひとつにやと書は、例の假字にて、義は五つにわかてりとこゝろ得べし、さて和語にやとかは義通ずるなり、是か、さ、た、な、は、ま、やの韻をもて同用をなす成べし、此乎耶歟與等の七字を、やか又かなとも訓むに付ては、やとかなも同義かと云べけれど、さにあらず。やといひやなといひかといひかなと云は、義におきて輕き重きの用あり。漢文にも哉の一字を用うると、我得レ已乎哉など二字なるとは、文義の輕重ありといへり。さるはやよりやなは重く、かよりかなはおもく、かなやはいよゝおもげに見ゆるは、二合三合して、語を助け、義をつよくことわる用也と見ゆ、かくいへど、漢字に、哉の字は夫より義おもく、歟より乎はおもしなどゝ、字の輕重を用て文義を見するとはたがひ、やといふ一言が數字にわたり、かつ同韻にかよひて、其打出る心の主にしたがひ、言語は是が臣妾のつとめをなすなれば、やの一言がやはともやよとも聞ゆるがあり。ことに連俳は十七字にて詞の短かければ、哥のごとく、やにていひおほせぬは、やよやよやなど云延て、思ふかぎりを述る自在はなしがたければ、やの一言に、やよやなかななる哉などまで諺解してことわるべきがあり、作例の其所々にいふべし。

一やは咏歎の辭也。咏歎とは、人情事物のそれ／＼に付て感ずるあまりに、打ながめていへる辭也。仍て是を〽ながむるやとも、〽なげきのやとも云べし。〽ながむるとは、事物に心をとゞめて見る辭也。〽なげきとは、悅びかなしびにつけて、長き息をつぐと云辭也。いづれも感ずるあまりの音にあらはるゝをいふ也。さて是には、其事に臨みて、かろくも重くも聞ゆるは、其感ずる心の淺深にまかすれば也。先やと打ながめたれど、かろく聞べき作例

初雪や掛かゝりたる橋のうへ　はせを

すまふとりならぶや秋の唐錦　嵐雪

飯蛸のあはれやあれで果るげな　來山

是ら打ながめたれど、たゞ此まゝに言をそへずして聞

ゆ、此例尤多し、又是とは少かはりて、猶かろきがあり、

ひよろ〳〵と猶露けしやをみなへし　芭　蕉

客に對して

君見よや我手入るぞ莖の桶　嵐　雪

是〳〵露けし〳〵君見よにて、やは添ずとも聞えたるを、そへたるに意も延ておもしろし。さるは文勢のみにとも云べけれど、是もかろくながめたる辭也、又〳〵初雪や〳〵梅さくやなどと同じけにふとおもひあやまりて、何ともなきが有

ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら　仝

此やは濡椽をおもしろくながめたるにもあらず、さらばぬれ椽よとやはよにかへて呼かけたりともことわりがたし、たゞ是は〳〵濡椽にと云べきを、ふとやといひしにて、辯義なければよからず。若未熟初心の作者ならば、ににては切字なしなど思ふべけれど、上手の聞えある人なればしかにもあらず、たゞふといひたる物にて、よくも思はざるなるべし、又

はづかしや蓮に見られて居る心　湖　春

物すごやあらおもしろやかへり花　鬼　貫

たま棚の奥なつかしや親の皃　去　來

是らはやとのみいふも、やなと言をそへておもく聞べき也。〳〵此池汀に立てみれば、濁りにそまぬ花とおもふにに。おのが清からぬ心を、あちからはいかに見るらん耻かしやな。〳〵物すごやな。諸木皆凋める中に、かへり咲のかじけながらにほひ出たるはあらおもしろや。〳〵靈まつる棚の隈〻ながめらるゝにも、親の面影の先思ひ出られてなつかしやな、是らは上の作例よりも心の深げなれば、詞もつれておもく聞ゆ、是をたゞにやなといひたるあり、相照して見よ

實盛が冑をみて

むざんやなかぶとの下のきり〳〵す　芭　蕉

鋏卯懷旧

うたてやな櫻をみれば咲にけり　鬼つら

鶯ノ權現にて

いな妻にけしからぬ神子が目ざしやな　嵐　雪

又やと一言ながら、かなとことわるべきがあり、

夏の夜や東はなしに月は西　宗因

なつかしき枝のさけめや梅の花　其角

さても短かき夏の夜かな。東はしらむと見るほどもなく明はてゝ。有明月ぞ西にしら〳〵とみゆる。＼幾春かながめこし梅の。むかしなつかしき片枝のさけめかな、

やと一言ながら。やなかななどに猶あかず。諺解して何なるかなともこゝろうべきがあり。

元日や神代の事もおもはるゝ　守武

秋風や藪もはたけも不破の關　はせを

雪の日や近江の鐘も聞ゆなる　羅人

元日なるかな。何事も打わすれてのどけき心より。神代の昔はかゝりけんものをと思はるゝ也＼秋風なるかな。名におふ關屋の跡をみれば。其わたり畠も藪原も。不破山おろしに吹あれて。昔のたゝずまひの思ひ出らるゝ＼雪の日成かな。市人のかまびすさも聞えず、鳥羽車のとゞろきも絶て。近江路の時つく鐘も聞ゆるよ、是ら下の十二字に＼元日も＼秋風も深く歎じたれば。やは＼なるかなともさとすべき也。矣哉の二字を。和讀に、宗臣面君間有人矣哉とも。亦は雲又靈怪矣哉とも訓る例もてかくことわれる也。

＼名所のやは。古來＼呼出すやと云ひあり。地景に對して呼かくるとも云べけれど。此やは咏歎の辭也。さる故は、下の十二字に。其地景の面白さをめでゝ。先地名を呼出るなれば。やはかなともなるかなとも諺解して。さて地名の上にはへ名におふと云詞をかうふらせてこゝろうべし。古哥にも＼これや此名におふ鳴戸のうづ汐にとよめるをも思ふべし。

清瀧の波にちりこむ青松葉　芭蕉

から崎やとまりあはして初時雨　随友

名におふ清瀧川かな。峯吹おろす山風に。青松までを散すさめて。碧潭に色をそふるはいと涼し。＼名におへる唐崎たるかな。こよひのやどりに時雨そめて。あはれに面しろなど云也。すべて名高き所をいはゞ。此心得して地名は云出べし。されど其外の所なら

ず、又は名ある所にても、其時の感不感によるべければ、一概にもさだすべからず、又〽大原や小塩の山〽菅原や伏見の里といへる[や]は、大原のをしほ山、菅原のふしみの里といへるをば、うたへるには、これらを[や]とながめたる也とことわりし人あり、さるべき事におぼゆ、又或人は、是を雜のやと云物にことわられし、何ともなき名目也、古哥に、淡路の〽野島が崎〽あふみのとこの山などはじめを四言によみ出たるがあり、たゞそれにてもうたひし物ならんを、〽石見のや高角山とよませたまへるにならひて、昔〽淡路のや〽近江のやと、[や]を添てうたへる事と成ぬ、連俳にも〽淡路の〽嵯(さ)峨野のなどには、[や]をそへて五言にとゝのふれど、此[や]はまとにかろくながめたるにて、詞よ〽淡路の何〽嵯峨の何と云にて[や]は除きて下につゞくべき格也と心得べし、〽あれや〽なれやはながめたる詞の格なるあり、〽なれやは何にあれやをつゞめて、〽何なれやと云也

**けふ咲は年づよなれ(ナルカナ)や花の兄　望一**

(三)見どころのあれ(アルカナ)や野分の後の菊　はせを

西瓜くふ跡(タ)は安達が原なれ(ナルカナ)や　其角

春立今日咲初しは、さても年づよなるかな〽野分の後に見れば、垣根の野の菊の立よろぼへるも、中々にあはれと目とゞめらるゝ所有哉、〽西瓜喰た跡は、しつかい黒塚の鬼女が閨見る如くなるかなといへる也、又[あれや]と云に〽願ふ義なるがあり、哥に〽あり明の月だにあれや時鳥今一こゑの行方も見ん〽あふ坂の關のせきもり心あれや岩まの淸水影だにも見む、此こゝろなるは

冥加あれな裕にあやめを富貴自在　季吟

是[あれや・あれかし]は〽月だにあれ、冥加あれと願ふに、[や]も[な]も添たるにて、上の格にたがへり、されどこれもかろくながめたる詞也、又〽うたがひの詞なるもあり、

翌しらぬ老が身なれやお取こし　范字(孚)

是は翌しらぬ老が身ればにや、宗祇の紳思の御取越して悦ばるゝよと也、此格の哥は〽須磨の蜑の塩やき

衣縫ゐあらみまどほにあれや君がきまさぬ＼天ノ河冬は氷にとぢたれや＼秋の夜は春日わするゝものなれや、是らまどほにあればにや＼氷にとぢたればにや＼わするゝものなればにやのこゝろなり、さて此願ふと云も、めぐらせては詠歎の意ありて聞ゆ、又うたがふと云も、たゞ疑ふと、あやしみうたがふと二義有て、其怪しみうたがふは、是詠歎の意となれる也、其ことりは かな の條下に云べし、或抄に

民安く國も治まる時なれや

と云句を引出て、此＼時なれやと云は、何の心もなく、時なれと云のみにて、 や は云捨たる故に、是を＼捨やと云ぞと有はわろし、國の安く治まるほどの悦びやはある、必是は＼時なるかなと、あふぎて詠歎せし也、又

かくしても身のあるべきと思ひきや

忍びゆく袖は闇路もいとはめや

此格も、諸抄に下にて や と結めたるは、皆＼捨やと云也、是捨てかへる治定のてにはなれば＼かへるやとも云也、＼思ひきや、おもはれず＼いとはめや、厭ひはせぬとかへるにて、捨たるに心ありといへり、たゞ＼かへるやと云はよし、されどそれも義にあづからぬ俗目也、世に物を捨ると云は、無用に取所なきに云事にて、是らの專用なる詞には云まじき僻言也、＼かく隠つくして、今は身のあるべきと思ひきやは、更にさは思はれずと、深く思ひ沈める人の、打なげめたる詞也＼いとはめや、いとひはせぬ＼わすれめや、わすれはせぬと云類皆同じ、さるから＼捨やといふはあたらぬ俗目なるをしるべし、又或抄に＼墨の江や＼三吉野やの名所の や も＼捨やのたぐひにいへるは、云にもたらぬ事也、

＼切れやと云は、上の五文字の末に、＼散花や＼秋風やとあるを云と也、例の辨へ難なき俗目也、

ちる花や嵐につれてまよふらん

秋風やかなしき物と聞わびて

此二句の意異也、＼散花よ、嵐につれていづちに吹まよふらん、＼秋風なるかな、さても此比は悲しきものとのみ聞わびてあると云也、上のは＼花の散を呼かけた

り。是を〳〵物を指す詞と云、次のは秋風を悲しめるなげきの詞也。又云 〳〵秋風やの格を。〳〵待るゝやと云目有、其說に。五文字の末に[や]といひて。七文字の末に[と]とおさへたるにて。[や]をはるかに待るゝ義也といへり。是もおもはくに過たる俗目也。すべて〳〵おさへ字〳〵かゝへ字と云は。大体定まり有といへども。又詞のつがひによりて變格なるもあり。それとても言語だにとゝのひなば。しひて論なき事也。殊に哥はさだまりたる格のみなるは。なほき詞のみをえらびてよめるなれば也。それにさへたま〳〵には變格もありて見ゆるか。まして俳諧は。あやしの俚語方言までを。事に臨みて打出れば。〳〵おす〳〵かゝへるの定めにたがへるも有べけれど。所詮は一句の落着にあれば。柱(コトヂ)の膠(ニカハ)をかたくなに用うべからず。

問。或抄に〳〵切るゝやとて〳〵妻こふる鹿ぞ鳴なる女良花おのがすむ野の花としらずや〳〵難波がた短かき芦のふしのまもあはで此世を過してよとや〳〵思ひいづや美濃のを山のひとつ松契りしことをいつもわすれず。此名目をいかに。答。是もうたかびの詞ながら、語意緒絶の用をなせば。ことわりは聞えたり。されど哥よむには。此格のみを切るゝ体なるをもて云也。連俳には是のみの格を切るゝとは云べからず。且哥のうへにても。切るゝは体用の排義にて。義は指問ふ辭のやと云目を專らとなふべき事也。

〳〵何(ナニ)のやと云目も〳〵うたがひのやにて。上より四字目に有によりて。すみとは云よし也。又一名〳〵おさへておとすやといへり。〳〵何やと[と]の字を用ておさへたる格也。いづれも假初なる俗目也

おもふやと逢夜も人をうたがひて

是あふ夜ながらも。我を思ふやとうたがふ也。又是にも〳〵ながめたるがあり。

涼しや(ナ)と柳がくれのやすらひに

是は涼しやなとながめたる詞也。かく同格なるも、作意によりてさま〳〵と義異(コト)なれば。其はじめに目を立たる人は。辭(コトバ)のあり所をもてこゝろ得させしが。其時世の發明にてもあるべけれど、今はその株(クヒゼ)をのみまも

るならひと成にたれば、故にかへりて、詞の本義をあかしつゝ目は立たる也、

一ねがふ辭の〔や〕は事物、に對して感賞のあまりに、こはかくありたきと思ふ心より打出れば、此〔や〕もめぐらせては咏歎の義ある也、

あはれなるときかせばや時鳥　貞徳

三井寺の門たゝかばやけふの月　はせを

予規よ、世のあはれなる事聞かせばや、さらば音もをしまじものを、〳〵こよひはいづくはあれど、三井の高きに登りて、湖上の月を見たく思ふに、いざ彼寺の門たゝかばやと云は、僧敲月下門の句をもていへる也、此格すべて物に對し事に臨みて、かくありたきと願ふ也、又是にもうたがへるがあり〳〵をらばや折ん初霜のとよめるは、霜深きあしたに、是ぞ白菊と、心あてにをらば折たらんかとうたがへる也、又同格ながら、〳〵あまの川もみぢを橋にわたせばや〳〵月の桂も秋は猶紅葉すればやなどは、橋に〳〵わたせばにや〳〵紅葉すればにやと、うたがふにあやしむ心をそへたれば、めぐらせては〳〵ながむる心もありて聞ゆ、

一うたがひの〔や〕は、〔か〕に通はして見るがはやく義を得る也、

法師の年に老たる後に

花なりし身をやうしとて捨坊主　立圃

片枝に脉やかよひてむめの花　支考

此〔や〕は下におきかへてみるべし、〳〵花なりし身を變しとてか、〳〵老梅のやゝ朽たりとみゆるが、猶片枝には脉のかよひてか、哥には〳〵打出る波や春の初花〳〵花なき里に住やならへるの類〳〵波は春の初花か〳〵花なき里に住ならへる歟と云也、

象のわたりける年に

今やひく不盡のすそ野のかたつぶり　仙鶴

是〳〵今やひくらん望月の駒と云哥に本づきて、今やひくらんと聞ゆれど、上の例もて今ひくかともことわらるゝ也、又〔や〕とうたがふには、上にても下にても、同じうたがふ辭をかけあはしてつよくことわれるがあり、〳〵春霞たてるやいづこみよしのゝ〳〵ぬしや誰〳〵む

かしの人の戀しきやなぞ〳〵心や何ぞ〳〵花の心や何いそぐらん〳〵かくしてや猶や岂なん〳〵とめとてなどや我身をせめざけん〳〵大かたはなぞや我身のをしからむなどの類最多し。

初眞桑竪にやわらん輪にやせん　はせを

子やなかん其子の母も蚊やくはん　嵐蘭

あなかしこの初物を。竪にわらふか輪にせふか〳〵今は退らん。子やなかん。其母も蚊にくはれつゝ待らんをと也、

ほとゝぎす待やら淀の水車　宗因

たゞ居れば身が病るやら雫こかし　凉莵

此[やら]は[やらん]をつゞめたる俗語也。さて上の二三字めに。〳〵今やひく〳〵子やなかんなどあるをば〳〵口合のやと云目あり。例の義もなく。あり所のみをいへる無用の事也。三字めに在ても義の異なるがあり。

月や花夜見る色のふかみ艸

是は月や花やとかぞふる辭なるを。しひて月や花ならんと譯して。上の格と同じとするはわろし、月の淸き夜に、月や花や光を相照して、花の色もひとしほ深しといふ意也。是をうたがふ詞にしては、ことわりむづかしく、且作意もおとれり、又

又や見ん老が世の花翌も見む

是に〳〵又や見んかたのゝみの(マヽ)櫻狩花の雪ちる春の曙と云をとりたる詞なれば。此[や]はながめたる辭也、さるに此句の方を。又や見ん。又やみずもあらんとかへして聞べき詞に說なせるは。老が世の定めがたきから。又やみずもあらんには。翌も來てみんの作意なれば也。本哥の詞はさにあらず。櫻花ちる春の明ぼのゝけしき。似るものなく面白きをめでゝ。又や來てみんとながめたるのみ也、此哥若そこにゆきて。又見ることを期せられぬ述懷の意ならばさも說なすべし。是はまさしく時の攝政の御家にてよみませし五首の中の哥の由。端に見えたれば。ゆきてよみませしにあらず、すべて題詠は。ゆきてたゞにみしばかりの感なしと云、是らにてもしるべし。又此格を古抄に〳〵とがむるやと云目もよしなし、物とがむるとは、卽物を指て云辭に

て、是にはあらず、
[やは]と云[は]は、添て意を助くる也、さて大かたに打かへして聞が多し、又其まゝにても聞べきがあり、打反して聞べき格、哥に〳〵色こそ見へね香やはかくるゝ〳〵我やは花に手だにふれたる、是等香はかくれはせぬ、手はふれはせぬといふ意也、是も打ひらめては、手をふれた歟、香はかくるゝ歟といはるれば、[や]を[か]にかふるがもとよりにて、うたがひの辭也、又〳〵世の中は昔よりやはうかりけん〳〵香をやは人のとめて來つらんなどは、[けん][らん]等の辭を懸合して、[や]はつよくことわりたらんうたがひの辭也、[は]と添たるはいよゝ義深からんとてなるべし、又〳〵人の心にあかれやはせぬ〳〵世の中はむかしよりやはうかりけん〳〵ほかに鳴ねをこたへやはせぬなどは、打かへして聞ずとも、たゞ其まゝにて打ながめたる詞也と心得べし、凡うたがふ辭の[や]は、此外にもさま〴〵の格ありて、こと〳〵擧ば、こゝに云ひ其なかばなるべけれど、前にも云、哥よむには[て]にはの活用多く、連歌俳諧には、さばかりさま〴〵なる活用の作例見へざれば、あらましながらやみぬべし、

一物を指て云辭の[や]は、[よ]にかへて見るがならひ也、

　しら露や無分別なるおき所　宗因
　明月や見つめても寝ぬ夜一よさ　湖春
　古池や蛙とびこむ水の音　はせを

白露よ、風ふかばしばしもたまれ、ぬ末におくは無分別ぞ〳〵明月よ、夜一よさは見詰ても居ぬものぞ、名たての秋の夜や〳〵古池よ、をり〳〵蛙の飛こむ音はあな淋しと也、此[や]はいづくにありても同格也、

　皆人の晝ねのたねや秋の月　貞徳
　おのづから鶯籠やその竹　望一
　肌さむきはじめや星の別れより　乙由

此〳〵はじめやの格を〳〵腰のやと云目あり、句の腰に有時を由として、義を他にしたる目也、腰に在ても義はさま〴〵ながら有ゝ聞ゆ、其義にうらのはいたづらなる俗目也、さて此[や]はたゞに[よ]といひたるにあらで、同義なるをくらべみよ、

行年よ京へとならば狀ひとつ　湖春

撫子よ河原に足のやけるまで　鬼貫

此撫子よの句は、よと云を譯せんには、汝が色よきにめでゝ、足の燒るまでも河原あそびするぞとことわるべけれど、同じくは＼なでしこやと打ながめたきもの也、さて哥にもよと云べきを、やと云しがあり、＼聲たえずなけや鶯＼なけやなけ高間の山のほとゝぎすなど也、是を或人は、此やはよと云に似ていさゝか打ふるまへるやうに聞ゆといへり、さばかりのこゝろばへは、己〳〵が私に引たびかせたるにて、必定まれる事にあらず、たゞよとやはやいゆえよの音に通へりとのみいはんぞ難なかるべし、又同じ呼かくるにも、たま〳〵やに通はせがたきがあり、又令してよと云あり、それらはよの條下に云べし、或人の抄に

やあしばらく花に對して鐘つく事　重頼

是を令の詞也といへるはわろし、是も鐘つく人をたはぶれに呼かけし也、つく事なかれと令すとも、つかでやむべきかは、やよやよやなど呼かくる詞哥には多し、俳諧には＼行年よの類なるを、句意によりてやよやよやなどゝも諺解して聞べき事也、

やはといひて＼物かはと諺解すべきがあり、是連俳は詞の短かきが故也、

ほとゝぎすやは初鴈のさよまくら　兼載

しぐれやはひとつに染し春の山　紹巴

是杜鵑時雨等の物を擧て、やはと呼かけたれば、＼物かはとも解すべし、＼杜鵑は物かは、初鴈がねの小夜の枕におとづるゝあはれさは、＼時雨は物かは、春の山をひとつに青やぎて染なせしはと也、

或抄に、えやはのえは假初に冠らしたるにて、えに用なく、やはかの義也といひて、其引出たる句

十かへりの松にもえやは梅のはな　宗祇

此說あやまれり、是は常にえせぬようせぬなどゝ云詞なれば、えは假初の詞にあらず、＼松にもようかはおとらぬ老梅ぞと祝ひたる也、＼えやは伊吹のさしも草さしもしらじなとよめるも、ようかは我もゆる思ひはしらじと也、＼いへばえにいはねば胸にさわがれて

は、いへばよゝに、いはぬには、心ひとつに胸のみ打さわぐと也。さるを[え]を去て。下に[か]を添べしと云は、あやまりたる說也。又或抄に〽のみや〽かたらめやの類は。〽のみやは〽かたらめやはと。下に[は]を添て聞べしといへり。よろしき歟

　藤のみや比はたそがれほとゝぎす　宗祇

藤のみやはくらき。比ははやたそがれなればぞ。子規も啼と也。此格にて。〽藤波のなみに思はゞ我戀めやは〽戀をしこひばあはざらめやはなどよめり。又[めやも]とよめるも同格也とこゝろ得べし。〽なれずばかけて我こひめやも〽今さらに雪ふらめやも。是ら也。又〽かたらめやなどは、かたりたきの願ひなるがあり。さる時は[は]を添べからず。

一かぞふる辭の[や]は。物二つの中にありて。其わかち月を見する也。〽月や花〽雪やあられの類也。此詞は〽月や花や〽雪や霰やと、下にも[や]の字を添て見るべし。漢文に。心之所同然者何也。謂理也義也。是を或訓点に。理と義とを云とよめる格にて、〽とに通ふやと云俗目あり、わろし、かやうなる所を[と]と云は。〽それと是と〽かれと是とゝ。左右なるものをくらべ云用にて。[と]は即物を指す辭也。[や]も〽かれや是やといへど。算ふるにて。指すにあらず。猶くはしくいはゞ[と]は[とも]の略語にて。古書に。與共將兼の字を。[と][とも]など訓るに見つべし。それをはやくより哥辭にも。物を指す辭によめり。言語は代々に轉運する物なれば。さる事なりとは心得べけれど。つひに其本義をわするゝ事と成にたり。又是を〽中のや〽はさみやなども云は。例の辨義なき俗目也。

　聞くは誰峯のあらしや雉子の聲　おにつら

なども峯の嵐や雉子の聲やとかぞふる也。又

　月の秋花の春たつあしたかな　宗祇

　蔦むぐら皆秋風の道具なり　來山

是ら[や]とはいはねど。物をかぞへ出たれば、[や]を入て聞べき格也。〽月の秋と花の春と〽蔦むぐらとゝ。[と]にかよはすには。おほよそを云にし[illegible]で、た

と二つのみの事と成ぬ、月の秋花の春は大凡を云にて、四時の詠物それのみにあらず、蔦むぐらの一物のみ秋にたへぬ物ならず、猶枯もして秋のあはれをみする物あまたなるを、と にかふはせには、事の廣からぬをしるべし

や の辭猶多し、されど今はおもひ出たるにまかせていふのみ也

## かな 幷 か

かな は詠歎の辭也、詠數の辭也、願ひの辭也、漢文に乎耶哉歟等の字をも、かかな と訓じ、哉の字のみにあらぬを、此字のみ借て書るは、必竟 かな と云詞の目じるしにのみ用うるなれば、其餘の六字は更に借り用うべきにあらず、前にも云、言語は かな と打出る心の主にしたがひて、臣妾のつとめ忠なる物なれば、義に於て、或は重く或は輕く、さま〴〵に活用すべし、されど＼あやしみうたがふと＼ながむると＼ねがふとの他なく、猶約むれば一義にて、＼ながむるのみの辭となれるなり、さて此辭は か とうたがふが本義にて、な とそふるによりて、三目の用をなせる也、

な を添る例は、あ と歎ずるに あな といひ、せ とたふとむに せな と云類也、上古の萬葉集には かも とよみて かな といはず、たま〳〵 かね と云しがみゆ、

ね も添て其を助くる也、又 な と ね は同音なれば、

かな は かね より轉し來れるもの歟、菅家万葉集、古今和哥集によりて かな とよめり、かも もたま〳〵にはよむ也、是も又 か と一音にいふと、かなかも といひ、かもや かなや など二合三合して云とは、おのづから輕きおもきの活用あるべし、漢文にも＼也哉＼也乎哉など〻二字三字なるとは、文義の輕重あるに似たり、

一 か と云辭は＼うたがふが本義也、さてうたがふに二義有、常に云は＼明日は雨もせふか＼誰ぞ來うかなどの詞一ツ也、又＼花の木を見て、かほどにまで咲べきものかといひ、＼人の子をみて、さばかりおとなしくおひたつものかと、あやしみうたがふがひとつ也、此

あやしみうたがふまゝに、言に打出るをながむると云、其ながむるあまりに、［な］と一言をそへたるものと心得べし。古語拾遺に云、事之甚切皆稱阿那と、いにしへ物に感じて打出るには、先［あな］とながめし事となり。又語尾にありては［かも］とながむ、〵あなたのし〵あなさやけ〵あな面白。又〵さね床もあたはぬかもや濱津千鳥よ。是ら神代の言語なれば、次〻の代是にならふべき事也けり。或人の諺解に、［かも］を〵かさてもといはれしはよろしき歟。さらば［かな］は〵かあなとさとすべきか、

一［かな］に哉の字をあつる事、漢人の譯に、哉は句絶而有嗟嘆之意と云がよくあたれり、〵山櫻かな〵時鳥哉と云は、まさに其物に對して感情のあまりに、それが名を呼て。さて句絶てながむる意ある詞也、さるを諸抄の中に〵治定〵落着〵現在等を云は、本義を他にしたる俗目なり。此俗目をことわりの如く思ひあやまれるなり。〵うたがひの哉と云は、別に口傳とさへ云人あり、［か］と云は疑ふこそ本義なるは、哉の字を借て書るにも、猶乎耶歟與等の字を假て書るをも思ひて、治定の義なきをさとるべし、又落着とは何ぞや、思ふに句のとぢめにあるをもて云歟、常には其事の首尾とゝのひしをば落着と云也。又現在とは、今のあたりなるを云詞なるを、〵現在のし文字に對したるなのみ。〵現在の哉といふ也と云らことわりなし。此外〵浮沈むなる〵うたがひの哉など、猶下に論ずべし。［かな］のみにあらず、何くれのてには切字に。ことわりなき俗目な。しかるよに心得て、初學より打出るに。十になゝ八つも義のたがはぬに、古人の作例に擬ふが故也。其古人は、又の古人の言語をよく辨まへたるにならひたるもの故に。むべことわりはたがはぬ也けり、さて我におきて〵治定〵落着等の目をいはず、是を〵詠嘆とも〵疑怪ともいふべし。〵詠嘆とは、よろこびにも悲しみにも打ながむる詞にて。たとはゞ隈なき月をみて〵こよひ哉とながめ。盛の花をみて櫻かなとながむる。其おもはくを詞に文なし、物にたとへなどもして［かな］と云也、

是句絶て嗟歎の意有といふに。またくひとつ旨也。或抄に＼あゝ櫻哉とことわれるはよろし。是目前のものにむかひてほむるなれど。たとふる物につけ。譽る詞につけて。おのが心に思ふほど〳〵を打ながむるなれば。治定など云べき事にあらず。治定とは我も他もおしなべての事也。＼風寒し＼人はいふ也＼年はくれけりなどの類をこそいへ。＼風さむしは我も人もおしなべて寒き也。＼寒さかなは我一人の寒苦をなげく也。おのれ一人の心を。いかで他人におよぼして治定とはいふべき。仍て＼治定の哉と云目はあたらぬ俗目なるをしるべし。又＼落着の哉と云もわろし。若句のとゞめに何哉とあるをもてとならば。例のあり所を云までにて。無用の俗目也。又＼あゝ櫻かな＼あゝ月夜かなと。其餘念なき所を落着したりとことわれるは。落着の詞おのがおもはくに過て。目を立るかひなし。たゞ＼嗟歎の哉といふぞ義にあたれる名目なる。

地主からは木の間の花の都哉　　季吟

新春の御慶は古きこと葉かな　　宗因

薄曇けだかき花のはやし哉　　信徳

面白や。地主の林に來てかへりみれば。木の間に榮ゆる花の都なるかな＼新春の御慶といふは。年ゝ新しからぬ古言なるかな＼客にしられぬおぼつかなき花ぐもりして。けだかき林なる哉。是＼都なるかな＼林なる哉と。言をそへて聞べき作例也。又

草の葉を落るより飛ほたるかな　　はせを

鶯の身をさかさまにはつね哉　　其角

古庭にあり來りたる牡丹かな　　嵐雪

此作例。上なると少たがひて。物の有さまを見るがまゝに。たゞちに云つらねて[かな]とながめたれば。巧みすくなきから。[かな]の義も輕くこゝろうべし。草の葉末を落こぼるゝよと見る〳〵。飛立行螢哉＼枝づたひして。身は逆さまながらに轉る初音かな。＼物好したる前栽に。昔しのばしき牡丹哉など。見たまゝ聞がまゝをいひたてしもの也。

又初の五文字に事物を擧て。さてそれに對して。下の十二字におもふこゝろばへをいひ立る作例、

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

花咲て死とむないがやまひかな　来山

文は跡に櫻さし出すつかひ哉　其角

まだ夜ごめなる柴戸出の道の梅薫るに。春日の影のさし出て面白き山路哉。へ文は跡の事に。先山づとの櫻が枝を差出すは。さかしげな使哉へ世は花咲て。浮たつ春の心には。たゞ死ともないが此頃の病かな。へやかなとて。殊なる目を云も此格也

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべ哉　はせを

夕皃よ。花の時は一色なるに。秋来てはいろ〳〵のかたちを見せんふくべかな。

又へ現在の哉といふも同格也。

蝶かろし比は着る物ひとつかな　湖春

蝶の翩〻たるをみれば身輕し。されば春の此比は。人もひとつ着物にかろらかなる哉。是五文字にへ現在のし文字をおきて。それに對したる故也。へ現在の哉といへりと也。例の俗-目也。へし文字にかぎらず。いづれのてにはにても。現に在る物をみてへ梅が香にへ花咲てへ夕顔よなど云は常の事なるを、それに懸合せしは。こと〳〵へ現在の哉也ともいはゞいふべし。是たゞへながむるやの中なる一-格也とこゝろ得べきのみ。

又てにはなれども。中の七文字の中に在て問-答したれば。おのづから切字に似たる活-用もあるかなり。

一時にちる身へで花の座敷かな　来山

口くせのよしのへも春のゆくへ哉　淡ゝ

一時に散べき身で。何をひとつ臺にあらそふ座-論-梅かな。へ年ごにいひはやせる吉野の櫻狩も。今は春の行方と共にむなしく過しぬるかな。是へ散身でへ吉野もなど云に。心とゞめて見つべし。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉　芭蕉

一-晝-屋錠をおろして躍かな　其角

へ壁をふまへてへ錠をおろして。此[て]もてにはにて、下につゞく用ながら。晝寐も躍も事を殊にいへれば。こゝに活-用ありて聞ゆ

又同-格にて、[て]は[つゝ]にかへて聞べきあり、

閨のむま屋にて

橘の蚊(マヽ)にせゝられて寐ぬ夜哉　宗長

正月を馬鹿でくらして二月哉　信德

此格＼蚊にせゝられつゝ寐ぬ夜哉＼正月をうたら〳〵とくらしつゝはや二月哉と、少シほどふる意ありて聞ゆ。是をたゞに[つゝ]といひしは、

契不逢戀

油さし〳〵つゝ寐ぬ夜かな　鬼つら

是哥には、[て]に通ふ[つゝ]と云教へ有によりて、かくもこゝろうべし。されど[つゝ]の[て]にかよふといふも、必-竟は諺-解のみ、猶[つゝ]の下に云べし。

又上にても下にても、うたがふ辭を懸合して[かな]と云は、＼うたがひの[や]の例もて。＼疑の哉とも云べけれど、此うたがふはあやしみうたがふにて、たゞうたがふのみにあらず、めぐらせてはながむる辭也、牀-前看ミン二月-光一、疑ラクハ是地-上ノ霜と云も、月の光のきら〳〵しきを霜かとうたがひたるが、即疑-怪の意にて、たゞうたがふにあらねば、是もながむる辭となれる也。



萬葉集にも、疑ギ-意イと書て[かも]と訓ヨミたるを、彼或人の、＼かさこそと諺-解したるをおもひのにすべし、

山や雪木の葉吹こぬあらし哉

山は雪やら、けふは木葉も風に吹こぬ哉とあやしめり、[や]はうたがふにて、＼山は雪歟とこゝろうべし。

辭世

朝兒にけふは見ゆらむ我世かな　守武

けふばかりなる我世と思はるゝ哉。人もはた夕べをまたぬ花とか見らんと也。是上に[やらん]などうたがひたれど、[哉]はおのが感によりて打ながめたる也、

花さかり誰がおほゆる日數かな　宗長

誰も身のゆくへは野邊の霞かな　紹巴

花の盛はわづかに七日ぞとは、誰がおぼゆる日數かな、思えずもあれかし、＼誰も身の行方は野べの烟となりて、霞にたぐふとわりなる哉と打ながめたる也。

誰が袖ぞうら山吹のにほひかな　宗祇

是は山吹がさねの衣着キヌたらん人にたぐへて、此花の色のにほひやかなるを、よき人のけはひする哉と打なが

めたる也、是も誰が袖ぞと句を切て、それに對したる哉也

或抄共に〱うたがひの哉は、なを捨て聞べしといへるはあやまれり、即共引出たる句は、

さく藤のうら葉は波の玉藻かな　宗砌

闇からぬ月はかつらの木陰かな　親當

是玉藻歟、木陰歟とうたがふにて、なに用なしといへり、しからず、是らは藤の花をめで、月を見はやして、藤浪の名たゝるから、末葉(ウラバ)のなよやかなるは、其浪の玉藻なる哉〱かばかり隈なき夜の影は、月桂の名に巧みそへていへる也、是も〱ながむる辭なるを、なを捨てたゞにうたがへるのみとするは、作意おとりて、且かなの義をもあやまれるもの也。

こそといひてかなと結(トヂ)むる格

袖にこそ契る花折る野分かな　宗祇

袖にこそ摺(スリ)てにほはすべき契ある花なれ、それをむごくも吹しをる野分哉とながめたる也、此句かく注すれば先は聞ゆれども、一わたりにはむづかしげなれば、或抄に聞まどひて、袖にこそ折んと契る花なれとことわりしは意を得ず、こは袂が花ずり衣を云たらんを、袖にて花を折べきものかは、花は手してこそ折べけれ、

にてにかよふかなと云目、〱霞かな〱霞にての類也、或抄に近來嫌ふまじきよしに云はよろし、かなとにては究めてかよふ詞にあらず、にてにしては物をうけて下につゞく詞也、句のとぢめにいへば、詞を餘し、或は上へ倒(カヘ)る用ある故に、かなの餘情あるにふと思ひまどはして、さる目はいへる也、疑怪してながむる意にあらざればかなとはいはず、此ことわりと指定めざれば〱何にて〱何にしてとはいはず、漢文に於をに而をてと訓(ヨ)むにても、詞とは義の異(コト)なるをしるべし、

大津尙白亭にて

唐崎の松は花より朧にて　はせを

是誠に幽曉なる句也、おなじ湖邊の眺望よきほどに

隔たりて、春の日の打霞みたるには面白くや見えつらん。此句をにむる人の云は。是なん〽朧哉と云べきを、にてといひしが最妙也といへり。此說はにてとかなは意のかよふぞと思ひあやまれるなれば論なし。こは朧にてあな面白の詞をあましたる上ー手のしわざ也。されど月を朧とは常にいへば。月より何が朧也と云べし。花を朧とは常にいはねば。松は花より朧也といはん事耳だゝしくおぼゆるまゝに。たまたま蕉ー門の人にあへば。此事を問もとむるに、しかる故ありとこたふる人なし。因ておもふに。是は續古今集。後鳥羽院の御ー製哥に。「よしの山櫻にかゝる夕がすみ花も朧の色はありけり。是櫻に夕霞をかけたればこそ。花も朧の色に打曇りたるはとことわらせ給へば。言ー語はとゝのひませる也けり。此句をたすけていはんには。此御ー製に打まかせてかくいへる也とことわるべし、〽浮たる哉と云は〽霞む哉〽やどるかな〽濁る哉などゝ、てにはよりつゞく詞也。或抄に。是をもくるしからぬがあり、又あしきがあり、但哥には其あしきと云もよみ入るゝ事有、いかなればと云に。三十一字を上下にわかちて。其詞をいひまはすによりてくるしからず、連ー俳の十七字には。いひまはす所の詞多からぬ故にあしき也といへり、さらばいひおほせたらんには。哥によむ詞を。何のにくむ事かあるべき。又或抄には。此格をかたくすべからぬ物にいへり。

雲は雪月は氷と見ゆるかな

梅は花柳はまゆをひらくかな

此二句ともに言語とゝのひて聞ゆ。是を忌むは必ー竟其時の師ー家の私にて。不ー朽につたふべき教ー訓にあらずとしるべし。

春の水ところどころにみゆる哉　おにつら

春ー水四ー澤にみつるの句を、よく和したる上ー手のしわざ也。かくだにいはゞ何かははゞかる所のあるべきぞ。

〽沈むかなと云目なるは。同じくてにはよりつゞくかな也。

空かける鷹はむかひの鳥をがな

名月に旅たつ人は須磨へがな

是らはいかさま聞よからず。かく句は作らずとも、いかやうにもあるべき事也。さて〳〵浮く〳〵沈むの目は例の私なる俗目也。

一ねがふ辭の[かな]は、大かた[も]と云一言を上におきて、[かな]の[か]を必濁り、[もがな]といへり。[がもな]ともいふあり。またく同意也。此詞のこゝろは、得られまじきを得まく願ひ、あるまじき事をもありたく願ふにて、切なるあまりに、心をさなく打ながめ出る也。萬葉に、欲得欲將と書て、[がもな]とも[もがな]とも訓るをむかへてしるべし。

彼岸とて慈悲に折する花もがな　重頼

それと聞く虚耳もがなほとゝぎす　望一

黄菊白菊其外の名はなくもがな　嵐雪

又[も]といはでも同義なるがあり。されど詞のあましがたきにせまりで略けたる也。

身がなふたつ吉野も盛金龍寺　西鶴

身がなと濁るにて詞はとゝのへる也。

又[もがな]の得られぬを。〳〵えまく願ふばかりにはあらで、かろく願ふがあり。〳〵とめこかし梅さかりなる我宿を〳〵吹けがし風のふかであれかしの格也。

寒中の時鳥と云題に

ほとゝぎす聲つかへかし寒のうち　貞徳

是は人のなすべきほどの事を〳〵せよかし〳〵あれかしの義也。小哥に〳〵來ても見よかしなとうたひ〳〵とへかしなと哥によめる類なり。又〳〵あなこひし今も見てしかとよめるは、常に見たしと云にて[かな]と添たるねがひの辭也。此〳〵見てしかの[か]は[かな]の略語也。すべて[かな]はいつごに在ても同義也。句の末のみにあらず。

いはほにも花さく世哉石の竹　宗祇

浮世かな月出てより小夜しぐれ　紹巴

をり得たる色哉水のあやめぐさ

[かなや]と云は、かなと云より義深きと云べし。されど一言たらざるに[や]と添たるもあるべき也。

花鳥も時なるかなや櫻がり　宗砌

[か]とのみにて[かな]とこゝろ得るがあり。此格大かがへれば、ついでに云也。是夜あるきする子を、母の
た上に[も]と云辭を懸合していへり。へ＼さびしくもあたけきて寐ざりけるといひ立て。水鶏のたゝくをば、
るかひぐらしの聲へ＼うつりも行か人の心の。これら也。野郎ものがかへりしかと思ふとの意なるべし。是へ＼水
[も]とたすけたるにて。あやしみうたがふ義となる也。鶏哉とばかりにては。さる長〻しき心はことわりたらず。

けふぞへにあまねくもあるか春の雨　宗碩

くひなは思ひ子の歸りしにたとへ。寐ざるは母の慈-

打つけに悲しくもあるか聖-靈-會　一水

愛とわかれて。自-他の差-別なき也。大かたてにはの

こゝにへ＼ながむる詞の哉ながら。彼へ＼濡椽やの[や]の如くにうかといひたるあり。ことわりあはぬと云は、初-學のしわざなるを。是らは達-人の巧みに過たるにて。わづか十七字の間に。ふさ

動くとも見えず畑うつ男かな　去來

はれ長きこゝろばへを打出るがあやまれる也。哥にも

此畑うつ男は。何の見所かありてかく哉とは感じ出たあれ。發-句にもあれ。それがいひおほすべきほど〳〵
るぞ。或集には。此句をへ＼麓かなとあれば。作者の意は。の事を打出んに。言-語をなさぬ事はあらじものを。た
動くとも見えねど。あれは遠山本に畑打でかなといふとはゞ千-里を一-日にゆかん龍-馬と云も。數-万-斤を
なるべし。さるにても其麓に。花や林のけしきあるを屓(オホ)せなば（負）一-歩もすゝむべからず。言-語の神-妙。てに
めでゝ云にあらねば。[かな]といへる詞の手柄なし。はの活-用も。凡其文-字の數に屓すべきかぎり有べし。
是[や]も[かな]も連-俳の人の茶-飯にいひなれたるか十七字に巧みえぬは。三十一言の哥有。狂歌有。猶い
ら、かゝることわりなきもたま〳〵には見ゆる也、又ひたらずば長-歌あり。文辭(フミコトバ)あり。其ほど〳〵をはかり

夜あるきを母寐ざりける水鶏哉　其角

て打出べきもの也けり。

此句は[かな]の義はたがはねど。自-他のことわりた一[か]とのみはうたがひの辭也。是には上に[も]と云詞

のかけあひなし、

鶯のむすめかなかぬほとゝぎす　守武

川上は梅か柳歟百千どり　共角

菊の時屋根とられしかあやめ草　如泉

〽秋の野の草の袂か〽とわたる舟のかいのしづくか、

是らうたがひながら指-問義をかねたる詞也。

[かに]と[に]を添しは。同-格ながら添たるにて。すこし義のおもく聞ゆる也。〽水まさりなばかへりくるかに

〽おいらくのこんといふなる道まがふかにの類也。

[かや]とか[や] もうたがひながら。指-問義おもく聞ゆ。

〽針はこのふたつの袖にさしつれどひとつも見へず落にけるかや。〽何とかや莖の姿はおもほへであやしく花の名こそわするれ、[かは]は[やは]にかよひて。

[は]はそへて意を助くる也といふ事。上の[やは]の所にくはしくいへれば。それにて見つべし

くらべ馬神の科かは辰の方　周木

神のとがめにはあらずと。打反して聞格也

常に云言語に〽まだいふか〽それのみかなど云[か]あり、是を或抄に、治-定の詞也といへり、わろし、是もとよりうたがひの辭也。〽よいと思ふてまだ云歟、よくもあらぬにさいふは。何としたる心ぞ。〽それのみ歟。そればかりにてはあらじと。共にうたがへる也、

[か]と云に治-定の義はかたくあるとなし。

一近代の歌に。[かや]といひて[かな]に通はせてよめるがあり。さらば[や]は打ながめたる辭としてよめる成べし。本-義にはかなはぬ詞ならん歟連-俳などの文字数すくなきには。聞まがひすべき事也。必用うべからずここ又是は論にも足ぬ事なれども。言のついでに言也、近-來いさゝかも物心得ぬ俳士達の。十七字の末を、〽鶯や〽梅咲やなど結むるが稀ゝみゆ。連-哥-家にはかけても思はざる句づくり也。俳諧にも古人の作例あるとなし。もしたまく〳〵に。〽近江のやと末におきし、鏡山をいはねど聞えさするやうの作意なる活用などは自-然の事なれば赦すべき歟。それとても功-者のうへの事にて。しかもしひては好まざる事也かし

也哉抄　尾

也哉抄續編　近刻

安永甲午季春刻成
天明丁未季秋發行

大阪書坊

赤松九兵衞
山口　嘉介
吉野六兵衞
増田源兵衞

# 新雑談集

首・尾

几董著

# 新雜談集（卷首）

一　我に古今集有、歌枕有。春秋ことたりて貧しき事なし。

　このうへに何か都の花の春　（宋）宗阿

半時庵淡々、浪花にありて此句を見て曰、惜哉とし巴人は舊府に歸べしと。はたして其夏のころ、ふたゝび東武に栖をうつすとて、

　古郷をふたつ荷ふてころもがへ

一大魯は阿藩の士、公務の餘力風流に志深く、晩年に及致仕して京師に住し、余と膠漆の友なりしが、また浪華に遷て三とせの秋、

　われが身に古郷ふたつあきの昏　大魯

おもふに阿叟のふたつ荷ふて　とありしは、元文の比の曲節にして、魯が古郷ふたつと感ぜしは、四十年の流行にあへるものならむかし。

一　時雨るゝやしばし芝居の夜の段　羅人

　しぐるゝや誠の昏は鳥騒ぐ　几圭

おなじ冬の作にて、世の人もとかく評せし句也しを、羅人が圭が句、我句に等類ちの也など聞えしと、老父は片腹いたく申侍りしを、昔の事に聞傳え侍りしが、今案ずるに羅人が芝居の句は其時代の流行にして、老父が、まことの昏と申せしは、三十年の後も不易の句成べし。

　今出し日はいつかへるひがし山　羅人

　白萩や細谷河の浪がしら

是等の句世に賞美せり。京にはなつかしきひとりにて侍りし。

一　浮葉卷葉此蓮風情過たらむ　素堂

　乾鮭や琴に斧うつ響有　蕪村

蕉翁曰、素堂が句、蓮と音によまざれば、一句の手柄なきに似たりと。暫く是を案ずるに、蕉翁の琴に斧うつといへるも趣相おなじ。されど片田舍より文のはしに、琴の字に音引せられしは、音訓差別ありての事にやなど、なじり聞え侍りしは、句を聞ことの疎きのみかは、

不幸にして古人の句をも多く見ざりし人にや。いとおぼつかなし。

一移竹は竿秋が門に有ながら、半時庵が遺風を好まず。去來が風骨を探りて、元祿の古調に意をよせ侍りけり。

流木に尻聲さむき蛙哉　移竹

かすみより雨降出して遠ひがた

また或時、

わりなしやみどり子に扇貸風情

此句を聞て竿秋曰、移竹はさもなき句をむづかしく作るおのこ也。わりなくもみどり子にかす扇哉　とすればよく聞えるものをと。おもふに移竹はわざと一句をくた〳〵しく云下して、風情といふ字に句をもたせたるたらんかし。

菜の花や嵯峨を限のひがし山　竿秋

一或時夜半叟其外同志のものと清水寺に詣侍りて、閣上より眺望し侍りけるに、菜花黄金を敷たるがごとく、淀川・八幡山の邊りうち霞て、春色えもいわれぬ詠なりけるに、忽かの言水が、

菜の花や淀もかつらもわすれ水

かゝる景情の不易なるを、その〳〵感じあへりしが、一人曰、昔の句は何となく手厚く、時代蒔繪を見るやう也。今の流行とはいさゝか違へるはいかにと。予いふ、今の人とても、菜の花に淀も桂もとまではおもひよるべし。忘水と慥に置事難し。よしわすれ水といふ趣向うかびたりとも得置侍らず。只、淀もかつらも夕がすみ　などゝ幽艶めかして、句をまぎらかし侍るが今の流行なり。我ともがら此病いかふ愈しぬべきと歎じければ、蕪叟もうなづき申されし。

一題ひとつをえて、おもむきを百に分て句を案ずる時は、百様の姿情を得るなり。さほど勞煩をなさずしては、さうなき一句のぬしにはなりがたしと、太祇は常〳〵申されしが、世には勝れたる好人にて、座臥行歩の隔なく、夙に起出るよりいねるまで、目に見耳にふるゝ事、ひとつとして心にとゞめずといふ事なく、やがて句案にわたりしかば、几邊に大きなる草帋を捺え

置て、思ひ出るにまかせて筆採侍りけり。されば生涯の發句いく万といふ事をしらず。かの句集に撰出すところは其半にも過ず。猶もれたるものに、秀逸少からず聞え侍りし。

句を練て腸うごく霜夜かな　太祇

よくのまば價はとらじとし酒

一雅因が嵯峨の宛在樓は、あらし山の花を懷にし、梅津・かつらの流に眸をさく。簷前十歩にしてひんがしに流るゝ小川に、ひとつの小島ありて木草生茂りたれば、夏の夕昏は螢飛ちがひ、秋は鈴虫の聲ふりたつるより、人まつむしの便をえたり。南は田野渺々として、遠く生駒の山の雪をのぞむ。かゝる勝地の閑居なりしかば、都鄙の騷客ひとたび訪はざるはなし。かの東武なる竹護は洛に卜居してより、日來此樓にめでゆきかひて、終にかの山の名をそのまゝに嵐山と更名せしが、今は其人も世になくなり、あるじの雅因も老衰の後には美景にも倦侍りてや、市中に移りて終をとれり。何事もむかしになりゆくぞいとなつかしけれ。

小角力やきのふはひがしけふは西　雅因

八瀬や月の都の這入口　嵐山

一武の祇峯は雅因が客と成て、ひさしく嵯峨にありけるが、盲(メシイ)て後心にもあらぬ籠居し侍りつゝ、終に旧里にもえ歸らずしてむなしく成侍りけるを、人も哀といひあへりけり。

川音やこゝろ覚えの山ざくら　祇峯

一春泥舍召波は黑柳氏にして維駒の父也。初老の比より家を辭し、郊外に閑居してひたぶるに俳諧を樂しび、酒盃を弄し、座上客常に滿て、春の日の暮ゝも秋の夜の明るもしらざるがごし。されば句々離俗の境に入て、嵐雪が高邁なる語勢ありけり。沒後艸稿を撰し春泥句集といふ。

燒火歟とゆふ日の藪や花に鐘　召波

うき人に蚊の口見せる時哉

浴して且うれしさよ簟

つけさしのほに出る君やことし酒

一或時人々打よりて梅の句題を分ち侍りしに、予は月下

梅といふをえたり。

　梅が香に狂ふがごとし月の雲　几董

この句、只題のおもてによりて、余宴の風情を述侍りしかば、さのみ人の賞せしにもあらざりしを、ひとりいせの樗良は一句の景情感浅からずなどいへりしか。

へきのふけふ雲のたちまひかくろふは花の林をうしと成覽。狂−雲妬ニ佳−月ヲ此句のこゝろよく此哥にかなへりとは、細川幽齋の御説也。かのいせの法師は、かゝる事をもよくわきまへ侍りしにやと、ゆかしくおぼへ侍りし。

　くるゝ日や庭の隅より梅の影　樗良

　見苦しき畳の焦や梅の影　几董

　　臥龍梅

　雲雫やひそまる時は鉢の梅　蓼太

　烏帽子着ぬ禰宜は老たり梅花　春坡

　梅咲ぬれど撿挍どのゝうき世哉　道立

　誰か見し春のかたみぞ月と梅　いせ 北野

　立出て梅に酒ふく月夜哉　江戸 一成



　梅がゝや月は入ても君が門　尼 古友

　太刀持を犬や吠らんうめの花　几圭

　羽織着て子を懐や梅の月　宗阿

一題山家

　足あとはよべ啼し鹿や松の門　董

かくは句作り見たれども、とかく心ゆかず侍りしが、口夕見ニ寒山ノ便チ爲ニ獨往ノ客ト不レ知松林ノ事ノ但有ニ麏麚跡一かゝる余情は俳諧のうへには、いひとりがたきにやと思ひしも、猶余が未練にてやありけん。

　大風のあとの月夜や鹿のこゑ　但馬 寒秀

　戀わびて人にもよるや秋の鹿　越中 直生

一近比、生野ゝ方より出たる句合の集に、晋子が十三夜の句をあげて、

　はらゝ子を干ゝに砕くや後の月　其角

いかなる心にやありけんと有。此句に不レ限都而大家の句は等閑に評しがたし。鯆(ヘラコ)に限らず、魚の胞中に粒ゝなるものは、熟し滿ざるをもて珍重し侍る。されば月下の遊宴に時節の景物をとり合せて作せし句也。或

人難じて曰、さは後の月に限べからず、名月・菊の姿などにも相應すべきと。予答、然らず、この句のちの月ならでは詮なし。千載集に九月十三夜の月を、

秋の月千々に心をくだきゝて
　今宵ひと夜にたえずもあるかな

何よけんもうをはたしろ冬肴　角

雀子やあかり障子に篭の影

これらの句もよりどころ侍る也。何よけんの言葉は、催馬楽に、大君來ませむこにせん。さかなには何よけん、あはびさたのこかせよけむ。又明リ障子の出所は、非蛙抄に俊氏卿、〽いにしへのいぬきがかひし雀の子とびあがりしやうしといふらむ

此下の句を裁入て、明障子といふ作意の手柄、しかも一句の打きゝもよく景情を備へ侍りて、凡力の及ぶべき事にあらず。

一聲やながなくあとの枝うつり　といふ句に長鳴と文字を添へて、但馬のかたよりきこへ侍りしに、大魯がかゝる麁忽は、俳士の愼しむべき事也と申せしか。

うぐひすよながなく枝に蒙は何　雷夫

是は落梅といふかくし題にてせし句也。古今集第三よみ人しらず、

ほとゝぎすながなく里のあまたあれば
　なをうとまれぬおもふものから

是等は汝鳴の文字なるべし。又俊賴朝臣亭にて五月五日の會に、良暹か哥に、

宿ちかくしばしながなけほとゝぎすけふのあやめのねにもくらべむ、とよめりけるを懷圓あざけりて、ほとゝなきはじめて、きすと詠るにやと云々。此哥は長鳴ならんかし。

芭蕉庵の砌なる松の樹に來りて、
杜鵑の數聲打啼けるに

ほとゝぎすあとは松吹あらし哉　董

ゆく風に心はなつや若葉山　雉菴

朝皃のはやおもひ有更衣　ハリマ 青蘿

ほとゝぎす客へかたちは違とも　奥州 玉屑

はづかしや香にめでらるゝ花いばら　湖岳

みじか夜や蚯蚓鳴なる艸の宿　維駒

酒ゆるす醫師も見えて夕凉　董

一此句はじめは、凉哉　として人にも語侍りしが、其後蝶夢法師の申されしは、哉とゝめて慥には侍れど、夕凉の方可ㇾ然と。退ておもふに、夕の字一句の限目とは成侍りし。

舟慕ふ淀野ゝ犬やかれ尾花　、

ひとゝせかの法師、名所小鏡著述の時、俳諧に淀野ゝ作例稀也とて此句を撰入られしが、そのゝち或夜話に、此比浪速よりの歸さ淀野ゝわたりにて、かの舟したふ犬に餉などわかちくれて、又此句をおもひ出侍りしなどかたり聞えけり。

雪の昏馬もひとつはほしきもの　蝶夢

竹臥て寺あらは也雪のくれ　浪花 二村

暖に成てふりけり夜のゆき　信州 路人

寺〳〵の鐘忘れりゆきの朝　但馬 朱匪

**或僧の物がたりに聞ゆ。**



すつへりと日に向てあり雪の山　仙府白石 樂嘯

一浪華の舊國、武の一音同道にて、高津の邊りを吟行しけるに、

霞こしわか葉こしてや西の海　一音

はじめ座句淡路島と置けるを、ふる國曰、たま〳〵の眺望には尤さもあるべし。日頃浪花に在ものゝこゝろには、只西の海づらを若葉がくれに望みたる、全く高津の宮の句なるべしと。一音頓悟してそのまゝ西の海とあらため、短册にしたゝめ、舊國に與へしとぞ。又二柳菴浪花に卜居しけるころ、四天王寺に遊びて、

花散て四門に春をたづねばや　二柳

未來記に有歟彌生のほとゝぎす

此二句を吟じて、いづれ可ㇾ然と舊國に見せ侍りければ、又いふ、未來記其場慥也といへども、昔も、未來記に有たか花の出開帳　といふ作例も侍るうへ、初の句四門に春をといへる風情、此御寺の外あらんやと。其さた洛にも聞えけるに、夜半の叟もよく句の場を見付侍りしと申されけり。

花落る江によしきりの初音哉　　旧國

一ある時、野分といふ兼題の會に、

瓜の蔓に茄子のなりし野分哉　　嵐山

瓜の蔓に茄子のかゝるのはきかな　　菫

はからざる同作は、あまたゝび有事にや。

鶯の羽ヲ洗ふ見ゆ帋屋川　　、

とせし翌年上京に、

うぐひすの觜濯ぎけり紙や河　　曉臺

一越の三國に長谷川といへる遊女の侍けるが、加賀の國より通ひてあふ男侍りけり。兼てゆくすゑの事など契置侍りてのち、露おとづれだにせざりければ、いかで斯うと〳〵しきなど打恨つゝ、せうそこのはしに、

おく底のしれぬ寒さや海の音　　かせん

一いせの麥林は、句に案じ入侍りては、欄によりかゝり、つら杖などつきゐて、やゝもすれば下ざまに轉び落などせられし事、あまたゞびなりしとぞ。さしも執深からずしては、一家の名は得がたかるべし。

かんこどり我も淋しひ歟飛で行　　乙由

この句はじめは聞得るものまれ也しを、ひとり金澤の希因より秀逸のよし聞え侍りしに、麥林も滿足せられしとぞ。

名月や風さへ見えて花すゝき　　希因

漁凉しよらば悲しきことやみむ　　麥水

あけぼのや里はくだかけ野は雉子　　闌更

雨うつ〳〵青桃落る山路かな　　佛仙

一或禪師、三界唯一心といふ題にて發句を望まれしに、松任の千代女が、

百生ッや蔓一筋のこゝろより

と言下にいひ出侍りけるにぞ、彼和尚三歎して、あなたうと、かゝる優婆夷の身として、比丘も及ばぬ口ずさび哉と、即時禮拜をせられしかば、共座にあり合せし江湖の所化、殘なく拜をなして、彼句を感賞し沙汰し侍りけるにぞ、やがて其國〳〵につたへて、千代が名旣海内にしられけるとぞ。後はさまをかへて素園尼と呼けり。薙髪ノ日、

髮をゆふ手のひま明て巨燵哉　　素園尼

東武泰里が姉古友尼、洛にて薙髮せし時

うきくさを拂へば涼し水の月　　董

一櫨イ亭にて喫茶夜話の折ふし、大龍和尙の亡父に申されしは、俳諧は利口なるものにて、我道にも心通ふべきもの也。此四句の意を俳諧のおかしみに調べ聞えよなど望れしかば、是ぞよき四季なるべしと、卽時に筆をとり侍つゝ、

卽心卽佛

いふて見や口に酢をもつ梅花　　几圭

非心非佛

さむしろや涼しさしらぬ高鼾

是心是佛

うなる子のあいやも共に躍哉

無心無佛

木がらしも人のつけたる名也けり

一武の竹護、原の白隱和尙に相見の時、閑談時うつりて後、俳諧のさたにも及び侍りて、先芭蕉翁の名句いづれにやと尋られしに、古池の蛙をかたり出て、讃詞筆の事を望れしに、和尙やがてしたゝめ贈られしが、五文字を古井戶と書あやまち有けるにぞ、とかくおもひながら、しかぐのよしを申侍ければ暫く沈吟して、此句は古といふ字眼目成べし。さは池・井戶違へるとも苦しかるまじやなど卽答ありしとぞ。此禪師はいかいには疎くおはすれど、洒樸の見よろづにわたりて、たうとく覺え侍りしと、嵐山が物語也。其後大魯にかゝる事ありと申せしかば、魯はにくみてうけひかざりしか。

夜は夜明よ日は日暮よと啼蛙　　蕉村

雨去らぬ月のひかりや初蛙　　銀獅

飛込で水にしづまる蛙かな　　白珍

鈍に鳴蛙も庭のけしき哉　　春坡

一我則興行の會に、夜半の叟、秋風の句を數多書つらねて、一座の案傑（龕）をうかゞひ申されしに、

かなしさや釣の糸吹あきの風　　蕪村

艸これに拂はれて色變、木これにあふて葉脱、慄冽として砭二人ノ肌骨一。予は此句まことに腸をたつがごとしと申せしかば、かゝる一句の餘情は聞得るもの希也と、

叟ゟ機げんあしからず侍りしか。ひと度此五文字、江渺々と改申されしを、ひたすらにすゝめて、もとの、悲しさや　といふに定たり。又同作に、

　老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉

一音が粟津にありて洛に遊びし時、此句を深く賞歎せしが、其のち但馬行脚の折から、そこ爰夜話の序にも此句を諷出けるに、彼地の門人等珍重して、恒にうがひの句ゟ膾炙せりとぞ。

　杜の鵜のうきをうらやむ篝かな　淡々

　罪深き水屑流るゝ鵜川哉　正巴

　よんべ見し人若かりしうがひ哉　松化

　月に疎き夜ごろを出る鵜舟哉　湖柳

　鵜かゞりの燃つくばかり鬢の霜　楚山

一今はむかし、原氏なるくすし有けり。都に住るかと思へばあづまの方にあり。又或時は浪速の浦風に漂ひて、爰に七たびおもてすなど人の謂りしが、此おのこ、みづから多能也と讃し、あくまで世の人ゟ嘲哢し侍りしを、さうなきものと思惑へる人もまれ〳〵ありし。俳諧の上をわすれて争へしがごと自負し侍りけり。さは三都の点取にさわ遊びて、何がしが會に高判を得し、誰〳〵には我勝れたりなどいへる、己が高名咄にてぞ侍りける。かゝることをのみ俳諧は得たりと思ひしは、浅ましき事也とよき人は申されし。

一点取にのみほこりて、勝負を争ふは初學の業也　此筋にとゞまりて他の句を謗り、或はかねて工み置る附句などを、席に臨みて似合しく次あわせなどせんは、いかに浅ましき志にや。よろづの遊びにも勝負を好む人は、勝て興あらんため也。己が藝のまさりたる事をよろこぶは、負て興なく覺ゆべき事しられたりと、よき人は申置れし。君子ハ無レ所レ争　と申ことも侍れり。

一よき判者だにあらば、句合などして勝劣を分ち見ん事、いと興ある事也。初學の人はもはら点取の甲乙を競ひてはげみ侍るべし。はじめよりさびしほりに分入て道に踏まよひ、狐狸のために正氣を奪はれ、睡のごとき句をなして、我正風の血脈ゟ傳えたりなどおもへるは、無下に詮なき事也。

一ひとの撰たる集或は附句など見んにも、おろそかにかいやりに見すぐして、おかしからずなどいひほぐしてん、いとびんなきしはざ也。已あく迄にほねをりたらん事をも、なべて人の聞得べきにもあらねば、其撰者、作者の意になりて、よきもあしきも見まほしきものならずやと古き人の申されし。

一おのれ俳諧はえたり皃に、しかも道に深からぬ人の集など見侍るに、まづ作者の名を見て、後に句の好悪を論じ侍る。かゝる未練の爲業はあらじかし。名利に惑ひ是非のわきまへなき人といふべし。

　これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室

　明星やさくら定めぬ山かづら　其角

　おとゝひはあの山越えつ花盛　去來

西上人の栞に迷ひ、彼貞室がこれは〳〵と打なぐりたる、又は晋子が櫻定めぬといひしに景色をとられ、吉野に句なし。たゞ、おとゝひはあの山越へつ　とおなじく吟行し侍るとは、芭蕉翁の雜談也。

一ひとゝせよし野の花見にまかりけるに、折よく花滿山の時にあへり。かねて思ひあまりにや心ゆかずて、ふた日ばかりもとゞまりて、曙・ゆふ暮の景色をも見まほしく、かなたこなたの谷〳〵のこりなく山廻りしつゝも、

　二日見ていかさま花の吉野山　董

此句、加賀の人の聞侍りて、いせの國にまかりし時語りきこえけるよしにて、二日見てといふ五文字はいまだ見殘しけるにやなど、神都の友よりせうそこせしが、其後東都の雪中菴よりの文のはしにも、往年かの地に旅寐せし時、我も此趣心にうかびしかば、今はたおもひ合せりなど聞え侍りしか。

　しら雲や散時花のよし野山　蓼太

　口癖の吉野も春のゆく衛哉　淡々

　我爰に天狗の業歟山ざくら　樗良

　　飯貝よりのぼる。

　盛こぼすめしや梺の山ざくら　田福

　花に遠く櫻にちかしよし野川　蕪村

一其蜩老人は七十五歳の春かちより、よし野の山踏して

行程七十余里、日数十日餘りの旅のにきを、みづから細字にて書したゝめ、親疎となく人に贈られしかば、日を經て冊子百餘り、老眼をいとはず筆採申されけり。

うもれ木の花さく老の吉野哉　杜口

旅意

春雨のとまれと降や初瀬の町　達三

雛の音に目ざます犬や春の雨　桃李

拜領の羽織脱だり春の風　正巴

春風や二階の君が唾とぶ　奥ゟ東皐

やかましの浮世や花に雨の降　仮官

一

ちからなふ入かゝる日や須磨の秋　涼菟

似合しき嬰子のひとへや須万の里　杜國

ほろ〳〵と雨添ふ須磨の蚊やり哉　瓢水

九月廿日須磨の浦づたひして

はる〳〵と來て別るゝや須磨の秋　董

神無月一日尾上にて

この鐘や袖が揩てもさゆる也

尾の曉臺へ文のはしに、此二句を書て贈りけるに、須磨の秋・尾上の冬いづれも其所をさらず。二句の變化も自在なりとやなど聞え侍りけるに、浪華の無腸より、須磨の秋、詞書より句のつゞけがら、すせうなりなど申まいりしが、其後僧唯庵。京に遊びて伯州へ歸さ、播磨のかたよりせうそこして、須磨・明石の風景あだに見過しぬ。只はる〳〵と來てわかるゝといへるこそ、千古不易ならむなどほのめかし聞えける。されど風流に通ずるもの、いづれも其見識おなじきものにや。

ほとゝぎすの涙に曇れ須磨の月　樗良

ほとゝぎす二羽啼雨後の月夜哉　大魯

飛驒へゆく人に別れて杜鵑　佳棠

須磨の浦にて

塩はゆき飯のうまさよ夕ちどり　道立

驛路のうしろの川や小夜千鳥　之兮

月や霰其夜も更て川ちどり　無腸

闇明てかいくれ見えぬ鵆かな　曉臺

一ひとゝせ曉臺在京の時、美角が催せし俳諧に、伏島の丈芝房が、

小さき店出して櫛田の出はなれに　白居
　ふた親の日もまいる墓なき　曉臺
一句は述懐なれど、爰にては戀句に聞ざれば二句の感なし。もとより前句出戀といふにもあらず、只附句の見込より二句の間に戀の意を含ませ侍る。附句はかうこそあらまほしきもの也。
門人嵐甲が方へ、いせの楞良をまねきて興行しける俳諧に、
　長刀擡す門ン口の春
　人の上に人重りてうち眠　嵐甲
此三句目、とかく附わびて時を移せしに、
　盜まれ出る命危き　楞良
前句に障らずして、人情を向はせたる附方也。かゝる手際は尋常の及ぶまじき事也。
　傘ひらかれぬ路地の春雨
　やぶ入に朝寐させうて靜なる　太祇
一いせの龍石と、定雅がもとにて會催しける時、
　旅駕のやねに付ヶたる小風呂敷　定雅



　奈良にて買し虫おさへのむ　几董
　客が來て近所の人の立てゆく　龍石
これらも三句目の手柄有。龍石・花紅の徒好ミて炭俵集の輕ミを作ﾘ侍りけり。
一戊戌春、夜半叟と難波にまかりしに、旧國に誘はれて網島の邊に遊びて歸さ、櫻のゝ宮のはつ花見過しがたく思ひ侍りて、春の日の夕暈もいとおぼつかなく、心いそがれ侍りけれど、しばらく花の下にいこひて、各句作をうかゞひ侍りしに、
　薄曇けだかき花のはやし哉　信德
此句の幽艶長高く、まぼろしのごとくたち隔たり。とにかく其境を出る事あたはず。終に時を移してむなしく歸侍りぬ。
　ちると見し夢もひとゝせ初ざくら　董
　　青樓に若人ミ品定して
　きのふ見しあれが禿歟はつ櫻　蓼太
　蜂の子も散る歟櫻の朝雫　江戸成美
　閑さや瀧の響に散さくら　泰里

散かけて春一ぱいのさくら哉　社燕

おもひ余り櫻にうつす鏡かな　菅鳥

まよひてぞ世はおもしろき櫻哉　定雅

一波光ハ羅人が後を次て業を受侍りしが、いつの比にか志願を發し、京師の俳諧を貞徳翁の古風にかへさんと、一七日斷食して聖廟を祈リ奉リけり。されど同志の者多からず、半途にして世を去侍りぬ。

うしの年や黑き牡丹の花の春　波光

京師に貞徳流と稱する一派多し。されど其句をなすに、波光がごとく古風の格調に倣へるとも見えず。都而諸家おの〳〵門戸を建るといへども、貞徳・宗因・芭蕉の三門を出ず。夫さへ一派を口に唱ふるのみにて、其句法・風韻のひとしからざるは、自己の才力の及ばざる所成べし。

一或女の應擧に猿の畫をかゝせて讃望けるに、立圃が口質に倣ふとて、

初もみぢお染といはゞたつた山　蕪村

一塗師宗哲は俳諧を好みて漆翁紹朴と申けり。七十に成けるとし、彭祖の褒といふものを製して、をの〳〵狂句を添たり。ひとゝせ予はりまの方へまかりける時、茶器を作らんれうに、高砂の松の古木をもとめ歸るべきよし望ければ、やがて彼地の友人布舟にはかり合せて枯木一株を贈りぬ。漆翁常に宗因の狂風を好てをり〳〵の口ずさび有。

唇をうごかすやまみむめの花　紹朴

梅がカア海老藏口を開きけり

一美濃の國の俳諧者流、獅子門の一派と号し、他門と交る事を堅く制す。其意旨、焚レ書ヲ坑ニスレ儒ヲの類にさもにたり。祖と仰ぐところの支考は蕉門に功有一人也。かゝる頑愚の教を遺せしや。いといぶかし。

一今はむかし朝鮮國より、大象を牽せて來朝せし事のありけるに、詩哥・連俳をもて其事實を述よと、やんごとなき御方より仰下りて集められけるに、

今や牽富士の裾野ゝかたつぶり　仙鶴

諸家の詠は異國の獸を賞譽せしのみなりしを、ひとり仙鶴が富士山をもて、我朝の狹からぬ趣を述たりしと

て、御感淺からざりしとぞ。

不二の山にちいさくもなき月し哉　鬼貫

によつぼりと秋の空なる富士の山

尾張國よりはつかに士峯を望

富士見えて遠きもの也秋の空　月溪

一重厚は向井氏の外戚にて去來が通家也。昔のゆかりとて嵯峨に落柹舍を結びて獨侍りけるが、常に旅を好て東西に遊歴し、留主の戸をも鎖さであらければ、たま〳〵ひとの國より訪來りし人の、そこ爰あれたる所とり繕ひなどして、暫かの庵に徃侍りけるをもいとはで旅に遊びけり。實に風雲の境界うらやむべし。此比は甲斐國さし出の磯に杖をとゞめしと、をり〳〵のせうそこは猶たえず侍りけり。

名月や我白骨の影法師　重厚

罪鳥射、弓なからまし梅白し　南部　素郷

秋の夜を謡うたふや刀鍛冶　粟津　沂風

食の果や新酒に蠅の骸　江戸　雞口

落る日と暮るあいだや秋の風

草の戸と觀じて明す野分哉　、龜文

米搗の見てゐる軒の霰かな　但馬　逸馬

立ながら日暮る冬の詠哉、、桃如

一名所の句に無季をゆるすなどいへるも、敢て作例に隨ふとしもあらねど、其場に至りて景物の實に感動せるゆへならんかし。蝶夢法師が善光寺まうでの折から、越の親しらず子不知と云所にて、無常迅速の觀をなして、

親しらず我身もしらぬ浪間哉　蝶夢

其歸さ岐蘇路を過るとて、

三度までかけはし越ぬ我命

是等の句は工まずして、名所の實を得たる成べし。

木曾路ゆきていざとしよらむ秋ひとり　蕪村

一句のからびたるさまは、老杜が粉骨をさぐり、西行の山家に分入し芭蕉翁の口質ならんと申せしかば、先師もしかおもへりなど打ゑまれしが、歳後予に與へよとて、此句の下にみづからの像を書き遺れし也。

つゝ鳥や岐蘇のうら山木曾に似て　白雄

老鳴て友うぐひすやかんこどり　　嗣者 葛人

一吉田壺角は家貧しかりける時のたつきに、爰附などいへる類の点者をして世をわたりけり。されどさうなき作者にて、亡父なども深く愛し申されし也。老の後は世をやすく過して、生涯俳諧を樂しびとし侍りし也。

初夜までは鬼とも組ん厄ばらひ　　壺角

大寒のはなるゝ音や豆あられ　　五始

今年もまめで寐る夜や豆の上　　几圭

一翌はいせの國に赴かむといふ半化房を引とゞめ、五升庵にして三吟を催しけるに、折よく嵯峨の法師も旅より歸來て一卷の俳諧となし侍りぬ。

深草の上人に、杤れたゞさよみしに

我かどや人の來ぬほど草茂れ　　蝶夢

水雞音なく成しむら雨　　几董

數十本松明ともす小夜半に　　闌更

とねりは酒に醉臥にけり　　重厚

哥に負て扇忘れつかへるらむ　　董

ことしの月の秋も暮ゆく　　夢

梓味會の口明そめる法事前　　厚

かゝりに來たる黒澤の婆　　更

きれぐに成し住吉物語　　夢

ふりし宮居の蝶も拂はず　　董

朝夕に吹矢の罪をかさねツゝ　　更

夜着のあいだの蒲團引出す　　厚

死ぬべきと思ふ遊女をいたはりて　　董

萱分のく舟をすゝめる　　更

とかくして軒のあやめに月のさす　　厚

寺の太鼓のやぶれたる音　　夢

十三里花に鞍置く大和路や　　更

淺邊名菜世ざかりの春　　厚

今に猶陽炎殘る領佛　　夢

鳥不レ驚精米啄む　　董

節高くむすび纏では糸を卷　　厚

楞かたけし者に譽する　　更

古郷の奈良へとかゝる雨の雲　　夢

はやくも昏るゝ冬の一時　　厚

埋伏の兵どもや揃ひけん　董

既連哥も揚句にぞなる　夢

あま神の後にいほり結ゐて　更

月に褌を洗ふ溪水　董

空近く白雁わたる聲す也　厚

千草の花を戰す比　更

浦風に御座の褥の夕じめり　董

恨むけしきにひとりイ　厚

うら若き聲に梓の弓打て　夢

むかし障子のきしる明建　董

枝廣き花に旭の透とふり　厚

駒牽むけよ彌生山もと　執筆

# 新雜談集（卷尾）

一諧は俳諧の源氏也と、梅翁時代には專これを格意とせし句多し。宇治にて、

誰人のわたりゆぞ橋の霜　宗因

草なくと俳諧の亂れぬべきと、晋子が物數奇せし話物三十六番の內、

飛螢我も休むは苦しいか　嘯山

かだみて魚は夜川涼しき　晋子

下畧

朝がほがまいりて星の別哉　二柳

春の野やふりさけみればいせまいり　九湖

一士川は攝難のあいだに、さうなき俳諧の好人也。ひとゝせ夜半叟とかの地に遊びける時、生田の森にて、

足弱の宿かる爲歟遲櫻　蕪村

猶ゆふづく夜のほど、花の邊ッを徘徊し侍りけるに、

月の明き夜は賴あるさくら哉　几董

樓の灯による胡蝶一片　士川
醒とけやらぬ春もやゝ過て　蕪村
劒うつ日の朝淨めせん　董
淺井汲徑うれしき山下に　川
桓根ながらのきふり花咲　村
しのぶ身を隣の聟にほしがりて　董
戀の連哥に胸つぶれたり　川
梅酒やとくりの底にわすられし　村
調度數ある丈山の庵　董
水無月へ越えても晴れぬ皐月雨　川
船訪ふべくとおもふ島守　村
嘗聞名利をにくむ人やらむ　董
琵琶かきならす秋草の上　川
流矢の水に落つゝ行月や　村
雁たつあとに猿<sup>マシラ</sup>聲有　董
麓邊や夕暮の風に花の散　川
春たのしさに小家建たる　村
君と我苣の酢みそに酒二升　董
うたゝ夜を寐ぬ曉のかね　士巧
遠篩見えずなりたる山の端に　村
ほさちを拜む有がたやそも　董
室の津や時雨に添ふる波の音　巧
ねまきのまゝで戀に朽なむ　村
いゐの香の胸に痞るびんなさよ　董
小草花さく前栽のくま　巧
月の夕狐を叱るおきな丸　村
僧都と秋を語る淋しさ　董
土釜に茶を煮る雙柴折くべて　士喬
今は天平寶字何年　村
からうじて唐士の書〻盜來し　董
春日のどかにすみよしの浦　喬
花の雲にほひあまりて南す　村
董は引ぬ行幸の道　董
盃の流るゝかたへ鶴下りて　喬
白きといへる咏物を賦ヽ　川

行春を近江の人とをしみける　と
いへる翁の句のゆかしきに、かの
自然居士の謠曲におもひよせて

暮の春舟ばたにとりつき引とゞむ　之兮
ゆくかた濁す雁の八重雲　儿董
ごほ／＼と神鳴ル月の朧夜に　龜兮
腰の刀のおもく覺ゆる　之
紅葉ちる供奉のわらぢに霜踏て　董
藁もてふける家居新し　龜
搗臼に何を雀の養らむ　之
詩に類へる放参のひま　董
つら杖に唐の扇を愛す也　龜
斜にかけて工なる橋　之
さし汐に水の面もたゞならず　董
燃る麻木のしばし悲しき　龜
身ひとつに月の露置繪帷子　之
萩に隱れて相圖待戀　董
鐘の音も虎吼る歟と恐しく　龜
鎧きらめく三千の衆徒　兮



口の晝や散もはじめず花の雲　董
小竹筒はくれて春の時問ふ　龜
ひばり鳴野に皷うつ女舞　兮
京むらさきの色しあせたる　董
賣物のぬしやゆかしき調度ども　龜
旅のやどりに口切をして　兮
よき聟を得ツヽ寐覺の賴もしく　董
傘くれてやるふるざれの君　龜
かくれ家のゆふべ／＼を蔦の月　兮
近所隣のきぬた聞ゆる　董
手煎じの藥もきかずゆく秋や　龜
すくゐう師等の人を惑はす　兮
古狐矢聲の下を飛去ッて　董
野はましぐらに霰降也　龜
ほろ酔て酒屋を出る鏡研　兮
根のなき喧嘩立別れ行　董
夕凪に入川筋の暑くろし　龜
乞食のうへもからき世わたり　兮

花と咲假のにほひも無東西、
静にきけや鳥の囀　鼯

吏務劇不能隨意

行春や我を叱りてあとも見ず　道立
蚕飼ふ家睦じく見えにけり　熊三
苗代や東寺の塔のうつる歟と　菊貫
禁酒する日有暮行春一夜　舞閣
遲日や脚半にたまる土ほこり　正巴

岡崎なる別業に、三たりみじかき夜の枕をさりて、朝ゐの日さまさんと野外に出侍りければ

笋や藪をはなれて艸の中　正巴
朝日に光る蜘の圍の雨　几董
窓低き宿に郁子春あみかけて　桃李
韓非子といふ書をよみ居る　巴
月や出ぬ鴉の聲の夜寒也　董
船たてしまふ磯の初汐　李
新綿の相庭(場)狂へる江戸便　巴

急に酔してさかづきを取　董
あつき日に妹やわりなくしのぶらん　李
せみの小河に車引捨　巴
きねがうの鼓あはれに更去て　董
我軒ちかく狐たゝかむ　李
傳授すむ秋百日の侍れたる　巴
萱よかり晴を當る名月　董
一浦の貢としある鯛網　李
閨の東の博奕わたれい　巴
花にとて手を引れたる遊女共　董
菫を摘て假の占かた　李
降ふらぬからかう中に春の雨　巴
火とぼし比になれた庭中　董
ひそやかに聖の軍を謀あふ　李
心づくしに着く母の文　巴
風荒き冬もはつかに成にけり　董
怪我なく送る疱瘡の神　李
魚賣の聲競ひ來る朝まだき　巴

けふより通す安治川の橋　董
燕の親子見しらで歸るらむ　李
姑蘇臺上に秋を憐む　巴
月更て衣の香かよふ琴の糸　董
重きまぶたに灯をいとひつゝ　李
鬼王も團三郎もなかりけり　巴
壁も疊もぬれるさみだれ　董
堀かけて金出ぬ山に旅寐哉　李
里遠うして鷄も聞えね　巴
寺寒し落花の上のわすれ霜　丶
矢員催す閏三月　李

五月十八日
於曳尾庵興行

青梅やまぎれて落る雨がへる　松化
下駄踏くじく蕗の葉隱　几董
頓て出る船の夕飯やいそぐらむ　松鳥
むづかしき名の人來りけり　化
月にけふ笠着連哥の筆とりて　董
翁はなれぬかたびらの袖　鳥
池水にこぼれて萩のうつろへり　化
こはれ次第の御館なつかし　董
懐に草履入つゝ旅ごろも　鳥
何しのぶらん鑓持が戀　化
蚊やり火のほむらを敲く祇園　董
雲のゆきゝも暑夜の月　鳥
勘當の身を惜まるゝ辻謡　化
朱雀の喧嘩はや四とせたつ　董
世の春に白子の花も咲にけり　鳥
蕨の羹(ニモノ)うりしまひつゝ　化
隣同士物うち語る長き日に　董
奉加の帳をまたも失なふ　鳥
帋燭して鼠の道を塞ぐ也　化
寐酒めさるゝ最妙(明)寺殿　董
時雨ゝ歟使の者のぬれて來て　鳥
針の序をたのむ綻び　化
戯に法華讃ればよゝと泣　董

大津の芝居晝は淋しき　鳥
三日ゐる客に三日を遣はるゝ　化
よきゝぬ入る十六夜の舟　董
明樂の蕭條として秋の風　鳥
紅葉に添ふて堺斜なる　化
老僧の杖をたすくる美少年　董
硯の墨に汚す白綾　鳥
散雪に大學寮の軒匂ふ　化
逃てゆかしき冬の鶯　董
茶を啜る友來〻あり山里も　鳥
呼ば答ふる門前の婆　化
をしなべて桃も櫻も花の時　董
道祖の神も糸遊の中　鳥

蟫山亭に暑を避んと、曉起して
まいりけるに

ころ〳〵と朝露涼し瓜畑　春坡
夜ぶりの鮎を途に出て買　几董
よき人のしばし休らふ家建て　米松
十の手桶に水湛へたり　坡
荒駒に鞍こゝろみる松の月　董
迷ひ蜻蛉の袖にとまれる　松
溫泉山の連に別るゝ暮の秋　坡
辛みを入て無理に飲酒　董
朝寐する女の脛に物書む　松
巨燵に落し伽羅匂ひ出る　坡
仇討の隣を走る雪の庭　董
品川沖の浪聞ゆ夜に　松
今いふて今たつ月の旅ごゝろ　坡
野萩がもとにせつた脱捨　董
百姓を刀に懼す小鳥狩　松
をしうつる世を誰と恨みん　坡
鴈行が書る屛に花老て　董
山に入日の照らす鷲の巣　松
嶋〳〵の春を見廻る風待に　坡
豆一俵の戀もする哉　董
醉ざめの鼻につきたる髮の臭　松

蚤とり迯す行燈のかげ　坡
朝よさに初瀨次郎を斎の窓　菫
曇りて雨の降らぬこのごろ　松
ひだるさをこらへて過る間の宿　坡
いせの音頭も忘れがちなる　菫
難波江に風引までを月の舟　松
蓮かぶりて秋を啼犬　坡
保輔が世は捨やらぬ眼さし　菫
葱とほしき北山の里　松
淺ら井をいほり二ツに詫ぬらむ　坡
詩も問ざれば哥も語らず　菫
つくし浮琴かき撫てとしや行　松
鷄の聲すむ曉がたの空　坡
花寒し埜の家は斷して　菫
靑を踏でかろき草鞋　松

一

庭の面はまだかはかぬにゆふ立の
空さり氣なく澄る月かな
むら雨の露もまだひぬ槇の葉に
雫たちのぼる秋のゆふぐれ

かうやうの秀哥有うへ、俳諧などにかゝる口滑き景色は、及まじき事とおもひ捨ける折ふし、先年、

夕立の露の間またで照日かな　道立

といふ句を示りて、大魯とゝもに驚感の余り脇句をものせしも、今は十とせばかりの昔に成ぬ。

ゆふだちの露の間またで照日哉　道立
並木を落て草に鳴蟬　几董
ある時は近き都のゆかしくて　大魯
皃見ぬ聟に鎧ゆづらむ　立
鳴鶴月雪に身は安氣也　董
細き流に朝げしきたつ　魯

大魯世になくなりし後は、匣底にかくれしを雜談の序爰に著し侍る。

立秋

尺ばかり藪より高し桐の秋　湖邑
暑さめゆく宵の稻づま　几董
分別もなしに月見の亭建て　湖柳

其二

切株にひともと淋しきりの秋　、
蜻蛉うつるうもれ井の水　湖嵒
月に更し朝霏の宿を起すらむ　キ董

其三

桐の葉に落をくれたり二日月　儿董
母屋の妻戸に來啼ひぐらし　湖柳
宮づかへ哥よみ習ふたなばたに　湖嵒

宵の稻妻を聞へけるに

いなづまのちぎれ〳〵て夜明哉　湖柳
卅日の月や有なしの影　儿董
乘下に露けき薄を打かけて　湖嵒
人のとだえぬ酒屋也けり　柳
來年の暦はりたる眞木柱　董
鼠の落て迯る畫中　嵒
戀病の胸にふくるゝ益氣湯　柳
硯の下に物かくし置　董
官軍の使ひそかに來たりけり　嵒
明もやすると鐘をかぞへる　柳
追剝に命もらひし草まくら　董
阿闍梨の供に召倶されて行　嵒
山ひとつあなたの山も花曇　柳
雉子うつ音や醍醐小栗栖　董
百姓の春のいとまに豆腐して　嵒
さしかけ屋根の漏れる村雨　柳
月しろの見ゆるかたより風薫　董
乘越ゝ舟のきそふ川沖　嵒

一浪華木田儿掌は、北野聖廟において、一日獨吟萬句の功をなしてより万翁と申けり。

しら露ののぼるちからや草の丈　万翁
しら露の明りへ出ると落にけり　儿圭

新涼

はつ秋や皃につめたき朝の蝿　管鳥
團扇わすれし暖簾の下　儿董
月のため古き弓矢を置かへて　舞閣
しづかにきこゆ滿汐の音　社燕

眞白なる鳥寄こぞる寒氣也　董
斧うつ松に日影かたぶく　鳥
かけ哥に旅の別を惜むらむ　燕
昆陽野の君がくれし黒髪　閣
病る身のあらぬ調度を枕上　鳥
門もて過る瓶の夏草　董
車ひく先に搗臼ころばせて　閣
普請にかゝる穢多村の寺　燕
恐ろしき野分また吹月の後　董
老杜が秋や寐覺がちなる　鳥
痩骨の衣を透す露霜に　燕
瀧道のほる百日の行　閣
よの花にをくれて一木山ざくら　鳥
草高くなる宿の春さめ　董
糸遊に目を煩へるしら拍子　閣
入道殿の使かさなる　燕
土器を馬上の人にめぐらして　董
錦の袖に雪の積れり　鳥



杖に切〻竹のはやしに鳥騒ぐ　燕
鐘鳴かたやとりべのゝ山　閣
なきひとに契こめたる夢まさに　鳥
肌の守りの誓紙燒ばや　董
鰐にあふて舶せんすべもなかりけり　閣
みか月見えて雲はしる秋　燕
槇の尾は早とざし有夕紅葉　董
柿をかぶりてひだるさの添ふ　鳥
野爲業のもどり立よる神事能　燕
はら〳〵雨の晴て日のさす　閣
鶉鷹のいづち去べき眼ざし　鳥
院〳〵出る若法師ばら　董
今やうの雜談集の花ごゝろ　閣
柳に倣ふ春の種ゝ　燕

於汲古堂興行

朝凪に一荷の菊のにほひかな　佳棠
月をうしろに戸を明る家　几董
酒釀す村里いくつゆく秋や　、

丁々として船造る音　棠
雨寒く物かたりあふ立ながら　、
古き茶入の賣るさたあり　董
木辻なる亡八が許に族雜して　、
かゝりそめごとも戀はわりなき　棠
小車を楓の陰に忍ばせる　元室
卯月のけふの御堂遷しに　董
耳もとに眞葦の鐘や響らむ　棠
二羽なく鷄の藪を隔てつ　室
家の長落穗拾ふてもどりけり　董
身にしみ〳〵と受る布施物　棠
月夜よし打ひらきたる窓の前　室
國の隣に富士を見る哉　董
其むかし北條殿の花一木　棠
禰宜が烏帽子の春寒氣なる　室
塞ぎける爐をなつかしみわすれ霜　董
朝まだきより小海老賣聲　棠
市振はわびしき關を名のみにて　室
若葉にやつす女耄たり　董
うきことに輕く成たる金財布　棠
師走の空の雪に暮行　室
長橋を蹶がちに盲馬　董
燧を得たり火を試ん　棠
つれ〳〵に膏藥合すうらの坊　室
晝うそ〳〵と來たる盜人　董
交返す中稻晩稻の月の鄉　、
片岡さして小鳥追ふ鷹　室
露彈く緋羅紗の袂夕榮て　棠
扇に時の秀句書けり　董
初瀨ごもり夜は明やすき半蔀に　、
流るゝ水の遠からぬ音　棠
花の比窺へば世はしづか也　室
世はしづか也人群る春　董

於春泥舍興行

一條と五條の連やうし祭　維駒
影は東に斜なる月　几董

秋寒き翠簾の外面に簫吹て　、
長う伸たるひたゝれの紐　駒
しもつけの國濕やかに午時の雨　、
羽うちせはしき夏の蝶ゝ　菫
假家して網曳の佛拜ませる　、
百とせ近き人多き村　駒
炭を燒けぶり豐に立のぼり　、
手綱ひかへて古詩を憐む　菫
徐によき衣を這ふ旅虱　、
酌とる女聲鄙びたる　駒
三線を無理にすゝめる月更て　、
たてる障子の露におどろく　菫
かまきりの舟へ飛込野田堤　、
六部が墳や柳がくれに　駒
散花に笠かたぶけて物がたり　、
霞へだてつ撰集のさた　菫
ゆく鴈に弓矢のむかししのばるゝ　、
誰人まうづ加茂のみやしろ　駒



袖の香もおなじ出立ににほはせて　、
まけじ心にいどむ繪合　菫
とかくして廿日の月もさしのぼる　、
田舍躍の音頭さびしき　駒
上ッ湯の聖を待るゝ秋の宿　、
伊丹の酒も樽底に成　菫
鬚綫のうたれて逃るすろ笄　、
八日の市のけぶらたつ也　維
あたゝかな頭巾くれたる嫁御前　駒
耳のうとさに物きかである　几
草の戸の十万堂は凉しくて　菫
飛田の狐遠く火ともす　駒
いそぎ名醫師のさきへ騎馬の人　、
皷樓の五ツ今やうつらむ　菫
此寺に花の名はあり糸ざくら　、
山をはしりて蕨採兒　駒

青竹朽木曉の霜といへるに
垣青く塵穴寒きもみぢ哉　是岩

しぐれの日影午にせまり來る　キ董
渡シ待封彌の下道うし牽て　、
世人になれし武士はゆかしき　岩
藏前の倀ころばす月の宵　、
角力に勝て口をきく也　董
假枕ねればひやつくさむしろに　董
さめるも早き戀やるせなき　岩
物の名も所質キにかはるらむ　、
かつみも葺ぬ宿のさみだれ　董
蚕とりてけふも暮しつ禁衣　、
布搗うたの唱哥覺えし　岩
寒き夜に大根洗ふ月の川　、
ちどりゆくなる小便の前キ　董
俳諧はよい茶たうべて苦吟也　、
かろ〳〵しくも來ます公家衆　岩
きのふ散翌咲花の西ひがし　、
御室のかすみ地主のおぼろ夜　、

郊外

羽織着て牛追行や冬のうめ　菱湖
日はぬく〳〵と大根引畑　キ董
柴門のおくゆかしくも簾して　、
小さき鳥のから聲に啼　湖
さり氣なふ雨晴わたる朝の月　湖
新酒の樽を新艘につむ　董
砂道の蔓も花さく觸時　、
女哥舞妓の太皷うち出す　湖
此日來名さへ覺えぬ戀をして　、
奉公つらく門ドの井を汲　董
墨染の宿たちいそぐ短夜に　、
疫エミの藥ほどこして行　湖
越路のや雪降秋と成にけり　、
月の滿るを船に二度見て　董
夢に來し妻も打らん小夜砧　、
われたる笛の韻と葦なき　湖
放下師が蓮ににほふ花の塵　、

人の脊中にかけろふのたつ　董

難波津の冬籠に對酌半なる比、
大江の叟の東より歸られしに、
又興を次ぐ。

うづみ火や灰にあやまつ繪具皿　銀獅
飛も得やらぬ冬の日の蠅　几董
川舟の底する邊り里ありて　董
城の太鼓や遠くかすめる　獅
菜の花に風匂ふ也月の暈　、
とざし忘れし春の草の戸　董
基佐が迎の從者ねぶりけり　、
闇の鴉のはら〱と啼　獅
今はとて別の扇とりかはし　、
加々美の宿に揃ふ陣立　董
駒繫ぐ木だちの中に歸花　、
浪こゝもとに打よする砂　獅
石佛これも大師の作やらん　、
もとの都に人うつり住　董
七年の質は流るゝ夜の雨　、
犬にとられし狸わりなき　獅
我戀の月見る秋と成にけり　舊國
露わけ祈る橋本の神　、
牽捨し車をさそふ荻の風　董
奪ふて逃る一瓶の酒　、
ともすれば秦吉丁の物いふて　國
旭を拜むわが國のかた　、
塩買に湊へあがる舟子ども　獅
夏の柳の猶くらきかげ　、
蟬の聲ねぐらの鳥に蹴られけん　國
夜々雨乞の松明とぼし連　、
誰を待二階の君がよそごゝろ　獅
上がたぶりを習ふ三線　、
水灌ふ月の田毎も遠からず　國
漆の花の散つくしたり　、
瘧疾さらでも有に秋の風　獅
しら木の八歩引クをいざ見よ　國
音冴て茶宇の袴のはしる也　獅

あかつき近う殘る灯　國
墨よしや四社のうしろの花匂ふ　五雲
池の蛙に答うぐひす　、

## 几圭老人懐旧之辞

其蜩庵杜口誌

曲終人不見江上數峯青。水鏡〱うつし心にふりにしとを思ひつゞくれば、叟少壯のころに義鼓の名有。聊故有てこれを廢し、享保の末つころ郢月泉が洛に漂客たるを師とし唯みて、せちに風月をたしむ。句のさまは、譬へば遍昭によきゝぬきせたるがごとく、淡く清く淺く深く、俗中の雅をせにして周く世に賞せらる。余例頭の因淺からず。峨山の夕・渭水のあした、花に雪に意を委ねくらべ、寛保の比は叟と浪華の萩生とうちつれて、いなのなるさゝがにの道しるべせし溫湯にゆきて、薬師の紫薬亭にて一日千句の三吟有。かくてぞ友ちどりの散別れしも、よそじ余りの昔也けり。水かゞみ〱御輿あらひの梟囃子、月待ほどの猿躍、めぐり車の搨のはしがき書つらぬるこそ、つきなき老のわざくれなれ。水かゞみ〱日枝のやまを、はたちあまり巣ねたる追慕のはしに、そゞろ筆を揺しぬ。

追福之俳諧　正當十二月二十三日

何ややわきてゆかしき橘の　杜口
春やきのふにまだとしの内　几董
一筆に書ても篤き返事にて　和流
山のすがたのおのづからなる　口
月の江に舟有いざや棹さゝん　董
隔年に行蕎麥切と鹿　流
秋深み風呂敷の嵩高う成　口
西ッ癖にくき僕が眞ごゝろ　董
置頭巾とれば長者の相も欠　流
揚屋の庭に宇佐の灯籠　口
うの花にこぼれかゝりし髮の髮　、
物見車に雨のさし降　董
きかぬ氣は後段の麺濃くやしがり　流
冬も扇をつかふ大兵　董
庵号に親の名附て慕道　流

觴拾ふ春の夜の月　口

縫よせて今をむかしの花衣　菫

二十五弦の聲長閑也　雷夫

此俳諧は亡父が旧識の二老を勞し申て、二十五周の作善のためとす。然に不破氏病篤うして起ことあたはず。かゝれば興行もいかゞなど申侍りしを、唯息のつゞくべき限はとありて、終に一折に成ぬ。かくても亡父が正當までは、つれなき命のほどもおぼつかなしとありて、おもき枕の上よりひとひらの短冊を給るに、

わくら葉の落葉をまたぬ手向哉　和流

かゝる厚情の世にありがたきを、感涙とゞめかねつゝや、がて牌前に備へ奉る。亡靈もいかどか其至誠を受ざらんや。

一先人が集撰びける時に、

あちらにも噺相人の柳かな　四方田氏 一扇

透垣に掃除のこりの氷哉　三浦氏 梅貫

題大師講

給たちの蠅のゆくゑや落葉陰　入江氏 烏門

日はをり〳〵雨のわからぬ柳哉　岬間氏 光甫



一小野氏孤舟、余が幼時のしぐれの句を愛して、雨吟簾となし、かの噺相人に入集せられしも、三十余年の昔也けり。

若狭へも明はなし哉雪の空　小野氏 孤舟

花を葉へしばし援て露時雨　粟津氏 青眛

指をれば咄す人なし冬ごもり　嫩草

手にさはる金の莖やけさの秋　斗文

先師几圭翁、節分の翌身まかり給ひければ

きのふさす柊も軒になかりけり　子曳

今は二十余年の星霜を經たり。

我としの豆も五ツのむかし哉　雷夫

やゝ二毛の身となりて、父の恩いよ〳〵高し。

寒月にうつし見ん我かこち顔　几董 拜

月次臨時會文通見聞記ㇾ之。

袖摺のかざり松有初茶湯　東都 天府

元日にほの〴〵見ゆる門田哉　松化

わか水や結ばぬさきの薄氷　菊つら

元日や互にかすむ草の宿　丹 孤舟

朝東風の北にかはりし余寒哉　伏 湖陸

元日の化粧も寒し老の皃　ナニハ 銀獅

雨〳〵にみどり添けり河柳　、烏睡

芹摘んとして蛙に逃る女かな　魚赤

やり羽子に余る男のちから哉　孤山

正月や荒神松に梅の花　姝之

春ながら明いそぐ夜やひがし山　杉月

あら磯の浪陽炎にしづか也　其汀

春日

かげろふや泥膈乾くくわい堀　几董

柴漬のつからぬ枝に木芽哉　買山

注連縄や梅さく宿の屋敷とり　進馬

なつかしや梅咲ころの土佐日記　奥 乙二

うか〳〵といつ登りしぞ春の月　踏人

宵寐して出ればはつかに春の月　桃如

嫁迯る筥挑灯やおぼろ月　十二ハ 扇風

野路のうめならぬも人のこゝろ哉　、杜若

春菊を誰活くれん待遠き　、文射

猶降や宿かるころの春の雨　、二村

新鶯

うぐひすの訛かはゆきはつ音哉　几董

しら梅の世にかくれなき匂かな　瓦全

はまぐりの口明てゐる春日哉　玉 何木

聞そめてきかぬ日もなき蛙かな　辿 田賦

蕨折人處〳〵にかすみけり　信 柳荘

山吹や午時撞出す寺の門　如瑟

花の過がてに

吉野寒き草より花の雪吹哉　奥 完山

あと先になりて女夫の花見かな　伏 祇帆

観想

廿とせの小町が眉に落花哉　キ董

なつの部

頼朝のかうべ大きな袷かな　正巴

旅だちや春の夜こめてころもがへ　松鳥

袷着ていせの下向を待日哉　池田 朶雪
ほころびた春をむかしに更衣　伊丹 趙舍
雨降らで十日の旅や衣がへ　佳棠

丹波路より津の國へ越けるに

山路來て里へ出ればけしの花　之兮
むら雨の雲を降らぬ歟杜若　龜けい
放ちやれば灯へもどる螢かな　池田 星府
大きさの散日に成し牡丹哉　、竹外

靜坐

睡氣さす魔を蹴て行やほとゝぎす　几董
みじか夜は犬の鼾に雀かな　、
蝶鳥も三ッ四ッふたつわか葉哉　米松
行人のかいつまみけり豆の花　万佐女
ことし又きらで二本のぼたん哉　如菊
わりなしや疸の神來る麥の秋　灘 士巧
行燈に行當る音や火とりむし　豊後 青容
龜の脊の土色になる暑哉　、菊男
涼しさのほの見ゆる也垣のひま　イタミ 東瓦



雨の日やあぶなき瓜の花盛　士川

のころ田はそしろにすぎし翌よりは

やとはれて老なるゆひが田哥哉　几董
青梅の木陰にありし足駄かな　菱湖
さみだれやされど咲花落る花　十二ハ 嘯風
いつはあれど水見る夏の都哉　、芦村
かたつぶり角に雨聞風情哉　田福
尿してたち行蟬の聲暑し　路人
庖丁の青葉のかげや磯膾　呂吹
虫ほしやしばし小袖の下涼　桃如
涼しさや招き習ひの夏薄　定雅
二村の乾(坤)坤に涌く清水哉　管鳥

病中吟

瘦腕や蚊を追ほどの力なき　春香
白蓮や心にも吹朝あらし　東奥 谷水

秋の部

名月の雲に吼るや山の犬　江戸 成美

稲撰る小家のたつきや露の秋　完來
蕣の花えらびする人氣哉　路人
朝皃の花見てもどる躍かな　熊三
稲づまにはたと戸をさす女哉　東瓦
柳散萩もこけたり夜の雨　佳棠
山萩に大鋸の埃かゝりけり　呂吹
初汐や草から出てわすれ水　江戸 宗宇
草枕虱うつさんをみなへし　定雅
野ぶせりに枕並べそ女郎花　桃李

月前懷古

名月や朱雀の鬼神たへて出ず　几董
とし問へば我より若しすまひ取　春坡
野路舟路いづれを行ん秋の昏　是岩

難波江に遊びて

水の月棹の雫に碎きけり　二村
切までのるずま居わろき南瓜哉　浪花 一兄
戸をたゝく伏見の宿や朝寒み　灘 士喬
適に來てあなけたゝまし鳴の聲　泰里
こきまぜて九日を菊の都哉　東武 竺蘭

秋日山野を吟歩して

何の木ぞもみぢいろこき草の中　几董
蔦むぐら紅葉色過ていやしけれ　奥州 秋來
小夜きぬた隣の喧嘩聞れけり　橘仙
朝寒の葦に成けり昏のあき　伏水 鶉圃
待〱し菜うち來れり暮の秋　共䪨

冬の部

北山や御幸ありとは冬のさま　維駒
初霜やはじめて冬の宮づかへ　万容
はつ霜や鳥を怖す鳥羽に　几董
こがらしや啼〱かへる夕烏　伏見 楚尺
草の戸や留主のふりして冬籠　楚山
蓮枯て池に霰のしづむ音　春香
しづまりて御法聞居る霜夜哉　池田 東離
松風の炭吹おこす廣間かな　柳莊
打割し氷こほりぬ石の上　如悉
ぬり籍にらてあましたる鼠哉　難波 李州

しばらくは水のうへなる霞かな　うめ

居鷹の小手にたばしる霰かな　邦洞

少年行

頭巾くれし妹がりゆく夜みぞれふる　キ菫

似合ふとはいつはりがまし我頭巾　田原毛條

足もとに烏のかげや冬木だち　舞闇

物書て笑はれにけん雪のうへ　柘雨

つもるべき心積りや夜の雪　緗波

さかづきに夫婦別在たまご酒　羽毛

わびしさや起らぬ炭に薬ぐひ　湖嵒

紙衣着てあらたに年を問れけり　路叟

草庵

二度までは箒とりたる落葉哉　キ菫

寒月に二度歯をかみてとざしけり　丹蕊芦月

寒月や南大門に我ひとり　兎山

起て見て身は後づれの雑魚寐哉　星池

夜が明てあるじ見えぬやとし忘　湖柳

暮てゆくとしや蹉跎たり老の坂　心頭



行としの墨はづかしや摺ゆがみ　五雲

去年の冬三餘齋主人のもとへまいりて、短册など侍りけるに

行としや馬の脊わけて煤と雪　鹿文

めでたさや大卅日の夕がらす　旧國

八十の老に親ありとし木樵　几董

天明五乙巳之歳立秋日

新雑談集と見す。雑談とは何の雑だんぞ。和哥に清輔が雑談か、連歌に兼栽が雑談歟とよめば、俳諧に其角が雑談にならふなりけり。法師がわかゝりしよりしれるすきもの共の上を書る中にも、撰者の父几圭老人が、月花の折ふしごとに句案ずるとては、うしろむき膝いだきて、いたく風情をめぐらしける面影まで立そひて、いとなつかしといふも、またさしもなき一ツの雑談をくはふならんと、

蝶夢幻阿彌陀佛が老のくり言を書つくならし。

附合てびき蔓
几董著

# 手引蔓

## 自序

俳諧の書いにしへより少からずといへども、附合の意味など、ことに書籍のうへにてはわきまへがたき事多し。されば堪能の人に會し、席をかさねて議論を聞、まどひをとき、而して後自得勘破し、はじめて俳諧を知べき也。されど不幸にして口受すべき人を得ざれば、自己の誤を正すの便なく、却而他の癖論惑説を聞て、病を傳るの失有。あはれよき師をえらび、口づから受得て修行を專とし、自然と發明するの外はあらじかし。凡發句は師を求ずとも、心を師とし造化を友として、獨立する作者も有べき也。又附合と云事、古へは連哥の法式を擬して、はいかい体に狂じたるを古風の格調とす。然に芭蕉以來その繩墨をはなれ、俳諧の附合といふものはじめて興れり。さは上古の連哥に髣髴として、かの古風のはいかいには相違せる事多し。近世專蕉門の附合世に行はるゝといへども、支流まち〱にして門戸を建、己が好ム處を是とす。其好むところ一概にして、或はみなし栗をもて向上の一路也とし、あるひは炭俵をもて老成のいたりとす。その意旨廣からずと謂つべし。然ども大概、蕉翁一世の集を鑒としてこれに倣ふもの也。將また其規則とするや、十七條・廿五ヶ條、或は七名八体・うやむやの關等の書によりて學ぶといへども、墨子が練絲に泣、楊子が岐路に迷ふの徒少からず。故にこの擧に及ぶ。今や此篇、現在の作者の句をもて古來の名目に引用し、又はみづから作れるをもかい添て句意を解し、連綿の趣をしるし、加ふるに古人の句といへども、適、意に會するもの有ばこれを用ゆ。またく社中の初心輩に附句の心得を示すためにして、他門に向て論ずべからずといふ事しかり。

夜半亭几董稿

## 古來名目（幷私說）

○發句　天　○脇　地　○第三　人

○發句　起　○脇　承　○第三　轉　○第四　合

○發句　客　○脇　主　○第三　相伴　○第四　庖丁（リヤウリニン）

### 私　說

○發句　有心　○脇　有心　○第三　會釋　○第四　逃句

○發句　景氣（或向）　○脇　景氣（或向）　○第三　人情（或手前）○第四　人情（或手前）

○發句　人情（或自）　○脇　景氣（或他）　○第三　景氣（或他）　○第四　人情（或自）

○第五　人情（或自）

○發句　景氣（或用）　○脇　起情（或体用）○第三　人情（或体）　○第四　景氣（或体用）

○第五　起情（或体）

右

### 古來名目　五脇

○相對　○比　○對　○打添　○打着

### 同　附物趣向新古之差別

○涼　川端　古　拭椽　中古　鶴脚　新

○暑　小松原　同　緋縮緬　同　籠鵞　同

○寒　醉醒　同　籠塗立　同　塩餉齒　同

古人曰一惣じて脇は韵字留定れる法也。また發句によりて手爾葉留も有事也。

もとより發句にいひ殘せし所の山川・艸木・鳥獸の類ひをもて、發句の景情を增を專要とす。

古人曰一脇は字留にせよといふは、是も歌一首のごとく一句詮たてんがため也。然どもよく番て一首のごとくになるを脇の姿といふ也。猶此境をしるべし。

古人曰一第三は發句にあらず、平句にあらず、一句の仕立に習ひあるゆへ、＼て＼らん＼もなし＼に　此四ッの手爾葉を定めたる也。

古人曰一第三の留に文字の定る事は、一句のさま發句のやうなれども、下のとまらぬ所にて、次の句へ及すべきため也。此理をしる時は、＼ての字＼にの字にも限るべからずと知るべし。されど此句は第三のさま也と、百句の中に置ても、撰出すほどの第三のさまをしらざれば、やはりさだまりたる留然るべし。世に第三の韵字留に傳受ありとて、或は初櫻或は杜鵑など、あるひは押字・抱字等の沙汰あるはしらぬ人の推量也。

## 私説

發句に起れるを脇に承て二句首尾し、哥一首の体にして一句の詮を立るなり。さればワキの留ゝ韵字・手爾葉に拘らず、首尾調ふを脇の法とす。然ば第三より又あらためて句を起すなれど、既ワキといふ前句あり。又發句といふ打越し有。よつて一轉して、意のあとへもどらぬやうにし、しかも發句・脇と二句首尾調ひたるうへを附出しゆく所也。且第三よりして次第〳〵と連綿するはじめなれば、留りの文字に意味あり。されば第三の句を一巻のむづかしき所とはいふ也。勿論ワキ・第三の仕法をよく〳〵熟得すれば、附句は百句も千句も進ムに難き事なし。さるによつて脇よからず、第三あしければ、一巻の首尾も調はずと知るべし。まづはじめに此二句の附わたりをよく修行して、附句の自在を得べきもの也。

### 古來八体之名目

○寄　○志　○観相　○打返シ
○挨　○前句の情を押出す句　○詞をとる句
○意氣

### 同　案方七名

○有心　○向附　○景情　○會尺
○迯句　○拍子　○見立

### 同　附方八體

○其人　○其場　○其時　○天相
○観相　○時分　○時節　○面影

### 同　三體

○有心　○會釋　○迯句

### 同　取響五字

○俤　○感　○香　○移　○働

### 同　八句之遞

○見ゝ　○聞ゝ　○思ゝ　○行ゝ

## 私説

一前に自他・体用・人情・景氣のわかちをもて、發句より第四・第五に及ぶ名目とす。一卷の連綿、四五句の運び、此法をもしよくしるべき處也。或は卷中人情の句をもて、景氣の句を挟み、又は景氣の句をもて、人情の句を挿みなどするはよろしからず。是を俗に觀音びらきといふて、禁忌する所也。或は人情二句・景氣二句と縞筋を織たる如く、一卷を連綿する事あり。一卷おだやかなりといへども、卷中に曲節ある事なし。尤景氣の句出ば是非二句對して、次に人情・起情の句を待べし。これを俗に延す法といふ。又人情二句對して、次三句にわたる時は、彼向附の法をもて自他を分ち、猶人事四句も五句も續けゆくべし。さほどの曲節を用ひずんば、一卷の眼目とする所なきに似たり。既古集に人情五六句續きたる例有。考見るべし。

又曰、景氣の句といへども、見聞思行の文字あれば、是人事に拘るといふて、打こしを忌憚る事有。尤句にもよるべけれど、花といひ、ほとゝぎすといふ句にも見



聞を遁ざるはなし。こと〳〵く是を吟味せば、附合穿鑿論に落て、一卷の調子をうしなふべし。句の情(コヽロ)あり作者の意(コヽロ)あり。景氣と見ゆる句に情の句あり。情と見ゆる句に景の句あり。此ところをよく見解して論ずべきもの也。たとはゞ昔物語・双帋物などに、地の詞といふ事あるをもてしるべき也。附合の一卷は、作物語を上手に綴ると心得べきも、また一助ならずや。

右に擧る私説の外は、古人の糟粕にして、あらたに筆を採の功なし。左に記すところは、ありきたる古來の名目にあてゝ、句を引き解するに平話をもてし、或は假名を加へて、專ら初心手引の要とす。されば俳諧練達の人の見るものにはあらで、初學未練の徒のために、いさゝか便あらむ事を思ふのみ。もし他見にわたらば、此詞をもて全編の意をさとしたまへと、爰にことわり聞ゆ。

### 發句にワキ附る事

鳶の羽もかいつくら(ろ)ひぬ初時雨
　ひとふき風の木葉しづまる

發句初しぐれは題にて、鳶は趣向の取あはせ也。扨かい

つくろふ羽とせしが句作也。
ワキは、初時雨に一吹風と附て、扨木葉といふが、嵩への結びにて、しづまるとせしが、かいつくらふといふにあはせて、一句の作也。

是が打添といふ脇也。

市中は物のにほひや夏の月
暑し〱と門〱の聲

發句は夏の月が題也。市中は趣向にして、物のにほひとせしが趣向と、題の月の夜ごろに、むすびての句作也。脇は　暑し〱といふが、夏の夜に附たる也。月は二句の間にあり、扨市中といふに門〱と請て、聲は物のにほひといふ人に對して、情をむすびたる也。

是共場也。

鴈がねもしづかに聞ばからびずや
酒しゐ習ふこのごろの月

此發句は、深川の夜と題して挨拶(アイサツ)の句也。よつてワキも挨拶のワキ也。是らは贈答(ゾウタフ)のときのよい手本なり。扨解(カイ)は此頃夜ごに聞鴈がねなれど、深川邊の靜なるばせを菴に來てきけば、からびておもしろいといふたを、うけてワキに、日ごろは酒をしゐるなどゝいふ、亭主ぶりはなけれど、遠來の珍客ゆへ、此ごろは酒をすゝめる事なども、ちと覺えたやうな。月は助字(ジヨ)の月といふて、季のためにあしらふた物なれど、月の夜ごろなれば、あながち助字のみにもあらず。發句の鴈にむすびも有也。

是相對といふ脇也。

菜の花や月は東に日は西に
山もと遠く鷺かすみ行

此ワキは只粉骨(フンコツ)もない句のやうに、しらぬ人はおもふ句なり。されども發句に至極かなふたワキ也。月は東に日は西に　といふたは、春の長い日の凡七ツ時分とさだめ、十日比と見て、月も晝のうちから出てあるを見た所が、一めんに菜たねの花ざかりで、外にものもなき景色なり。西に東にと回レ頭さまあれば、ワキに行の字を用ひたが、手柄はたらきじや。一句は東西と見やりたる体に、山もとゝ付て、かすみは菜の花のあしらひ也。

是も打添にて時分附也。

牡丹散て打かさなりぬ二三片

卯月廿日のあり明の影

發句は牡丹の優美なるを体として、やゝうつろひたる花の二ひら三ひら落散しを、打重りぬとしたが作也。二三片とかたう文字を遣ふたは、題の牡丹に取あはせし趣向也。ワキは、その時節を定めて、卯月の廿日比としたが、發句の見込にして、有明の影と又時分を定めて、散た牡丹のうへに露などもきら／＼として、有明月の影のうるはしう、よい天氣のさまが見えるやうな。是を牡丹に廿日草といふ異名があるによつて、廿日とさだめたると見ば、此ワキ大キに句位を減ずる事じやぞ。

是打着といふ脇にて、附は其時也。

彳ば猶ふる雪の夜路かな

我あとへ來る人の聲寒

發句は、ひたすらに降つのる雪の夜の歩行体也。さすがにあゆみ労れて、しばし彳て見れば、いよ／＼降まさる心地して、立休らひもあへず、又わりなく行んとするさま也。雪の夜道といふたが趣向で、猶といふ字が一句の眼目じや。ワキは、行も彳もわりなき大雪の夜にあるくは、我ばりかと思へば、又あとからも來る人が有て、さてもけしからぬ雪じやと、打つぶやく聲のいかにも寒さうなと、感慨を起した句也。聲寒は聲さぶげなるの下略也。ワキを字留にするといふも、詞の殘らぬ爲なるを、此句は寒氣なると詞を殘したれど、心がよく留りたれば、詞にかゝはらず、一句首尾して濟也。是等を見て、とまるの、とまらぬのといふを合点して見るがよい也。

是も相對のワキにて、附は有心也。

冬木だち月骨髓に入夜哉

此句老杜が寒き腸

發句は、月の光りのするどふ冴わたりたる夜に、冬枯せし木のつく／＼とあらはなるを趣向にして、月のひかり

も骨身にしむやうな夜じやといふを、月も骨髓に透るばかりなる哉と作たものじや。

ワキは、よのつねのやうに、發句の景にも情にもかゝはらずにおゐて、一句の風骨が杜子美の作た詩を見るやうなと、發句を稱美た所がワキの趣向也。寒きはらわたといふも、老杜が詩腸と、季節の會尺にしたものじや。是等は格外のワキにて、堪能のうへならでは、おもひよせぬところ也。

次韻の俳諧に

鷺の足雉脛長く繼そへて

這句以莊子可見矣

是らを作例にしてしたものぞ。

一或は古人の發句を立て、脇より附はじめてする俳諧がある。それを脇起りといふ也。

花の後まだある春が五日ある　古人

その花見ざる袖の春雨

此發句は、もはや花はこと〳〵く散て仕廻ふたに、春はまだ四五日も暮殘りてあるが、此するゐ四月に成までのあいだは、どのやうな春の風情であらふやらと、花の過たにつけて、春を深くおもひ殘せしが一句の趣向なり。五日といふ數に何も理屈はない。

ワキは、其景情にうつして、いまだ逢も見もせなんだ人じやが、名とはいかいは聞及て、かねてなつかしう思ふてゐたといふ心を挨拶にふくませて、花の後と過去・現在を云、五日あると未來をいひ殘せしに對して、その過ゆきし花をさへ、我は見ざりしと感懷を起し、今さら袖をぬらす斗じやと歎じて、袖の春雨と結びたるもの也。花といふ字、春といふ字、發句にあるを、わざと脇にもその二字を遣ひしが、脇起りの体也。

されどあながち脇起りの句には、發句にある文字を用ふるといふにはあらず。只現在の人と、古人との分チをよく心得て、ワキを心してする事也。

又夢想の句などひらくには、夢に見し句は神詠と立て、下に御の字をしるす也。扨ワキを夢想のぬしがして、次〳〵をつゞけてゆく事也。是にも定つた法といふはなけ

れども、發句を神の句と心得て、ワキに其心を用ひて作る也。そこで是も先ワキ起リ同前也。又夢想・祝言・奉納の類には發句の留リより、ワキの頭字に、五音ノ相通(ソウツウ)・十韻ノ連聲(レンセイ)など用ひて附る事は、其時の宗匠の意に任すがよい也。

## 發句脇に第三附る事

置炭やさらに旅とも思はれず
　雪をもてなす夜すがらの松
海士の子が鯨を告る貝吹て

發句は、海邊に旅人をもてなす体なれば、ワキ打添て庭のけしきを附たり。扨第三はその二句に向はして、鯨を告る貝を吹音の聞ゆると、他より事を起して、前の句を海邊の旅泊と見込だ附じや。外から事を起してゆくゆへに轉じて來る也。

　是向附也。

木のもとに汁も鱠もさくら哉
　西日のどかによき天氣也
旅人の虱(シラミ)かきゆく春暮て

發句は花のもとに遊びて、汁にも膾にもと、景色を賞歎したに打添て、西日長閑に　と時分を定ていひ流したワキ也。（久かたのひかりのどけき春の日に　しづこゝろなく花のちるらん）此うたを照し合せて見れば、いよいよおもしろい。扨第三は西日といひ、長閑なる天氣と、時節に人情を起して、旅人と云が趣向にて、虱搔(カキ)ゆくと作をもとめ、姿をあらはし、春くれてと季節を動かさぬで、よく附たものじや。是等がかの百句の中に有ても、第三と見へる句といふので有ふ。

此發句などは正しく人事が有ても、景氣を詮にした句也。ワキは常の氣しき句なれど、第三を延していては、却而見わたしがわるいゆへ、しつかりと人を出した物也。よつてやはり起情の附に成也。

啼〳〵も風に吹るゝ雲雀かな
　烏帽子を直す櫻ひとむら
山を焼有明寒く御簾捲て

發句は、春風に向ふて雲雀の上る景氣を、脇から情を起して發句の雲雀に響(ヒビ)かせて、烏帽子を直すと姿をあらはし、櫻一むらと場を打添たる也。扨第三ゑぼしを直す人

をとがめて、離宮などゝおもひよせて、御簾まくといふが附也。此第三、一句の作といひ趣向のとり所、上手の手際也。

是其人の附也。

なきがらを笠にかくすや枯尾花
温石さめて皆氷る聲
行燈の外よりしらむ海山に

此發句は、其角が翁を葬りたる哀傷の吟也。ワキ其意をうけて、温石さめてといひ、皆氷る聲　と諸門人の斷腸を述たるもの歟。第三一轉して、旅泊を附たる所がおもしろい。ワキの一体を寒夜の明ゆくさまに見込て、趣向をたてゝ、外よりしらむ海山　とした一句の作意、第三の手柄也。

是附は會尺也。（發句もワキも有心なれば也）

やぶれても露の葉數のばせを哉
木槿の外も垣の間引菜
朝の魚都は月に用ゆらん

發句は、秋風に破れたる芭蕉をあはれみて、露の葉數と作せしに、木槿の垣と場をよせ合せて、間引菜と洒落せしが一句の作じや。扨第三、垣の外面の菜ばたけといふ場に、人情を起して、あたり近き海邊にて漁せし魚じやが、都のかたにて丁ど月の夜遊に用ゆらんと、遠く思ひやりたる句也。これらにて第三の留りの後句へ及すおもむきを合点したがよい。

## 文字留第三の事

霜月や鸛のつくづく並びゐて
冬の朝日のあはれ也けり
樫檜山家の体を木葉降

發句は、鸛のイゝ並びゐたれ也。（タレノ反テ也。）ワキあはれ也けりと云はなして、韵字にて留たるより、よく納る也。此第三留りよのつねにては、三句のわたりおもしろうない也。發句霜月やといひ、ワキ冬の朝日と出たり。斯二句一意の如く首尾して、第三に附合すべき匂ひもなき所を、はつかに朝日といふ字にたよりて、樫檜といふ常盤

木をあしらひ、山家の体を木の葉降　と一句にふしをもたせたれば、第三のふりを備へて、留りもめづらしく、三句の撲樣もよく調へり。樫檜として下に木葉降　といふたに心を用て聞べき也。

## 卷中連綿の事

前 山田の小田の早稻を刈比
　夕月におくれてわたる四十雀
是は景氣を延すといふ附也。かの八体に曰時節也。
　夕月におくれてわたる四十雀
　秋をうれひてひとり戶に倚
是起情也。前句のけしきより人情を向はせて、情を起し來る。附は八体に曰觀相也。
　秋をうれひてひとり戶に倚
目塞て苦き藥を啜ける
前句、秋を愁ふるといふより、戶によるといふを、ぶら〳〵病ひの人と見て、趣向を立たものである。
　附は八体に曰其人也。



目ふたひで苦き藥を啜ける
　當麻へもどす風呂敷に文
隣にてまだ聲のする油うり
是人情三句にわたる附也。前句は打こしの人の用也。其用を取て當麻へもどしたい物が有、誰ぞ來よかしと、人待ッ用をうけて、後句に油うりと趣向を立て、一句の作は隣にてと、よその事を起して來たものじや。
　是七名に曰向附也。
隣にてまだ聲のする油うり
　三尺つもる雪のたそがれ
是は油うりに、たそがれ時といふあしらひ附也。三尺積る雪といふたが一句の作である。
　是七名に曰會尺也。
　三尺つもる雪のたそがれ
餌に飢る狼うちにしのぶらん
　兎唇の妻の只なきに泣ク
是前句は、三尺の雪といふに、餌に飢る獸と趣向を付て、日暮がたと見て、忍ぶらんと句作を結だものじや。次の

句は前を狩人と見て、其妻を向はして、兎唇とした趣向は狩人へのよせ也。只泣になくと情を起したは、商賣が殺生をする事ゆへ、我身も此やうなかたわかしらぬ。扨も歎かはしい事じやと、ひとり留主をして泣てゐる体也。

是前句を噂にして情の向附也。

いぐちの妻の只なきに泣ク
鐘鑄ある花のみてらに髪きりて

是も人情三句にわたる也。打こしの人は夫ト也。前句の人は妻也。其妻の用を自にして附たものじや。扨一句の趣向は、いぐちといふ支離の女を見込て、うき世の中にもあき果て、我身の罪障消滅のため、鐘の供養に参りて、髪をおろして尼に成といふ意也。扨此句まへは花の定座にあたりて、是非とも花の句をせねばならぬ所也。然ども前句より情を起して來たれば、それをうけて附ねばわたりもあしく、附の手がらもない。やはり其人の情を附ねばならぬ。そこで鐘供養として、花をよせあはせたものじや。よつてむづかしい中にも、山寺などの花のけしきも、自然と余情にあらはれて、花の句になるやうに仕立たは、花の御寺といひつゞめた句作の所が大キな骨折ぞ。

是案方は七名の有心也。附は其人也。

鐘鑄ある花のみてらに髪きりて
春のゆくゑの西にかたぶく
能登殿の弦音かすむをちかたに

是前句は、鐘供養の花の寺に春の夕暮と、氣しきにて附流したる逃句也。

次は西に傾といふ句をとりて、西海に漂ひし平家の面影を附たものじや。春の行衛といふに、霞む遠かた　と句を結びしが、前句の機嫌を合すといふものじや。

是景色に打添て、附は八体に曰俤也。

○

前　日はさしながら又あられ降
見し戀の兒ねり出よ堂供養

是前句、日はさしながら又といふに、時のうつりゆくけしきあれば、堂供養の場に参りゐるさまが眼前じや。扨、見し戀の　といふは、かねがね見そめたる兒のけふの供

養の義式に、定めしよそほひ立て出らるゝで有ふ。見たいものじやがといふ情を起して、ねり出よといふ其人の心の下知也。句作也。

是七名に曰起情也。

見し戀の兒　ねり出よ堂供養

つぶりにさはる人憎き也

是前句の兒待人を女にして、髪などもりつばにこしらへ立て出たる姿を趣向にし、扨頭にさはる人といふは、堂供養などの場の群集して、我がちに物見たけき中なれば、人の髪にさはるも何もおもはぬ体をあらひ、扨女の情として、髪に障る事を至て嫌へるおもむきを、一句に作したものじや。

人憎き也と、かるういひはなしてあれど、情は甚深き句也。

是一句に自他の有、有心附也。

つぶりにさはる　人憎き也

いざよひの暗きひまさへ世のいそぎ

此附かたはよく味ふて見るがよい。打こしの句は、兒ねり出よ　といふにて、只心に物待してゐるのみ也。それに、つぶりにさはる人　と、附に一句の趣向を立たれば、其人に向はして、暗きひまさへ世のいそぎ　とくらがりにて髪に行當りし体をあらはした物じや。世のいそぎといふにて、三句の輪廻をのがるゝ也。世の字が大事で有。

是前句の情を押出すと曰附にして、又時分をさだめて轉じたる也。

十六夜のくらき　ひまさへ世のいそぎ

しころうつなる番場松もと

しころはきぬた也。番場・松本は大津とぜゞの際也。附はいざよひの闇に世のいそぎ　といふをとがめて、暮砧急などのおもかげにて、砧を附物とさだめたる會尺也。

是八体に曰其時節也。

しころうつなる　番場松もと

駕舁の棒組たらぬ秋の雨

前句の場を見さだめて、駕舁と趣向し、棒組足らぬは前句の移をとりての句作じや。秌の雨は季節のあしらひにして、二句のよそほひ也。

是八体に曰其場也。

駕舁の棒組　たらぬ秋の雨

　鳶も烏もあちら向るる

是八体に曰迯句也。四五句の運びといふも爰じや。そも〱堂供養の句よりして、頭にさはるといひ、世のいそぎとうけ、砧うつと場をさだめ、駕舁と人を出して、皆人情の体用あれば、爰では秋雨といふ天象に、生類をあしらふて迯る也。然どもあちら向せて置が一句の趣向也。

　是三体に曰迯句也

○

前句　春なつかしく疊帋（デウシ）とり出て

二の尼の近き霞にかくれ住

是前句は昔をなつかしくおもひ出て、古きたたう紙など取出し見る体を、大内に有し人などの今は世を遁れて、都近き邊りに住るありさまと見込て、次を附た物じや。附は其人也。

　二の尼の近き　霞にかくれ住

　七ツ限の門敲（タヽ）く音

前句、尼といへるに寺と趣向を定め、七ツ限に門をとざすとせしが一句の作也。

　是八體に曰其場也。　叩（タヽ）くと外の情を起す也

　七ツ限に門　敲く音

雨のひまに救（スクイ）の糧（カテ）やおくり來ぬ

前句、七ツ限に人を通さぬ門といふに對して、軍用の粮と趣向した物也。雨の間にとしたは一句の作である。

　雨のひまに　救の糧やおくり來ぬ

　弭（ツノユミ）たしむ能登の浦人

前句の救米を運ぶ勢兵を浦人と定めて、弭など腰に用意せし軍中の趣キ也。能登と思ひよせたるが一句の作也。都而一句の作なき句は、前句の噂、或は前の講尺といふものになりて一句がたゝぬ。此一編前後に一句の作〱とことはりたる所考見るがよい。

　弭たしむ　能登の浦人

　女狐の深きうらみを見返りて

前、弭たしむといふ人を轉じて、狐と附物を定めたものじや。深き恨と一句に情をもたせ、見返ると姿を拵るが

一句の作也。

　是案方は有心にて、附は生類の會尺也。

女狐の深きうらみを見返りて

　寐顔にかゝる鬢(ビン)のふくだみ

前句のうらみ深きといふを、人に附(ツイ)たる狐と見込、物妖(モノノケ)などに打惱(ナヤメ)る宮女と趣向し、寐顔に髪のみだれかゝれる姿を、一句の作にしたものじや。ふくだみといふは鬢髪(ビンハツ)のそゝけたるをいふ。源氏などに多く出て有詞じや。

　是も附は起情也。前句人情ナキユヘ也。

ねがほにかゝる鬢のふくだみ

　いとほしと代(カハ)りて哥をよみぬらん

前句の人をさして、いとほしと語を働かせて、返哥など代作せし、かしづき人を對して附た物じや。或難じて曰、此一句發語より自の事に云出て、よみぬらんと留たる所、他よりさしたる詞なれば一句に自他ありと。答代りてよむといふに、自身もおぼつかなき心をふくむ所をもて、よみぬらんとせし也。都而俳諧の附句に、らんと留たる句は心して見るがよい。彼中古の連哥や古風のはいかいなどでは嫌ふ事ぞ。

　是前句の詞を取といふ響也。向附也

○

前頭痛(ヅツウ)を忍ぶ遲キ日の影

鄙(ヒナ)人の妻(メ)にとられ行旅の春

前句、春の日のぬく〳〵と暖きに、心に樂しむ事もなく、頭もおもく欝情(ウツジヤウ)の人と見込て、傾城・遊女などの田舍客に請出されて、遠き國へ連られて去る旅中の体也。

　是附は其人にして、王昭君などの俤也。

鄙人のめにとられ行旅の春

　水に殘りし酒屋一軒

荒神(クハウジン)の棚に夜明の鷄(トリ)啼て

前句は打こしの旅体に其場を附て、句の趣向は、洪水に多くの家の流れし中に、はづか一軒殘りし酒屋のある体なり。次の句は其洪水を現在にして、夜明がたにやう〳〵水も引おさまりたるに、流れ殘りし家居のさまと見込て、庭鳥を竈の上に鳴せしが趣向也。棚にといひ夜明の鷄とせしが一句の作也。

是八体に曰時分附也。

荒神の棚に夜明の鶏啼て

歳暮の飛脚物とらせやる

是前句の夜明時分を見込にして、旅にたつ歳暮使と趣向を定め祝儀などやる体を一句に作たものじや。

せいぼの飛脚物とらせやる

保昌が任も半や過ぬらん

此一句、保昌は丹後の國の守になりて下りし人じや。昔は一任といふて、三年ほどづゝ國〳〵へ、都から國守になして遣はさるゝ事が有る。附の意は前句の歳暮使を、丹後より參りたると見込て、保昌が任國を趣向にとる也。前句にとしの暮とあるに句作をむすびて、半や過ぬらんとしたものじや。此句の留は上にやとうたがふて、下にらんと置て、定りたる法の通り也。勿論一句他の噂になるじや。

惣体このやうな趣向に、所や人をおもひよせるに定りたる法はない。只前句をよく〳〵見て、土佐と成とも貫之と成とも、作者の思ひ付次第じや。此句は前のせいほ使に、丹後が何となふうつりがよいゆへ、保昌と思ひよせた物じや。前句の見込といふ事がわるいと、無用の出物といふて嫌ふ事になる也。

是前句の俤をとりて、一句の働きをとる法也。

○

前 いばら花白し山吹の後

むら雨の垣穂飛こすあまがへる

三ッに疊んでほふるさむしろ

前句は、打こしの茨・山吹といへるによせて垣と結び、むら雨は一句の趣向にて、雨蛙は時候の取合せ也。次の付は起情也。前一句景氣を延し來るをうけて、人情を向はすなり。急雨に莚を疊むといふが句作の結び也。

垣を飛超スといふに、疊で投るといふ、

是、七名にいふ拍子成るべし。

三ッに疊んでほふるさむしろ

西國の手形うけ取小日の暮

前句、莚をほふるといふをとがめて、小いそがしき体を、

西國問屋などの暮がたのおもむきにして附る也。

是其場也。

西國の手形らけ取小日の暮
貧しき葬の足ばやに行

前句、問屋のおもて口の日暮時分と見込て、葬禮を通らすが趣向也。足ばやにゆくとせしが、貧しきといふにむすびたる一句の作である。

是時分附也。

まづしき葬の足ばやに行
片側は野川流るゝ秋の風

前句の一体を見さだめて、野邊近き片はら町と趣向し、秋風は葬禮への寄(ヨセ)にして、物あはれなる八月比の夕暮のけしき、二句の間に餘情有。

是時候の景色附也。

片かはゝ野川流るゝ秋の風
月の夜ごろの遠き稲妻

前句、野川の秋風といふ時候を見込て、月の打曇りたる夜の稲妻の薄き光りに、あはれを打添し趣向が句作也。



是八体に曰天象也。

月の夜ごろの遠き稲妻
仰ぎ見て人なき車冷じき

前句の景色を見込て、秋の夜のうそ淋しい体に、乗捨しから車と趣向を定メ、あをのきて見るといふ姿に、情を起せし也。

是前句の感を取法也。附は起情也。

仰ぎ見て人なき車冷じき
今や相圖の礫(ツブテ)うつらし

前句、人なき車といふをあやしく見込て、とらはれの君などを盗出すと趣向をたて、相圖の礫と句作したものじや。

是前句の情を押出スといふ附也。

今や相圖の礫うつらし
添ぶしにあすらが眠窺(ウカゞ)ひつ
甕(モクイ)の花のひら〳〵と散

打こしの句に、礫をうたばやと思ひし人を女と見込て、添ぶしと趣向したものじや。扨阿修羅(アスラ)は比喩(ヒユ)(喩)していへる

詞也。たとはゞかの酒呑童子などいふ昔の盗賊の首領の類歟。或は清盛入道などいふ人に、常盤の前などの添臥と見るべし。次は其場のさまを見込て、酒に酔ふして、うまく寐入たる人の枕もとなどに、甕にいけたる櫻の花のよそほひを趣向して附たものじや。扨前句に眠を窺ふといふ添ぶしの女をとがめて、懐劍などにてねらひよらんとすれば、かの壺にいけたる花のひら〳〵と散かゝるにも、心おどろかるゝ余情也。迯句の附は、功者のうへならでは出來ぬといふたは、此やうな處をいふじや。蕉門の附句をしらぬものは、此骨折は見えぬゆへ、附はどふいふ心じや。一句は何でもない句じやといふて仕廻也。この意味をよく覺えねば、附合の俳諧のよいのを見ても合点がゆかぬ也。

右以上連綿の解は、桃すもゝのはいかい二巻より撰出て引用す。全篇はかの集を照らし合せ見て考べし。

### 名所地名違附の事

前 はな紙に都の連哥書つけて

暮る大津に三井の鐘きく

又

いせの音頭も忘れがちなる

難波江に風ひく迄を月の舟

附かたは大かたこんな物じや。どちらぞ一ッは噂、一ッは現在也。

### ○疊語の事

海棠の花しぼる銀皿

花の陰に海棠の枝きりちらし

前句は、海棠の花を銀皿にしぼりとる業也。後句は、花の陰に海棠の枝を剪ちらしたるありさま也。前は海棠の花ぶさをいひ、後は海棠の剪枝をいふ。花の陰といふたは、根のある外の樹也。そこで正花はべつ〳〵になりて、海棠にはかゝはらぬ也。

一句の中に花の字・櫻の字を遣ふた句も、花と櫻とをひとつにならぬやうにいひとれば正花に成也。たとはゞ、

世の花におくれて一木山ざくら

是世の花は過去也。山ざくらは現在也。

道ぬかる花の山口はつざくら

是花の山は体也。初ざくらはよそほひ也。

又

花の比うかゞへば世はしづかなり

世はしづか也人群る春

前は、花の盛などに所〻へ遊山して見れば、いかにも太平の御代也といふた句也。後句はそれをうけて、いかにも太平の御代はしづかなりと語を重ねて、人群る春　と打返して、民の賑ひを附た物じや。もつとも此句はあげ句なれば、いよ〳〵其こゝろを用ひたる也。

○初裏の月より秋三句つゞきて、花の座にうつる時は、花前秋の句也。其時は心ある事なり。

露　霧　雁　鹿　相撲　などの類ひ、秋にも春にも取なさるゝものにて季をむすび、花の句へわたすべし。

又冬の句に春を附ゆく事、只月とばかり出たる句に、他の季を附出しゆく事は、前句をよく見込で、季節に無理のなきやうにあしらふべし。



### ○花前に名月出たる事

其角集花摘の卷中に、

名月日よし酒むかへ人

かぐや姫かへせと空に花ふりて

前句、酒むかへ人といふは、俗にいふ坂迎とて、旅より歸る人をむかへる也。よつて、日よしと上に置たる也。扨名月にかぐや姫は、たけとり物語に八月十五夜月の都より天人あまたあまくだりて、かぐや姫を迎へに來れるを、帝より二千人のふせぎを遣はされ、守らしめ給へども、終に羽衣を打着せ、車にうつして天上せしありさまを花ふりて　と一句に作りたる也。是等は俳諧に古今未曾有の附句にて、尋常の手段には及ぶべき事にもあらず。よく〳〵翫味すべし。

ある日他郷の友人來りて、附合のはいかいを催せしに、一ひとつの小冊子を出し、ひそかにこれを見て又懷にし、

やゝもすれば又とり出て、是をかくす事あまたゝび也。
余いふ、吾子がもたるものは何の書にや。かくは他見を惜しまるゝぞと。客いらへずして余談にことを紛らすを、とかくこしらへすかして、終に閲する事を得たり。客いふ、われ夜半師に随て俳諧を學ぶといへども、暫く郷を隔て道を聞とのまれ〳〵なるを深く歎き、からうじてこれを得たる處也。時に師曰、此稿や必他見にはゞかるべし、予かつて議論に筆とる事を好まず。然ども汝が執深きにめでゝ、これを與ふもの也と。故にこれをみそかにする處也。足下此書を奪ていかゞし給ふやと。余いふ、今蕉門の俳諧世に行るゝといへども、其事を委うする人、五指を屈するに過ず。然るに此書や、初學を手引して道を廣うすのもとひなれば、我これを印刻して、世の好士にも見せまほしくおもふ處也。もし師の命に背くの罪輕からずば、我足下に代りて三十棒を受べしといふて以て、終に梓行に及び侍るものならし。

汲古堂佳棠誌

天明丙午歲霜月朔旦冬至日

平安書林　井筒屋庄兵衛
田中莊兵衛

芭蕉 其角 嵐雪

# 點印論

几董

# 點印論

## 序

夫俳諧の句に点印を用ふる叓は、貞德居士の花の下を受繼れし貞室宗匠にはじまりて、正風の祖とあふぐところの芭蕉翁も点印を用ひ給ひ、及、其角・嵐雪の高弟子も專ら點印を用ふる事を業とせられしなれば、かつていやしみ遠ざくべき事にはあらざるべし。されど近世俳諧に遊ぶともがら、一座一興のはいかいをもて、判者に点印を用ひさせ、句毎の点高をもて、專甲乙を競ひ、勝負を爭ふ事を好めるよりして、其業いやしき事になりくだり侍る。ことに中比、半時庵淡々よりこのかた、点數何百何千など倍して、句に高判を得ル事を面目とし、作者の張、附わたり連綿を論ぜず、一句に判を得る事に泥ミて、屈曲奇怪の句を工み、俚語放言を用ひ、或は孕句をもて席に臨み、あるは他の句を盜などして、ひたすらに勝ん事を欲し、終に風流雅趣をうしなひ、實にいやしむべき戯とは成けらし。然るにちかごろ俳諧の風義、都而いにしへを慕ふに及で、点印を用ふるものといへども、昔の如く一点二点より倍して、十印廿印を限とせるを當流とす。略その業古に泝るに似たり。然ば判じて一卷の佳批を定侍るも、附句は專一卷の連綿を考、二句の附肌、三句の轉、有心・會釋・逃句等の時に宜しきを賞して、点印を加ふべき事也。又發句に点印を用ユル事は、一句の品を定め、或は番へるものは、左右の勝劣を分ッのみなれば、和哥者流のうた合などに比して、畢竟判詞を略し、点印の甲乙にしらしむる所也。もとより席上の衆議判・討論などは寂蓮・顯照(昭)の獨鈷鎌首、あるは因恭・良暹のまくり手の難陳など、いにしへの例もあれば、尊卑老若をいはず。互に問答して道を勵むべき也。當流附合の俳諧をもて、点印を試侍るには、作者も判者も心あるべき事成べし。猶はた一座のはいかい、時の出來・不出來有。又連衆の巧拙有。されば點印を加ふるにも、其卷中の位に應ずものなれば、たとへ句に高判を得たりとて、作者のほこるべき事にもあらず。又さしもなき句に、高判を加へたりとて、あながち判者の麁忽にも極まらず。もとより作者の

巧拙、判者の識不識有て、一座一巻の上の甲乙と知るべき也。こゝに著すものは、芭蕉・其角・嵐雪など先達堪能の人々の引墨、点印の論解也。これを以て俳諧に點印を用ふる事をしるべし。

夜半亭几董述 [印]

天明丙午秋

## 應變論

墨引、点印の事は、中古洛の貞室にしてはじまり、みだりに其印を用ふるものあり。祕して用ひざる者有。今更一決しがたし。よつて幻住庵の冬籠に正秀・尙白等がもとめに應じ、木哥沛哥の引墨を正し、俳諧に十五印の高下を分チ置事は、桃靑がわたくしにきはめるとおもふべからず。

一點

初心の風子、五字・七字にも手柄なく、座の句題にかなふ時は、此墨引を用ひ、少し志厚きときは傍に珍重など然らんか。

二點

二点は兩用に評し、珍重あれば三点に及ぶ句也。しかし全篇の楚にも見えがたき也。

○喚鴣

二字印は都而句意の楚の引墨と辨へ、尤吟聲新しき時の用と、よき附合、其人・其場の中の句にも出すべき用もな

く、能を能とあらはす丙(而)已歟。

○岳楚月

三字印は六印の爲也。時分・時節よろしくいひかなへて、稱美の時に用ひ、尤、俤・觀相の兩用に押も有べし。

○芙蓉樓雲

四字は八印也。天相・觀相・俤等の手柄を、楚の秀逸とも見定めがたき其時は(原註)ホノマ、

○長安夕鐘華

五字印は全篇、玉の玉たる句を擧るにも盡す。

○舟登成帆土成風能芭蕉哉

芭蕉の舟は貞享のむかし、東武の深川にして、予が庵室の号と世に呼れ、今さら廢しがたく、十五印の摸樣になすならし。都而は三点も楚と心得、見分る句をば、判者作略して手柄有べきにも、發句・附合に點印の多少を分ッ事は、人の頭立てその身持よく〳〵心得べし。

桃青

附言

右の應變論といへるものは、略世にも傳寫し人のしるところ也。既に往年、賀の見風がかすみかたといへる集中にも、これを摸寫して著し侍れば、蕉翁傳來のものとひとむきに心得たる人も多かるべし。然ども其文法全篇、恐らくは後に、門人の附會せるものならんもはかりがたし。是に限らず、蕉翁直傳といひもてはやす書籍少からずといへども、いまだ其眞僞を分明にせざるもの多し。翁を敬、道を大切におもはゞ、麁忽に誤を傳ふべけんや。爰に蕉翁の古主、伊賀の國なる藤堂探丸子の家に傳えて、芭蕉翁の引墨を加えられし俳諧の一卷有。これぞまことに翁の奥印等も正しきもの也。しかるに其おもむき、右の應變論と違へるところもあれば、かの眞跡を乞もとめてうつしとり、爰に著し侍る。猶兩用相かうがへ、後學のとる所に任ずべし。

芭蕉翁引墨奥印之寫

## 歌仙了解辨

（花影上欄干）（新月色）（廻雪）

日〱愚判を加ふる巻ごに、五字を向上の句とし、三字を奇工に標し、二字を抜群の句と沙汰し侍る也。今十哥仙の門人は、一筋に予が方寸を察する徒なりければ、雁字一屯の點心を見せて、一ゝに句評をせんも今めかし。しかりとていづれも〱面白しなど、めでおくもなげやりなれば、そのぬしつかれたる句どもに見安を定め、作者の勵みあらしめんと、巻末に趣をたて侍る也。句は張良が胸中の兵のごし。日夜にわき出るものなれば、一句〱の新古は見ん人も思ひゆるさるべし。さしあひ・輪廻まゝあり。夫も其一句の死活を考合て見ゆるし有べし。新式にも專、用捨の字を分たり。無言抄にも貴人・少人の句は、面などかはりて、さしあひなどすこし近き事ありとも苦事也。句遠なる人には指合ありとも、少聞えぬ句也ともうけとるべしと、是一塵無望の沙門、人我を忘れ

給へる教誡也。さし合くりといわれんより作者哉といはれまほし。ある人點意おもしろくや有けん。

戯賦一絶呈二几右一

愛ス君ガ滑-稽一時ノ豪　雁字帶ビテ霞ヲ入ル彩-毫ニ
想ヒ見ル梅-花門-裏ノ月　不レ知ラ誰ト與ニカ定ン推敲ヲ

心水道人稿

應和句　たゝく時よき月見たりうめの門　其角

哥の點は八分とかや。詩に圏批楚滿の四點有。●圏也。一点の如くに長く引く句の章を褒美す。楚は長點也、たとへば三五夜中新月色、一字も屑なき句を、楚（スハエ）のごく立のびたる姿にたとへたり。滿は七言四句滿足せるを以て、廿八字こと〱く一、を點じて義を分たり。俗に四点八点と云は、その判談の詞に爲レ持と同じ事なり。たとへば圏一、の文字にて、詩の章面白く成ゆへ批點を倍し、批の章に楚の位を倍階して、をのづから滿リと褒美したる、一詩の八点に

むかふ心を以て、もの事にけぢめなきとを、四点八点をとらぬといふ也。此事、梵千長老に承りて、俳諧に倍点を用ユル事をはじめ侍る。それよりして家々の點形、物數奇かはる〳〵に風流をつくされたり。ことしより花影上欄干の字、新月色の字、回宙の二字に改め侍るも、此道雪月花の三を專らにかゞやかすわざなれば也。雁字は雲上に翔る句のひゞきに應ずるものか。屯字はその屯をとる也。尤句に群をなすの趣(題)のみ也。十哥仙に於ては、二字已上の評義、これ其勝劣を論ぜざるの旨也。

晋子　寶井

印式

加朱

朱丸

百花嬌語　翠蓋

壁玉簪　探荷

弄晩涼　探菖

## 取句法

一其角之豪壯、嵐雪之高華、去來之眞率、素堂之洒落各可法、麥林支考雖句格賤陋各々爲一家、亦有可取者、

一包括諸家者蕉翁也、而其角嵐雪伯仲蕉翁者居半、麥林支考之徒十之一丙(而)已、

一世有稱蕉門者特不知蕉翁之風韻其所吐句、偶所論不脱支麥之俗習、稱之伊勢流或美濃流可也、豈得曰蕉門乎、人號曰田舍蕉門知言哉

一意匠体也、而於則用也、雖而於則調聲意匠

卑俗者不足取、譬若使蹇人穿金甲持花戟、人見則曰盛哉、而敵兵咫尺白刃臨頭、居然俟死者、徒是填溝之具耳。然則意匠善而於則不調可乎、而於則不調則理不通、還是喩有啞人懷胸天地經緯之才、欲說秦楚圖縱橫、而不能說、撫心指口吶々然止者、亦無所用。

一知俳諧之大道無他、嘯月賞花使遊心於塵寰外、常友蕉翁其嵐之流亞、專以脫俗氣爲最。

一選句之法、席上各曰其志專討論不可憚、他門或面諛或屏息而退誹他者不容再出席。

右ハ古夜半亭會席の壁書なるを、今爰に附録して跋さす。

京極第五橋頭

汲古堂梓行

俳諧雪おろし
蓼太

# 俳諧雪おろし

## 序

雪颪は吐月亭の夜話也。門人其意味を翫んで、かしこに留め、爰に摸寫して文字甚異す。風斎深痛て師命をしのび、再これを校正して予に序を求む。嗚呼芭蕉去て五十年またはせをあり。世尊八千の往來、一棒の下に破却畢ぬ。

一默如雷

## 序

ことし長月の末つかた、上づさの鹿野山に相しれる沙門を尋て、黒戸の濱づたひのかへるさを、爰の吐月斎にとゞめられて、漸初冬の半にいたる。一日入門の何某、一書を携來り、是や江府の親友のもとより、今もてはやせる誹書なりとて贈れるよし。此ほど予が手引なす所に附合の相違少からずと、不審紙ものしてその是非を問ふ。やがて披きみるに、江戸二十哥仙と題し、おの／＼獨吟なり。句は其角先生の余風をうつし、みるに目覺る事ども多し。爰になげくべくは、晋子の活風多く東都に殘り、又多く東都に破る。我此さかひを辨ぜんとするに才短く、殊更二十人の作者のうち、逢へば物語ふ旧交の人よ少からず。いかで長短を論ぜんやとかいやり侍れば、又此とし頃、爰の國・かしこの里に、はなし置る師説の無下に成行んも、やむごなきひとつなれば、終に無用の舌を動し侍るを、あるじの筆まめに書とゞめられて、あやしり。の一冊出來ぬ。猶恐るべし。句は口にまかせて文過當な反故になし給へと、しひて乞にゆるさゞりければ、さはおほへの一かたとなして、人にはゆめ／＼見せ給ふなと、此端書を殘しぬ。

寳暦元未のとし初冬　蓼太

## 二十哥仙作者

湖十　盤谷　和推　存義　有佐
平砂　米仲　祇亟　買明　秋風
樓川　渭北　木髪　旨原　和專
紀逸　再賀　石腸　蝸名　馬勃

連中間、此二十哥仙の序に、延寶の二十哥仙は芭蕉翁の花なり、此二十哥仙は延享のとしの花にして、猶交りの實を結ぶ。されば誹諧の變化は時の花に流行すとも、正風の誠は霜にいたまず、あらしに散らずと有。しかれば延寶の二十哥仙は芭蕉風第一の誹書にや。今蕉門家にては冬の日・猿みの・炭だはらなど三部集とも云べきよし、先生此ほど御物語の所なり。此意いかゞ。蓼太答、是能不審也。されば天和・延寶の誹風はいまだ談林風最中にて、芭蕉翁も宗房といひしころ也。夫より貞享甲子の冬、尾張五哥仙に談林風の古躰を破り、續て春の日にひかりをかゝげ、曠野集・瓢集に正風を見ひらき、去來が猿蓑集におゐて漸姿情定りぬ。此序は此人々の祖とする其角先生、



蕉翁の趣意を請て、一部をつらぬくの文あり。序幷糸ざくらの句、其外口傳もありとぞ。誠に是をこそ芭蕉翁の花とも實とも申べけれ。其證は其角が序に委しければ、今述るに及ず。しかるを此歴々の宗匠達、延寶の二十哥仙を今世の誹諧の花に用ひらるゝ事、深き意趣あるやしらず。

延寶二十哥仙

素盞烏の尊の覺わろければ　（卜宅）
　神代のむかし鯨竹箆
血が寄てから紅の尻こぶた
　猿の如にはなられける哉

又

夕月の赤い紙にて日を張れ
　これはあの世の西瓜の責か

又

猫の戀ふうふといがみ給ひけり
遊花老人序を述て後の上戸を待　（卜尺）

天和・延寶大むね此類也。是を花と用は、すみやかに談林風をするが能也。其角流いらぬ事なり。我思ふに延享・

延寶はよき廿哥仙の對なれば、乎風思ひ寄るものにや。夫は又めつぼうかい也。恐多き事ながら代々の句選を始、古人の編る誹集等、其序篇を撰み、撰者心を合て調るものとぞ。今東武には古老も死うせ、適我師のごときも誹風をうとみ、他門にかゝわらず。されど遠境にはいまだ蕉門の血脈を傳て、古風を守る人々も多し。然るに東武は蕉流の水上也。彼門人に其角・嵐雪を持りとも書れたり。其水上よりかゝる集、編出し侍らん事、返す〳〵も殘念千万なり。

又問、此集第四巻に、

　　ほとゝぎす蚊喰鳥又かんこ鳥　　存義

又第十巻に、

　　天満橋天神橋や難波橋　　秋風

又十二巻に、

　　百千鳥稲負鳥呼子鳥　　渭北

是等、集一部のうち苦しかるまじきにや。後學のため御尋申候。

答、されば此集一部といふうち、二十人が獨吟なれば、いさゝかゆるすべきか。去ながら此集編る時に二十哥仙をならべて、さし合・つけ合の吟味なき事はあるじ。其時前後をくり合せ改正すべき事也。一部を讀時耳にかゝり、此不案を得る。此風調は蕉門に拍子付と云て、一巻のつまりたる時か、又はねむたき句の續きたるを走らす付方也。是等を見とりにやられたるか。よく一巻の拍子を覺る時は、かやうに物の名三ツならゝ出すに及ず。心の拍子あり、言語の拍子あり。たとはゞ、伊勢の凉兎が三疋猿に、

　　燒もちの二ツともへに三ツとも、

　　　雪折れ竹にちよつと葺

是拍子也。天神橋・難波橋のめつぼうかいにはあらず。二ツ巴・三ツともへに、雪折竹と紋盡の拍子に受て、しかも燒もちやのさまをゆるさず。又疊字の格などいふもあり。

　　琵琶に拍子を付てさゝ波

　　さゝ波や雪の花散る星月夜

是等は詩格也。又近來東花坊の古今抄などを讀て、蕉門にもみだりに好る人あり。此句の譬といはゞ

菫の柵に鳶を詠めて

鳶の居る花の賤屋とよめりけり　芭蕉

此句は古哥どり也。口傳なくてはよろづの事あやまり多し。今の三つもの盡し連はいふに及ず。又誹諧の連哥と端つくりいたしゆ意味をよく／＼嚙分ては、かの橋盡しのやうに、みだりなる續ものはならぬもの也。誹諧のつらね哥といふ事なり。其つらね哥がはなれ／＼にては何を魂とせんや。且一句ばかり面白くして濟事なれば、蕉翁・其角・嵐雪、何ぞ今の誹士におとらんや。一句巧みにつけても、面白くとはいかぬもの也。第一續ものゝ魂とする所は附合也、はこび也。扨句作り也。点する人にも其心得有べき也。口傳前後も見ず、点かくる事、三神の冥罰恐るべし。抑古風は天隨放逆の四道ゟ、數百ヶ條に盡しがたきを、祖翁始て十五法にちゞめ、しかも千變万化をおしゆ。其後支考七名八躰ゟ作る。

十五躰

其人　其場　時分　時節　離附
違附　迎附　向附　心附　理附
景情　響附　馨　寂　撓

右蕉翁より嵐雪・周竹・吏登・蓼太に傳。其角、伊賀原松ニ傳。

七名

起情　向附　拍子　色立　有心
會釋　遁附

八躰

其人　其場　時分　時節　觀想
面影　時宜　天相

右東花坊再撰

しかし是等は初心の手引にして、一段高みよりは好むべからず。

右十五躰は證句どもも見せ可レ申ゆ。先右の附合にあてゝ見る時は、二十哥仙のうち五六ヶ所ならで、蕉門のはこびに叶たる所なし。其上一句巧みに紛らはしたるものなれば、是も蕉門かと初心のまよひのひとつなれば、一卷のうち一二ヶ所ヅゝ附分て見せ可レ申ゆ。歷ゝの句を斯く猥に取こなしゆ事、かへす／＼おこの業ながら、我あしき

を又人あつて難破せば、これもよき修行也。殊更其角・嵐雪は蕉門の高弟なり。其門葉に邪あらば、正して他門のそしりを除くべき事ならずや。

第一　　　湖十

梅折ればをのれも動く月夜哉

初いなびかり雲やりの末

大名のさき荷に小鳥囀りて

先此三つ物のうち、二の句、脇は扨置あはれにも心もとなし。只夜分にいなびかりと寄たる迄にて魂なし。抑、脇は古來よりして五躰の證句あり。

打添　對附　違附　尤附　頃留

是を證として一軸第一の魂也。古人腸をしぼられたる句多し。彼蕉翁の冬の日といふ集、脇より一部の号を産り。脇は發句の余情を尋て、一句に作意を求めず附るを第一とす。たとはゞ此句に、

梅をればをのれも動く月夜哉

初子もどりの花の君達

殘の雪のちりかゝる垣

はじめの句は大宮人の醉狂にして、花盜人慥成るべし。後章、鑓梅のさし出たる場也。雪の散かゝるは梅折の粧ひなり。殊更雪後の月あざやかに、朧もいまだ引はへぬ比成るべし。此二句はよきにはあらねど、一向附かぬとは云べからず。

初いなびかり雲やりの末

大名のさき荷の小鳥囀りて

第三は一轉の場にして又句法あり。杉形・太山など云ふ事あり。口傳。たとへば親子に聟、客人に相伴ともいふべき程の附合にて、餘りしたしからず、疎からざるを專らとす。此第三の句、旭に鈴ふりたる馬の勢ひ也。前句は初いなびかり、夜分に村雨の姿なり。此句どこへ付たるや。此いなびかりを其儘置て第三の句をなさば、前句の雲やりのすへと見わたしたるは、さる山莊などゝ見て、

高欄に端山の春を配らせて

ともあるべきか。此外いろ〳〵あるべし。

大名のさき荷の小鳥囀りて

鳥を見ればむら雨の跡

一艘と二艘と渡し漕わかれ

四句目・五句目又むづかしき場也。今四句目を輕〳〵とばかりするものと覺へたる人多し。むせうに輕くするにあらず。附合一句の仕立やうに習ひあり。此鳥の四句目、第一打こしあしゝ。いなびかり雲やりの末の氣色、全くむら雲立たる夕暮とこそ見るべけれ。殊更一句も四句目に叶ふ姿なし。若此第三に附けば、

大名のさき荷の小鳥轉りて

痛よと呼べばふり返るなり

此句にかぎりたるにはあらねど、さは馬士・駕舁のおのが國所など互に呼も、呼れもする旅中のおかしみなり。旅は風雅のやつれ多しと古人の申されけるも、か樣の所に分別あるべき事にや。哀さも嬉しさも只旅に多し。

四句目　鳥を見ればむら雨の跡

一艘と二艘と渡し漕わかれ

是は今日誹諧仕習ふ人、若き人も知る所のさし合なり。打越も旅中の乘物也。船ゆるすべからず。渡し舟は旅にも限らねど、三句のはこび一ツ也。馬も駕もわたし場の用に籠るべし。返す〳〵も稽古の有べきはおもて也。鳥の句に五句目つけば、

鳥を見ればむら雨の跡

夏畑の戰ぐものには麻斗

ともあるべきか。鳥を見れば村雨と疑ひたるは、降りみふらずみに雲の峯の立續て、そよぐ物には麻斗と見付たる暑中のあしらひ也。斯くひとつ〳〵に難破せんとにはあらねど、此一卷は卷頭にて別して罪深ければ、表斗もと四五句がほどを別けて申なり。是より卷々のうち目立ゆ所〳〵申べし。先此卷第一の禁句は、

御秡の古びに冬を待れけり

名もいろ〳〵に下のゆみはり

あづまかた在番城の夜半の秋

今や在番城といへば京・大坂・駿府等の御城なり。さるは勤士嚴重にして大坂は西國を押へ、二條は皇都を守護し奉り、駿府はまして武江にも近し。いかに誹諧の談笑なれば、迚斯く猥なる句をなすや。連哥・誹諧ともに道とする所は、其物〳〵によそへて己を正し、君をも諫め、神佛

の加護にも預らんとこそ有べけれ。そのものに感動する時は、小町が雨乞恐るべからず。近く其角が夕立の吟に雲を起す。あふぐべき道なるぞや。今此あづまかたの類は婚亂尾籠の句にして、親子兄弟の同席にあづまかたしらぬ人ありて問ば、いかに答べきや。殊に前句には夢ほども附ず。只、弦に夜半の秋と寄たる斗也。むかし芭蕉翁は門人杉風が耳のうときをなげき、一生聾といふ句をし給はずとぞ。是等を風雅の信ともいふべけれ。其外古人しめし置かれたる禁句數をしらず。たとへば菌などほど穢たるはなけれど、田家の樣に作り侍れば一興ありて、例の吾妻がたに遙にまさり侍る。

　夏鴉(カラス)を涼しいと思ふやう
　　うは菌匂ふ畑の夕陽

此外小便とも尿ともすべけれども、あづまがたは用ゆべからず。遣手とはおかし。及(ビウ)とは今めかしく、附句にならずと申されし明師の金言をもこゝに知るべし。

　御秡の古びに冬を待たれけり
　　名もいろ／＼に下のゆみはり

若此句に付んとならば、有明のさまかぞへたるは、心得あるべき旅人と見て、

　玉味噌も馴行く露の哥枕

熊野路の糠みそ・木曾路の玉みそに、面痩たる都人の姿なるべし。さら／＼此句に限りたるにはあらねど、吾妻かたにはまさりもすらん。

第二　　盤谷

　明星とむかひ合たる蛙かな
　　艸の若葉も結ぶたそがれ

此脇心得よ。草の若葉にたそがれは、蛙の明星にさしむかひたる時分に、場のあしらいともいふべきが、むすぶとは何をむすびたるにや。是初心をまどはす紛かし也。草の葉のむすばるべきは、夏野のいかにも茂りたる比成るべし。草の若草は芽出しより、いさゝか青みたるをいふ成るべし。又同じ卷に、

　はづかしくはな血のかゝるすへり莧
　　屆かぬ竿へ爪立る妻
　つのもじのいの字もこひに書れたり

先此句をあぐる事は、近來後家・女房・娘・樒・かうがひの類を戀と定む。是前句を見立ずしては戀にも限るべからず。女房・娘たとへば傾城・野郎とても人倫のうへのあつかいにて、心に戀の有時もあるべし。飯喰たしとおもふ時も有べし。されども前句によりて、附句にしほりといふ事あり。一とせ柳居老人、或席にて、

　はや七年の後家を譽もの

　さゝやきもさせぬ寺子の法度書

此前句更に戀の心はなけれども、後家と出たれば、耶としほりて附たると申されたり。粉骨尊むべし。今いふ盤谷が句は、先鼻血のすべり莧へかゝりたるさへむづかしきに、女房の物干竿へ爪立る更に附ず。夫さへあるに、角文字のいの字　どこへ寄たる事にや。前句は洗濯ものゝ扱にて、姿にも心にも句中に戀なし。是等時分か、時節にはしるべき場也。たとへば、

　屆かぬ竿に爪立る妻

　二日とは跡の續かぬ小六月

　拜まるゝ雨のあしたの日の光

初の附句は時雨がちに、洗濯屋の小言いふ頃成るべし。後の雨は時分にて、旭の有がたさは雨後の干し物のあしらい也。女房に戀句附ねばならぬ事もなし。又句ひの花に、

　大名とむかひ合たるはなざかり

　楓もわかくむすぶ夕陽

此二章は發句のむかひ合たると、脇のむすぶといふ詞を癸にうつして、一卷の曲節にせられたると見えたり。無用の事なり。是は餞別或は追善等の時か、または冬の發句、脇を春へうつし、秋の表を花に咲かへらせ、其席の首尾を調る用也。猶口傳あり。殊更此揚句に楓も若くとあり。他門はしらず、蕉門には若楓夏也。楓の芽は春なり。

第三　　和推

　出代や枕の夢のをきどころ

　急に返詞の果ぬ春の夜

能々見給ふべし。これらは附ぬ脇なり。夢といふ字に付句をうばはれて、春の夜とばかりあいしらはれたり。此前句を摑かば、秋の夢とは戀ありと見て、

染てもらふた袖の春雨

かく附かば、書面に戀とはなけれども、傍輩中の忍ぶ山も、此春在所の歸辺申べき筈定りて、親父の迎ひに來る別の泪雨催成るべし。

　轡の音に起る末の子

筧にて自由の足りるたのしさは

是等こそ一卷の附所也。筧は山居・寺院などのさまにて一向取合ず。爰には例の曾我、中村の佛とも見て、

　鬼王は嬉しい時は泪ぐみ

かくあらば、其父に此子の勇氣見せまほしと袖しぼりたる姿、今も世にあるさま也。

　第四　　　　　　　　存義

　狼吼る遠山の月

　松茸がふればこそあれ松ふぐり

是等笑ふべき事也。先附合は耳に鼻ともいふべし。一句は松茸の男根に似たれば、松ふぐりもあるといふ句作成るべし。さなければ又一句たわひなし。いかに誹言なりとて前句へも馴染ぬ斯くみだりなる句有や。むかし其角が誹狂の吟を沾德が評に無点にして、かやうの句文臺に載べからずと朱書したりとぞ。是道を深く思ふなるべし。近頃は此類のしら〳〵敷句を好む点者どのも有よし。昔彼等より誹諧師は素頭持の三ぶと思はせ、詩哥・連哥の家よりはあなづられ、蕉門に正法のある事を失ふ。先此、狼吼る遠山の月　といふ句は、遙に見なして其山もとゐ覺束なくたどり行さまなりと。前句を見る時は松ふぐりに及す。戀の通ひ路とも、落人とも相場を爭ふ商人とも、附合は涌出べし。されば此打越、人倫の用あれば、

　狼吼る遠山の月

　戸にあたる嵐も冬を隣から

かく附ければ、夜寒の里の荒〳〵て狼は更也。猿の聲も吹來て腸たちぎるべき頃なり。又名殘のうら返しより、

　下厠宜も一つはもちぬ古ゐほし

　今はと見えて先日の灸

　花とのみ孫彦玄孫並居つゝ

されや匂ひの花は深き習ひあつて、三句より五句に至る春を二句にて止る。たま〳〵古人の引揚ていたされたる

事あれど、皆無用にはせず。全く此前句の元日の灸は、兼て新らしと胸に持たる句成るべし。さればこそ附けもせぬ所へ春をさし出し、せう事なしに花の句を引あげたるなるべし。先今はと見えたる場所は、寄添人も取亂してあるべきに、花とのみ並居つゝとは、衣紋つくろひたるさま也。姿・詞一向附ず。例の一句のおもしろみを好て、卷中をあやまる事斯のごとし。下禰宜の古烏帽子に元日の灸も何の事なるや。されど是非春季が附ねばならずば、

下禰宜も一つはもちぬ古ゑぼし
みやこの殘る奈良の正月
雪を出る若菜に花の旭影

かく附れば、前句の古烏帽子は春日の神事となりて、旧都の儀式殘りたるさまともいはんか。三句目八重櫻はいまだながら、雪に花の旭のさしかゝりて、若菜摘べき頃成るべし。句は筆にまかせたれば見る所有べからず。されど元日の灸、孫彦よりおとなしとやいはん。

第五　有佐

是より外のゆかぬ誹諧なり。尤千万也。

第六　平砂

猪狩は濟む芋を荒さん
角力取取上婆ゝにめぐり合
敵のしれた聟が大水

此大水聞えず。前句は角力取が我をとり揚たる婆ゝに、めぐり逢たるといふ事成るべし。持て廻りたる作ながら、是は堪忍もすべし。夫に、敵のしれた聟が大水　と如何付たる事ぞ。角力がかたきをねらふにや。前句に其姿も見えず。

鐘の供養の門で押るゝ

せめてかくもあしらひたらば、足弱のもまれ居る群集の中を、彼角力の何某が押分て、婆ゝによき座をとりてやりたるさまもあらんか。其場の會釋なるべし。

第七　米仲

若竹のあたまくだしや雷の音
かまきりの子も這まはる句
おしまづきいかなる哥をなさるらん

此脇、四季の七十二候を讀やうにて風流微塵もなし。いか

に文字にて留るものなればとて、句とは手づゝなり。かまきりの子も這廻る也　として脇にたる事有り。習ふべし。其上發句へ附ず。雷發し若竹の漸くそよぐ比は、蟷螂も蛇も這廻るべけれど、夫は理屈にて、前句をにらみたる手柄なし。第三又下手也。なさるらんといふらんも手づゝなり。

若竹のあたまくだしや雷の音

螢吹ちる闇の外屋しき

里下りの娘に御所を咄させて

かく寄たれば螢吹ちるは、夕立風のうつろひともいふべし。若竹に外屋敷の生垣また有べし。第三は御袋まじりに端居して、御所の儀式咄に小夜も更ぬらん。

第八　祇亟

鳥影の花の中行牡丹かな

上手の建し新御所の夏

此發句は一部の秀逸成るべし。其頃は空よく晴わたりて、若葉に飛かふ鳥の影もいと嬉し。さるを、花の中行　といひとりてかの大輪を見せたるは、あつぱれ手だれと見えたり。しかるに此脇は發句に雲泥の違ひ也。上手の建し　といふ七文字、前句に用なし。かの夏をむねとあるより思ひ寄けるや。

若葉青葉に御所の袖垣

かくいはゞ、往かふ鳥に若葉のあしらひあり。無用の新御所とは違ふべし。此作者、發句斗ならば中〳〵ゆかしからん。

第九　買明

物賣も五月は雨をかつぎつゝ

花とのみ孫彦玄孫並居つゝ

此手爾葉、はじめ存義にも、上の句のつゝ留むづかしきもの也。師傳なくばあやまる事多し。此二句留らず。買明が句は、もの賣もさつきは雨をかつぎけり　又、孫彦玄孫うち詠とか、並居させとかならで留りがたし。むづかしき事をせんよりは、たゞ似あはしきへけり　などにて留よかし。

又

目の働らきも水車守

思ひ出て氣の改るところゝ汁

　胴人形の白〳〵と立

いづれも付かぬうちにも、此胴人形は餘り構はぬ仕方なり。ところゝ汁の白みより座出したるにや。是等又付たき所也。先氣のあらたまるところ〳〵汁なれば、鞠子の宿とも見て、祖翁の梅若菜のむかしも思ひ出らるゝを、

　猿みの集に時雨慰む

ともいはゞ雨に簑の掛合ありて、一句も胴人形に餘りおとるまじき歟。

　　第十　　　　　　　　秋風

脇より擧句まで附直さずばなり申まじ。爰は休み。

　　第十一　　　　　　樓川

　引舟めくぞさらし井の綱

伏見なる喧嘩噺に又喧嘩

　弓矢八幡山の百性（姓）

此付句、蕉門第一嫌ふ事也。むかし尾城の露川がある卷の中に、

　拷問は辰の刻より暮る迄

　大地にひらめ付て酸漿

此句を支考難じて曰、大地にひらめ付て　は前句の拷問のくるしき情をはこび、扨かたばみ草にて下を紛かして其場のあしらひとす。是奮門のまぎれもの也とて八躰の論あい。此樓川が弓矢八幡とは、前句の喧嘩の情をはこび、扨山の百性と紛かしたり。是等もじり付也。他流なれば此論に及ばず。芭蕉流を尊るゝ一集の趣なれば、詞と句との相違を申也。同じ人ならば、

　裸ぐらしも古い雲介

かくては酒屋のみせ先に群居る雲介の中にて小利口で、伏見の喧嘩、大坂の五人男も見知たる野らものゝ高調子成るべし。

　　第十二　　　　　　滑北

　人ひとり通らで雁の水鏡

藥にてたばね稲荷ふ髪

此脇二十哥仙の不出來也。先脇は發句の意をよく嚙分て、已を立ずするものゝよし。客發句・亭主脇といふも、發句を客のごとくあしらひ、亭主の氣儘にせぬ様にとな

り。第一此句、廻文を讀む樣にて口のうち先くるし。此
句に脇せんとならば未景情足らず。是を補ふべし。

堤横たふ月の夕榮

隅田・熊谷の長堤とも見るべし。

第十三　木髪

鳴時に男鹿は角をかつぎけり

此發句切字ありてきれず。へ也　けり　の類は切字とい
ふ名目にばかりもたれて、切字の道理をしらず。故に此
たぐひの句あり。されば古人の詞にも、いろは四十七字
ながら切字ならずといふ事なしと、爰を能く考べき事な
り。しかれば切字ならぬ假名も、作者の遣ひかたにてた
ちまち切字となる。へやの字の類の手近き切字も、未練
なる作者が遣へば切字にならず。此さかひは至て深祕な
れば暫く口を閉。

見わたせば花も紅葉もなかりけり

是哥の上の句也。なかりけりは切字也。此道理をよく濟
し給ふ時は切字は明らかなり。はんじて見給ふべし。

第十四　旨原

六ッ七ッ下の男を誘ひ出し
死なば共にと臍を押へて
帷子の曉さむくよれあがり

此三句のわたり、我門の作者にも時々有事也。能々聞給
ふべし。打越の誘ひ出したる人より、帷子まで一ッつゞ
きなり。此作者も曉と斗思ひ寄せたるべけれど、帷子の
よれあがりたるさま、全く寐みだれながらうかれ出たる
仇人の姿なるべし。爰は時分か其場にて有べし。

ほとゝぎすまだ夜は寒き星明り
四阿屋に雨吹入るゝ山おろし

はじめの二句に、心中とも欠落とも姿は定りたれば、三
句目は死手の田長の一聲も身にしむべき其夜の粧ひ也。
次は只旅中のいふ立の一やどりながら、さは瞬の一字も
ゆるすべからず。

第十五　和專

これも秋風に似たるもの也。

第十六　紀逸

風ひかぬ人の日頃やあじろ守

此句うごきて發句にならず。風ひかぬ人の日頃や寒念佛鉢たゝき　夜興引　とも成べし。されば月・雪・花・時鳥は更なり、四時の降もの迚も其風姿〱備りて、春雨は眠く、夏の雨は嬉しく、秋の雨はあはたゞしく、時雨は淋し。そのあはたゞしきも淋しきも、時候のおこなはるゝ所にして、己が情はそれにうつるならんを、爰にいふ紀逸が句は、風ひかぬ日頃とおのれが情を先にして、網代守の風姿をいはず。よつて此難あり。姿情の論は、東花坊などの諸集に筆をふるはれたれば今更いふまじけれど、聊動くとうごかぬの境を證句を以しらせ可レ申ゆ。

我家は酒に賣てや網代守

今少し年寄みたし鉢たゝき

彌兵衞とは知れど哀や寒念佛

我笠に月夜忘るゝ夜興哉

興夜引は冬の夜山狩する事なり。

何れも寒夜の用ひあるものながら、一ツひとつにすがた**かはりてうごく事なし。**

**又**

月の梢にかへる花鳥

抑月花は一巻の陰陽にして、古人共定座をなし置るゝ事深き意味あり。しかるを斯く短句に月も花も結び捨る事あり。隙明やといはぬばかりなる仕方なり。但短句に月花をむすびたるが自慢なるや、面白からぬ事なり。

第十七　再賀

葱大根に低い水際

輪違は素人がましく思はれて

此句聞えず。何とて輪違ひが素人がましき歟、合点ゆかず。思ふに是は當風の二ツ紋・三ツ紋・加賀紋の類ならねば、古風にてやぼらしといふ事にや。己がこゝろの媚におもひくらべて誹諧の不易を失ふ。しかも紋所の句とも聞えず、此巻見るに足らず。各〱にも分別あるべき事也。蕉門の誹諧は、峠まで登りたらば又麓へかへりて、もとの古道を忘るなと祖翁のおしへなり。輪違の行過人に成給ふまじ。己が輪違ひを素人がましく思ふとも、又いつか變化の時ありて、加賀紋のいやみならん世あらば、忽**此句は聞えず。是流行に走りて足もとの不易をしらず。**

恐るべきは別て此一事なり。はじめにも申す通り、此二十哥仙、筆を立なば脇より擧句まで一事もゆるすべからず。さは長〳〵しければ一二ケ所づゝ申侍る。もらしたるを能きとな思ひ給ふべからず。猶末の三卷は皆亡人なり。同じ事いはんよりはと口を閉侍る。

跋

ことし初冬、師叟雪中菴主、茅舍に杖をとゞめられし折から、門葉何某、東都の二十哥仙といへる一集を携來て、師に其響間を寫し、其明答をしるし、終に一帖となりぬ。思ふに我門の高きをもつて、世の雜誹を吹しめされければ、雪おろしとやいはん。

南總　吐月

# 俳諧 蓼すり古義

雁宕

# （俳諧）蓼すり古義）

延享廿歌仙の序曰、延寶廿歌仙は芭蕉翁の花也と書たり。蓼太是を難曰、天和・延寶は俳風いまだ談林最中にて、猿蓑芭蕉翁宗房と云し頃なり。貞享甲子尾張五歌仙に談林を破り、猿蓑に姿情定りぬ。延寶廿歌仙を引句今の俳風に用らるゝ事、深き意味あるかしらず。

答曰、正き本據有ゆへ書たるべし。武さしぶりの北村季吟子の序詞に、天和二年誹諧の花の時、錦帳のもとに於て、季吟序す。其卷頭、

梅柳さぞ若衆かな女かな　桃青

是談林中を以、芭蕉翁を花と爲證文也。また若葉合の跋には古山夕がしかと、延寶二十歌仙ははせを翁の花也と有ゆへに、其文をその儘に採て書たれば、聊も誤に非ず、深き意味有に非ず。淺識古說を辨ざるは不レ知。季吟子は翁の師、山夕は同時の古巫、花實の時を知人明證也。世に花實の時を云は、其始〻心得たがへておる故斯の如き不審あるか。猿蓑集に姿情全く備りたるは則實たる也。然らば天和・延寶中を以、芭蕉の花と爲ずしては何れの時を花と指べき。延寶に花ならずば、其角・嵐雪を始め、東都の英士豈桃青の門に入んや。五元集に、延寶に桃青門に入こ實を萬ゝ議。正風已後の入門は後たる也。正風成就の時を花といはゞ、何れの時を以實といはむ。其期更になし。花實備れりと稱するは、翁の俳諧業成て編集の句ゝ整たるを云べし。翁の花の時はいつ、實の時はいつといはゞ、山夕が斷りたるが如なるべし。

是隱翁は七部の集も他撰にして、みづから撰者爲らず。是隱逸の德行にして愼の深き也。邂逅此廿歌仙のみ、しかも東都の選なれば時代風躰に拘らず、溫古延享の知新、花と爲に聊も異義なき對号也。

延寶廿哥仙を今の俳風に用るやさの不審、太タ拙し。古集標題風躰に拘らざる事、宗鑑が犬筑波を始、古今通稱。(注)

時鳥蚊喰とり又かんこ鳥　存義

呼子鳥いな負せどり百千鳥　調北

天満橋天神橋や難波橋　秋風

廿歌仙同調あり合不吟味也と難ス。

答曰、然り。惣て當世人の云時風する句調はせぬもの也。未練なり。其頃多有けるゆへ、三子同調も有なるべし。然れども古調なきにしもあらず。はせをの句に、

寒菊の後は水仙梅つばき

花よつを寄られたり。翁と雖再び爲は不レ佳。

續五色墨に

砧やらまな板やらに賃仕事　蓼太

漢楚やら三國志やらひけらかし

織五歌仙五人一席の同調は、不吟味猶増るべし。此徒、巻毎にやらやら耳にたちて聞ゆ。是も其頃はやり詞の俗にや有けむ。右の三物よせにつきて、蕉門の拍子見とり似せてなど嘲て、三疋猿の附合の拍子、翁の蔦に蔦の附句を古歌取と、（是古歌を取に非、詞書に取たる也。）畳字格などを引て難たれども、爰には皆合ぬ事なり。珍けなき常談を出して、知らざる者を怖スの説なれば論に足ず。次に十五法七名八躰を書出して、蕉流に引合て、廿歌仙附合四五所ならでは合ずと難ず。

蕉流其・嵐の流は、七名八躰等は敢て不レ取。故有ハ蓼其門ゝ稱て其高論を不レ知。若問者あらば詳に答知しむべし。

其角が傳書は伊賀の原松と云者傳へ、嵐雪の傳書は周竹・吏登・蓼太と相續て、雪中菴の号を立るのよし、是虚号也。（周竹、雪中の號を不繼、嵐雪一世の號のみ。竹は半途にして業を變て醫と成、吏登、號を私ス。蓼繼て私ス。）原松もとより其角の親弟に非ず。晋子諸集の中に唯一二句あるのみ。原松二冊を繼て此傳を以て、其角流と稱る者は猩ゝ菴（近江八幡に今住ス。）晋子五十回に其末山を述、傳書に短冊を添て原松に附屬せりと編集に有。

罌食の焦て匂ふや霜の聲　晋子

是嘘妄也。此發句は播摩の立チ野法雲寺の住僧春色が追悼に送れる句也。（五元集に詞書詳にあり。）其短尺を何かたよりか得て、附會して傳書の證に、僞むものにして正しからぬ事なり。其角何ゾ東都の親弟には傳ずして、遠國一面の原松に統を繼の祕書を與べきや。余りに愚なる説也。蓼太我かたに傳へたるを一變の書とす。覺束なき傳書と成て心よからず。

附言　惣て傳書に據て俳諧道立チたりと、自ら許ス者は俗士也。明士は不レ爲。傳授に拘泥して廣博ならず。他

を拒ミ、偏僻の人と成て我情長せず。邇近善說を聽、又は今まで見ざる書の確論にても、我始メ習ひ得し偏執に引れて、心中には善シと思ひても自ら欺（アザムキ）て不レ隨、一生細罨の外に出る事あたはず。誹諧成就爲んと思はゞ其徒に居るべからず。旨指相傳など云事は決てなき事也。湖十卷頭より一ゝ難て皆非なりとし、蕉門の運びは斯ありと附直て見せたり。是を答る詞更になし。其故は今蓼が云ところは皆支考が言也。彼說とはもとより相反する勿論也。今更珍しからず。重て鬪論に及ぬ事也。若また雪中の意識も倶に蕉門なれば、同といはゞ論に及ず。嵜雪中を知ざる也。翁在世の諸集より其・嵐の什諸子と同からず、是則以所ニ爲レ角爲レ雪ー而翁も又嘆伏す。考證在多。翁の道は萬化無窮而不レ可ニ言說ー。得難き方を取たる都風と成、得やすき方を取たる鄙風と成る。人情隔離超易古今通思ヽ嗚呼勤て其・嵐の道を執ざる事は、貪著耳食の俳家者倶に同じ。唯新曲精工の異邦の作者及ざるのみ。今蓼が附かへの句の如き教を是とし學ばゝ、都下ノ年少三月にして得べし。豈難と爲奇と爲ンや。是唯村里に示スに可也。我旨に合ずとて自ラ好シといはむには、世俗の水かけ論にて少兒の戯也。俳風の是非勝劣を競には、句も說も不レ足レ論。何をか答べき。試に蓼に問む。宗を雪中に立て、邊國の蕉門をも隔て江戸蕉門と云よし。何とて嵐子の意氣を吐ず、其流其扱を敎ず。專ら支考が說を述、文勢句ぶりを似せ、伊勢流を交て導や。名の實なき則虛号と云。其・嵐の道を以難破せむには、頭を上る者有べからず。考が恒談なれば事ともせず、蓼を以鼎（モノヽカズ）とせず、答る者もなし。彼徒は東都に會通する事あたはず、他ニ移行を止むと。嗚妄何ぞ如是たる。雪中を信るに似て、其識を演る事あたはざるは自ラ知ざる也。彼輩の言フあたはざるは、雪中の高雅比倫なく言語同斷。晋子に於る彼等が始、邊國の俳士の察る所に非ず。故に悟入する者稀にして、異邦に其道波ー及せず、其見解なく虛名に誇り、猥に自讃他譏するか。其角が俳風に壞と云過當の語多に可顧、又尾籠を憎ム言し。

吾妻かた在番衆の夜半の秋　湖十

尾籠にて禁句也。二條・大坂・駿府等の勤番は嚴重の所也。不忠不義なりと事ゝ敷難ズ。

答曰、源氏・伊勢物語等の宮中閨面の不義は、人倫を以

咎めず。文章・詠歌の風流を以和國の至寶とす。假令ば武士の傾郭に通などは、禁固をやぶる罪大なれども、句のうへに禁るを聞ず。壯士の獨淫、不忠不義の罪を蒙る事迷惑千萬成べし。必愼てせぬ句と云は、難者みづから境界にかゝるべき戀句に、ある集かみは忘れたり。

旅のつまみ喰　蓼太

翁の蹟を慕ひ、行脚を以衆を道くを業とし、僧形なる者、かゝる尾籠の振囘や有べき。是等は當坐の耻のみに非ず。一句一生をなみす。

ひとつ家に游(遊)女とねたり萩と月　翁

旅泊の看哀れ深し。不レ可レ言感槪(慨)、行脚の俳僧等思ひ愧べし。存義が松茸の大口は罪も報もなく、湖十が句は自他にも遁るべし。芭蕉去てまたはせを有と云人のつまみ喰は、いかなる刑をか用ゆべき。

初いなびかり雲やりのするゑ　湖十

附直して　高欄に端山の春を配らせて

ワキ靄(クモマリ)を見やりたる遠望也。第三も欄に倚遠望なり。附直て見するには心得よ。一句も又是を執筆立チと云。此下モたがひたる事多く、附かへの句ゝ皆臭腐也。論じ述るは蔓莚にて、しかも無益、倶に愚かなれば不レ論。中に誤甚きもの、又説の言べき物、二三事を擧る。余は准て知べし。

思ひ出て氣のあらたまるところゝ汁　買明

附直して　猿みの集の時雨なぐさむ

田舍にやゝもすれば、猿みの集のあしらひ毎度なり。嵐蘭がよせ馬と云第三につきて、翁曰、俳諧に出たる事三ッ、いまだ出ざる物七ツ有べし。みつのうちを繰返し居る者古く下手なりと、蓼太も此說知たるべし。惣て附直したる趣向三つを出ず。本句はよからぬにもせよ。七ツのうちを尋ね附る場、求る所も別なるゆへ、鄙風には應ぜぬ也。

額の月から幾人を座む　嵐雪

塩つけてあたまかむこし色小鳥

陛子に碁盤ゆめの浮はし

煎豆と人は云なり丸頭巾　おなじく

是等は句の姿情拔群、別にして附かたも不可辯。今雪門の扱ひ、似たる事もあらず。我世人に勸ム。初・中・後の三段に渉れと。變態窮なきを以、芭蕉の建立の道とす。是を知者は俳諧成就の人とす。翁

沒て攻逝(マヽ)させば不朽の道にあらず、今猶存す。平々たる古へを繰返し取放事なく、偏枯なるは芭蕉の不ㇾ道。注百韻テ在ー
正道ーと云。管此一言に悟スヽ

鳴時にをじかは角をかづきけり　木髮

此發句不ㇾ切とて、見わたせば花もゝみぢもなかりけり浦のとま屋のあきのゆふぐれ 此歌にて判て見よと、なじりていへり。四十年前にや、五色墨の作者に切字の事尋ねけるに、むづかしき事のよしにて語らず。其後聞えける發句に、船かりていざ見に行ん藤の花　予岐と、佃の嶋の春の夕暮　と次句申出ける。其席に午寂老儒 其角無名の序者。宋阿老人在て絶倒す。此作者切字の合点覺束なし。角をかづきけり　何ぞ切ずといはむや。是は我說をいはむとて云掠(カスム)る也。支考が流、

六つ七つ下の男を誘ひ出し　皆原

死ナば共にと臍をおさへて

帷子のあかつき寒くよれあがり

雜曰、打越さそひ出たる男と、帷子まで同人一繼なり。作者も曉とばかりの心なるべけれども、

蜀魂まだぞよ寒き星明り

四阿に雨吹いるゝ山おろし

答曰、時候・降ものなどにて、三句め轉る物とのみ覺ゆるは未練の間なり。古集を味ひ無窮の聯綿、百出の自在をいまだ知ざる也。轉句は自然に轉るを以て處眞(眞)とす。事を窮め物を定ル時は轉も又轉に非ず。達士の七部八部等で本取と云は、爰に暇かに知べし。新學の用ー猶

准正說 支考も邊國に教るに、此事を得ざるに起たる也。盧元等に到て考が寸に及ず。唯吟味鑿案にのみ費たるが其流と成て、いよいよ今の偏枯と成レり。蓼も是を證とすると見へたり。

芭蕉の流は然あらず。ひさご集に、

忍ぶ夜のおかしうなりて笑ひ出ス　荷兮

逢より顏を見ぬ別れして　越人

汗の香をからへて衣を取落し　同

皆原が三句のわたりに聊もたら(がカ)ひなし。此類引句何ほども有べし。猿みのには同故事の俤四句續ぎ、歩行躰三句つゞきたる所も有。其・嵐雨吟同故事共僅に四句續て有。皆是言語の自在なり。考流類に自在を說、未ㇾ聞ニ其自在ー。世には心得ぬ事のみ多し。伴嵩蹊も其原を押さず、末

のするをとり用ゆ。又新古を糺さず、おなじ句同附を[illegible]洗に日和、幼子に鬼王、古き烏帽子に菖蒲、奈良に八重櫻。通用して、そこに渉れば上手とゆるす。未練未熟の輩是に同志荷擔す。傍に人有て曰、論談の如くならば廿歌仙は誤なきか。答曰、我は廿歌仙の可否を評するに非ず、蓼が不審を判斷す。是誤に錯を傳へ、道に害あるを見るに忍ざればなり。我言若錯あらば又糺明せよ。傍人曰、答あるの外は蓼が說宜きか。答曰、見解開ケず、偏にして嘘妄豈悉爲んや。說につきて說又多し。

　　風引ぬ人の日頃や網代もり　　紀逸

難曰、此句うごきて發句にならず。姿情の論は東花坊などの筆を盡されたり。書が說のみにて外を言ず。曾　いづれも寒夜の用なれども、ひとつ〳〵姿折れり。

　　我家は酒に賣てや網代守
　　今少し年寄見たし鉢たゝき
　　彌兵衞とはしれど哀や寒念佛
　　我笠に月夜忘るゝ夜興行

笑て答、彌兵衞とはの句は鉢たゝき也。寒念佛としてもふれぬにや。難者の耳のふれたるなり。ふれ動き胸中にしかと居ハりあらば、夢に覺違ふべきやうなし。甚之亟の鉢抑をくれたりなど云說は誰も知たる事也。よつの題にあはせては、風引ぬ人、網代もりには應る所あり。寒念佛には曾て應ぜず。翁の又喧しのふれ動きの論やと、申れけるにて大かた心得知べき事也。

## 附言

玄旨法印の仰けるは、所捨ある書は見るべからず。是は學正しかれとの敎なるべし。又取捨をわかつちからなきものは謬說に迷ひ、よからぬ說にても善キかと心得侍るべきかとの用意なるべし。斯の如書を見るには了簡あるべきにや。類ひすべきならねども、此雪おろしなどは日ごろも取べきなき惑說なるを、邊塞田舍の輩、皆よき事と思ひとるならば大澤に墮入べし。不憐は有べからず。爭論など書は拙き際に聞ゆ。是は覺すとの文なれば辭せず、故有て則時に害す。又附尾に云、近頃蓼太、芭蕉句解を著せりとて、携へ來て問者あり。披き見るに卷首四句並て、その解錯れり。不レ見して投ず。又七部捜と云書を

著せり。耳底記を擬す。吏登を幽齋候(侯)に詑し、蓼みづから光廣卿(卿)に比す。過當驕慢僞惡なる書と爲べからず。其人ゐ見て其說を取んや。吏登を專ら莊といへども、眼のあたり老俳の知ル所也。此書もはや卷首肝文大に誤れり。何とて斯錯亂多き。名利に急にして眼識の拙きを知ざればなり。蓼太思ひを焦て、雪おろしを述作するは何故なるや。教示ならば別に會詑の文有べし。是は唯東都の宗匠廿人に我は勝れりと、諸邦に觸て名利を需メ、黨を牽の外に他なし。其黑心(キタナキ)を悟リ得ず、量智をも辯(辨)へしらず、膝下に蹲居する愚俗覺すべからず。凡衆を引の術欺にしかず。俗は欺れたるを恨みず、奸ゐ憎マず、却て俳識者と敬伏ス。此師愚を集メて榮とす、卑哉。結篇皆如是未見有徒率衆者タ 蓼が俳學、もと鄙に出て鄙のみ。都を挫とす。得べからず。傍人曰、蓼のみに非ず、烏醉・秋瓜等が如き、其說を以侵すあり何奈。答曰、渠は蓼にだにも及ばず。蓼が主とするは雪中也。彼が主とするは美濃・伊勢の國ぶり也。凉袋が古代を立ル言と雖人不レ隨。正道ならねば也。又問曰、支考が說の外に旨を立る說ありや。**答曰、否。考が議論多きは其角が絕勝多きに不レ如(シカズ)。**蕉翁の條暢又遙也。文字に泥む時は面目を得ざるが如し。何ぞ說を需メむ。翁に議論なし。有と云は則翁を賣也。彼黨名は異にすと雖モ言は皆支考を執のみ。自ラ努(ツトメ)自ラ知の寸量なし。是則考が議論に眩(マクルメキ)て正法眼を開かず。傍人曰、問答の書となれり。標題何とかいはむ。雪おろしの答なれば、例の辛口にて大根をろし・山葵おろし、又は蓼すり小木とも。

此一帖は、鑑に寶曆のはじめ命ぜらるゝ有て老爺が書たる也。草卒のものにて寫本さてもなかりけるに、何かたよりか洩出けむ、世に粗有さ云。然るに何人の所爲にや、あらぬ事も多書入て脫落もあり、原本さたがひ侍り。かくにや世にも彰れぬれば、老が本意ならぬ事どものあらむさ删定して、人にも見せ侍る事に今は厭はずなりぬ。

男沖翼寫

沖翼病中のすさみに手書して上板せんとしけるが、立ずして沒す。其夙志をつるで西村源六にあたえんと老人に告けるに、許さずして曰、我晉子・雪中の徒たるべきもの

だにも、とをりものゝ世の中にて俳諧横さまにはしり、深く窺んとおもふもの稀なり。いかに云んや他にほどこすものにあらず。唯邪正一必の俳諧とのみこゝろへてあるべしとてかひやり捨つ。少子等しゐて乞需て曰、若たま〳〵一人の才子ありとも、世と師とにへだゝりぬれば俳諧の公道を聞ず。是に似たる非にまよひをとるものあらん。この書に閉て、務て自ラ知事あらん。是をはじめとして第一義をきくにいたらん。豈無益のものならんやと、ひたすらに歎き需めけるに、しからば己等がまゝにせよ迚うちくれければ本意のごくして、且蓼太がふたゝび答る事あたはずば惑說の證とし、異邦の偏僻をやわらげ、僂ならしめんと爾云。

小弟　周午
小子　進歩

雁宕老人著
俳諧第一義抄　追而梓行

明和八年
五月吉祥日
書林　通本町三丁目　西村源六板

# 俳諧 遲八刻

魚汶

三級主人、よき哉〳〵蓼摺古義のこたへに、遲八刻は題号置得たり。此あらましをかい付よと乞にまかせて、雪梁館松隣筆を取てしかいふ。

明和八年卯長月

# 遲八刻

## 序

唐錦たゝまくおしき夜半の圍居に長月のながき夜を忘れて、三國志に蛇矛をふれば、後風土記に鑓を出し、つれ〴〵草を源氏もの語に奪んとす。又かたはらより禪人のうめき出せるは、むかし老居士あり。己が見解に佛法の念底を盡したりと、閑居をしめて雲水の僧に一宿をゆるし、問答商量をたのしみとせり。ある時二僧來りて宿をもとむ。ひとりは十二三才の小僧なれば、とゞめて例の禪話におよび、やゝ初更の鐘告わたる比、喫茶に眠を覺し、居士の曰、むかし大燈國師、八角磨盤空裡走の一語を下す時に、答るの衆なし。爰に我年比の觀法に、大燈を一棒下に破却す。僧試に問て見給へと如意をひねれば、圍炉裏に灰書してうつぶきたる小僧、から〳〵と大笑して遲八刻。居士驚てまさに數百年前の國師の問答、今老居士が答たりとも半文錢にもあたはず。多年の工夫今宵此御小僧に勘破せられて閉口すと語り終れば、燈下に居眠たる

# 蓼摺古義返答

三級亭魚汶述
雪溪館松隣校

或日友人何某、蓼摺古義と題せし一小冊子を懷にし來て、結城の雁宕といへるものゝ著るよし、是見給へと机上に投ず。いかなる俳諧手引にやと一覽せしに、むかし／＼我師蓼太、上總の國に旅寐せし折から、入門の人ゝ江戸廿歌仙のまどひに所ゝ問あり答ありしを、あるじの吐月書とゞめて、雪をろしといふものあり。人に見すべきものならねば詞あら／＼しく、句は初心の耳近からんをむねとすれば、まして梓行の沙汰にも及ばずといへども、門人あなたこなたに寫して、終に他門の手に落たり。此いふ蓼摺古義にも其返答とて、やゝ忘果し廿余年のむかしを、今又人の頭痛を痛氣に病て長ゝと述られたり。師も是をおかしがりて、予が雪をろしの能にもせよ、あしきにもせよ、寶暦元年より明和八年のことし迄、そこらに腰を懸ては居らず。六日のあやめ草、捨てをけど、たゞ一口の答ながら、蓼太を物の數にせぬとの大言、其分にもならず。先御坊の尻もむすばぬ嘘からひとつ申べし。此蓼摺古義は、寶暦の始命ぜらるゝ事有て老爺が書たるとは、何かたより命ぜられたぞ。是が立派な御嘘の始なり。それをいかにといふに、明和二年の夏より秋かけて我師蓼太、奧州の門人の招によりてふたゝび松嶋行脚の折から、御坊も津輕とやらの歸とて仙臺に逗留、その比師が旅宿へ折ゝの御出、さだめて御忘は有まい。始て師に對面の時は奧刕の金花を同道にて、

麻のごとくにみだれたるに、直きをみちびき給ふ雪中主人へ申侍る。

野分にも聞はまがへず荻の聲　雁宕

すきものゝむかししのぶや梅もどき　金花

雁宕・金花兩子に訪れて

蘭菊にかりて匂ふや梅もどき　蓼太

又別にのぞみて

雲水の秋や逢たりわかれたり　おなじく

此時同道の金花在せば、是を夢とも申されまい。かくゆる／＼たる風交なれば、直をみちびき給ふの、何のかの

と追從に及ばず、物の數ともせぬ蓼太ならば、なぜ直ゝに雪門の難問も、俳諧の風の江戸ならぬも、ひとつ〳〵糺して南吟にてもみちびき給はど、蓼太が下手も御坊の上手も、是ほど明かなる論は有まじきぞ。巨燵辨慶のあら事、ちと比興ならん。察る所師が與処行脚は、門人の待うけに草庵をしつらひ、六月十六日入庵、依て嘉定庵とは取あへぬ号也。斯もてはやせるを、やゝ腹立に是を取ひしがんと、仙臺にての御趣向と見えたり。さは御坊の御無理千万也。仙府は冬至庵・是非庵をはじめ蕉門通志の連中も多し。我師と落合れて人のとらぬは、貴公の俳諧をうらみ給へ。

延寶の廿歌仙ははせを翁の花なるよし、季吟・山夕兩子の序跋を引ての答、先以能證據人を出されたり。しかし今日芭蕉流のはいかいをするものは、よく芭蕉の骨隨(髓)に入ねばしれぬもの也。すべて序跋を書もの、古今ともに其時を擧、其書を賞するは定たる事也。季吟・山夕兩子に限らず、花とも實とも書べし。されど翁も古風のねばりがいやなればこそ、正風門はひらかれたれ。延寶の古調がよくば何ぞ趣をかへ給はんや。今日蕉流成就の時、延寶を花と見なば則芭蕉の俳諧をしらざる所爲なり。我雪門には貞享已上はとらず。冬の日・猿みの・炭だはら、是を蕉門の三部といふ事皆しれる所也。冬の日の花過、猿みのゝ實過たるとて、炭俵・續猿みのゝ撰有とぞ。炭だはらには其・嵐雨子の俳諧もありて、翁貞享より元祿七年迄の骨折は右集に見えたり。しかし牛に對して琴を彈ずるのたぐひならん。

ほとゝぎす蚊喰鳥又かんこ鳥
呼子鳥稻負春鳥百千鳥
天滿ばし天神橋や難波橋

右二十哥仙同調の答に、

山茶花の後は水仙梅つばき　翁

古調にもなきにしもあらずと、芭蕉の句を引たり。是御坊が句をしらぬ所也。此句は、山茶花の後は　と押へて梅椿をかぞへたれば、時節の移行所にして句作也。何ぞ用もなきもの三ツ四ツ並べたる句と一口に申さるべき。片腹いたき答也。

續五色墨第一宗瑞點
蚊やりにふるふ秋草の露　　蓼太
礎やら俎板やらに賃仕事
同第三蓮九點
雑候䟽して行年の淀舟
漢楚やら三國志やら聞はづり　　竹阿

此雨句も同調のよし。呼子鳥・稲おふせ鳥には似も付ぬ答也。殊更此五色墨はひとりづゝ判者に退て、五巻は五人の点取也。いかにも甲乙をあらそへば、よのつねの集とは格別の一巻なるべし。やらとも　らんとも　けらしとも、二字假名・三字假名の差合を遁れたらば、巻〱にも有べきなり。

十五躰の附方、其角・嵐雪等になしとの答、誠に天を仰て唖すといふべし。御坊が師に學ざる所明なり。附方をもつて初心をみちびかずして、何をもつて此道に誘引せん。連哥は余情付　眺望付　風情付　言渡付　迯句付とまり付　近付　遠付　躰付　用付　猶此余數多なり。俳諧にも轉隨放逆の四道あり。是を細にくだきて十五躰也。先師傳來十七ヶ條に委し。御坊やゝもすれば支考が說〱と支考をとらず。考は末弟といへども、北國・中國此人に說ひろめて蕉門建立の功、一騎當千といふべし。御坊が如き驢年犬日の俳諧を以て、かゝる古人を輕〱敷いひのゝしり、未來抜舌の罪をもちとおもふべし。又蓼がいふ事皆支考が說なりといへば、爰に我師の發願を說て聞すべし。師は雪中庵の号、点譜附屬の日より、東武に蕉門再興の外他事なければ、支考に限らず、古人の風調取て學ぶといふ事なし。嵐雪はいふも更也。其角・去來・許六・支考は蕉門の五大家として、能は學て教とす。さるが中に三都は繁花の人ごゝろ、日〻に流行して、かれも古し是もふるしと、元祿の末より正德・享保に押うつりては、

かづらきのかた山仁兵衛里居哉
乙女子の朧月夜や二日隙
呂布が持馬の尾房や年の暮

かく人の耳に落ぬ句多し。爰に至てはたとへ名家の句といへども、曾て師がとらぬ所也。たゞ正風躰のうち、をのづからなる不易流行に遊ぶ。御坊のごとき作者の名に驚て、句をおぢはへざるの論は、爰におゐて盡たり。

嵐雪より傳来する所の雪中庵の印石・点譜等私するとの事、風流のうへといへども此一事は一派にかゝりて、此方より急度糺さねばならず。尤古周竹、半途にして業を變ぜられたは人のしる所なり。さるによりて雪門の絶ん事を歎き、吏登翁病隠といへども、器の實に感じて悉附屬ありし也。しかれば周竹、雪中庵の号をつがずといへども先師に附屬あれば、嵐雪・周竹・吏登・蓼太と四世雪中庵連綿たる事、何ぞ私といはんや。其時の周竹讓狀、今師のもとにあり。詞書・發句を寫して我門の正しきをしらしむ。御坊、周竹老人の手跡は見知たらん。是にても私するにや。

則印右は雪中菴の印、押ものは探莒　翠蓋　探荷　弄晩涼　墜玉簪　百花嬌語是也。十六年已前高弟葛才(今號周竹)駿府の時雨窓に移り、東海道の社中を預らるゝの時、探莒　弄晩涼　百花嬌語分て附屬せらる。今又盤古に傳へたり。翠蓋　探荷　墜玉簪　此三ッは師のもとに殘して日ゝの出点に用ひらるゝ所也。御坊何を證として私すと書れけ



るぞ。此一事はしかと重て返答申さるべし。若附句のごとく、答る謂更になしなどまぎらかされば、此方よりまかりて面談に糺すべし。

　吾妻かた在番城の夜半の秋

此句の答に源氏・伊勢物がたりなどを引て、宮中顧面の不義は人論(倫)をもつて咎めず、文章・詠哥の風流をもつて和國の至寶とすとは、抄子定規といふもの也。されば空蟬の貞節も、九十九髪の好色も、みな勸善懲惡の心有て、貴人の御前にも講ぜらるゝ文章也。何ぞあづまかた・張かたの講釋がならんや。其上此句を在番衆と書かすめたり。在番城といふ句なり。二十哥仙を見るべし。しかれば、京・大坂・駿府等の御城に差當て、在番城とは遠慮すべき事也。續江戸筏集に成屋が鑓龜橋に玉葛の句のためしもあり。又師がつまみ喰といふ句を難ず。

　(前句)互に笠の招きわかるゝ

　移香も夢かと旅のつまみ喰

といふ附なり。何ぞ行脚するものゝせざるといふ句ならん。旅宿の雜僕寐に有べき風情にして、招別るゝといへ

るあたりも附おふせたりといはん。つまみ喰とは俳諧にして、是こそ罪もむくひもなき事なれ。其角にも、御密夫の聞えあり　といふ句あり。是は御の字のおかしみ也。此あづま形は何を談笑と見るべき所もなし。句意のつたなき事は論ずるにたらず。是、句に成ものと、ならぬものをしらざれば也。

初いなびかり雲やりの末　古湖十

附直して
高欄に端山の春を配らせて　蓼太

此第三、例の夜話に言捨申されし句なれば秀吟にあらずといへども、句法は太山にして附は場也。二句のふところ、第三の姿み失ふ事なし。前句も見渡たる句也と是を難ず。打越に遠望のすがたあらば難とすべし。附句にいまだ其論を聞ず。

堤下りては田の中のみち
家〳〵はなよ竹原の間にて　去來
青天に有明月の朝ぼらけ
湖水の秋の比良の初しも　翁
薩埵の霜にかへり見る月

貝ひろひ〳〵ゆく礒なれて　嵐雪

かゝる附句、古人にも擧てかぞふべからず。是等も執筆たちといはんや。二句づゝみな見渡したる句也。

思ひ出て氣の改るとろゝ汁　買明

附直して
猿みの集に時雨なぐさむ　蓼太

是を難じて、田舍に猿みの集のあしらひ毎度也といへり。此難問何の事とも聞えず。又翁の曰、俳諧に出たるもの三ツ、出ざるもの七ツ有べし。三ツのうちをくり返し居るもの下手なりと。蓼太も此説知たるべし。下略
此翁の詞は嵐蘭が附句に對して、はいかい世におこなはれて、十のもの七ツは殘りたらん。随分新らしきもの附よと也。是を思ふに如何程新らしき物捜し得たりとも、前句に用なきは翁取給ふまじ。

思ひ出て氣の改るとろゝ汁
胴人形のしろ〳〵とたつ　買明

御坊が賛る所の買が句、とろゝ汁に胴人形其場にもあらず、其人にもあらず。何をとらへて七ツのうちを附たるといはん。御坊がいふ所は胴人形が新しといふ事にや。

させる新しきものにもあらず。斯前句に用なきものを搜さば、鬼とも龍とも勝手次第なるべし。我師の附句は雪をろしの口に任せたれば、一句の作意は事經りたるにもせよ、前句に對して無用といふべからず。

又

　額の月から幾人を產む
塩つけてあたまかむこし色小鳥　　嵐雪
　陛子に碁盤夢の浮はし
煎豆と人はいふ也丸頭巾　　おなじく

此四句を擧て、今雪門のあつかひ似たる事にあらずと書り。是は嵐雪の句に蓼師が風調のたがひたるを見せんと、隨分むづかしき所を搜し給ふ覽とおかし。前段に演るごとく是等は假先師の句といふとも今雪門にとらず。斯る句を撰出され給ひて、嵐雪の靈魂さぞめいわくならん。

狩衣をきぬたのぬしにうちくれて
　我おさな名を君はしらずや　　翁
手紙をもつて人の名を問ふ
本膳が出ればをの〳〵かしこまり　　仝



草庵にしばらく居ては打やぶり
　いのちうれしき撰集の沙汰　　去來
しら露のむれて泣居るをんな客
　つれなの醫者のうしろ姿や　　嵐雪
　今は敗れし今川の家
うつり行後撰の風を讀興じ　　許六
貫之の梅津かつらの花もみぢ
　むかしの子あり忍ばせてをく　　其角

是ほど面白き所を捨て、何ぞ亂れたる所を學んや。

　啼時に小鹿は角をかつぎけり　　木髮

小男鹿の啼時円をかつぎたる斗にて、何を發句の風情といはん。是魚目を帶て漲海に遊ぶ也。殊更切字は祕べきの師說なれば論じて益なし。

忍ぶ夜のおかしう成て笑ひ出す　　荷兮
　逢より顏を見ぬ別して　　越人
汗の香をかゝへて衣を取落し　　仝

ひさご集、荷兮・越人の附句を引て、帷子の曉寒くよれ上り　と同じ事のよし。是薪を抱て火を救のためしなら

ん。荷兮・越人といふとも、あしきはとらず。古人のつたなきならひにならはゞ、今日又つたなき句といふべし。たゞ其人になづみ、集に驚ける御坊の論取所なし。

　　おなじ集中
　　文かくほどの力さへなき
薄ものに日をいとはるゝ御かたち
　　熊野見たきと泣給ひけり
たつか弓紀の關守がかたくなに
　　酒で丌たる天窓なるらん

此五句、文の句より天窓の句に至るまで、人事をはなるゝ事なし。是も御坊はひと續なりと見らるべきや。爰に至て祖翁の粉骨あり。重てこの捌き承るべし。

　　死なばともにと臍を押へて
ほとゝぎすまたぞよ寒き星明り　　蓼太
　　四阿に雨吹入る山をろし　　仝

荅曰、時候・降ものなどにて、三句を轉ずるものとのみ覺えるは未練の間也。無窮の聯綿百出の自在をしらざると書り。これ御坊が例の二句に對したる管見の論也。何ぞ時候・降もの斗にて三句を轉じて、卷中見らるべきや。ほとゝぎす・四阿のごときは、其夜・その時、初心を導給ふ雪をろしの趣を讀て合点致さるべし。ふのみ込なる御坊の御答や。

　　風ひかぬ人の口ごろや網代守

御坊此句を應ずる所ありと答ふ。いづこが網代守に應ずるにや。かさねて御返事に講釋をうけ給るべし。

　　惠心寺に奉公はせいで網代守
　　靜さを數珠も思はず網代守

古人の佳境かくのごとし。又翁のやかましのふれ・うごくの論やと申されけるにて、大かた心得しるべき事也とは、御坊が例のめつぼうかい也。翁の詞はつかみあふ子供のたけや麥ばたけ　といふ句につきて、去來・凡兆を制し給ふ詞也。いかで初學の人に、ふれ・ふれぬの論なうして佳境にいらんや。むかし或人嵐雪の門に入て、發句のうごく、うごかぬの境を敎給ふの折から、かたはらに氷花ありけるが、先生の高論よしといへども、中〳〵貴公の耳には落申まじ。某たとへをとりて題のうごく・動かぬを解べし。先雷電の謠に、折ふし本尊の御前に、柘榴を手向置たるを

おつ取て嚙くだき、妻戸にはつと、吐かけ給へばざくろたちまち火焔と成て屏にはつとぞ燃上る。此時の菓子、瓜・柿・桃・梨子の類ひにても、中〳〵火焔とはならず。是うごかざる所也と。入門の人おほいに悟入す。此氷花が頓智、今も賞する所也。何ぞ昔より、ふれ・うごくの論なしといはんや。

師が芭蕉句解、誤れる所ありと書り。随分誤あるべし。俳書に限らず、代々数万巻の書籍或は註解或は文字の誤なきにしもあらず。殊更此書は我師、寶暦のはじめ若かりし時の麁忽あればと、今再板の思ひ立あり。しかしながら師は門人をたすけて、集を出せる事八十余部、たとへ風葉のごとき物にもせよ、御坊二十余年がうち工夫有て、雪をろしの返答書給ふだに、あやまちすくなからねば、是も五分〳〵と見て置給ふべし。

御坊七部捜を讀て、吏登を幽齋侯に註し、蓼太を光廣卿に比すと書たり。七部さがしを繰返して見給ふべし。そんな事は更になし。但し問答の詞が耳底記に似たといふ事にや。これは俗談に人の聞よからんために、おもむきをかりて書たれば、何ぞ註すの比すのと申べきや。今一應くりかへし給へ。又秋瓜・鳥醉・涼俗三子を擧てなみす。此三子曾て雪をろしの批判にあづかるべきにあらず。御坊が蓼太の悪まれ口慎給へ。殊更三子と御坊が俳をいはゞ、臘月の扇といはん。又膝下に蹲居する愚俗覺すべからず。凡衆を引の術、欺にしかず。俗は欺れたるを恨ず、奸をにくまず。却て俳識者と敬伏す。此師、愚を集て榮とす、卑哉と書り。是御坊が往がけの駄賃に荷の過たる大言成べし。今門下には諸侯をはじめ奉り、武門の旁もすくなからず。田舎禪門の出ほうだいながら、口にわざはひをまねくといはん。又愚を集て榮とす、卑哉とは、あゝ御坊は潔白なる哉。併俳諧のことにあづからざれば筆をもつて戰ずといへども、我のみしりて過る月日にもあらじ。つく〴〵御坊の往事をもかへり見給ふべし。既悪躰の巻物書終て机上にくりかへせば、江戸と結城に立わかれて蠻觸の角を動し、袖もぬらさぬ水かけ論ながら、長月の老の寐覺には折ふしもよろしければ、ちかきうち此返答さら〳〵と有べし。例の年月をかさね給ふには及ばず。(終)

# 俳諧一字般若

雁宕

# (俳諧一字般若)

我國のかうのとのゝ、上總の國にもしろし召るゝ所ありて、有變なりける人ゆきゝしけるついで、珍らしき俳書やある、持參すべきよし仰ける。彼の雪おろし著したる頃にてもて參りたり。不佞に御尋ありければ、御稽古には然るべきものなりと申ける。其後御ありて此書を見るに、其方つねぐ\申つるには似ず。たがひありと不審かさなりければ、答申上べきよふもなし。答をしたゝめ進ずべきよし倍命(黙)止がたく、其頃俳扁雀といふもの書たるついでなれば、以久くすりと名づけたり。是は稽古のためなれば段ゝ多ゝ書つらね、寫本とてもなく年月を經たり。又ある君の梓に乘べきよし仰けれど、雪おろし版本にもあらず。蓼が机上の物とて社中の稽古とあれば、この方より梓行するは用なきものゝよし申上ければ、思ひとゞまり玉ひぬ。年經て東奥遊歷せしに、彼の雪おろし至らぬ所もなく、しらぬ國ゝにては、江戸宗匠は何もしらぬ俳諧天下手なりと嘲哢し、蓼一人に歸す。板木にあらねども多く筆耕をして、寫本おびたゞしく弘めたりとおぼゆ。北越なを多かるべし。皆同筆なり。俳諧實に予引せんとならば、別に言說何ほども有るべきに、江都を糞土のごとく穢し、しかも道理にもあたらず。不風雅の第一、かゝる惡言未聞なり。廿人をならべて面を打、皆其職にあり。蓼も其道の渡世として、他を拒み己一人の爲に倒すは、古今此道の仇なり。是を屈せずば、遠くは芭蕉翁両吟の徳を破り、近くは海内耳目なきが如くならん。蓼聞て遁しとすとも、誤をたゞすは千載の後も何の遁きことかあらん。

○序のはせをの花也に本據正蹟を出したれば、蓼答に序文などは時を與へ、人を賞するものなれば、花とも實とも書べし、證據にとらずといへり。○然らば最前の花也も咎むまじく、難ずべき筈にはあらず。尾口首尾つゞまらぬ答也。瞎子本文を再見せよ。論ずる日には本據實蹟に非ずしては、難ずに益なし。見よ山夕が青華は貞享廿歌仙は芭蕉翁の花なりと、遂・後の若葉合にまづと

はりを立たり。其集の時を譽たるにはあらず。其角合躰に非ずば、山夕書まじきなり。○翁の骨髓をしらずばと空言して紛したれども、そこへもおさへてやらず。然らば其角も骨髓をしらずして書せたるか。二重三重の誤、此一段は速に誤券を出さるべし。○七部捜に、狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉　此句解する事不レ能、推量杜撰の説をなすが如きもの、正風開發の句をだにしらずして、骨髓をしらずばなど云は慮外千萬也。花實の時に明かならば、此論最前より有まじき也。賤識、古說に暗はしらずと云は此謂也。

●二ッ物よせの句に附て、古格なきにしもあらずと、翁の句を余情に書たり。蓼答に、後はとおさへたれば翁の句は格別なりと。○蓼何とて如レ是書を見るに不明なるや。三子の句と翁の句を一からめに云べきや。斯おさへて爲れば、句になる姿おのづから可レ識となり。おさへ字・抱字等は、俳諧する程の人は知らざる者あるべからず。三子の句を能と云にこそ、前に未練なりと書たり。蓼がおしへの如き未しきとは、そなたにて沙汰し玉へ。

●所詮は續五色墨の同調を咎むるなり。同調にあらずとの答なれども、らん・るゝ、などの二字假名とは格別の事也。……やら……やら……やら……やら、道具替るのみは百句にても同調と云べきなり。常の二字假名といひ掠るは、物しらぬやうにて、却て耻しき事なるべし。そなたにても新撰などせんに、如レ是同調あらば許すべきや。社中へ相談有て誠の答へあるべし。

初稻光雲やりのすへ

（第三）高欄に端山の春を配らせて

遠望のワキに遠望の第三心得ずと難じたれば、眺望に眺望の附句數ゝ有べき、よき姿の句出されたり。此方よりは第三の附には心得ずと云を聞ぬよふに、常の場の附句多く書れたるは、云紛らかしと存るなり。執筆立の句と申事は、江戸中此書見聞の沙汰有べし。

吾妻かた在番城の夜半の秋　湖十

衆と城とは此方ゞのおぼへ違ひ也。一句の上に論なし。

源氏物語等の事は行文也。唯禁制のゆるすべきと許すまじきとの沙汰也。

○所詮は

　互に笠の招きわかるゝ

　移香も夢かと旅のつまみ喰　蓼太

附課たり。罪もむくひもなしと、まぢ〳〵といわれたり。移香などゝあれば假の契り、ちよこ〳〵つまみ喰、慥に致されたりと、何國にても此外に聞得べきやうなし。吾妻かたしらぬ者ありて親戚の間に問はゞ、いかに答んと念の入た咎め也。左程の容戯には何とも答べし。つまみ喰は何を召上られしと、社中の人問はゞいかゞ解て聞せむ。旅泊の風流つまみ喰は俳諧也など、僧形にて能申されたり。此段は答に及ばず。泥にて塊を洗ふなるべし。晋子の御密夫ノ句ノおかしみと同じと云は、取もつかぬ事也。

　久米の神くじつた指を縛らん　晋子

かよふにあれたる句あれども自在無量にして、つまみ喰のきたなみはなし。

○翁の鳶に鳶の附句を、蓼古歌取なりといへるを、古歌を取たるにはあらず。詞書に取たりと斷たり。一向返答なし。誤入たる歟。此附合旧例あり。談林を捨玉はぬ趣をしらせたるなり。

●七名八躰等の附方三子になしといへる答に、天に唾吐など嘲哢したり。不明の者は左も有べし。○若尋問者あらば、答へしらしむべしと書たるを見ずや。先、瞽を取て早速合点の行やう有。是は皆名目を以て名づけしものなれば、名目部とて初心の僧徒の學問のどし。それより玄義文句止觀にわたる陛のみにて、小僧どもの手に有。名目は曾て入用にあらず、翁、何とて其・嵐の徒に名目をもて敎らるべきや。習はるべきや、廿年三十年其陛子の上に滯留して、何ぞ馬鹿く是を言談し居るものあらん。いでや其頃の達士、十五躰等に拘り居る英子あらんや。氷花・（早く京に有て不見）専吟・百里・琴風・巴人・周竹などまでは不佞が能知たる所なり。○十五條のとはさて置ぬ。七名八躰は全く支考が著すものなれば三師用ひらるべきよふなし。田舍の學は是を出す。蓼專ら是を

勸化す。仍て都に出て卑也といふ。雪おろしに高き所より見ればと夢もいえり。則こなたの流也。

●猿蓑集に時雨なぐさむと云句は田舍の附合に多く見たり。不レ知とあれば其分也。それに附て買明が胴人形の句賞したりといへども、此句の沙汰には不レ及。古き附・あたらしき附との事をいわん端也。用なきには不レ論。

　額の月から幾人を産む　其角

　塩つけてあたまうむらし色小鳥　嵐雪

　陛子に碁盤浮橋の夢　其角

　煎豆と人は云なり丸頭巾　嵐雪

新らしき附句の證に出したれば、むづかしき所を撰出して、嵐雪迷惑たるべしと答ふ。是は遠き集にはあらず、浪の手に有一順再返の句也。こなたにては句の趣も附も疾に解したり。此集に、雪おろしに米仲を笑ひたる句といふ腸の留りも嵐雪に有り、物縫の利發と云沽德の第三もあり。叟が娘といふ第三の支考流珍しかゝんや。有ふれたる句は、附も一句もいかなる人も解し易からん。蓼は雪中に精といへば閒たるなり。解事不レ能して、

先師の句といへども雪門には不レ取といふは、何國の雪門なるや。雪中に太だ賤き證據也。知らぬとは皆此方の雪門に不取と別にしたる雪門ならば、論の相手には仕らぬ也。古雪中の句には多く尋たきとありといへども、不識の人には謂もなし。如レ是にては雪中庵の謂れも知るまじ。古德の名を飾ざる事斯の如し。汝が門下に古人隱ゝの名を附・已に賊古雪中か。かゝる不德にしておして祟られんとす。誰か隨べき。膝下に走もの愚俗とするに何憚る事贓有ん。氷花・百里を雪中の左右其頭阿難・迦葉と戯て云り。雪中の七回菊いたゞき集、周竹撰にて百里を始め晋如・序令等補助す。予が亡父叔伯共連にて歌仙多くあり。專吟・百里、予が鄕里に再遊せり。彼集に見るべし。不俊、若年常隨給仕してよく知れる所也。周竹はもと雪中の蹟を續せんとて、百里・晋如などが取立たる者也。業を變じて醫となりたるゆへ、英子等途に不レ顧、吏登は我同鄕の花麥と云者と相善、同時に點者となれり。始終其事を知たり。吏登は深川に窮し、花麥は浪花に終る。

○今雪中の号は虚名也と申たれば、答に周竹よりの證書を変さしく書出して、一派第一の断より尤至極也。然れども最前より虚名と思はねば虚とは云はず。彼周竹譲状にも雪中庵と名乗れとはなし。芭蕉も嵐号なれども高弟も云べからず。其角、寳晋齋なれども弟子左はいわず。雪中は嵐雪一世の号なるを、吏登私して文蓼が私するに違ひなし。雪中菴の印有を以て用ひ來ると云とも、雪中を重する道に於ては非也。晋子の南山白石は湖十持傳ふれども、先師を敬するが爲に容易用ることなし。第一答る所は、雪おろしに取たる支考が說而已。五大家なれば取といふとも、其・嵐の流にては一向彼の說は取まじき筈也。何となれば汝見ずや。若、越前敎賀にて其・嵐兩子を譏りたる書〔行脚（書）〕蓼が雪おろしの如し。斯る俳諧の說を取り、彼が着する七名八躰を旨とし、文章の句ぶりを眞似て雪中庵と云べきや。全く支考流也。名の實なきは古へより虛名と云。江戶蕉門とは猶云べからず。

染てもいふた袖の春雨

第三 里なりの娘に御所を唄させて

雪中の洒落に有てなき事也。支考流の骨髓、みづからも能く似せたりと思ふべし。鄙に出て卑なり。村里に敎て可なりとは是を云なり。五大家を取と云て其・嵐・去來・許六は一章も取得ず、皆虛言なり。其・嵐二子を以ていはゞ、頭を上るもの有べからずとは是をいふ。汝いかに云とも雪おろしのうへにて雪中とは信ぜず。辨へなき社中にては、あが佛とも信ずべし。外より評するは虛と云に憚る事なし。

●原公が傳書の嘘妄、蓼が傳一双とすると、一向に答事あたはず。誤り入たると見ゆ。

● 啼時にをじかは角をかつぎけり　木髪

切たりと云、不レ切と云難陳、蓼が曰、切字の事祕する傳なれば不レ云と逃たり。傳ならば最前不レ切とも云まじきなり。捌き不能歟。

● 忍ぶ夜のおかしふなりて笑ひ出ス　荷兮

逢より顔を見ぬ別れして　越人

汗の香をかゝへて衣を取落し　仝

皆原の三句わたりあしきと難るゆへに、ひさご集同じわたり有。いにしへより有りと答へければ、古人とても拙きは不ㇾ取、其集になづみ、其人におどろきたりと云り。再答、汝が如く消ば翁とても證人にはならず。其集は翁合躰の集、其人その頃の達士也。汝は七名八躰の上へ不ㇾ出、擔飯漢なり。

●觸越に切と云句へ、

紅の脚布身しろき姿むごかりし　　雪

五十の內侍耻しらぬかも　　角

觸しに切は頭中將のおどろかしたるさまにて、全く源內侍の事也。打越て五十の內侍と、三句つゞきて同じ故事をせられ、

花の宴に御密夫の聞へあり　　角

是等のつゞきはいかゞ聞わきけるや。盛時の古しへ拙しといふべきや否や。

●

彌兵衛とは知れど哀や鉢たゝき

ふれ・うごきの論、四句の證句を出したる中に、此句を寒念佛と覺へたるは、難者の耳のふれたるなりと大笑しけるに、一向に返答にあたはず。誤入たると見ゆ。

風引ぬ人の日頃や網代守　　紀逸

此句ふれ・うごき、講釋承るべしと書留たり。先貴叟の鉢たゝきと寒念佛の違ひ、急度承屆べし。

●芭蕉翁句解、錯のこと書改べきよし御尤に候。名利に急なるもの、己が熟するを俟ずと書たるは此事なり。誤を改る道に於て譽べき事也。覆かくして云紛らすは己を欺くにて、後來の耻を殘すなり。

●過當驕慢、耳底記の俤なくて、何ぞ別に問答の書ならむ。其俤にて書出して左に非ずと、陳ずるは皆蓼が噓如ㇾ是。

●仙臺にて面會の時不佞誤りと云り。應對は應對の辭義あり。今はむかしに成ぬ。宗阿老人巴人、吏登に逢ひしとき、夜半亭句帖、

幾とせもつもれ〳〵や雪の丸

阿叟は其・嵐の世に有て、氷花・百里等同時の人なり。吏登如きは物の數には思はねども、對する時は此事宜あり。故人の渾純と云べし。我が行脚は勸化利益の爲に

あらず。尋常の風騷乞食行脚の想ひにも非ず。仙臺に停められて茅風庵を結び、松嶋の四時おもしろさに年を越へたり。彼の雷堂が知たる所也。雷堂、百里の直弟のよし申たりと連中より尋ねて來たり。百里門葉の筋、予が知ざる者一人もなし。沒て四十余年也。雷堂が未生已前なるべし。嘘妄を厭ざる流さも有べし。

○鳥醉・秋爪等が事、よきつるでなれば乘せたるは、其信るところ別なるが故に、東都には獵追ん事を思へばなり。

○諸國蕉門と云は、支考流を交へざるを云なり。仙臺冬至庵・是非菴は全く支考派なり。是と通志と蓼が言、みづから獅子門を交るの白狀也。道すがらの表八句、獅子門に用る所にして、他流に決してなし。しかれば支考流を信るに極れり。是を止め、雪おろしを削り捨たらば、江戶蕉門とも雪中庵とも申て仰ぎ、廬山の交りをゆるすべし。

○全文閑事雜談多くして、本義を紛らしたる体也。仍而箇條を十三段に分ッ。

○蓼返答すること不レ能レ事　四ケ條

○闘論して再び云べからざる至理　六ケ條

○論募りて無益事　三ケ條

仙臺にての趣向なるべしと云廿年の勞といゝ、詞首尾不レ合、何ぞ邊國に論ずべき。江戶の眞中にて勝負するは卑怯とは云べからず。汝が三十年の化の皮を剝、尻に敷たる巨燵辨慶は摺古義一本にて打碎きたるは、希有の俳諧忠のものなり。彼は惡言の水かけ論とす。こなたは淸義を述たれば再び論なし。社中諸邦への云譯には、此後何分にもいゝ給へ。左右の論談は極定せり。見る者は判斷して明かなるべし。

## 後序

はせを翁曰、俳諧は師もなく流もなしと。此ㄷ葉は、はいかい第一の敎へにして、末代偏枯に成すまじき示し也。只、自らつとめ、みづから執行して、成就すべき道而已。自つとむるとは、先人に能く尋ね問也。鴈宕子は予が古

き友なり。代ゝの俳家にて古哲至らざるはなし。よく說を聴に委し。今時論談の人のおよぶべきにあらず。よく初中後の三時の趣を知る。今百家の俳風も世上のさまも、東都繁榮の勢ひ也。是をひとつになさんと思ふは愚也。京は京、難波はなにには、また一箇の風にあらたむべきに非ず。鄙風の思ふべきにあらず。しかるにはせを翁の業德をしらず、名利に走り我黨をひく。知らざるものは本土の風義を知らず、鄙風と成る。よくおもふべし。東都は其角・嵐雪の道に潤色して、芭蕉翁の道足らざる事なし。しかるに遠國他國の道を以て本土の風義をわすれ、これ何んとなれば、其・嵐の道は仰高し。然るがゆへにちかよらず、我身ざま相應に美濃・いせの田舍俳諧と成事、淺ましき姿なり。是をおもひ反して我が說に隨ひ、二子の道を再興せよ。しからば東都の風流・灑落これに加ふるものなし。凡、其角・嵐雪の道に遠ざかるは、五色墨等がひそかに美濃・廬元に始て、小石川片桐氏の別莊にて四道七名八躰等篳習えるに起る、續五色墨の店俳等鄙風を弘め、江都に田舍の風義を始む。これ等監物也。烏醉・秋爪等事



を書加しも其信る處のたがえば也。是に似たる非、みちに害を成す事を幼俳は知らず。子弟等豪雄のおもひをなし。晋子・雪中の誠の道を再興せよ。これ老人の微意なり。是に書加へて門人に教ゆ。

明和壬辰中姑日　　　　百里門人 八十翁　栢舟

荘周日影彩を悪んで仇す、これを罔両と云。是を除くには般若の功德に增るはなし。愚擬盲昧なるも、大智惠の不可思議皆容の深理を聽て屈伏す。この智の自然に出るは、業報通を得る故なりと、或老比丘の仰ありき。これを以ておもふに、一字の般若を聽聞させずば、困迷の俳諧は得脫なしがたしと、老人もふされけるをおもひ出して、書の名にかうむらしめたり。

雨龍

進步

俳諧第一義抄　雁宕著　近來出版
通本町三丁目　西村源六版

# 誹讔三十棒

止笑

# （誹諧三十棒）

## 狂言うつけ猿さやつ〳〵の戯れ

世の中は莵にも角にも猿の手の、と哥に詠れし人も、大かたものごと、かた〳〵長ければ、かた〳〵短し、我思ふやうには、ならぬものじやといふ事を、詠れたであろう、所詮何事も自由にならぬものなれば見ざる、聞ざる、いはざるがよいとむせうに、隱者質氣になりし男、もとは、猿田彦の末葉、猿丸太夫九代の後胤猿冠者の子孫にて、長短も差たれど、刀は中の町ぎりにしまひ、壹本ざしになり、町人がうらやましいとて、猿屋町邊に、相應な家をしつらひ、近所隣酒屋餅屋のつき合にもうまい人といはれしが生れついて商ひが不得手なれば、そろ〳〵貧乏になり、そこをも立退かしこに一年爰に半年と、店がへをする事、三万三千三百軒ばかり、店請山王町さくら屋木兵衛もあきれはておまへは、子曰もよめるさうなが、扨〳〵錢金をまうける事は大文盲じや、今時は、なまやをろかで、口が喰れるものではござりませぬ、それに、扶持切米をとる、武士は氣がつまるといひ、百性はごみほこりになるがいや、商ひは下手なり、職人は隙がないとて、何でもする業がない、長〳〵の浪人、それでは、ゆく〳〵わしが厄介、さりとはめいわくな此比おまへの商賣に、よからうと思ふ事をおもひ付た、わしが異見につかしやれといふ、この男もかゝらうしまがなくて居たれば、何がさて貴公の御言葉にはもれぬといふ、木兵衛しかつべらしく上座になをり、先おまへはぬれ手で粟餅、疊の上に寐て居て喰ふ事でなければ、とげさしやるまい、わたしが工夫、急度よい事が出た、俳諧師にならしやれ、是が年中人の物を喰て人の噂をいふが商賣、隨分喰るものじやさうで、夥敷はいかい師〳〵といふものが出來ましたといへば、浪人どのもなるほどゝ、二言にも及ず其日より、眞赤庵猿麿と名を改め、猿樂屋敷とやらいふあたりに借宅し、錢やすでおもひ付な格子、造作は戸棚ひとつ、なれども中襖はより交の模様とり、立切て見せぬ臺所に、鍋は壹つで淋しがり、釜のかはりに折〳〵は藥鑵で

食を焚ど。おもてむきは何くはぬ顔をして暮せしが。或夜とろ／＼としける時分、いづこともなく太皷の響ドンドン。カチカチ。ドドドン。カチカチ。と鳴て、猿麿が枕の上に赤髮たる翁顯れ。右の手に白き幣を持、左の手にひとつの箱を携へ。善哉善哉われは是。青面金剛の垂跡ましらといふものなり。汝年比ぶしやうものなれども。いまだ人をかり倒さぬに居る故。神佛も不便に思召。告しらせよと也。謹で聞べしそれが生れは。申の年申の月申の日申の刻に誕生して。毛が三本多い故人間と成て苦勞をする。其三本の毛を拔たらば生涯安穩なるべし。其毛といふは、第一ばんに味噌毛。第二ばんに香毛。第三ばんに欲毛。此三本の毛をぬくため。只今此箱をさづける。其上生れ年生れ月の庚申を祭るべし、ゆめ／＼疑ふなどかれと。いひ終り。かきけすごく失にける。ごんと聞ゆる鐘の聲ひきつゞいて番太郎が拍子木かぞへれば最う七ッ歟テモかはつた夢を見たと枕もとへ手を出せば。幅一寸斗。長サ五六寸の箱を得たり。扨はまさ夢まづ此箱の內をと開き見るに、うぶけやの毛拔也、是にて三本の毛をぬけとの教ならん、誠に

有がたきまくら神と感涙肝にめいじ、これよりひと月道に。めぐり來るかのへさるの日はかの箱を床の間にうや／＼しくかざり。燈明をてんじ供物をそなへ。庚申を祭りければ。ほどなくくらしかたのふりまはしもどふやら斯うやら。蚊屋と夜着とかすれ／＼の中もよくなり。召仕の壹人もおき。晝まへの黑羽二重に。まがい八丈の羽織と出かければ。人呼で猿先生と號す。こよひも庚申まちなればと。いつもの連衆。息子。老人。醫者。侍。暮合より追／＼來て。六疊敷に居あまれば。足下今すこしおつめなされ。火鉢は眞ン中へ出したがよいと。取持顏なるあり。さやこちらから。こよひはことの外寒じますといふに。耳遠なうでござります例年よりいかふ暖に覺えますと、老人の口上猿先生罷出。いつもながら何もいたしませぬゆるりと御咄なされ。さア膳を出せ。わたしも御相伴仕らうと。母かたより喰かたと。そのその箸をとるに。次の間より貸本屋の人が參りましたといふこちへ御通りなされといへ。これは見料丈遲かつたハイ無日故用事にいたしをくれ遲りました。といふを待かね。上座から約束

の蓼摺小木は持て來てくれたか。アイ持參いたしました蓼摺小木の返答。遲八刻といふが出した。先生は御覽じましたかなるほどゆふべ見ました。どふでござりますな。イヤ理屈はどふでもつけらるゝものじやが、言葉つゞきが氣にいらぬ。わし等がかけばあゝではないて。老人紙衣の袖をかざし楊枝をつかいながら先生又味噌かへといへば、勝手から最う豆腐はござりませぬと湯豆腐を氣遣ふ。傍から遲八刻は。それが持て來た。こよひは摺小木と遲八刻の評判をして遊ぶ。さあ〳〵御膳を取た〳〵と。若手合がきほひかゝる。醫者樣はおとなしい顔をして。人の短をいふことなかれ。をのれが長を說となかれと。文選にもあるではないかといはるれど。息子達。口〳〵に。何野夫らしいこん夜は庚申待。人ごいふても八ッまでさ

作者
止笑

明和八年卯の霜月

當局者迷　傍觀者審

[illegible]

頭取口上　しばらく〳〵。芝から神田四ッ谷淺草糀町をかけて、狂言評判の御所望とて、數万人の御入來、まづ以有がたうぞんじたてまつります。いづれも樣御ぞんじの通り、延享寶暦の比の芝居に、廿歌仙入一段高ミへ上り注連を張て行ひすませし處、雪おろしといふ獸にびつくりして、通を失ひし狂言の後日名題看板は、遲八刻蓼摺小木と申ます。暮合より、ゐいとう〳〵の御聽衆座元、とくら、にしげんは申に及ず、惣役者いか斗、

シヤレ組　長口上はないはエはやく役者の評判が聞たい

頭取　此評判は役者衆の卷頭卷軸の位付もいたしませぬ、考へましたら、持まへ〳〵の藝にて定もいたしませうが

老人組　それはいらぬ事。只さし當た狂言で評判さしやれ

【頭取】まづ初幕、鴈宕丈の出端紙衣材織に黑木綿の置頭巾文刻堂へ登り、廿人の殿ばらにかはり、雪おろしといふ獸を取て押へ。摺小木を持て、九刀ざさいたりける居を勤らるゝ役者衆にはふたりとあるまい【吉の字手拭組】それでも遲まきだ【田舍組】なんにが遲まきだア。さちやア。お身たちの方から出た、雪おろしも、延享から寶暦まで五七年の遲まきじやアあんまいか【頭取】そのやうに、兩方からおつしやつては喧嘩になります、評判が出來ませぬ。まあ御しづまりなされませ【大ぜい】さうじや〱【頭取】時に蓼太丈舞臺の眞ン中にある文刻堂の額を見てくはつとせきのぼしながら、ゐせ笑して、くやしい所を見せぬ。佐々木巖柳、髭の意休といふ身、大ぜいに見とがめられじと、あげまくのうちに居らるゝ氣味あひ、いつもながら出來ました【わる口組】久しいものだ【頭取】引かへしに遲八刻右衛門といふ男立をたのみ、文刻堂の額をおろさせんと口上を敎らるゝ所よし、しかし初日にはいかふせかれたと見えて、口上に惡對が交り、見にくふござりました【手拭組】これ頭取何をいやるぞ、遲八刻右衛門の役は魚汶丈、口上を習ひはせず、なんにもそつはない【わる口組】蓼太丈の筆を立られた所、よくしつていますぞ。【ヤレ組】そんな事はぐつと流し、次はな〱【頭取】中幕に松隣丈魚汶丈書肆明神の生白堂へ、願主二人の名を書て繪馬上らるゝ所氣じやうにてよし、次に松隣丈は序文といふ禪坊主になり、樂屋より附ヶ聲の所作、三盃きげんの千鳥足、遲八刻右衛門が取次にて、もく山和尚にだまされ懷の金を、とらるゝ所おほやうにて當り〱、次に二役挍合誤字兵衛も出來ました【田舍組】これさ共やうに、江戶役者斗判せずとも、おらゝが方の、周午丈はどふだな【頭取】なるほど周午丈も挍合文字之助の役、唐人男沖翼が書置を改らるゝ所よし、ちと切落へおちのこぬ所もあれど、文言天晴出來ました【大ぜい】進歩とやらいふ役者は何ンだな【頭取】進步丈は校合家の連枝繩繞人藏となり、一小冊を梓にかける親孝行の仕打よし、抑付上上の二字ながら、黑くなりませう、【手拭組】こちの魚汶を、なぜ、はやく出さぬぞ【頭取】最初に申ま

す通い、此評判に前後のあらそひはござりませぬ［シヤレ組］どふでもよしさ［贔屓］魚汶丈。遅八刻右衛門といふ男立御定りのコレ待てもらひませうは、上がたぬめりとうちすて。江戸のつよみにあふた聲色。こりや又なんのこんだおきやァがれといふ。出端まづ以。しやちこばりの身ぶりおもしろし。その初生さとり村禪語郎といふものに出合。みづから遅八刻右衛門といふ名を、おもひつかるゝ所。大あたり大あたり。吉の字がはんぶん黒くなりました［わる口組］なんの大あたりなことはない。取わけわるい所は。点はい山由來のつめひらきへ此一事は一派にかゝりて此方より急度糺さねばならぬといひ。又ゆへ此方よりまかりて面談に糺すべしなどゝいふ口上ぶり。あまりつよ過て。あれでは狂言といふものではない。悉皆子供のつかみ合じや［三人組］いやさうではないあの事はじめ蓼すり幸輔兵衛といふもの。点はい山庵号を私すと盗ものゝやうにいふたによつて。あゝいはねばならぬ［不便組］それほど堪忍ならぬ事なら。あゝ書ずとも。直ぐまかりてかたをつければよい。筆で斗いふは臆病じや。且峠蕃提のあら事よりわるい土龍の道行だ［老人組］すこしいひやうが。わろくてもどふでも、莵角舞臺へ出ねばよい。頓といふても。舞臺へ出れば、あれは頓じや、。最う人がしります。魚汶丈も。まづ舞臺へ出られて御本望さ［わる口組］一派の一把のとはなんの事だ。牛房か胡蘿蔔かあんまり利屈くさい。元來狂言じやといふをしらぬか［頭者］そんなあほうらしい事をいふによつて。墓がちいさくて見られぬ。割まへを四百ヅゝ出して。丸の内に吉の字の付た。手拭を貰ふ衆は。合点しやうが。外のものは合点しませぬ［組］東西〳〵、何も角も贔屓さんが。呑の込さ。打てもらをチヨンチヨンチヨシ［組］まんだ。此狂言に出た役者衆。潮十。仁義、貫明をはじめ。秋瓜。鳥聲。涼俗。其楽評判が聞たい［贔屓］だん〳〵申ませう［組］いや、その衆は。此狂言に。かゝはつて。かゝはらぬ人たち。それをあい〳〵にはむだじや。最う役者衆のことは置て。蓼すり幸輔兵衛と。遅八刻右衛門が。たて引の場。ひとつひとつわけて聞たい。いづれもさま。さうではござりますまいか［大ぜい］

能うござりませう【頭取】そんなら御望にまかせませう

蓼摺　延寶廿歌仙は芭蕉翁の花なり【頭取】といふ事季吟子の序山夕の跋を引。殊に花の時はいつ。實の時はいつといはゞ、花が咲てから實が出來るものゆゑいさゝかも誤にあらずとは至極尤なり

遲八　延寶を花と見るは則芭蕉の俳諧をしらざる所たしかなり。冬の日の花過。猿簔の實過たるとて。炭俵續猿簔の撰あり。今日芭蕉流の俳諧するものはよく芭蕉の骨髓にいらねばしれぬものなり【頭取】とは葉が出て。花が咲て。實が生てといふとにはかゝはらず。只俳諧のよい所をさして。花といふとの事。俳言深く是も尤なり

此所八兩八斤双方勝劣なし

【和[illegible]組】只俳諧のよい所をさして。花といふなら。雪おろしの難言のとき。書やうがわるい【わる口組】雪おろしの時は。季吟子山夕の序跋ある事は蓼太しらず。我管見は棚へ上て置て。延享廿歌仙の序者貶んと延寶延享の字のにらみで、對句に書たるとばかり。眼がついたものさ

【大せい】遲八にへ立派な御嘘の始也とある。こゝはどふだな【頭取】なるほど。嘘でござりませう。しかし作文の書籍は。寓言或問。いづれも和漢の。文の躰にある事。隨分かまいなし。蓼摺にへ寶暦のはじめ命ぜらるゝ有てと書たが嘘ならば。雪おろしに上總の國で問答したといふも嘘ならん此やうな事は改るには及ませぬ。こゝをとが〳〵しくいはれたは。遲八こく右衛門どのゝ短氣。あまり出來ませぬ【和[illegible]組】遲八にへ御坊も津輕とやらの歸りとて仙臺に逗留その比師が旅宿へ折ゝの御出定て御忘はあるまいとありこゝの文面へ其比師が旅宿へまでは魚汶が口上へ折〳〵の御出定て御忘はあるまい。是は蓼太か口上。こゝで遲八こく右衛門が口上は蓼太が書た事は明らかじや。頭取なんとおもはしやる【わる口組】御出なされたさうなとも。御出のよしとも、書ねはならぬ。但しこれらは沈在の手爾葉じやなどゝぬけをいふのかな【頭取】いかにも。わかりかねます【スイキヤウ者】遲八に仙臺にて鴈宕方より。蓼太へ追從の發句をして、ゆる〳〵とした風交。その時なぜ雪おろしの難問も俳

誹い風の江戸ならぬも。ひとつ〳〵糺さぬと書たり、よく積ても見たがよい。五に百有餘里の故郷を隔て他國へ行。內證は口すぎ金儲と出かけても。いひ立は名所古跡山水を樂しぶといふて出て居ながら。主親の敵打を見るやうに。逢た所でつめひらきをする。たわけものがあるものか[田舎組]直きを導くといふ前書。追從じやといふがうぬめにくいやつだと。發句につくられるものか。殊に雁宕の發句へ野分にも由は絲ず荻の聲は。出かされたとおもふ。頭取は耳がないかた[頭取]此所遲八どの口上があら〳〵しい。去ながら蓼摺平高兵衛どのも蓼太を取ひしがんとの大言。申さば賣言葉に買とばこゝらは俳諧のやくにたつ事ではなし。大目に御らうじませ

蓼摺　時鳥蚊喰鳥又かんこ鳥　存義

呼子鳥稻負どり百千鳥　渭北

天滿橋天神ばしや難波橋　秋風

此三人、本一部の內の同調古調なきにしもあらずと

引句へ寒菊の後は水仙椿つばき　芭蕉

遲八　寒菊のはせをの句は時節のうつりゆく所にして無用のもの三ツ四ツならべたるにはあらず[頭取]爰は遲八どのいひ勝れました

此所遲八は吉　蓼摺は凶

蓼摺　續五色墨に　へ砧やら眞那板やらに賃仕事

漢楚やら三國志やら聞はつり

とあり廿人廿卷の同調を難ずる人がわづか五人五卷同調はいかに

遲八　五卷は五人の点取なり。いかにも甲乙をあらそへば。よのつねの集とは格別の一卷なるべし。やらとも。らんとも。けらしとも。二字假名三字假名のさし合を遁れたらば。卷〻にも有べきなり[利屈組]それならば。廿歌仙も廿人の卷なり。時鳥呼子鳥の句は生類。天滿橋の句に水邊。此さし合さへなくば。卷〻にも有べし[わる口組]こゝの返答は犬の遠吠じや。雪おろしに、蓼太人の句の同調を難じながら。近比蓼太の俳諧本に、同調いくらもある。頭取どのはしらしやらぬか[頭取]すべて我一尺は見えず。人の一寸は眼にかゝると申て手前のわ

るいに、しれぬものでござります、同調善悪の論は、条西により、句により、附意によりませう、同じことが有ても、月にたゝぬあり一ッとなきとにも、月にたつあり、たとへて申ませうなら手紙一通のうちに然共が二ッ有ては不器用に見えますに、唐土のことはいらぬ事なれど、韓退之が送孟東野序の文中鳴の文字、三十九あれどもよみにくゝもなし、それはともかくも、遅八どのゝ返答手まへ勝手と見えますれば

　此所蓼摺は黒上　遅八は白上

蓼摺　鳶に鳶の附句を古哥とりと是古哥をとりたるにあらずことば書にとりたるなり

遅八　返答なし【大ぜい】こゝは返答のなりにくい所歟、無用の事まで出していひながら、どふしてなぜ黙て居らるゝぞ【わる口組】何とやらして尻すほめると、利屈につまつた所は聞ぬふりさ【頭取】申さば小細の事、いひづくにするほどのとではなし、雪おろしの時、蓼太もとくと考られたなら、ことば書にとりたると、申さるべきが、麁相にてうか〳〵と古哥とりと書れたりと見えます、【利屈組】そりや、頭取依怙贔屓だ、斯ういひぶんになりては、麁相じやといはど、みな麁相にする歟【頭取】ハテ先ほども、申ました通り、はいかいのやくに立ぬ事、よいかげんになされませ【老人組】コレ何をいやる、これらは初心の人の心おぼえにもなると、俳諧の用に立事じや、評が聞たい【頭取】その附句は

　前句　〽誰の樹に鳶をながめて

　附句　〽鳶の居る花の賤家よめりけり

これは孝蘭集に俳諧哥　蒜の籬に鳶の居るをながめ侍りて〽鳶の居る花の賤家の朝もよひ木をわる斧の音ぞ聞ふる此模様にて二十五條といふ本にも〽前句を哥の前書と見たるより斯は〽よめりけりと附たるなりとあり勿論詞書にもをよばずことば書にとりたるなれば

　此所蓼摺は大勝　遅八は大員

蓼摺　蕉流其嵐の流は七名八躰等は敢て不レ取

遅八　十五躰の附方其角嵐雪等になしとの答誠に天を仰で唾すといふべし【利屈組】コレ〳〵蓼摺に其角嵐雪等になしとはいはず七名八躰等は敢て不レ取とあり【大ぜい】

こゝは聞所じや 頭取 わけを申ましても、切落好の御方へは聞えかねます。上棧敷の頂上でなければ聞えませぬ 不入組 猶聞たい 頭取 さやうなら、ざつと申ませう。蓼招に敢てとらずといはるゝも尤なり。附合の事は、千變万化にして、俳諧の奥旨に至ては十五体とも百五十体とも、窮究しがたし、遲八に十五体十七ヶ條附方を以、初心をみちびかずして、何を以此道に誘引せんといはるゝこれも尤なり わる口組 その十七ヶ條とやら心もとない

頭取 さあ、そこでござります。たとへば、佛法天竺に起りて唐土にひろまり、今かたじけなくも、我朝に、みさかりにして、ありがたき八万の諸經ありといへども、釋迦ひとりの手には出來ず、後世だん〴〵出來ましたれど、其教となる事は、釋迦のとかれたものにして尊みます。儒道も又さやう。俳諧のおしへども、後人の著作にても、しばらく教となり來たりたなら、元祖の說れたことにして置がよし。虛も實、實も虛こゝの意味は、人のいふを聞てはとくと落がいたさぬもので門より入ものは家珍にあらず、一旦豁然と我から悟入せねばしれませぬ、蓼招遲八の御兩人、奥旨をばしられたかしられぬかは存ませぬが、此方にて、割てくだいて申とどちらにも一理ござります。しかし蓼招に敢不レ取とあるを、遲八どの敢て文義しられぬと見えまして、其角嵐雪等になしとの答と、書れた所すこし負にゆへども、それは利屈過るといふもの、頭取の貰にして中規矩を申ませうなら

此所兩方勝負なし

蓼招　其角が傳書は伊賀の原松といふ者傳へ、嵐雪の傳書は周竹吏登蓼太と相續て雪中庵の号を立るのよしこれ虛号なり。吏登号を私す。蓼太で私す。原松もとより其角の親弟にあらず其角なんぞ東都の親弟には傳ずして遠國一面の原松に統を續の祕書をあたふべきや、あまりに愚なる說なり

遲八　周竹雪中庵の号をつがずといへども先師に附屬あれば嵐雪周竹吏登蓼太と四世雪中庵連綿たる事何ぞ私といはんや わる口組 嵐雪が周竹に雪中庵といふ庵号をつけとはいはず、周竹も点印みこそ吏登に讓りたれ、

雪中庵といふを讓るとはいはずそれ故蓼摺に私すとは書たものさ〔頭取〕すべて名家の稱號など。其人沒去の跡にて其名のたえんをおしみ。相續する事あれば。四世雪中庵と相つゞいたといふても能うござりませう〔シャレ組〕雪中庵といはふが。せつちん庵と付うが。何の構事はない、誰がなんといふ物じや。それがいま。嵐雪と付うが。あんけつといはふが。やめさせる事はなるまい。高が俳かいの名じや。みな愚なり〳〵五の一てんばりときた〔利屈組〕其角の傳書原松へ傳りたるといふは。遲八の返答に見えぬぞ〔頭取〕これは蓼太管見にして。雪おろしの時の麁相と見えました〔わる口組〕そんな返答のならぬ所は。又しらぬふりか〔大ぜい〕古人周竹が手跡なりとて。よくもない手かゞみを出し。古人に耻をあたへるの歟〔利屈組〕あれを。出したでけつく雪中庵といふは讓らず。点印ばかり讓た事がしれてわるい。只讓狀があるとばかりいふてもすむを。こゝらは遲八どの智惠がない〔大ぜい〕蓼摺に支考が說〳〵と支考を惡くいふ。爰の評判はな〔頭取〕支考が說が惡いとには。蓼摺どの。ちと過言出來ませぬ、と申て支考からわたくし扶持切米はとらず。贔屓はいたしませぬが。芭蕉流の俳諧。國〳〵をかけてよほど。支考が說ひろめたで持て居ます。しかし。蓼摺どの十二丁めの文ノ談に、七名八躰のこと。支考も邊國に教るに止事を得ざるに起りたるなり。盧元等に至て考が才に及ず唯吟味騷素にのみ費たるが其流となりていよ〳〵今の偏枯となれり。蓼も是を詮とすると見えたりと。書れたは至極〳〵御尤にぞんじます。又遲八どのゝ返答。支考にかぎらず。古人の風調取て學ずといふをなしとは。大に出來ました〔わる口組〕点印の事に付。遲八に。高弟葛才に東海道の社中を預らるゝと書たり。蓼太に預らるゝ社中といふは何ものじや。あまりたわけもの。殊に東海道といふては大きな事。いかに嘘をいへばとて出ほうだい過た〔大ぜい〕蓼摺に其嵐の道を以。難破せば頭をあぐるものあるべからずと書たこれも出過た口上〔頭取〕なるほど蓼摺どの爰は了簡がせまし、俳かい其角嵐雪斗にかぎつたとにあらずまづ〳〵いろ〳〵事が多くては評もわかり

かねませう。其角嵐雪傳書等傳來の事四世雪中庵と相續したは、よそ外の世話にもならぬ事。其角より原松への事。遲八どの返答がなりにくかつたと見えますれば

此所蓼摺は上上吉　遲八は上上

蓼摺　吾妻かた在番衆の夜半の秋　湖十

源氏伊勢物語等の宮中願面の不義は人倫を以咎ず。文章詠歌の風流を以和國の至寶とす。吾妻がたの句不忠不義なりと難ずるもの、みづから境界にかゝるべき。

繼句

ある集に上はわすれたり

旅のつまみ喰　蓼太

遲八　空蟬の貞節も九十九髮の好色も。みな勸善懲惡のこゝろ有て。貴人の御前にも講ぜらるゝ文章なり。何ぞ吾妻がた張形の講釋がならんや。其上此句を在番衆とかきかすめたり。在番城といふ句なり廿歌仙見るべし又師がへつまみ喰といふ句を難ず。何ぞ行脚するものゝせざるといふ句ならん〔ヲカ目八モク組〕衆の字。城の字。此一字にかぎり。書かすめたりとて。それほど理にもならず。大かたな誤字ならん〔わろ口組〕遲八は誤字だらけじや〔鼻取〕吾妻がたの句。蓼摺どのも無理むたいに理屈をつけて答られしが理はよくつきました。一たい吾妻がたの句よくはなし。しかし蓼摺どのゝ申さるゝ通り其句をとがめた蓼太。つまみ喰といふ句は。さりとはつまらず。いひわけに。行脚する人のせぬ句といふにてはなしとの口上。それなら吾妻形の句もせぬといふ筈もなし。句になるものと。ならぬものをしらざれば也と、我斗俳諧を。しつたやうに書れたが。俳かい少しする人は誰も〳〵知て居ますへ吾妻形もへつまみ喰も。句になりませぬへうつり香も夢かと旅のつまみ喰。此下の五文字。つまみ喰といふより外に。句になることば、いくらも有べし〔利屈組〕吾妻形。張形といふ。講釋のならぬはしれた事つまみ喰といふ句は。講釋がなりますか。只食類をつまんで喰た事なら。講釋もなりませうが。さやうでは一句が聞えず。こゝらは俗にいふコジツケ返答といふもの〔わろ口組〕すへに。芭蕉句解誤りといふ返答に。若かりし時の倉忽とある。つまみ喰も。

若かりし時の飽忽と返答せられたなら、をかしみもあらう【手拭組】蓼摺に。つまみ喰といふ句。上は忘れたりなどゝ書た。そんなとんな事。忘れたなら書ぬがよい【頭取】さやう仰らるゝな。あらはに書ずに。わざと斯う書れたものと見えます。見物がたもこゝは殊勝に能う書たと、申されました【大ぜい】在番城といふを。とくし く難じたり。俤の句といふてもいひわけはなる也。むかしの俤に、在番城といふてよい所。いくらも有べし、唐の事でいはゞへ使ニ下連稱管至父戍ッ中葵丘ノ上と史記にも左傳にも出てあり。爰ら在番城といふてもあたるべき歟、日本にても元弘建武のむかし。其前後の亂にも、數ケ所在番城といふて。よい所有べし【手拭組】吾妻形と吾妻の文字にかゝりて作りたる句なれば。むかしの俤にしては句になりますまい【頭取】それも合点でござります【和□組】書おろしに。在番城。當時の地名を出し。どこそこの事と書たるは。書本でさへつまらぬとおもふに。蓼摺板本に出し。その返答とて。獺八板本に地名二ケ所を出し、差あてゝなど書れた事、以の外非禮言語同斷、頼朝公の御前へ引出され。御詮議にあはゞ。罪すくなかるまじ【頭取】あまりく智恵がないと。見物がたも申されます【シャレ組】俳かいじやから。吾妻形といふても。つまみ喰といふても。よいはさ【頭取】サアそこでござります。なんといふてもよいとならんが。もとの起り。吾妻形とは尾籠なの。つまみ喰といふ句は。どふじやの斯うじやのと論に及るゝによつて申ます。どちらも悪うござります。秩父重忠の捌なら。同罪でござりませう。下ざまの戀の事をいふにも。芭蕉たどは又よほどよく申たもの。御聞なされ

前句　上置の干菜きざむもうはのそら

附句　　　馬に出ぬ日は内で戀する

俳かいは。詩文和歌などより一等も二等も下りたるものなれば。詩哥を出して申ではなけれど。おたじ閨中犯淫事をいふにも

詩には　へ咋夜君王來守宮辭ニ殘血ヲ一

文には　へ鴛鴦舊夢久クㇾ不ㇾ入ニ枕中一

和哥には　へとけそむる我下紐はさきの世に誰むす

びけるちぎりなるらん　　此こゝろ御合点なされ、いかに俳かいなればとて、いひやういひ品もありさうなもの、吾妻形のつまみ喰のとはいかにも拙なし、俳かいより又一等下りたる、浄瑠理でさへ〳〵肌とはだとをあはさねば、とはきたなし〳〵まくらかはすかかはさぬうち、といへばすこし風雅めくにや、まづ何や角やの理談は置て、吾妻がたをとがめた蓼太、つまみ喰といふ句をいたし、其返答も手前勝手な返答なれば、遲八どのゝ負と見えます、罪にして地獄とやらの、業の秤にかけませうならば

此所蓼摺は御定りの三十六貫目　遲八はチエナエ六十貫目

蓼摺　　初いなびかり雲やりのするゐ　　湖十

附直して第三　へ高欄に端山の春を配らせて　　蓼太

二句とも遠望の句なり、附かへの句皆臭腐なり

遲八　　此第三例の夜話なれば、秀吟にあらずといへども、句法は太山附は場なり、打越に遠望のすがたあらば難とすべし、附句にいまだ其論を聞ず【わる口組】句法は、太山の、似た山のと、手まへぎりの法よばり、きゝたくないはへ【頭取】高欄の句の第三、打越遠望の難どころでなし、かんじんの場がわるい、こゝの發句はへ梅をればをのれも動く月夜哉といふ場のある句なり、初心への手引をしへに、附直して見すると、自慢をせらるゝには似合ませぬ、此やうな事をいたさるゝから、幕引や蠟燭持は感心しませうが見物は合点しませぬ、わしが依怙贔屓なし、眞すぐな所を申ます、いづれも様さやうじやござりますまいか【大ぜい】イヨ頭取さ〳〵【シャレ組】きまり〳〵【頭取】大名の先荷といふ第三、一句の善悪はともかくも場のないだけ能うござりますれば

此所蓼摺は上上吉　遲八は上

蓼摺　　おもひ出て氣のあらたまるとろゝ汁　　買明

附直して　　猿簑集に時雨なぐさむ　　蓼太

田舎に猿みのゝあしらい毎度なり

遲八　　田舎に猿みのゝあしらい毎度なりといへり、此難問何の事とも聞えず【利屈組】田舎ていの所へ猿簑集といふ句、蓼太がたび〳〵附るといふ事さ【頭取】俳諧に出

たると三ッ出ざるもの七ッありといふ古人の言葉を出し、互に引句を以双方の論、どちらも御尤。細に評判をいたしますればいろ〳〵譯が有て、いかう長くなります。長ことはいづれも様も御退屈。是からはざつと申ませう〳〵思ひ出て氣の改るとろゝ汁といふ句は、芭蕉の梅若菜の句を思ひ出たるにてあらん。只とろゝ汁ばかり思出たるにはあらじ。氣の改るといふ七文字にて全く芭蕉の句を思ひ出たと見えます。それをこゝは附所なりなどゝ自慢して、前句の細注をするやうなもの。芭蕉流の俳諧に第一嫌ふ事でござります。まづ是は堪忍しても〳〵猿蓑集に時雨なぐさむといふ句。とろゝ汁をおもひ出たるに猿蓑集は附たにしても、時雨慰む時節でなし。尤鞠子の宿のとろゝは、四季にかゝはらず。暮秋より春までは殊更にて。とろゝに季はなけれども。去ながら春夏の心もちをのづからなり。それを俳諧自然の風姿風情と申ます。又梅若菜の句を思ひ出たるとて猿蓑と附るも若輩なり。しかし例の夜話とやらの逃口上にて了簡もいたしませうが。時雨が一向につきませぬ、附直して見せる句にしては心得ませぬ。古人の言葉に。附合のこゝろ。上手のは親類の遠〳〵敷がごとし。下手のは。他人のしたしきがごとしとなり。爰の附直した句は。他人のしたしくするやうなもの。蓼太も下手でござります扨又〳〵瞷人形の句もあンまり附ませぬ。遲八どの返答に。御坊が擧る所の買が句と書れたが。蓼摺どのも譽はいたされませぬ。本の句はよからぬにもせよ、出ざるもの七ッのうちを尋ねたるともいふべきかとなり。人の句を難じて附直したるに又難あるは罪大にふかし。閻魔の前へいかれたなら、大かた舌をぬかれませう

此所蓼摺は上上吉　遲八は上

蓼摺　　鳴時にをじかは角をかつぎけり　　木髮

此發句不レ切とて〳〵見わたせば花も紅葉もなかりけり、此哥にて判じて見よとなじりていへり、何ぞ切ずといはん

遲八　　殊更切字は祕すべきの師說なれば論じて益なし［わる口組］古哥を引、切字は祕すべきの師說などゝ、切

字といふ事知たやうにいふが、蓼太が發句集に〳〵ひよ鳥の一羽わたらぬ庭もなしといふ發句がある。是はどふだ［利屈組］蓼太發句集のうち門五十句。古句や手爾葉のあはぬ句を討論した書本。雨夜隨筆といふにて、その發句わしらも見ました［頭取］切字の事は役者衆もとくと合点いたされぬと見えます、祕訣じやの口傳じやのと、こと〳〵しくいひ立ばかりにて、わかりませぬ。私がくはしく申ませうが。いかふ長口上になりますから、別に申ませう。御聞なさるゝなら跡へ御殘りなされませう

此所蓼招もパイ〳〵　遲八もパイ〳〵

蓼招　六ッ七ッ下の男を誘ひ出し　旨原
死ばともにと臍をかゝへて
帷子のあかつき寒くよれあがり
附直して　ほとゝぎすまだそよ寒き星明り　蓼太
四阿に雨吹いるゝ山をろし　蓼太

時候降ものなどにて三句を轉るものとのみ覺るは未練の間なり。古集を味ひて。無窮の聯綿百出の自在を、まだしらざるなり

遲八　ほとゝぎす四阿のごときは其夜其時、初心を導給ふ雪をろしの趣を讀て合点いたさるべし、不呑込なる御坊の御答なり［利屈組］雪をろしの時は。其夜俄事にて時候や降ものにて附て見せた。しづかにすれば百出の自在をするといふ事か［大ざい組］遲八どののひさご集へ文かくほどの力さへなき、といふ句から五句の引句度〳〵御出し聞倦ました［わる口組］十三條といふ嘘狂言に出したが又出したか［頭取］遲八どのこゝのいひわけはちといひ足りませぬ、まだ返答の仕やうがありさうなもの

此所蓼招は黒上　遲八は白上

蓼招　風ひかぬ人の日比や網代守　紀逸
蓼太難じて云此句うごきて發句にならず
我家は酒に賣てや網代守
今すこし老見たし鉢たゝき
彌兵へとはしれど哀や寒念佛
我笠に月夜忘るゝ夜興引

いづれも寒夜の用なれども、ひとつ〳〵姿わかれりと

あり笑て答、彌兵へとはの句は鉢扣なり。寒念佛とし
てもふれぬにや。難者の耳のふれたるなり。ふれ動胸
中にしかとすわりあらば、夢にも覺違ふべきやうなし
遲八　彌兵へとはしれどあはれや　寒念佛鉢たゝき
御坊此句を鉢扣なりと答ふいづれか居りたらん見ん人
察せよ〔頭取〕題のふれ動といふ事。古人の言葉を出てし
の論、双方ともに一理ヅヽ有て御尤〔わる口組〕遲八どの、
又氷花が事を出された。是も十三條といふ狂言で聞た、
最う耳が欠をします、外に說とはきれものかな〔ふし組〕
此節問屋にもきれもの買出しが出來ませぬ〔大ぜい〕まづ
へ風ひかぬ人の日頃や網代守といふ句は、寒念佛鉢扣、
夜興引、にもふれますかな〔頭取〕いへ／＼、ふれませぬ。
網代守でござりませう〔利屈組〕彌兵へとはの句は。寒念佛
か鉢たゝきかどちらじやな〔頭取〕書面で見ましては寒
念佛がよくすわります。しかし此句。寒念佛に作りた
る句ならば、五兵へとはしれど哀やとも。八兵へとしれ
ど哀やとも、つくるべし、けつく、五兵へ八兵へがよし、
蓼摺どのも、しかと證據があるによつて、鉢扣也と書
れたもの。爰に出た彌兵へとはの何は鉢たゝきでござ
ります、鉢扣に彌兵へといふ事。蓼太はしられますま
い〔ぜい〕ふれ動くの論が聞たい〔頭取〕こと／＼く長く成
て口上にはいひ課せられませぬ。短く申て御聞せ申ま
せう、たとへば、釣鐘は何時誰が撞ても。ごんと響ます
が。暮六ッのごんと、明六ッのごんとは、聞人の耳にわか
ります。それに姿情をつけてごらうじませ、發句も、言
語のあや。姿情のさかい大にわけがござります、役者
衆がいかふむづかしい事のやうに申さるれども。俳か
いにすこし心をよせ御上達なされば、ついしれます

此所蓼摺は上上　遲八は上

〔大ぜい〕蓼摺の附言に、近頃蓼太芭蕉句解を著せり、卷首
四句并て其解錯れり、見ずして投ず、又七部捜といふ書
を著せり、耳底記を擬す、更登を幽齋侯に詑し蓼みづか
ら光廣卿に比す。過當驕慢僞忘なる書とあり、遲八の
返答に。此書は我師寶曆のはじめ若かりし時の麁忽あ
ればと今再版の思ひ立あり、又七部捜、問答の詞が耳底
記に似たといふ事にや、是は俗談に人の聞よからんた

めにおもむきをかりて書たれば何ンぞ託すの比すのと申べきやとあり、頭取さん爰の評をたのみます【頭取】芭蕉句解は私も見ました。いかにも杜撰がたくさん又七部捜は、耳底記に擬してもだいじない事。返答に趣を借て書たれば何ンぞ託すの比すのと申べきやとはつまらぬ返答。趣をかりれば託し比しいたしたのでござります【わる口組】句解はよく／＼わるいと見える、不器用な返答。手まへから水を出して土左衛門になるやうなものじや【頭取】御両人の筆戰。此所遲八どの大敗軍と見えます【手拭組】しかしながら師は門人をたすけて集を出せる事八十餘部。こゝらはな【わる口組】ひとつもろくな集はない。たま／＼人のをしへにもなりさうなものには誤があるといふ【頭取】俳かい本かず／＼出さるゝ事御奇特千万、去ながら古人の俳書、貞徳の御傘鷺水の新式許六の文選、支考の文藻十論古今抄をはじめ、其外あまた人のをしへになる本から見ましては。八十部で一部のかわりにもなりませぬ【わる口組】師は門人をたすけてではあるまい。門人をだましてであらう。【大ぜい】あまり集を出すといふ自慢もせぬがよい、なんの見所もない本ばかり、樂屋では譽るかしらぬが。見物はうけとらぬ【利屈組】蓼揺に。烏酔秋瓜涼袋の三人を出したは麁忽でもあるまいか【頭取】なるほどかけかまいもない人を書出されたは蓼揺どの大不出來。見物も至極わるいと申ました【大ぜい】遲八にへ今門下には諸侯をはじめ武門のかた／＼もすくなからず。書たり。蓼太が門下といはるゝ諸侯とは何ンの諸侯じやな【利屈組】いかに出ほうだいをいふとても世間をはゞからぬいひぶん。御れき／＼を門下などとは過言千万なり、神儒佛の教は、貴かたも賤ものに隨て學び給ふもあらん、和哥連歌はうへ／＼にも御用ひあれば格別の事。俳諧師は何ンだとおもふ【わる口組】文盲じやによつてそのやうな事はしらぬのさ。只俳かい師は結構なお有がたいものと覺え。世上しらずの自負とさている【頭取】門下に諸侯ありなどゝ書れた事大不埒。論に及ませぬ。弟子門人門下社中。いづれもわけの有事、あそこの隅で仰らるゝ通り。遲八どのちと物のわきまへがない【大ぜい】ひとつ／＼よくわかります【利屈組】理論にとも

かくもにして、蓼招と遲八とは、出來の善悪どちらじやな［頭取］蓼招どのゝ方文字など改め、或は語をゆるめ、漢語をまじへ、理段に短く書ふり大によし。誠に風雅俳かい本ともいふべく、毀誹の文意さへなければ、机文臺にも、のせて見らるゝ本なり。遲八どのゝ方、まづ最初、雪をろしといふもの書ふりが拙と申評判のうへ、又上ぬりをして、御坊のなんのと、俄にはらがたち、むつとして書れたと見え、いかにも腐文俗中の俗にて、机のほとりに置べきものならず。いはゆる糟味噌桶を、覆ふのたぐひでござります。そして、表題がをかしな表題、蓼招どのゝ申さるゝ事が遲まきといふを手まへの著す、本の名に遲八刻とは、さりとは〳〵ふつまり千万、序文に、よき哉〳〵蓼招小本の答に遲八刻は題号置得たりと、よろこばるゝほどの事にもあらず、その〳〵様よく御考なされて御覽じませ。むかふの遲八刻を手まへの遲八刻にせられました、せんどもシャレ組の御方、あんな不器用が唐にもあろかとおつしやつた、日本には猶〳〵ためしがござりませぬ［シャレ組］イヨきつい事チソル〳〵［頭取］扨みな〳〵様御所望によつて、據なく、此狂言の評判をいたしましたが、依怙最屓なし、眞ッすぐな所を申ましたによつて最屓〳〵の御方は御耳にかゝる所もござりませう、御了簡なされませ、頭取が依怙を申ては濟ませぬ、たとへ最屓に申ても諸見物が合点なされず、御見物様がたの眼はぬかれませぬ、遲八どのゝ書とめに、此返答近きうちにさら〳〵と有べしと申されましたが、蓼招どの、かならず〳〵最う御無用になされ、此たてひきは頭取が貰にいたしませう、こんどの評判記で、大笑に笑て御しまひ、互に和睦なされ、敵打ごはやめて二のかはりにはめでたい趣向を御取組〳〵［大ぜい］とてもの事に役者の見立をたのむ〳〵［頭取］見たては、何によせて申ませう［シャレ組］狂言の名題が招小本じやによつて臺所道具がよからう

## 惣役者見立臺所道具づくし

物がよく賣れて身代は日に〳〵おこす　於釜にしむら

一册の文面ひとりとは見へぬどこぞから御藥のかゝった　水瓶　鷹宕

表向はしらぬふりでも腹が立て胸のうちは　中銅壺　蓼太
わきかへる

いらぬとなすゝめてやかましい音いする　破摺鉢　周午

親のいひつけに板本たゝきりきざみした　小組板　進歩

板行料を出して人の尻を持はしつかりと頭土竈　松隣
たい

返答の杓子定規は二ッにわれて味噌の付た　折箆　魚汶

たび〳〵句を引出されて善悪をいはれて　片口
もうけごたえはせぬ
存義　買明　木髪　旨原

どういはれてもかまはぬ極樂に居て南無　網鼎
渭北　秋風　湖十　紀逸

めいわくなさばしりがかゝつてあらはれ切たわし
ばならぬ
秋瓜　鳥醉　涼岱

商が上手でだん〳〵金銀ふきつける　火吹竹　とくら
千秋万歳シャン〳〵。最ひとつや。シャシャシャンノシャン。

既にふけゆく夜半過、西南の隅、申の方に忽然として聲あり人〳〵耳をすまして居れば、そこらの人間よつくきけ、我は是庚申の前立なんともおもは猿といふもの也、汝等宵よりの噂、人どもこよひはゆるす、かさねて急度謹べし、いひ得ても三十棒いひ得猿も三十棒

時に明和八年卯の霜月かのへ申の夜
眞赤庵におゐて牛房燒太郎
おつつけて書

高曼天狗俳諧　全五册　近刻

淺野德兵衛版

# うづら衣(ごろも)

十二巻

也有

いにし安永のはじめ、すみだ川のほとり長樂精舍にあそびて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、あまりに面白ければうつしかへり侍りき。それより山鳥の尾張のくにの人にあふごとに、この事うち出てとひ侍りければ、金森桂五、うさぎの褒にはあらぬ鶉衣といへるもの、二まきをもてきてみせ給へり。翁なくなりぬときゝて、なを馬相如が書のこせるふみもやあると、ゆかしがりしに、細井春幸、天野布川に託してその門人紀六林のうつしをける全本をおくれり。まきかへしみ侍るに、からにしきたゝまくをしく、とみに梓のたくみに命じて、これを世上にはれぎぬとす。翁の文にをけるや、錦をきてうはおそひし、けたなる袖をまどかになして、よく人の心をうつし、よく方の外に遊べり。鶉ごろもの百むすびとは、みづからいへることのはにして、くつねのかはのちゞのこがねにあたらざらめや。右のたもとのみじかき筆は、なへたるもはづかしけれど、たゞにやはと、けにもはれにもかいつけ侍りぬ。

四方山人

あやしくはへもなききれ〴〵を、あつめつゞりたるを、うづら衣とはいふなり。げにその鶉ならば、たゞふか草のふかくかくろへて、かりにだも人にはしらるまじきものにこそ。

也有

# うづら衣　上

## 奈良團賛

青によしならの帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此地の名產とはなれりけむ。世はたゞ其道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外はたえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゝまれて公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは桐の箱の家をも求ず、ひさごがもとの夕すゞみ、晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地帋をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴てはだか身の寐姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴着る日はやすますする團かな

## 蓼花巻記

一もとの芭蕉、五株の柳の其人の徳にてらされて、枯ぬ名をとゞめしもあるに、不仕合なる榎木は、ある僧正の号に呼れて、つゐに斧の怒をかうぶり、なを切杭、堀池の名をさへ流しけむ。我劍冠の仕途に身を置ながら、一ッ、隱家あり。これを蓼花巻と名づく。蓼花にむづかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、その一もとのゆかりなきにもあらず。松茸さふの聲きけばと、俊成卿の庭もせもなつかしく、世にわびたるさまのおかしけなれば、みづからこれが名とせり。そも此幽栖、無何有の郷にとなりて、山に向ひ海にそひ、河あり野あり、月雪花鳥は四の時の詠を供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音まできくにいとはず、見るにとぼしきものあらず。城市を出て遠からねど、人たゞ杖、草鞋をもてとはむとせば、たとへ方士がまめはふみ出すとも、三輪の山もと杉立る門に迷ひて、ふせ屋のはゝ木ゝの妻狐に化され、うつの山邊の道とふべき人にもあはで、ふたゝび桃源に棹さすごとくならむ。たゞ梅の色も香もしりて、思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづねあたらん茅門とはしるべしとなり。

物ずきの虫はきてなけ蓼の花

長短解

大はよく小をかね、短は長にまかるゝためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ君を賀し人を壽くにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引て、五百八十七曲と祝ひものするには、あくかたあらじかし。その余はひたぶるに十八さゝげのゆたけきにならへば、獨活の大木の謗をのがれず、矮雞の足はみじかきを愛し、禿が返辭はながきにのどけし。出る杭かしらうたれてつるの縊なく、下手の談議のとまりかねては、軒の柳もねむり兒なり。たゞ女の髮こそめでたくてあらましを、手ながき人は一門にも遠ざけられ、鼻の下ののび過たるは、大事の相談にもらされて、其夜の混飩のながきをしらず。されば必ながきはみじかきが上にも立がたし。物はたゞ秋の夜のながくてよからむは長く、難波瀉みじかき芦の長からずしてよきはみじかくてあらなん。さるを聖人も右の袂の白由を物ずけり。世に式法をこまかにさだめて、かね合極るものもあれど、そのむづかしき境は人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて、寸分の評議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、杓子・さい槌はかた手にたれり。下ざまの物ながら天理のまゝなるぞたうとけれ。我友田氏、過し比かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西湖にあそぶ事ありて、調寶はなはだ長きにまされり。是をくはへて手をからず、久しくして齒を勞せず、ゆく〱野山に雲を吹、あく時は袖におさむ。張子が馬を懷にするがごとし。こゝにおいて感あり。つるに長短の辯をつくりて、是をむくふの詞にかふ。其辭の長過たるはまた才のみじかき故ならし。

## 木履說

木履よ〱、笠は東坡が春の野がけの尻にしかるゝ折もあるべきに、などや汝は夏の日の傘子が枕にも雇はれざる。日和つゞきて隙なる時は、椽の下に寐ころび、蓬の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさゝれて、日待の壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらむ。たま〱かゝるわざのつなわたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は脊ぬぎにひざまづき、洗濯の日のこしかけとなりて、それよりうへの交はしらず。かく下ざまのものながら狩人の笛となりては、口にふかるゝためしも有とや。その鹿の命を貯るは、罪ふかき身の果なれど、佛も下駄もおなじ木のきれと、例の一休のしめしに逢て、はじめて輪廻

の鼻緒はきれてん。抑、足高きものを木履足駄と号し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一体分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、俳諧のうへに二ツの姿を論ずべくば、ほくり〳〵と靜なるは、雪降の朝にして、下駄〳〵といそがしきは、むら雨の夕部なるべし。

## 鳥羽繪贊

蝦蟆の息に虹を起し、蜃はよく樓臺を吐。腹中の虫氣を吹て聲を出すも、さらにあやしきわざには有べからず。くさめもあくびもおなじものならんに、かれが出所のいやしければ貴賤これをつゝしみて、かたく公界の嗜とす。されば退之が鳴物づくしにも此沙汰なきは、もしとりはづしにてもやあるらん。その鳴こと不平にもかぎらず、たゞ盛親僧都の芋の腹味、あるは麥飯おなら茶の過食にさそはれ、勢ひことに甚し。むかし太平記の無禮講に、はじめて是をゆるしそめけるより、つるに鎌倉に嗅つけられて、七日の說法屁一ツに破れぬれば、はては資朝・俊基の屁負ひ比丘尼となられける。または雜混寐のくらがりに、ぬししらぬ香こそ匂へれと、哥人はよみも置しか。思ふに鳥羽の僧正の筆あとも、ひとへにたはぶれのみにあらず。かの音あれども目にみへず、物にあとなくあたなる事は、更に電光石火にまされるをもて、人につねなき世のことはりもしらしめむとなるべし。

## 摺鉢傳

備前のくにゝひとりの少女あり。あまざかるひなの生れながら、姿は名高き富士の裾にかよひて、片山里に朽はてん身をうきものにや思ひそみけん、馬舟の便につけて遠く都の市中に出で、しるよしある店先にしばしたづきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す比は、世も煤掃のふるきをすて、物みな新器を求るにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極がてら摺木と聞へしもとに、うち合せの夫婦とはなりける。かれは柏木の右衛門にも似ず。松木のあらくましき男ぶりながら、少もかざりなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明くれいそがしきつとめもおなじ心にはたらきて、とろゝ白あへの雪いたゞくまで、糊米のはなれぬ中をねがひ、水もらさじとはちぎりけるに、その比せつかひ（原註）刷七といひしおのこは、檜のきの木目細かにその姿やさしきから、昔は御所にうぐひすの名にも呼れしが、おなじつとめの

夜ふくる時は、走水の下のころびねがちなるを、よそのいがきの目にもれしより、さらでも住うき傍輩の中に、はしたなき間ゝ鍋の口さし出、抄子の曲り心より、うき名は立そめ、炮烙さへ仲ま破れしてあけくれ茶釜にふすべられ、なら坂やわさびおろしのふた面、とにもかくにもたゝずむかたなく、身をあへ物の韲よごれぬれば、買臣が妻の耻をいだき、手ならひの君のむかしを思ひ、つるには土にかへるべき無常をや觀じけむ。ある夜鼠のあるゝまぎれに、棚の端より身を投けるにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける。かくては食物のつとめ叶はじとて、あるじの怒りはなはだしく、石漆の妙藥にも及ばず、妹脊の中も引わかれ、内庭まで下られたれども、猶さみだれの折ゝは雨もりの役につらなれば、いとゞ長門の涙かはく隙なく、こゝにもすはりあしくなりて、井戸端にころがり出、蓼葎に埋れて、後はたれ哀とふ人もなかりしに、ほどなく露霜も置うつり、壁の虫の音もかれゆく比ならん、閒おかき寺の門番にひろはれ、ふたゝび部屋にかくまはれながら、ならはぬ火鉢にさまをかへ、酒をあたゝめ茶を煎して、ことしはこゝにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅もちりて、きさらぎの灸もすめば、また灰をさへ打あけられ、唐がらしといへるものを植られしが、からき目ながらさてあらばあるべきを、それさへ秋のいろみ過ッゝ、つるに橋づめの塵塚によごれふし、果はさがなき童部のまゝごとにくだかれ、行衛もしらぬ闇の夜の傑とはなりけるとぞ。

## 武陽官邸記

百里の海山かぎりなくこえ來たる目には、こゝに一年の鄕國はと、頬に物のふたがる様に覚えしが、けふよあすよとすめば都の月もさし入て、寐心よき夢もむすぶばかりにはなりける。四疊ばかりの所に、手ぢかき調度どもかたづけて常の居所に定めつ。庭は二三間に穴藏なかばの場をふさぎて、のこれる所わづかなるに、誰植すてし一もとのつは(原註)石蕗、二もとのつゝじ、花は時過て青葉つやゝかに、我たのみ顔なるを、そここゝと植かへなどして朝夕の水そゝぐも、うき身わするゝたづきとはなれりける。軒の風鈴に夏山のすゞしさを招き、壁のやぶれに色帋をおし、障子のたらぬにあやしきすだれをかけて、月の夕暮なかば巻たるは、かの行平の須磨の住居も、かくやと思ひ出ら

るゝに、うしろの松風とう〳〵と吹ならせば、なみこゝもとにたゞごひとりごたるれ。西あかりの二階窓、御土居間ちかく梢さしおほひて、遠望をさえぎれども、富士は木の間にくまなく、かきがら屋根はるかに見こして、時しらぬ雪をあらそふ。常にはなやかなるゆきゝはまれに、音なふ物、念佛・題目・代待・代參り、あるは木魚のひゞき幽に、箭置の佛になひて、建立奉加のかねさはがしく、比丘尼は赤坂に晝の情を賣て、夕暮のかへるさ雪踏を引つれ、辻君は白過たる顏明はなれて、手ぬぐひによしばみたれど心の動べくもあらず。隣は一重の壁をへだてゝ、朝の火打の音ひゞくより、摺鉢に客待日も、たばこきる日のつれ〴〵なるも、紙帳に閨の寐しづまるまで、こなたに物のかくれなければ、かしこにも又くまなくしりかはすなるべし。日數ふるまゝに從者どもゝ所得がほに、貧乏樽にとうがらしを植て紅の秋を待、籬垣に刀豆を這はせ、座敷に蓼をそだてゝ、鮓賣の聲をわぶるなど、かく不自由にくらしを、商人はかしこく餅を艾の底に忍ばせ、酒に味噌桶の似せ賂を書付、御門の咎をのがれて、范蠡が忠をもどき、煮豆・和物に朝夕の飯時をかんがへ、雨のあかりは灸(炙)賣るなど、なか〳〵おかしき住るのさまなりける。されば阿房の雲をしのぐも、煤拂のやかましからむに、かたつぶりの戸一枚もたでも、うき世はぬめりわたりなるをや。たるもたらぬも住人の心にして、我は故鄕の外とも思はずと、此心を額に題して、とひ來る人にも興じさせける。

## 餅辭

君見ずや餅は例のおかしみありて、しかも四時の流行あり。まづは一とせの初空、松も竹もあらたまるあしたに、飯はもとより常住にして、たら茶麵類もしどけなければ、雜煮と趣向を定めたるぞ、神代の骨折のところなるべし。それより具足かゞみびらき餅に、睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の團子をぞ、花よりとよみし人もありしを、草餅の節供に桃もちりて、つゝじ山吹とふけ行まゝに、まんぢう賣の聲もねぶたく、客は蛙に畳を呼れて、春雨つれ〴〵とふり出る比は、かき餅のいじり燒にぞ、かの右馬頭が夜咄もしみつべけれ。卯月は例の卯花ぐもりに、蚊屋の香もめづらしく、やぶ蚊も軒にもちづく比は、牡丹餅の花いとむまく、千團子ときくもたうとしや。粽はそのまゝに見るいとすゞしく、ときたるほど假の匂ひ又おかし。水

無月の朔日は氷餅とて、やごとなき上ッがたにももてはやし給ふに、草葉もよらるゝ土用の比、水餅の鍋鉉にうかび出たるぞ、上戸のしらぬすゞしきなりけり。風も文月の音づれして、七夕のあふ夜はみきのみ奉りて、子のこの餅もまいらせぬは葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし。魂まつりも團子におくりすて、お萩の花に秋もたけて、こもちもち月の團子より、栗の子餅の節句も過れば、十月はもとより亥の子の餅に荒初て、時雨こがらしの寒きまどゐに、火鉢のもとのやき餅も、おもしろき時節なるべし。やゝ御佛事のもちゐ始る比、つもる粉雪ももち雪もあられも、酒の名のみにはあらず。おとごの餅は朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あけてもいふべからず。さればよ、いかなれば詩人は酒のみ友にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の俳諧には、劉伯倫がのみぬけも、夏爐亭の餅ずきなるも、ともに俳諧の趣向なれば、我門には上戸もめでたく下戸も猶めでたし。

## 鬼傳

むかしは佛の國に住しが、舍利をぬすみし科により、天竺牢人の部になりて、もろこしへわたりしを、鬼も十八のあだし心より楊貴妃の枕にしのびて、鍾馗といへる髭男に追はれ、かくれ簑の身も住うしとや、十郎姫にも引わかれ、赤裸に身代たゝみて、はじめて日本へ親に似ぬ子と生れ出けるとかや。其比はまだ涙もろくやありけん。朝雄が哥の理屈につまりて、一ト先分散しけるまでは、さすがに横道なしと、役の行者の情ふかく大峯・かづらきの荷持にも雇はれしに、次第に身持あしくなりて、煎餅もめづらしからずと、芥川のくらまぎれに、鬼一口のあばれ喰にむかし男を泣せ、それのみならず、鈴鹿山の好色、大江山の酔狂、戸隱山にて惟茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留主にと世上物躁になりけるにぞ、神々のいかりつよく、鰯・柊の青道具にかり出され、つゐに煎豆の追放にあふて、娑婆にもたゝずむかたなくて、冥途の出かはりに趣（赴）き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合あはぬむまれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覺え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、地獄の六尺とはなりける。扨こそ端とられたる天下となりて、万民泰平を謳ひ、丹後・丹波の境なる城跡も松風さびしく、

安達が原の黒塚も草茫ゝとしてとふ人なければ、今はたゞ棟瓦に佛をのこし、大津繪にわらはれて下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

## 朝寐辭

神儒佛の教さま〴〵なる中に、上はかしこき朝まつりごとより、下は十露盤のせはしき世わたり、市の出買のその日過まで朝寐せよとの教こそなけれ。まして、雞はじめて鳴てより、忠臣は蚊にせゝられて、たばこに明ゆく鐘をかぞふとや。げにも唐帝の玉妃に腰うたせて、飯時もわすれ給ひたらむ。又は若むすこの色酒にあそび過して、むねふくれ、かしらおもくて、いつも朝がほの花をしらず、万事は手代まかせならんは、身代破滅のはじまりなるべし。さはれ世にする事なき姑の佛なぶりの朝起に、おも屋の家うちにそしられたらむより、これらは火燵に火をおこす間を、うち寐がへりてもあれかし。されば用をかきても寐よとにはあらねど、三四五月の短夜に枕加減のよき比は、朝寐こそ又おかしけれ。必目のさめぬにもあらねど、うつら〴〵と夢見夢みず、花に朝日のにほひたるも、松に有明の殘たらむも、かのねやながら思へるは、起てみるにもまさるべけれ。いつもの豆腐うりの聲行過て、車井の走るおと、雀の餌はみにあつまり鳴など、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物申の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四ツ比にもたけ過て、さし心得たるわらはのくみ置たる手水湯は名ごりなくさめきりて、その奉公の水になるもかはゆし。さればかしこげに朝起して、一日目のさめがたく、晝寐に光陰を盗まむより、枕序に朝寐たるこそましならめとさとりて、此睡工夫をなす事になむ有ける。さはいへ秋の夜長になりて、又朝起の面白き時は、たちまち朝起の男と呼るべければ、釋迦も孔子もしばし氣長にみゆるし給ふべし。

鶯を夜にして聞あさ寐かな

## 炮燵賛

一生をつくろひなく、その日ぐらしに覺えたる炮燵といふものは、圍爐裏のもとにいやしまるれども、その德を論ずればいとたうとし。鍋釜は眷族も多くわかれて、藥鍋などゝ号するは、銀に毛彫の繪様にほこり、數奇の茶釜は天明・芦屋の作にたうとまれ、探幽が下繪にあたえを高ぶれば、臺所の太郎・二郎もをのづから、氏族の榮に心おご

りはするなるべし。炮烙は一類もなく、世にかゝづらふほだしもたず。廬仝が夜なべに茶をほうじて、雨夜のさびに伴ひ、(炎)炙甕の豆のから〱となる時は、隣のやもめの耳を悦ばす。いでや是を荷なふ商人は、程朱の説をきかざれども、常に身をつゝしみて細道假橋を大足にはこばず。市中に股をくゞれどもふかくいさかひをたしなめば、馬士・船頭の氣随には似ざらん。なげくべきは本間の狂言に、鞨鼓と威勢をあらそひ、又は歐陽公が工夫より糯といふものを尻にぬられて、蠅をとる道具となれるは、をのが心にもあらで、にげなきわざながら、かのあし鼎の醉狂人の鼻をかゝし、石川五右衛門が釜いりより論ずれば、罪は至て輕かるべし。しかるに和田殿の大磯がよひに、頭巾の名に物ずかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんかあたまにいたゞかるれば、かれは藥罐の下に立む事かたくなんありける。

ほうろくや棚から下りる秋の暮

## 隅田川涼賦

水無月のあつさのけふことにさめがたければ、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、牛込といへる所より舟出して、まづ涼しおし出す舟に芦の音　などたはぶれた竿をめぐらすに、舟はもとより一葉のこと〱しからず、破子も場どらぬ趣向ながら、けふの乘合に、手なみしれるくせものもあればと、樽一ッはいかめしくつきすへたり。數ゝの橋こえ過、兩國の河づらにこぎ出れば、風はかたびらの袖さむきまで吹かへすは、秋もたゞこの水上より立初るなるべし。椎の木の蟬・日ぐらし、けふもくれぬと啼すさみ、岸の茶屋〱火影をあらそふほど、今戸あたりのかけ船もともづなを併、糸竹をならして、をのがさま〱にうかべ出ぬ。京に四條の床をならぶるより、爰に百艘のふなばたをつらねたるは、誠に都鳥の目にも耻ざるべし。舟として諷はざるはなく、人として狂ぜざるなし。高雄丸の屋形の前には、花火の光もみぢを散し、吉野屋が行燈の影には、樺燒のけぶり花よりも馥し。幕の内の舞子は簾幹間にゆかしく、舳先の生醉は衛足みるにあぶなし。伽羅薫物のかほり心ときめきて、吸物かよふ振袖は燭臺のすきかげいとわかく、大名の次の間には袴着たる物眞似あり、女中の酒の座には頭巾かぶりし醫者坊ゝあり。かしこにどよむ大笑ひはいかなる興にかあらん。こゝに船頭のいさか

ふは何の理屈もなき事なり。老人の寄合は仙家のかけをうつし、役者の聲色は芝居もこゝにうかぶかとうたがふ。卵子〳〵田樂〳〵瓜西瓜、三味の長糸賣る聲、西南にかしかましく東北に漕めぐる。風呂をたく船、酒をうる船、菓子にあらぬ饅頭あり、鼓にあはぬ曲舞あり、あるはみめぐり深川にうかれ、あるは兩國の橋にとゞまる。遊ぶ姿とり〴〵なれども、たのしむ心ふたつならず。それが中にも猶淺草の淺からぬちぎりたがへじ。待乳山の待やわぶらんと、ふけ行夜に漕わかれて、里にひかるゝ人もあるべし。さるはいかならむ遊びも、おなじ心におもてをならべて、見もしきかばと、こゝにだに物のおかなしく、事たらはぬ心地せむも、はたにくからず。やゝ銀河の水東西にながれ、あなにくのやもめがらす、ひま白き松に嘯かはせば、さしも所せき舟もみないづち行けん、霧わたるそなたに漕きえて、瓜の皮のみたゞよふ曉の名残こそ、見しには引かへてまた哀なれ。

### 謝無馳走辭

こよひのあるじ野有、人々に謝してまうす。こと〴〵しく招まいらせて、汁に園殿の鯉も料らず、皿に張翰が鱠ももらず。夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鰹の花の名はちらせど、何をよし野ゝ色香とはめでむ。さはれ旅路の椎の葉に、もるものゝさびしき山家にもあらず。肴は宮の夕あかりを荷ひつれ、八百屋に二月の瓜をならぶれば自由はこゝも都ながら、もとより曾我の内證にして、いとなみとゝなふにわびしければなり。人々俳諧に信ましまさば、いざ是をしもにくみ給ふな。いでやかの土器の味噌を思しすて給はずば、風雅に喰寄の他人むきを離れ、けふを麁菜の矢合せとして、雨の夕べ雪のあした、鍋摺粉木はさはがせずとも、いざと心のむかふにまかせて、折々の廻狀をはじむべし。さるも貧富は等しからず、我をそなたへ招給はむに、膏粱珍味のきらひならねば、よき魚よき肴はかへても給はらむ。まして茶ばかりたまはるとも、吾門のあそびならば、はたかこちまいらせじ。けふの無馳走は紫隱里の掟にして、菜根咬得ば百事なすべしを、貧の風雅の方人とはし侍るなり。

魚うりの聲よそにふけ青嵐

### 鍋蓋銘贊

むさしにかりの旅居せし比、あやしの店に求め出せるも

のあり。さるは鶯やほしからむ小鍋の蓋なりけり。(原註)算さんは落て釘の跡のこり、月もるばかりの節穴ありていと古うすゝけたる色のわざとならず。そのわびしさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけむ、借屋の婆の楓をやふすべけむ、是をたつきとしろなしける哀は、あみざこ賣る人にもまさりて思はるゝに、今はたこれを買取し我を、あるじのいかに見なしぬらむ。世に摺鉢に蓋なきと諷はるゝを、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引わかれし。いまさらに異ト鍋にうちきせたらむは、小夜衣の名に立もうしとあはれに見しまゝに、物よくかく人かたらひて、これを閑居の額となしぬ。

たれ雑炊に落葉たきぬる
すゝけし昔とへどこたへず
われわれ鍋の世をのがれなば
よし綴蓋の汝とあそばむ

## 問菊辭

植すてし菊のをのづからに瘦、をのづからにひらきて、赤きはたゞあかく白きはたゞしら菊なり。今や世上の富家にかしづかれて、箱に戸ざゝれ曲尺にあてられ、花は年々にあらたなる其全盛を人にたとへば、傾城といへるもののうきふしの里にうられ、高雄・奥州と時めき立て、心にあらぬ人にめでられ、あだなる枕に起ふすたぐひ、かゝれとてしもたらちねはそだてじ。かゝれとてや雨露はめぐまむ。むかし彭祖が盃にくめば、八百歳の齢をたもち、正成が旗にゑがけば、十万騎の敵をなびかす。凝人はこのためにたのみ、愚將はかの功をうらやむとも、それだに花のこゝろにや高ぶらん。菊よ、こゝろみに物とはむ。その肥たるやしたはしき、この瘦たるやうれしき。よしさらば答ずとも、汝が心われよくしりぬとさゝやけば、秋風の物いはぬ花をぞうなづかせける。

我菊や尺とりむしの手もからず

## 俳席之掟

一 飯は三石の掟を守るべし。

茶の花の比をなら茶も盛かな

一 汁一ッ菜一ッ酒の肴も一ッに限りて、鮭に精進の咎をのがるべし。夏は必茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。香の物は論ずるにたらず。

音も香もせぬや豆腐の冬籠

一　酒は膳の前後をすべて三盃を過べからず。さるから盃は得道具をゆるすべし。

いかさまに四たびはくどし村しぐれ

連衆に酒ずきありて、此ヶ條の掟にはなはだくるしむ。よつて了簡の一句をしめす。

狐さへ五こんとどもる霜夜かな

一　菓子は其日のあるに任す。まづは煎豆に定むべし。

煎豆に音こきまぜてあられ哉

一　燈は行灯にて事たりぬべし。

蠟燭はたつといふ名の寒さかな

古之條ゝけふよりかたく守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し。此やくそくをそらになして、厚味を求むる輩あらば、後の世蠅とむまれて、風雅に不信第一の人とすべし。

元文元年

誓文はたてぬ筈なり神無月

## 藏人傳

天に信天翁あり。地にはあすならふといふ木あれば、人にゝ此おのこありて、かの世にむかしよりいひわたれる。

世中にねたほどらくはなきものを
しらであほうが起てはたらく

とよめる哥の、これが返しとはなくて

はたらかで起て居る身の氣樂さよ
寐てもあほうは物思ふ世に

とよめりけるを、何がしの大將は大きに此哥におどろきて、物ぐさの藏人と召れけるより、世にはなまかはの藏人ともよぶ事になむ。されば此うたの心はその藏人ならでしりがたし。たゞ藏人もしらずしてやよみけむ。

寐てや樂起てや安き雪の竹

## 夢辨

節分の夜の寶船に一年の幸を待より、一富士二鷹の品定も、これらは和朝のならはしにて、唐人の耳には日本人の寐言なるべし。されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕はあまり古ければさらにいはず。蝶となりて漆園にたはぶれ、蟻にひかれて槐國にあそぶ。かしこき雲の上人は、うばたまの夜の衣をかへしては、銀いらずの戀をもたくむらん。あるはかづらきの神にもかぎらず、晝は見しらぬ神ゝも、七日滿するあけがたの枕上には、まみえさせ給ふな

る。かゝるたつとき夢の告を、佛はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへごとより、人は現も夢の部に入て、世中をいとふまでこそうたてけれ。とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起てたのしみねてたのしまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。鬼神に横道なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰が定めたるぞ。鬼神は聞てよろこび、傾城は聞て腹たつらむも、聖人ばかりは何とも思しめさず。さるは冷にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御こゝろこそ世にありがたけれ。

# うづら衣 下

## 鼻箴

しのぶの浦のみる目は、もとより耳とも口ともつゞけたらむ、哥にもさのみけやけからず。いかなれば鼻といふ名のひとへに、俳諧にはとゞまりぬらむ。末摘花のわる口もあからさまにはよみなし給はず、そのおかしみこそ俳諧にはうれしけれ。さりとて臍の尻のとて、いやしむたぐひの物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は神代一番の見事さにて、愛宕・高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に露霜のをきどころなくて、いかに寒からむ。見よや人の老ゆけば、目は遠山の霞たな引、耳には鳥虫の聲もうとく、口は冬がれの歯も落て、盛衰まのあたりかなしみを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つぶれて用をかく事もなし。ひとり常盤の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけむ。さればおそるべき人心、むかし聖賢のおしへにも、視聽言動の四つばかりをあけて、鼻に警のゆるがせなるより、世におごりのきざし

起りて、籠にほこる妾・小姓のおほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも、鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出ぬる。えならぬかほりにひかれよる色のいましめは猶さらにして、女のよれる髪筋には、鼻の高き大象もつながれ、あほうの延せる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝためし、わざはひ蕭墻より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。

## 手水鉢銘

いでや此手水鉢に若水くめるあしたよい、おこたらず立なれて歯みがく楊の枝をうつし、軒端の梅のひとえに清かれと、時に口すゝぎ時に手あらひて、あらはゞ心の塵もなどかは去ざらむ。さるに此亭に愛せる鉢は、石なるや銅なるやもしは陶なるや。我さらにしらねども、水はもとより方圓の鉢にしたがひ、鉢はたゞあるじの物好によるべし。見ずや此水の四時にたへずして、しかも朝ごとにもとの水にあらず。万理のこれにこもれるが中にも、風雅のことに水に似て世ゝに盡ず。水に似て時ゝにあらたなるも、汲てしらばこゝにあきらかなるべきを。されば頃日人につたへて、予に此銘を求らる。我きく湯の盤に銘して日ゝに新なりとは、もとの汚を濯ひさりて、心も口ゝに清かれとや。まして此物は飯くひ酒のむすさびにも、常に柄杓を手にふるれば、しばらく俳諧のおかしみをはなれて、これに時ゝ新の三字を銘せむに、かの盤の銘にもまさりて、先聖もたしかにうなづき給ふべし。世はよし五月雨のはれみくもりみ、滄浪の水は濁るとも、ひとつ此水の底清からましかば、纓を洗ひ耳をすゝぎて、長く閑居の契をもむすべとぞ。

汲かへてもとの月あり手水鉢

## 名徳利說

つくねんと靜なる時、泥塑人のごとしとは、賢德の姿をほめて此物にはあらざれども、したしめば一團の和氣あたゝかに、雪の夜あらしも身にしまざるは、これがためのたとへにもいふべかりける。まして備前の名產にして、六升ばかりを入るゝときけば、たとへ八仙の客にはとぼしくとも、虎溪の禁足は忘るゝにたりぬべし。なを此物の德を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これがたぐひにはいふべからず。あるはちろりといひ、間鍋といひ、前後左右のむづかしみありて、弦によそほひ袴をかけて、實は心

のとげざるかたもあるべきに、たゞ此物の口をそらさまになして、たゝみ居る人の中に出ても、いづれに向ふともなく、たれにそむくともなき姿をもそなふたるべし。此ぬしこれに名を呼む事を求む。むかし子猷が竹は見ぬ日ありとも、さてやみぬべし。此ぬしのこの物における、一日もなくてはあらざるべく、つねに膝下に召まつはさるれば、かの此君の名の古きを尋て、此童とよばんにいかゞ有べき。されば世の近侍の童は、立居に尻のかろきをほむれども、此童の奉公振は、たゞいつまでもいつまで草の根つよく尻の重からむこそ、主人の心には叶ふなるべけれ。

月に雪に花に徳利の四方面

## 樂老記

雛肋堂にめでたき徳利あり。もとよりその名を此童と呼て、あけくれの愛をかうぶりしに、ことしまた一つを求出で、樂老とゑぼし着せけるとぞ。されば昔男ありけり。非筒の女の底意なくかたらひける後に、高安のこほりに行かよふ所いできにけるは、げには心の花のうつろひて、ますかたに引るゝあだし心ならむにや。これはそのたぐひにはあらで、主人の腹のはかりなきに、此わらはも折ゝの宵ねにこりて、たゞこれをもてかれをたすけ、かれをもてこれがたすけとなせれば、彌に兩雄の爭もなく、此童に月をむかへては此樂老に月をゝしむ。肴核すでに狼藉して水雑炊のやゝしらむ比、此童は膝にねころべば樂老は枕とこけて、主人の鼾の響わたり、そこの柳もねぶりそへたらむは、おもしろき四睡の圖なるべし。

## 旅賦

春は乘かけの鈴ならして、浴衣染の花やかなるは參宮の都道者か。夏はさみだれのかきたれて金谷・島田に大名の市をなし、秋は木曾路の木ゝも紅葉して猿三聲の涙、ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は鈴鹿のふゞきに飛脚の足を定かねたる、いづれもとりどりの哀なるべし。五十三次の紀行はあまねく人のいひふるせど、多くは哥よみ・連歌師のぬめりに、さよの中山に旅ねの詞をつゞけ、宇津の山邊の蔦にまとはりて十團子のさびしさはしらず。さらねば寺社旧跡の由來書、道のり・方角の詮議に落て、猶俳諧にひらふべきものはのこれり。許六が賦に馬かたの境界を盡し、木導が説に出女の盛衰を述たり。しるてそ

のまねびせんとにはあらねど、例の腹ふくるゝわざなればならし。旅の哀といへば、西行の笠しめつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀かな物はかゞやけど、竟日の駕籠に足をいため、緞子の夜着に雨もりをきくも、旅ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕ぐれは、たて砂に幕をひるがへし、すそする馬のしりをならべ、亭主が袴はそゝけながら上下に泥足をすゝぎて、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕とはいひがたかるべし。下宿のさまは引おとりて、見せ先に居風呂ふすぼり、小くらき行灯の陰とり廻して、ねころぶものは木まくらに虱をつぶし、まだねぬ者は取かへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子のならぬこそことにわびしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり燒酎うり、あんま・けんぴきの聲もおさまりて後、拍子木丁々として、これらはいかめしき旅の一体なり。すべて旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ぬはなし。畑峠には山みづをしかけ、大磯・小田原には小石をまきちらす。塀にしのびがへしにありながら、大戸のかけかねはひづみてかゝらず。湯殿は無性にひろくて蜚鼠を迷はし、雪隱の疊は座敷よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れかゝり、蛩の啼こそ哀なれ。膳にはいなだの鱠かすかに、鰹のやき物、大根葉のあえ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、箸のふときはいく度もけづり直さんとにや、いとうるさし。出女が赤まへだれとは、みやこにちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻かるに立廻り、鼻哥に雨戸はしらかすも、こよひいかなるさゝやきの橋をかけたるちぎりもとこそゆかしけれ。沓・草鞋・笠の頭巾はゆく先々の店につるし、あやしのはなれ屋には竹につけて道はたにも出せり。赤表紙の道中記、おもりに鉄錫をさげ、櫃のほた餅にはすゝ黑き雑巾を覆ふ。箱根の赤腹は巻わらにさし、梅澤の鮟鱇は鏈にかけて軒につるす。されば日よりは天道次第ながらさ、しも大井川は膝だけにこして、思はぬ酒匂に二日留られたる、あら居の茶屋にうなぎのあたらしき日は親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日こしの燒餅をくふなど、きのふは絹賣に道づれして大濱に温飩をふるまはれ、けふはぬけ參の介抱して天龍の川風にあたらしき笠をとられたる、哀樂日々にうつりかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべし。旅に哀をしるとは、その

行客の身の上のみにあらず。駕かる人はかく人の達者をうらやめども、駕かく人はかる人の錢をうらやむ。小揚のあひことばいつの世よりの洒落ならん。やみけんことは三十五文にして、またと坂東とは二十八文なるべし。朝は鳥羽の早追にはしり、晩は姫路の女中をつりて、身は定なきむらしぐれ、雲助のゆく末もいとこゝろもとなし。疝氣たまの（原註 陰嚢）川越の首に髭奴のまたがりて及ばぬ富士をながめたるも、片日の馬かたの座當のせてくらがり峠こすも、いづれ世わたりのかなしからぬかは。それが中にも口の過たる船頭は大坂番にたゝかれ、鼻の落たる餅屋は六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、觀ずればみな旅にして、世を旅の宿にたとへたるは、かりの住居といふのみにあらず。たのしみもくるしみも行先に見盡して、たとへ女院の六道の沙汰とても是にもれざるべし。たゞ俳諧師のなる果のみぞ、棄恩入無爲のしめしもまたず、ふつゝかにあたま丸めて吉野・初瀬の春をゆかしみ、松島・象潟の浪にうかれ廻り、三文ねぎりて戻り馬にはぐれ、乘合なくてわたし舟も出さず、たが爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道のりをつもりちがへて、きのどくの山かげに一ト夜は一ツ家の情をかりて、すゝき折たく圍爐裏ばたに膝さらあぶりながら、虫齒やむ子にまじなひ教て稗團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺をたづぬれば、和尚は漢和もすこしなりて足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名殘をゝしまれて松茸に喰あきたるなど、水雲万里をうかれありきて、ほだしなき身のやすきながら、そこの下人を孫平とは我伯母聟の名なるものをと、ふと故郷の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路・東海道のくりごとながら、のぼれば行程千四十里ばかり、猶ながらへていかばかりの旅行もしらねど、ことしは齡も四十の老ちかく、しきりに懷旧感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書て寓居の筆をつゐやすも、まことはあぢきなきすさびなるべし。

## 借物の辨

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりてつらぬきとめぬ玉ともちるなり。むかし何某のみことの、このかみのつりばりをかり給ひしより、まして人代に及んで一切の道具を借るに、借すものもたがひなれど、砥の挽臼のといへるたぐひは、借すたびに脊ひき

〳〵、鰹ぶしはかりられて痩てもどるこそあはれなれ。金銀ばかりは德つきて戾れば、もとかる事のかたきにはあらぬを、かへす事のかたきより今は借る事だにたやすからず。むかし男ありて、身代もならの京春日の里にかす人ありてかりにいにけるより、やごとなき雲の上人もかりにだにやは君は來ざらんと、露ふか草のふか入し給へば、鬼のやうなるものゝふも、霜月比よりは地藏顏して人にたのむのかりがねは尾羽うちからして、春來てもこし地にかへらず。かりの宿りに心とむなと、人をだにいさむる出家達も、借らでは現世の立がたきにや、二季の臺所には掛乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲におがみ給へば、又ある寺には有德の知識ありて、これはこちから借しつけて、きりの算用滯れば貧なる檀方を呵責し給ふ。かれもこれもともに佛の御心にはたがふらむとぞ覺ゆる。そも顏子陋巷にありて、いかきのめし・瓢單酒に貧の樂をあらためずとや。さるを今世の人ゝ借金の山なして、是を苦にすれば限なし。百までいきぬ身を持て、さのみは心をかなしめむや。一寸さきはやみの世ぞと放言に腹うちたゝきて、家は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引ことにいふは、やるせなき心のはらへならめど、まことは雲水の間違なり。なべて世にある人の衣服・調度をはじめて、人なみならねば耻かしとて、そのためにかねをかりて、世上の耻はつくらふめど、人の物をかりてかへさぬを耻と思はざるは、たゞ傾城の客にむかひて飯くふ口もとを耻かしがれど、うそつく口は耻ざるにおなじ。かくいへる我も借らぬにてはなし。かす人だにあらば誰とても、かりのうき世に金銀・道具はいふに及ばず、かり親・かり養子も勝手次第にて、女房ばかりはかりひきのならぬ世のおきてこそ有がたきためしなれ。

かる人の手によごれけり金銀花

## 訪剃髮辭

五夕剃髮して桐の坊といへりとぞ。まづは殊勝の法師ぶり、名をきくよりやがて俤の推はかられ。されども十德はきるやきぬや。饘汁はくふやらん。くはしきたよりはいまだきかず。

襟垢の世をぬき捨て紙衣かな

## 猫自畫贊

此小ふすまの白くてさう〳〵しきに、物かきてえさせよ

とあるに、さらに何かくべしとも覺へず。されど辭してもゆるさるまじきかたをはやくしりて、よしさらば此棚に鼠のあれぬまじなひせむと、おこがましく筆とりて書たるは何ぞ。我は猫なりと思へども大宮人はいがゝいふらん。むかし金岡が書たる萩の戸の馬は、よる〳〵萩を喰あらしたるとか。もしはさる能書の筆して、四條のすゞみ・清水の花見など、にぎはゝしき繪の屛風襖にもあらば、あまたの人の夜ごとに出て扶持方もつゞきがたかるべし。我が袋戸の猫は、たとへすゝけて千とせふるとも、赤手のごひの踊もしらず。まして肴のたなさがしもせねば、あるじの爲は中〻心やすきかたならむを、朧月夜にうかれぬのみぞ、玉の巵の底なしとやそしられぬべき。世につたなき筆の虎をゑがきては、必猫なりとわらはるれば、われ又猫をうつさば虎にも似るべきを、抄子にはちいさく耳かきには大きなりと、かの柿の木のむかし咄ならん。かくいへば鼠の爲とてもよしなし事に似たれども、いでや鼠にも白黑の賢愚ありて、子祭の白鼠はあるじもいざにくむまじければ、かしこく知りてさけぬもよし。心の鬼のわる鼠のみ、これだにも氣づかふべきは、落武者の薄の穗を人なりとみるたぐひにて、少はそれよりも近かるべし。さらば牡丹花下にてふを驚かさむよりは、此棚にねぶりてかのわる鼠をいましむべしと、かれにしめしの一句にいはく、

ゆだんすな鼠の名にも廿日草

## 戀說

かはゆき子も旅はさせよといひ、戀は道ならぬ道もあれば、ふみ迷ふさのゝ舟ばし親もさけて、あだし心はいざ神とてもいさめずやはあらむ。さてしも世にたへぬすさびにて、身にこそ人のいましむべけれ。そのくま〲は尋わけてぞ物の哀もしる端なるべきを、哥にはもとよりもつぱらにして、荻の上葉にとはぬをうらみ、有明の月に別れをかこつより、沖の石に涙をかけ、衞士のたく火に思ひをよそへて、たとへ雲かゝる高間の山も、浪よする高師の濱も、てにはの詞に品はかざれども、逢ふの別るゝの、忍ぶぞうらむぞと、たゞ一筋の情のみをいひて、女の男を思ふやらむ、男の女をしたふやらむ、姿に千變の品はわかれず。俳諧は万化にくだけて老若貴賤をわかつより、姿に自由の働あれば、非情がもとのうなひ子の、

手物もらふたる情わすれず。源內侍の十夜參りは紅裏に名をたてゝ、逢ふの待つのと詞にはもたれず。其句の姿に戀をみすれば、戀を一句で捨る事歟と、他門の初心の迷ふもこゝならん。しかればかの法師の筆にもかける。まと男女の情は縫い夫婦に立ならびたる中をのみいふ物かは。逢はでよめりし娘を思ひ、小ぶとき乳母をかこち、長廊下にまどひ明し、向ひの女房を詠やり、淺茅が宿に後家忍ぶこそ、色このむとはいはめ。ことにみやこのおそるべき、所々に遊里の軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ。物よみ謠のつれにさゝやかれ、東は朝日の陰なる遊びもつのれば西にかたむき安く、もらひのなりし夜は面白く、くぜつにあけし曉はおかしく、うそは誠にかくれ、恨は情に負けてより、人のいさめ世のそしりも行過の古みに見下し、宿はお留守の夢のうき橋、程なくとだへして著るものなど久しからむや。秋風內證に吹わたり、出口の柳ちすほけに散初るより、丹波口の茶屋も見ぬ顏して、身をこりずまの浦ならずも、うしろに山の借金負となれば、今出川の家も質に流れ、姉が小路の妹聟よりよすが求て、今ぞ落目の境に下り、わづか二

三年の夢茫然とさめて、思へば千束の文は何の爲になりけるぞや。昔の孔子も今の伯父坊も、異見はこゝの事なるべし。新町・ちもりの夕ぐれ、木辻・鳴川の曙、もろこしちかきまる山とても、おなじ戀風はふきかよへど、猶とり〳〵に加はる俤は、色をも香をもしる人やしるらん。まして江戸ざくらの花やかに、人の心のはりもつよく、上野・淺草の花ぐもりより箕の輪の雨の名にぬれて、土手の露ふむ戶なし駕より今戶の舟のこがれよるこそ、遊びに巾の廣がり安きは、さしもむさし野のふか入する人も少なからじ。波にうかるゝうかれめ、草に音をなく辻君・白人・比丘尼・野郎・影間、それとて賣かふものはさらなり、御油・赤坂の留〆女さへ、おかしからぬ事もよくわらひて、ねよけにみゆる旅人に、なじみの文よみてもらひ、さし足袋賣たるえにしより、七日つゝしみし始末もやぶれて、一夜の露に落やすきは、いざ此道のならひならぬかは。それよりの世のさま、人しれぬ事のみ多き中に、お比丘尼のかたみわけに、似げなき文の簞笥から出たるも、若旦那の鼻毛ぬきや物縫の部屋に見付たるも、みな〳〵跡のまつりなれど、物いひさがなき世にし

あれば、うき名は千里に立安きを、蚊をやく脂燭にいねわるき蚊屋をすかし、小角豆つむ垣ねに隣の行水をのぞくなど、わづかに蟻穴のあやまり心ながら、身をはふらかす端ともなるべしや。されば社與黒屋の手代は思はぬぬれ衣着て、稲荷の前に脂屑をひろへば、四條河原へ賣たる子の大名に抱へられ、親までゆたかなる扶持方を得て長かたなの銀こじりは、ひとへに我子の光ながら、むかしの念佛講中はからかさもどさぬ謗も、こるべし。これらや一生浮沈なれど、其源はたゞかりそめの檜原が露の契にはじまりけむ。しかるに色白なる疊さしありて、屋敷かたにてたばこ入をもらひ、琴の指南の検校が月見の夜から出入とめられたるなど、あるはお寺から手を廻して山歸來買るゝも、飯のくはるゝ痞に、折ゝ針立の泊りて行も、わけを紅の袖にとはゞ、表八句につかはれぬ身も有べし。又は風俗にいにしへ今のたがひもありて、律儀なる漢帝は反魂香をたきて、よすがら夫人の面影をしたひ、榮耀なる隱居は地黄丸をのみて、季時に飯焼の器量をゑらむ。猫にひかれて見そめし夕べは、玉だれのへだてをかこち、蚤にくはれて待わびし夜は、古夜着のうらみあかすなど、おのづから貴賤のけぢ目なきにも有べからず。慈鎭和尚の眞葛が原も、破戒の罪のそしりもなければ、其身に戀なせよとにはあらず、戀に心の髣束なかりせば、前句に對して趣向はありても、句作も道具も取つくかたなく、思ふにも手の届かぬは、其足着て炙(灸)を据くより猶不自由のくるしみあるべし。いでや戀といひ旅といふ、旅はかたちを勞して情は後なるべく、戀は情を先にして哀は姿に品をわかてば、内外いさゝか先後のたがひもあらむか。さらば何條の上にも、其心あらざらむや。おそるべし、かゝる說は饒舌の罪おふべくして、只後の君子をも待べきを、忍びもはてずして筆とり侍る。これもまた戀の闇に迷ふたぐひかも。

## 閑居記

忘るまじ、此一室はふるき世のわがゆかりなりけり。もとは城西の閑居にして、我曾祖母のいまぞかりし、今は四十年の昔ならむ。その人おはせずなりて、鶏の軒をあらし、鼠の壁を穿しほどもやゝ年あり。そのゝち母のすみ給へるかたに、ふたゝびいとなみしつらひつれば、あけくれの定省に寒暄をとひ聞しは、十とせあまり三とせば

かり。千代もと祈りしそのかひもなく、むなしく風木のかなしみを抱き、桃李物いはぬ昔とはなりぬ。しかればこぼつに忍びず、今宮邸に閑地あるにまかせ、暫こゝに引移し、猶菅原や伏見の里もと契り置て、平生座臥の一ト間となせるよりは、馴來つる眞木柱も我を忘れじを、我はまして馴こしかたの花もなつかしく風も忍ばしく、窓に雪みる夕べは早梅色養の笑をふくみ、軒に月もる曉は鷄聲盥漱の期を告て、猶孝情の盡さゞりし事を惜む。されば一室は八疊の南を請て、床も押込みももとみしまゝの名ごりとゞめつ。北に三疊のおくまりたる所、夏はあけわたして風を通はす便あり。中はまして冬ごもりによろし。爰に襖さし、ともし火をかゝげて、讀書靜座のかくれ所とす。その窓に子猷が竹あり。陰を愛して杖にもきらず。その軒に弘景が松あり。聲をたのしみて蚊やりにも手折らず。脊戸には淵明が西疇ありて雪間の若菜つみそむるより、苣(チサ)も酢味噌にとぼしからず。茄子はもとより世に久しくて、あけくれのあつものには少あかるゝもつれなしや。牛房はほそくとも大根はふときをいとはず。まして芋は地に叶ひて、いかめしきまでそよぎたち、豆も實入の折すぐさねば、せみの小川の影ならずとも、月も此軒をたづねずやはあらむ。十日驅馳のさはがしきも一日の閑にとりかへして、これだに治世の仕よきをしるにも、おはさぬ人のいかでかと、あかずたゞ口おしく、忍ぶ草の忘られず、へだちゆくあとのみおしまるれば、額に無待の二字を書しも、たゞこの心に思ひよれるを、いざほとゝぎす我なうとみそとぞ。

## 斷酒辨

もとより李杜が酒腸もなければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸ともいはれて酒に剛臆の座をわかてば、おのづからのむ人のかたにかずまへられて、南郭が竿をふきけるほども、思へば四十の年にもちかし。されば衆人みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしらず。まして五十にして非を知りしとか、かしこきためしにはたぐひも似ず。近き比いたましう酒のあたりけるまゝに、藻にすむ虫と思ひたつ事ありて試に一月の飲をたてば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月の夕べ、かくてもあられけるものをと、はじめて夢のさめし心ぞする。けふより春の蝶の醉心をわすれ、秋のもみぢも

茶の下にたきて、長下戸の樂に老を待べし。さもあれ此誓ひ、みたらし川に御祓もせねば、たとへ八仙の一座なりとも、まねかば柳の青眼に交り、吸物・さかなは人よりもあらして、おなじ醉郷にあそぶべくば、いざ松の尾の山からすも、月にはもとのうかれ仲まと思ふべし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり

## 物忘翁傳

わすれ草生ふる住よしのあたりに、住わびたる物わすれの翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覺のおろそかなるにぞありける。昔は經學の道をもとひきゝ、作文・和哥の席などにも、さそふ人あればまじらひけれど、きく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覺しことゞも、朝ぼらけにはこぎ行舟の跡なくて、身にも心にものこる事すくなし。されば是を書付置むと、しゐて硯ならし机によれば、春の日はてふ鳥に心うかれて過、秋の夜は虫なきていとねぶたし。かくてぞ老曽の森の草、かりそめの人のやくそくも、小指を結び手のひらにしるしても、行水の數かくはかなさ、人もわらひても罪ゆるしつべし。さればその翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きにかずまへられしほどは、人やりならずはづかしかりしが、つんぼうの雷にさはがず、座當の蛇におどろかざるこぼれ幸なきにもあらず。よのつねきゝわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板かへしといふ咄ありて、またかの例の大坂陣かと、若き人々はつきじろひて小便にもたつが中にも、我は何がし僧正のほとゝぎすならねど、きくたびにめづらしければ、げにときくかひある翁かなと、かたる人は心ゆきても思ふべし。ましてつね〲手馴古せし文章・物がたりの双帋も、去年見しことはことし覺えず、春よみしふみは秋たど〱しく、又もくりかへしみる時は、只あらたなる文にむかふ心地して、あかず幾たびも面白ければ、わづか兩三帙の書籍ありて、心のたのしみさらに盡る事なし。むかし炎天に腹をさらしたるおのこは、人にもおり〱物をとはれて、とりまがはじいひたがへじと、いかにかしましき心かしけん、今は中ゝうれしき物わすれかなとぞいひける。猶かの翁が家の集に、何の本哥をかとりけるならむ。

わすれてはうちなげかるゝ夕べかなと

物覺えよき人はよみしか

## 妖物論

世にばけ物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、さかやきそりたるはつるに聞かず。夜るばかり出るはいかなるゆへぞと、或人の問たるに、晝は例の子供のたかりてわづらはしさにと答たるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病ものゝ相手にとれば、その葉ごとに出來榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のあやまちをかふむる。鬼は伯母に化てかひなをとりかへし、狐は叔父にばけて民の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化たらんは、その姿おかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落て、猫また河童はたまくの沙汰なれども、その正躰の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理屈なきばけ物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そもく神は湯立にもうつらせ給ひ。佛は稱名に來迎なるを、此ばけ物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表帋の小双紙にはづかしき姿はとゞめられける。さるに昔今の美婦國色すら身の終はみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬兒が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の終ばかり引幕の陰をもたのまず、あとに箒も雜巾もいらず、かきけすやうに失にけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

右の文章、享保の初より寛保の比まで、半掃庵菅丞の遺稿也。

張藩　六　林　校

## 題鶉衣後

也有翁は風雅の隱君子なり。予に莫逆の交を許され、つねに教をうくる事あつし。爰にまた東都の四方先生あり。予はるかにその芳名を慕ふ事久し。然るに此うづら衣は、翁少壯より老に至るまで、生涯四時の不斷着なりき。簞笥におさめてかくし置、むざと人にはあたえられざりし

を、東都の先生いかにしてか聞つけられけむ、ある人にことつてゝ、その地合・染色をも見ばやの望あり。翁生前傾蓋はあらざれども、高山・流水の音しる人また外にやはあると、前津の旧庵へかけ込て、そこを守れる文樵なる男に、さびたる鍵とらせて、押いれの引出しをさがし、文匣の底ふるひて、あまたの中にゐり塔のつかぬを、かれこれと撰出し、速にこれを贈れり。日あらずして梓に上せられ、遠近の好士に一襲ヅゝ衣配せばやとの沙汰あり。誠に翁に於て隔世の知音といふべし。さぞな泉下にも雀躍して歡喜あらむ。そも四方先生の高韻は海内みなしる所なり。也有翁のうへは、さきに發句集のはしにつたなき筆をそえぬれば、かたゞゝ爰に贅せず。たゞ四方先生の此一擧をふかく感じて、聊そのあらましを附するのみ。

天明五年乙巳師走の下旬

護花關　六林識

# うづら衣　續編

## 煙草說

夜道の旅のねぶたきとて腰に茶瓶も提られず、秋の寐覺の淋しきとて棚の餅にも手のとゞかねば、只この烟草のの友となるこそ、琴・詩・酒の三ツにもまさるべけれ。埃のもえ杭をさがしたるは、宰予が晝ねの目ざましにて、行燈に首毛したるは小侍從が待宵ならむ。達摩は九年の壁にむかひて炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を樂む。されば出女の長きせるは、夕ぐれの柱にもたれて口紅兀さじと吸たる、少は心づかひすらんを、船頭の短きせるは舳さきに俯甸て、有明の月を詠ながら大海へ吸がら投たるよ。いかに心のはれやかならむ。やごとなき座敷に緞子張の煙草盆をあたま數に引わたしたるより、路次の待合に吸口包たるは、にくからぬ風流なれど、さすがに辭義合に手間も取べし。只木がらしの松陰に駕立て、繼ぎせる取まはせば、茶屋の嬶のさし心得て、蚫からに藁火もりてさし出したる、一瓢千金のたとへも此時

をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひながら、畑打のきせるにがん首さしあはせて一ぷく吸付たる心こそ、漂母が飯の情よりうれしさはまさらめ。そも煙草の德もむかしより人のかぞへ古して、今さらいふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此類の品定せむに、酒は富貴なる者なり、茶は隱逸なる者なり。煙草はさしづめ君子の番にあたりて、用る時は一座に雲を起し、しりぞく時は袖のうちに隱る。こゝに神龍の働ありともいふべし。下戶と妖物は世にすたれて、下戶は猶少からず。今や稀なるはたばこきらひにして、野にも吸山にも吸へば、たばこ入の風流日ゝにさかんに、きせるの物ずきとし〴〵にあたらしくて、若輩の目を迷せども、楠が金剛山の壁書をみて思ふに、たばこははさがぬを專とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ。さらば色みへてうつろふ花の人心にも、畢竟そのものゝ本情實儀をうしなはざれとなり。

## 鷹野記

つのもじや、いせの鷹野なる山にいでゆ（原註温泉）あり。年ごろなやめる疝疾にこゝろみむとて思ひたつ。比は七月の廿日あまり、尾城を舟出して桑名にいたる。あさけ川といへるより道わかれてかの山へむかふ。

　鴫たゝば夕べはいかにあさけ川

その末は人家もまばらに、薄はまねけど酒屋もなく、餅は萩の花の名のみして、秋草のやさしく咲みだれたる、こゝを繪野とはいふなるよし。

　誰すてゝ扇の繪野の花づくし

山口といへる一つ家ありて菓子などうる。店に尻かけて、

　こだまより外隣なき砧かな

それよりはけはしき道細く、あやうき岩をつたひ、谷をわたりて、雲より雲にわけ入れば、世の外遠くへだゝる心地して、さてはしづけき山の中にこそと思ひやりしには似もやらず、湯本の家はわづか二十にたらねど、二階づくりの家居つき〴〵しく、古市などいへるあたりより、たはれ女多く來り居りて糸竹に客をなぐさむれば、小哥・淨る理山どよむばかり、峯の松風も三線に音をうばゝれ、淸き谷水も脂水のけがれに濁るべきぞ、思ひし外の山里には有ける。今年はことに湯入の多くて、いよの湯けたもよみつくすまじく、近き比にすぐれたりと、所の人もいふ

めり。わか〳〵しきかたは心にもとまらず、あたら山里の秋の夕をと、ほるたがひたる心地するが、もと見し事どものさすがに思ひ出らるゝ折もありて、むかし忍ぶの家の名も橘屋といへるに、しばしのやどりもとめて居れり。襖一重へだてゝ、ことににぎはしく謳ひさはぐに、日々の口号、

色鳥のねぐら隣や山がらす

湯の山やにしきに交る染ゆかた

暮は湯にゆづりて秋の櫻かな

山の上に藥師堂あり。三岳寺と名のみこと〴〵しく、回祿ありける後はかたばかりにいとなみて、すめる僧もなく、明くれかねつくは堂守の男にて、法師にはあらざりけり。

鐘つきや剃らぬあたまに散柳

六日ばかりの月山のはにかゝりて、風も湯あがりの身にしむばかり、端居の夕ゞおかしきに、鹿の聲遠く聞つけぬ。

笛にせぬ湯下駄にもよるか鹿の聲

つれ〴〵まぎるゝかたなき日は、そこらみめぐり侍るに、大石と名に立るあり。

友寐して猿と月みむ石の上

青瀧といへる、うしろの山をへだてゝ西より落る。

青瀧や竪に音きく初あらし

この山下にあやしき野火あり、人の亡魂とかいひつたふ。

たが魂ぞほたるともならで秋の風

我名もつゝみ人の名もとはねど、をのづから見なれ、ものいひかはして、いざたまへ、けふは花火あげてなぐさまむ、あまごといへる魚とりになどさそふ人ゞもあるが中に、ことに明くれとひ來りし覺樹といへる若き僧あり。下手なる象戯などさして、淋しさまぎるゝたつきともなれり。過る日數も二廻りばかり、今はとてかへる日は雨にふられて、

湯にぬれし袂の果や秋の雨

かばかりの事も、後の思ひ出にもやと書つけ侍る。比は乙亥の年になん有ける。

樂老庵主像賛

滄浪の月すめらば酒におしむべし、くもらば茶に遊ぶべしと、二つの間になぐさむは樂老庵のあるじなり。これ

をゑがき、是に賛して、

酒に待茶に待かへて月二夜

といへるは、その友紫隱里の某がもとめに應ずるなり。

**贈二奥州株人一辭** 朱硯の來由を記して、株人雅伯に謝する辭に代ふ。

世には芦垣の間ちかき軒をならべてだに、心あはぬどちは音づれもせぬならひなるを、遠き陸奥の見もしらぬもとより、一句を添てかの地の産なるよし、さゝやかなる硯を贈り給りぬ。あやし、しのぶ文字摺たれならん、我ならなくに人たがへもやと、その便せし風水翁にとへば、その國に名たゝる騷客島庵主の何がしとや。かの翁のたび寐に、いかなる序か我名もらし給へるより、そは俳門の友なりとて寄せ給へりとぞ。されば我及ばぬ此道に心入れてより、蕉門の人としきけば、皆十年の舊相知のごとく思へるが、さては我ならでもかゝる心のならひにやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠の荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

ためしなき雁に重荷やすゞり石

いでや、このなさけのかきけつまじくば、松の烟の黒からむよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅のちぎりもたへざれとぞ。

朱硯にまづ手染せむ窓の蔦

そもや芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引ざる國ゝもなきが中に、奥羽は行脚のはじめにて、奥の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に殘れば、ことにゆかしきくまぐも多し。さるを仕官にほだされて、雄嶌の笘やまたも來てみんと、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず、千ひろの海も淺からむ。されば能因の一首を思ひて、一句はその人にゆかしさを告るならし。

しら川や夢にこす夜も秋の風

**一色亭記** 豆州熱海に寓居の時、渡邊彥左衛門といふものゝ求によりて記す。

沂に浴し詠じてかへらむとねがひし爾生の空にはあらで、秋もわた入の羽おりきる比、此あたみの湯本に一月ばかりのやどりする事あり。さるは我國君の母公にしたがひまいらせて、身のためならぬ旅寐ながら、舊痾幸の折を得て、疝氣の腰を温泉に浴し、浮世の耳を澗水に洗ふ。されば此里の地理、うしろに山かこみ、海はもとより波

こゝもとによせて、月の寐覺に枕を支ふれば、鹿の妻乞巴峡の猿にまさり、雨のつれ〴〵に盃をとれば、鰹の刺身、松江の鱸に班す。伊豆の於山・まな鶴が崎・久かたの日かね山・朝もよひ紀僧正の宮、眺て吟魂をなぐさめ、歩して旧迹をたづぬ。沖の小島は朝夕にみればこそあれ、大島はやゝ波路へだゝり、雲晴てあらはれ、霧わたりてかくすも、げにくまなきをのみ見るものかはと、えならぬ眺望いひ盡すべからず。しかれば家ごとに東面をひらき、湯入の客の目をよろこばすが中に、渡邊氏某が亭にぞ、わきてたよりよき樓はかまえり。むかし佐文山こゝに來けるついで、三字の額に筆をぬらせしより一色亭の名によべるは、滕王閣の趣なりとや。落霞孤鶩と齊しく飛び、その長天と共なる海づらの秋も、今にして浦のみるめ、軒端にさはるかたなく、心あるあまの庇のわざと荒してとよみけむには事かはりて、家居もことにつき〴〵しければ、たちよる人もこゝをせに、先やどりとる事にぞ有ける。

心ありて荒さぬ軒に浦の月

乞食畫賛

もとより小町が身の果にもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず、君よく是を忘れずば、厨に肥肉を遠ざけて仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よくこれを忘れずば、つねに飽温の恩澤を省て、報國の志もいかでかこゝに起らざらむ。とかく治世の明くれとても、これを見かれをおもひしらば、花に一盃の望は足りやすく、雪に饘汁の嗟やむべきをや。あはれ世の人心、鐘の日のうへにのみつきこし、猿の手の及ばぬかたにのばすらんを、あが佛を香華にまほりて、その黄金の膚の美なよりは、たゞよしこれを起居に詠て、薦一枚を忘れざらむにはと、みづから坐右に書賛す。

十六夜賦

いざよひの月みむと、勢田浦に舟よそひするに、何がしがあるじまうけして、世帯道具もとほしからず。百日細鱗もまないたにひるがへれば、斗酒はもとより坡翁が妻の才覺もからず。海老煮る間も濤はなれて、くまなき月の海づらにのぼれば、こよひの星崎の千鳥も月みよとは啼ならん。いでや其翁も湖水にけふのかげをめでゝ、成秀が門敲給ひしとか。むかしかゞみの山こそなけれ、呼續の濱・松風の里、波のみるめもまよふばかり、西湖・江湖

の秋風も、今宵はこゝに吹ざらむやと、酒にゝぎはし茶にさばして、やゝ清興を高ぶれば、まして鳴海浮・夜寒・寐覺の里の名に哥よむ人は、衣かたしき物思ひがほなるを、いざや宮こんにやくの寂しみこそと、例の唐がらしのいらひどきに、戀ならぬ袂をぬらして、又一盃をあらたむれば、白鳥山の鐘の聲、おどろくばかりにぞ更わたりける。

呼つぎの名にいざよひの月見かな

## 螻翁傳

螻といふ虫は、よく飛べども家を過る事あたはず、よく（原註 穀）のぼれども木を窮る事あたはず、よく（原註 游）およげども谷を渡る事あたはず、よく穴ほれども掩ふ事あたはず、よく走れども人を免るゝ事あたはず。是をかれが五能ありて、一ツをもなさずとはいへりとぞ。こゝに翁あり、詩つくれども詩ならず、哥よめども哥に似ず、物かけどもよからず、繪かけどもつたなく、俳諧すれども下手なり。我かの虫におとらめやとて、みづから螻翁とぞ名のりける。やゝ老にたり、今はかゝる身のほどをしりて、他にほめられむ事をねがはず、人の謗をいとはず。さらば何に歟ち腹たてゝ、かのつぐみといふ鳥にはよろこばるべき。よし、たゞかれは腹たつべくとも、我は笑はむと思へるなりけり。

## 三日月窶記 應二六曾根成就院需一

そもや故人の手にならせし調度、筆にのこせる跡は、もとよりめでたきかたみなれど、世に露霜をきかはれば、あるはうせ、あるはそこねて、にせかまことかのうたがひもむづかし。只よし人のことのはばかりこそ、代ゝにむしはまぬたからとはいふべけれ。されば翁も一生の吟、いづくはあれど此府下にしては、何がし院のかへるさにとさして、其寺のまぎれざるは、たゞ爰に此一句のみならん。猶その詠し物の上にいはゞ、かの武隈の松も跡なく、井出の欵冬・六浦のもみぢも今はむなしき名ばかりなるを、たうとくも此寺にいにしへの月そのまゝに有て、眺望もまた世にこえたれば、昔をしたひ道しのぶ人の、たれかはこゝに來てあふがざるべき。さるを五條房のぬし、朽せぬ印をたて、院主また堂に名づけて此句の光いやましにかゝげしより、雲上の鴈も水底の魚も、弓と驚かず、鉤とうたがはず。まして舟とも黛とも、一度

たとへて二度目は古ければ、たゞ三日月の三日月なるそのかげは世ゝにかはらずして、いつも此寺に隈なからむとぞ。

猿の手に摩つともつきじ三日の月

## 翁像賛

道は古池の吟にひらけつ、　吟は枯野の夢におはりぬ。檜の木は月の笠ならねども、影を風雅の世にあふぐらむ。

## 音曲說

今樣・朗詠といへる、むかしは遊びの最上にてや有けむ。かの催馬樂なといふものは、我つゐにきける事もなし。たま〳〵幸若が家に、舞といふ事のかすかにのこれるもめづらしとて、一度は人の聞もすべし、二度と聞べしとも覺へず。いまは謠といふもの、上中のもてあそびとなりて、はなはだ下ゝは至らず、法制そなはり、老若のさかひなく、古今に變なし。されば是を玩ぶは人品よろしきかたにさだまりて、たとへ商人のよきゝぬ着たらんほどのきはゝ、高砂・東北をもしらぬは、玉ならでも盃の底なき心地ぞする。世にさるべき饗應の席へはその職なる人めし出されて、小袖と上下の紋は定らねども、時ならぬ足袋はきたるは、ひとさしも心得たるならべし。一座のさし合、折からの文句には心づかひして、いかで盃の間をぬかさじと眼を配りたるなど、扇は膝の上に斜なり。あるは亂酒の打やはらぎて、やごとなきかたよりも上調子に聲打いで給へるに、やがて一座聲をあはせて、中にも手鼓の心得たるなど、蟬のごとく蛙に似たり。かゝる中にたま〳〵その道心得ぬ人は、灸物にせゝり箸してうちそむきたるは口おしとや思ふらむ。しかるにはれがましき舞臺の面に、兩兒に足拍子ふんで、辯財天とはわが事なりとは、まことに仁躰にも似あはず、あまりなる事と思へば、すこしかたはらいたくおぼゆる折もありけり。されば世うつり、人の耳も心もたゞ向上にはしりて、淨るりといふものは洒落のはじまりにてやありけん。夫だに五十年のむかしは、さてもそのゝち弓とり一人おはしましてと、一部を發端に名のり、みだい・姫君の道行もたゞこゝに哀をとゞめしに、今世は年ゝ月ゝに新奇をあらそひ、義理に虛實の入組て、二重どきの謎よりはむづかしく、不飲込なる老人の耳には、善も惡もおぼろ〳〵として、三段目の愁には、あたりの顏を詠わたしてたゞ泣

より外の事ぞなき、児をもてあそぶ人の、外の音曲とはふりかはりて、本ッひかへたるは上手めき、そらにかたるは心おとりぞする。日待庚申にもつぱらにして、燭臺の陰に衣紋かきつくろひ、翠簾あるかたを側目にかけて、こはづくりたるよそほひ、やゝ三重の間に息つきて、けしきばかり汗のごひ、湯をのみたる様よかりけりなど、人のつきじろひたるけはひ、世にある思ひ出かくこそなど、若きはうらやむ心もあらむに、よく其人の上をきけば、多くは兄に見かぎられ、親の勘當も少からず、養子縁組の相談には少さゝはるかたも有ぬべし。きはめて工商の間にありて、年も三十ばかりまでのわざなるべし。哥とはすべたる名目なるべけれど、今をのづから筋わかれて、其品また貴賤の異なるあり。古今も一様ならず。琴の組などは上代のまゝにて不易の眞なり。今三線にあやどるたぐひは、流行しばらくもとゞまらず、文句も百端に、音節さだまりなし。本調子は、たとへば女のさげ髪にうちかけしたるごとく、二上りは髪當流にとりあげ、姿もひとつまへにみだれたり。三下りはしづまりたるに似たれど、かくし化粧にしごき帯したるよそほひ、物思ふ人はこゝに涙をも落して、中ゝ淫奔の媒とはなりぬべし。すこしも品あがりたる人は、耳にこれをなぐさめども、みづから口には弄しがたし。やゝさだ過たる身の上には、猶にげなくてうたふべくもあらず。かの牛の角を敲きて田のあぜ(原註)畔にうたひ、あじか(原註)簣荷ひの一トふしは、今も月夜の門過がてには、さるたぐひもあるべきか。鋏を弾じてうたひしなどは、おとなげなくもなかりしにや。いさもろこしの事はしらぬ風俗なり。たゞ糸によるものならなくに、賤の男・賤の女のうへにこそ、哥はすてがたき哀ぞ多かる。舟哥はめでたく祝ひていさましき物から、漁歌の棹哥のと古人のいへるは、波間・芦間のさびしさにて、是にてはあらざるべし。山更に幽なるに樵の哥のきこへたるは、伐木の丁ゝたるよりもまさり、あけ野が原にすみれ咲て、比丘尼うたのなめげなるより、さよの中山夜ふかき霧わけて、馬かたの欠まじりにうち出たる一トふしぞ、楚客の魂たゞこゝにくだけぬべし。田うへ哥・麥哥・臼挽うた・水汲うた、いさゝか折ゝにたがひありて所ゝに品ことなり。いづれか哀ならざるべき。和哥にはさして稱せざれども、詩客・俳人多くはこれに情を託せり。

平家といふもの有て、まづは琵琶法師の家にのみ傳れども、はやりうたのはなやかなるにも似ず、せつきやうの哀なるにも似ず、舞のすたれたるにも似ず、淨るりのあらたなるにも似ず、すかぬ人は甚すかず、すく人はことにすけり。我に友あり。其人のいへる、稍老になん〳〵として、かの音曲の品〻、一ツも身の上に唱がたし。されば此平家は、こと〳〵く信ずべからねども、和朝の記錄にして、懐旧覽古の情ふかく、謠のねからつくり事なるにはまされり。老ては人のまじはりうとく、獨居がちにかきこもりたらむには、是こそ三の友の一ッにはたりぬべけれとて、かの無絃にあらぬ一面の琵琶を抱いて、雨の日・月の夜、官務の隙に搔ならせば、人はたゞ平家を習ふとや見るらん。我はひそかに老隠の稽古をするなりといへり。さればかの琵琶も母かたの祖父よりつたへたれば、たゆまじき糸筋なめり。撥面に三日ばかりの月さし出て、桐の一葉の散たれば、新京とはよぶ事とぞ。これにさびしからむ句ひとつとこふまゝに、

膝瘦て琵琶のなづきや秋の暮

## 知雨亭記

市中はなはだ遠からねば、枕頭に鐘をかけて酒を賖る足を勞せず、市中また近からねば、窓底に机を支へて夢を求る耳靜なり。こゝに少の地を求めて、聊膝を容るの幽居をいとなむ。よしかの鬼はわらひもすらん、我世のあらましたがふまじくば、花とならびの岡ならずも、有とだにしられてぞ老の春をも過さばやと、人しれず思へるなりけり。かの山雀の身のほど隠して、門壁たゞ風をふせぎ、三徑わづかに草を拂ふ。こゝに汲べき山の井なければ、井戸ひとつこそ過分のたくはへなれ。あたりは夕がほの小家がちなれば、枕に鶏の曉を告げ、夜はとがむる犬も聲して、ひたすらとをきほどにもあらず。門を出て東北の方しばらく十歩の杖を曳けば、指頭万畳の山横おれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高くらの森高く、鳴海の浦風も通へばや、勢田浮も名のみして、夏は夏しらぬ日も多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも絶りて、衣うつ聲・虫の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。年くれ年かへり、垣ねの梅は遲からねども、万歳・鳥追などいふものゝ、うき世の春には一日二日も立おくれたるなど、さすがに片里めきた

り。されば名付て知雨亭とよぶ事、かの蘇氏が喜雨にも習らはず、何がし黄門のしぐれをも追はず、只これ穴居に似たればなり。やゝ多病の老にともなひ、しげきことはざに物ぐさなるには、あはれ思ひし儘なるをと、我は心ゆきて覺ゆるを、こゝもまた府城の辰巳なれば、世をうぢ山と人はいふらんかも。

## 百魚譜

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口にをける、をのがさまぐ\なる物ずきはあれども、此魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。糸かけて臺に居たる男ぶりさへ、外に似るべくもなし。しかるをもろこしには、いかにしてかことに賞翫の沙汰も聞へず、是に乘ける仙人もなし。されば夷三郎殿も他の棄武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さは是を料理せんと學びたる人は、むかし愚なる名をもこそとゞめたる。

龍門瀧にのぼらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。かれはいかなる幸にかあらむ。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品々なるにはにるべくもなし。乾物・炙物にせず、鱠・すまし（原註）清汁によろしからず・ずし蒲鉾に用ひがたく、塩にも鮨にも調ぜず、只さし身・あつ物にとゞまるは、多能を耻といひけんを、中々ほまれと思へるにや。昔平家に悪七兵衛景清と名乘て、今民間には泣子をも威すべく、朝比奈・辨慶に肩をならべんとす。しかるに記錄の上にしては、しころ（原註）錣曳の外はさせる働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛もおなじつらなる侍なり。いかに世に名のことぐ\しきぞと、ある人評したるものあり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名産、我朝にも品くだらず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船中に得て官路に進む。進退いづれをかうらやむべき。

鮒は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉をかざしたれど、鱠は春の賞翫となれり。

鰤は節饗の比もてはやされ、梅咲ころを世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮のはに登るは、後生善處の契もたのもし。

鰹は芥子鮓の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、

鎌倉の海の素性が兼好にいひさがされたる、いと口おし。鰹節となりては木の端のやふにも思はれず、その梢とも見へずして、花の名をさへ世にちらしぬる。

鮟鱇の唐めきて子細らしきに、つるし切とはいぶせくして、桀紂が料理めきたり。かれは本汁にゑらまれ、鱈はかならず二の汁の大將にて、搦手をぞうけ給りぬ。

もしは文字の理屈によらば、紫の上には鰆（サハラ）をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鰍をやめさせ給ひけん。

鮭は越路に名ありて其國の雪にも似ず、色は入日 雲を染て、うるはしく照たるこそいみじけれ。たま〳〵鱒といふものも、その色はまけじとやいどむらんを。

狹夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非情となり、これは非情の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅・櫻は千枝万葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものゝ世にもてはやさるゝは、かの鯛・鱸の大魚に比すれば、今いふ梅・櫻の類と等し。しかるに國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊とも、しろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出て、いなとよ世にしら猫とも、しら鼠ともいふにこそとうちこまれて、爰に物定の博士しばらく默然たり。

鯈は鵜川の篝火に責られ、鯰は濁江の瓢箪におさへらる。比目魚は黒・白に裏・表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。脊にもたまらぬゑい（原註 鱝）の骨は、何の爲に持たるや。それも海月のなきにはまされるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入てとらるゝこそ愚なれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傚ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果かな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、產屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものゝ、（原註 銀）かね持ともいはゞ、世にいかばかりもてなされむを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。

鱚・さより（原註 細魚）は、をさなき心地ぞする。大男の長口そらしてくふべきとも覺へず。

鯊はたゞ釣る比の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、

木曾に便よき人は、まだき新蕎麥喰たりなどほのめかされて、うらやましき比ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐がらしくはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰らんとさへ覺束なし。

鰒とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、あやしき毒をもたりけむ。その味ひと毒の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鰯といふものゝ味ひことにすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故にいやしまる。たとへ骸は田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。其功、鰐・鯨も及ぶべからず。

されば哥人は鳥虫に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼て魚を品題とするは、もつぱら味ひの賞翫を捨ざる故なり。しかれば哥よみは耳目の愛にとゞまりて、食は野卑なりとてとらざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつぱらによみて、菜の花のうつくしきを哥の沙汰に及ばぬは、喰れぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人のいひたる、さがなき詞ながらおかしかりけり。

## 案山子辭

もるとせしおくてのいな葉刈はてゝ、山田の畔にひとりたてるかゝしあり。むれわたるいな雀の落穗ひろひけるが、例の口さがなくてわらひけるは、養由は百歩に柳のはをはづさず、義家は鳴弦を雲のうへにひゞかせ、頼政は鵺を射る。その外武將・名士の弓箭に功ある、みなその藝を發して世に名をふるへり。なんぞや、あやしの竹に綱はりて、射る事しらぬ弓の形をいつはり、我輩をあざむかんとするや。案山子これにこたへていふ。ひかぬ弓放さぬ矢にて射る時は中らずしかもはづれざりけり、とよみける哥の心をしらずや。その奥州の鳴弦も、矢は放さずして德をあらはせり。麟は角をそなへたれども、肉ありて物をやぶらず。むかし忠盛の闇討も、木太刀に身の難をのがれてこそ、かしこしと人にはほめられつれ。しゐて物をやぶりそこなひて後その功をなさむとするは、愚將のなす所なり。いでやかの鵬といふ鳥を聞けるや。九万里に羽うつて翼垂天の雲のごとし。おどりはねて穗ひろふ汝らが、よくその心をしる所にあらず。いかで我を

みゝづくに類して、みだりに笑はんとするや。雀なをも口ゝにいふ。さればその大鵬の雲に羽うつは、莊子の例の大嘘にして、斥鷃のよもぎふに飛ぶは、今見る所の實なり。たゞその實を以ていはむ。世に鶴といへるものだに、千とせの齡はことぶかるれども、今は是を取て大饗に居られ、羽は矢にはがれ、殼は黒やきにして、何かれの藥とて爭ひ求めらる。鷹はこれらをも組敷て、其功上に出るに似たれども、その藝のすぐれたる故に、朝三暮四の餌をあてがはれ、足をつながれ、架にほだされて、雲をこふの愁をまぬかれず。しかじ、世中の人には葛の松原に一枝のねぐら求て、淺茅が露にかくれやすからむには。そもや汝が身にあきはてゝ、稻くき已に霜寒し。などや五湖に棹さして、簑笠の塵をはらはざるや。他をそしり我をしらざるは、共にいふべからず。昔うぐひすは哥をよみたれども、それは花に啼ぬめりなりとて、

捨時をしらぬ案山子の弓矢かな

と囀りて去らむとす。案山子猶よびとゞめて、汝かしこきに似て又わが心をしらず。そも笠を謗るや簑をこしるや。其句の返しにはあらず、たゞ此哥をきけとてよみける。

是は笠これは蓑とてのけたれば
　あとには何かゝしなるらむ

## 糸瓜辭

むくつけきふくべも、ひさごといへば、伏猪のやさしみあり。花はましてタがほの人めきてよそほへるを、此ものゝへつらはず、うき世をへちまと名のりけるより、源氏の御目もとゞまらず。まして哥よみは此名にもてあつかひて、こちの料理にはつかはれずとて、ほからかし捨たるを、やがて俳諧師のひろひとりて、已が垣ねには這せたるなり。その味ひの美ならねば、鴉もぬすまず蟻もせゝらず、鉢坊主もみかへらねば、隣の人をもうたがはず。

草刈のそしるをきけば糸瓜かな

猶又いみじき痰氣の藥なりとて、ことに此翁の愛するにぞありける。むかし水の流に光さして、楊柳觀音のあり所はしられ、栗栖野の柑子には、きたなきあるじの心をさへしられつ。白壁のらく書には、醫者の家なる事もしらるべし。されば色をも香をもしらざればしらず、しる人はしりぬるかし。

垣にへちまさてはあるじも痰氣持

## 百蟲譜

てふの花に飛びかひたる、やさしきものゝかぎりなるべし。それも啼音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢も此物には託しけめ。只とんぼうのみこそ、かれにはやゝ並ぶらめど、糸につながれ黐にさゝれて、童のもてあそびとなるだにくるしきを、あほうの鼻毛につながるゝとは、いと口おしき謗かな。美人の眉にたとへたる蛾といふ虫もあるものを。子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我子となす、老の行衛をかゝらんとにもあらず。何を譲むとてかくはほね折るや。我に似よ〳〵とは、いかにその身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂するとは詩人の稱にして、哥にはさしもよまず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる藥師堂に大きなる巣作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人にはにくまれじを。

蛙は古今の序にかゝれてより、哥よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも謗がたし。

蟬はたゞ五月晴に聞そめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに啼さかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蟬とも初かはづともいふ事をきかず。此物ばかり初せみといはるゝこそ、大きなる手がらなれ。やがて死ぬけしきは見えずと、此ものゝ上は翁の一句に盡たりといふべし。

ほたるはたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ草にすだく。五月の闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代にせられたるは、此ものゝ本意にはあらざるべし。哥に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過て、夕は草に露をく比ならん。つく〳〵ほうしといふせみは、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の謗にいへりけり。哀は蜀魄の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待くれの哥によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、

ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いとおそろし。さはいへ廃宅の荒たる軒に蟬の羽などかけ捨たるは、いさゝかあはれそふ折もあらんか。かれはかひ〴〵しく巣つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘とはいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものにたとへ、毛虫はむづかしき親仁の号とす。脊むし・吝むしは名のみして虫ならず。油むしといふは虫にありてにくまれず、人にありてきらはる。

蠶の生涯は世の為に終り、火とりむしはたがために身をこがすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふむしはふ物ずきの誹となれり。さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉むしはやさしく、こがね虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求てやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛るゝ蚤はたま〴〵にして、猿の手にさぐらるゝ虱は、のがるゝ事かたかるべし。虱を千手観音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるに梶原が異名なりや、げぢ〳〵が異名なりや、先後今はしりがたし。

蝸牛は只水に有べきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん。家は持たれどもゆく先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくてもあるくべくは、蜈蚣・をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩たるも、斧を持たるほこりより、その心いかつなり。人のうへにも此たぐひはあるべし。

蟹のあゆみにたとふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を、駕にのりて富士を詠ゆく人には似たり。

促織・鈴虫・くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松むしの、その木にもよらで、いかでかく名を付たるならん。毛生ひむくつけき虫にも同じ名有て、松を枯し人にうとまる。一ト在所にふたりの八兵衛ありて、ひと

りは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松むしのたぐひなるべし。

きり〴〵すのつゞりさせとは、人のために夜寒をおしへ、藻にすむ虫は我からと、只身の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼は、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみこひて、などか母をしたはざるらん。

蚊はにくむべき限ながら、さすが卯月の比端居めづらしき夕べ、はじめてほのかにきゝたらむ、又は長月の比ちからなくのこりたるは、さびしきかたもあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やり焼里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團の隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて銭箱をまとひ、花に愛着せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花にくるひ月にうかれて、更行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに音を啼らんこそ哀なるべけれ。

この續篇は、也有翁享保のすゑより寶暦のはじめの比までの遺稿をもて抄出す。

末孫　六林

# うづら衣　後編　上

## 歎老辭

芭蕉翁は五十一にて世をさり給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も五十二にて一期を終り、見過しにけり末二年の辭世を殘せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへこして、今年は五十三の秋も立ぬ。爲頼の中納言の若き人ゝの逃かくれければ、いづくにか身をばよせましとよみて歎かれけんも、やゝ思ひしる身とはなれりけり。さればうき世に立交らんとすれば、なきが多くもなりゆきて、松も昔の友にはあらず。たま〳〵一座につらなりて、若き人ゝにもいやがられじと、心かろくうちふるまへども、耳うとくなれば咄も聞違ひ、たとへ聞ゆるさゝやきも、當時のはやり詞をしらねば、それは何事何ゆへぞと、根問葉問をむづかしがりて、枕相撲も拳酒も、さはぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只一人火燵蒲團の島守となりて、おむかひがまいりましたと、とはぬに告る人にも、忝しと禮はいへども、何のかたじけなき事かあらむ。六十の

鬚を墨にそめて北國の軍に向ひ、五十の顏におしろいして三ケの津の舞臺にまじはるも、いづれか老を歎かずやある。哥も淨るりもおとし咄も、昔は今のにまさりしものをと、老人ごとに覺えたるは、をのが心の愚なり。物は次第に面白けれども、今のはわれが面白からぬにて、昔は我が面白かりしなり。しかれば人にもうとまれず、我も心のたのしむべき身のをき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老を忘れざれば、しばらくも心たのしまず。わが身の老を忘るれば、例の人にはいやがられて、あるはにげなき酒色の上にあやまちをも取出てん。されば老はわするべし。又老は忘るべからず。二つの境まことに得がたしや。今もし蓬萊の店をさがさんに、不老の藥はうり切たり、不死の藥ばかりありといはゞ、たとへ一錢に十袋うるとも、不老をはなれて何かせん。不死はなくとも不老あらば、十日なりとも足ぬべし。神仙不死何事をかなす。たゞ秋風に向て感慨多からむと、薊子訓をそしりしもさる事ぞかし。ねがはくば人はよきほどのしまひあらばや。兼好がいひし四十たらずの物ずきは、なべてのうへには早過たり。かの稀なりといひし七十まではいかゞあるべき。こゝにいさゝかわが物ずきをいはゞ、あたり隣の耳にやかゝらん。とても願のとゞくまじきには、不用の長談議、いはぬはいふにまさらんをと、此論こゝに筆を拭ぬ。

## 四藝賦

琴棊書畫は異國の沙汰なるべく、こゝにあはぬ評ながら、しばらく名をかりて論ぜむに、琴はことさら品の異なるやらむ。かしこにはもつばら隱者・閑人のもてあそびにして、十三絃だに所せきに、二十五絃のいそがしきも、いかなる嶺の松風にやかよひけん。さるも無絃の琴を撫て意ありとたのしみけんは、こゝにも上戸の樽のせんを鼻で月みたる咄には似たりけり。碁にすける人ほどうやましきはなし。さしむかひたる内の無念想なる、仕は金門に腰を折しけさのつかれを忘るれど、貧僧はあすの米櫃のあてなき事を思はず。夏は入日の西に迫りて膝の上までさし入れども、たゞ地を造りはま卷盡してぞ、始て蚊の口のかゆさを覺へ、菓子盆に蟻の付たるを驚く。冬は(原註、淸涕)みづばなの露落て無常を死石の上に觀じ、火燵蒲團に吹物はいつの間にかはこぼれけん。たゞかの蟬といふもの

ゝ、をのれなく音にのみ心を入れ、それをねらふものはうしろに鳥の窺ふをしらぬに似たり。その螳螂の斧朽て、七世の孫にあひし時、久しき年月の別ながら、咄すべき事のひとつもなかりけんは、大きなる損といふべし。我もとより不機根にて、此樂をしらざるはふかき恨なり。

さて手跡のつたなからぬは、ことにあらまほしきわざなり。夫も上品の人は詩哥・文章にのみ筆を染め、書翰もいやしからぬ文躰に、万世の後も名はとゞむべし。品下りたる人は日用の事ゞにも用ゆれば、或は文庫の覺書に何匁何分何厘、此錢何百何十文と定家(原註、様)やふの筆法もいとロおしく、又は此墓利分ばかりに御了簡偏に頼み奉ると、文徴明が跡をのこすもにげなきわざにして、心の外なる事ながら、世わたるならひいかゞはせむ。悪筆丘衞が出るまゝ口に、手は只よめ安きこそ要なるべけれ、たとへ能筆が書たりとて、一字が二字の用もせず、といひたるは、ことはりに似て無下に覺しか。そも又書ばかり位の品ゝなるはなし。能書のうへはさらにもいはず、鳥羽繪の男は痩てさびしく、大津繪の若衆は肥て哀なり。うき世繪は又平に始り、菱川に定り、今西川に盡たるといふべし。族龍屋の屏風には、(原註、罌粟)けしか牡丹かしれぬ花咲て、人より大きなる雉の、屋のむねにとまりたるこそ目さむるわざなれ。又は藪寺のふすまには、遠水に波高く、遠人の目鼻あざやかに、帆かけ舟に乗て跡へ走る、これらも繪にあらずとはいはざるべし。俳諧師の繪は上手下手の沙汰なしとて、翁も跡をのこし給へば、我も我流の筆ぬらしそめて、破れ鍋の畫賛をかけば、綴蓋の望みてありて、こゝかしこにちりぼふ。あはれ恥しらぬわざながら、はゞからず書ちらすはよしと、吉田の法師を無理なる荷擔人にして、此年比硯の海にも遊ぶ事にぞありける。

## 隱居辨

箕山の月は高うして望べからず、五湖の水も深うして窺がたし。填は巷陌に隣れども、大隱の市にもへだゝり、巷は黄稻の陰にまじはれども、小隱の陵藪よりも淺し。されば昔の隱者を思ふに、徳ある人の世にしたふをむづかしがり、仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をもかへ、かたちをも忍びけめ。徳もなく仇もなき人の、たとへ四條・五條に金の看板を出したりとも、問べきよしの人こそとはめ、さもなき人は見むきもせざらむ。おさな遊びの

かくれんぼも、守る鬼のあればこそあれ。さるをうき世にかくれ顔なるぞ、中〱はづかしき心地ぞする。いでや世に隱居の二字今からむと、みそかにちかき有明の月さしこめて、門は葎に閉させ、かりにも人にあはじ〲とひそまりたらむ。さは見事なる隱居ぶりかな。是を社見ならへと、出すりこ木なる隱居をはぢしめて、人もよしとはほむるならむ。それは後世にもかたぶきたる人の、あが佛をこらへ力にして、たま〱たへてもとげぬべし。さもなくて命つれなき人は、朝ね・晝寢の(原註閑)しづかづくしにも飽けば、次第にさびしくくらし侘て、かれはかくいふゆかりあり、これは久しき友なればと、おとづれかはすほどに、野中の清水にことよせて、そろ〱昔をとりかへし、始には似ぬ人もあるべし。花山の上皇もかゝるうき名には立せ給ひたりとか。さるは北山の神靈にもいかられ、俗の諺にはよりがもどけたともいふなりけり。されば物の始にぞ、ゆく末はよく思ひはかるべき事にこそ。そもや我身の上をいはゞ、かしこき陰を賴奉り、官路に立しも久しけれど、もとより毒にも藥にもならねば、人にあかれし身とも覺えず、雨露のめぐみ深くして、すなをなる國に鬼もなければ、世に人に我もあかず。只病になやまされ、今は弓も引がたく、馬にも乘がたく、さてもものゝふの名にかずまへられんは、南郭が竽を吹けん此身のうへのはづかしければ、老と病を一荷にして、うき世の關はのがれ出たるなり。しかれば誰をおそれ何を耻て、さのみは逃もかくれもすべき。さりとて又貴顯の門松をくゞり、桃に菖蒲に袖ふりはへて、こゝの嫁入かしこの法事にもつらならんは、いと見ぐるしう、官事をさへ辭したれば、いかでかは。こゝにうき世の店をしまへば、まことはたゞ遁世者とこそいふべけれ。さるを押付て隱居ゝゝとは、いたみ入たる名目ながら、是非なき世の通稱となりて、行灯・挑灯の取ちがへも多勢に無勢叶はねば、益なき事はあらためぬをよしとこそ。過し比いづくの程にか、市中の門柱に隱居某と書ける家札をみて、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、隱居したる悦とて、したしき限はいふに及ばず、うとき人ゝにまでとはれて、門前しばらく市めけば、きのふのうき世よりやかましく、それ又謝せずば有べからずとて、家を尋ね門たゝかせて、物たうに人を驚かし、

隱居の禮にいそがしきは、おかしかりける世のさまかな。
やいとげに食傷して煩ふ人のたぐひなるべし。

四角なる浮世の蚊屋はしまひけり

## 剃髮辨

すべて天地の間その理ありて姿あるべく、すがたありて後名はあるべし。いでや世をのがれてうき世の名をあらためんには、その姿まづあらざらむや。今やさかやきの世間をやめては、神儒の束髮にや似せん、釋氏の剃髮にやならはんと、模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕上なれば、一大事の分別にはありけり。さるも心にまなぶ事なく、かの三教のよしあしもわかたねば、只あけくれの自由を思ふに、かれは夏あつくこれは冬寒し。げに楊州の鶴はあたまにだになかりけり。これを吉田の法師にとへば、冬はいかなる所にもすまる。あつき比わるき住居はたへがたしとぞ。是こそ此爲の師なりけれ、誠に頭巾といふものあらざらむや、手水・行水にさはるものなく、襟に垢しみず枕に油つかざらむは、心も共に淸かるべし。夏をむねとこそと思ひ定て、つるに剃にはきはまりぬ。されば遍昭がよみけんたらちねも、今は世におはさねども、官路の險難をしのぎ盡し、功こそならね、名こそとげね、ほまれなきは耻なきにかへて、今此老の身しりぞき、浮世の塵を剃すつべきは、いかでうれしとおぼさゞらんや、かゝれとてこそ撫給ひけめと、こゝにうたがふ心もなし。されども儒者の顏付をうかゞへば、あまり機嫌のよからぬは、父母の遺體をとの咎めなるべし。さるは一朝の怒に喧嘩を起し、一世の契に心中をくはだて、我とわが身を愛せざる無分別をするなどの道理にさとす敎なるべし。それを理屈の十露盤にかけて、分厘までをはじき詰れば、爪も剪がたく髭もぬきがたく、鼻毛も蜻蛉のうき名をつなぎて、かへつて親をもはづかしめぬべし。その上わが双親世にましませし時、老後は共に剃髮の望もおはせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれをしる故に、かつはかの遺體を以て寸志を繼ともいはゞいふべし。そもまた釋門に此姿の始る事、深き心はいさしらねども、先はうき世のかざりともなれば、これも煩惱の端ごと拂ひすてゝ、もつぱら色のふせぎにもやあらむ。されども今は醫者も連哥師も剃こぼして、妻帶はあたまにしもよ

らず。まして妻こもれる武藏野の八百町には、四部の御弟子の比丘尼をあつめて、比丘ゝ優婆塞も入交れば、頭巾は紫の色ならねど吉原の柴をも望んとす。しかれば傳もあたまばかりの日利にて、御菓子饅には書のせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば入道ともいひがたく、人を教ねば法師にもあらず。禪門でもなし、坊主にてもなし。さはいへ世のならひにて字義にはかゝはらず。湯茶ばかりを沸せども、その名は藥罐とよばれ、藥ばかりに用るも、茶碗は茶わんの名をのがれず。されば容のおなじき故に、妖物の見こしも、もた書のへヤムシも、蛸も、入道の号あれば、我を坊主とも法師とも、よばゞよぶ人に隨べし。

剃てこそ月にまことの影法師

## 自名づく說

遁世の姿すでに定りぬ。さてはうき世の名にもあらじ。さるべき二字にあらためばやと、名を思ひ字をえらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義をとらむも、跡のまつりとやいふべからむ。よし又四書古文の拔書も、あまねく人の取盡し、まして歸去來のことばなど、あらゆる隱者のむしり取て、骨ばかりに喰ちらしたる。さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問聞む人の、とみに心得ぬ顏の口おしく、ほね折の詮なき心地すれば、これは其書のたが言なりなど、一人〳〵に講釋せんは、いとむづかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨蓮にても有べからず。されば世の人のうへをみるに、金藏といふも貧に責られ、万吉も不幸はのがれず。玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はその人によらぬものかも。よしさらばたゞ調市・走女(ハシタ)も覺よく、瘢も娘もかきやすからむをと、此日人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ幕木とは書はじめける。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此語によるならむと、蛇に足をそへ、揭小木に耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又おかしかりぬべし。

へちまとはへちまに似たで糸瓜哉

### 鍾馗畫讃

豆をうたぬ家もなし　いづこに鬼をたづぬらん
素人畫の幟にかゝれて　あやめふく軒にひらめく

疫神除の板に押れて　ひいらぎの門をまもる

其劍と摺小木と　つゐにいまだ鞘を見ず

## 雪請序

ことし前津の里に世をのがれて、秋の月は心ゆくばかり詠すごしぬ。山野の眺望くまなきには、雪のけしきのことによからむと、我も思ひ人もおもへるにや、雪の朝は必とひ來んといひし人〻もあれども、その日の火燵のはなれがたくば、林下なんぞかつて一人を見むといひし詩のたぐひならむと、かねてまたるゝ思ひもなし。木の葉もしぐれもふり盡して、霜ふり月の半すぐれども、けしきばかりにのみうち散て、蓑笠に見むまでの雪は猶つれなし。されば昔より雨を請ふためしはありて、神泉苑の四ケ度の祈は、貴僧・高僧の法力をあらそひ、小町が哥は兒女の諺にのみつたへて、あめが下の理屈にとがめ、能因の天河は古書にもしるして、そのことさだかなり。雨は五穀の爲ながら、雪も豐年の瑞とこそきけ。そもや雨を降らす神あらば、雪ふらす神などかなからむ。哥に感應あらば俳諧にも感なからむや。いでやおほけなくも鳥羽院のおさなくおはして、ふれ〳〵粉雪の御いのりをためしにたのみ奉り、名におふ富士のいたゞきも一望の内にあれば、半掃菴に雪乞をせばや、年比の俳諧もか樣の時の爲にこそあれ、かた〴〵も力をそへて給はりゆへと、ことには不老庵の老和尚を先達として、好事の連衆をかたらひ、丹誠を抽で一夜火燵の壇をかざり、雪請の一卷をぞ催しける。

雪の願ひ水にはなしそ夕あらし

## 臍說

世を捨たる法師の、物くるゝ人をよき友にかぞへたるは、にげなき心地するに、げに思へば其庵に一鉢のまうけも暖氣にさへられ、あつものゝ菜も冬かれては、物くるゝ友のことにうれしき日もありけるか。もしは又くるゝものをよろこばねども、くるゝ心の慾なきをよろこぶや。我はかく世は捨たれど、かしこきめぐみの祿を世〻にして、そのかげにやしなはるれば、もとより凍餒の患はいはず。たゞ虫干も煤はきも世話なからむ事を思ふには、無用のものをたくはへず、うちある調度も事足るを限として、只一用に物の多からむをいとひ、一物にして多用ならむを思ふに、杓子は定規にならざれども、煙草箱は枕となる

べく、頭巾に酒は漉さずとも、火燵のやぐらは足代に足りぬべし。そも一物にして多用の省略は、天地開闢よりその沙汰あり。今見よ鼻は呼吸をかよはし、物嗅ぐ用を兼ね、口は飲食をなしながら言語の用をかねたり。天もし人を尊からしめんとて、二つの鼻をあたへ、目を三つ四つも付たらば、因果物語にのせられて、開帳・芝居の見せ物となるべし。これ天の長物をとらざる所なり。又は鼻ばしらを眼鏡の臺とし、耳を笠紐のたよりとする類は、天の理に則つて聖人是をおしゆるもの歟。その中に臍といふものゝ、蓬生のかげにかくれて、衣のかざりともならず、何の益なき道具にして、久しく不審の晴ざりしが、今此身にしてはじめてしりぬ、慥に天地開闢の時、餘義なきかたよりの貫物なるべし。その理いかにといはんに、我かく物の不用をいとふに、飲でしまひ喰てしまひ、又は遣ひてのこらぬ料紙やふのものは、うれしき折もあらんが、さもなき調度のたぐひ、是は仕出しの風流なり、これは細工の面白しなどいひて、人のくるゝものあるにのぞみて、とらざれば心を破る。さすがにうれしき顔してもらへば、一つ二つと物のつもる、いとほゐならず思へどもいかゞはせむ。こゝに世のためしを思へば、むかし西行の鎌倉にとゞめられて、銀の猫を給りしを、やがて門前の童にうちくれてさりしとぞ。されば其人の身を思ふに、何ぞ王侯にも将軍にもへつらふ心あらむや。しかるを猫はいらぬともいひがたくて、其座は取ていたゞきければこそ門前までは携へ出けめ。是をもつて彼を思ふに、我はまして斗擻の身にもあらず、わが子の祿に命をかくれば、さすがに人の心をもやぶりがたし。是たゞかの臍と思へるなりけり。豈臍此理にあらざらむや。

## 吊(弔)二不幸一文

贈六林

君きけや、鳥にあらざれば鳥の心をしらず、魚ならざれば魚の心をしらず。君愛女を失ひて貫之が涙袖を浸し、長嘯のいためる襟に滿つ。さだめて知る、とぶらふ人々の少物わきまへたるかぎりは、例の天命を説き、哀むでやぶらずなど、しゐて忘憂の物をすゝめ、只あきらめよ忘れよ、と君がもとよりしりたる事をくり言して、うき世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓子籠に長口上をもつらね添らん。いかで饅頭に涙かはかん。何ぞ栗・柿に悲をまぎれん。果は出入のうばかゝが懐を高うして、もらひ泣

とは是をしもいふにや。是たゞ鳥にして魚を吊ふなり。我も近き此十九の愛女を先だてり。されば君が心我よくしりぬ。君又はじめて我を察すべし。我かの魚にして魚をいさむ。只なげき給へ〳〵。けふも歎きあすもなげき、なげき〳〵てゆくまゝに、なげきの森に秋ふけては、柞の色のうすきをも興らむ。七ゝの日の法事には万行の涙千行に減じ、百ヶ日の墓參には百行やゝ十行にしてやむ。まして一周忌のかい餅は、その日の空の腸は斷てども、砂糖つけて最一つともいふべし。されども節の膳をならべ、桃に雛の祝ひ日には、あらましかばの怨は盡ず。盆の踊の手拍子は人しれぬ胸にこたへて、此かなしみは一生の病なりとしり給へ。されば子の親をうしなひてこそ、手ふれし調度目にめでし草木までも、長くとゞめてそこなはず、是を見かれにつけて、したふ心を忘れじとはするなれ。今君が歎くたぐひ、世の倒の別なれば、書のこせし筆の跡も鬼となりて引やり捨、手なれしものも火にうちくべて、兒女の態をなし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草をもとめむにはしかず。噫我今先達の顔して君をいさむ。君また先達の顔して、たがあすの身の上をかいさむべき。只あだし野ゝ草のもと末、さだめなき露こそかなしけれ。

　踊の馬先へとはたが秋のそら

贊補破茶碗辭

大樋の組二つに破れて陰・陽となる。その陰・陽の又あふからに、夫婦いもせの契ともなれり。おもしろし、此茶碗のまどかに望月のくまなきのみかはと、一たびわれて有明の烈皮を示し、合者定離を打かへして、離たるものゝ又あふたるぞ、佛も我を打給ふべき。論に此事に文あらむ事を我に求む。我田先生が昔にきけり、馬は壯なる時一日に千里をはしる、老ては駑馬も先だつとか。まして駑馬の老たるもの、何のいふ事をかしらむ。そも〳〵是より北にあたつて護花關あり、そこに一人の好事あり、かしこに乞て求むべし、あなかしこ、うたがふ事なかれ、只たのめ〳〵と、あらたに告て我は火燵の山にかくれぬ。むくてかしこに其文應れり。始の茶碗のあやまちに懲りて、いかにもそつと齎て見るに、果して金玉の響あり。噫此茶碗のわれずば此文あらじを。あざ丸の太刀・蟬折の笛も、その瑕ありて瑕ならず、纔目をいたむ事なかるべし。

嫦娥が天上の薬はいざしらず、人間に有うるしといふものなからむや。

はなれたら繼げはなれたらつげ幾度も
破れ世中にあらむかぎりは

## 贈二分平菴一文

平易を以てわが分とす。たれか是をねがはざらむ。もと此菴只はなれ家にして、呼て餘盃をつくさしむべき垣越の翁もなかりしが、あるじの德の孤ならぬにや、隣めく軒のこゝかしこに建ならびたるは、よしやとみるらん、むづかしとや思ふ。いさあるじの心はしらず。されど東面はもとのまゝにして、わが庵とても月まつ嶺はおなじ方ながら、廣寒宮への道のりは一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとゞめよと乞はるゝに、四時の多景何れをかわきていふべき。されど庵ちかきよしみもあれば、つれなくいなひがたく、只眼前の姿をいふ。

稲の中にうごくものあり

として、下五もじに掛はづしの自由あり。春は田にし取とすべし。夏は早苗取、秋は木わた取、冬は大根引、とをきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、何のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

## 臍頌

臍を不用の物なりとは、我も誇りし人の言なり。されば他の一寸は見へて、わが一尺は見へずとか。世にやくたゝきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれ。そもかの臍は物やは食ふ。芸能の誇もなし、さらに物やはいふ。三絃の事にもたゝず。わが世にありて物が費すには似るべからず。人は容儀に不用なる論すれば、男の乳ばかりこそ、いかさまなる益のあるとも見えねど、今更これらをとい捨ばど、臍は渾沌王の面かげにして、世にさけなきものかなるべし。いでかの臍は頓死急難のせんかたなきにも、まづとて是に炙(灸)する時は、泉下の首途を留るためしも多し。扨こそ腹のさしも草、只たのめともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を抜く力も、此垢を取れば忽に落つとぞ。噬臍をかむとは漢文の古語にして、我朝に人を嘲りては臍が笑ふともいへりけり。しかるにつれなき隠居ありて、臍かねといふを語られしより。天津空の鳴神もこのもしがりて、いかで是非なとし給ふより、女ご・わらべの気づ

かふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこへたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣年の暮　と懐旧の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我身を何にたとへん。されば臍はわが下に立む事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず。かれにならはむとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定はやめて、けふより只かれをそしるまじとぞ。

友とせむ臍　物　い　は　ゞ　秋　の　暮

## 望嶽樓記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに。名高き富士にむかへばならし。そも此樓の眺望、東南北にひらけたれば、かの望嶽の一つならず。千里吟眸の内、田あり野あり村落あり。神社・佛閣のこるものなく、畫に似て畫には及べからず。龍興寺に龍吟じて花まづ雨を催し、猿投(サナゲ)山の猿の手に雲なき月を撃ぐ。下戸は餅にもつく名とて、蓬が島に頭をめぐらせば、上戸は酒のゆかりを思ひて、麴が池に涎を流すべし。もとより主翁文章に富れば、こゝに来り遊ぶ客、皆一時の英才にして、新詩百篇瞬くうちになり、雅談一日あくび(原註)欠をしらず。扨や好文の花もこゝに向ひて色香を増し、天津空の德星もこゝを會所とは定むるならん。玉も錦も事かくまじきを、あるじ詩歌の遊びに餘りて、狂夫に俳諧の文を請へり。其心いかにぞや。さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を琢き、あく(原註)灰汁をもとめて錦を浣はむの爲か。それだにも不才なる、何を以て砥にあて、何を言てか灰汁に代む。されども我賀する事あり。世に祭の棧鋪の、幕・毛氈に餝れども、わづかに權花一日の榮をなすは、其見るものゝ動いて過ればなり。此理によれば、此樓はたしかに松樹千年の久しきを期すべし。さるはその見るものゝ動かずして、しかも時しらぬ名山なればなり。しかればあるじも老をしらず、共に幾代の齡をたもち、卒には此樓に簫を吹て、鳳に駕して登仙せむとにや。我居も幸にこゝに近し。もし長壽の契あらば、木のは衣の着替を負ひて、其日の供にははづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る目の餘り

# うづら衣 後編 下

## 編笠賛

迹を深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隠しても、浮世より通ふ道あれば、顔しる人にも逢はでやあらむ。蓬萊の島なる鬼の持たる寶はしらず、昔晴明が隱形の祕術を傳へて、世に編笠といふものあり。是を戴いて出る時は、車紛々たる市中をあるけども人我をしらず。まして朱雀の夕ぐれ日本堤の曉、いかなるやごとなき人かもしらず。鳥追ひ・節季ゆの世わたり、謠うたひよみ賣も、其人の果ともみしられば、貴賤通用の寶にして、今泰平の世中には、妙珍きたひの兜より、其德はるかに優れりとせむ。しかれども女はかぶらず、出家には似合ず、みさぶらひみかさとよみしは此物ならず。笠がよく似たとうたはれし清十郞が俤も、是にてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮ぬけ參りの筆にもよごされざるを、茶屋の燒印は平大納言のしわざ歟。そもや印籠・巾着・脇差のたぐひは、世にある時に愛せられて、翠帳紅閨の內までも腰をはなれぬ寵あれども、金銀の盡るに隨ひて、つれなくも主を見放して、いづれか漂泊の落月を見つぎたるや。只此物ばかり賴母しくも恩を忘れず、手拍編笠と諺にもいはれて、破れ帋衣の先途をも見屆るにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにをくるゝ操も此時にいちじるし。されども異國には此寶をもたざる故に、豫讓は顏を隠しかねて、漆をさして癩となり。伯休は藥を賣れども、女わらべに見付られたり。たうとしや、我朝には此ものゝ一蓋あらば、大隱の德あらずとも安く朝市に隱るべしとぞ。

編笠の俄隱者や年の市

## 幽靈說

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽靈はそもいかなる者ぞ。其姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいたゞき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるもありないもあり。あゝら閻浮戀しやと、子細らしきは雄幽靈なり。もうし〳〵とよびかけたるは雌幽靈とするべし。多くは行脚の僧に近よりて布施なしの經を賴み、或は剛なる侍を見かけて無心をいふもたま〳〵なり。何の用もなきにあらはれて、女・わらべをおどしたがるは、木

のは幽靈のわざなるべし。そもや人死て幽靈の自由あらば、佛果を得ぬ亡者共は、我も／＼と立かへり來て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言殘したる巾着のこまがね、隣の親仁の無沙汰して居る取かへ錢の事までを告て、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消へぬ日もなき世中に、幽靈の至つて稀なるは、むざとはおこさぬあの世の法度なる歟。されば初秋の盆會には、みそ萩・灯籠に座敷をかざり、かはらけ・麻木の膳だてに、素麪・團子の献立をまうけて、家々に招請すれば、表門より手を引つれてはれやかに來たらむも、何の遠慮かあるべきに、其俤も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過て、かどはゆしと思へるにや、踊のかたの伊達染の中へ、經かたびらを耻るにや。そも／＼舟岡・鳥邊野は幽靈の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、はいり所を見た者もなし。しかれば幽靈を出る／＼といふは、世俗のとなへあやまりなり。出るといふは芝居の幽靈に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたで幽靈消るしぐれ哉

## 杉の門序

季眞は金の龜を解き、酖乘は銅の猿を彫て酒手に宛し風流は傳ふれども、酒屋はいづこの誰にてか有けん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の哥に、又六が名をしられたる酒屋冥加こそ有がたけれ。さるから其名をしたひ繼て、こゝに酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたうとさには、にくしあるじの高ぶりて、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞ有ける。世に此得意を附むとて、撰集一部を思ひ立事あり。只是酒腸の有なしを問はず、月花の方人を求るとぞ。さればこそ此庵の夕顔に隣れども、碓（カラウス）のおとも響かず、酒桶の一つもあらず、壚に文君が色もかざらず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる日には七寶の臺もかゞやかず、菩薩の音樂も聞かざれども、杉立る門の極樂となれば、杖頭に錢をかけて迷ふ人は迷ひもすらむ。只己身の彌陀唯心の上戸と悟らば、賣らぬ酒屋の酒にも醉ふべしとぞ。

月花の下戸に案山子や酒はやし

## 與二時節庵一文

尾城の西南に把茅の一廬あり。そこに住ける八龜法師、此比思ひ立る事ありて、みづから其意を說て曰、今世のさまをみるに、菩提に心有ほどの人、家あれば必佛あり。

我も其道をたのまざるにはあらねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩を勞せずして、佛に向ひまいらせん事、いと安ければ、十万億土の遠きをしらず。まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はなくてもあらなん。されば此ならはしの古ければ、只芭蕉翁の像一躰を刻て、新に庵の本尊とす。そも我生涯、あけくれ遊ぶ所、たうとむ所、偏に蕉門の俳諧なればなり。狂言綺語もをのづから讃佛乘の因とならば、わけのぼる道はかはるとも、同じ高ねの月も見ざらめや。我もと商家に産れて、昔は十月廿日ごとに三郎殿を祭りまいらせしが、今其家を出、世をのがれたる身に、かの御神には申べき事なし。同じ時雨の十二日は、殊に忘るまじき諱忌なれば、有し世の翁の昔を、なら茶田樂のさびにかへて、是を一年の會日と定め、同志の友をかたらひて一卷の祭をなさんとなり。願はくば尾城下に此道の光いやましにかゞけそへて、祭奠たへず取傳ふべくば、わが此報謝の志も長く後の世に殘すべしとぞ。かの庵主がいふ所、是の如く我聞き。同調の志げにとうなづきあふまゝに、夫ゝ筆にうつしてと庵主が請ふに任せて、記して贈る事しかり。

## 盆石記

盆石あり、江の島と名づく。我もと聞ける事あり。虎の怖しき物がたり仕出たるに、其座にむかし虎に逢ける人ありて、實に其人のみ色を變じたりとぞ。其盆石に對し此名を聞に、ことに嬉しとしてなつかしきは、少壯の比かの島に遊ぶ事ふた度有て、今も絶景の忘がたき故ならし。そもそも此石の容をみるに、わづか尺ばかりにして、岩窟へ谷道して、誠にことさら一つの巖穴あり。是もつぱら此名のよる所也。主人一齋の記を請はる。あるは巨靈が手に擘き持來れるか、壺公が術に地を縮たりなどいはんも、今は文人のいひふるしたる糟粕なり。思ふに此地は蓬萊の名あるのみならず、妙音天の迹たれ在せし靈場なれば、爰の嶋の繪にかくとも筆はよも及ばじとて、十五童子の手を勞して、かくは佛を石に留りなし、風騷の人の手に傳ふるならん。主人もとより風流に好けり。是を文房の座右に愛すべくば、詩に和哥に俳諧に、只知んぬ、神助をのづからむなしからざる事を。

波すゞし江の島うかぶ青疊

悼三子謹文

若くて十人の友を失ひたらむも、たとへば髪のぬけたるごとく、日あらば又生ひ揃ひぬべし。かなしき哉、老て一人の友の闕たるは、歯の落たるがごとく、ふたゝび生ひ出るたのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しくしれる子禮翁、此睦月の廿日あまり身まかりぬ。此老一たび仕官のほだしを遁れてより殘生を風雅に寄せ、其道の友に交れるにも聊世の是非を論ぜず。かりにも人の長短をいはず。よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を耻ず。有がたき隱者の鑑なりと、知るとししる人に稱嘆せられしかば、今や世の惜めるも尋常に過たり。まして同じ老の身の恨、一句はわづかに其かたはしをいふのみ。

魂ばかり秋來む鴈のうきわかれ

## 六十齡說

上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齡に至り、かの壽の數にはつらなりけん。けふは長月の四日、我生れたる日なりけり。世の人の賀とてもてさはぐは此日なり。妹あり、妻あり、男女の子どもあり。かれらが心にはうれしともめでたしとも思はゞ思ひもすらめ、只犬馬の年老たるにこそあれ。もしはかなたこなたに詩を乞ひ、和哥もとめなどして世にしられ顏なる、我に於てはいと耻かし。必音なせそとかねていましめて、さる事せず。げにや古人の耻多しといひけん、我は愚に知らずとも、人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身や夫だけのはぢ紅葉

## 夜着頌

まくらといへる和訓はいかなる故ならむ。蒲團とは字義いとむづかし。夜る着る故に夜着といふは、五尺の童子も義解に及ばず。媚を求めぬ自然の名にして、俳諧の正風とても是を鑑とはいふべかりける。此物、下ざまに在ては蚊屋と矛盾の中にて、雁と燕の行かふ如く、多くは質屋へゆきかへるこそわびしきわざなれ。昔孫晨は是をうき瀨に流してより藁一つかねに冬を送り、我國の聖主は寒夜にぬがせ給へる有がたきためしも有を、空蟬のもぬけを恨しは以の外の不埒といはむ。鴛鴦のかたらひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の虱をのこす。なべては此物冬の用にして、夏は必遠ざけらるゝに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊てよりかゝりとす。殊に此君なくてはと四時にかはらず愛する中より、聊發明する

事あり。そも世に不用の用といふ事ありて、人に其心のさとしがたく、荘子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいる丶所なれど、其餘を不用とて地を掘うがちなば、二本の足もはこぶ用なからむ。其空地を空うするが不用の用といふものなりと。是も喩のさる事ながら間ぢかく此理を知らむとせば、今此夜着の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とて是を闕なば、德利子のすげなきに似るのみならず、是を左右に覆ふが故に手を働き、寝がへるにも自由のくつろぎとなり、をのづからの重(ヲモ)しとなりて寒を防ぐの便となる事、鳥に翅のなくて叶はぬがごとし。されど人々常に馴て是に心のつかざるべし。さればこよひも此夜着を引かぶりて蒲團よりあたゝかならば、不用の用をさとるべしと、そこの童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜着の袖

## 與二舎螯子一文

酒よく人を浮べ、酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にもよらず。友あるにも飲み、友なきにも飲み、志學の始より四十の此比に至るまで、腸は只沖の石のかはく間もなき生涯なれば。昔の人に思ひなぞらへて、ある時左螯の二字を戯れあたへしが、辛巳の秋重くなやみてより後いかなる時か來りけん、のまぬはのむに勝り、醉ざるは醉ふよりも面白き物をと、卅餘年の夢忽然とさめて、さしも世のそしり人の諫も蚊虻に聞捨しおのこの、壺を破り盞を碎きて、雫もいとふ下戸となりけるこそ目ざむる業なりけれ。此人の痛飲せしほど、下戸はさらなり上戸仲間さへつぶやきて、かくては命もつゞくまじく、錢はた頓て盡なんと、うたてき事に思ひし人々、且驚且賞して、是を賀してやまず。されば楓の青きより霜を經て染出せるは、二月の花よりも紅に、枝柿の澁さより甘きにかはれる味は、蜜・砂糖に勝れるを思へば、生れながらの下戸に彌増て、もとの青きに戻るまじう、始の澁にかへるべからず。さらば其名の螯をも舎て、今より左に餅を持し、右に煎茶を甘なひて、再び昔の醉郷には頭をめぐらすべからずと、舎螯の二字に改て贈る事しかり。

## 贈二不及法師一文

でゞむしのなまじゐに家持て、蠖・蚯蚓にはうらやまれ兒なるも、行先々を戻ありく苦しさは中々なきが勝るべし。

不及法師が求えたる方丈の栖は、もとより樹下石上の身にほだされざる借屋といふものなりけり。落たる壁も雨もる軒も只家主のあつかへば、我手に労する事をしらず。夕顔のゆふべにあけば朝顔の朝は捨るに安し。況や津梁の大志あらば、しばし只神龍の雲待つほどのやどりにして、卒に地中の物にあらず。我知りぬ、我しりぬ。

心とめぬ安さはしらじ蝸牛

## 濯老井賦

瓜島に分ち得て早き二月の初物を献ずといひしは、華清の温泉なり。我に事たるとよみしは、はつかに山水の滴るならん。それは至尊の遊びに愛し、これは隠者の清閑を助く。それにあらず、これにあらず。其二つの間に湧出せる濯老井なるものあり。これ布袋庵の名水にして、あるじはもつぱら蕉門の俳諧に遊ぶ人なり。昔孝行の徳によりて養老の水流出づ。天はた風雅を感じて殊に此井の生ずるにかあらむ。あるじのこゝに楽むや、もとより其名にしおへる年立かへる若水はさらにして、夏は葛に汲て河朔の飲の渇を消し、秋はさやけき月をうかべ、雪の夜の茶を煮るにも氷を槃く手を労せず。四時の幽趣、老のまさに至るをしらず。誠にしんぬ、濯老の名のむなしからざる事を。されば我間、一たび貪泉を飲時は千金を懐とす。しからば此井の水を甘なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽三有のなら茶を思ふべし。

## 岐岨賦 木曾 岐岨 吉蘇通用

信濃は昔が尾海に隣り、朝もよひ岐岨の山は即封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるおのこ有て、予が草廬に来るごとに其地の山川勝槩を語る。語り〳〵て後に請ふ事あり。其所ゝをつらねて賦を作れとぞ。されば、木曾は文武帝大寶二年始て此道を開きしより、今や西東両都の通路にして、予も三度の往来せしかば、いざまだふみも見ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野(ミドノ)は木曾家の旧居にて、もとは御殿と書けるとぞ。野尻・須原・上松・福島は山中の一都會、則巴笑も爰にすめり。宮ノ越・薮原・風こよく楢井の里・贄川の宿まで十餘の驛亭、各家居つき〴〵敷、大名の旅ねには本陣の幕をも離し、荷馬の鈴の聲有る山を過て、今は椎の葉にもる不自由もなし。しかれども此山中に、覺束なくも呼子鳥の出女の色を置ざるは、是卿の傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる我

邦昔よりの法令なり。されども宿の間〻は深山幽谷の難所なれば、詩人は僞に蜀道の險に比し、斷腸三峡の猿を憐み、和哥には兼好法師が世を遁れし頃、麻ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、先此山中をこそしたひしか。俳諧猶此地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは吾翁の置[illegible]し枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のころもの城山あり。福島の興禪寺・宮の越の德恩寺に各その影像を留む。元服の松・矢筈竹・硯水・兼遠の故宅、御料の森は光盛が陣迹、樋口が谷は兼光が旧蹤。楯の小彌太は野上に生れ、今井が城址は野尻に遺る。山中の藥師は行基の作、臨川寺の寢覺の床は仙客の釣垂し所、奇石怪巖、人よくしれり。されども哥人の慕ふものは、掛橋・其原・御坂・風越の峯。小野の瀧にすぐれたる飛泉なるを、戶難瀨・布引にも名を爭はざるは都に遠き恨ならむ。男瀧・女瀧の契はかはらずも、連理の松は今名のみなり。名にたつ烟の淺間山はこゝに境のへだゝれども、御嶽・駒が嶺に不斷の雪を見せて富士にも肩を並ぶべし。三歸りの翁の噂は死嫌(シニ)ひの人に羨れ、巴女が勇力は男勝りの高名をとゞむ。良材昔より伐れども盡ず、尾城に運びて万家の用とす。山を出して淵川の漲る岩間を下すには、筒工の術に馴て、曲乘踏かへしの自在を働く。他鄕の及ぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。福島には關門ありて、治る世にも備へ固く、鷄のそら音もゆるさゞるは、代〻山村氏のあづかれる守りなり。南宮・諏訪明神・鎭(シヅメ)の明神・八幡宮、禪刹には定勝寺・長福寺・兜の觀音・岩戶の觀音。鐘の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともしともいへり。彌生の浮石・明星が岩・釜が橋・伊奈川橋・滑川橋・櫻澤の橋は是岐阻と松本を分てる堺なり。かゝる佳境に居て風雅に遊び、三石の奈良茶をしも十石峠の名に積らば、俳諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり、盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧になけれども馬市を賑はし、巣鷹は年〻尾府より尋て東都へ獻ぜらる。橡(トチ)・けやきの類多きが故に、器に製して近國に販ぎ、行客必是を求む。産する所千振・岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走を貴す。末川の蕪、風味又世に超たり。すべては雪深き故、春の花遲く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。抑信濃は十郡、此縣僅一國の半なら盡

さんや。只是木曾に屬する事を纔に拙き筆につらぬ。

## 四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃・江・勢の三つを兼て一望の內に入ればなり。其一望に入る事は、つらなれる山〻の是をみすればなり。むかし妓を携し東山はしたはしからず、北山はまして移文のうき名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然として見し南山も侶ならず。をのづから此亭のむかふ所、立つゞく西の山〻にして、高低の容・淡濃の色、よく眼を悅ばしむ。されば山を愛するに品〻あり。仁者の樂むといひけんは、理屈なればこゝに論ぜず。深く吉野の奧を尋ねて身の隱れ家を求る者は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を挑て雪の朝・雲の夕を憐むは、山の風景を愛する者にして、必しも靈運(註)が屐に烟霞を攀て山の寂寞を問ふにあらず。然ればいづれの賞心か勝らむ。思ふに夫三國一の名山とても、扇にたとへ烟を詠めて、只眺望の上にこそめでつれ、鹿のこまだらの雪ふみわけて富士詣とて登るなどは、必無風雅の人のなす事なり。山に入る人山にても猶うき時はいづ地行らん、とよみて躱りし人も有をや。此亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山にあらず。飽て枕に倚る時は山なく、起て檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高き哉其趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求て、三字を題して檐に揭ぐ。其餘狂語を予に請はる。いでや其あるじは、知己の旧きといふのみならず、もとより同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其地は能く知るよしあり。鄙陋は愧るに堪たるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。



## 六林文集序

俳諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此道に遊ぶ事むべなるかな。ことしの春三韓の客東都に使する道すがら、我蓬左に宿りせしを、出會ける人〻扇をさし出し一筆を請けるに、韓人笑つて芭蕉のほ句書てあたへける。そもいづこにて學びしやらむ。ふりにし王仁が難波津のためし、ふたゝび俳諧に立かへりて今見けるめづらしさよ。かゝれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからむ。水にすむ蛙も俳諧〻〻とは鳴なるべし。しかるに世の俳人、ともかふも五七

五はいふべし、只俳諧の文章は難し。風俗文章世に行はれて後、其体を學ぶ者の間ゝあるも、よくいふものは甚稀なり。古人の文とても其風体一つならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、諸に是をいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず。たとへばやごなき人の、編笠・羽織にやつして花のもとの床几によりたれど、田楽・團子に手をふれず、茶ばかり飲てやすらひたるが如し。其位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の興に三線とりて、相の手ばかり引捨たるがごとし。彥根の許六は物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとて雅趣のなきにあらず。たとへば何がしの忠右衞門など、人に顏よく見しられて、駒下駄に尺八吹て大道に肩いからし、あはれかたはらに人なきがごとしといはん。其餘孫ゝたるは論に及ばず。只和漢の故事・古語をしり、俗の諺にも入わたり、其影を用ひてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず雅に過ず。主意よくもとすえを貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ。誠に難からざらめやは。我友護花關の六林子が文章、章ごとに玉をつらね、錦を綴れり。我常に目を驚して主の舍を避るに至る。他はいさしるべからず、本州誰か其右に出む。されども音を知る人は稀に、魏ゝ洋ゝもいたづらに、猫に小判の耳なければとて、包て光を世にあらはさず、只獨の樂とす。頃日みづから輯錄して予に小序を求らる。久しく金蘭の契ありて辭すまじきゆへながら、不才の腸何を探りてか是に當らむ。されども又思へる事あり。世に吳服を商ふ家の、繻子・緞子・紗綾・縮紗（チリメン）は、店に庫に滿ゝたれども、入口の暖簾には必木綿をこそ用れ。其店を尋る人の、まづこれに目を留れども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば我が木綿の才を以て、始に一重の暖簾を掛むには、などか店物の價を妨げんやと、つるにはゞからず序書て贈りぬ。

## 與レ号説 爲二綿屋巴良一

和哥には神とも世にしたはるゝ昔男の昔をきけば、芥川のかけ落にあだ名の髮を切られ、詩賦に秀しもろこし人は酒屋に掛のたゝまりて、朝三暮四の燒餅さへ乏しかり

したゝめし多し。こゝにしれや、風雅必しも身を修る助とならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富を來たさず、家業に思ひかふべからず。人の噺にきける事あり。そのかみ薬種を商ふあるじの連歌に好けるありて、たまく宗祇を招き請、一座の興行に及びけるが、我が句の順に當りて案じ入ける時、表に人の音なひして、僅に一二錢の胡椒を求る者あり。折しも店に應對の人なきを見て、我句を惜がらず他に譲りて其座を立、胡椒を商ひ遣しけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌にすける、かくこそ有べき事なれと、殊更に稱美有けるとぞ。吾子が俳諧に耽るとも、此ためし忘るべからず。産を破り家を沽りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事としてこれをしたはゞ、傾城買も博奕打も同じつらなる俳諧なるべし。或はまた身持よく家榮へば、見る者ごとに必いはむ、俳諧はめでたき物なり、翫ぶに妨なしと。さらば俳諧に第の一奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、夷大黑も風雅を助けて、つるに俳諧の妙處にも至るべし。今や其居に号を乞れて其家の業を兼ず、藍光舍と書て贈るも此意有による。今我が贈る藍より出て藍よりも濃き趣を得ば、世に俳諧の名も高くあらはれて、光の一字も空しからじとぞ。

## 聯句 幷引

讃岐に槐安へ至りしは、夢にも足のまめなる男なればならし。我か夏の葎の門をも鎖して、戸出もせぬ物くさをしればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧の訪ひ來て、半日の閑談をす。いづこにすむ人ぞと問へば、近き方の穴にすむと、しらばけいへば根問に及ばず。聯句せんと筆とりて挨拶の發句を唱ふれば、妖僧會釋の對を吟ず。やゝ短歌の二卷に至れば、退屈の尾を見られじとや、末は又の夕部と歸るを送れば夢さめぬ。跡に其[illegible]團子の土産も見えず、只たばこの火の僅に殘れり。

挨拶

雖波木無葛　可涼風在蘆
庭宜松氣色　山惡月邪魔
長嘯夜方冷　大曉盃亦過
酒醒懸嫁ゝ　茶沸爨婆ゝ
擇日円火灸　惜春万葉歌
遲樓留記念　歸雁惜余波
借宿擬弘法　換題試頓阿

耳言牽袖笑　口説入牀和
被指女郎誓　強歷祖父觴
移數殘暑得　晩曉有明饑
濱市初鮭貴　辻能油虫多
花開粧寺院　柳動彩溪河

後うづら衣、寶暦より明和の末まで、半掃庵の遺稿をあつめてこれをうつす。

六林校

# 鏡裏梅　うづら衣拾遺

## 節分賦

こよひは鬼のすだく夜なりとて、家々に鰯の頭・柊さし渡す。我大君の國のならはし、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊に此夜をつゝしみ給ふとこそ。世をのがれたる翁の巨燵に足さしわたし、年を惜むの外に何のわきまへたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨たる世ににげなきわざながら、家に老たる男のかゞめる腰にしほたれ袴かけて、けしきばかり豆うちちらし、聲わなゝきて鬼やらひたるも、昔覺えておかし。年の數を豆に拾ひて厄拂ふ者にとらするものとて、をのがさま〴〵する事なるに、むかしは膝のあたりかい探りても其數は得たりしが、今は八疊の一間にもあまるばかりに成にたるぞ侘しきや。厄拂ふ男の、宵に町々をめぐりし後、夜更るほど聲嗄からして、北わたりへも昔なふ事にぞ有ける。行年波のしげく打よせて、かたち見にくう心かたくなに、今は世にいとはるゝ身の、老はそとへと打出されざ

るこそせめての幸なれ。

一えだの梅はそへずや柊うり

雪はらふ垣ねや梅の厄おとし

梅やさく福と鬼とのへだて垣

## 八百坊記

二十五ヶ條といふものに、蕉翁の詞とて、詩哥・連俳は上手にうそをつく事也とぞ。翁は俳諧の祖師なり。詩歌・連歌の人はいさしらず、俳諧師は是を守りて、我劣らじとうそをつけども、夫も翁のうそかもしらず。あるは門人のうそにもやあらむ。うそは乾坤に滿ゝたれば、我口にうそはつかねども、耳にはうそを聞ぬ日もなし。そもやつれ〲草に、うそ聞く人の品ゝを言たれども、うそつく人の品はいはず。うそに大うそあり、小うそあり。佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を教へ、傾城のうそは人を迷はす。只はいかいのうそばかり人の爲にもいはず、身の爲にせず。跡なき雲の郭公、名のりかけてつくうそは、人をあやまる罪なしとて、うそ八百坊の額うちて俳諧に遊ぶ人あり。實も梟のほどおごめきて世路にうそつく人は、我はうそならずと僞り、みづからうそなりといひて俳諧する人は、それ則まことなれば、交を結ばむには頼むべき友の一ツなるべし。されども倉忽の者ありて、坊と屋の字を心得違て、茄子を大根をと求めに來たらむに、是は青物賣る店にあらずと、あるじの答に不興して、さては家名にうそつきたりとつぶやかむ無風雅人は、論ずるに足ざるべし。八百坊の記を請はる。我八百の意を問はねども、そのよる所を推量して、此一語を書て贈る。あるじの心まことあらば、よもや此記を捨べからず。

## 自在鍵頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり。夫は爐上に下げて茶釜・藥罐をつるすに、延縮を心に任する物とぞ。わづかに一用をなして、何ぞ其名のみこと〲敷や。予別に自在鍵を得たり。是は路兮のぬし、我が老衰の立居むづかしきを見て、居ながらの用をなせとて、新に工夫してみづから造り出し、我に贈れる物にして、もとより手の巧なる事、左甚五郎が右に出づともいふべし。しかのみならず一章の文を書て添ふ。仙才又妙にして愛すべし。予も此頌を書むと思ふに、義經の弓流・猿猴の手の喩を彼文章に取られたれば、外に文華を飾るべき言のはもなし。抑此物

の多能なる、座右に入用の調度を指寄するはさらなり、杖として老を助け、棚の鼠を驅出し、簷にすかく蜘の巣を拂ふ。俯して石公か橋下の履を取り、仰いで伯獵が松の羽衣を盗むに便あり。花は折たし梢は高しと、心づくしの木のもとにも、是をもつて曳たはめて、ほしき枝をもたやすく得べければ、まして柿を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に随ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖をぬすらに及ばず。洗濯の盥のもとには、淵明が酒臭き頭巾も懸て干つべし。さればたとへ八町二郎か手にには短しとて捨るとも、物くさ太郎が膝もとには、此君なくてはとも愛しぬべし。もし此物の世に弘まりて、彼爐上の自在鑵、我名を奪ひたると爭論を起し、訴に及ぶとも、對決の場に臨で能の多少をくらべんには、板倉殿の捌にもあやまたず勝を取べし。自在鑵〳〵、世に已が名を憚る事なかれ。

## 發句塚序

聞ならく時節庵の社中、庵主に告て云、足下百年の後には生前得意の句を石に彫、不朽の發句塚を築くべし、此約必しもたがへじと。庵主云、誠に厚情謝するに堪たり。しかるに、たとへ劉伶が墳に酒を灌くとも、只徒に蟻の穴を驚かし、徐君の塚に掛し劍も、其意しらぬ人は鴉威しともみてや止なん。汝達その志あらば、同じくは生前に其事あれかし、さらばまのあたり見て悦び、一言の謝禮も述なんをと。社中皆云、是只忌ゝ敷の憚あり、庵主其望あらば、もとより我曹の願ふ所なり。さらばぞ言を食まぬ寸志も見えんと、しきりに此事を營て、時しも春の驚なく寶生院の傍にさるべき地を求め、一基の石を建、一堆の塚なんぬとぞ。頃日庵主來り、予に此事を語りて一句を請り。實かの北斗をさゝふこがねも、南帝をほむる諸白も、身の後には何かせん。そもや生れぬ前の襁褓定めとは、早計を嘲る諺にいひて、花見にと催す興は、嵐に吹さまされ、月みんとたくむ空は三五の十八、にくの雨に妨られて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此終焉のまうけばかり、万に一つもたがはねば、あすの事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰かうらやまざらむ。年〳〵春の草生ずと白氏が歎には事かはりて、是はめでたきためしなるをと、とみに手向の一句を寄す。

我とわが塚の掃除や春の草

## 節分庵記

もろこしには鍾馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其容を見るに、眼を怒らし劍を提げて其勢をふり廻せば、寶鬼は恐れつべし。されどもさわがしき其中へは、用心ふかき福の神は、怪我あらんかとあぶながりて、あたりへはよりつき給ふまじ。かしこき我國のならはし、年〳〵の節分には、ひよはき親仁も年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで蒔ちらせば、鬼は外へと逃さり、福の神は呼に隨ひ、いり豆の香にめでゝ入かはり給ふこそめでたけれ。されば爰に節分菴あり。是常住の節分にして、來る福は日々に親しく、去る鬼は日々に疎し。されどもあるじは殊に酒を好みて酒宴の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらむ。鬼とな思しそよ、赤きは酒の咎なるものを。只是常に訪ひよいて友とする者、とく〳〵上戸なるべければ、古く諺にいひ來る、下戸と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれて以て是を記す。

## 與二晋鷹一辭

[illegible]見、[illegible]一見れば發句也。翁感じて脇を付て、戯て門人とす。

不佞少年の比より俳諧を好み、今老境にも此一癖はやまず。是が閑居の友とすれば、何知り得たる事もなけれども、さすがに年久しきに述ひて、人はゆかしくも思ふやらん。誹諧の門弟なるもあれど。師弟に似たるを憂いとへば、身の慕ひを告て固く辭し來れり。さるを茲年六十六叟、始て一人の門人を約する事有て、名をも晋鷹と授く。此弟子年二歳、其性に器をくらべ、乳を口癖にして、いまだ奈良茶を甘はず。もてあそぶ物は何ぞや。風車の花につらきも、起上り小法師に月に寝ぬ花の心あるかも、さるから師に對していまだ一字の問をなさず。我が物くさを勞せざる事、深切無上の門弟、いづれの人か是にしかん。我辭せずして約をなすは此ゆへなり。しかれども我おひ先に示す事あり。聖人いはずや、和歌に師なしと。況や俳諧に於てをや。只法式はよく習ふべし。されども其道に交れば、法式はおのづからにも知ぬべし。法といへば理非の穿鑿なし。天下の公道にして、隨分人のしる事を專とす。祕する法は有べからず。しかれば世に祕事(註)口決とするは何ぞや。物に用捨の心得あり。或はてに於

業の習あり。夫は皆當然の理にして、我智明らかなる時は、己と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其一事に止りて他に働かず。我と一理を知る時は、万端にわたりて物みな明らかなり。師はたゞしばらく東西を指さすのみ。たとへば詩・文章を學ぶ人の、秘事口決といふ事は一ツもなし。しかれども上手あり、下手あり。只我才のなす所にして、何ぞ別に秘事を貴まむ。世に秘事傳授といふものは、度（渡）世の者の術なり。予は度世の爲にせねば秘事口決はならはず、習はねば何をか秘せむ。五倫五常は外に師あり。狐・狸の類に迷はされて俳諧に混ずべからず。明和四年潤月冬至、半掃庵隠士示レ之。

## 寄二未足齋一歌

未足齋〱。未足齋のあるじ、こゝろみに物とはむ。そもや花にめでゝ春の日の足らざる歟。傾く月ををしみて秋の夜の足らざるか。目に物のたらざるか。心に物のたらざる歟。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいそがしく、蠅のごとくにあつまるは、あるじの常に笑ふところ。茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名はしめして、未足をもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなる哉。

足しては見ぬ心や月の十三夜

## 夢二二客一賦

秋の寝覚の暑さをおこし、寝待の月の影を出たるばかりの夢に、怪しき二客の争ひを見ける。一人は色黒くして疎なる髭針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に、頂すこし禿たるが、貝多居士と称す。共に酒臭きはいたく隔たるもあらねど、今一樽の内に在て、何ぞ我より上つかたに横たはれるやと。居士云、我もまたいかでか先生の下とは定らむ。予はひたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず。昔邵平が東門に作り、殊に驪山の温湯を分ちて、二月中旬の走りをも献ぜしものを。へいな、もろこしの事はしらず、山時鳥里馴る比は、駿河のはつなり、價玉の如く、籠に盛り馬にのぼりて、東都に下る勢ひを見ずや。たま〱しろ瓜といふものありて、わづかに其威を借れども、我目には[illegible]とこそ見れ。へそも〱官人の他郷の役に倦て、故國へ還る憶の時か、瓜期とて殊に待るゝものを。へされば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするに

はいづれ。へ我聞、むかし禪僧にふみ躙られて、夢裡の蝦蟆となりて命を請し妖怪はいかに。へいざ我も亦聞り。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、清明(晴)に占はれ行尊に祈られて、踊り狂し不祥こそ増りぬべけれ。へ山城のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞にもつらねしぞかし。へ扨はかのわさゝの糟につけ置てと、讀ける哥はしらざりけるよ。へうたてやそれは秋茄子の、嫁に立けるうき名ならずや。へ大原や田中の村の瓜作り秋は果ともかりもりなせそ、としめしける歌も有しを、見ぐるしく世にすさめられ、名をさへかりもりとは、平家の公達を似せけるやらむ。へ只己が身を省るべし。味噌に油に味ひをかざりて、寺に鴫焼の仇名こそにくむべきを。かくいひ〱て果しなければ、今は翁も枕をもたげて、あなよしなし〱、かれはかれ、これはこれ、瓜の蔓に茄子はならず、只己がさま〲にて、何ぞ尊卑の品あらむや。不用の爭ひをして、なれそこなひ味變じなば、人に踩まれ捨られて、畠のこやしと成や果なむ、やみね〱と扇を把て席をうつ事三下。ふたつの姿たちまち消て、夢も亦さむれば、只青丹よし奈良漬桶のみ、依然として棚本に殘れり。

## 祭二嘯花一文

この秋は毛利嘯花子が卅三回の忌に當りて、いさゝか其魂を祭る。我少壯の日、明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老ぞおどろかれぬる。そも文場に交りし其世の人を指に折れば、失も失せ是も去て、のこる者けふこゝに打かたらふ只三人斗。木兒翁は七十を越へて猶健に、米布は六十に臨てもとの姿さしもかはらず。只我のみ六七十の間にながらへて、其數に入ながら病み衰へ、さまもかえて、有しにも似ねば、魂もし歸り來るとも、野中の淸水も影迷て、知らぬ翁とおほめきやすらん。よし只かはらぬ心の手向を、倘くばうけよとぞ。

露は袖袂の名にあるみそ三とせ

## 送二曉臺一辭

此秋名にしおふ更科の月みん、それより武藏野の露をも分けばやと、思ひ立る曉臺を送る。其行先の信濃路には、我知れる千丈・友梅なるおのこあり。武藏に布袋庵の主は、殊に年來の交あれば、我が一言を傳へて立よらむには、假のやどりをよも惜むまじ。行くればよし此陰によりて、心の花のあるじとせよと、陽關の一句を筆して、

別るゝ袵にさしいれぬ。

漏らぬ宿おしえむ月の旅ながら

## 懐旧辭

風月堂を訪ひて、むかし翁の此家に書残されし一軸を見て感あるの餘り、紙筆を請て一句をとゞむ。

手の跡や雪の足あと見ぬ世まで

六林いはく、風月堂は尾府本町書林なり。此家に芭蕉翁行脚の比立ふられて、一句を残されし眞蹟あり。今此に模寫す。

印
書林風月ときゝしは
名もやさしく覺えて
しばし立寄てやすらふ程に
雪の降出ければ
はせを印
いざ出む
ゆきみに
ころぶ所まで
丁卯臘月初
夕道何がしに送る

縦九寸五分斗、横一尺四寸五分斗有。今掛物の一軸とす。是貞享四年丁卯冬の事なり。今天明八年戊申に至て百二年なり。夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり。

## 題ㇾ像文

人の見よとて携来る一軸をひらけば、上に我句の書添てあり。さては此翁は我姿を寫せるにこそ有けれ。老の手に鏡も捨て久しければ、我面かげは我忘れにたり。今は此繪よりも劣りぬらむものをと、あさましく且なつかしく、暫見とれぬる内に、傍の童の口さがなくてよみける。

金岡が馬にならばば夜は出て
萩の戸棚の餅や捜さむ

いとにくけれどいかゞはせん。

## 更幽亭記

から衣うつゝ（原註）内津の山里に、代々藥を鬻ぐ家あり。所は少陵がたづねし張氏が隠栖に似て、貧富は同じからず。夜金銀の氣は只此家より立のぼりて、上清童子常にはたらけば、物の不自由なる山中ならず。今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中に、賞山間の閑寂を求る時は、襖に風塵を隔て、名におふ手枕の茶を煮て一室に幽趣をたのしめば、もとより深山篠に近くして、伐木の丁々たる、耳さらに清かるべし。此亭に号を呼ぶに、更幽の二字を以てす。我は老と病にほだされて、神飛べども訪ふ事あた

はず。訪ふ人あらば、此名の虚ならざるを知るべし。

## つのもじ序

むかし〳〵蒙恬といへる人、始て筆を造りけるより、和漢に能書の人こも〴〵出て、我朝の高野大師は五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつて知る所にあらず。かつその大師、又四十七のいろはを造りて、和國に自由の働をなす。しかるに今また六林出て、その四十七字を配りて、文を綴り哥をつらぬるに自在を得て、人の目を驚し、つもりて一卷の小册子なんぬ。是また假名を始し大師のしろしめさゞる所なり。聞ならく、むかし世に文字てふ物の始りし時、かく人の智さかしくなりて、己等がかくろへて住かたなからんと、鬼の日に涙して泣けるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけむ。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我朝の六林を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此一卷をたくはふ家には、鰯の頭も何かせむ、柊もたのむべからず。奇なる假名、妙なるかな。攝津の老隱咸咲の餘り、戯れて此端に筆とる事しかり。

## 釜賦

攝津の老農が忘年の一知己あり。俳諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつ〳〵しからぬを、濁りて富るよりも清くて貧しからむこそと、高きを慕ふ心より、史雲が釜の魚を生ずるに至らざれども、弊居の板間まばらに荒て、月もまに〳〵篭に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、月夜に釜のおかしみによるにや。さるに近き比、市中に時雨のやどりならむ、ある店先によりて郭巨が鍬もからず、あやしくさゝやかなる釜ひとつ掘出せり。是を得て大に歡ぶ。そのさま茶人のたのしめる物ともみへず。又塵俗の世帶じみたる物にもあらず。すべて夕顔の地紋心ありげに、其容つぶ〳〵といふに及ばず、ゆかしむ人は尋てみるべし。もと此人久しく茶道に遊びて、其奥儀熟して後の今は、必しも茶に專ならず、さりとて思ひ捨たるにもあらず。むべなり、此釜のこゝろに叶ひて愛するや。冬篭の爐に懸て湯を湧し茶を煮るの外、あるは霜夜に雜炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其大さ是を以て知べし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月

の名を定る事年有て、果して此釜を得たるはいかに。其名や渠を呼出しけん、かれや此名を兼て呼せけむ。我が釜か、かまが我か。されば世の物語に、昔俵藤太なる者、龍宮に頼れて、その謝禮として、取れども盡ぬ俵を得たり。夫より俵藤太とは号せしとぞ。是を思ふに、蜈蚣を射ざりし始の姓を何と言けむ、世に傳へず。只もとより俵藤太にして、後に俵を得たるなるべし。しからば此釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤傳ふべし。よしそれはともあれ、此かまのかまはぬ事。つらつら思ふに、名にのみ聞るぶんぶく茶釜とはいかなる物ぞ。字は分福とも書やらむ。或はこれらの事をもいふか。もし年を經て毛がはえたらば、茶筅で剃て事なかるべしと、かの老農求めにあふて筆に信せて漫に記す。

### 與二脇息一文 〔[illegible]〕

机には狭し脇息には長過たり。是に我庵の長物といはむ。用る事もなく側に捨置たるを、世にすたるものはなかりけり、三止なるおのこ、是を得させよといふ。もとよりおしまづきのおしまずして讓り與ふ。小庵の掃除の妨げ、塵掃の厄介たりしを、我は〔原註 内津〕うつゝ山の鬼に瘤とられたる心地ぞする。其事を書て添よといふ。筆に任せてかくのごとし。

### 漢和手引草序

俳諧の漢和、昔今きく物多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に字を知らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、法式も結束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に米泉庵の主人、此道に遊ぶ。天斯文を助けしにや、はからずも壁の中より古き一帖を得たりとぞ。猶是に筆を加へ、こまかに料理塩梅して、齒のなき口にも味ひ安き一巻を著して、手引草と題して初心の俳士の便とす。我はもとより一ッ穴の狐、快なる哉快なる哉と、撰者の求に任せて、序者と化て一語を贅す。

### 壽木記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍顯れて姿見せけるとぞ。好むに信あれば物に感應ある事なきにあらず。我府下に花井某、深く香の道を好みて常に聞香せし。しかるに其家に古く傳たる臼あり。いたく年經りしまゝに底なども破れにたれば、今は何せむ不用の物なりとて、くだきて薪木に打交けるに、ある日いみじき妙なる香の家にみちわたりけるを、あやしみて求めるに、かの臼に焼ける

臼の木なりけり。心いれて見るに、實木のさまもよのつねならず。おどろきて香の師のがりたづさへ行て是が問ふに、うたがはず赤栴檀にさだまりぬ。名はそのまゝに花井臼と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛・焦尾の琴を得たるためしにもかよひ、邇日こゝらあつかひ草にして、めで歎む事にぞ有ける。されば臼といふものは、賤の手にならしてそのしな下れるに似たれど、君みずや、久かたの月の中にも藥を搗ときけば、もしや其臼も此木の類にやあらむ。

臼の香や月の兎はきゝ知らむ

## 百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば唇寒しのいましめも、只いふ人のうへにして、聞者にはあづからず。さればにや耳を緘せるためしもなく、耳たぶ寒しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教は、たとへばまゐふどの來りて非禮を語れはとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎてもむかはるべきかは。たゞ是聞は聞ながら、其よきはとゞめ、あしきは捨て、心に撰のあらむのみ。ましてよしあしの理屈を離れ、俳諧一時の談笑に客を愛せる百話亭には、さぞなあるじのつれ〴〵もなからむ。そも〴〵世に百物語といふ事を傳へて、ともし火のもとにまどゐして、奇怪の談をかたみにいひもてゆき、其數百に滿る時は、かならず妖物の出るとぞ。人もし百話亭の名を聞て、扨はかの百物語の會所かとも訝からん。さればこそ俳諧の夜會ありて、其句數百に滿る比ほひ、勝手口の屛風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失たるは、夜食の時分を窺ふならむ。やがて臺所に摺小木踊り、俎板動き出、膳棚のあたりくはら〳〵として、しばらく家鳴のけはひするは、妖物の出るにはあらで、奈良茶の出るなりけりと、見し人の語りしなり。此亭に一章の文を請れて、例の戲言を筆に任す。是も亦世のよしあしにわたらざる、百話の内のひとつに宛んには、饒舌の咎もあらざるべし。

## 贈二佐屋洗耳一序

をしめども限あるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鷄塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其句を殘せし地をしたひ、地をしたふが故に此塚をしたひ、塚を慕ふがゆへに築し人をしたふ。其したはるゝ人は誰ぞや。此里に久しき騷士吟山なり。むかし月空庵に其道を學びて生涯風雅に遊しが、惜しむべし、丙申の

冬、喜年古稀に四つを添て、卒に夜臺の客となんぬ。孝子洗耳哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつらねて世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。噫乎我もとより不才の樗櫟、今は猶老朽て、花もなく葉も落て、聊のことのはも綴にたへず。たま／＼かゝる求あるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり。いまさらに何をかいはむ。わづかに一句を寄せて且いたみ且吊ひ、且は求に答る事しかり。其蒿里の歌に曰、

淸女が筆の跡も、たゞよのつねの
さまなることといへれ。

かなしきものことし師走の月夜哉

## 知雨亭後記

城北の市中におそろしきおのこ有けり。世々藥を鬻て業とす。表には兒玉屋の暖簾をうき世の風になびかせ、世わたる塵の紛々と見ゆれど、內々は孤松軒の額を閑適の月に照して筆硯にあそび、詩を賦し文章をつゞりて、見ぬ世の人を友とす。此樂、世の俗客は夢しらず。吏隱・祿隱の類にして商隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隱して藥を賣らんとして、かへつて安く見知られぬ。今此おのこは隱れずして賣る故に、其心をよく隱る。一日我が幽栖を訪て後、はじめて其高致をしれり。そも／＼我は隱遁の客をまねびたれども、猶世に隣るが故に旧識・遊人に擾されて、風志の閑を得る日少し。かれは中々世路に立て、人しれず閑を得る。鷺と烏のうへを見るに、夏木立のしげみによれば、烏よく隱れて鷺はあらはなり。雪のあしたに見わたせば、鷺よく隱れて鴉は紛れず。黒白の隱見いづれをか得たりとせむ。されば我亭の、もとより知雨と号する其意を汲たりとて、頃日例の金玉の文をつらねて我に試み問ふ。文意誠に面白く、くり返して擊節に堪ず。されども此二字を取る事、聊別に微意あり。巢居知レ風穴居知レ雨の語あり。つら／＼我身の上を思ふに、幸に上國世臣の家に生れて、不肖の身のおほけなくも父祖の祿を傳へ、剩こちたき官に忝乏して、南郭が竽を吹しも二十とせあまり、たとへば狐狸の人らしく化て、よく尾を藏したるが如し。程ふるまゝに、しかすがに、靑松葉の辱を恐れて、みづから妖の皮を脫、魯鈍の心躰を顯し、卒に蓬蒿のもとに穴を營、かく世の外に餘齡を守るなり。知雨の因緣かくのごとし。今は燒鼠にも迷はじとこそ思

へるに、人やゝ穴を嗅つけて、侘たる栖も面白きやらむ、今は叢に道ふみひろけて、腹つゞみの閑を妨らるゝ事しば〳〵なり。されどもしか厭ふは塵客の事、孤松のあるじは同調相應ずるの人、世にいふひとつ穴の狐なれば、來ん〳〵といはむには、昆布に山椒の澁茶をまうけて、我も亦快ゝとかたらふべし。

### 方十園記

あるじ名付て方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず、反にもあらず、只わづかの閒地なり。爰に山をも築かず、泉をも引かず、賤がこもりのまねびして、明暮慰むつまとはなせり。世の人はともいへ、有宗入道をして此園を見せしめば、かくこそ有べけれと、手を拍て稱嘆すべし。時も今安永四年閏頭月、若菜つむべき春已にちかき日、七十四翁半掃庵筆とる。

### 指峯堂記

年比相知れる好事の叟あり。あらたに世わたる業をいとなむとて書坊の主と成けり。けに世に商沽のさま〳〵なる中に、是ぞうらやましきなりはひならし。店靜にして秤十露盤もさはがず、常に文人・雅士になづさひて、我智の益るたつきとなるべく、諺にさがなきものにかぞへたるお乳の人はいさしらず、船頭・馬かたのゐせたるかぎりは、立よるべき店にはあらず。むかし孟母の借屋を撰て、街賣とていやがられしは、三貫五錢の利を爭ひ、手をうち倒る商家のうへにして、かゝる類にはさしもあらじ。いでや市中に栖を求むとならば、此隣こそ子を育る最上の所なるべけれ。然るにあるじ、かつてある先生の門に參て、号を指峯と定けるとぞ。其意いかならむ。あるじもおぼろ〳〵として、予に此記を書てと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。猶も心の奥の海のふかき心やあらむ、又は山の井の淺きやらむ、いさ汲しらぬ予にもとむる事や、かの天に張ゆみといひ出けむ、安らかなるためしにもあらで、いとむづかしきなぞ〳〵を造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばずとむづかりて、固辭すれどもうけひかず。とまれかくまれ筆染てと、ひたぶるに責られて、聊取次のすゞろごとを書ちらして、是を記とはせよとて贈るとしかり。

### 送月堂記

西濃成戸の里に世ゝ栖る人の号を求けるまゝ、送月堂の

三字を與へぬ。猶其記をと乞ふに、只ふかく思ひ入たる謂もなけれど、其事しば〳〵にして止事を得ず。そも〳〵此地景、東は朝もよひ岐岨の大河清く流れて、雨に着る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山ゝまで、嶺をつらねて甚遠からず、又ちかゝらず、只よき程に屛風をひけるごとし。もとより城下へだゝれば、風塵の喧しきなく、常に農業の目を慰るあり。四時の佳観いひつくすまじく、何を揚てか此名とはせん。されば蛙なく朧夜、時鳥にのこる有明、秋は稲葉の露に宿し、冬は霜・雪に冴る詠、只夫月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物皆入といへば出るはこもり、歸るといへば來るを兼ね、送るといはゞ迎ふは兼つべし。是を以て此二字に定む。隈なき影を惜む心也。所謂東坡が亭とは、裏合せの隣ならむも亦おかしからずやと、筆に任せて記とす。

### 歳旦の口号

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳縣の老人のむづかしきなぞ〳〵は知るべくもあらず。かた腹いたき哥よみて答ける。

足らで死ねといひし四十もふたり前
　つれ〴〵草に面目もなし

### 松歌 并引

金森氏桂五子の庭に一株の松あり。此松によりて我に一語を求らる。そも此求めはいかにといふに、慈母のいとけなくて始て髪置ける年、すさびにうへし小松の、其人と共につゝがたく幾星霜をかさねて、梢は鶴も巣くふべく、影は雨も凌ぐべく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ、桂子の意必しも此松にはあらず。只たらちめをとぶく孝情より、其愛松に及べるならし。されば少女の琴を習ふに、かならずふき組といふ曲よりす。此はじめの唱歌を四句にして假名の韵をふめり。自然に叶へるものか。いと興ありて覺ゆるまゝ、是に習ひて琴曲のうたひとつ作りて、かの求めに答ふ。松に琴のえにしもあればなり。

かりそめにうへしまつ。
人と共に年ふりぬ。
たとへ松はふるくとも。
人は千代をたもたむ。

明和歳庚寅に集る。古稀前一年の翁也有、蘿の隱家に筆をとる。

## 補逸

### 布袋庵風客句巢序

風雅を帶て西東するもの、布袋庵を訪はざるはなし。訪へば句のあらざるなし。何あれば記せざるはなし。その記する者三百余吟、かつて一軸に滿り。さるを過し亥の年の夏、情なき苛あらし丙丁を延きて、池魚の災此册子に及び、年來のすさび端なく一時の烏有となんぬ。惜むべし、恨むべし。あるじ深く悔み、猶幸に心に記するを思ひ出〳〵、ふたゝびつらねてこの一帖を起せり。さるも其もと有しもの、十にしてそれが一つにも及ばず。されどもあるじの年いまだ甚老ず、德いやましに隣ありて、是より書つゞけば、ほどなく文棟にも充ぬべし。序を請れてたはぶれていふ、君みずや靑山の草、一たび燒けば後に生ふ蕨必茂し。されば祝融心ありて、これより句を多からしめむとて、初の草を燒くものならむ。何か悔ん。かの塞翁が馬のためしも、今十年の霜積て後、さてこそとは知らるべしとぞ。

花のやどり音をのこす鳥の跡たへじ

山鳥のをはりの國年魚市の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃菴也有の翁とぞまうしゝ。さるは尾張の君に世ゝつかへたてまつり、中ごろはやごなきつかさにものして、　君の御おぼえもあさからずぞありける。わかきより月花に心をしめ、雪のあしたをたのしみ、郭公の一聲をしたひつるが、身にやまひ多きを常にうれへ、はやくつかへをかへしきこえて、前津の里に世をのがれ、俳諧滑稽のふみどもに心をやりつゝ、常のすさみにこゝらものせられつれど、深く菴にかくして祕めおかれつれば、をさ〳〵世にしるもの少かりき。おのれがうみの父なる文芦翁は、此翁と交はりて俳諧滑稽のふみに心をよせられける。おのれがおほぢなる楚巾翁と也有翁とは、うるはしき友なりければ、いよ〳〵ゆきかひもしげく、つねにむつまじくうちかたらはれける。おのれも稚き比、父のせうそこ持たるずさのせにまたがりて、半掃菴に行通ひぬ。翁天明の始みまかられし後、くさ〴〵の文ども、半掃庵および護花園六林翁のもとにのこりありしが、月を經年を經るまゝ、彼のふみども世にちりぼひ出づ。さるを、天明のころ大江戸なる南畝のぬし、護花園にたよりもとめて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は木にゑりて世にひろめられける。されどのこりの文ども猶こゝら多かりけるを、護花園みまかりて後は、あともなくちりうせぬ。垂穎幼よりわの志をつぎて、翁の文どものこりなく見るまゝにうつし、聞まゝにかいあつめおきつるが、おのれも亦老の坂路のたのもしげなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれうせなむとおもひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるはうづら衣にもれたるくさ〴〵の文ども、或は紀行の類也けり。是を鶉衣の三かさね四かさねとして木にゑらせつ。亦翁の文に、管見草・短綆錄・古革籠・美南無諱比・野夫談・永代藏・無夜食談あり。詩集を蘿隱篇、和歌の集を蘿窓集、狂歌の集を行ゝ子と云。また俳諧の集に、千句集・五百句集・蘿葉集・蟻塚集・もり桶あり。漢和聯句集二卷あり。昔翁の遺稿にして、みなおのれなからん後のかたみにもとて、たくはへおける物になむ。

文政未のとし

をはり人

たりほ

印　印

# 鶉衣　續編　上

みづから文章をかき集て、或日庭を並し謡ていはく、

ことやとしていひし夜のみゆきの
うへちりて見ばやえさまし乃
たらなあきさうつし衣あそはいびとに
綿まのぶくろつしはまあくはなし

是を聞る人、やがて此名とせし。

**百六歳なる大工甚助がけづりたる箸を人の饋ければ**

食は是、とことはに命をたもつもとにして、四時共元氣を養ふの主、はしは又食をすゝむる從者にして、常につかへ怠らず。さればこそことぶきをのぶ。こゝに或所に百六歳に成れる翁ありて、是がけづりなす箸たつとみうるはしく、珍らしくめでたき物なればとておくる人あり。是をよろこび、又百齢命長きを尊ぶは、人の品によらざれば彼の翁を賀して、たはむれのこと葉に、

久しくものぶる齢はきくの露
　はらふ千とせのしるき老樂

献立に百六歳のはしとりて
　これはめでたき世の茶めしくふ

## 田子菴記

こゝに田子庵と号するいはれは、此家に愛翫せる蚫貝の盃ありて、それを田子浦といふ故也とぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀬屋の出店かといふ人も有ぬべし。そもや浦の名をとりて盃の名とし、亦盃の名をとりて菴の名とす。かくまで物を用ひたらんに、器財衣服の類ならば手數の入りて古びぬべきに、用る度に新なる田子の名こそめでたけれ。思ふにそれ其翁が亭の名も、其時は左も有つらん。欄によりて散る花を惜み、簾をかゝげて月待夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此菴の名のそれには似ず、いふ度聞度に、名におふ佳境俤にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立かへる屠蘇よりもまづ此物を手にふるれば、酔来る初夢に

も、其名のえにしあれば、などか一富士の嘉光をも見ずやはあるべき。あるじ一語を予にもとむ。其物其名の來由は、かねてあるじの筆に盡せり。我才の藻屑なる、何をか其汀にかきよすべき。只予に酒腸の乏しくて、八仙の仲まにも入らず、是に對しても鮑のいひかひなき。是のみ田子のうらみなるものを。

## 贈二或人一書

吾子今講武を以て軒号とし、何にも俳諧にも用ひて名とす。あら面白からずや。吾子はもとより武門の人也。搭賣者の暖簾に搭屋としるし。油賣家の看板に油屋と名のるは、買ふる人のまがふまじきためなれば、其いはれあり。吾子たゞ風雅の贔屓なるより、武道も一ッに混せんとす。私心の迷ひといふべし。槊を横たへて詩を賦するも、扇を敷て歌よみけるも、それはそれ是は是にして、しかも是を以てそれをあやまらず、それを以て是を害せず。文武二道と稱するは、其事跡を見て後人是を嘆せせる也。我れと名のるとは甚臭し。五老井が射御の辨すら、其人是を許して曰、其文の始には、武士の武士臭きは鼎を掩ふと書て、人の譏りに針をさし、武藝をあてにすべからずといひて。他の嘲に宜をして、さて其末に書たる一篇、臭きと貫士のごとく、貫の自慢は俳諧無人也。律を知りたる俳の積戒に意し、其學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきをしりつゝあしきわふせば、世にいふ三昔の拾物にして、異見も療治もほどこす所なし。白藏主も口を閉、扁鵲も手を袖にして、只つゝさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、(き)ゝとより武士の當にして、それがこゝへ出ることにはあらず。誰か武門に生れて是をたしなまざるべき。二流三流の印可免許も、此邊にては珍らしからず。天下の名人はおのづから人もしり、世に顯はれて各別のさた也。世に馬を見ると云人あれど、山上入道の名をだにしらずとは、入道が身にとりては遺憾なる披露なるべし。昔或人歌を自讃して、この歌の心の奥はよもしらじ定家家隆も釋迦も達磨も、と讀たる返しに、釋迦達磨定家家隆もしらぬうたくそのやくにもたゝぬなりけり、とはよみしか。其ためしも思ひ出らる。師匠が下手ならば、弟子は師匠を越すもあるべし。只我のみにほこるは辻東の事也。あづらしさうにかきたるにて、のこりの案の思ひやられて、と云或狩哥の下の何やつくべ

からむ。佐ゝ木・梶原が先陣を評して、搦手數万の油斷人一騎も殘らずわたしたれば、鎌倉にての荒言も少しは是にて戻りけりとは、余りに不案内なる心得違ひ也。二騎より外渡されぬ川ならば、何しに不覺の先陣して犬死をばすべき。後陣のつゞく川と見たればこそ先登の功は立たれ。抑武藝十万人に勝れたりとも、用る所不義ならば、明智を誅せし土民の竹鑓にも劣るべし。しかるに功なり名とげて余力あらば、仁義五常の道を學びもすべしとは、恭家戯も媒謡もおなじ物と覺えたる也。そもや五常の規矩にはづれて、何を以て其功をなし、何を以て其名をとげむ。家を建て後に地築せよといふがごとし。功なり名遂るとは、我が行ひの仕上を云也。老子は身退けといひたる、已に暮合比ぞかし。夫から仁義の學問は、隱居してからいろは習ふに異ならず。仁義五常と云詞も重言にしてくどし。外に皷三線にのせる五常もあるかはしらねど、先ヅは五常のうちに仁義はありて、仁義五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ庚申〱とよびありくとおなじこと也。我はそも俳諧はしらねど、釋迦の鼻をせゝりたる蠅が金色の光もさゝず、孔子の肌着を這たる蚤に道德備はる物にもあらず。勸學院の雀が蒙求を囀れども。だみたる聲を啼ぬ也けりと、鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。されば其世に生れ合せて、碩德の直弟とても必上手とも極めがたし。しかるに滑稽傳直指の傳を見れば、祖翁の血脉をうけて俳諧・文章の名人は、我一人也とはすゝどし。そも又翁の方からも、此一人に渡したりとの費上げ證文のさたを聞かねば、心もとなき樣なれど、俳諧は定めて上手にてやありけむ。武士道は只臭くして覆くはおぼえず。泰平の代に手ぐすね引て、楠・村上が上に立むと大言いふ人も、其場に臨み其ことにあづからざれば、ほか〱とはうけとられず。さるを聖賢もこり給ひて、言を以て人を擧ずとはの給へり。是を我里にては陰辨慶とはいふ也けり。文選は俳諧の文集とこそきけ。此一篇にやさしきこと葉もをかしき語もなし。我子への異見ならば、部屋の壁にはり置にはしかじ。何故に此辨はありやと、潜に誇りたる人もありしぞかし。是臭きが故に蠅のたかるがごとく、人も其非をいひたがる物なり。されば武を講ずるも兵を鈹ふも、武士には勿論と云附合なれば、俳諧においてはいとうるさし。早ゝ此号を改給ふ

べし。我も武門に生れたれば、第一に先ヅ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則臭きやらん。さればこそ臭きもの身しらずといへば、少しの匂ひは宰し給ふべからず。

## 俳席掟

一　袴を取るに辭義あるまじき事。

一　夜更て時を問ふべからざる事。

　但勝手の鮓におどろくべからず。

一　世間ばなしにわやつく人は、たとひ玉衍が麈尾を揮ふとも、濫園の居眠には劣るべし。

右先達ての定にもれたるを拾うて菴の新制とす。飲食もとより亭主の了簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、茶めしも麥飯も則三石の內としるべし。

## 贈ㇾ人俳席定

一　飯はなら茶專用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。

一　菜は一ツとして魚鳥は有に任せ、珍奇を必求むべからず。なき時は豆腐・茄子に、精進ならぬ言譯は、かつをといふものあらざらんや。

一　香の物は論ずるに及はず。

一　もしは麵類の好ありとも、定規は右に准べし。

一　酒は盃に大小あれば、上戶とても二獻に限るべし。酒に肴といふ物は、すゝまぬ酒をすゝむる助にして、もとよりも宴會ならねば、しひてすゝむる道理はなし。しかれば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若は到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらむは亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防ぐには、膳後の銚子を殘し置て、一坐滿尾の上において一酌をめぐらすも、又其時の摸樣によるべし。それとても一種二盃の掟を堅く背べからず。相撲・芝居の果は必喧嘩に成りやすく、俳諧の集會の飮食に流たがるは、今世のならはしにて、其道の歎なるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其しめしを思ふ人少し。なら茶といへば汁一ツをだに省く致なれば、まして菜數を累むや。さしみの・膾の・壺の・平のと、奈良茶の膳にならべむは、たとへば行脚の僧の、頭陀をすてゝ荷馬・荷持をつれたるがごく、本意・本情にあらざることをしるべし。椿二な

るなのこ、此とみ恐れて予に俳席の掟を請ふ。道に信ある志を賞して、饌其の定をしるして贈るもの也。

## 硯部文

動静壽夭の論をなして、硯の壽は世々を斗ふといへり。石の性は硬くして、もとより筆墨の類にはあらず。その管ともいふべけれど、只事はるゝ身の幸によるもの歟。たとへば燧石となりては鋏にもまれてうち碎かれ、其齢は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用られては、おどろ〳〵しく挽廻され、月きりの親仁に敲かれては、是も齢はたゞ年を斗へぬべし。これらは皆下ざまの婢・嫭に仕はれて、貴介膝もとの勤にあらず。さればかの硯は昵近のつとめにして、さてや世を以て計ふべき己が壽をも遂るなるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鏡徹君の近侍にして、多年の奉公他にことに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜して最み祕藏す。予に硯の記を求むるに、此ぬしの勤るところ硯のつとめに似たらむには、ともに幾代の春秋くつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせてかきおくりぬ。

## 仍ニ某家ニ作序

其人のために此人の此集編るといかにぞや。紫の露のゆかりあるにもあらず、只風月の席に交ると年あり。さるも其齢をたくらぶるに、かれは八十字治川もわたり過、是はこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見む、いざ雪見むと、さそふもいざなふも、おのづから物好のたがふしぐ〳〵もあらざらむや。かれは此ためにねぶたき月をも詠め、是は彼の爲に惜き雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけむは、鮑叔管仲が交にも、厚は勝る方にやあらむ。そもや彼の老に風雅に遊び、客を愛し 緇素の友に信ありて万にたのみ思へる人多ければ、此別を惜む涙、墓植も色のかはるばかりになむ。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそいため、今此時に此集を編て、其人の跡とふは誰ぞ。獨此人に止りけること、手向の山の鄭公も雲のそなたに呼つれて、此信いかで其魂に屆かざるべき。

## 傍觀亭記 應ニ野呂氏ノ需一

こゝに新に此居いとなむと聞しは更に久しからねど、いさ又隈なき軒端に鳥もなじまずと、思ひやりしにはさまかはりて、木立ものふり竹も陰ふかめて、只此このや

うにもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは猶年わかうして、身は世路に立ながら、こゝに半日の閑をうる時は、窓に高嶺の月を招き、池に潁川のながれを引て、官職塵俗の耳を洗ふ。そこに水鳥の關ておどろかさるるは、かの鴎のためならでも人の心をよくしるならん。されば昔蜀山兀として阿房出づ。今田を埋んで僣晲なんぬ、百尺の樓閣・八疊の座敷、足れる心の二ッやは有。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、是は僻地に閑寂をたのしめば、老の行へを養ふのみにあらず、千代まつ岩に苔を敷てかの青氈のおもひをなさば、長く子孫を守り傳えて、こや色かへぬ幽居なるべし。たま／＼愛の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺の額書て後悔けむ人も有しが、我既に老にむかへり、よし名をおもふ人ならばこそと、東籬のもとの菊に乘じて、つひに狂語一篇をとゞむ。中ゝ勝景をけがすわざにして、あはれ此句なからましかばと、にくみおもはむ人もありぬべし

菊をとりてみる山のはゝ西にあり

## 一德辨

鶉をすかぬ人は七損ありとさだめ、好く人は一德ありと貴ぶ。あらゆる遊藝、其損はこれに類べからず。もしは十損もしりがたし。さはいへいかなる不用の事にも、しひて求れば一德もなきといふ事なし。つら／＼おもふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備りたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとゞまる。然るに飲食の重きこと、聖主の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟はたゞ飲食なり。さるから奢れば法にすぎて、三條中納言の大食には醫師もあきれて逃、何曾が万錢には料理人の手も廻らず。されど二便はこれが類にてもなし。雪隱に高麗縁の疊を敷、きんかくしに蒔繪を粧ひ、たとひおかはを梨子地にするとても、いくばくの費をかなさん。道具好の茶人とても、南京青磁のしびんは尋ねず。しかれば出入の違ひありて、飲食とは大に別のさた也。そも又大小の二ッが中に、大は人の平生に定れる時をうつすも、纔に一晝夜に一兩度に過ず。只小便のおづいはしき、さのみ際はとらねども、しきりに是を催す時は、いかなる公卿・僧正も輿車にたまりかね、武者の戰場に合な

る場にても、直摺をたゝみ上て、思はぬ敵に後をもみすべし。まして談義・芝居の中に、こらへ袋の切かゝる時は、群集の膝をおし分出て、住生の要文を聞もらし、大事の狂言の所作を見殘す。あるは下馬先に供をはづす鎗持、長舟にもみ尻する女中など、是が爲に惱さるゝ事世に多し。されど馬方・小揚の身の上のみ、あるきながらもやり放し、清水をけがし、雪にも跡をつけて、人目を恥ぬは論ずるにたらず。かくとりへたき物なれども、猶其德を訴るに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ噺の眞僞をしらず。昔鴻門の會に、高祖は是にかこつけて危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の耻をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行あうたる時は、たちやどるべき家もなく、逃る方なき道芝の露とこたへて消たき時には、件の用をとゝのふ振にて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばずやり過したるぞ、此ことなくてはいかで此難をのがれん。これを小便にも一德ありといふべし。幼子の居びたれは乳母の油斷と叱られて、其子の科にはならざるを、老人の取はづしは、子にもはづかしく嫁にうとまれて、老てふたゝび兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老の身の苦しき、霜冴る夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顏に詠めて折〻かよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有がたき御心にも、是迄の事はおぼしもよらざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行かひかせんと、寐よとの鐘に寐所とゝのへて、例の椽ばなにまづ立出たるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のから〳〵と鳴音のしければ、一首はかうぞおもひつきける。

死さまに念佛申さぬ人はあれど
　ねさまに小便せぬ人ぞなき

## 東南東湖兩筆の万歲の畫贊

師の書けるを發句として、弟子のこれに書添たるは、則脇の趣あり。我も又其數にはやされて、かたはらに筆をとる。是や此第贊也といはゞいふべし。

　節季ゆにつもりし雪を万歲の
　　けさとくわかの春は來にけり

## 若菜賣序

七十二候の三ッが一ッを省て俳諧の月令あり。蘘月・文樵の二士、集のもやうとして予に序を請ふ。是田鼠に羽がは

えて、深草の秋に啼雀が踊忘れて桑名の松かさに焼るゝなど、怪しき説にはあらず。誰も見て疑はざる俗間の有ことなり。蕉門正風の本意かくこそあらめ。作麼生か是俳諧は上手にうそをつくとは。よしや世に煩悩あれば菩提あり、うそあれば誠あり。柳はみどり花は紅の色と悟れば、すべて俳諧の種にして、紀の神に問ふもよしなし。君見ずや、たとへば彼の田鼠も鶉となりて初て和哥によまれ、雀は蛤となりて後哥人には見限らる。夫も是も漏ざるは我が俳諧の大綱なるをや。かゝる自在の手にえらまば何ごかならざらむ。いざ見ぬ國のとはさもあらばあれ、和朝に民の時をしる、是や月令の始なるべし。

## 棧集小序

我庵に隣せし咄ゝ庵のぬし、名におふ蕎麥の花咲ころ、木曾の旅にとて假初に別れし秋も、ことしの春に指折れば、早蕨の片手握る斗になん。かくて行先ゝいことをきけば、岐岨のかり寐におもひ立て、そこに翁の一句をしるし、棧のあたりに一堆の塚を築き、旅客のしたふ便とし、それより越路の雪をふみ、奥の細道の跡までめぐりて、國ゝの句を拾ひ、今は武城に錫を休めしとぞ。頃日隅田の春雁に消息をつたへ、まめなる便に此事を告こしぬ。實や釋氏の說にきく、聚レ沙爲二佛塔一功德猶空しからずとなり。夫は一時のまさなごとをさへに、まして永き世に此跡を遺せる祖翁の追福、何ごとか是にまさるべき。其句どもやゝ頭陀に滿れば、まづ東都の梓工をかたらひて編集一部の口をひらくと、余に其小序の望あり。江戸は騷士の輻(輳)湊する所、隣に乞途に需むとも、かばかりの一語はいと安からんを、遠く老拙に此望を思ふに、さすがに法規の扇に泣き、漢の食を願ひしためし、旅客の情の故あるにかこち、殊には雁の便をよろこび、人の笑ひもこりずまに、またすゞろなる筆をとりぬ。噫我病の膏肓に入るか。

## 咄ゝ房挽歌并序

咄ゝ房秀道は、一たび天台の教に入、豆腐・蒟蒻の淸僧なりしを、いかにおもへるならむ、只かしらのみ其儘にて、袂は浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び茶に遊み、殊には俳諧に遊ぶ狂客とはなれりけり。かくて其身の年もつもりて後、我隱家の蓬生ちかく一廬を結びてすめりければ、明くれに事とひかはせしが、七年ばかりのさきならむ、信濃へ行脚し、夫より北越に渡り、奥羽の隈ゝま

でゝ見むとて、菴はあたりの人に預け置て、杖笠にうかれ出しが、ほいのごとく打巡て、頭目は武藏に情ある宿かり求て曹尻のあたゝまりぬるよし、きこえかはしぬ。さるに信濃路や木曾の旅ねに夜をかさねしほど、そこの人ゝをかたらひて、名におふ棧のもとに一基の塚をいとなみ、翁の句を表して、ゆきゝの好士の碑したふたづきとはなせりとぞ。猶夫よりの行先ゝに此句を乞ひすゝめて、やゝ一軸をなすばかりなれば、棧塚を撰集して世に行はむの志ありとて、過し夏の比予に小序の求もせしが、其事なかばにして病にかゝり、此長月の廿日あまり卒に夜臺の客とはなりぬ。かなしむべし、をしむべし。只年ゝになき數をそへて、老の心をいたましむよ。齡又われと同じかりければ、過し行李の頃はことにうらやみて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志あるいさましさよ。さるにてもかくまで人の强弱はたがへるものか。是や世の定むまじきさだめならんと、思ひもしいひもせしが、我身の露はかく殘りて、其人の爲に袖ぬらすや。是又定むまじき世のさだめにはありけり。隴畔の挽歌を裁して曰、

木曾路に綴る旅とて別しが　武藏野に長きうらみとは成ぬる留



呼べばこたふ松の風　消てもろし水の泡

わすれめや　茶に語し月雪の夜

おもはずよ　茶に悲しむ露霜の晨

菴は鼠の巣にあれて　蜘蛛群て遊

垣は犬の道あけて　蟋蟀啼て愁

昔の文なほ殘　老の涙まづ流

よしかけ橋の雲にかゝらば　招くに魂もかへらんや不

### 悼二蓼南子一文

卯月末の四日に消息あり。使のをのこの外へまかりて、返事は後ニ取侍らんとて、さし置て出ける。其文をひらけば、尋常の無事を問終りて、此頃かしこさせたる双帋のおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶是が末ゝの卷取かへてかしてよなど、其事ならぬ明くれのすさびも、例の筆まめにこまやかに見えたるに、そこ〳〵に返事とゝのへ、使のかへり來むをまつ程も久しからず、其家の從者のもとよりあはたゞしき使して、此老今俄に終り給へりと告こしたるぞ、誠にあきれたる世のさまなりける。齡は八十に猶一ッをそへて、さこそは天年の終なりけめど、かくまであだならんとは誰かはおもひかけし。朝につく

杖はとりながら、耳目もなほおとろへず、浮世の是非を渡り盡して、古きためしもよくしれるうへ、人の爲に事をはかるもまめやかに物し給へば、よろづにたのもしき人にして、若き人〻も遠ざけず、常に出入る人、文をかよはし音信して、門には苔のみどりもみず。朝にとひ夕になぐさみて、かたらふ友のとぼしからねば、九人はなしと歎つる白氏が酬和の恨〻薄かりけむ。さるは老のにげなくも身の靜ならぬをとて、あざむく人もあるべけれど、すべて老はむづかしとて世にうとまれ勝なるには、か〻る老の生涯は、なべての人のまねびがたき業に、うらやむ者はた少からざらん。我にも忘年の交久しかりければ、是より後の明くれには、あらましかばとおもふ悔あらでやは有べき。よはひは恨なき齢ともいへ、別はうらめしきわかれ也けり。

弓張の梓にもよれほと〻ぎす

## 方笠庵記 應二松原氏需一

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠庵の記をもとむ。けだし此庵に此名をよぶ事、いかならんとゆかしむに、たゞ世を例の洒落に見破りて、爰に五十年の尻をすゆるとも、味噌する朝、茶を煎るゆふべも世帶にほだされず。耳目は四季の花鳥にあそばせ、吟魂は千里の雲水にかけめぐりて、是を一かいの笠とおもへるにや。方の一字は、笠のかさならぬ形をさしていふなるべし。さるは簸逈の明神もゆるし給へば、箱根今切の關守もとがめず。あるは吉野の櫻みせんとうかれしも、市人に是うらんと雪に狂せし昔人も、居ながら爰の俤にぞみるらん。されば世の俗客は、此庵のありとはみえて、是が笠なる事をしらず。あるじは是が笠なる事をさとりて、これが菴なる事をしる。いざや我も此道の同行なり。森はござれと諷ひ古せし尚參といふ物の眞似せんと、此笠の端に書付侍る。

## 袋 贊

器は入る〻物をして已が方円に從へむとし、袋は入る〻物に隨て已が方円を必とせず。實なる時は肩に余り、虚なる時はた〻みて懐に隱る。虚實の自在をしる布の一袋、壺中の天地を笑ふべし。

月花の袋や形は定まらず

## 花瓶臺記

井戸車の古びたるを以て花瓶の臺となせるあり。是はあ

る官邸の天井のうへにかくろへて、塵にうづもれありしを見出て、面白き容なりとて其片面に漆して、かく風流なる物とはなれり。さればにや、渠がむかしを思ふに、至つて危き所にかゝり、若水の晨より大晦日の風呂の夕べまで、一日も休することなし。其古びたるさまを見るに、それも暫のほどにはあらじ。影うつせしうなひ子のふりわけがみより、檜垣の嫗みつわぐむまでも見果しならむ。さてや其危きを經つくし、いそがしきを仕果して、今の身の安く靜なること、釣瓶の露ばかりも昔に似たることなし。さもいそがはしかりしほどは、あやしの五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が手にのみひかれつらん。物換り星うつりて、玉も六助も今何くにかある。思ひきや、ひとり此物の身を全うして、今は軒に登り、花瓶を負て、大賓貴客のためにも聊も床を下らず。かゝる貴き行末ならむとは　昔の菜刀今の劒ともいふべからむ。かく安く靜にしてこそ、千世の壽も持ぬべし。そも又摺鉢の欠けて火の飯器に下られ、磨の引わけられて踏石となるなど、靜なりとも何の面目かあらむ。只此物の宿世こそありがたけれ。人も少壯の比は、世につれことにあづかる習ひ、危き所にも身をおき、いそがしき勉も遁るべからず。其灘をつゝがなく越えすまして、かく安靜の境に至らむは、誠にあやかりものなるをや。それも只ひとへにかく用る人にあひける幸ぞかし。もと此ぬしのつかへたてまつる老君の、是を物好て久しく座右にもてあそび給ひしを、新居を卜せし歡とて賜りけると也。愛藏することむべなるかな。予に一語の記を求るまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈ことに成ぬ。

# 宇都良衣 續編 中

## 贈二交花堂一 住二柳町一

所の名にふる遍昭が見わたせばのうたみ思ひよりて、かくのごとく書て贈りし。時も今春の半なれば、東坡が亭に名づけたる前蹤にも似たらむにや。此心を一句にいはゞ、

さく花や交てにしきの柳町

## 續後朗詠集跋

むかふの町にさじの廻らぬ醫師あり。三年に三度名をかふるに、かの梟のおなじ音を啼て他の里へうつるの喩にして、はやらぬはもとのはやらぬ也。交話亭に三度の撰集ありて、題号は同じ朗詠なり。かの醫師を見て是をしりぬ。よく人のもてはやすとを賀すべし〳〵。

## 為二或人一書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたきためしとは、昔大賢もの給ひし。七十にして慕ふ人、今參陽の箕山翁か。此秋先考の五十回の忌に、佛事作善のいとたみはさら也、其生前にすける道とて、四方の俳士に手向の句をもとむ。されば心の水の淺からぬより、かけ見ぬ人までもよせおくり、やごなきかたにもきこえあけて、かたじけなく給はりし句ども、ありとか。誠に人を動すと、いつはりにはあらざりけり。そもかの先人烈志子は、貞享・元祿の比にありて、其角・嵐雪が曹み友として、深く風雅に遊べりとぞ。其世の詠句は古集にも見えたり。其子うまごまでも猶風月の才に富ると、ためしはた世に多からむや。昔曾子が羊棗を食はざるは、父の嗜しとをわすれざばれ也。今此箕山子の俳諧を翫るも、又父の嗜るみ慕へば也。それは孝よりして捨、是は孝よりしてすてず。捨ると捨ぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はゞ、只釣がねとつり鐘にして、挑灯のさたに及ばず。もとより挑灯、何ぞたのまむ。孝子の追福、よく冥闇はてらすべしとぞ。

## 新古蓄記

數奇者ありて、其閑居に名あらむとを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。つゐに辭しまけて止とをえず。されば予が辭するは茶道に疎ければ也。しらざれどもはた是を思ふに、此道はそも古

式ありて、一事一業も矩をはづさず、はづせば放埒の謗りあり。茶抄のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくての舞曲ならねば、さして上手のけじめもわかれじ。しかれば古き二の舞して何の面白きとかあらむ。それを面白がるは其故あり。同じとのかはらざれども、きのふの古きも、けふすればあたらし。けふの新きはあすの古きにして、まして道具の古きを賞すれども、用る心は日ゝにあたらし。新しき物の古くなるは天地自然のとにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覺智のはたらきなるをや。さればこそ目に見えぬ鬼神も我を折、武きもののゝふも丸腰、交をなせば、一椀のつけさしに男女の中立とも成べきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいかにぞや。予が此論もし偶中ならば、あるじの取るとあるべし。そこを天道まかせにして、新古菴の記と題して贈りぬ。誠はせめをのがれむための御茶にごらすといふ物か。もし早合点の人聞て、しんことは團子のとかといはゞ、よしそれも茶うけのさひとなるべし。

### 贈二或法師一辭

衣を錦に染ねども世を遁れたる法師あり。むかしは城下に富る家、たれかれとかぞふるには、指一本のあるじなりしが、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の三字に、家居も藏も盧生が夢となして、蒔る種の菜の花と咲日は、身を蝶ゝの袖かろくうかれありきて、今は寝覺樂也とぞいへりける。さるにかの祖翁のげむ住菴も、人の住捨ける跡なりとぞ。其椎の木の陰を慕へば、おのづから似るとありて、こゝに一廬の主とはなりけり。もとすみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。げに窓も垣ねもよしあるさまなり。されば境によりて心を轉ずとか。聊あるじのためにいはむ。昔の數寄者、今の俳諧、其風流は通ひもすらん、心はおのづからけじめやわかるべき。そもや茶道は、すべての調度も古き物をと愛るが中にも、長月比の水仙をたづね、霜間に嫩菜をさがし、三月の筍も孝行のさたにはあらず。なべてはしりの初物を爭へば、二月の梅・秋の茄子は捨る心も早からむ。これらを風雅の上に思へば、年の內の梅のみこそ花なき時の賞翫なれ。其余ははしりの物を問はず、只のこる雪・殘る花、螢も菊も名殘を慕ひ、おくれし物を四季に憐みて、行く物はなじめども、來るは物の時節に任す。さらでも隙行駒の足に心の鞭は加ふるとな

し。是は米八を誘るにはあらず。其道による所にして、ことに風雅の本意をしるべしとぞ。

瑶袋序　英寿句集　其子洞阿来て請ふ。

瑶袋を披けば金玉有。錦幾重に包たる宋人の燕石もあるを、是かの綱を侗にすといへるかしこき教にして叶ふ物か。されば其玉も價をもとめてうらんとにはあらず。只これ父を慕ふ孝子の手になれるなり。そもやよしのゝ春にあはざりし人も、青葉の木末しげきを見ては、さこそと花は思ひしりぬべし。今此集に序を請れて、生前の至孝問はずしていちじるし。人其誠を感ぜざらむや。我が辭せずして筆をとるも、此とのかくあれば也。

九日寄二服先生一辭

我を生むものは父母也。我を蘇する者は先生なり。僕が今年の秋いたく病るや、此六十こそ我が世のかぎりなりけれと、みづからも思ひ、人も左思へるにや。さし向ひてはいはざれども、つきしろうさまいちじるし。さるを先生の良剤、日をかさね、再九死の地を出て、世は今草木黄み落、虫の音よわり行ほど、我は引たがへて心地たのもしう、菊視ふけふは酒盃をさゝへ手にふるれば、したしきものどもの、たゞ此菊を摘みたるもののごとく笑ひのゝしるさま、いとうれしげなり。さながら例の一瓣は止ず、つたなき狂句して、けふの歓を先生に告るとしかり。

菊の日やまづ初立の草鞋まで

三士挽辭

只年ゝの上をおもふにも、あるはなき数はいやそふと歎くは老の常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。睦月も若菜つむ比、吉森子世をさりぬ。

十くだりにたらでなき身や初霞

と袖の涙もかわかぬに、其廿日余り百根埒まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、ともに往萬も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらひしを、立登る無常の烟も見るかたにたなびけば、猶思ひ出るふしぐも多し。

摘菜せし友を其野の烟とは

是だにさしつどふ悲なるを、きさらぎの初、再兒子江戸にてうせけるよし。嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらむ。

なきかずに指そふる嘆ぞ寒し

## 爾住菴說

こゝにしか住ける法師の、妻もち魚喰て、尊きとはなけれど、只世を遁れ風雅に遊ぶとの聊者撰に似たらむと、筆にまかせてかく書贈れる也。よし今は世にたゝぬ身を、たつみとは人もいはじとぞ。

## 示二先以一辭

横須賀の先以は桶を結を以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶ。知多の浦浪かへすゞゝも、予逢ふ時はかれにしめす。風雅を以家業を妨ぐべからず、家業を以風雅は妨ぐべし。せぬも其日の俳諧にして、障るも其夜の俳諧なり。此を五論によくいへり。あはでやみにしうさをおもひ、仇なる契をかこつをこそ、色好まむとはいはめと高く論ずれば、戀すらかくのごとし。まして俳諧においてをや。月更ては十市の里の哀にも通ふらんと、丁東舍と書て與へぬ。只其響の家にたえず、いとまも浪の音さへ打添て、長く風雅の冥加もあれと也。

## 如是菴挽詞

かりそめの旅とて立別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし南谷坊が魂に告。むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪は鎌倉の月に身を終ふ。もとより俳諧行脚の調する所かくのごとしとしれば、如是菴何ぞうらみむ。何ぞ驚くべき。さはいへ齢は一ッの兄にして、交りし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此度は不之菴におくれ、今亦此漢を愴(イタム)。老の身のいづれか人の上には見聞ならむ。

呼ぶかひもなし蒭鷹の雲陰

## 與二有功子一書

愛して其惡きを知り、憎て其よきをしれとか。人を以言を捨ずとも聞けり。花に囀る鶯も夜なかぬはわるし。畠ほる鳥も月に啼くはよしと、世におほやけの眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君をしらず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富て、詩を以府下に鳴る。且俳諧に遊ては貴賤の情を知ると敏、口を開けば玉を吐、筆をとれば錦を綴る。我が鶏の羣にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふと我が心に違はず、我が云と君に叶ふ。あはれ老の身の容をてらす鏡は、今あるとても何かせむ。我が俳諧の好惡をてらすに、君をますみの鏡とせむに、五十余年の非をもしるべしと、今や老

後の力を得たり。つら〳〵君が俳諧を見るに、もと露川が藍に出るがごとしといへども、其藍の藍ならざるをしりて其色を棄はず。今たゞ濃きみどりに獨淡出せる物也。このごろひそかに論ずる所、文操十論の上において、我に我多年睥睨するところ、涓埃もたがはず。不思議や、しらず我魂もし君が懐をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜむ。抑東花坊は蕉門の逸物也。昔葛の松原より續五論を著す。姿情・花實・附合の論、實に俳諧の骨髓を顯はす。其後東西夜話・夏衣、所々に云物、金言妙説少からず。さるを惜べしみづから終焉の記を書て、支考の名をなきものに擬してより、すべての咎を蓮二に謂せて、文鑑を選して自註をはゞからず、文操を編て眞名の新製に及ぶ。十論を著ては虚實を論じ、名に俳諧の二字を假れども、長助・李助が耳に入らず。酒はやしして餅賣がごとし。徒然草の贊は俳學のさたに及ばず。毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして殘さず。今はた是に何をか加へむ。しかるに先にいふごとく、我君を鏡とせむには、我又清き光なくとも、只滲水の淺きを耻ず。聊君をてらさむとす。其いふ所他にあらず。君、蓮二を誇るをきけども、いまだ支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防げども、其説のよろしきあれば潜にとりて身の上の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其ことの理に叶へば聊用ひて今日の法とす。内證皆かくのごとし。況や支考は蕉門の俊良也。旧説もとより規矩とすべし。かの文操十論の説においても、猶俳諧にとるべき物少からず。君俳諧の益をもとむるに、必是を誤ることなかれ。そも我は君が愛する物なり。君もし憎てよきを忘れなば、其損只君にあり。君もし愛して惡きを知らずば、其損我にありて、くもれる鏡にむかふがごとくならむ。歎く所こゝにあり。呵々。今書をよせて寸志をいふ。多言まことに恐るべし。但我君にかくすことなし。君はた我をいかる者ならんや。知雨亭の秋日にふかく、川崎やが酒日々に厚し。訪れむこといづれの日ぞ。又一笑に相笑ひて三秋の悶を解むのみ。多罪々々。

## 冬の日の序

蕉翁生前の七部集とて世にあがむるが中に、冬の日の集は尾はり五哥仙ともいふなりけり。しかるに暮雨巷の門人駅六なる者の家につたへとゞむる一卷の哥仙あり。これは花替竹葉軒のあるじの、翁を招きて其日にかなれるも

のにして、其坐の荷兮が筆したるまゝに遺せる也。いづれの集に出たりとも見えず。されば暮雨巷曉臺子、是をしみ是を尊みて、社中をかたらひて四卷の哥仙をつらね、再尾張五歌仙を繼むとす。稿なりて閲するに、誰かは狗の尾をもつて貂を續たりといふべき。祖翁の魂もしかへりきたるとも、青眼にして賞し給はむ。今人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。淨寫に臨て予に一話をそへよと請はる。嗟乎是また蕉門の盛事也。何ぞ口を喋んやと、年は明和の五めぐり、龍證方に集る比もあひに逆ふ冬の日の短き筆さしぬらして、聊責をふさぐとしかり。

## 郭公文臺記

郭公の文臺は、名におふ二見浮の浪に立並ばむとにはあらず。昔持ける文臺は、世を遁れかくれ入ける比、今は蹉がもとに客をかぞへて、奈良茶たくべき身にもあらず、さらば不用の物はなきこそまさらめと、ほしがる人に打くれて過ける程も二十年に近し。逦日蓼哉なるをのこ訪ひきて物語ける序に、此菴に此物なきは寺に鉦なき心地ぞする、かばかりの物一ッ何の所せきとかあらむ、かゝるをよく心得たる者あれば翁のために造らせんと、しひてすゝむ。げに思へば必韈帒を濫のみにあらず、坐右にあらばよろづにたよりよきこともあるべし。長明が車につみて、建つ崩しつとそぎたる方丈にだにも、折琴・繼琵琶を貯たるためしを思ふに、あらばさてありなむ。さるにても今世に此道の行はるゝとや、凡心なき惣内杢兵が徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。さるから裏書ゝの望たえず。老の手もたゆきばかり、夢にも見え幻にも立がごく、いとむづかし。只畵もうらがきもなき物あらばやと、この一脚を新製して草廬の藏物とはなせる也。身の後に財のこるは吉田の法師も憎しが、心とめけむと云べき程にもあらず、よからぬ物をとの謗りもあらじ。且此名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほとゝぎす

## 白藏主贊

醫者の若死少からず。出家の地獄さぞあるべし。人の口ばたの飯粒を笑はむより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

異見いふ尻に尾花や白藏主

### 櫻の句小序

松井氏壽菴の主の、こゝに千もとの櫻を植る心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず、おのづから精舍にたよりて佛縁をもむすばしめむとするにあり。剰四方に櫻の句を請集て、永く寶前にとゞめむとす。其志なるに及て予に小序の需あり。我さく、後京極攝政殿のうたに、むかし誰かゝる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけむ、と。是を以てしる、万世の後ち花見む人の植にしもとのぬしを慕ふことを。よし野には其人をしらず。こゝには其人いちじるし。されば不朽の名をうゝるといふべし。我が短才なる、他のいふべきことをしらず。只此一句を擧て、願主の勞の後の世に傳てむなしからざることを賀す。是をも小序といはゞいふべし。

　今植る櫻や世ゝの春の雲

### 八橋集序

はるばるきぬるあとの年月にはあらず。きのふはけふのむかし男ありけり。參河に序草とよばれて風雅に耽るあまり、此国に逢ふる名によりて八橋集選んと思ひわたりしが、たのむまじき世のはかなくも水行川の泡と消て、かけはてざりしうらみの恰がたしと、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。されば名をかりて答はからず。必しら蘭手にかけし尊にかゝはらで、只四季の表をならべて、是を八ツわたせる也。是且遺者の清潔なるべし。我は其澤にさく花の紫のゆかりにもあらねど、ありし世には物いひかはし、此集のあらましをもかたりものせし言の葉のつましあればと、小序を請はる。老のまさなごと何のはえかあらむと、辭するも辭し得ず。すゞろごとを書て贈るに、猶謝していふことあり。駟馬の車にのらずばと青雲をのぞみしかしこき人のしわざには似ず、かの順禮といふものゝ行過がてにはばゞからずふでとりて、かくあらたなる八橋にもはしたなく物かきつく。我只かれがたぐひならじ。もし見苦しと人の情さば、橋守の心にまかせてけづりさらむも、よしや安かるべし。

### 拾ㇾ扇説

人の手より得るを賜といひ、交易して得るを購ると云。もらへば謝するの禮あり。買へば價に高下の論あり。二ッのせわをはなれて拾ふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはある

べき所にあれば、幸のさたには及ばず。思ひかけざるところに得るを、天の與へともいひて、人のよろこぶとなるをや。されば徳に爪長きをのこは、天もあたへぬ物を望て、くらがりに狗子をつかみ、牛の糞に手を汚す。求ては得がたきならひ、かゝる愚人は論ずるに足らず。金銀を拾ふは、ことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其ぬしを尋て戻し、又は心のねぢけ人はかくして戻さぬ不埒もあれば、其ぬしの怨をおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災を拾ふ端とも成ぬべし。このごろ知樂舍の主人、途に一柄の扇を拾へり。是人の落したる物ながら、其ぬしはたゞ腰を撫て、是はといひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其書は松竹草花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此人の心につねに願望のかゝれるありて、天にも神にも祈る中に、此登龍門の吉兆を得たるとをたのもしき物にして、歡ぶこと大かたならず。むべなりや其知樂舍の号も、ゝ(も)とは其住るあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂あればならし。さるや怪みを見ても怪まざれば、其あやしみ破るとぞ。よろこびを見てよろこばゞ、其悦はた空しからじ。比は雪解て梅咲折なれば、戯てかくいひ贈る。

鯉はさぞな烏賊さへのぼる春の雲

## 戯二八龜一

五十やら六十やら、七寺の裏に八龜と名のれども、はつきと年のしれざれば、厄年もいつなりしや。有卦に入るやら、むけたやら、泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性か、金性にてはあらざるべし、かくては年の賀も祝はれず。先生にはあるまじきとなり。いざや年を定めむと連中いひ合せて目利講をもよほし、さすり佛のごとく先生をすゑて各入札をするに、其さま、年の古びやう、所せん了簡をやめて、くる年を生れ年とし、六十一歳本卦のかへり、みづのとの丑、もう／＼是にうつておけ、しやん／＼と埒あけぬ。世はこのごろ年忘の最中に、わすれた年を定むるも定めなき世の中やと觀念して笑ひける人の、

今迄ははつきとしれぬ生れ年
　けふ定まるも又時節哉

## 三鵜集序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の俤にて、四時の雪たえず。花の名所と呼る吉野も、卯月のあらしに吹ちらされ、淀のわたりの郭公も聲とゞまらず、須磨・更科の月といへど、山にかくれてあとの闇は、よのつねにかはるとなし。よそにはなき雪をとゞめてこそ、誠に雪の名所ともいふべけれ。されども歌人の目にいらず。淺間の煙にだに立おとれる詠を惜みて、此國に好事の三士、集作りて世に挑げむとす。集成りて題号を三鴉とはいかに。されば古今集に三鳥の傳ありて、それは安からぬ習なるよし。今又こゝに三鴉の傳あり。そも此撰者三人の各羽の字を以て名とせる、いまだ共羽はいづれの鳥とも定らざりしが、いでや今定めむとするに、もとより異國のことはとはず、我朝にても春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あるは山にかたより、水にのみ住るは不自由なり。さらばかたよらぬ常住の物をえらぶに、鶴の羽は仙人くさく、鷹は猛くて寂しみなし。まして鳶のむくつけなる、鷄は山野にわたらず、鳩は不情に、雀はいそがし。只月にうかれて夜もすがらいも寢ず、雪の寒さにも朝起する鴉の羽こそ、俳諧に借るべき物にありけれと、終に此羽は此鳥に定りぬ。さてこそ鳥羽玉のひかりさして、此集も世にはかゞやくならむ。是此三鳥の傳にして、我はた幸にきくとを得たり。彼古今の三鳥は、われのみしりて意地わろく人にをしへぬがうるさければ、此序に其名をあらはして、撰者のもとめにかふるとしかいふ。

### 笠の次手序

東羽に花雲舗は、子と時をおなじうし、住む所も同じうして、只共國のおなじからざる故に、つひに半面の識ともならず。わづかに俳筆に風雅を通ずれども、それさへ幾重の山を隔、海を渉れば、あるは洪喬が不埒にあふともなきにあらず。されども芦垣のまぢかくて心のうとからむよりは、荻の葉の稀なる音信も、心のしたしきは老を慰む友なるべし。一日假初に晝ねのひぢを曲たる漆園の胡蝶にもあらで、人もすさめぬ身は似合しき蝿となりてたはむれしが、そこにも一顆の瓜の上に卒然として立とまりたるを、我ながらおほけなく、物汚したる心地して夢さめぬ。蝿や我ならん、われや蝿ならんと分別いまだ定らざる所に、花雲舗の消息いたりぬ。緘を披けば、さればこそ書中にいへるとあり。師曾て某句の所に、或は

其地に問訊の句どもを輯て、笠の次手といへる一集梓行の志あり。予に其小序をそへよとぞ。先づ名を聞てより其集の玉なるべき俤こそおしはかられ。さるに其地には文人の輻湊(輳)する東都にもいと近し。金聲の序文は得るも易かりぬべきを、雲水遠き弊邑の老拙に請るゝことや、たとへば崑山の下に居ながら、遙の鞍馬に便して燧石を求るがごとし。實に不才のあたらざるを以て辭せむとするに、彼の思ひ合する夢あり。天已に是を定め、物已に知りて遁るまじきを諭すにこそと、只此物がたりを述て其せめに代ふ。思ふにまた其蝿の、かゝる笠の次手を得て、驥尾につき千里に蹤を遺さむは、李漢が、韓文に序かきて世にしらるゝためしにも似たりと、厚顏に筆とりて雁の翅を勞するとしかり。

## 法樂俳諧序

聞說、むかし頓阿法師、みづから百體の人丸の聖像をきざみて殘せしが、今も世にちりぼひて、たま〳〵和哥者流の家に求得れば、こよなうかしづきもてはやしけるとぞ。邇日黑田氏釜月子の手にかの一體を求出せり。黑田氏嘗て城南前津の里に別莊あり。此地に名におふ富士の高根を、こと山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへりけり。釜月子の嚴父、過し寛延の比ほひ韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字をかゝしめ、則此別莊の号とす。此樓の向ふ所、富士はさら也、其余參州の猿投・信州の御ヶ嶽・駒が嶽まで皆一望の内にいる。南に指をうつせば、熱田・鳴海浮より、すべて當國の哥枕なるもの、十にして七八を斗ふ。實に府下の第一樓なる哉。さればかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見浮・高津の松に見果し日も、ふたゝびこゝにてらさむと也。しかるに主人、つねに俳諧の連歌に遊びて和歌は専とせず。そも俳諧は連哥に出、連歌はもとより和哥の流れにして皆伯仲の風雅なれば、枝こそわかれたれ根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はむやと、いま一卷の俳諧をつらねて法樂に供へんとす。連衆已に定りて、予が老たるを以て小序の求あり。薄劣のあたらざるを悲て辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは若役の請とりにして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一坐に頭をめぐらすに、

あぢきなきかな齢は吾が右に出る人なし。よしや鬢髭を染て、わかとのばらと競はむは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ。眼鏡にしばし筆をとらむは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此日の序者となんぬ。

## 含粲挽哥并序

今年寶暦甲申の五月、是非菴含粲身まかりぬ。旧知各追悼の句を賦し、惜み歎くもむべなる哉。年比夜話亭に風雅を學び、其志厚きより、文會必此人を欠ず。予もまた親しく茸廬を訪はれて、何あればともに支吾を定め、吟おれば互に敲推を論ぜし、今更に往事を思へば、老涙しばしば白鬚をうるほす。聊挽詞を諷て曰、

句ノ中所レ謂蕣子(ヲツキヨ)ヘ、先生前所レ嗜(タシム)勸(スヽムル)ニレ酒ヲ必爲ニ下物一ト、且石榴一株嘗テ與レ予ニ。今猶存ス庭畔ニ一。

其齢なほわかし（原註）女　此わかれなんぞはからむ（原註）占

面影をしたへば　暁の月枕にのこり（原註）殘利

音信をまてば　夕の嵐簷にたえぬ（原註）斷奴

忍ぶ涙を添ふさつきあめ（原註）下米

歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす（原註）幾須

手向の蕣子　酒むなしくあり（原註）在

記念の石榴　露おのづからうるほふ（原註）濕

仇なりやさて

怨むべしあゝ

短夜やうそと見なほす夢もなき（原註）無

## 巴雀・木児三吟十二表長歌行の奥書

我が祖父野双翁、其世に黍吟老人の門に學びて、吟老人及び冽春と両吟三吟の二百韻をとゞめて家にあり。さるは延寶八年野双の齢四十四歳。今七十年の後是を見るに、其たのしむ心一ながらも、風躰まことに今とおなじからず。我又此道に遊ぶが故に當時尾城の兩宗匠をかたらひて、唐て一卷の三吟をとゞむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ菜刀とやならむ。さらば今の菜刀のひかりあらたまりて、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべからず。されば子孫の古きを慕はゞ、是ぞ風雅の變遷をしれと、あはせて青氈の櫃に納めおくことになむ。

寛延三年庚午にあり。柴隠里野有円十九齢の秌八月、知雨亭に筆をとる。

# うづら衣　續編　下

## 燒レ蚊辭

おのが身ひとつは、たゞ塵ひぢの內なる物ながら、類を引群をなし、夕のせどに柱を立、軒端に雷の声をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、末ゝの品に至るまで、誰か一釣の帋帳をもたざるべき。積りて世の費いくばくぞや。されば虻の利觜・蜂の毒尾も、しひて人を害せむともせず。既に仇の逼る時、是をもて防がんとするは、人の刀劔を帯するにひとし。汝が針は只人の油断をうかゞひ、ゝ(ミ)とり口腹のためにむさぼらんとす。たまく蜘の巣につゝまれ、人の手に捉られて、其針を出すことあたはず。然れば巾着切のはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこゝちよくせんとすれど、猶も透間をうかゞふ憎さに、おとなげなきわざながら、紙燭さして汝を駈る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき汝が身を観ずれば、

火をとりに来ぬ蚊は人に焼れけり

## 逢二宜常一辭

浮藻の花のあふつわかれつ、きのふは仕官の席ながら、きのふまで待れし身の、まだ笠紐のあともうせぬに、けふは見送りの席につらなりて、盃を上て驪歌をとなふ。各餞別は今年竹に聯調をよせて、是より無事の便をのみ。

まつといふ名はそひものぞことし竹

## 蟬　引

三伏の日ざかりの暑さにたえがたくて、

蟬あつし搖きらふやとおもふまで

とゞ口ずさびし日數も程なく立かはりて、やゝ秋風に其聲のへり行ほど、さすが哀におもひかへして、

死のこれ一ッばかりは秋の蟬

## 賀二某剃髪一文

漁父が曰、聖人は物に凝滞せず、よく春秋の風にしたがふと。さるゝ官路にある中は、身を清からんとては世にさからひて人ニ憎まれ、身を安からんとては世にへつらひて心に恥かし。今や浮世の替をはらひて、二ッの間に往安き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

## 星の賦

今宵は星の逢夜なりとて、小娘どもの暮待かねて、帶・帷子も常ならずそうぞきつれて、硯洗ひ、梶の葉求め、篠に短冊し、竿に糸懸るなど、此節句斗に殊ニをかしきを、いかで清少納言はあやめにしかずとは定めけむ。人間のさゝめきは、天の聞こと雷の如しとか。星のむつことは二階の耳へも洩さず、天上下界のたがひめこそ殊にねたましけれ。ことしはまだきに秋の名の、みな月のなかばに立そめて、けふくれ行月も影さやかに、端居の袖もすゞしきに、一人の客西瓜によりそひて、我はた星にむかひて何の願かあらん、あはれ此西瓜の赤くてあれかしとおもふこそ、さしあたりてのねがひなれといふ。かたへの翁打わらひて、おもへばかの樂天が、海底の魚も、天上の鳥も、高くとも射つべく、ふかくとも釣べし、たゞあひむかひて咫尺の間もはかりがたしといひしは、たゞ此西瓜の事にこそありけれ。されど織女にいのらむは、門たがへにもやあらんとて、

赤かれと西瓜いのらむ龍田姫

とおもひかけぬ山姫をおどつかして、ほしの手向はなくてぞやみにける。

## 七景記

知雨亭とは郷に共譯（原註）本ノマヽたくはへるが如く、務観が詩によせて靜なる心をいへり。今又半掃庵とは、我物くさの嬾く、掃日よりは、はかぬ日多く、床は塵、庭は落葉に任せがちなる庵のだゝくさをいふ也けり。名は二ッにして物二ッならず。されはこれに七景を撰ぶ。

東嶺孤月　路傍古松　[illegible]丘烟樹　海天歸雁

龍興寺鐘　市門曉鶏　隣舎春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。遠き山ゝの末より北につらなりて、此山のあはひより、十月ばかりのよく晴たるには、士峯のいたゞきもみゆる事あり。夫かあらぬかと昔は人の疑しが、寶永の比かの山の焼ける時、夫とは定まりしかと古き人のいへりけり。されはさなけ山とは、名のをかしくて哥などにも讀べきを、文字を猿投と書けるは少しくちをし。たゞ万葉にぞかゝまほしけれ。されど目にに猿の名もよそならず。ほとゝぎすも蜀魂と書、朝がほも牽牛とかけば、むくつけきたぐひにや。清氏

の女も書にかきておとるものといひしが、字に書て劣るさたはなし。月は夜の長短によりて此山の南北より出て、清光ことにさはる物なし。此府下に月の名所をえらまば、此地をこそいふべかりける。

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきてたてるもあり、又程へだゝりてみゆるもあり。染ぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御劔のむかし語を追ひて、もしは此七ッを以て辛崎の一ッにかへむといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘喬樹は則熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞・秋の嵐、此亭の南の觀、たゞ此景にとゞまる。しばらく杖を曳ば、あけの華表も木の間にみゆめり。鳴海は熱田につらなりて、松風の里・夜寒の里・呼續濱・星崎など、我國の哥枕に、皆此あたりにあつめたり。すべて是熱田の浦邊なれば、海づらもやゝみゆべきほどなれども、家店にさわり森にへだちて、一望のうちにいらず。されば、

海天新雁も此あたりをいへるなりけり。

龍興寺鐘は庵の東、よき程に隔たる木立一村の禪林なり。ある日客ありて物語しける折しも、此鐘のつく〳〵と雲よりつたふを聞て、問て曰、けふ此聲の殊に身にしめる、何ぞ然るやと。我是に答て曰、客もかの廿年の昔をしるならん。此あたりはしばし歌舞の遊里となりて、あけ暮糸竹のえむをあらそひ、月雪花もたゞ少年嫖客の遊にうばゝれしが、其世は此鐘の曉ごとに別を告て、幾衣ゝの腸をたちけむ。世かはり事あらたまりて、今は其形だになく、蛾眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞人の耳にのこりて遺響を悲風に託せるならんと。客も實と聞て、かついたみ、かつ笑ひにき。さてや、

市門の曉鷄は、此西の方あやしの小借屋といふ物軒をならべ、おのがさま〳〵の世渡り侘しげなれど、かゝればおのづから遠里小野のかばかりの聲も、事かゝぬ程に音づれ、はか〳〵敷商人は來らね共、海老・鯛・小貝やうの物名のりて過る事も明くれなり。さればたま〳〵とふ人ありて、みさかなに何よけんなど、一盃をすゝむるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求得る日も有べし。家ゐは是より市門へつらなれば、曉の鳥も枕につたへて、老のね覺のちからとはなれる也。

隣舍の春哥は、もとよりの農家の間なればいふにも及ばず。かのからうすのこほ〱となりし夕がほの隣どのは、なほゆたかなる家ゐにてもやありけん。こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の𣏓・稻の𣏓、あはれは砧の丁東（チントン）にもゆづらず。是をまじへて七景とはなせりけり。さるはいとをこがましく、遼東の豕にも似たれど、賞心は必しも山水の奇絶にもよらじ。名にしあふみの人のみるとも、おのが八所の厚味にあかば、かゝる澹薄のけしきも又めづらしきにめでゝ、一たびの目をとゞめざらめや。

## 不羨庵記

經がたくみゆる世に、わびてはすむらん月をうらやみ、過にし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人にうらやまれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無情の物だにうらやむ世の人心なりけらし。されば身に富みあまり、幸心のまゝにしては、只事毎につきて、他にうらやまれんとのみおもふこそ、くるしきならひなれ。我此草の庵のことそぎたる、更に美む人なければ、我また爰に事たりて、他をうらやめる心なし。人此庵を思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不羨の庵にして、自他の境をわくべからず。若此うらやまざるを羨む人ありとも、我はたゞうらやまれんとの心にはあらず。

## 讓二蓄名一文

鯉とは魚の名なり。大聖取て御子の名とし給へり。虎は獸なり。名を大磯の妓女にとらる。鯉の意よろこぶにあらず、虎はたこれを怒らんや。不羨庵とは我昔しばしつき捨つる号なるを、はたして羨む人ありて、請うて其居に呼ばむとす。我かの鯉と虎とにならひて、よろこぶにあらず、をしみもせず、たはぶれて是に答ふ。

　さかばさけつきすてし名を手鞠花

## 水音舍記

鈴木氏某が居、みづから名づけて水音舍とよぶ。其よぶこと他にあらず。家に久しく傳たる翁の自畫賛あり。かの古池の蛙をかける也。あるじの祕藏むべなるかな。そもや雷霆の百里に轟くも、過れば人の耳にも殘らず。此古池の水の音は、翁の耳に入て口にいづ。其音また人の耳にひゞきて、正風大悟の一句なりとぞ傳へて口にいふ事やまず。耳に入口にいひ、又耳に入口にはいへども、

目にかの昔をみんとする者、今深川の陳迹はたづねても、世うつり人すみかはりて、いづこか夫としる人もなし。たとへば今うつさんとするも、たえてその池なければ、いかに能書のたくみをなせりとも、皆他の池にして此池にはあらず。さればたゞ是をみん物、ひとり白書の一軸にあるべし。ア、此家の風雅を守りて、高く雲井に虹をはくは遠し。此風を望まん者誰か此水音舎をしらざるべき。

## 青白舎記

疊は常に青かるべし。障子・行燈は白をいとはず。清きことその内にあり。其居清ければ、住人の心すなはち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅をいふとても、清からざれば佳句を得がたし。昔阮籍(註)が我まゝにして、すく友とすかぬ人に二色の眼をつかひたるは。つらくせわるき名に立て、人又かれに白眼せざらんや。青白さらに此名によらず。今壯年の官路にたゝむには、友に善惡はえらむとも、只よく衆に交りて禮を忘れず、心に忠を存べくば、かの霜雪のしろきをえて、松はいよ／＼青かるべし。道なんぞ風雅をたのまむ、風雅なんぞ道をそこなはん。あけては金城に登って青雲の志たわまず、暮ては閑居に休て白露のさびをたのしみ、ながく青白舎の主ならむには、青白舎の名空しからじとぞ。

## 七不思議後序

和歌に西行あり、連哥に宗祇あり、俳諧に芭蕉翁ありて、三筋ニ道はわかれども、皆雲水に境界をよす。文人隱士其跡はゆかしむものから、殊に俳諧する人の、杖・草鞋のさびをしたひ、四方の志を專とするより、今や松嶋・象潟をもいまだ見ずといふ俳諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、疱せざる娘のごとし。されども家業に手のひかれず、仕官に脚をほだされて、本意をとげぬも又多し。我はた其とげぬものゝ一ッなり。布袋庵の主人は世に素封の名をしられ、もとより風雅に富れば、身健に年壯にして何ぞ雌伏をなすべきやと、年ゝ東西の旅になぐさみ、ことし又こしの七不思議みんとおもひたてるも、此人にして此病、さらに不思議にはあらざりけり。さればめでたき御代に俳諧の行はるゝことや、西行に宿をしみし江口の君のつれなさもなく、宗祇に髭をこひし盜賊のおそれもなし。行先／＼に同志の徒ありて鷄黍の約をなさゞれども、草履を倒にはき、鉢の木をも蚊遣にたきて、まめやかにもてな

し、手より手へおくらるゝ事、紀行を見てしんぬべし。主人紀行の稿を示すに、末に二三葉の白を餘したるは、予に物書そへよとの設なりとぞ。されど染べき一ことの葉もつや〳〵おもひよらず。たゞおもふに主人の逍遥に耽る、歸鄕のけふも猶越の旅寐のこし方やをしむらんと、句一ッ書て贈る。

　捨かねん扇もこしの馴染より

## 贈曉吾辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁ど五十年、盧生が夢の勘定さらりと濟して、老を告致仕をこふに、勤勞むなしからず、其子に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住の求もいらぬ有がたき隱居とはなりぬ。同じ穴の狐、これをよろこびていひ贈る。

　梅雨晴や世を卯の花は跡の事

## 庵記 應二曉吾需一

緜蠻たる黄鳥の丘隅に止るも、止るは其栖なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不住を事とするは、假の宿にも心とむまじとにや。夫だにも年老足弱らば、止る栖なくてやは有べき。恒の栖なき時は恒の心靜ならず。むべなり、此翁のこの菴むすべることや。子あり姉ありて朝夕の餐を饋れば、維摩の三万二千はしらず、安置する物佛一たい、行灯一ッ・箒一本、茶瓶は火燵にかくべく、硯は机に屬すべし。臥具を納る棚あり、書籍をあぐる架あり。膝を容るにいと安し。風雨の防、座臥の役、いくばくの疊をか費すべき。足たゞ姑く支體の爲にして、心は無邊の天地に遊べば、世人はこれを狹しといふとも、あるじは猶ひろしとぞいふなりける。

　蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

## 蝸牛齋頌

椎による物は風のおそれあり、土にかくるゝ物は雨のうれひ有。かの蓮胤が車二ッにつむといひしも、猶此ものゝ安きにはしかず。あるじにこれにならふものか。

　巣でもなく穴にもあらず蝸牛

## 黄岡亭記

世の求る所、衣食住の三ッありて、一日もなくては叶はず。されど心をして清からしめ、心をして靜ならしむるは、只棲ム所によれる事、かの江南の橘のたぐひあらざらんや。我きけり、此亭は西南に望をひらき、其まゝに月もたの

まじ　と翁の吟を殘されける伊吹の嶽は殊にしるし。南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田かぎりなく、村落よきほどにへだゝれば、春は雲雀の雲に啼、秋は砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に坐して清女が簾を挑て、四時の農業目をたのしましむる外、岐山の街道もこゝによれば、通ふ市人の負ふ者・うたひ行者、おのがさま／＼なり。かれはせわしき世わたりならんも、よそにみる目はいそがしからず。東には岐岨川ながれて、とわたる舟の榜の音も夜半の枕にひゞくとぞ。されば哥人の題する物、詩客の吟に入る所、こゝにとりてあまり有。此比人ありて此亭に名を求、且記をもとむ。辭する事度ゝなれば、請ふこと又度ゝなり。しかれば我猶きける事あり。此居の北にめぐりて竹の林しげれり、大なる物椽(タルキ)のごとしと。是ぞ此家のときはを守りて、あるじの千代の友ならんには、かの地に是をなぞらへて卒爾に黄岡亭とよぶ。たゞ我聞てめにはみず、心に察して筆に寫す。もし此言のかなふべくば、取て此亭の記とすべし。もし此言のふたらずんば、よし醤瓶に蓋してやみなむ。やみね／＼、重ねてわれを煩はす事なかれ。

### 名二茶杪一辭

茶杪に名を付て得させよといふ人あり。其いふ人はわが此道によらざるをしりていふなれば、おもしろくおぼえて、雪の夜と書て贈る。君しるや、雪はしろく夜は寒し。

　茶にたわむ竹や雪より猶寒し

### 飛鳥山賦

けふはこの事かの事にさはる事あり、あすは飛鳥山の花みん／＼と心に過る日數も、やゝ彌生の廿日あまり、尋し花は名殘なくちりて、染かはる若葉の其色としもなきを、春を惜む遊人は我のみにもあらず。爰に酒のみ、かしこにうたひて、此夕暮に歸るさわするゝも、中ゝ心ふかきかたにおもひなさる。

　ちり殘る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじり、さはる物なく、らう／＼と霞わたれる田野・村落の詠、えならず。きせるをくゆらすこと暫時あり。

　雲雀より田打へ遠し山の上

### 贈二所レ訪不レ遇人一文

安達が原の閨ならずも、さしもしのびし蓬生の隱家を、留守のすき間に見顯はされたる、ねたきわざなれ。菴もりける男の思ひがけなくて、顏は目ばかりになりて、おどろきまどひぬらんさまも、思ひやるにをかしかりけり。さるもあるじのいたらましかば、椎の葉にもるもてなしもすべきをと、今さらいひたらんは、かの千切木といふ猿樂狂言の心地やせん。秋もやゝくれぬ。時雨のやどりはさらにして、友おもはるゝ雪もあらざらんや。かさねて夜うちの油斷すべからずと、茶碗とゝのへ、きせる求めて、是よりひそかに人待心はならひ侍り。猶菊によせて句を殘し給へる楚巾子へいひつかはす。

　犬蓼のはなやとがめし留守の門

芭蕉によせて句を殘し給ひし芦丈子へ贈る。

　いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

## 望鱗亭記 應二永田氏需一

目に視る所にして思是に從ふとは古人の言なりかし。されば世の人の住する所、或は山林にむかひ江湖を望むを以て其居に誇れども、官士の上に於て此望にこゝろをとめば、いでや印を解き冠をかけばやと、世を遯尻の心も誘べし。孟母の折々借屋替も只それなり。永田氏の居宅は、城樓を望みて金鱗常に軒に輝き、朝日夕日の詠となりとて主人是を愛し、則望鱗の号を揭ぐ。愛するも誠にむべなり。官路に立、青雲の志ある限に、常にかしこき御座所を仰げば、世祿（一）の高恩忘るゝことなく、報國の忠情日々に撓むべからず。かくて功なり名とげて後こそ、子孫に長く傳讓りて、かの山林江湖に望をうつしかへ、殘生をも安く養はめ。今は此望何かは是にしかむ。主人此記を求てゆるさず。筆にまかせて其責をふさぐ。人嗚呼なりと笑はむもよしや。請はるゝよりも笑はるゝは身に安ければなり。

## 訪二以文一辭

以文子君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏げしき、名におふかけ橋・寐覺の詠をつくして歸國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此新宅に馬をとゞむ。さてもつりそめしかやの匂ひに、猶旅寐の心やせむ。今ことに夏をむねとする物ずきに叶ひて、あるじの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよいよなつかし。

生壁にまだ旅の香やほとゝぎす

## 嘯花誄

絃を斷、劍をかけしむかしの涙袖にしたゝりて、ことしぞ身一ッの烁とは歎かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、いまた廿に三ッを一期とし、此中秋の月をも待たで故郷の露と消ぬとつげこすにぞ、目に見えぬ風の音におどろくはたゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかゝれたる悲、たとへていはんかたなし。誰かをしまざらん。此花子は武門の藝能他に勝れ、百事百般の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過し比は一日に千句の獨吟を試み、又は夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此道の大悟せむとは常の諺なりしぞかし。我はたいかなるすくせなりけむ、斷金の交久しく、月の夜ばなし雪の朝會、其人もれて我をかしからず、我かけて花子たのしまず。さるを一坐の口くせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上かちて、常に其ともたはぶれにくみ、たま〳〵取かへたる句振有れば、是は我ながらそこの句をいひたり、それは我が句をそこのいはれたりなど、さるがひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよ。思ふにかなし。ある年はそこの別墅に、ざなはれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其山かしこの寺に、すべての行樂、杖をあひ合吟荷を荷ひて、露もたがふとなかりしなからひの、此春君の御恵によりて我はおもはぬ官にうつり、いとまなきにうちまぎれて風雅の會もひまありしが、卯月は旅の衣にぬぎかへて百里の東に別るゝ名殘、たゞにやは止むと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の郭公　と我を見立しに、四月になじむ菅笠の旅　といひつゝ猶我もまた、一しげり蔭そへて待て今年竹　と取あえぬ餅に、たがひの無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればと、かなしく顏のうちまもられつるも、それは我身の上をこそ思ひつれ、花子はすぐれてすこやかなれば、かゝる歎を我聞かむとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは始めて思ひ合されぬる。されば此別のかくあやしきまでに覺ゆるも、我にはとわりと人もおもひゆるすべし。若靈魂物しるとあらば、梁月の夢にも見えて、此手向の敲推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時有て消べし。此恨綿ゝとして盡る期あるべからず。

俳花　そちむけて魂まねかせむ花すゝき

俳禮　社斎に泣袖もなき夜寒哉

草風誄

おとゝしの秋は此武蔵のにありて、嘯花子が訃音に魂をけづり、今年もおなじ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便をきゝけるは、いかなるとにや。其文披き見しには、余りなる驚にや涙さへ落ず。たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひしるにぞ、ほろ〳〵と袖はぬれそめぬる。過し秋の比、げにいつの日なりけむ、いまだ旅立ほども定まらざりし比、いたはりをとひ侍りけるに、其をりはたのもしく見なして、露落る萩か枝のかしらもかろげにもたげて、いでよこのごろは心地も死ぬべく覚えたれば、辭世の句など思ひよせたるを、かゝるともむだ骨折となりぬべきなど、うちゑみきこえしを、あなゆゝし、かばかりのなやみに、いかでさるとのあらん、今は日にそへてぞ力つき給ふべからん、たれかれなどかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたゞ俤の、今更に目の前をさらず。猶ものにかんじたる気色なれば、又こそといひて立つるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が誄かきしほどは、かたみに袖をぬらして、さるにても世に不思議なる人の縁かなと、有まじきたらひの様に、おろかなるまでをしみあひけるを、聞もなく又其人を、おなじむかしに見なしける、其恨いかゞはせん。起て思ひ臥てかなしみ、空しく隣笛に腸を断て、一句を手向るもゝのうけれど、

誄とはまだ思はれず初しぐれ

悼二草風一文

今年の秋にあはじとは、誰れに誓ひし命なりけむ。此水無月の晦日に櫻井氏在此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや、いまだ年も廿四ばかり、月花の哀も身にしむべきほどにもあらぬを、深く風雅に心を入て、其才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、只此人を見ならへと、若き子持たりける親々は、異見の度のと草には引出されつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大将とは、たしかに秀づべき器を、かゝる夏野の露と見なせし恨、けふ御被せぬ人の袖も、十が泪の川瀬にしほらざるべき。今は詮なきた

まよばひして、牌前に一句を手向侍る。

　　こぬわかれあすの文月も片だより

### 悼二八龜一辭

時雨庵のぬし身まかりぬ。馴むつみし年月を思へば、老涙さらに禁じがたし。我庵の巽にあたりて、其あだし野も遠からねば、夕べの霧かと立のぼるはかなき姿を詠やりて、

　　蚊やりにも泣て見る野の煙かな

### 悼二五條坊一文

六ゝ菴に別れ、反香舍世をさりし其折〻の傷はさるとながら、猶此五條坊の健なる、忍山かひなき其世のとどもをも、かたみにいひ出て老を慰むつまともなりしを、名に呼れし蕣のはかなき秋をだに待ず、此水無月の露と消し。惜むべし、悲べし。松竹卒に齢を譲らず、桃李もとよりものいはず。そも我けふよりして、誰とゝもにかむかしを語らん。

　　なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

### 贈二信州松本射山一

姑山といふは、さきに宗匠某にうけえたる名なりとぞ。しかるに此となへの差合ど出來て、改名の字を予にもとむ。されば此名を思ふに、めでたき姑射山の字を摘てかくはいひしならむ。しからば上の一字を置かへて射山とやいはむ、下の一字をあらためて姑峯とやいはむ。いづれももとの意は失はじ。二ッに一ッを定めむは、ぬしの撰にあるべしと、筆の序にかくいふ。

　　おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

### 與レ某文

好て豪飲に耽る人あり。いかに思ひよるとか有けん、忽八仙の仲まを遁れて、今よりはいたく醉はじと固く誓けるが、猶行末の亂、我ながらうしろめたし。坐右に守るべき詞を書て得させよと請。我はもとより下戸なり。醉て面白きやらん、止てよきやらん、其心に闘はらず。されども其責のいと切なれば、いなびがたくてすゞろなる一句を筆す。

　　神もうけよ酒過さじとせし御秡

### 一老翁畫贊

此畫は誰をうつせるならん。しひて名をつけてと望まる。容貌うたがふらくば、陶氏に髣髴たり。されども例の菊

なきはいかに。嗚呼我是をしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

## 定茶名文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めむと我にかたらふに、とりあへず雑の一句を筆に任せて、

茶の下をあふぐ片手は枕かな

さればたまくらともいはゞや。

## 醉寉亭記

こゝに呉竹の世ゝ經たる酒肆あり。さるは臨卭にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず。又六が杉葉常盤の色深く、碓のこだま花紅葉をうなづかせ、土藏の白壁雪を奪ふ。其あるじ又風雅にさへ富ば、騒人とにこゝにたよるに、酒債尋常行處にありといひしは、つもる行への覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて現金買のをのこゝそ、二季の帳をも騒がせず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾には名におふ淺野屋の風を傳ふれど、猶一室に扁すべき号あらむとを予に求む。卒爾に醉寉の二字を與ふ。其意いかにと問ふに、かの鷫鸘の裘を脱、金龜を解て價にあてしためしあれば、仙寉を日ゝ五杯に醉しめて、もとよりかれが持合せの千年の齢を、酒手にこちへとる合点也と、且戯れ且祝して、あるじが爲に謾に筆を採る。

## 秌千居記

居所に号を定てと請ふ人あり。其人もとより名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて夜の錦にかよへるにや。實それ錦をきて夜行がごとしとは、富貴にして人にしられぬををしむ辭とぞ。されども其榮を他に羨ませ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面をさゝげて、是見よかしのふるまひもすべけれ。身に徳あり家富まば、いかにかくろへたらんとも、世におのづからかくれなかるべし。さてこそ錦着て絅をうへにすとのかしこきをしへもある物を。我は只其夜の錦こそ床しけれ。物必尤(ケヤケ)からぬは長久の端なるをや。されば夜の楓の限りなき世ゝを祝して、千秋の二字に定めむとするに、其唱古くしてめづらしからず。此字を上下と置かふるにも、心おなじくして呼ぶ所聊あたらし。終に秋千居の三字を題して、此主の求にかふるとしかり。

也有翁の著述のふみ、鶉ごろもにつきぬとおもひつるに、猶かゝるめでたき錦繡のかゞやける衣ぞのこりたりける。いでや、さかさまに着し朝服より、葛巾山服の老の末まで、さる斑爛のいろにほこらず、てゝら・ふたのゝいやしきをすてず。常談・俗語にこゝろをやりて常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれてたかきこゝろとぞしられたる。あはれ六德そなへし君子にておはしけるを、十德きたる誹諧子とのみおもふめるは、ばくちのをのみめにふれし、ふるぎの市のふるちがへなりけり。そもそもこのふみは、なごやなる垂穗ぬしの單笥のそこにかくしおかれしさいでなるを、袖・おほくびとりならべて、終にたけある衣とはなしつとぞ。かゝるみけしにおのれらが墨つくべくもおほえざれど、ふるきとくいのこはるゝまゝに、此はたぞてをかいけがすも、じゞにかり着のまへ・しりへ、身にあひがたきことになむ。

六樹園主人

# 宇都良衣　拾遺　上

## 壽亭記

おべなり、此亭にことぶきの名ある事。門に万里の湖を通じて、千艘の出入あした、一葉の行かふ夕、枕によりて閑を求れば、軒端になれて伴ふ鶴あり。酒をとゝのへて肴をよべば、俎板に生てはたらく鯛あり。さるは所の仙境に似て、漁村に近き自由なるべし。ましてやごとなき蘭の渠・桂の棹もこゝにうかぶ日は、枝も榮ゆるとうたひつれたる松風の里の松風も、濱の名にしおふ君が千年をや呼續ぬらん。もとより熱田浮・蓬が嶋もはひわたるばかりかしこき神のめぐみはさらにして、塵外の佳觀にあそべば、世にありふれたる温飩・蕎麥切も、爰に不老の藥となりて、ことさらに壽の一字の僞ならぬことわりをしるべしと也。

[illegible]に鶴さて新そばに雁の聲

## 須磨硯記　應二加賀昌氏之需一

連城の珠は其德を名とし、小烏の劍は來るいはれをしら

せ、蟬折の笛はそのかたちの似たるをいふならん。それが中に此硯をあるじの須磨とよべる事は、此海の際に櫻の花を彫なせるが、名におふ若木の俤ありと也。げにおもしろし。此浦はむかし平家の陣をとりては、ものゝふの譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろひに、艶なる物語のあはれもそひて、武になつかしく文にゆかしきを、まして其六十帖も此卷より筆はたてそめて、もと末もとゝのほりぬとか。其人の名の紫なるに此石の紫なる、それも捨がたきゆかりなるべし。さればあるじのつれ〴〵のすさびに、みづから妙觀が刀をもて、これに覆へる物つくり、猶我に一語をそへよといふに、そのいふ人もいはるゝ我も、今年は吾嬬に旅客となりて、ともに故郷戀しきすさびに、羨しくもかへる浪かなと、此須磨の海の名にひかれて、つひに此記のぬしに成ぬ。いざや浦のみるめもはづかしけれど、よしあまの子のはかなきしわざと、其閑守もとがめざるべし。

　　する墨や明くれ須磨の花ぐもり

鴉箴

孝は百行のもとゝこそきくに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物にゝくまれけむ。夫も夕ぐれの端居に、泊がらすの三つ四つつれたるは、清少納言もあはれとはみしを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起さわぎて、常に寐の夢をやぶり、かの楓橋の夜泊に唐人の寐言をも驚しぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の哥にもよまれべきが、田畑にむらがりては、麥をほぜり大根をつゝき、僧都が隱居屋のなつめも、栗栖野の秘藏の柑子も、などいたづらにあらしけむ。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小烏あり、おふけなくも日輪に三足のからすもおはしませば、さのみさがなき物ともおもひくたされず。されば一たび己を顧て、鵜の眞似をする僣上をやめ、鷺を烏の無理をたしなみ、烏麥・烏瓜の備はりたる食もあれば、身を榮樂の慾心に發見して、今かくいへるしめしをも、よくあゝ〳〵と打うなづかば、あんかうからす・のら烏・うかれがらすの浮名もきえて、長くお烏大明神のめぐみかうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、案山子も弓を袋の世となりてん。ア、人の爲におそるべし、身のために愼むべし。

## 送咳氣神表 于レ時在二武州一

今年秋の初かぜ身にしみわたるより、老となく若きとなく疫氣になやみて、清涕の露草葉を爭ひ、積薄のかしらふらつきて、喰物の味をもいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎藥のかほりほのもるゝより、下はあやしの柴ふる人までも、かしらをからげずといふ事なし。芝居入なうして盆狂言の櫓幕いたづらにしぼり上、色里客たえて夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷に守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれ〱て、水馴竿の細元でを流す。祈禱の法師も長髪に忍辱の姿を失ひ、昔(宜)禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者・賣藥の門のみ賑ひて、きのふ剃の匕先も正氣散にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治ならねば、はか〱敷藥代もよるまじ。噫此秋、いかなればかゝる災を下して吏民にくるしみをかけ給ふぞ。願くば天神地祇愛愍の眸をめぐらして、咳氣の邪神を速に西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帋のむづかしきわざはしらずとも、笹の葉にして切かけ太鼓をならして、及ばずながらちからを合せ奉るべしと、丹誠を抽て告奉る微志を、それみそなはし給へ。

## 菊合賦 與二成田某一

此あるじの菊作るにすける、すかずば誠にかくあらましや。されば作るべき花の、これならで何ならん。白は吉野の雲をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ。あるは二月の紅にまさり、あるは八橋の紫をうばひて、詩客の車も停むべし。昔をとこの袖もぬれなん。淺深濃淡の色はさら也、花形は百種の新奇を咲て年〻に其目をおどろかし、國〻に其名を聞ゆ。むかし陶氏が菊に名立るは、只有のまゝの色香にとゞまりて、あるじのためにはいふべくもあらず。春の雨に鍬を入ては、栽るに橐陀が手をくだき、秋の霜に箒をあてゝ、凋むに佐國が心をなやます。むくつけき土大根だに恩をしる心あれば、まして年月の愛をかさねて、いかでか此宿の千年を守らざらん。いでや世に此花ありとも、此人あらずばこの色にさかじ。さらば此人ありとも、此花ならずば此色にさかじ。あるじや此あるじならん、菊や此あるじならんといふに、あるじは其譽を菊にゆづり、きくは其功を主ニ譲り

て、この挨拶の果しなくば世にいふ水懸論にして、秋やむなしく暮ぬらん。いざ我判者せんといふに、物定のはかせにはあらねど、只賦つくりて其日の笑とはなせりける。

蝶〳〵も土ふまぬ日やきく合

## 雪見賦

月華は其へだてなきを、雪見はひたぶるに下戸ならぬ物好ならん。さるは香爐峯に簾を捲き、こたつに目ばかり出したる、それも雪見といはゞいふべけれど、我門には是をとらず。いざころぶまでとながめし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の月もをかしからんと、たれかれの無差別つれ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起居たらんと、南頭にあゆませいづるに、町はねぶかの所ゞかほりて、酒屋・温飩の行燈にこそ、まづは目とゞまる夜のさまなれ。廓の門にさしかゝれば、おなじ心のうかれ人も見えず。月は師走の空すさまじくさえわたりて、はえあひたる雪も、さすがによそよりは身にしむ心地して、過し年武陽の其、里にて、誰送られし下駄の跡と朝霜を詠捨しふること、今我ながらなつかしく、ふと打ずんじたるに、見もしらぬをのこの頭巾まぶかくあたゝかげに、木綿羽織にふくだみたるが、行過がてに耳とくもきゝとゞめて、げに此心ばへの浅からず面白くさぶらふと、打かへし吟じて、むかし伊勢の富倉屋とかいへるに住ける女の、なじみの客の別を見送りて、雪のあしたに立つくして、初雪やわがふところのさむる迄　と口ずさびしをぞ思ひ出侍る。今こゝらにも、さる情しれる女こそゆはね、口をしくこそと、なれ〳〵しげに語りて、やがて立別れぬ。いかなるものなりけん、名もとはず。さては今宵いづ方にてか酒一ッくまんといふに、秦皇の雨ならずも、雪に立よらば松屋の名もをかしと、つひに此門に下駄の歯をたゝきて、

面白の雪の蹴あげや小挑灯

## 旅論

俳諧は人ゞ笠・草鞋の情を専にして、旅情をしらぬ人は風雅もいとゝほしくや。かはゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入よとの金言にぞ覚え侍る。誠に花鳥月雪は、うちあるさまにも有ぬべし。戀と旅とに深き哀はしるならひを、我十六の春やらん、始て伊勢に詣でゝ、わづかに六日ばかりの旅行をなせり。其比風雅もかつてしらず、

今のおもひ心(出ヵ)とするにたらず。是より十とせの今にいたり、たゞ官路にのみ往來して、さらに旅たつ事なし。しかるに、川風寒み千鳥なく也の歌を唱れば、六月の暑中も寒く覺ゆると古人もいへりける。げにや妙句を吟ずれば其境の思はれ、其境を思へば新句を得る。干瓜や汐のひかたの捨小舟　とはいとかしこき御製なり。此捨小舟、玉敷の庭にある事をきかず。たゞあやしの箱といふものにいれて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端にさし置たるをこそみれ。さるを、　御製のめでたきをおもへば、日にみると、こゝろにしるの二ッならざる　いはれならずや。其雲のうへにこゝたくもたぐふるニあらねど、わが旅情の十が一ッもくみしるは、風雅の門を覗くニよれり。抑明日の足をたばひて、くたびれぬさきに馬にたより、闇けんこの相詞をもて、行過がてに鴉のねをなし、物をおとさず、草鞋をぬがさず、茶屋の嫁ゝ・泊の下女にもしこなして物いひたるさま、初心の者のうらやましと思へるばかり、旅になれたるわざならん。旅を家とし、千里を膝にかけたる者は、晝休の店に偏倚っても、やがていびきはかくなれ。只年わかき初たびこそ、其きはゝ物も手につかず。無用の纔きせるに物ずきを盡し、笠・草鞋も十日以前より鼻の先に掛置て、船川の說法きかじと、伯父の見舞に出違ひてそはつきあへるは、駒の朝はやり也。さるを故鄕の旅とおもへば、さすがに節分の豆、早船の守とさわがれて、少しは心の覺束なき方もあらん。出立は茶漬にはしらかし、菅笠の緒の取いそぎたるも、さすがに堺川越る時心細く見かへるは、父母の國をはなるゝ誠也。案のごとくあゆみつかれては泊を待かね、わらぢの緒はときたれど、揚りはなに兩手をつき、やゝひざがらしらにて這あがり、居風呂によびたてらるゝも中ゝ物うきばかりにて、桶に手をかけぬれども、緣のいと高くおぼえて、横ざまにまろびこみたれば、四方はせばくて肩はすぼめたり。折釘に物かけるなと、つれのをとこに氣を付られ、財布の置所に迷ふ。あるは名物の小刀、仕出しの煙草入賣、ねぶたき耳にかしがましくて、木枕に横たわりてぞ一日のたのしみはおぼえぬ。心よき夢は七ッの鐘にゆすられ、起出る床のうさは戀の別にもまさりぬべし。鷄の聲もなきわたり、馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の

並松にたきつき、田はなれの橋につまづく。道端の家に松葉ぱち／＼と打くべて、茶の匂ひかうばしきは、浦山しく心とまるわざなるべし。安倍川の餅は山吹の面影ありて清らかに、岩淵の小豆餅はふじの覺束なきに似よらで、いとむくつけ也。大根漬は喰次第として、すべて五錢の定なるべし。茶屋の田樂は串の數をあらため、酒の直は茶碗に極置て、口のかけたるを置はいとさもしきを、其欠口に親指をあてるは、ともにぬからぬ才覺なりけり。出女の上は木導が說につくしぬ。御油・赤坂ははでにて名高く、吉田・濱松は地味にして艶くし。足袋・鼻紙の商ひは譯の相紋としるべし。赤前垂・紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染入も、引には廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便とはなれり。かりの契もなほざりならず、草鞋のふしに心をつけ、くみ茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五十三次はさら也、邊土の旅に猶うき事はありとしるべし。木賃の宿いといぶせくて、行水の湯は鍋にてわかす。片破月の盞をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰べくもおぼえず。さらでも蚊屋は破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土臼のうたはおさまりて、隣の女夫いさかひを聞、ふすまは引立たれど、おくび形にあきたるなど、足つかれては、襷かゝぬ男に包かゝれ、尻り馬にまたがれに、新枝に腰骨をいたむ。うき目つらき目則風雅の種にして、言につきず、思ふに限なかるべし。あるはいかつの乘合に興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消す。雨の夕は殊に悲しく、月の曉はいつもねぶたし。我かくしりて一座旅情の附合に及ぶ時、眼をふさぎて爰に來往すれば、筒(嚢カ)のうち新規無量の事あり。たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引備立の師となりて人をも敎ふるは、あつぱれ軍者也。我支門を出ずといへども、心をこゝに用る時は、則千里の旅客としるべし。此一僕は、われ廿七歲にて書つけぬ。行末いかなる旅をして猶奧深き隈はしるとも、此論は一字をかへじ。蓋風雅の居ながら物情に亘るの調を、後見ん人にしらせんとなり。

馬かたの寐たあともありつく／＼し

月ひとつほしや／＼とたび乞食

我紋の夜着にあふたる旅籠哉

出女の口に蚊のよるくもりかな

## 賀二小女一辭

婦に三從の道あるや、其家に在て親にしたがふも、父母まめにして揃へばなり。嫁して夫に從ふも、中の睦まじければ也。老て子に從ふも、よき子をもてば也。物の三ッ揃ふは稀にして有がたし。鼎の脚も三ッ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持り。子の年子の月子の日に生れたりとぞ。願うてなり難く、求ても得まじきふしぎなるをや。子はそも十二の始にありて、しかも大黑天のつかはしめ、打出の小槌おもふまゝなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其求なればならし。

花も何みねにみどりの姬小松　峰は三子の隱語也。

## 鉏花生箴

見ぬ國の上戸が、我飮死たらん所に埋よと、其具を常に荷はせてありきたるとか。けふもわするな、あすも忘るなと、調市にせわやきて、祝言ふるまひの門ゝへも持て立せたらん。物いまひする人はさぞ惡み嫌らむ。これは鉏に赤鳥帽子ながら、わる物ずきとはいふべからん。我せどに古き鉏あり。久しく久三が手にも捨られて、今は玉が齒黑壺にも沈むべき身の果なるを、取上て閑居の花生となしぬ。鉏よ〳〵汝に云、

幾春庭の土をかへして　もえ出る草の根は斷つらめ
今より過し罪を悔まば　いけおく花ッよはひをまもれ

## 杪子銘　或人杪子を床の荷物に物ずきして此銘をもとむ。

爰に千早振お多賀杪子ありて、用ひざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用ひられては虎の勢ありて床のうへにものぼらんとす。さるを杵も摺小木も同じ幸を眞似んと思へる、これを世のたとへにして、杪子定規とはを守れりけり。

## 千　亭記　應二下條氏之需一

亭に名づくるに千竿を以てする、君きらふ事なかれ。竹は古人のとり〴〵に愛して、友には今更ふるめかしきも、物は年ゝニふりゆき、姿は日ゝにあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはゞ、句は此君の空心にもとむべく、てにははふし〴〵のほどよからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折ゝの風になびきて、爰に東坡も七賢も、いさしらぬ趣ありといふべし。身はよし鈎冠の仕途におきて、理屈の塵にまじはるとも、纔に半日の閑

み得る時は、是を五湖の舟棹とも詠め、富春の釣竿ともなし、ある日は竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老をこまねびて、俳諧自在の遊をしれるより、千竿の名のむなしからずば、よもつきじ〳〵、万代までの竹のやどりと、名におふ鳥も此枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし。猶思ふ＝此亭の朝風さやぐ春も有べく、雪にをかしき夕もあるべけれど、我はたゞ郭公の告るを待て、筍のさかりをこそ聞べけれと、たはぶれて筆をとゞめぬ。

## 野遊集序　應二川合氏需一

仁者の山をも逐はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立るは、むべなり武藤野の騒客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其道を濱の眞砂とは、盡ぬたとへはさもありぬべし。おなじものゝいつも白からんは、目まぎろしき方のいかゞはあるべき。そこを正風の俳諧にいはゞ、同じ野の草ながら、みどりにもえ、錦にそめて、古き物は古き儘にして、其日其時に新しき、此野に心を遊ばしめば、たねはよし武蔵野の、是もつきしなき言の葉なるべし。

## 寐物語後序　應二安田氏之需一

灞橋に危み擧て陽關の曲を諷ひ、八橋に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けさながら、それはみぬ國の花鳥をかしからず、是はやまとことばにさへられて、にげなきわざはいひもらすふし〳〵も多かるべし。むかしわが翁、川ばたの捨子に物なげくはせ、芋あらふ女をも詠すてざりしより、世に其風を學ぶ人、多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも此一軸の殊に縦横自在をえて、あるは猿渡の舟に無常を観じ、志津が嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物おぼえよき男出きたりて、昔がたりに竹杖も朽しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑上手の女ありて酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみ・かなしみ見るうちに行かふ中に、かの金津の里には、いとなまめいたる女はらからすみて、そこの旅ねの枕こぞ、常盤の山の岩つゝじ、わすれがたきかくろへごとも、おもひやるにねたかりぬべし。さるを此作者は蕉門の俳士とこそ聞＝、千万言のうちに、などや一句の吟もなし。是や無絃の琴を撫ッたる、誠に琴道の尋常ならず。音立る調にも勝れる事を、ひそ

かに此寐物語に聞侍る。

## 贈二五條房一書賛

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に殘りて、聞人感を起し、白藏主が異見は大藏・和泉が家に傳えて、見る者笑を催す。誠のあるとあらざる成べし。我筆すさびのざれ詞ながら、もやう過たらんは正風にやたがふべきと、深切の一棒に始て目悟ておもふに、誠ニ是よりいくばくの謗をか遁るべき。我爲には千金にもかふまじき賜なるをや。是を贈りて是を謝す。願くば五條坊に納て、昨非を改むるしると見給へと也。

こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

〔マヽ〕

## 蛙歌

蛙〻、すみよしの浦のみるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其徳のたかきや。かはづ〳〵、廬山の雨のつれ〴〵に、詩人も鼓吹とほめおきて、その聲のたえなるや。蛙〻、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐て、そのわざのあやしきや。かはづ〳〵、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、其名の世〻に聞えたるや。かはづ〳〵、朱雀の小田に啼つれて、逆夜わかれの曉に、嬉し悲しとうたはるゝ、其哀のわりなきや。かはづ〳〵、深川の古池にさびしき音をきかせて、おきなのゆめをさましたる、其功のうへなきや。



## 夢人記

旅の住るは殊にすきまがちなる木がらしの窓さしかためて、今宵は世務の妨なければ、ありし猪の子の餘波とて、人のえさせたるもちゐ煎(炙)させなど、其間のすさびに大根引の發句せむと、例の集ども取ちらすに、猿簑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其夜の切火桶も、この比にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寐の夢なりけり。忽然と人ありて、世〻の誹諧の變化などかたる。其辯懸河の如し。さて我いはく、今案ずる所の大根引は、はじめて祖翁の季を定めて、古人のしらぬ題なれば、其こゝろみにこれを以てとはむ。季吟老人世にありて、其時此句を求めんとせばいかに。夢ハ言下に吟じていはく、

暮るまでやすまずひくや大根機

增山井・續連珠の趣もこれ也。根機つよきといふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたる迄なり。其後宗因に變化してはいかに、

大根引あと黑波とぞなりにける

黑の一字をあたらしみにして、諸の詞を用ひたる、これらや談林にあらずといはざるべし　いでや元祿の比正風世にひらけて、其門人三千の徒すべて是に德化せられたれど、猶おのがじゝこのむ所にひかれて、風体のくせはわかるべし。晋其角は作にひかれて、其枝其葉にいたりては、墨子が歎きし白糸も、本の色なくむすぼゝれて、とけがたきなぞ〜なるべし。强てそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬきの大根畑

かくもいふべくや。引手あまたの詞をかくして、其餘は風流をかざる。さてや許六がこのむ所はいかに、

手の甲で鼻ぬぐひけり大根引

惟然坊が手筋はいかに、

大根引ちから出ひても哀なぞ

露川が身のなる果はいかに、

[illegible]持やたぶさ隠んで大根引

さまぐ〜の風格は得てきゝぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよと乞うに、笑てこたへず。いざや〜とせむる内に、無下にゆりおこされ、斯て打綿がへれば、偶の折數をつきすゑたり。誠や五十年の變化をみしも、思へば粟餅のにゆる間にてぞありける。

## 悼[illegible]壽舍之文

無常の風のおどろかすは、めに見えぬ秋をしも待ざりけり。此水無月の十八日に、便の人につけて、過し比より寝のたやましく、うちこもり侍れば、久しくおとなひ侍らず、いぶかしとやおもふらんときこえしに、筆の跡も例のこまやかに、物うげにもみえねば、たゞ此暑さの故にやあらん、庭に秋草の秋まちかねて咲出るもあれば、是折て便せんと、さしもいそがぬ心に、其日又の日と暮し侍るを、あくるあしたの露と消べしとは、いかにおもひかくべき。世はたゞ夢としりながら、かゝる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけんまゝ子立の石も、一ッうせ二ッうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三ッばかりもたらずや。吟行い

まだ杖にもよらず、机に眼鏡も忘がちなれば、行末遠くたのみし人ゝのいかに翅もがれたる嘆すらんと、我にてよそもおもひしられぬ。(原註 本ノマヽ)夜沾てうくたすばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを季札がむかしに手折て、あすの七日をぞとひ侍りける。

虫はまだ人になかせて夏の草

### 贈巴水ニ辭

廿五年の勤勞めでたく功なりて、今や耳目肺腸わが物にもらひかへして、みづからの世帶をいとなむ。かゝる身においてはじめにその心あらざる物なく、巴水がごとく終をよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでゝ竹に巣ごしらへ

### 某別墅記

あしたに劍を佩て營中にひざを屈し、ゆふべにはゆふつけ鳥のそら音ははからねば、理屈の關の戸をのがれて此閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人ならねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず。しかも淵明が風流(リウ)をしたふ。さてこそ所も柳町の、その五株のゆかりなるべきにや。みよしのゝ山のあなたに宿もがな、とは何をおもひのすてこと葉ぞや。靜なる望はさも有べきが、雪の朝に豆腐賣もこず、つきの夕は酒をも佗らむを。たゞ此幽栖のあやしくも市の中にありて、さらに車馬の喧をきかず。塩も油も求るにやすく、温飩・蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅の間地ながら、北に一重の窓をひらけば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす春は蛙の聲近く、詩家の鼓吹を木枕に聞、早苗とる比は螢のとびちがひて、車胤が夜なべにとぼしからず。まして稻葉の雲も色づけば、雁わたり虫啼て、ひとりぞ月はみるべかりける、と寂し好のかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山〳〵の雪を、剡溪に棹をもさゝず、佐野のわたりに袖もはらはず、火燵に目ばかり出せる詠は、昔王維が輞川の別墅も、この物ずきはいさしらざるべし。比は長月なりけり。うらなき旧友みたりよたり爰に招かれて、酒のみ茶呑事ありしが、折しも十五夜の月いとよく晴たるに、此興は忘がたしなどうかれさわぎ、裏なる柴折戸開て稻葉の露にそぼち遊し序、あるじ此記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事を忘れて、かたはらいたき筆とる事にはなりぬ。あなか

しこ、知己ならぬ世の人にもらし給ひそ。

又とはむ菊より後の根ぶか畑

### 吾樂菴記 應二桑雨需一

獨樂園のぬしは、みづから其記を書て人に其樂をしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其記を求て其樂をかたらず。我こちたくも君にさとさむ。世にたのしみのおのがさま〳〵ながら、樂を求て樂とするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき秋風のはやうよりいひしろひて、今年は珍らしき月見せむと催せば、巫山の雲心なく立さわぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其日彼の日は興ある花見せんとさわげば、祈らぬ山おろしはげしく吹て、賞心霞にへだち安し。況娼樓舞莚のたのしみにおける、まして世務仕官の上においてをや。芦分船のさはりがちにて、難波に恨のはれまなからん。さるはたのしみを求てかなしみを求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみをしらぬ人は、夕にたのしみて朝にたのしまず。よく樂をしる人は、何か心のたのしまざらん。もし此樂に乏しからずば、誠に吾樂庵のあるじなるべし。

月花の富や心の藏の數

### 桃花石記

一日木仝きたり、告て曰、或人の家の藪に色異なる石のうづもれてある事久し。或は人是を怪めども、わづかに半面をあらはして、出す事いとたやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日其友鳥貢なる者深く望みて、あるじに受得、とかくして堀出せり。是を石工に見するに、驚て曰、此名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村・勝原村より出し、其性至て硬し。物に用ゆるに最上とす。然るに今其もとより絶て出す事なし。世に稀にして人知ず。最珍とすべしと。其ぬしよろこびて是を彫しめ、手水を湛ふる具となせり。翁これが爲に記を書む事を乞。予曰、誠に既に盡せり、其外に何をいひてか記を作らん、只其人にかく傳へよと。木仝猶こふてやまず。予重ねて云、むかし三人の僧あり、ともに不言の行を約す。既にして一人の僧誤て言を發す。一僧驚きあわてゝ云、何ぞ誓を敗りて物いひしやと。殘の僧かへりみていはく、二人は既に行をやぶる。今守る者は我一人なりと。卒に三僧の行、ともにやぶれりとぞ。此僧の例をおもへば、いはずといふもの卽いふなる時は、我記を作らずといふも亦卽記を

作るといふものならんをや。是を以かの石にとへ。名にしおふ桃花ものいはねも、蹊をなすはいふに似たり。石も又うなづきたるためしあるをと、笑て卒に是を記とす。

### 定二齋号一序

大非氏瓦光子は、武門に生れて其家の枝(投)に揺からず。されど脚に(一)腦る所ありて駈走に健ならず。かくては弓箭も取がたしとて、すつべき物はとよみけん薬師寺が心をしりて、五斗の米の望をたち、三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとて熊谷が無常を観じ、瀧口が戀にも懲(コ)りねば、髪をもそらず、法衣もまとはず。猶長袴織に大脇差、野中の清水のむかしをのこせば、心しらぬ人にこはがらるゝもをかし。静なる事に好キならひたる事ありて、つれ〲の手すさびがてら、今のたつきとも成から、市中に薬をうらず、二頃の田に足もよごさず。朝三暮四に餘りあれば、かの賽(塞)翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならむ。世に謗る人はいさ、うらやむ人の多きをみるべし。此ごろ茶話の餘、我に齋号を定てよとこはる。口にまかせて自至齋と名づく。其心あるにあらず。なきかといはゞ、なきにしもあらじ。

### 名レ亭説

青木川の滸(ホトリ)にすむ人の、其居に号あらん事を望む。かの川はもとより鯉の多くすむ所とこそきけ。爰に此人の逍遥せば、魚の樂をよくしるなるべし。されば魚ならずして魚の樂をいかでかしらんと難ぜし人は、はた其知る人のしることをも、其人ならねばしらじとぞ。今此人の知る事をしるも、我ならずして何ぞしらんやと、笑て卒に知樂舍と書て贈る。

　見えすくや魚のこゝろも水の月

### 宜白亭記 應二山村氏之需一

見て是をいはむとする時は、詞の及ばざる事をくるしみ、見ずしていはんとする者は、心のおよばざらん事を恐る。我聞、此亭は領主の閑に吼る所にして、謝氏が履を勞する事二町許、脩竹・深樹の間をひらきて、登臨亦たぐひなしとか。げに兼好も、此麻衣の木曾にぞまづとて、静なる方は求しをや。されば領主反裔舍にさゝやき合て、いざや此亭にさせる名なし、試に予に記をこひて、是が名もそれによらむとたくむ事あり。名を聞てこそ俤もおしはからるれ、名はこれが後ならんぞことにかたきわざな

ありと、むつかれど、此ごろそゝのかさるゝ事いと切也。爰に風雅の天眼通なからんやと、潜に此亭をはかるに、嶺の尾上の花によろしく、月によろしきより夏によろしく、名におふ駒が嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて、岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、持て贈るにたえずといひし雲心なくて吟魂を助くるによろし。かれといひ是といひ、此亭に宜からむと、宜白の二字をを名として贈る。もし宜からずといはゞ、白は物の下地にして、染ればそまる色なるからに、他の宜しきに染かふべしと、爰に云抜々の詞をまうけて責をのがるゝ物ならし。

# 宇都良衣 拾遺 中

## 岐岨路紀行 文化二年

乙丑のことし、君にしたがひ奉りて、卯月六日江戸を出て尾陽にのぼる。一年を恙なく歸國のけふを待えたるよろこび、人〻も賀しあへるに、

卯花の中にうからぬ首途かな

年〻になじみし武府の人〻には、淺からず名殘をしまるゝもありて、さすがにこゝろひかるゝ別とり〴〵なり。

麥の穂の睫もぬれてわかれかな

今年は木曾の山路を分る也けり。仕官の身のならはし、こゝろならず馬鎗のいかめしくさゞめきつれたる、野老村童に事問まほしきも、物いひかはさんはにげなきやうなれば、店の餅酒は見ぬ顔して過侍る。本意ならぬもいかゞはせむ。こゝの山はとありて、かしこの川はかくありてと書付たらん、その所みぬ人はさもおぼえぬ物にて、殊に筆の及ぶまじう、何のはえかあらん。たゞおもひよれる句どもを少し筆にとむるのみ。

蕨といへる所に、とばかり書けとゝのへて出づ。

　　我とむる手もなき夏のわらび哉

此夜上尾に泊る。

**七日**

熊谷寺に直實が像などあるよし。みちのあはたゞしくて立よらず。

　　熊谷もはては坊主やけしの花

今夜本庄に泊る。

**八日**

かくいへる所にて、

　　くらが野ときけばや里も木下闇

けふは過る道すがら、家々の軒に藤をさし侍り、花をもさし、葉をもさせり。所の人にきけば、佛生會の手向也と云。故郷にて見馴ぬ事也。みちの國に花かつみふくたぐひにやとめづらし。

　　灌佛もやがてはへとて藤の花

此夜板鼻にとまる。

**九日**

碓氷峠を越侍る。般若石といへる嶮岨をすぎてより、さのみけはしからねば歩行にて行。山谷の桃・櫻は夏としもなく、木のめなど打けぶるやうなるもあり。けふ　御前に出たるに、いかにや、山はいまだ衣かふべき時節ともなし。花なども春のこゝちするに、例のくちずさぶ事も有べし。此心おもひよれるや、との給はするに、いさ道のくるしうゆひて、むげに申出る事もゆはずと、御いらへ申に、さりともこゝにはあるべき物をとて笑はせ給ふ。

　　綿入を木曾路の夏や花の旅

　　雛の見ぬ山路の桃は四月かな

などさま〴〵に句をつくりみるに、よくもあらねば、御前に啓する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に淺間山ま近くみえて、けふは晴たる空に、ことに煙のまがふ方なく立登るさまめづらし。此あたりはいまだ蚊も出ねば、

　　蚊にはまだたかぬ煙を淺間山

**十日**

此夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる十二三なる童の、茶など

運びてかしこけなるに、見えわたりたる山をとへば、かれは大田澤、これは檳榔山とをしゆ。名にしおふくろかみ山にもよらずして、いかで此名をよびけんとゆかし。つれ〴〵なるに、おもしろき草帋やある、みせよといへば、あるじのいかにたくはへ置るにか、運氣論といへる醫書を取出たり。是はむづかしくてよみがたしといへば、義經記を持來れり。こゝかしこよみてつかれをまぎるゝほど、童はそこにかしこまりをれり。

やがてみむ織もちかし武藏坊

十一日

和田峠をかちにてこす。こゝはすぐれて高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯といへるは、日本にならぶ方なく高きよし。されど此國は地高き故、人はさしも覺えぬと也。げに雪の多く殘て有。けふはことに雲深き中をわけ行に、咫尺もわかぬほど也。

雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし谷の鶯のみ、けぢかき心地ぞする。かしこへも山里に春は告ると哥にもよみし雪のうちの、夏はしらでやあらん。哥よむ人などは、此心もていひつゞくろふしもあるべし。

本山にとまる。

十二日

けふは福しまにて、山村氏が亭にいらせたまふ。家ゐつき〴〵敷、のしめ上下にもてさわぎて、何くれともてなしたてまつる。鯛・鰤などの膳にひろごりたる、けふは山家めきたる心地もせず。

俎板のなる日はきかずかんこ鳥

十三日

けふは名におふかけ橋をわたる。

眠るなと馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寐覺の床御覽ず。爰に筏士のさま〴〵自由をえたるを、めづらしき物にめでさせ給ふ。いかばかり吹と、とふべき折にもあらず。

ちる物はなくて筏に青あらし

此あたりを見かへりの里といふ也と、人の指さしてをしふ。

又いつか木曾の麻衣あさからぬ
なごりやあとにみかへりの里

是はもとより哥枕にもあらねど、句のなかりければ、哥よむ人のまねびしてかく口ずさむ。いとかたはらいたし。こゝにあやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、誠は三歸の里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。

山中はたえて竹のなき所にて、桶の箍などいふ物も木て營めり。こゝの宿にて初て竹の子を調じて出せるを、いとめづらしくて、

　竹の子にあふて家路もほどちかし

十五日

土田にとまる。

あくる日家につき侍る。此間句もなし。

## 熱海紀行

府君の御母公、ゆあみせさせ給はむとて、延享のことし、江戸より豆州のあたみといへる所へわたらせ給ふ御ともつかうまつり、葉月の廿九日江戸を出て、熱海にいたるは長月二日なり。

　草の葉に月のたびねも二日から

此里のさま、後に山めぐり、前に海近くして、いさみぬ須磨のけしきもかくやあらんと、折から秋のね覺も心すむ旅寐には有ける。湯本はことに我やどりの傍に近ければ、日夜二六たびばかり、おどろ〱しくわき出る音高く、山水浦波にいどみあひてかしがましき物から、世の中と淺りくらべては、いかにとかいふべき。網引・釣するわざもあれど、おり立ておのが世のたつきとするものは少し。耳なれぬ魚の名ども、うるは・ひらこ・はまち・そうだなど、後にはおのづから見おぼえてみないふ。山田色づく比にて、鹿追ふ小屋に引板ひきならすなど、めづらしう哀なり。鹿の聲は夜もすがら聞えて、夕霧の巻などよむこゝちす。

　夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲

月は殊に海より出て山に入。宵ゝの詠えならず。浪よするうらのけしき、我やどりの東おもてよりもくまなく見えわたれば、明暮欄干に打もたれて、烏帽子きたらましかば、我を屏風の繪に書べきをと笑ふ。

　ほし棹の是にも月や濡浴衣

尾花ちるかたはへりけり浦の波

打まぜて浪にまけたる砧かな

釣舟や案山子のり行波の上

あるじの子、彦助といふ。年十四ばかり。常に來なれて、あまのさへづりめきて、所のことなど聞おぼえて語る。かれに案内させて、あたりの宮寺など見めぐり、漁家に茶を乞ひ、樵夫にたばこの火かりて、吟歩機を忘るゝ程いひ捨たる句ども、例のしる人のもとに書つけてつかはす。登歩一里ばかり、日かね山にのぼれば地藏堂あり。駿豆の海山眼下につらなり、景色いふばかりなし。富士は西に隈なく、こと山の秋にわかれて雪しろき姿、衣テ錦ヲ尚ヘレス綱とかくいへる、此山の德に比すべきにぞ。

四方山のにしきや富士にはづかしき

都松といへるは、染殿の后の跡のしるし也と、野老のいひ傳へたりと語る。いづれの時にか、柿本紀僧正、染殿の后と密通の事ありとて、さらぬ疑の科にてこゝに流されて後失給ふ。后は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが、其仇名のうきをいとひて、二ッの祠、むかしはたがひに相そむきてありし。今は八幡は外にうつして、其詞も殘り侍らず。常に后のみやこを戀たまひしが、あとのしるしの松も、都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きなるさくらの有し、中比此うしろに御殿作けるが、さはりなりとて此木を伐しかば、かの松も程なく枯にけりとぞ。其木のともに枯たるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんと覺束なし。

松かれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きなる椎の木二木のはざまにあり。

御所柿の色にこりてや椎が本

湯前權現に我疾をいのる。

新蕎麥や疝氣に利生みせたまへ

伊豆權現奉納。

海と山兩部に月のくまもなし

業平井は里中にあり。爰の男女の常に水汲かけうつして、おのづから妹脊の媒ともなれば、いひならはしたりとぞ。

豆ひきの影や井筒にまめをとこ

平左衞門湯といふあり。平左衞門かひなしとよばれには湧出るとて、里の子どもの呼て旅客に錢などもらふ。

子どもいざよばれ紅葉に立田姫

重陽にあふ。
　撰り出して菊をいはゝむくさ枕
後の月。
　山の湯も溫飩にわくか後の月
木の宮。
　木の宮も草からさきへ秋くれぬ
暮秋。
　行秋の干魚に殘る鳴子かな
天神。
　飛石や梅にまけじと霜の花
眞鶴が崎。
　まな隺もみじかき冬の日あし哉
大嶋は遠くかすかなり。
　大しまや片目しぐるゝ遠目鏡
はつ嶋はいとちいさき嶋の向に近く浮べり。沖の小嶋はこれ也といふ。又は大嶋をいへりとも、里人のつたへもまち〳〵なり。
　木がらしや片手に撫る嶋ひとつ
十月十三日、あたみをたゝせ給ひて、江府へかへらせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜ばかりおはして、寺社古跡ども御覽ず。したがひ奉りて、のこりなくみめぐるほど、句などいふべき所もおほかりけれど、事にまぎれてみなもらしつ。道をまもりの神に申。
　守り給へ神もおたびの道すがら
榎の島。
　此神の御手にやにほふびはの花
白菊が淵。
　十月やげにしら菊の名もむかし
龍穴。
　此洞をおもへば神も冬ごもり
鎌倉にて、
　鎌倉のかまの名さびて枯野かな
　梶原が矢筈もふゆのかゝし哉
何がしの寺にて重衡の盃をみる。
　さかづきに銚子もそへず寒さ哉
盛久が首の座。
　盛久が命や濱のかへり花
鶴が岡八幡。

御供して宿もるすなり神の松

十九日、金澤の方にまはらせ給ふ。能見堂といへるより八景を見わたす。奇絶の勝景、ことばにのべがたし。折からうちしぐれしに、

八景のうちふたつみつしぐれけり

廿一日、武府にかへらせ給ふ。

## 武藏野紀行

庚申のことし、霜月のはじめなりけり。江戸を出て清戸といふ所に、旅よりたびのかりねも十日あまり、母やある、予やもてると、あるじに咄もやをらなじみそめて、此あたりの事など尋ぎくに、昔はこゝもとも月の名ニおふ武藏野なりしよし。今は家つらなり、田畠と變じて、露おく草の名にもあらぬ大根・午房の、ことにめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶爰ゝには、其廣き野の迹のこれりと聞て、見にまかりける。案内するをとこの鄙なるも、時鳥きくしるべならねばと其日の興にして、龜が谷・下富などいへる村ゝを過て、かの野には出ぬ。誠に四方に木竹もなく、草さへも今は霜かれはてゝ、宴に物すごき原のさま也。

武藏野やいづこみ草のかげひなた

そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな

くれ行空もおもひやりて、

武藏野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋侍り。こゝは伊勢物語にけふはなやきそとよみし跡なれば、里の名もかくよび侍とか。業平塚とてさびしきしるし今も殘れり。歌のこゝろをしらば枯草に哭がらなすてそ、とたはむれて、

こもるかと聞へば枯野のきりぐす

## 內津草

うつゝの里に住る更幽居三止なるをのこ、予が菴に來る毎に、いかでかの山里にも尋來よかし、あるじせんとそゝのかす事年あり。されど今はたゞ老の鴉の月に浮るゝ心さへ懶て眠がちなれば、羽をのぶる事もなくて打過しが、此秋いかなりけん、しきりに山里のけしきゆかしく、ゆくりなく思立て、かのがりとはんと葉月中の八日丑三ッ過る比、庵を出たつ。月くまなくすみわたりて晝のごと

し。也陪なるをのこは、三止にも予にも常にうらなくむつまじければ、よべより庵に來りて此行に伴へり。櫛(比カ)次の市中長く過行に、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まつ名のみにて傾ぶく影は惜まずや、いとくちをしとおもへど、さはれ我も又かゝらましかば、かゝる清光もいざたなくしらでぞあらまし。大曾根といへるあたりに至れば、家ゐるどもゝさま劣りて、鷄の聲戸ゞにきこえたり。

おもひいづる詩ありとりなく里の月

かくいはど、そは何の詩ぞとおほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲

やゝ人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれ也。山田川・かち川をわたるほど夜猶ふかし。此川ゞはかちわたり也。

八月の川かさゝぎの橋もなし

おさども、あなつめたなどわらひのゝしる聲に、我は駕よりさしのぞきて、

かち人の蹴あげや駕に露時雨

ゆく〳〵月もかたぶき過て、夜ゝ明なんとす。

麓からしらむ夜あけや蕎麥畑

鳥居松といふ所にて、わりごやうのものとうでゝよとていこふ。

夜と晝の日は色かへて鳥居松

是より杖曳てかちより行。大泉寺といふ所にいたる。わづかに一里ばかりを歩びて、老の足まだきこうじにたり。又駕にのる。

山がらの出て又籠にもどりけり

道の側に尻ひやし地藏といへるあり。靈驗あるとて人の信仰するとぞ。

尻ひやし地藏はこゝにいつまでも
しりやけ猿のこゝろではなし

坂下・明知・西尾などいふ里ゞをへつゝ行。

駕たてるところ〴〵や蓼の花

むかふより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、内津にすめる試夕なりけり。かれは彼さとに茶をひさぐ者にて、菴へもうとからず訪ひて、年比相しれり。兼てけふ我とふべきあらまし聞えて、三止がかたらひて出せるならし。とばかり行て三止も出むかへり。こゝの名

をとへば鞍骨といふよし。むくつけき名のいかなる故ならん。

　けふこゝへたづね來むまくらはねや
　　くらけの骨にあふ心地する

と戯れて打つれゆく。此あたりより山路やゝさかしく、峯ゝ左右に近くそびえ、大きなる岩ども道もせにそばだち横たはりて、決ゝたる溪泉いたる處にきく。

　名もにたり蔦の細道うつゝ山

ひるばかり内津につく。此所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしげりて、ふもとにつきぐ\敷家るつらなれり。

　山は杉さとも新酒に一つかね

あるじねもごろにもてなし、湯あみ物くひて心落ゐたり。

　夢もみじ鹿きくまでは臂まくら

あるじ、

　　まつ名もはての十九夜の月

と臨してその末ゝもありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、はやうより聞わたりつれば、行ばやの心ありけれど、其あくる日はまづとゞまりて、何くれと語りなぐさむ。亭の前、とばかり庭ありて、いと間近く山さし覆へり。其間に細谷川ながれて、水の音岩にたえず。此上にさしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲たり。此名は孫楚が意ならんと。

　口すゝぐ石もあたりにきりぐ\す

此日妙見宮に詣す。舍よりはいとちかし。猶奥の院へ參らむといふに、こよなうさかしき道になり、老の歩の及ぶまじければ、只やみね、と人ゝいふ。されど阮籍が窮途にこそとゞまらめと笑ひて登る。左右大きなる杉どもの枝さしかはして、日の影もゝれず。細き道の苔なめらかに石高し。右の方に天狗岩といへる世にしらず大きなる巖そばだてり。只一ッの山とこそ見しらるれ。かゝる怪しき岩は他の國にもをさぐ\なしとぞ。

　這ひのぼる蔦もなやむや天狗岩

次第に道さかしく、岩を傳、木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少足とゞまる所に休らふ。こゝに、あふけばかうぐ\しき拜殿みえたり。夫までは十間斗、ことに危き坂あり。社は猶奧まりてましますよし。是まで登し

だにも我にはこちたきわざなり、今はふようなりとて爰にぬかづきて歸る。

　杉ふかしかたじけなさに袖の露

げに本州にかゝる宮ゐありともしらざりけり。若き人ゝはふりはへてもまうでぬべき靈地ならし。其あくる日より雨ふり出て、廿四日まではれやらず。其ほどの事ども筆にまかせて書あつむ。

一日枕流臺にて俳諧す。余興に戯れて、

　こゝに住て善正日夜きく水は
　　ひんがしならで西にながるゝ

あるじが常の名、長谷川善正といへば、かくいへるならし。明智にすむ醫師羽白なるもの尋來りて初てあふ。

　堀て來て草に藥の名をとはむ

と書てあたふ。此人も俳諧を好めり。

試夕が家は更幽居にさしむかへり。一日こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。なりはひいとゆたかなるをのこなれば、

　あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひしか。更幽居はさらにもいはず、試夕があるじまうけのさますら、すべてよづきて、調度などもいと淸らに、こゝろつかひたるふるまひどもけしうはあらず。よろづ目安かりけり。

府下萬松寺にさきにいまぞかりし綱國和尙、退隱して此里見性寺といへるに假に住給へり。久しくしれるなからひなれば、雨の隙に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄る。

　深山客稀有孤猿　豈謂高軒過遠村
　煨芋無收寒涕力　背令王(玉)帶鎭空門

韵を席で謝す。

　滿耳溪泉又斷猿　凄忘塵想宿山村
　逢君猶憶重遊約　嶺上雲多恐鎖門

ある夕あるじ酒すゝむとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若をつくりて水をもり、肴調じて出せり。みれば若荷の子をもて、巧に花の形をまなびたり。

　八月のはちに咲たるかきつばた
　　さてはみやうがに物わすれ花

若きをのこの、醉のあまりに、かうやうの細工に思付けるにや、柿にて猿を造らんとて手をあやまち、血流れた

り。人〻さわぎてやみたりと聞て戯ぶる。

　こりはてゝまう此趣向手がきれた
　　いらざる柿のへたの細工に

といふに、例のとよみになりぬ。

あるじ墨竹の一幅をとう出て賛を求む。唐さまの筆なれば、ざればみたるほ何はいかゞならむと、一絶をつくりて、

　不下與二梅柳一交上　心似二厭レ塵累一
　露深夜雨餘　何借二二妃涙一

と書てあたふ。

雨にたれこめて日をふるまゝに、試夕がもとに信濃なる新蕎麥をえたり。是ひとくさにてもてなさむと招くに任せて、二度此家に遊ぶ。其日はしばし雨小止みて、後の山近く猿の聲しば／＼きこゆ。過し日枕流臺のうへの山遙なる梢に、猿の餌を求めて木づたふを、端居ながらめづらしとて見たりしが、けふは雲樹ふかくかくろへて姿はみえず。

　新蕎麥に猿きく山の夕かな

と書てあるじにとゞむ。

廿五日からうじて雨晴ぬ。けふは虎溪見むとて出たつ。道はひわたるほどゝ思ひしも、二里ばかり隔てりとぞ。道の具ども、例のあるじの心いれてこまやかにまうけぬ。猶あなひがてらとて伴ひ行。里の数越へて、ゆく／＼いとくるしき坂一ッ登り下りて、やをら至り着ぬ。彼の境は、かねてきゝわたりしにも似ず、寺のけはひいたうふりたるとはみゆるものから、住なせる僧の心からにや、哀にたふとき方たえてなし。柱・格子など、頭禮といへるもののならひに、あさましきまで物書けがしたり。庭のさま、人の手して造なせるものゝ荒たるなめり。とざまかうざまによそほへるも大どかならず、いみじう心おとりして、人はとまれ、我はめもとまらず。門の前に川清く流れ、岩そばだち、木立ものふりたる隈〻、されど見所あり。庭なども、たゞかくおのづからにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。是にのぼれば遠近の望よし。

　座禪にも目はまよふ山の秋の色

歸るさの道すがらもいふべき事なし。すべて此頃の明くれに、鹿の聲は聞ざりけり。我耳のうときか、とうたが

ふに、いまだ時早くして啼ずとぞ。されど若かりし昔、所々の旅ねに聞馴つれば、こたみ聞もらしぬるもほいなき事ともおもはず。

三北はもとより年ごろたづさひて、共に心をもしりかはしぬ。母なるものも、過し年めのいたはりありて、醫をもとめにとて府下にいでしよすがに相しれり。家とうじさへに、此ほどの日かずにうちなれて、よろづまめやかに、あかなきさまにもてなさるれば、老の心なぐさみて、あやにくのながめにふりこめられぬれど、つれ〴〵わぶる事もなく、あからさまとおもひしも、かゞなへて七日のかりねをぞ重ねぬる。故郷に待人もたる身にしもあらねど、かゝらば斧の柄もくたしぬべし、あすは歸らんといふに、あるじ綸轄を投るの意ありて、今ひと日はとせちにとゞむ。

も一りんみよと木槿の莟かな

いな船のいなにもあらず、心よわくて又とゞまりつ。

追はれねばたつ事しらず秋の蠅

是にて一卷の名殘をつらぬ。すべてしづけき日くらしには、俳諧して遊びつる卷々もつもりぬ。あるじはもとより、也陪、わが從者の文樵なども、時々句ども有つれど、事繁くて洩しぬ。詩ひとつ作りてあるじによす。

張北山林遠府城　相逢多日雅談清
秋深老樹添霜色　夜靜流泉疑雨聲
驛馬稀傳都下信　啼猿常動客中情
幾看隣店商家在　豈比塵衢爭利名

こゝに來てわがのがれにしかくれ家は
猶世にちかきほどぞしらるゝ

あくる日は妙見寺にともなはる。あるじの僧、我たしめる事聞しりて、例の河漏子にてもてなされぬ。

鐘にちる葉や山寺の秋のくれ

あるじの求にかくいひてとゞめぬ。

廿七日にはつとめて内津を出てかへる。あるじは猶府下まで送らんとてともなひ出。行厨の事などいかめしくかまへて、世を捨人に似げなきほど也。又例のたはぶれて、

老武者の我もながるのさね盛が
さいとう辨當までせわになる

いでや身の一たびやまひつきてより、つや〳〵世をはかなみ、たゞかげろふの夕をまつ心地しつれば、たまはり

し祿をもかへし奉り、蓬がもとに隠れしは、はたとせの昔なりけり。其ためならぬ物から、とみに仕への途をのがれ、おのづから名利にかゝづらふ心の疎くなりもてゆくや、中〻命つれなきたつきとはなりけん。稀てふよはひもかぞへ過て、此秋かゝる山ぶみをさへ思ひたちし、我身よくしれる我心のあやしきまでになん。さるにてもふたゝび來べき境ならねば、しかすがに名殘おぼえて、跡の山〻かへりみがち也。

　　鷹に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右にながめはかはれども、かへさはみなもと見し野山也。ゆき〳〵て、かち川にいたる。こたみは水かさ増りたれば、駕ひてゝ此まゝ渡りがたしとており立ぬ。ずさどものおはむといふに、いな、そは中〻あやうからん、けふはいたうも寒からざれば、たゞ手をたすけよ、かちわたりせむ、老にたれども猶かばかりは難からじと、ほそはぎいと高くかゝげたり。わかえたるふるまひの我ながらをかし、老の浪そふ影もはづかし、淺くとも渡らじとこそ丈山翁はよまれしを。

　　帋衣きぬ秋なればこそ河渡り

夫より大曾根にしばしやすらひて、夕日うすつくほど、わが桑梓にはかへり着ぬ。

　　思ひいづるきのふはけふの夢なれや
　　　しばしうつゝの山のかりねも

歸りて後さう〳〵しきすさびに、いひ捨かきすてたる事どもあつめつゞりて更幽居に贈る。字のたがひ、かんなの書誤れる物も少からじ。かたはらいたき詩歌のまねびし、さるがひ哥のはしたなきほぐどものかたほなるなど、物くるひしてかいまじへたる老のまさなごと、珉玞とだにいふべからず。只これ搏黍の一帖なり。愛、屋上の烏に及ぶとか。我をいつくしむ心にあやまちて、燕石を十襲せし宋人の愚に、ゆめならふことなかれ。もとより人の知るものならねど、四知ありといへば、天わらひ、神笑はむ。見果なば、とみに引やりて、我ため耻をとゞむべからず。

安永二年巳九月　　　七十二翁狂夫也有

# 宇づら衣 拾遺 下

## 記ニ余白ニ俚哥

相知る人のがり、梅雨晴の空もとめて問ふと侍り。そのあるじ俳諧も少ししりて、ざれごよくいふものなり。そこなる机のもとに引ちらしたる反古あり。何ぞとゝへば、此盆あそびに、例の子供の踊るべきうたの唱哥作れと、人にそゝのかされてかきたるなめり、されど又心におもふとありて、世に出さずなりぬ。只やがて引やり捨る物也といふ。とりて見れば、賓きゝしらぬ旅のともあり。中にをかしくもつゞけたる哉と覺ゆるふしぐもあり。われ俳諧してかれに負べきと思はぬを、かゝる物つくれといはむに、いかで是ほどにいひ出べき。世はさまぐのざえある物かなと、をしき樣に思へるまゝ、只こなたにて引やりすてん、我に得させよといひて取かへりつ。此端に余白あるにまかせて、潜にかきとめおきぬ。題号をいはゞ、さと茶の湯などこそいはめと、其人いへりけり。

世の中にすぐれて花はよしの山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳それならで、ささは都の未申、數寄さは誰が名に立て、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、圍ひさいふはひくけれど、情はおなじ床かざり、かざらぬ誠あかし合、間夫や人目の中くゞり、なかだちいらぬ口切の、後はうき名の下地窓、影もる月のさしつけて、それさいはれど世の人の、口に猿戸も立られぬ、あうて立名が立名の内か、逢はでこがるゝ池田炭、炭な雪かさいふたがむりか、其白炭の雪さ見て、雪にはあらぬあられ灰、くだけて物なおもふ夜は、夢さへろくにみづこぼし、水さす人にふかくさ、のるは三ッ羽のかるはづみ、輕いはいやさ飛石の、すわらぬむねのうら表、ふくささばけぬ心から、きけばおもはくちがひだな、逢うてごうしてかう箱の、柄杓の竹は直なれど、そちは茶杓のゆがみ文字、くぜつにとけし茶せんがみ、にくいあたまの鉢たゝき、ひやうたんならぬ炭さりの、ふくべも花に夕顔の、それはなつめのたそがれに、五條あたりや四疊半、よしや氣長に待合せ、茶うすのめぐる月さ日も、あらば花咲花生に、はなれぬ火ばしよりそひて、うさもはなしのはつむかし、昔ばなしのぢいばゞさ、なるまで釜の中さめず、縁はくさりの末長く、千代万代もへ。

是を近世女てまへとなづけ、もてはやす。猶後にいたりて、翁に女手前にもとづきかゝれしなど、人の思はむもわづらはしければ、そのことわりをかいつけおく。

五月雨の徒然なるころは西川の西溟子が号の扇
を友として見よいと思ひつきあそびぬのとらしけ
ましかはりてうつらこしさし合をとらずまかる
影ある口よまれ給て知らなかるの
あてられの文字のゆかりなきさつく
　膳のあかりなれくる蛍かり
いささしのあらひ惑ひの夢さめて
つらさまりしつけて目乃中よ
二　ちんりけ居いね暮の月のうけ
　尾うし露のつらふいと萩
毛中りかなしけくれいは昊柳
つかとやもし入相れるる

乗ものをすてゝ上るゝ泣上戸

無理にとりやりする車銭

みしつけてまくりかけたる古むしろ

ぢつくしめる入梅の内

茶のみさくみめよきさか上の仕立物

出かはりにいつも出る下女かつと

あれくと掃除させらるゝ風呂場に

あゝ心地よい風のそよく

ふしきさうにさしこむ月の御座り

はらはらとあめよめ菜つみる

きらりと気さんじところは春めきて

きらつゐていふみくりの子

あつらへも同じさせたい繻子の帯
　よくみなれもめんてふく顔の汗
ぼんのくぼやつて足上る下手の鞠
　霞る錦うつりし雪切の空
ほしさうな風しきも加賀絹と高ぶれる
　あらくしくしもぬくゝ天鵞絨との
其くせに長いらすさのおとしざし
　毛のある一かゆるやゝ胸はさ
ふんしもとけてすがあいみくれ角力
　まちつと大きな尾つきの出て
しわあつし人へこめらと一豆畠
　そつくうつる小便のあと

[illegible]

つけもの丶夏のあした　鴫焼の秋のゆふべ。
献だてのしなぐ＼は　豆腐にも耻ざらめ。

### 風鈴　ヲコノ韵

はるは山寺ならでも。ちとつらし此かねよ。
なる日はおのづから　花も風のふくものを。

### 翁像贊

富貴誠に浮雲　滑稽初て正風
道のほとりの木槿を吟じて　ひそかに人の教有
窓のまへに芭蕉を栽て　永く己が名とす
此翁たれか書く　梅瘦て笑ひ松老て高し
笠を携て旅の情やまず　筆をとりて贊する辭なし

### 隺贊　ウクノ韵

梅に傍ふ仙家の風流　もつぱら隱逸の庭に愛す。
松に伴ふ鳥臺の規式　かならず祝言の席に餝る。

### 辻君　ウクノ韵

月にうかるゝ鳥も多きに　いかで夜鷹と浮名にはたつ。
袖はやなぎの人を招きて　枕の草にむしやとびかふ。
待て相圖のうたはうたへど　あふてわかれの文はおくらず。
曉かへるそでのしろさは　馬場の夜寒の霜やおくらむ。

### 茄子　エケノ韵

むらさきの名にめでゝ　まづちぎるせどのはたけ。
柿にへたはまなぶとも　瓜のつるにはならざれ。

又 ウクノ韵

俳諧に故人なしといひける。 いひける翁故人となりぬ。
それより故人幾故人 只此故人を慕ふをやまず

又 イキノ韵

詩家に李白うして謫仙とよび。 俳門に桃青ﾄしﾃ翁と稱り
かれも三石の奈良茶を味はゞ さらに百盃の酒にかふべし。

寄ﾆ題ｽ笠園ﾆ賛

風ﾉ笠蒼蘭吟ｰ 尋ﾙ花狂客ﾉ心 豈無ﾝ芳野ﾉ句ｰ 可ｼ識ﾙ不
言ﾉ深ｰ

人日 ウクノ韵

姉も雪間に若がへりつゝ。 去年の案山子も老の忘れむ
なづな七草七日つみては はなのなの字の猶を待るゝ。

蛤 アカノ韵

もとの身の雀ならば。 竹の枝にもなれじや
今は桑名に焼れて 松かさのおもしろさ。

寄團扇戀 ウクノ韵

えにしも夏の手にはふれつゝ。 いかにとばの書そらごなる
一夜あふぎの名にあやからば とけて心のうちはかたらむ。

手習の師に書てあたへし聯句

硯の海は明暮に湛へて 桃の日の汐干もなく。
筆の林は夜日に茂りて 霜の後に落葉も見ず。

大瓢銘

世人の耳に鳴らねば 風の吹日もすてられじ
鉢叩も手に余れば 雪の降る夜も静なり

鯉の賛

及ばぬ瀧に思ひをかけて。 戀をすればや鯉と呼らめ。
のぼれば落る悔ある世に 淵に住身を安きとはしれ。

布袋賛

飭る錦の世はうらやまず 布の袋の名ともなりぬる。
椎は肥たと我を笑はゞ 我は痩たと梅を笑はむ

廻文

さくみつゝつまで待てまつつどみ草

俳諧哥拚辨

煤はきの日とて立たる居風呂によごれぬ旦(旦)那先へ入けり

婆婆にては善知鳥安方と見えしも、冥途にては怪鳥となり、よのつねの米屋・味噌やも、節季には懸乞となりて罪人を責はたる、世の有様を詠めて、あか拾坊主の口ず

さびける。

たつた今乞食しかりし門口へ直にむくいて懸乞がくる

あてなしにつかひ〳〵て節季には錢は無いとて留守つかひけり

俳諧哥は古今集にいへる俳諧躰にもあらず。かの集にあるは哥人の俳諧哥にて、俳諧師の哥にはあらず。狂哥とは混ずべからず。狂哥は全躰の趣向を求めず。其物其ことにすがりて、他のものゝ名をかり、秀句をとりなし、ことばをもぢりて、全く言句にをかしみを求む。俳諧哥は趣向一ッをたてゝ、其ことをすら〳〵といひ流して、こと葉の緣・字義の理屈は曾てとらず。されば右に云二首、はじめのは全く俳諧哥にして、後のは狂哥といふにのがれず。二ッのさかひ、こゝをもつてしるべし。

## いろは歌

いろはの四十七字を以てうたをつくり、六林子よりよせらる。それにならひて三首つくり、返しながらに贈る。

(原註。以下同ジ)　和ス下六林子雅伯題シ二俳諧一所ヲレ寄歌上

はせをおきなまちえぬる　むべもよにいろねのこらす
（芭蕉翁待得ヌル　宜モ世ニ色音遺ラス）

わかやしつくりゆゑあれと　さそひうけてたみほめ給ふ
（和哥ヤ詩作故有レト　謌受テ民褒云フ）

### 雪中寄レ懷

いまゆきよりあけそむる　たれうゑぬはなすべてさく
（今雪ヨリ明初ル　誰栽ヌ花總テ咲）

えにほわねどゑやめづらし　ろのひをかこみせちにおもふ
（得句ハ于共獨珍ラシ　爐ノ火ヲ圍セチニ思フ）

### 題二早梅一

むろたのまでよべゑみつる　いちはやもさけあにとゐふ
（室頂マデ宿笑ツル　逸早モ咲ケ兄ト云フ）

これをほめえそおりせね　ゆきながらぬしわうぐひす
（是ヲ褒得ソ折セ子　雪乍主ハ鶯）

ふゆひとよろくりむしのうたをみきげにちゑやさ
（冬一夜六林子ノ歌ヲ見キ　雷智惠ヤオ）

いあれらばこそえわせめまなべるもておつかねぬ
（有レラバコソ得ハセメ　學ベルモ手オ束テヌ）

ほする
（暮水）

### 國の名二十をかくしてよみける　二首

いつかいかであふ道あらむつひに身のあはではいかゞいきがひもなし
（伊豆　伊賀　近江　陸奥　美濃　阿波　出羽　加賀　壹岐　甲斐）

秋も最中とひ來よあはれ月いく夜野と川近く山遠き里
（安藝　長門　肥後　安房　紀伊　能登　河内　大和　隱岐　佐渡）

### 國の名十づゝ入れて戀の心を

いづみ川いせき〳〵にかゝる浪のうし名のたゝむよあはずも
（伊豆　三河　伊勢　紀伊　加賀　美濃　信濃　丹後　伊與（豫）　阿波）

### 旅のこゝろを

濱出ばいつあはむ身の跡を遠み浪や眞白に沖津しま〳〵
（紀伊　出羽　伊豆　安房　美濃　近江　山城　隱岐　對馬　志摩）

### 祝のこゝろを

里の戸もとざゝぬ君のかゝる世にあふみはうきをきかで老ひせん

### 鳥の名十

うかりつる世はをしからずそむきしも都こひしきときは有けり

### 獸の名十

こりず二夜いも寢ずみしか君來ざるうしやくまなき月のかねこと

### 草の名十

道さへもなく作君が山迷き世のよしあしもうとくきくらん

### 庚寅六十九歳元日試筆

東風回暖入醫阿　　老對鶯花樂若何
六十余齢今得九　　人生誰道古來多

をしむともいそぐともなき年くれて待ずいとはぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も鋤鍬を休て、東慶の稚の宿とよまれし秋ならねども春はきにけり。

田島に人こそ見えね年の市

夜半まで空にまどひし足も皆かしこまりてや雜煮喰らん

### 八體付方

聞耳たつる門の人音
其人　ふぐ汁の鍋を片手に提ながら
其場　片側はくら屋も交る与力町
時分　夜なかゝと思へば星の明かゝり
時節　延び〳〵た祭の空も五月晴
天相　一しきり雨やら梅の嵐やら
觀相　勘當の跡にまよひの親ごゝろ
佛　木曾もまたのがれて見れば浮世なり

### 文草文跋

余と韜刀なきへもたぬ身の上かなさ、よしなき貧乏自慢がこうじて、明日ある人のもさへ竈(竈)によばれ候に、蕠は汁かすゝる邪魔になり、雨は衣の袖しぼらんと存思ふに、ひしとこまりはて申候まゝ、御無心申入候。よく〳〵さぎすまして一丁、たとへやぶれかゝりても一本、御かし可被下候。委は參候而可申述候。御内儀御息女御心得可被下候、と申候て存出候。先夕はゆる〳〵と語候而滿悅申候。以上

正月八日　　　　文草

堀彦左衛門樣

此文跡に日附を見れば

髭の邪魔いかにきのふの薺粥　　　蘿隱戯書

## 寫二海洲子文一

このごろ反古を引やる中に、海洲子が文一章あり。此人御川氏、文才ありて詩を能し、書を能す。俳諧又幽趣を得たり。惜むべし、五十の比世をさりぬ。遺文いづれにかちりうせけむ、今わづかに此一章を見て捨るに忍びず、又のこすべきかたもなし。しばらく我が文章のなかにとゞめて、追慕を慰む助とす。

壽光先生傳 壽光は鐵也　　　海洲

壽光先生もと山中を出て人間に交はり、つれに一人臺上に坐して默爾たり。人來て笑へば笑ひ、怒れば怒れり。只人に順へり。是を莫逆とやいはむ。しかれども美人に愛せられ、醜き人ににくまれ、やゝもすれば地になげうたるゝのをあることはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず。早に起、往て拜す。げに先生や婀娜たる美少年なりし。秋の霜一度下り、閨支ともにくだけ、しら髪雨鬢にたれ、笑へる歯あばらとなれり。かく零悴せることの須臾なるはいかむぞや。先生默爾たり。それ人に一世にありて名こそ遂べきに、一臺の上に遥〳〵としてかゝる姿となりたり。たとへ鶴書のいたるとありとも、今はた用には立じ。素餐の責はいかむぞや。先生默爾たり。予涙を含でつら〳〵先生を見れば、先生も涙を含んでつら〳〵我を臨めり。長物語に朝飯の時過て、さらむとすれば、去らむとせり。立歸れば、立歸り、しばしわかれをゝしみ、ともに默爾としてわかれぬ。其後古かね店を見れば、先生默爾として居れり。また其後神路山に登りて見れば、先生猶また默爾として居れり。先生のとは測るべからず。

## 悼二伯母一辭 是は長物語のことばをかりて、俳文にあらずといふかるべきか。只是を筆に任せし一辭のすさびなり。

こはそもはかなき世なりけり。過しはわづかに廿日あまり、武藏に旅立する御いとま申さむとてとひまゐらせしに、例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くさゝせ置給ひしにつけて、過し冬さくらのさし木といふを人にならひて、庭にさゝせ侍りしに、まとにあやまたずなんとけいし侍りつれば、うれしきときゝつる物哉、としの冬かならずさゝせてむ、共すべきやうをしへてと、のたまはせしほどに、かゝる御わかれあるべしとはおぼしかくべきや。

なほ何くれとかたりつゞけさせ給ふついでに、此ごろおぼしよれるとあり。下にあやしの耕すをのこかきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま書て、それにほ句してえさせよとありしに、いとこちたくこそ、すゞろなる筆のいかゞおよびがたくや侍らん。今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき發句もとみにはおもひよりがたくなむ、さるにても吾妻に下り侍りて、いかでねんじて、まほならずともかきとゝのへて奉りてむ、とうけがひまゐらせし、其いとまもなくて、今はたくやしきかずとはなりぬ。我母上をはじめて、めの御はらから九ところまでおはしつ。みなにげなからぬよすが定まらせ給ひながら、うちつゞきて世を早うさり給ひ、今は二方ばかりぞ殘りとゞまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとゞ御かたみとも見奉れば、なほざりに過こしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけにいとまなき物から、いかでうとからずつかへ奉るをりもがなと、行末遠く思ひてしを、かゝるはかなきたよりきゝける心の、いくたびも只夢かとぞたどられ侍る。彼のゝたまはせし空の雲雀も。雲がくれ給ふべきはかなきさとしにやとさへ、のこるかたなくおもひつゞくるまゝに、

なき魂やたづねて雲になく雲雀

## 鳥獸魚虫の掟

世上困窮につき、今般鳥獸幷虫のともがらへ一統の簡略申付候。其外行作悪敷品相改申渡候。左の條々急度相守申べき事。

一蟬、すゞしの羽織を着候事、過分の至候。向後は横麻一羽ぬきに仕替申べき事。

一松虫・鈴虫のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢のさたに候。向後は野山の通、露ばかりにて精用なき申べき事。

一蟻、塔を組候事、自身の功を以建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼候義は一切いたすまじく候。且又熊野へまゐり候に、大勢連にて無益の事候。已後は二三人づゝひま次第に參り申べき事。

一螢、夜中火を燈し飛行候事、町々家込の所は火のもと氣遣敷候得ば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。

一蜘蛛、御領地の内おいてみだりに網をはり、諸虫を捕

候事不屆の至候。以後は其場所相應の運上さし上申すべき事。

但、蠅とり蜘は運上に不レ及事。

一蜜蜂の小便直に賣候よし、諸方の痛になり、よろしからず候。向後は世間一統に、只米六升ほどの積を以相はらひ申べき事。

一蟷螂、己が短慮の我慢にまかせ、斧を以諸虫を殺害いたし、不屆千万に候。向後はむね打をも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら、近年ことに花美に相なり候。向後金銀の飾一せついたすまじく候。

但、赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一蛤、春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建候事、甚奢のさたに相きこえ候。向後は右躰の普請一切無用候。もし居宅の柱損候とも、根つぎいたし用ひ申べき事。

一蝙蝠、晝は橋下にかくれ居、夜ゝ人里村里へ徘徊いたし候と、其意を得ず候。鳥獸のあらためこれあるせつは、何方へも申ぬけ役義等相つとめず候よし、不屆の至候。向後は立合の支配をうけ、兩役乾度つとめ申べき事。



一音喚鳥、猨に五色の錦繍を着いたし候事、甚奢に候。向後は何色にても一色に相改、勿論縫箔等一切いたすまじき事。

一白鳥・白雀等、此間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なると候ところ、近年猨に相なり、よろしからず候。以後皆て異相の躰いたすまじき事。

一鼠、嫁入の躰、と〴〵しく相聞え候。廿日鼠に五升樽もたせ候と過分の至り、以後は提錫にて相濟し申べく候。振舞の上、天井にて躍など催、さはがしく候。人ゝ坊に相ならず候様、明き二階・椽の下等にてゝ盆の中躍候とくるしからず候。

一猩ゝ、つねに大酒を好み、亂舞の樂奢のとに候。(潯)陽の江邊にて持出しふるまひ、向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候とも、一種一獻にかぎるべく候。尤酒は撲(最)寄のうけ酒屋にて小買いたし申べき事。

一狸、ふぐりを四疊半にのばし、茶を立、人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむるとよろしからず候。右の業相止申べく候。自分の樂としてはら鼓打候事はくるしからず候。

一馬の太皷の義、往還問屋前を憚らず不禮の至候。畢竟これも榮耀のヿに候得ば、以後は相止申べく候。
　但、既にては苦しからず候得ども、火の見時の太皷にさし合申さゞる樣相つゝしみ申べき事。
一靑鬼・赤鬼のともがら、虎の皮の褌いたすまじく候。當時病犬の皮澤山に候得ば、早速仕替申べく候。
　但、右は家持・頭分の鬼の事候。借屋住・召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切レを腰に卷用ひ申べき事。
右の條々かたく相守申べく候。忽に心得違これあるやからこれあるにおいては、急度咎申付べく候。品により蟻の町代・組頭まで越度たるべく候。
寶曆九卯七月

## 玉壺軒記 應三進甫 楚巾老人之需

何ぞ必ずしも深山の中蒿廬の下のみならむやと、むかし朝廷に俗を避たるも、耳目はおのづから世につかはれもしつらん。こゝの市中に一ッの隱家ありて、豆腐賣はよくしれども、とりあげ婆ゝはさらにしらず。つき〴〵しき住居のほか、九尺にたらぬ別室、ヿにおもしろうまうけ、前に泉石の目を娛ましむるも、今の主翁のたくみなせるにはあらず。もと住し人の殘し置る月と花とは、今も閑にして今は猶ふるびたり。人の多きを深山木にして、とよみしも此あたりにや。伐木丁々たるは、桶屋のたゝく也。鳴子のから〳〵となるは、菓子屋の脊戸か。田家山莊の風流、こゝに備るのみならず、四方は城下の豐なれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我身はよそに聞流せば、樵哥・牧笛にもさびしさは劣まじや。そもや主翁の身のうへ、安きヿ、仕官はわかきにつくしたれば、北山移文の惡口にもあふべからず。色は老をしりて遠ざけ、酒は淵明が房もなけれど、是ばかりは俳諧師のをり〳〵來りて戸棚をさがすは、つもりの外なるべし。されば此軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代・宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばずとや。實も酒にあらず、茶にあらず、まして塩辛・砂糖づけにもあらず。さては仙術に天地をちゞめし市中の壺かと、潜に内證を聞合すれば、是はむづかしき古みにはあらで、只此亭の入口はなはだ窄けれども、内に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふ也とぞ。さてこそ所々の入札も、彼上人の狗犬

はたりとなりて、まことに分別は一生の損也と、世にほださるゝ理屈人は、此壺の底がぬけて此曉にも夢はさむべきにぞ。

## 松操菴記

かくいへる閑居は、塵境にありながら、庭に千章の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつぱら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まづたゞ此庭の景色をそふるぞ尊とかりける。さればしめぢが原の御うたも、こゝに五文字を吟ずれば、たゞ茶のめとこそ聞ゆなれ。あるじこゝに餘白をまうけて、一句を請うてやまず。君見ずやかの御製に、枯たる木にもはなさかせむとは、もとより木ゝは歲寒の操(みさを)に其用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とても、そのひかりにもれざらめやと、半掃庵の狂夫筆にまかせてもとめをふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓あり

## 瓢長者傳

巴陵舍に一ッの瓢あり。其かたちをかしく曲れり。曲る物は全きとか、久しく爰につかへて許由がにくみをかうぶらず、鉢扣にも奪はれず。あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は是を褒稱して、長者瓠の三字を銘せしより、頓て此名を打かへして、みづから瓠長者とは名乘ける也。長者の自稱必しも其故のみにもあらず。此瓠に不思議ありて、酒を出す事綿ゝとして不レ止。是仙術にも幻術にもあらず。只一婢に阮宣が杖を持せて、一度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみえしも、忽然と夕に滿り。かゝれば宇治の物語にいへる姥が米は盡る期有とも、此酒は盡る日あるべからず。むべ也長者の号ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾に記て贈るとしかり。



## 名レ亭說

前に洋ゝたる長良川ながれて、向には巍ゝたる稻葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。亭に名付るに巍洋の二字を贈る。山間の月江上の風、とれども禁ぜず用ひて盡ざらんには、何ぞ必しも知音をとはむ。

## 悼二六ゝ庵一辭

桃は盛りに梅は散過る此曉を世の見果にして、六ゝ庵のぬし身まかりぬ。當時蕉門に俊良の才、世こぞりてをし

むはさら也。我にはことに廿年の推敲をとひししたしみのみならず、かの父貞爵は、季吟老人に道を學びて、其世のすき人は名もよくしれりとぞ。我祖父の野双といひし、又同じ門下にかずまへられ、たがひに滑しれるほどはしらず、多く撰集には名をならべたれば、いでそよ筏の一よならぬちぎりと、つねに其ことをいひかはしつれば、猶一しほの袖はぬらしける也。西行法師の願足れる其きさらぎの花のかげに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼きしの船路も便あしからじと、いさみぬ世のたのみに、今は此わかれをなぐさむばかり也。

蝶鳥もいざ涅槃會の啼ついで

## 與二自若庵一文

ものゝ足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顏子が一瓢の花頃ねに白くさきて、其たのしみをあらたゐず。善哉。馬山子、予に菴号をもとむるに、自若の二字をおくりて清貧の生涯を稱す。もし千兩のこがねをひろはゞ、それも又自若たらむ。

夕がほにあすの米あり袋あり

## 名レ亭辭

いざゝらば此居をさして三富亭とよばむとは、なにをかさすや。只物のよきほどなれば也。人或は三ッの心を深めて衣食住と判ぜんに、それもよし。雪月花とかぞへむにも、はたうらやまるべき住るなるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

## 長榮寺碑

何にかも人は忍ばむなき跡の
　石にはかなき名はとゞむとも

## 辭世

病來辭二世路一 久隱二渾沌農一 八十余年夢 驚回曉寺鐘

きのふけふと思ひつゝ經し身の程ぞ
　中〳〵長き世はかぞへぬる
短夜やわれにはながきゆめ覺ぬ

書林

京新町二條上ル
西村平八
大阪心齋橋筋順慶町
柏原屋淸右衞門
尾州名古屋本町一丁目
風月堂孫助
江戸本町三丁目
西村源六
同本町筋北ェ八丁目通油町
蔦屋重三郎板

# 通說

享保の頃から以後、俳壇が俗化しきつた時代の俳諧師の生活といふものは、本卷に收めてある止笑の「俳諧三十棒」を見ても、どんな風だつたかの一般は解らう。もとは士分だつたといふ或男、町人がうらやましいとて店を出して見たが、生れつき商ひが不得手な爲に喰ひつめてしまふ、そこで大家が其男に云ふに「おまへは子曰(シノタマハク)も讀めるさうなが錢金をまうける事は大文盲(ダイノモンモウ)じや、今時はなまやをろかで口が喰れるものではござりませぬ、それに扶持切米をとる武士は氣がつまるといひ、百姓はごみほこりになるがいや、商ひは下手なり、職人は隙がないとて、何でもする業がない、……先おまへは濡れ手で粟餅、疊の上に寢て居て喰ふことでなければ遂げさつしやるまい、わたしが工夫、屹度(キツト)よい事が出た、俳諧師にならつしやれ、是が年中人の物を喰て人の噂をいふが商賣、隨分喰(クヘ)るものじやさうで、夥敷はいかい師〳〵といふものが出來ました」と、で、其男が成程と合點し、眞赤庵猿麿(マツカイアンさるまる)と名を改めて、俳諧師になつたといふ。之は洒落本風に書いた笑ひ話だが、慥に一面の消息をうがち得てゐる。其猿麿の枕上に、或夜、赤髮たる翁が現れ、そちは元來猿の生れだが毛が三本多い故に人間となつて苦勞をする、其三本の毛を拔たらば生涯安穩だらう、其毛とは第一番に味噌毛(ミソケ)、第二番に袴毛(ナゴリケ)、第三番に欲毛(ヨクケ)だといふ。之も、當時の俳諧師の心理をいひ當てゝゐる事で、手前味噌を云ひたてゝ獨り合點におさまり、名聞榮耀のくらしがしたく、其上に金が欲しいのである。所で、大名などに出入りする大宗匠ならば兎も角、此猿麿先生級の生活ぶりは「いつもの連衆(レンジユ)、息子(ムスコ)、老人、醫者、侍、碁合より追〳〵來て、六疊敷に居あまれば、足下今すこしおつめなされ、火鉢は眞中へ出したがよいと取持顏なるあり……猿先

生罷出で、いつもながら何も致しませぬ、ゆるりと御咄なされ、さア膳を出せ、わたしも御相伴仕らう」といふ風なのだから、俳席といつたところで、つまり息子老人醫者侍などの遊び場所なので、碁將棋の會所と少しもかはらない、そこで一卷卷かうかと付合がはじまつたり、俳壇の噂さ話に興じたりする、宗匠は一座の取りもち役、口すぎの爲とあればおべんちやらも云はねばならぬ譯、金持や旗本などのお座敷に招かれた折には幇間の代りもしようといふ次第、當座の機智や輕口の工夫は宗鑑守武以來、俳諧の骨法と心得て居る彼等の事だから御手のものであり、しかも席上の誰もの氣にさはる事のないやうな差し合ひの注意や、應け對への技巧は會釋、心附、逃句などいふ附合の調子で合はして行けば好いのだから、幇間としても立派につとまるのである。然しさうした生活と、さうした氣持から作られる江戸座の俳諧や發句といふものが、何の藝術味もないものになり下つてゐる事は、說明するにも及ばぬ程明白であらう。

次に、今茲に江戸座といふ當時の江戸の俳壇が一概に左樣な低級なものとして、地方の俳壇はどんな風だつたかといふに、之も「內證は口すぎ金儲と出かけても、いひ立は名所古跡山水を樂むといふて……」と皮肉られてゐる通り、地方まはりの宗匠といふものも、生活の爲の俳諧なのだから、つまる所は、鳥なき里の上座にすゑられて御馳走になつて、草鞋錢をもらつて、蝙蝠のやうに飛びまはつてあるく、之も世才に乏しい癖にのんきに世渡りをしようといふ人間が選んだ職業であらうが、「終に無能無藝にして只此一筋につながる」と云ふて行脚してあるいた芭蕉の生活と外觀では非常に好く似てゐる爲に、芭蕉を賣つてあるくには都合が好く、殊に地方人には江戸風の洒落や綺語は解らないのだから、芭蕉の句や詞に勿體ぶつた解釋をつけ、句作の法則にやかましい個條などを設け、それで實際の作品は誰にも合點しやすい卑俗な趣向に一寸尤もらしく理窟味を加へておけば有難がられたものである。その張本は美濃の支考一派と伊勢の乙由一派とであつて、何れも地方的にはすばらしい勢力であり、從て今日云ふ政黨の地盤爭ひのやう

に、勢力爭ひなども始まらうといふ譯。斯うした空氣の地方俳壇から作られた俳諧や發句といふものが、是亦藝術味を帶びえない事も、說明するまでもなく明白であらう。

都會の俳壇といひ地方の俳壇といひ、俳壇といふ意識は何に由るかと云へば、世間といふものを對象として、お互に上に立ち合はうとする事である。で、或人數が集つてグルウプを作る要がある、頭梁を仰ぐ要がある、頭梁として多數を擁しようとすれば遊戲者流を歡迎せねばならない、彼等の指導に日を暮らしてゐれば其を以て生活の保障を得ねばならない、而して其爲には先づ世間の俳壇から認められてゐなければならないといふ風に循環する理法となる。されば、俳壇意識のある處、生活の爲にといふ色彩が離れられず、其宗匠の生活は遊戲の爲のワイワイ連が支持してゐる譯である。彼等を今日の言葉ではツキナミといふのである。所で他の一方には、斯うした俗化しきつた俳人達を低く見下して、自ら高きを持する俳人達が蝟起して來るといふ事も自然の勢といふべきであり、當時にあつては、蕪村の一黨や也有などが夫だつたのである。几董の「點印論」に、當時の遊戲者流を指して「作者の聟、附わたり連綿を論ぜず、一句に判を得る事に泥みて、屈曲奇怪の句を工み、俚語放言を用ひ、或は孕句をもて席に臨み、あるは他の句を盜などして、ひたすらに勝ん事を欲し、終に風流雅趣をうしなひ、實にいやしむべき戲とはなりけらし」と几董は痛罵してゐる、之は蕪村一黨の意見を代表したもので、俗輩の徒に對する適評である。又、同書にある夜半亭壁書といふものに、「世ニ蕉門ト稱スル者アリ、特ニ蕉翁ノ風韻ヲ知ラズ、其ノ吐ク所ノ句備クハ論ズル所支麥ノ俗習ヲ脫セズ、之ヲ伊勢流或ハ美濃流ト稱スルトキハ可ナリ、豈蕉門トイフコトヲ得ンヤ、人號シテ田舍蕉門ト曰フ知言ナルカナ」、又「俳諧ノ大道ヲ知ルコト他無シ、嘯月賞花、心ヲ塵寰ノ外ニ遊バシメ常ニ蕉翁其嵐ノ遺亞ヲ友トシ專ラ俗氣ヲ脫スルヲ以テ最ト爲ス」ト提言してゐるのは正しい主張であり態度である。也有は「鶉衣」のうちに、武內某か男兒

二歳の春の初に「正月が來たうま〳〵をおれも喰はう」といつた其語がしぜんに發句になつてゐるのを賞して其赤兒を初めての門人とした辭を書いてゐるが、所謂俳壇の師弟關係ほど俗なものはないことを皮肉に見ての上なのであつて、也有は門人を取らなかつたのである、其辭の中にも「世に祕事傳授といふものは渡世の術也、予は渡世の爲にせねば祕事口訣は習はず、習はねば何をか祕せむ、五倫五常は外に師あり、狐狸の輩に迷はされて俳諧に混ずべからず」と云つてゐる。田舍蕉門の俳人等が芭蕉の口訣だ傳授だなど〻云つて初心者を釣る事と、俳句を道德と結びつけてもつたいをつけ風雅の心に悖る事を嘲つたのである。此の几董や也有――几董には蕪村といふ大きな背景がある、也有の意氣は門弟ではないが同國の曉臺に傳はつたとも見える――に通ずる所は、俳壇意識に煩はされぬ超越的の態度である、生活の爲に俳諧を汚さないといふ氣持である。蕪村一黨は師弟といふ關係を嫌はないけれども、趣味の相合致するものがあつての上にして初めて師であり弟である、稽古所に集る蚊弟子のやうなホンの遊びのワイ〳〵連は取らない。遊戲の氣持ではなくて、も一つ高い意味での趣味の爲であるといふ所が江戸座や支麥の徒とは根本的に違ふのである。

そこで、俳諧中興の運動、即ち人間的にも藝術的にも墮落しきつた俳風を、正しい道に戾さうといふ運動が、生活の爲に俳諧を說く職業俳人の手に依らずして、俳壇意識を離れた超越派の人々に依て成就されたといふ事は、前卷の通說にも一言した通り、當然しかあるべき事であつて、下つて明治時代に於ける子規一黨の復興運動も、此理法が再び實行されたのに外ならないのである。然しながら、俳諧中興の功を蕪村一黨にのみ歸して、所謂、職業的の俳人は凡て其邪魔物であつたかといふに、さう簡單には片付けられない。中興運動に一勢力を寄與した蓼太は俳壇意識の強かつた人であり、それが力となつたのである。同じく白雄も職業俳人であり、曉臺も後には花の本宗匠となつてゐる。

他方に也有は所謂風月の長者ではあつたらうが、俳諧の作品としては（俳文を除いて）優れたものが殆どないのである。されば、職業的とか超越的とかいふ事の別より、も一つ深い考察が下されねばなるまい。元來、俳諧中興の運動を促進した動因は、芭蕉の正しき研究であり、其に依る啓蒙的の論述である。麥水が「虚栗」から出發し、曉臺が「冬の日」から出發し、蓼太が「未來記」「炭俵」を眼目とした如きである、而して貞享元祿の昔いまことを悟り、今の世のそらごとを知れば、しぜんと啓蒙的の論述をなさゞるを得なくなり、其が漸次に熱をもつてくれば一つの事業といふ意識を以て專心するやうになり、從て其から衣食の資を得ねばならぬ事になる、結局、專門的でなければ眞劍になり得ないのである。一方、超越的な態度の人達は、祇空の一派にしても、也有の如き人にしても、自分だけ樂しめば足りるといふ小獨樂主義となり、向上の工夫をするといふ熱がなく、遂にディレツタントとして終る、是では俳句史上に寄與する事が少いのである。かういふ意味から、本集「中興俳話文集」に收錄してある諸書は、職業派（好い意味で云へば專門的）の人のもの、超越派の人のもの、研究的のもの、啓蒙的のもの、獨樂的のもの、遊戲的のものと其とりどりを盡して、以て寶曆明和安永天明の頃に於ける俳壇を大觀するに便したのである。

前論が思はず長くなつた、これから一書一書の概評をしようと思ふが、今回は輯錄の順序に依らず、先づ、俳壇意識と啓蒙運動とがこんがらかつた江戸座と雪門との名高い論爭から見よう。事の起りは前卷に收めてある江戸座の湖十等が「延享二十歌仙」を雪門の蓼太が雪かきでさんざんにこきおろしたやうな「雪おろし」を出した事から初まる。「延享二十歌仙」が作品として甚だつまらないものだといふ事は、前卷の通說で私は一言した。座興、遊戲といふ氣持より一步も出てゐない江戸座の人達にとつて連句は好いおもちやであつて、其に文學的價値を求めるのは求める方が野暮だらうが、兎も角、俳諧藝術の立場から蓼太が其を非難したのは正しいと私は思ふ。「延享二十歌仙」は芭蕉の

「延寶二十歌仙」に倣ふといひ、其序に「延寶の二十歌仙は芭蕉の翁の花なり」とあるが、延寶天和の頃は正風以前であつて、芭蕉翁の花とは云ひ難い、貞享元祿の頃こそ花實備つた時ではないかといふ蓼太の說も尤もである。所が、此蓼太說を反駁した「蓼すり古義」の雁宕は曰ふ、季吟が「武藏ぶり」の序に「天和二年俳諧の花の時」と云つてゐるのはどうだ、又、延寶時代が花であつて元祿時代が實なのだ、花といふ字に注意しろといふ、之は屁理屈であらう。そこで、蓼太側から更に辯明した「遲八刻」では、序文といふものは凡て賞めて書くものだ、季吟の序を證據にとるのは當らない、芭蕉は貞享頃のねばりを嫌つたればこそ正風を開いたのだ、花が實になつたのではない、と突込んで行く。そこで雁宕は再び「俳諧一字般若」に於て、さうか序文は飾つて書くものか、其ならば「延寶の二十歌仙は芭蕉翁の花なり」といふ「延享二十歌仙」の序文をそちらからとつこに取つたのはどうだ、尻口首尾つゞまらぬじやないかとやり返す。此雁宕の言は成程、理屈が通つてゐる。彼は斯樣に理屈はうまいけれども、要するに、あげあしとりである。蓼太は「雪おろし」で「延享二十歌仙」中の卑猥な句を指摘してゐる、第一卷から

名もいろ〳〵に下のゆみはり　　湖十

あづまかた在番城の夜半の秋　　同

第四卷から

狼吼る遠山の月　　存義

松茸があればこそあれ松ふぐり　　同

「今此のあづまかたの類は婚亂尾籠の句にして、親子兄弟の同席にあづまかた知らぬ人ありて問はゞ、いかに答ふべきや、殊に前句には夢ほども付ず、只弦に夜半の秋と寄たる斗也」といふ蓼太の非難である。此語中、前句に付かぬと

いふのは附合上手の蓼太の言とも覺えぬ、下のゆみはりをエレクションの義にとつたので、さればこそ一層エロチックになる譯だらうと私は思ふが、兎も角、斯んな卑猥な事を好んで云ひ出す必要のない場所だといふ蓼太の言は正しい。此非難に對して雁宕は、蓼太よ、さういふ汝の附句に──（移り香ぬ夢ふと）旅のつまみ喰ひ、といふのがあるのはどうじやと竹篦返しをして、「翁の蹟を慕ひ、行脚を以て衆を導くを業とし、僧形なる者、かゝる尾籠の振舞や有べき、是等は當座の恥のみに非ず、一句一生をなみす……存義が松茸の大口は罪も報もなく、湖十が句は自他にも通るべし、芭蕉去てまた芭蕉有といふ人のつまみ喰はいかなる刑をか用ゆべき」とやつてゐる。蓼太側は再び、旅のつまみ喰とは俳諧であつて是こそ罪も報もない事だ、あづまかたには何のをかしみもない、是句になるものとならぬものとを知らぬ爲だとやりかへしてゐる、而して雁宕が「在番城」を「在番衆」と書誤つたのを、故意に書違へてごまかしたやうに揚げ脚をとつてゐるが、雁宕はそそつかしい男だと見えて、蓼太とは雪と羅だといふつもりで擧げた芭蕉の句を「ひとつ家に遊女と寐たり萩と月」と書き誤つてゐる、之では芭蕉が遊女と同衾したやうである、そこを蓼太側では一本突込んで好い所ではなかつたか、呵々。雁宕はまだ、蓼太のつまみ喰を赦免しようとはせずに、「つまみ喰は何を召上られしかと社中の人間はどいかゞ解て聞せむ、旅泊の風流つまみ喰は俳諧也などゝ僧形にて能も申されたり、此段は答に及ばず泥にて塊を洗ふなるべし」としつこい事である。泥にて塊を洗ふどころか、お互に泥をなすりあふ泥仕合ではないか。それればかりではない、雁宕は云ふ、蓼太が雪中庵を稱するのは私するものだ、雪中庵といふ名は嵐雪一代のものであると、斯うなると藝術論を離れて全くの人身攻撃ではないか。尤も、蓼太といふ人の「人間」の味には私も感心しない、此事は前卷の通説にも一言した通りだが、俳諧といふものゝ藝術味に就ては、江戸座の末輩よりも遙に好く解つてゐるし、付合に於ては一かどの作家でもある。俗惡愚劣さはまる江戸座の俳諧（「延享二十歌仙」の如き）に一種の義

憤を感じ、藝術と非藝術との差に惑うてゐる一般の蒙を啓く爲に「雪おろし」を書いたとしたらば、寔も難ずべき點はないと思ふ。但し、蓼太の氣持がしかく藝術的に純粹であつたかどうかゞ重大な問題であつて、そこに矢張り不純な俳壇意識が多大に滲入してゐたことはないか。雁宕が蓼太を攻めるのは寧ろ此點が主眼であらう。「蓼太思ひを焦て、雪おろしを述作するは何故なるや、是は唯東都の宗匠廿人に我勝れりと諸邦に觸れて名利を需め、黨を率くの外に他なし」と「蓼すり古義」の終に云ふてゐるのを見ても解る。

兎も角、藝術的に見れば、其頃の江戸に行はれた江戸座の俳諧は、獨り合點と其場あたりと謎の掛合ひのやうな遊戯一片のものであつて、少しも採るべき所はない、その俳人の氣分は一種の頽廢主義(デカダニズム)である。之をたゞさげすんでゐる祇空や四時觀の一派は單に超越的態度を取つて、自ら淸くするだけであつて、濁つたものを救ふ道にはならない、どうしても專門的俳人の熱心さと俳壇的の勢力を以てしなければ革新的の氣運とはならないであらう。此の意味で、同じく俳壇意識的のものでも、地方に行はれたクソ眞面目に芭蕉をかつぎまはる傾向は、田舍蕉門などゝ蔑されてゐたにせよ、江戸風の頽廢的な不眞面目な行き方に對する應病的なる適藥であらう。蓼太が支考の說を多分に取入れてゐるのも其意味である。凉袋が「南北新話」に於て、乙由の說を紹介してゐるのも、相似た傾向である。凉袋の云ふ所は、發句の變化といひ死活といひ、手づゝといひ、あつかひといひ、要するに技巧を以て曲(キヨク)をつける事であつて、曲をつければつける程、不自然にイヤミになるやうな、間違つたものではあるけれども、其は彼等の趣味が低いからであつて、兎も角、趣味として見よう、風雅を尊ばうといふ其心持だけは買つてやれる。「俳仙窟」に乙由の言葉として「我は句を好む、理もなく論もなし、魂は只風流に置て……」とある。其氣持だけは宜しい。闌更の「俳諧落葉考」に載つてゐる乙由の希因に宛てた書簡に「扨江戸の俳諧俄かに正風になりゆよし、去春より參宮の序に尋被申人々有

之け、併しながらなぞ〳〵はいまだ殘るけとて其人々もをかしがり申け」とある。「花さかぬ身をすぼめたる柳かな」などゝ低俗な句を自慢してゐる乙由から笑はれてゐる江戸俳壇の句は、米仲の「靱隨筆」を一寸明けてみても

御用とは何の花ぞも大晦日　　米仲

大晦日に御用の花とは山吹の黄金の花である。

ふし折の芦やそのまゝきり〴〵す　　米仲

「朽たる蘆はきり〴〵すになるといふ也」と自分で註をつけなければ他に解らぬとは厄介ななぞ〳〵である。「靱隨筆」は然し、何よりも雜學を主としたもので、梅干と梅法師とは別だとか、山門といふのは叡山、普通の寺にあるのは三門と書くとかいふ風な事を書集めてゐる。紀逸の「雜話抄」も同樣で、「下かもは鴨、上かもは加茂」と書くといふ風な事を教へたものである。斯んな事が當時は祕事傳授といつて初心者を迷はしてゐたものなので、米仲は「ことがましく祕傳の切紙など名けて若俳をおびやかすは市に售る類にて加擔しがたし、俳諧に居て俳諧を食むとやいふべき」と云ふてゐる。彼の「靱隨筆」も、さういふ弊風を掃ふためといふ氣持で書かれたものとすれば、之も俳壇啓蒙運動の一助となつたと云はれよう。既成俳壇に對する啓蒙運動の一つとしても、初心者への親切なる指導としても、白雄の「俳諧寂栞」は當時のものとして好く書けてゐる。「先づ風姿、風情」といふのは今日云ふ客觀主觀の說明に近く、「和歌の言葉、俳諧のことばとて二つはなし、日本のことば也」も、俳言とか連歌の詞とか迷うてゐた時代の一卓見である。「作にすゝむは惡し、一作は一作のちからたるべし」「万象をよんで自己とすべし、自己をはこんで万象とする事なかれ」とは、乙由風の技巧ばかりな、擬人体のイヤミの句を警めたものとして聞くべきである。又、「なぜと言葉のかゝるは皆理屈なり、理屈をはなれて万象をおもひ、無邪の良友とすべし」なども、子規が明治時代の復興運動

の時に提言した言葉であつて、其昔の中興運動の時も同じ言葉が吐かれた事實を見るべきである。

以上は何れも江戸を中心とした俳壇の消息をうかゞふべきものであるが、次に關西方面に於てはどうか――。明和の初め頃から京都を中心にした太祇、蕪村等の復古運動は漸く其機が熟してきたやうに見える。太祇にしても蕪村にしても、俳壇意識の強い人ではない、勿論、俳諧を以て生活しようとは考へず、遊戯者流の較弟子などはうるさいから御免だ、たゞ趣味の合ふ人々と唱和して樂しまうといふ超越的態度を持してゐたのである。其態度は江戸座の人々や田舍蕉門の人達とは違つて、高邁なるものであつた事は上にも述べた通りだが、單に超越的であつて趣味を汚すまいとするだけならば也有などとも同じ譯であるけれども、蕪村等に特筆すべき點は、その上に眞劍な研究的態度をもつてゐた事と、此道の向上といふ事を深く念とした事とである。「芭蕉に歸れ」といふ事は、當時の中興運動にあづかつた諸家が何れも叫んだ事であつたが、單に芭蕉の模倣ではつまらない、俳諧の魂は向上の一路にあるといふ事に眼を開き、更に此道には古人なしといふ心を悟つてこそ、初めて句作にも自在を得、眞の新しみといふ事も解し得る譯である。而して其域にはいるには古俳書の博覽や頭だけでの理解を以ては到底達し得られはしない、實際の句作に於て粉骨碎身底の精進をしなければならないのである。三菓社時代からの蕪村一黨の精進はすばらしいものであつた。門弟を持たず濟度方便に亘る向下的の事に心を煩はす要はなく、世間の俗惡なる俳壇は白眼に見下して、たゞ自己の大事を決定しようといふ意氣込なのだから、之こそ本當の向上宗の工夫鍛練である。俳壇中興の大事業は、決して對世間に向つて成されたのではなく、蕪村等が「心」の上に成し遂げられたのであつて、其を以て完了したものだと云つても、毫も間違はないと私は信ずる。さて、此研究的態度と向上的精神とが俳壇中興の骨子であるといふ事から、も一つ進んで云へば、蕪村や太祇や召波等が眞に藝術家としての天分をもち、又、詩人としての氣禀をもつてゐたと

いふ事こそ事實の精髓なのである。歸する所は矢張り「人間」の問題になつてゆく。蕪村は其俳諧的系統から云へば其角から巴人へと傳へ繼いでゐるのだから、江戸座の一味とも云へようし、雪門の蓼太と大喧嘩をした雁宕とは同門である。けれども、蕪村は人間として、江戸座の人達の不眞面目な惡ふざけの氣分とは根本から合はない。紀逸から系統を引いてゐる太祇は、性甚だ磊落であつたらしいが、幇間的ではなかつたに違ひない。蕪村一黨は通じて其角を崇敬してゐるけれども、其は其角が蕉門下にあつた頃の詩味ある作風を思慕するのであつて、江戸座時代の末期的其角には觸れたくなかつたに違ひない。兎も角、貞享元祿に於ける芭蕉の革新運動が芭蕉といふ人間の魂に於て成就されたのと同じく、安永天明に於ける中興運動は、蕪村といふ人間の魂に於て成就されたのだと私は見るのである。

麥水の「蕉門一夜口授」の扉に「俳諧の姿は歌連歌の次に立つて、心は向上の一路に遊ぶべし」といふ芭蕉の言葉を擧げてゐる、麥水も亦、向上の精神を主とした氣持はかわる（向上の一路云々は白雄も「寂栞」の中に引用してゐるが……）。又、「蕉門一夜口授」には芭蕉の古池の句が世間で勿體づけられてゐる言葉を排して、「是は只音を聞くの吟也」「强ていはゞ少々不出來ならんとも思へり」と、明治になつて子規が云ひ出したやうな事を、ちやんと云ひきつてゐる。「蕉翁に季書なし、季を定る人は花の下をつとむる家の役ぞや、隱士の好む所にあらず…… 蝸牛角ふりわけよ須磨明石、蝸牛は夏の季たれども、蕉門是を雜の句とす、これらの類ひ數多なり……只目に見るに寄せて、當季を大事とせざればなり、是皆心を主として季寄せ本を恐れざるぞ」などゝ、麥水は好い事も云つてゐる。

俳壇意識に薄く、啓蒙的な仕事に力をそゝがなかつた蕪村一黨に、几董の如き克明な一人があつて、「新雜談集」や「附合手びき蔓」を書いておいてくれたのは當時の初心者及び後世の研究者の幸であつた。「新雜談集」は萬事に其角好きな彼が其角の「雜談集」に倣うた所を嬉しがつたものであらうが、其に依て同門の人々の消息、逸話や、句作の心持

などもうかゞふ事が出來る。尤も其に對する几董自身の批判は少しも出てゐない、几董に其をよう云ひ得なかつた人なのであらう。例へば「同作はあまたたび有る事にや」というて

鶯の羽ヶ洗ふ見ゆ紙屋川　　几董

うぐひすの嘴濯ぎけり紙屋川　　曉臺

此二つを並べてゐるが、私から見れば之は同作ではなく、曉臺の句は纖細軟弱にすぎて比較にならぬ程惡いと思ふ。同じ几董の「附合手びき蔓」は附合の上手だつた几董の書くべきものであり、彼の親切も見えてゐる。

菜の花や月は東に日は西に　　蕪村

山もと遠く鷺かすみ行　　樗良

此ワキの付け方を説明して几董は「西に東にと頭を回らすさまあればワキに行の字を用ひたるが手柄はたらきじや、一句は東西と見やりたる體に、山もとゝ付て、かすみは菜の花のあしらひ也」、其説明は好く解るが、此ワキがさして働いて見えないのはどういふ譯だらうか。私が思ふに、其は發句の方に働きがありすぎる爲に、畫で云へば色彩がありすぎる爲に、ワキをつけるスキがないのに由るのであらう、「枯枝に烏のとまりけり秋の暮――鍬かたげゆく霧の山里」と較べて見ればわかる、此の素堂のワキは樗良の其に似てゐながら、遥かに利いてゐるといふ譯は、發句の方に餘韻を殘してあり、繪で云へば墨繪のやうに淡く出てゐる爲である。墨で書いた粗畫や、わざと紙白を殘した畫には賛がよくはまるけれども、色彩を豐かに書き盡してある畫や、紙幅一ぱいに書いてある畫には賛のつけばえがしないのと同じであらう。「牡丹散て打かさなりぬ二三片――卯月廿日のあり明の影」でも同樣である。前卷の通説にも一言した如く、蕪村一黨の句は發句に於て異常な發達をした爲に、連句の養分を發句がすつかり吸ひ取つてしまつた觀が

ある。

闌更の「落葉考」は「初懷紙」の註の如き考古的價値あるものを除いても、啓蒙書としての價を持つ。「あるひは漢語を用ひ、やまと言葉をかりて言を巧にし、あるひは無益の長句を作りて、是を祖翁の洒落と思ひ、又は五十歩の近走りして、風流もなきたゞ言を唱、似て非なるをわきまへず、是を蕉門のあきらかなる所とも踏みたがへたらん、是又恐れ戒むべきことなるをや」といふ、闌更も當時中興の諸豪と共に「芭蕉に歸れ」から眼を開いたのであるが、麥水のやうに延寶天和の奇を取らずして、天地人情の自然を取らうといふのである。

無腸（上田秋成）の「也哉鈔」は、之を俳書として見れば古來の俳書の最も科學的なるものであらう。無腸は國語學者であるだけに、語義の說明は周到である。「寂栞」にもや、かな、の解があり、「治定の哉」「浮哉」「しづむ哉」等々を擧げて「吟じて知るべし」などゝ漠然たる說明をしてゐる、其を無腸は「私なる俗目なり」と排斥して、かなは疑怪、咏嘆の辭だといふ、之は間違ない。然し、さうした科學的の說明を聞いたとても句作の實際には何の役にも立たず、却て「寂栞」の非科學的な、象徵的な、暗示的な說き方が初心の參考にはならう。尤も國語書として見れば、其だけでも價値のある譯だらうが、此作者は句作に經驗がありながら、俳句のしらべに就ては能く解つてゐないらしい。

　　ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら　　嵐　雪

「此やは濡椽を面白く眺めたるにもあらず、さらば濡椽よとやはよにかへりて呼びかけたりともことわりがたし、たゞ是は濡椽にと云ふべきを、ふとやといひしにて……よくも思はざるなるべし」と無腸は云ふが、そんな譯のものではない。になどではいけない、此やは大切のやである、それが國語學では說明しえないのであらう。之と同じ調子は「古池や」であるが、無腸は

しら露や無分別なるおき所　　宗因

明月や見つめても居ぬ夜一よさ　　湖春

古池や蛙とびこむ水の音　　はせを

を一列にして「物を指て云ふ辭のやはよにかへて見るがならひ也」と片付けてゐるが、此三句のやは一列にならない、そこも國語學者には解らない所であらう。其次に

撫子よ河原に足のやけるまで　　鬼貫

「此撫子よの句は、よと云ふを譯せんには汝が色よきにめでゝ足の燒るまで河原あそびするぞと斷るべけれど、同じくはなでしこやと打眺めたきもの也」とあるのは無腸の見當違ひであつて、成程、やとあらばさういふ意味にならうが、此句は撫子其物を擬人的に見たものなので、さればこそ、よと云つたのである。元來、俳句に於て切字を貴むのは何故であるか、其を散文とせずして詩とすべきしらべを與へる事である。それは一句にボウズの意識と均齊感とを出す爲であつて、今日、私達が云ふ所のリズムの言語學的研究からはいつて行かなければ、本當の說明は出來まい。例へば、「梅が香にのつと日の出る山路かな」のかなが詠嘆のかなの本義だと說明した所で、內容的の說明にはならない。此句は「梅が香に」にボウズがあるか「日の出る」にボウズがあるか、そこが大切で、其を何れとして均齊的ならしむべき支点を作つてゐるかゞ、かなの問題なのである。其を論じなければ、俳書としての「也哉抄」ではあるまい。

さて、殘つたのは大江丸の「俳懺悔」と「はいかい袋」、也有の「うづら衣」であるが、大江丸と也有は共に俳句史上に於けるディレッタントである。而して、俳壇の大部分が俗化したる時代に、斯ういふ偉大なるディレッタントの輩出には意義があつたとも云へよう。「俳懺悔」と「はいかい袋」は一種の雜談集として面白く讀むべきものであら

う。其中にある作者の句を拾へば

鳶の輪の下に鉦うつ彼岸かな　大江丸

咲初て桃なき里はなかりけり　同

葬に鉦皷のあふてあはれなり　同

日のいろや野分しづまる朝ぼらけ　同（俳懺悔）

一茶坊の東へかへるを

雁はまだ落付てゐるに御かへりか　同

青柳のやまとの國と申さばや　同

ひちりきの朝からもるゝ若葉かな　同（はいかい袋）

是等は佳い方である。「秋きぬと目にさや豆のふとりかな」と宗因調をやつて見たり、「秋たつと思ふ心が秋かいの」と鬼貫を眞似て失敗したり、「南禪寺まづ納豆のかしらうつ」「山をみるひまこそなけれ菊の主」などゝひどい句もある。そこがディレツタントたる所以で、手あたり次第な氣持だからである。也有の「うづら衣」は今日までも、又、俳人以外にも愛讀されて名高く、所謂、俳文の軌範かの如くにさへ見られてゐる。なる程、その輕妙さは何人も及ばざる所で、面白い事は面白いものだし、彼の俳句よりもたしかに出來たものではあるけれども、要するに、その味はいいいをかしみにとゞめをさす。俳諧といふものが、をかしみの味以上に出なかつた貞德や宗因の昔ならばいさしらず、芭蕉以後、俳諧の正風といふものが立てられ、簡潔にして餘情に富み、彫刻的にして陰影のある芭蕉の紀行の如き、之を俳文と見て一風格のあるものが既に充分に認められてゐる時代にあつて、此のをかしみ本位の「うづら衣」が俳文ら

しい俳文と一般に考へられてゐるのは合點の行かぬ事である。いや、俳文ばかりではない、俳書といふものもさうである、今日普通に俳書といはれてゐるものは、文人畫ほどの氣韻もなく、デッサンの印象味もなく、たゞにしやれた粗畫に過ぎないではないか。俳句といふものだけが、獨り漸く正しく生長して來た感があるのに、俳文や俳畫や、「俳」といふことの觀念に就ては、世間の人達はまだ芭蕉以前にうろついてゐる。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第十卷　終

昭和二年二月五日印刷
昭和二年二月十日發行

非賣品

日本俳書大系
（10）

著作者　神田豐穗
發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地
印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二二二二四